

危険指定存在徘徊中

試作強化型アサルト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界が終わりへと少しずつ進む中それでも人類が足掻いている世界、そんなある日、とある地区でパトロールしていたG&K所属の戦術人形が、奇妙な遺跡を見つけた。その遺跡は山に綺麗に隠れるように埋まっていたために今まで誰にも気づかれていなかったのである。だが、なぜその遺跡は見つかったのか、それは奇妙なことにそこからいつのまにかポツカリと大きい穴が開いていたのだ。それもそこからなにかが無理やり穴を開けて出てきたかのように……

???「起動したらなんか閉じ込められていて、これはでないといけないなと脱出したら、なんか世紀末な世界なところってどうゆうこと? とりあえず歩いて見ていくか」

これは何かがあてもなく自由に世界を歩いて見ていく物語である………なおそのナニカが被害ややらかしも起こし、あっちこちに迷惑をかける物語でもある

コラボ依頼や意見、アドバイス等がありましたら、活動報告にできましたのでそこでよろしくお願いします。

<https://syosetu.org/?mode=kappo|view&kid||214654&uid||193601>

目次

万能者とか厄災とか言われている奴の設定（現段階で判明している部分）	1
番外編 あり得たかも知れない『悪夢』	12
番外編 あり得たかもしれない『鎮庄』	15
始まりは突然に	20
現地調達・現地改修・現地仕様の3種の言葉つてロマンがある（作者談）	23
Q. この構図を見てどう思ったか答えよ A. どう見ても犯罪者です。本当に（ry	27
何が始まるんです？ 会議だよ!!？全員集合!!？	33
食べ物の恨みは恐ろしいというが、実際にやられると本当に怖いよね（作者談）	36
悪役と思っていた奴が実は裏ではいい奴ってことたまにあるよね。（なお色々と面倒臭いことになる模様）	42
「家族っていい時も悪い時もあるけど、良すぎて悪くなったりその逆も起きたりするってばあちゃんがいつてた」「オマエのばあちゃん一体何があつたんだ!?!」※番外編です	46
Q. 先生、不審者にあつた場合はどうすればいいですか？ A. 通報するなどのその場にあつた行動をしましょう（なお現代の常識が通用する場合じゃない模様）	50
お節介するのでもいいが少し自重が必要な場合も考えておこう（真顔）	55
とりあえず旅行の際の生活計画は本当に計画的にお願いします（真顔）	64

海外のB級映画っていかにもフィクションって感じがするのが多いけど実際に起きたら本当にシャレにならないのが多いよね ※コラボです

地下道探索って現代では色々な要因でできないけどそれを破つてもやりたいロマンが隠れてるよね

お金や物は使っていくたびに減っていくのって当たり前のことなんだろうけど、なんか落ち込むよね

黒いアイツを突然見てしまった時って一種の恐怖で固まってしまうよね・・・(経験談)

ジョーンズな宇宙人のCM見ると世の中いろんな人がいろんな働き方をしてるんだと思う今日この頃……

大都会に行く時ってなんかよくわからない感じの緊張と興奮があるよね(作者談)

アニメやゲームでの面倒事は本当にここぞという絶妙なタイミングでやってくる

夜って何か異常なレベルでテンションおかしくなるよね……朝になってから冷静に考えて恥ずかしさでテンションが下がること

までお約束だけど
家に帰るまで遠足ですという言葉があるが、割とマジで真理の一つだ

と思う
人間って結構急所が多いけど……子供がそこを的確に狙ってくるの

は本当に勘弁してほしいよね……(作者談)
やられてほしくないことは本当に突然で絶妙な時に起きるもの、尚大

抵は身から出た錆の場合などが多い
※なおこの戦闘でボカスカ被害に遭う異なるのは周りにいる人と土

地の所有者です

125

爪痕は深いと後に響くというが、実際にその件は本当に多い
時に自分を変えることは大切である。だが限度は考えよう

134

出会いと再会は本当に予想だにしない時に突然くるもの（作者談

138

※人と会話する際は当たり前ですが本当にいろいろ注意しましょう

143

大きいことをやるなら小さいことからコツコツと

147

パンドラの箱って作品によってだけど開けちゃダメとか開けないと
いけないとか書かれていてどっちなんだよと思う時がある

150

秘密の話って本当にどこから漏れるか分からない……

152

とりあえず始めはきちんと説明をしないと何をすればいいのか本当
に分からないよね……

156

何かに集中すると何かを忘れてしまっってことあるよね……

159

乱入ってロマンがあるけど時と場合を考えないとえらいことになる

162

想定外は大体突拍子もなく起きるもの

166

カオスはつづくよ、どこまでも（遠い目

170

野生動物には餌を与えないでくださいはある意味万能な言葉だと思
う

177

物事は慣れとはいうが慣れたくないものは結構この世に存在する

182

行きはよいよい帰りは怖いという言葉はあるが……今回の場合は
間違いなく行きも帰りも怖い場合である（遠い目

188

夢って色々とおかしい形で見ることがあるよね……※ハロウィン記
念の番外編です

ロマンって色々な形や種類などがあるな……って思う今日この
頃

宇宙って人類的には最終的に嫌でも絶対に行かなければならないと
ころだと作者は思っています……

主人公の話より裏方の話の方がめっちゃくちや人気な場合って結構あ
るよね

神秘って色々あるけど見たり経験するとしてもホラーでスプラッ
ターな神話は割とマジでやめてもらいたい(真顔)

邪神やら付喪神とかの話と神の数って八百万の神って例えられるほ
どやっぱいるんだなと思う今日この頃

人生うまくいかない時って結構あるけど、うまくいかなすぎるとある
意味達観する時ってあるよね……

赤の他人の敷地ではあまりはしやがないようにしましょう、大体えら
いことになります

人の怒りって様々だが怒りを溜め込むタイプの人の本気の怒りはガ
チで怖いよね……

物事って畳み掛けるように連続して起きる時あるよね……
良くも悪くも(遠い目)

皆さんは人の見えないところで迷惑行為や犯罪行為をすることをや
めましょう……バレたらえらいことになります

責任って良くも悪くも結構予想外の展開を呼んでくる事があるよ
ね……(遠い目)

この小説が投稿された時がクリスマスどころか年越しがすぐそこに

迫ってきてるのはご察してください ————— 246

一年つて振り返ると本当に色々ありすぎて困るときあるよね………

なんか突拍子もなく日の出を拝みたくなるのは本当になんでだろう
ね? ————— 250

この小説を投稿したのが正月とかをかなり過ぎているのはご察しく
ださい (遠い目) ————— 258

事案に困る例つて色々あるけど実際に起こった場合は本当にどうす
ればいいんだろうね? (遠い目) ————— 265

話が凄まじい勢いで進む時つてかなりビビるよね………
269

話つて時々ぶっ飛んだ形になる時つてあるよね………そして
そういう話は着地点がとんでもなかったりする (遠い目) ————— 273

人生思わぬ再会とかあるけど、再会したくないヤツつているよ
ね……… ————— 277

虫系のクリーチャーの大群に襲われる系の映画を作った人つて絶対
過去に虫の大群に襲われる経験をしてると思う (真顔) ————— 282

善意は時に他人を傷つけたり、被害を与えたりする凶器になることが
ある………割とマジで (遠い目) ————— 286

昔のファンタジーつて色々とホント容赦よなつて思う時がよくある
————— 290

激戦とかつてかなり時間経っているように見えて実はそんなに経つ
てないつてことよくあるよね……… ————— 295

他人のとか自分のプライバシーの管理つて結構大変だよね………

高級料亭などのお高い店に入る時って何故かメチャクチャ緊張するよね	308
世の中って一つや二つぐらい世界を揺るがすモノホンのオカルトって存在すると思うの by 作者	313
なんで運が悪い時におこる場合って的確で絶妙な時が多いんだろうね? (遠い目)	319
遅れるということって悲しいことだよネ 乗る予定のバスが目の前で発進していく時とか (涙目)	322
えらい人に呼び出される時ってとても緊張するよね	325
やらかしとはここぞって言う時に絶妙なレベルで起きるものである つまりやらかしたんですね分かります (遠い目)	328
旅行とかでホテルに数日いるとそこに愛着が湧いて離れる時って何か寂しい感じがするよね	332
目の前に将来的な厄介事が現れた時に問題の先送りと見て見ぬ振り は下策中の下策の場合が多いよね	336
事後処理は大抵面倒ごとオンパレードの場合が多い (遠い目)	340
世の中デカイことは同時に多発して起きることってあるよね 良くも悪くも (遠い目)	343
とりあえず始まりは大事なのは当たり前だよネ 良くも悪くも (コラボ回)	347
同時進行は大体エライことを引き起こして大変なことが起きたりうまくいかなかったりする可能性があるなので皆さんは極力しないように (経験談) (コラボ回)	350
世の中はびつくり人間って結構多いよね ホント良くも悪く	

も（コラボ回）—— 353

大事が起こっている最中でも終わった後でもやることはやらねばならない場合がある（コラボ回）—— 360

不幸って突然起きるものだけど連続して起こるってことあるよね……（経験談）（コラボ回）—— 365

知っているか？事後処理からは逃げられないってことを（遠い目）（コラボ回）—— 374

人の話し合いはとても大事……ただし時と場合による……特にこのご時世は（遠い目）—— 378

デカイことの起こってる時に人知れず更にデカイのが起こってることってあるよね…… —— 382

物語がハッピーエンドやバッドエンドで終わってもその物語の主人公が生きてる限り語られずともその後の物語は存在する…… —— 385

英雄の物語の終わりの部分が大体、悲惨だったり残酷な場合が多いのは夢をあまり見過ぎるなって警告なのかと思っている —— 391

狩人って人類的に結構重要な役割だと作者は思ってます……ただし猟奇的な狂人はアウトですが（真顔）（コラボ回）—— 397

ことわざってめっちゃくちゃ多い上に汎用性が高いヤツも多いよね……犬も歩けば棒に当たるとか柵からぼた餅とか（コラボ回）—— 400

巨大な存在同士の戦いってロマンがあるよね……周りに与える被害に関してはノーコメントで（コラボ回）—— 404

物事をやっている時、時々絶妙にやられたくない時に限って的確に横槍が入る時ってあるよね……（コラボ回）—— 408

非道なやつは痛い目を合わせて分からせるって結構有効なことが多いよね……本当は平和的手段で解決する方がいいけど(コラボ回2

412

不意打ちって結構絶妙タイミングじゃないと失敗する可能性高いよ

ね(コラボ回

416

災害というのは突然起こるもの……(コラボ回2

420

大事が終わっても次がある……それは良くも悪くも(コラボ

回

424

そして災害は終わるもの……多くの傷跡を残して(コラボ回2

427

増えていく系厄介事は根の根まで叩いて終わらせないと後でさらに

厄介なことになる場合が多い

430

後方系の敵に限ってなんか近接系がメチャクチャ強い場合が結構

あったりするよね

435

「こんな事もあるのか」とはある意味ロマンがあるけど現実的には実用性がある場合が多い……ただしそれを全て実現する形でやり過ぎると大体とんでもないものが出来上がる

439

大惨事は本当に突然やってくるモノ……(コラボ1・2回)

444

刃物ってよく分からないけど妙に惹かれるような美しさがあるよね

(コラボ2回

447

世の中ヤバいことは大体誰も知らずのうちに起こっていつの間にか終わるもの

451

物事に備えて準備はジツサイダイジ……しかし限度つてものがあから程々に(コラボ1・2回)

456

読み方似てるのを間違えると大惨事ってことってよくあるよ
ね・・・・・・・・・・武道会と舞踏会とか（コラボ2回）—— 459

環境が違うと同じ時間が流れてるはずなのに別次元のような時間の
流れ方をしてる時ってあるよね…………—— 463

子供ってホント良くも悪くも純粹だよねえ…………（遠い目）

（コラボ2回）—— 468

人それぞれに様々な日常はある……………良くも悪くも（白目）

471

人生、逃げられない上でやらなきゃいけないことは一度や二度もある

（コラボ回）—— 476

見えないって結構ヤバイこと尽くめだよね……………いろんな

意味で（コラボ回）—— 479

道の分岐の先が行き止まりってこと多いよね（コラボ回）—— 484

トラブルって想定された範囲内でくるとは限らないので大体想定外
になることを想定した方が良かったりする—— 489

緊急事態というのは本当に一番来て欲しくない時に的確かつ最大限
に来るもの—— 493

でっかい話題が日常に侵食してきてるって感じるようになって「ああ
他人事ではないんだなあ」ってその時初めて思うようになるよ

ね……………—— 497

起きるとわかっている厄介ごとを抑えるには準備と対策がマジで大

切—— 502

種って種類によって色々な撒かれ方するよね……………風に飛
ばされたり、う〇〇と一緒にだったり—— 505

混沌と秩序って反対の意味だと思うけど、実際のところ混沌から秩序

が生まれたり秩序から混沌が生まれたりするから結構似てるもの
て思うの（コラボ回1） 508

大きい問題は要点を的確にやると終わるのが早くなる（コラボ回2

511

訓練された犬って様々な作品でかませ犬扱いさせられているけど実
際は人間キラーっていうぐらいに普通に人間より強い……尚、
狼はそれでいて連携をしてくるからそれ以上にヤバイ（コラボ回2

514

番外編というのは大体は本線から脱線する場合が多いが、時々めっちゃ
くちや重要なことが書かれてたりすることがあるよね

518

共闘って簡単な場合で成立したり、複雑怪奇な場合で成立したりと本
当に色々多いよね（コラボ回2

521

準備は敵味方関係なくやるものだよね……尚、ア

カン行動の前準備の場合がある模様（白目

525

断片的な記録を繋げて見るって結構没入感があるよね……

コメディでもホラーでも

528

いつの間にか逃げ道がなくなった時とか追い詰められた時などに
入って凄まじく必死になるよね……（コラボ回2

534

作戦とか行事、イベントとかって時に準備が間に合わない時に限って
あるよね……

538

昔の友達とか知り合いをふと思いついて、今何しているだろうって思う
時があるよね

541

とりあえず、まずは説明が重要なのは当たり前だよ？（大規模コラ

ボ

544

物事の段取りは重要……でも一度見てからじゃないと段取り

が立てられない場合があるので注意が必要だよね（大規模コラボ

549

敵の起死回生の一手というのは大体ロクなものじゃない場合がホント多いよね（大規模コラボ

552

計画とか作戦とかってここぞって時に思い通りにいかないものだよね・・・（大規模コラボ

555

とりあえずなんであれ時間は進む・・・それが良くも悪くも確実かつ残酷に・・・（大規模コラボ

561

クリスマスって色んな人を狂わせるよね・・・色んな意味で（遠い目）（番外編

565

最終防衛ラインってロマンがあるよね・・・現場ではあまり使いたくない言葉だろうけど（大規模コラボ

568

頑張って作ったりしたものがあつけなく破壊されたり、突破されたりなどするとなんとも言えない虚無感を味わえるよね・・・（大規模

571

コラボ

秘宝とかって罫とか金庫、遺跡などの様々な方法で隠されたりするけどそれがいいものか悪いものかは見るまでは分からない場合が凄く

571

多いよね（大規模コラボ

576

今の世の中通信網がやられたら戦国時代になるって話があるけど、人類って強くなった分弱くもなったんだなって思う今日この頃（大規模

583

コラボ

583

想定外は大体新たな想定外を引き起こす・・・そしてその想定外がさらに新たな想定外を（ry）・・・無限ループって怖く

589

ねえ？（白目）（大規模コラボ

589

予定って大体予想もつかない形で変更になることって多いよ

ね・・・・・・(大規模コラボ)

595

物語が終盤に移ったからと言ってすぐに終わるわけではない・・・
それは他のことにも言えるよね、仕事とかに(遠い目)(大規模コラボ

599

量産機といえば、なにかとバリエーションが多いやつが多いよね、ジ
○とかザ○とか(大規模コラボ)(一部修正)

604

大体戦いの終わりって言う若干ダイジェストになりやすいよね・・・
(大規模コラボ)

610

大きな事の後のも事後処理は大体めちやくちやめんどくさいことの百
鬼夜行状態である(大規模コラボ)

615

大事で棚からぼた餅が起きた時は大体裏でロクなことが起きている
場合が多いよね(コラボ回2)

621

色々ありすぎて時系列がおかしくなることって結構あるあるだよ
ね?

624

対策はリアルだと大体が結構時間がかかる場合が多いよね
八つ当たりの原因って結構しようもないことが原因だったりする時

627

が多いよね
あり得たかもしれない『革命』

632

忘れた頃にヤバいことが起こるものってあるよね・・・(例：桃
○のとりかえしカードや時限爆弾カードなど)

637

休日にやる仕事って呪いだよね・・・張り付いて終わるまで
取れない類の(遠い目)

642

大体遺産とかオーパーツとかって何かしらの火種になることがホン
ト多いよね(遠い目)

646

珍客だよ!!全員集合!!悪い子撲滅スペシャル!!(コラボ回)

649

想定外からの想定外、そしてさらに連鎖しての想定外って様々なところ
ろでよくあることだよね（コラボ回） 656

事故が起こるさの歌って割とマジで納得できる要素と説得力がある
よね（コラボ回） 660

もしものためと買っておいたものが肝心な時に役に立たないで、そう
じゃない時に限って役に立つ時って結構多いよね（コラボ回） 664

大きな出来事の終わりって打ち上げすることって結構多いよね（コラ
ボ回） 667

時間とは敵味方関係なく流れていくもの 671
嫌なことも慣れると作業扱いになる時ってあるよね 674

「夏っぽいことをしたい」は良くも悪くも人を狂わせる魔の言葉だよ
ね 678

何も分からない状況ってある意味チャンスでもあり身を滅ぼすきつ
かけにもなりかねない出来事だよね（大規模コラボ） 682

夏といえぱのものが案外多いと思わざる得ない今日この頃でござい
ます（大規模コラボ） 685

最近のネットでの鮫の定義がよく分からなくなってきた今日この頃
（大規模コラボ回） 691

虎穴に入らずんば虎子を得ずってことわざがあるけど、いざその状況
になると遠い目をせざる得ないよね（大規模コラボ） 696

何回も言っているような気はするけど、厄介事って同時多発をして、
更には連鎖して起こることって本当多いよね……（大規模コラ

ボ） 700
物事で行き詰まった時は一歩退いてから見たほうがスムーズになる

ことってあるよね（大規模コラボ） 705

ゲームとかで寄り道系のサブシナリオで本筋のシナリオの奴よりヤ
バイ奴が出てくることってよくあるよね（大規模コラボ）—— 708

デツカいことが起こるとそこを起点に重力があるかのように近くの
ものを巻き込んでくるよね……（大規模コラボ）—— 714

めちやくちや強い奴って大体弱点が意外なものだったりすることが
多いよね（大規模コラボ）—— 718

TRPGとかの1ターンって物凄い色んなことが起こりまくってる
よね……大体十数秒ぐらいなのに……（大規模コラボ）

724
休暇の際に仕事の話はかなり心にくるよね（大規模コラボ）—— 729

防衛線は大体の作品で破られることって本当多いよね（コラボ回
735

デカいところの後始末は大体爆破とかを大胆にやる場合が多いよね
（コラボ回）—— 738

まともな理論とか研究、修行とかを極めていくとなんかお前は何を
言っているんだ的とんでも結論・結果に辿り着くことってあるよね

（コラボ回）—— 743
理不尽には理不尽で打ち消すってかなりゴリ押しだけど効果ある場
合が多いよね（コラボ回）—— 750

大体表で大きいことがあると裏の方も結構大変なことになってるよ
ね（コラボ回）—— 756

一流の悲劇より三流のハッピーエンドという言葉があるが、それを実
現するために都合が良い事を引き起こすのが意外と難しいよね（コラ
ボ回）—— 760

時というのはなんだかんだで流れていくって感じだよ、そしてそう

思っている時に年越すのが1セット | 765

ヤバいところに行きたくないのは基本誰でも同じことだよね……
尚ガチで行かなければいけない時の心境は答ええないものとする

769

状況ってコロコロ変わるっていうけど、いざその時になってあまりにも変わりすぎるともはや何も言えなくなるよね | 773

傍観者でも間近でどエラいことが起きるとなんとも言えなくなるよね……尚、その当事者の場合は虚無感に包まれる模様

777

状況がコロコロ変わること一番怖いのは巻き込まれて傍観者から当事者になる時だと自分は思うの(過去の経験による遠い目 | 782

ホント忘れた頃に限ってヤバいものがヤバいことを引き起こすよねえ(コラボ回 | 786

一難去った後はまた一難あるかも知れないから備えるってとても大事なことだよね(コラボ回 | 790

戦いの中で成長する系って色々噛み合ったら死ぬほど厄介だよね(コラボ回 | 794

カーチエイヌって色んな意味で難しいね(真顔 | 800

大体の逃走劇って最後の部分で何かしらヤバいことが起こることが多いよね | 805

悪くヤバい情報のエレ○○リカ○パレードにあった時の心情ってもうね……(遠い目 | 810

813

話と話の間に入った間話を尺稼ぎとは言わないでほしい(遠い目

緊急の場合でも報連相はホント大事だよね、冗談抜きで(大規模コラボ

ボ

820

お宝が手に入れられるって噂が立つと様々な輩が群がってくるのは最早定番中の定番だよね（大規模コラボ

824

大混戦って起きる時は起きるもんだよね（大規模コラボ回

827

ヤバいやつがやられたのって大体ヤバい理由なのが多いよね（大規模コラボ回

830

デカいことの裏ではデカいことが平行して起きてるのって定番ネタとなってる気がする今日この頃（大規模コラボ回

833

戦争は数だとは言うが、質も整ってないとどうしようもないよね（大規模コラボ回

842

「夏っぽいことをしたい」はホント良くも悪くも人を狂わせる魔の言葉だよね……あれ？これ去年も言わなかったけ？（コラボ回

846

最悪の事態って想定のを遥か上をいつている場合が多いよね（大規模コラボ回

850

旅行っていざ来てみたら何をすればいいか分からなくなる時あるよね（コラボ回

857

初見殺しの弱点って大体は知られてしまうことなどなんだろうけど、一番はそれ喰らっても耐えられるやつに弱いことだと自分は思うの

（大規模コラボ回

865

分散されても「アレ？コイツ普通に大丈夫なんじゃね？」は余程の事がない限り本当にそうなることが多いよね（コラボ回

872

本来温厚だったり、沸点が高い人、無口な人がキレル時って大体大概なときだよね（コラボ回

879

『高度の柔軟性を維持しつつ臨機応変に』って普通戦場では出来ない

ものだが、出来たら相当ヤバイよね（大規模コラボ）—— 885

必殺技って行き過ぎたものになるともはや理解不能の域にいつちやうものって稀にあるよね（コラボ回）—— 893

名前って思った以上に重要な要素だよね（大規模コラボ後日談

900

間話って雑に省略しようとする結構えらい目に合うから注意しよ

う（白目）—— 906

人って何かを飛ばしたりすることが妙に好きだったりするよね（コラ

ボ回）—— 914

『一方その頃で』色々と情報を出されると情報処理が大変だよね（コラ

ボ回）—— 919

地獄って割と色んな意味で使われることが多いよね……尚、

使われる時は大体共通してアカン時な模様（コラボ回）—— 925

予想外の事態がおきたらどこもかしこも対応に追われるよね……

尚、それが余計に予想外なことを起こすこともある模様（白目）（コラ

ボ回）—— 935

とりあえずどうにもならないことがあったら妥協はするが次はそう
ならないように対策するのがいい時がある※例外はある（コラボ回

941

万能者とか厄災とか言われている奴の設定（現段階で判明している部分）

?????
正規軍やグリフィンなどからは『万能者』、鉄血からは『厄災』と呼ばれている遺跡で作り出されたときれている正体不明の人型存在。大きさは2mいかないぐらいで、重さは軍用戦術人形のフル装備より重いと判明している。見た目はHALOとかのSF作品の装甲強化スーツを機動戦士ガンダムのジ○・ストライカーに近づけた感じである。それに背中の方に大型バックパックを背負っていると想像してもらえるとわかりやすい。

また口の部分にあたるフェイスカバーが開閉が可能であることが分かっており口が露出させることが出来る、その為普通に食事をとっている姿が見られている。

持っている技術はオーバーテクノロジーなものや未知のものなど他にも様々な状況に応じた装備を持っていることも確認されている。また、その辺のガラクタや鹵獲した鉄血の兵器を改造して自分に使えるようにしたり、自分の身体を強化したりする改造技術もあることも判明しており、また戦闘力も凄まじく装甲、機動性、運動性全てにおいて現在の戦術人形・機動兵器を遥かに上回っていることも分かっている。

性格はお人好しな部分はあれど、敵対対象には容赦なく無力化してくるといふ残酷な部分も存在している。それにより主に鉄血ではあるがこれまでに甚大な被害がいくつも出ており様々な勢力の上層部の胃痛と頭痛の要因となっている。

また各地を汚染地域や戦場危険区域など危険地帯を問わずに動き回り何かを調査しているようだが、その目的は現段階では全く不明である。

最近BLACK WATCH（試作型機龍さんのところ）に右腕と胴体切られた際の出てきた血液と思われるものが取られて調べられ

たところ地球外物質やら解析不能などわんさか出てきて宇宙人扱いにされかけているが詳細はまだまだ不明

装備（現段階で判明しているもの）

大型バックパック

万能者の背中に搭載されている大型バックパックで不調であるためうまく使えないものかなりの量を格納できる格納システムや、指は4本なものの細かい作業が可能な上にサブアーム自体に作業道具や溶接レーザーが格納されている二本の補助腕『サブアーム』がバックパックに折りたたむ形で搭載されており、作業システムとしても破格の性能も持っている。その他にも様々な機能が搭載されている

『バトルウエポンガレージシステム』

大型バックパックの格納システム内のシステムの一つで、簡単に言うと宇宙刑事ギャン○ンのコンバットスーツの電送システムの兵器・武装版のさらに速度の速いやつみたいなものを想像してもらえるとわかりやすい

これにより格納システムに収納していながらも兵器の戦闘時での変更がとても簡単になる上に本体の兵装や装甲の瞬時の取り替えなどが可能になった

あらかじめ設定しておかないと格納システム内への出し入れができないと言うことやあくまで取り替えであるために壊されたものの修理などはそのあとにやらなければならないなどの欠点があるもののそれを差し引いてもかなり凶悪とも言えるシステムである

なお逆崩壊技術にかなり似ているとされているが本人曰く似てるけどちよつと違うものだそう

多目的実弾・光学併用大型ライフル兵器「D・B・R」

ビームキャノン「RED LINE」と改造2A42を融合させた兵器でビームキャノンの下側に改造2A42をさらに改造して小型化したものが付いている感じである。

ビームキャノンの方は元々マンティコアの主砲を動力直結型に加え砲自体を改造したもの（ビームを撃てるほど強力なもの）にガラム

の発射機構を組み込むことによって更に凄まじいビームを撃てるようになったほかビームマシンガンの機能などを持つている、2A42に関しては小型化していつている以外はそのままの性能である。

重さが大きくなるなどの欠点を抱えてしまったものの一つに統合した事により様々な利点や性能向上効果を得る事が出来た。

新型レーザーアサルトライフル&新型レーザーサブマシンガン

今まで使っていたアサルトライフルとサブマシンガンのデータとその工場で破棄されていたレーザー兵器、そして万能者が持っていたデータを組み合わせて現状使える力(生きてた設備など)で新造された兵器。威力・火力・連射性能どれもこれも桁違いな性能をしており、形としてはアサルトライフルの方はガン○ムMk-2のビームライフル、サブマシンガンはガン○ムのブルパップマシンガンを想像してもらえると分かりやすい

武器の位置はアサルトライフルは二丁持ちでサブマシンガンの方はサブアームの両腕につけている

ちなみに前のアサルトライフルとサブマシンガン(鉄血の兵器の鹵獲品を限界まで改造したもの)は格納システムに収納されている

現在は複数量産されている

両腰部搭載式レールガン

『ガラム』のレールガンを凄まじく小型したもので、弾数や有効射程などが減ってしまったものの、威力や貫通力などはかなり向上しており、彼の数少ない実弾兵器としてはとても頼もしいものである。なおレーザーアサルトライフルは大型バックパックの正面に携帯する形に変更されている。搭載している形はフリーダムガンダムのレールガンを想像してもらえると分かりやすい

現在は命中精度などを強化した為使い勝手がかなり良くなっている

サブアーム両腕部搭載型多連装ミサイルランチャー

『ガラム』の内部格納型ミサイルランチャーを魔改造し、サブアームの腕部に搭載したもので威力、破壊力が増しており、それが使われた際はそこが焼け野原になることは間違いないであろう。なお前から搭載されていたレーザーサブマシンガンはそのまま搭載されている。

作業戦闘兼用万能動力直結大型近接兵器「universal key」

馬鹿共（天災開発者の皆様）が作り上げたチェンソーの皮を被った万物「斬」兵器、元々はただの作業用チェンソー（とは言ってもそれでも一般的なものより大きく戦闘にも多少使えるような奴だが）を性能を上げたもの作る予定だったのだが何をトチ狂ったのか高周波技術や音響技術などの様々な技術を突っ込んだ結果、1.4mと言うでかくメチャクチャ頑丈で切れ味が戦艦の装甲や電磁バリアどころか万能者の装甲が豆腐のように軽く真つ二つに切れるヤバイチェンソーができたと言う・・・なお起動しなくても切れ味は落ちるがそれでもかなりあるのでそのまま使える

なお扱い次第によっては斬撃を飛ばせたり盾にできたりできるので意外と色々使える。万能者はこれを片手で使う模様

余談だが起動状態は万能者じゃないと使用不可能である。理由はそれ以外が起動した瞬間持ち手に凄まじい振動などが来るためによりほどの対策をしないと人間やロボット問わずにバラバラに分解する

特殊偵察機「アナザーアイ」

両手で持つことができるぐらいの大きさのプロペラ推進式の偵察機で、武装は全く装備していないものの、光学迷彩と機械の目をだますシステム「八方騙し」が搭載されているためステルス性がとても高く、さらに自律機体制御システムが非常に優秀な上に、風力や太陽光で発電することができるため、航続距離がすさまじく長く、使うものにとつてはとても頼りになる存在で、見られるものにとつては対策のしようのない代物である。現在は下記で紹介するエンジェルリングシステムも搭載されている

簡易有線式衛星システム

使い捨て式の簡易有線式衛星システムで、衛星システム本体が入ったカプセルを特殊な超強力ゴム式で発射し、ある程度の高度になったら自由落下を始め、それを感知した瞬間に特殊なバルーンをカプセルから展開し、成層圏に到達してバルーンが割れた際にカプセルから電磁投射式で衛星システムが発射され大気圏を突破するといった形の衛星で、有線式のため電波妨害などの影響が殆ど受けずに映像を発射台から受け取れるというこの世界ではとんでもない代物である。

なお線はとても細いものとても頑丈なため嵐ぐらいでは切れな
い

また衛星システムを破棄する際は線を発射台から切った際に衛星
がかなりの速度で巻き取ってその後にはノマシンによる消滅によつ
て消えるためデブリも残さないためとてもエコな代物でもある。

エンジェルリングシステム

万能者の持っているチート兵器の一つで、このシステム一つでどん
な環境下でもネットワークや電波空間を短時間で形成できる代物で、
今回は偵察機『アナザーアイ』に乗せるため小型のものであったが、そ
れでも大都市どころか小国以上クラスのネットワークや電波空間を
形成できる。

人の目では見えないが機械を通して見た際、形成したネットワーク
が綺麗に丸の形に形成された姿が見られたためその名になった。

侵略徴

万能者の持っているチート兵器の一つに数えられるノマシンで
万能者の持つものとしてダントツの危険物の一つ。コンピュータ
や機械類などを対象にエンジェルリングシステムに繋げるための接
続システム兼ハッキングシステムとして使う他に完全にコントロー
ルを乗っ取ることなどできる。

ハッキング方法はまさかの物理的に浸食して機械のコントロール

を物理的にも電子的にも乗っ取るというヤバイというもので、さらにナノサイズな上にウイルスみたいに拡散、増殖するなどするため、扱いを間違えれば機械文明が完全に滅ぶという・・・そのため一応完全にコントロールができるものの使う際は細心の注意と使用後は完全に消滅処理をすることが義務付けられている。

なお生き物には全く無害である。

人格複製・統合・並列化システム

万能者本体に搭載されているシステムで、文字通り万能者の人格（というかデータとAI）を複製・統合・並列を行うシステムで簡単に言うと攻殻機動隊のタチコマである。尚今なぜ使ってなかったかというところ「今までこれを使わなくても対処できてたこともあるけど、体が一体しかない時などに使ってもあまり意味がない」とのこと

潜入工作人型兵器「Invisible Invader」

文明に紛れこみ、工作する事をコンセプトに設計された兵器で、『主に』潜入工作専用として作られている。最初は骨格だけ状態だが、擬似細胞ナノマシンを変形させることによって、他人にそっくりに化けることができたり、好きな時に別の人に化けることができるというターミネーターのT-Xみたいなことが出来る。また触った時は人の肌と同じ感触があり、対物クラスの兵器を弾くレベルの硬さに変化することも可能である（さすがに戦車砲クラスは無理）。光学迷彩、『八方騙し』なども搭載されている。

また、万能者本体の性能と比べると装甲や耐久性、武装はかなり少なくなっているもののパワーはそのままに機動力、運動力は向上しており、ものを例えると十傑集走りをしながらこの世界での一個師団の戦力を蹴散らしてくる化け物の図が出来上がるほどの戦闘力を維持できている。

ちなみに武装としては両手内臓式FFES（ファイブフィンガーエレキショット）（文字通り指から電撃を放つ兵器）や、パイルパンチャー（ボトムズのパンチのアレ）などが搭載されている。

現在はとある目的の為、万能者の元を離れてH&R社（old snake さんのところ）にて社員として働いている

なお人間擬態時用の武装の他にも様々な装備を追加されている模様

格納式フライトシステム

正確に言えばとある二つのシステムを万能者の内部に組み込むことにより飛行能力を獲得させたシステム。一つは格納式プラズマバーニアシステム、これは燃料を使わず電気のみでかつジェット以上の速度を出すことを念頭に置いたシステムで、脚部の裏とふくらはぎの中、バックパックの下部などに搭載されている。また出力を弄ればバーニアで敵を焼くという凶悪じみたことが可能。使用時はその部分を開いて出てくる。

もう一つは反重力ホバーシステムで、文字通り反重力で身体を浮かせるというものでこれに関しては万能者の動力炉に関係しているシステムでぶつちやけると動力炉のシステムの応用である。

ちなみになぜ万能者はこれをあまり使わないかというところとあまり慣れないこと、最近までシステムエラーで使えなかったこと、そして未だに不安定な部分があることなどが原因らしい。

ただ、脚力だけでも高層ビルの屋上にひとつ飛びできることからそれが一番の理由と言われている

特殊宇宙機動専用パック

大気圏突破・宇宙での高速起動及び作業兼戦闘・大気圏突入ができるように作られた『万能者』専用の追加装備

脚部には巨大なバーニアが一体化するように、背中のバックパックには巨大なバーニアに大気圏突破・突入用装備などの様々な機器が一体化しバックパックの更なる部分に合体し、身体には対デブリ用装甲や姿勢制御小型バーニアがつけるような形になっており、宇宙でも万能者の動きや機能を問題なく発揮出来るように作られている

一応武装などは搭載できるものの今回使われた際は非武装の状態

であった

形に関して簡単に言えばガ○ダムサイコミュ高機動試験用ザ○の脚にみたくいになってたり陸戦型ガ○ダムのパラシュートパックをでかくしたようなもの、身体にゴテゴテの装備をつけているようなのを想像してもらえると分かりやすい

余談としては一応地上での戦闘でも使えないことはないのだが、はつきりいうと運動性と機動性を深刻なレベルに犠牲にして使うことになるので基本的に地上の戦闘では使用されることはない

水上・水中用多目的兵装パック

万能者が現在装備している水上・水中用の多目的兵装

大きさや形式などは宇宙に使用していた装備に似ているが、追加装甲や装備の量、固定武装が搭載されているなどの違いが存在する

水上時ではホバーで移動することができ、荒波や嵐などにも強く、機動力・運動性が高い

水中時では機動性・運動性・対水圧性などが非常に高く自由が効く上に視界の確保・対探知性が施されている

また水上時と水中時の切り替えにタイムラグがほとんど存在せずその性能のまますぐに動けることから海の怪物とも言っていないほどの存在となっている

固定武装としては腕部に格納式ヒートクローと水中用レーザーガン、頭部に特殊兵器『フラッシュユライト』（わかりやすく言えばガン○ムのド○の胸部ビーム砲のようなもの）バックパック合体型水中ジェットパックには小型機雷連続散布機などが搭載されている

水上・水中用多目的兵器『A・S・M・W』

正式名称「アクア・スクーター・マルチ・ウエポン」

今までの万能者が持った兵器の中では過去最大級に大きく、過去最多級に大量の武装や装備が搭載されている手持ち大型水中ジェットスクーターである

その大きさは万能者の身長半分あり、水上・水中で使うことを前

提の装備を大量に搭載しているので重さもかなりある

搭載武装としてはレールマシンガン、小型ジェット魚雷発射器、指向性超音波共振現象発生兵器『サウンドウェーブ』、特殊エネルギー兵器などが大量にあり、水中スクーターとしても水中ジェットによる機動性や運動性が優秀な上に耐水圧性も高いことからこれだけでも潜水艦顔負けな代物であることが分かる

陸上でも一応使えないこともないのだが、無論かなりの重量な為に万能者でも使い勝手が良くないとのこと

空戦用高機動兵装パック

大気圏内の空中用として万能者用の兵装で特殊宇宙機動専用パックの装着箇所がほとんど一緒であり、バックパックに戦闘機の大型の羽と大型ブースターがつけられ、脚部や腰部にブースター、全身に追加軽装甲が装備されている

この兵装の目的としては万能者に最初から搭載されていた格納式フライトパックの強化が目的として作られており、その結果高高度でも運動性と機動性などが非常に向上しており空戦などに対してもかなりの対応能力が獲得に成功している

固定兵装としては使い方次第では広域焼却にも使えるプラズマフレアや腕部ヒートナイフなど少ないながらも追加されている

並行潜航移動システム

万能者の最も重要な装備の一つであるシステムで、形的に言えば並行世界や異世界に移動するためのシステム

ただこのシステムは世界から別世界にそのまま渡るのではなく、世界から世界と世界の間を狭間をえて別世界へ渡る……いわばポケオンでいう謎の場所みたいなどころを進むものである

尚その狭間は対策を万全にしておかないとどのような存在でも『崩壊液と別種の粒子崩壊』で問答無用で消滅する危険な場所でもあるため、万能者は本当に緊急事態の場合ぐらいにしか使いたがらない

特殊戦略級兵器 特殊誘導レーザー兵器「サンライト・パラノイア」
万能者の大型バックパックに格納されていた兵器の一つで、専用の
発射機から『サンライト・パラノイア』の本体を射出し上空3000
mまで上昇した後にホバリング開始し、地上と「アナザーアイ」、衛星
などのデータを確認した後にホーミングレーザーの雨を発射で正確
かつ無慈悲に蜂の巣にしたり、高出力レーザーで光学シールドごと無
に還したりするヤバイ兵器である

それでいて撃たない対象と部分も選べるので、かなり有効活用でき
る兵器なのだが、欠点としては天候や前もって偵察や場所、敵などの
データを回収しておかないと使用が難しいというなど部分が存在す
る

レーザーを発射する際の様子が太陽が出来上がったかのように見
えたこととその光で皆殺しにすることからその名がついている

主要動力「?????」
「?????」

万能者が第二の心臓と言っている動力源であるが、本来はこれがメ
インであり、今使っている動力源に関しても本来補助動力源の立ち位
置のものであった

無論補助用よりも出力や発電量が凄まじく高いが、どうやら現状使
うには万能者の身体が物理的にも電子的にもあまりもたない様であ
る

第一級戦界滅級使用禁止兵器
「?????」

兵器「?????」
「?????」

「これは我々の現時点での「人」の可能性の到達点の頂点であると同時に
に人の可能性を否定する、言わば究極に矛盾した兵器の一種であ
る……この兵器が使う時が来た時、その標的が希望となる
人の可能性を壊す『絶望』であることを望む……それが神
であれ、災厄であれ、人の可能性であろうとも……」

製作者

????????

これからもこれら以外の未知の武装を使つて来ることが予想されている。

番外編 あり得たかも知れない 『悪夢』

それは突然であった……………

ドガアーーン!! チュドアーーン!!

「な、なんなんだアレは!?!」

「主力部隊が……………」

「敵の方にも甚大な被害が出ているようだが……………」

「!!敵確認ツ!!アレは……………なんだあの人型……………」

その日突然現れたその存在達によってその戦争に参加していた様々な勢力全てがなす術もなく徹底的に壊滅させられ、そして全てに平等に絶望を与えられることになった……………

人類は負けたのだ

それもELIIDや狂信者、秘密組織などでもなくその存在達によって……………

「……………お前らいい加減にしろよ……………いく
らこの戦争と無関係だった俺でもこの戦争はあまりにも利益どころかお前ら自身を滅ぼしかねない不利益しか存在しないものつてすぐ分かるぞ……………更に言えばそのせいでこっちにもめちやくちや飛び火してきたしな……………その代償はその戦争を対価として鎮圧させてもらうぞ」

その存在は突然戦争に乱入し、

「よし決めた、お前らが大切にしている、というかこの世界の全ての遺跡も破壊することにした……………その情報も、邪魔する奴もまとめて全部」

その圧倒的な力で全て敵を完膚なきまで叩きのめし、

「そんなものがあるから変なことやアカンことが起こりまくるんだよ……だから無くすんだよ、もちろん被害も最小限にしてやるが」

「ついでに世の中にはらまかれた崩壊液の中和もやっといたからこれで後はそっちの力次第で」

人類の希望と絶望を完膚なきまでに全て破壊して、去っていった……まるで夢の存在だったかのように……

我々はその正体不明の数千体の存在達の頭の存在を

『悪夢』と呼んだ

我々はその存在を憎み、恐れ、そして同時に感謝しなければならぬだろう

チユン……チユン……

万能者は眠りから目を覚ましていた……だがその顔はどこか呆れ果てているように見えた

「……俺まだメチャクチャ疲れているのかな？なんかまたとんでもない夢みたような……いや一応ちゃんと休めているのか……夢では俺がなんかにブチ切れていたみたいだけど……『アレら』を使うほどにそこまでするか？……いやするよな……あのようなブチ切れ状態だと徹底的に根の根

まで叩きのめして焼くまでやるよな・・・うん、本当
に何があつたんだ？夢の中の俺」

「万能者はその夢の内容に遠い目をして、頭を抱えざる得なかつた・・・」

番外編 あり得たかもしれない『鎮圧』

別次元 別世界

チエ?ノ?ーグ 広場にて

そこでは一方的な理不尽な出来事が行われていた

「なあ?反省はしたかい?」

「は、はい反省しm(ゴッ!)」 ガッ!」

「嘘だな、精神と心にまだ復讐心が残ってる……このままほつ
といたらまた恨み辛みを他人で晴らすことをしでかす気だろ?

……このことに関して俺に嘘はつかないでもらいたいな
?」

ゴギイン!! ベギツ ボギヤ

ギイヤアアアアアアアアアアアアアアア

「まだ反省してないか……だったらまたマインドクラックで『1
分が1日に感じるやつ』クラスをやるか」

「や、やめてえ……も、もうしないから……反省する
から……やめて……」

「……本当の本当にか?」

そこであつた殺戮はただ一つの存在の手によつて残酷かつ無慈悲
な『反省場』へと変えられ、恐怖が塗り変わっていた……
この存在に徹底的に心を折られて壊される恐怖に……

ある者は

ペキツ パキヤツ

「アツ……ガツ……」

「俺は子供だからって容赦はしないぞ?無論、感染者とかそうじゃな
いとかの差別なくやつちやいけないことをやらかしたらやると言っ
た感じだな……戦場で虐殺をした以上その責任があるから
な……もう少しやり方を考えるべきだったな」

「うぐつ……」

「……そんな被害者ぶつて身を守るためにとかで虐殺繰り返すの

を正当化する精神構造は今後もやらかすのは目に見えてるからな？
今後虐殺等を絶対にしないって誓わせるまで俺はこれをやるからな
？」

「お、お姉ちゃ．．．助け．．．．．」

「姉に助けを求めるとはいい、今までやったヤツに詫びるんだ．．．
殺してすいませんでしたと心の底から反省するとな」

ドガア

被害者であることを盾にやりたい放題していたものを徹底的かつ
無慈悲なまでに修正し

ある者は

「なんで．．．．．なんで今頃になつて来たんだよ．．．．．」

「．．．．．悪いな、俺は手に届く範囲でしか出来ないんだ．．．．
それにそのタイミングが今でここだった．．．．．ただそれだけの
話だ．．．．．ただひたすらに運もなく間も悪すぎた感じだな．．．
だが安心しておけ、ここにいる以上全員を徹底的に反省させるから
な」

「．．．．．すまない」

その残虐なる反省場にて懺悔をし

またある者は

「か、感染者を差別して何が悪いんだ!!」

「．．．．．区別とかのやさしめのやつならまだ良かったんだ、だが
お前達は差別を選び間違いないくじめと虐殺をやらかしたんだ．．．
相手のことをよく知らないでな．．．．．それにお前達が良くて
も俺の方がダメだからな?．．．．．間が悪かったな?お前達を目
の前にそれを修正するやつがいるのは．．．．．まあ殺しは誓って
しないからそこは安心したまえ」

ドガアツ バギツ ゴギャツ ゴギイン!!

ギヤアアアアアアアアアアアア

グガアアアアアアアアアアアア

アガアアアアアアアアアアアア

無力化された彼らを差別し加害しようとしていた者達を同罪と言わんばかりに残虐なる反省場の仲間入りをさせ

またある者は

「へえ．．．アンタ軍人か．．．それも現役のやつが潜伏して
るってことは何かしらをかつ攫おうしてるってことだろ？」

「．．．．．ガリツ」(バタツ

「おつと毒による自殺か．．．．．てい」

「．．．．．ゴバツ!!?」

「自殺はダメだぞ？反省と責任から逃げるのと同じだからね？．．．
どっかの言葉だけどピツタリな言葉があつてな？．．．．『大魔王
からは逃げられない』」

「あつ．．．．．あつ．．．．．あつ．．．．．あつ．．．．．」

裏で暗躍し、自殺によって情報を渡さないようにしようとしていた
者は、その死という手段ですらこの存在から逃げる事ができないと
いうことを知って絶望し

ある者は

「やめろお!!私の、私の大切な心の部分に土足で入ってくるなあ!!」

「へえ．．．．．あんたらの国、貴族とか軍とか皇帝とかがさうゆう
風になっているんだ．．．だがそんなのはいい、お前は俺のルールの
範囲に踏み入れたんだ．．．．．なら徹底的に反省させなければな
？」

「あつ．．．．．あつ．．．．．あああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああツツツ!!」

忠誠心などで心を強く守っていてもそれを反省させるためだけに

心の中に土足で入ってきて粉々に砕いてくることで心を壊され

「．．．．．うん？この子、精神が二つある．．．．．というか呪いというか悪霊みたいなのがこの身体の本래の持ち主を押し除けてコントロールしてるみたいだな？．．．．．引っ剥がしておくか」「なッ!？」

バリバリバリバリバリ

グガアアアアアアアアアアアアアアアア!

「．．．．．この悪霊みたいなの、調べたところかなり性根が腐ってるみたいだから、引っこ抜いて簡単な人形に移し替えてマインドクラックで『VW』と『1分が30年に感じるやつ』を突っ込んでおくか．．．．．」

部下達の前でその正体を晒された上で、その場に居合わせたものが怒りより同情するまでにあまりにも悍ましい拷問という名の反省を受けることとなった

とにかく分かることといえば．．．．．その世界本래の歴史の道筋が完全に壊れたのは間違いなかった

「さてとやっと反省は終わらせられたし．．．．．行くか」

「ど、どこに行くんですか？」

「決まっているだろ？彼らはやらかしたとは言え、これらの原因でなっている．．．．．？ル？ス帝国にだよ♪あつ、その前に龍？とかなどにも行くこうか、あそこには反省してもらおう奴が多そうだ」

それは止まらない、自分のルールに引っ掛かった者達を徹底的に無力化し、反省させる為に．．．．．

そして、生きさせるために．．．．．

無理やり前に向かって歩かせるために

始まりは突然に

某所 山岳地帯廃墟街近辺

その日その場所は騒がしかった。普段はパトロールの戦術人形が巡回するぐらいしか何もない場所なのにだ、それは何もないと思われていた場所で突然大きな穴ができており、その穴の先で遺跡が発見され、直ちにG&Kと軍が動き、調査を始めたからだ。

あるものはまた新たな発見に心を踊らせ、またあるものは目的の為の糧にすることを考え、またあるものは面倒な事がまた起こったと胃を痛めたりと様々であった

だが調査が進むにつれて様々な疑問がでてきた、なぜ遺跡の中がこうも荒れているのか、なぜ物が少ないのか、そもそもなぜあんな穴が突然できていたのか、これらを合わせて考えてみれば簡単なことであつた。

何かがこの遺跡から穴を開けて出て行ったのだと……

某所 鉄血前線基地

例の何か「あそこから出てなんか世紀末なところだなと思つたら、放射能汚染が起こってる、なんか粒子が崩壊してえらいことになってる、なんかミュータント的生命体がうようよしてるって……3アウトの大惨事にもほどがあるぞオイ」

それは呆れているように見えた、それだけを見れば人間に思えるのだろう：だがその姿は人型ではあるもののかかなり大きくそしてその世界ではロボットと呼ばれる存在に似ていた……

異質なのはそれだけにとどまらない。

「そして挙げ句の果てにはほぼ人間そっくりなロボットが反乱を起こしているってどうゆうことなの……お陰でその一部の部隊の施設の設備からそのデータを引き出せたからいいけど」

その後ろには人間的に見れば大量の惨殺死体があつちこつちに倒れていた……（正確に見れば倒れているのは全てロボットだとわか

るが)

「・・・ウ・・・アツ・・・」

その中には生きていたものもいた、だがその姿は無残にも手足がなく、体のほうもズダズダであった。

「えつとスケアクロウさんだっけか？自分も突然現れて挨拶したのは悪かったと思うよ、でも大勢でしかも四足歩行戦車みたいなのも出して襲ってこなくても・・・」

「・・・化け・・・もの・・・!!」

「・・・ナンカスイマセンデシタ・・・イマスグココカラデイキマスンデ」(申し訳なきそうに使えそうなものを回収しながら)

2時間後・・・そこから離れた場所

「一応応急処置してから出てきたけど・・・あの恐怖と怒りの感情が入り混じった目・・・やっぱこんななりだと警戒されるよな・・・自分の姿と製作者が初めて恨めしくなったよ・・・」

※違う、あつてるけどそうじゃない

「とにかくいろいろ情報は入ったからいいとして当面はどうするか・・・行き当たりばつたりの強行的な調査とはいえ、あつちこつちに迷惑かけすぎるのもな・・・」

※すでにいろいろと手遅れです

「まあどうにかするしかないか・・・とりあえずこの辺の様子を上空に飛ばしている偵察機の航空映像で見てk・・・アレ？確か鉄血だっけか？見間違えじゃなければあつちこつちから凄まじい数が集結してこつちに向かってきているように見えるんだが・・・やっぱりさっきのやつが原因・・・だよなコレ」

※当たり前前だ

「・・・今自分に起きている状況を整理してみよう、まず鉄血の皆さんは多分お礼参りで自分を追いかけている。そして今自分は、格納システムが調子が悪くて装備があまり出せない上に現状出せるやつをさつき使っちゃったからほとんどない・・・どう考えても緊急事態です本当にありがとうございましたまる」

※感想言つとる場合か

「とりあえずここでするべき行動は………逃げる!!」

※始まりからこのザマである（遠い目）

これは何かがとりあえずあてもなく自由に世界を歩いて見ていく物語である………なおその何かがあつちこつちに迷惑なことを起こす物語でもある

なお余談ではあるが、この原因不明の鉄血前線基地壊滅と謎の大軍勢大移動はG&Kでも確認され、ある指揮官は電柱男みたいな顔になって何かを語り出すほどパニックになり、ある少女は徹夜どころか連続徹夜確定を直感で感じて燃え尽きたかのように椅子で気絶し（あの某ボクシング漫画のワンシーンのようなもの）、ある社長は面倒な事（遺跡発見の件）で痛んでいる胃をさらに痛めることになったりするのだがまた別のお話……

※読者の皆様、こんな馬鹿と大馬鹿作者の行動を温かい目で見守ることをよろしくお願いします。（土下座）

現地調達・現地改修・現地仕様の3種の言葉ってロマンがある（作者談）

G & K 本社 社長室

「それで例の件の原因の解明は進んでいるかね」

G & K 社社長クルーガーは威厳のある声でその言葉を発した。だがその顔はどこか疲れを感じさせ、机の上には胃薬が置いてあるのを見る限りかなり苦労しているように見える。

「いえ、鉄血の戦力増強によって調査が難航し、依然として全くわかっていないのが現状です」

G & K 社上級代行官ヘリアントスは疲れを隠せない表情で答えた。目にはクマができているのを見る限り徹夜が続いているようだ。

なおただでさえ「遺跡発見の件」で合コンの予定がギリギリなのに「鉄血 謎の戦力増強」によりトドメを刺され、行けなくなるのが確定したその日の夜に彼女が黒いオーラを纏いながらすすり泣く姿が確認されたのは別の話である。

※コラ、そこどうせ合コン失敗するし意味ないじゃないのかとか言うんじゃないやありません

「・・・ハア」

ほぼ同時だろうか二人からため息が出た

「遺跡からほとんどなにも出ず、わかったといえれば得体の知れない何かが出て行ったこと、さらには鉄血は原因不明の戦力増強を行ったせいで監視の強化とこちらの戦力増強、調査によって仕事が増える・・・それもここ数日で仕事を立て続けにな・・・」(胃がキリキリ

「はい・・・そうですね・・・」(疲れ度が up

「・・・ハア」

「早く事が終わって欲しいものだ・・・」

※二人とも本当にお疲れ様です・・・

某所元都市部 廃墟ビル

二人の心労の大部分の元凶「なんとか色々な手段を使って逃げ切れたとはいえ……やっぱり使える装備が少なすぎるのは致命的だな……本当に冗談抜きで」

その何かは前に鉄血の前線基地で手かっぱらったに入れた物資と武器などを使つてなにかを作っていた。

「現状格納システムの調整がまだ時間がかかるし、今できることはこれぐらいだしな……まあまた鉄筋コンクリートの柱である軍勢と戦うよりはずっとマシか……」

なおその時は鉄血数百人とハイエンドモデルが廃墟ビルや建造物にめり込んだり、夜空の星々の仲間入りするなどのホームランされたのは余談である。

「これでこの配線をつなげて調整すれば……よしこれで完成だ。これで装備不足状態から少しはマシな戦闘ができるようになったが、どこまで使えるか使つてみないと分からんしな……本当は話し合えばいいのだが、全く話を聞いてくれんからな、鉄血の皆さんは……」

※あつちも少し悪いがやりすぎるお前が一番悪い

「とりあえず航空映像をしてみるか……え？」

その映像には、別の建物の上に立っている銀髪のツインテールの少女が映し出されていた

「なんで少女がこんなところにいるんだって、え？グレネードランチャー!?しかも構えてるし、確かその方向は……俺のいるビルじゃねーか!!やばい急いでd」(ドオゴオーン)

言葉を言いきる前にビルは砲撃を喰らい、もともと崩れかけだったのが大きな力によって根元から崩れていった。その存在ごと巻き込みながら……

「脱出している様子はなし……終わったわ……これで証拠を見つけ持ち帰れば、ドリーマーをギャフンって言わせてやれる!!」

その少女の姿をした存在は可愛らしくはあるがその腰に榴弾砲2

門という異質なものをかかえていた。その存在の名はデストロイヤー、どうやら目的はしようもない様だった・・・当の本人には迷惑だが・・・

「さあ倒した証拠を探ってきて頂戴!!かけらでも構わないから」

その声と同時に潜伏していた鉄血兵がぞろぞろと現れそのビルの残骸を調べ始めた。

「これでドリーマーをギャフンって言わせたらイジメられもされなくなるしいいことづくめね・・・フフそう考えたらいい気分n(ドゴオーン)!!なにが起きたの!?!え?あのビルの隣の建物の屋上に何かいる?・・・!!?」

それは崩れたビルに下敷きになっていた存在のはずだった。そして両手にはアサルトライフルのようなものを二丁持ち、背中にマシンガンのようなものと大砲みたいにでかいライフルのようなものを大型バックパックの両側にぶらさげ、さらに大型バックパックから生えている2つの腕のようなものの手の部分にはサブマシンガンのようなものを装備して隣の建物の屋上に立っていた。ビルの瓦礫からは砂煙が立っていることから見る限り瓦礫から飛び上がった出てきたのだ。

(08などところの緑な奴とは違うヤツのカスタム版のエレベーター登場シーンを想像してもらえるとわかりやすい)

「よりにもよって改修装備ぶっつけ本番か・・・格納システム調整や武器作りじゃなくてレーザーやリンクシステムなどの方をさっさと直せばよかつたな・・・さてと、お嬢ちゃんやっていいことと悪いことがあるってことと他人に悪いことしちやいけないうってことを知っているかい?君はそれをやっちゃたんだよ?」

その姿には汚れや傷がついているがそれ以外は全く無傷であるとデストロイヤーはわかった。いや、わかってしまったのだ・・・そのことに彼女はドリーマー並いや、それ以上の得体の知れない恐怖を感じずにいられなかった。

「道德のお時間だ・・・やられた人の気持ちをたっぷり味わってもらお

うか・・・」(ブチギレてる)

※犯罪臭が凄まじい上に見た目と言葉が相まってどう考えても化け物にしか見えません本当にありがとうございました

なにもともあれ彼女は藪をつついてしまったのである。出てくるのは蛇でなく化け物であるが・・・

「あれが鉄血が最近奇妙な行動をしている元凶?・・・デストロイヤーの動きがおかしいと思つて追跡したのは正解でした。鉄血と戦う様ですしもう少し偵察してみましよう」

なお、とあるG&K所属の戦術人形一名がその様子をこっそりと偵察しているのはまた別のお話

t o b e c o n t i n u e d

次回、戦闘回に続く

Q. この構図を見てどう思ったか答えよ A. どう見ても犯罪者です。本当に (r y

某所 元都市部廃墟街

そこは地獄絵図が広がっていた。あるものは全身を蜂の巣にされ、あるものは上半身と下半身が生き別れてしまい、あるものは壁にめり込まれて奇妙なオブジェと化したりと様々な残骸が散らばっていた。

「ハア……ハア……!!?」

その中でデストロイヤー率いる彼女達は何かから逃げていた。見る限り全員が無傷ではない上に中には四肢がないなどの重傷なものも含まれていた。だが、それすら気にせず彼女達は必死に足を動かしていた。後ろから迫ってくる恐怖の根源から逃げるために……

その恐怖の根源は遠く離れた地点で件の少女を探していた……

「お嬢ちゃん? どこ逃げるんだい? 道徳の時間はまだ終わりじゃないよ……」

※お巡りさんコイツです

それは人型ではあるもののその姿や、背中から腕の様なものが生えているなどの明らかに人間からかけ離れている特徴、さらには全身に返り血の様なものも浴びており、もしも何も知らない、もしくは仮に知っている人々が見ても満場一致で化け物と呼ぶにはふさわしい姿をしていた。

「なんなのよアイツ!!最後の交戦時の報告だとあんなものを使うぐらいだから補給どころか装備の用意すらまともに出てないはずなのに!それをアイツは『私たちの武器を改造して使って』補ってくるなんて!!しかも威力も火力も桁違いに上がってるし!!」

「デストロイヤー様!今は嘆いている場合じゃありません!もうすぐ増援との合流地点です。そこで早急に戦力を立て直して迎撃しましょう!!?」

走りながら嘆いているデストロイヤーに部下が希望のある報告する

「!!・・・そうよね!そこでアイツを倒す!!?なら急いで撤退よ!!?」

逃走から45分後・・・ 増援との合流地点

そこには大勢力の迎撃態勢の陣地が敷かれていた。前方には装甲人形アイギスとガードがその盾と装甲で防御を強固なものとし、その隙間からはヴェズピドが銃を出して構えており、その後方にはイエーガー、ニーマムがビルなどの構造物の上から後方支援をする用意ができていた。どうやら合流ができたようであった。

※グレネードを打ち込めば簡単とは言ってはいけない

「よし、これでOKね・・・これで迎撃準備が出来た!!?」

「デストロイヤー様、前方3km先に目標を確認しました!!?」

「・・・!一斉射撃の用意して!!?いくらアイツでもこの集中砲火には耐えられないはずだから!!?」

その言葉を言ったその時、デストロイヤーの耳に聞き覚えのある声が聞こえた気がした。

ミ ツ ケ タ・・・!

3kmも離れてもいるにもかかわらず、その言葉ははっきりと聞こえた気がした。そしてその言葉を発した存在はかなりの速度で走ってきていた。

「う、撃て!!」

その言葉が引き金となり、一斉射撃が始まった。誰もがこれで終わりだと思った、いや思いたかつただろう。だが、悪夢はここから本番だった。

「う、嘘でしょ・・・」

その言葉を発した本人の視線の先には、弾幕をもろともせず突っ込んでくるヤツがいた。^{化け物}

「道德の時間の邪魔ダアア!!??」

その言葉と同時にヤツも射撃を開始した。両手に持ったアサルトライフル二丁とサブアームに搭載しているサブマシンガン二丁、合計四丁の銃口から鉄血の武器と同じようにレーザーが発射された。ここまででは同じだが、その違いはすぐに現れた。

※道德とはなんだったのか？

「デ、デストロイヤー様!!? 前方の部隊が次々とやられています!!?」
「!!?」

それはアイギスと言う名の盾が全く通用しないという意味でもあった。そこには無残にもガードとアイギスが盾ごとレーザーに貫かれて蜂の巣になった残骸と一緒に仲良く蜂の巣になったヴェズピドの残骸が現在進行形で増えている光景があった。

「邪魔だ、どけええええ!!?」(ドゴオ!!?!!?)

ヤツは前方に残ったアイギスを蹴飛ばしながら、とうとう前線を突破、デストロイヤーにさらに近づいてきたのだ。

「こ、後方支援部隊!!? 味方を気にせずヤツを撃つて!!?」

その悲鳴にも近い命令はすぐに受理され、イエーガーとニーマムの一斉射撃がヤツを襲う。

「あだだだ!!? 微妙に狙いづらいところから撃つてきやがって・・・こいつを使うか」

少しは効いているように見え、彼女達は少し希望が見えた気がした。だが、ヤツがその言葉を言った後にアサルトライフルを腰にぶら下げ、背中のバックパックの横にぶら下げてるマシンガンのようなものを取り出すのを見て、その希望は儂いものだとすぐにわかった。

それは、この世界では2A42と呼ばれている口径30mmのデカイ弾を連射する機関『砲』であった。間違っても人が持つようなものでないということはその場にいる誰もがわかっていた・・・だが、目の前の存在はそれを成し得てしまっていた。

それを見た後方支援部隊は慌てて退避しようとするもすでに手遅れだった

なぜなら徹甲弾の嵐が彼らが隠れている建物ごと襲ったからだ。

その威力は凄まじく、建物という障害物や装甲は意味をなさず貫通し、一発一発が彼らをかすったり、命中していくたびにミンチが出来上がっていった。

嵐が過ぎた後、そこにはビルが崩れて中の残骸ごと巻き込まれて巨大な墓標が出来上がっていた。

そして、ヤツは機関砲を元の位置に直しながらデストロイヤーに向かっていった。

「この化け物!!? 吹き飛べ!!?」

デストロイヤーは最後の抵抗だろうか榴弾砲を撃ち込んだ。その弾道は間違いなくヤツに直撃するのは確実であった。だが...

ドガアーン!!? ドガアーン!!?」

「・・・え?」

それは発射された榴弾が空中で爆発する光景があった、もちろん榴弾は時限式でも近接信管式でもない、ただの着弾時に爆発する信管だったはずであった。

「そこだ」

「キャ!!?」

考える暇もなく彼女は腰の榴弾砲を両方とも破壊され、とうとうヤツが目の前に到着した。すでに彼女周りには彼女を守る力を持つものはおらず、彼女自身も無力化されているに等しい状態であった。

「ようやく道德の時間の続きができるな、お嬢ちゃん?」

「ひい」

デストロイヤーは怯えるしかなかった。

「と言っても、もう他人に悪いことしたらこうなることがあるってことを理解してもらえたようだし、だとしたら最後はアレだな」

「な、何をする気なの!?」

「そりゃ人に悪いことをしたら当たり前のことをするだろう?.....」

謝罪だ。それをやったら俺はここからいなくなつてやろう。だが、やらなかつたら・・・こうだ」

その言葉同時にヤツは近くのビルの残骸を拳で叩いた瞬間、そのビルの残骸は砕け散つた。そのことからその力で殴られればタダでは済まないことがデストロイヤーには嫌でもわかつた。

「誰しも拳骨は喰らいたくないだろ？俺も本当はやりたくないんだ」

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ」

もはやそこには心が折られ、謝罪をするだけの機械と化した人形がいた。

「いや、謝罪してくれるんだつたらここからいなくなるって言ったよ？何もそこまで必死に謝らなくても・・・」

※アレだけやったらあなるのも当たり前じゃ!!!!

その後ヤツはどこかに去り悪夢は終わったが、それでも尚謝罪を続けているデストロイヤーが気絶から復活した部下たちによつて正気に戻るまでかなりの時間を要したのは別のお話・・・

件の事が起こつた場所から遠く離れた場所

そこでは誰かが走っていた。様子からしてかなり急いでいるようであつた。

「早く・・・早くこの情報を持ち帰らなければ!!?急がないと大変なことになる!!?!!?」

その正体はG&K所属の戦術人形「ウエルロッドmkII」さっきの戦闘を隠れて見ていた存在であつた。

後日その情報がG&Kに持ち帰られ、G&Kがその存在について初めて認識し、調査や対策、監視を始めることが決まつた。

物語が動き出すのはもう少し先、されど確実に今間違いない動き始
めたのだ。

何が始まるんです？　会議だよ!!？　全員集合!!？

某所　G&K本社

会議室

破壊者より破壊者してるヤツ出現事件（作者命名）から4日後
「今見てもらった映像の存在が、ここ最近鉄血が不可解な行動をして
いる元凶であることが分かった」

G&K社長クルーガーはそう言った。だが、その言葉に反応するものはいなかった。なぜなら全員が映像に映ってる存在があまりにも現実からかけ離れていたことが理解できずに固まってしまったからだ。その中には護衛の戦術人形も含まれていた。

（無理もない、私と社長も最初見たときは固まっていたからな）

ヘリアントスは遠い目でそう思っていた。

なおその時は、我を取り戻した際に二人して強烈な胃痛が襲ったという……

しばらくして固まっていた会議参加者達はなんとか我を取り戻し、皆それぞれの意見が出てきた。

「な、なんなんだあの存在は!?？」

「鉄血の武装を使用してる……？たしか鉄血の武装はまだ鉄血の人形にしか使えないはずじゃ……」

「だとしたらアレは鉄血の兵器？でもなんで敵対しているように見えるんだ？」

「アレが最近鉄血の謎の行動の元凶、見れば見るほど化け物じみた動きと武装をもっているな……」

「で、デストロイヤーちゃんが可哀想な事になってる……介護しないと」（使命感）

「お前は何をいつているんだ」

「警備員さんこいつです」

「な、何をする貴様らー!!」

「……これ後方管理職の皆さんに知られたらやばいことになりそうだな」（悟った顔で）

「「あつ・・・」」(察した)

余談だが、ここ最近鉄血の謎の行動や遺跡発見などで後方管理職は凄まじいほどの多忙に襲われ、連徹が続いたり、過労でぶっ倒れている人が増加しているようで、皆殺意の波動に目覚める勢いで殺気立っている。なおその筆頭はある少女であることは言うまでもない。

(())(これは色々な意味でヤバイ!!?)(())

その場の全員の心が一致した瞬間であった

※馬鹿が本当にすいません・・・

「・・・話を戻そう。この存在については私も最初は鉄血が新しく作った人形ではないかと思っていたが、調べる限り違うと分かった。いや、それどころか鉄血のテクノロジとは全く違う技術でできている可能性があることが分かった」

「鉄血とは違う・・・技術？」

「ああその通りだ。ペルシカによると例の武器は鉄血のと比べると桁違いに性能が上がっており、その上リスクなしで使っているのを見る限り全く違う技術で改造されているとのことだ」

その言葉に会議室にざわついた

そこにクルーガーはとんでもないことを言い放った

「遺跡から何かが出たこと、今回の存在、全く違う技術・・・これらのことからみてなにかわかるかね？」

会議に参加していた一人は気づいた。

「ま、まさかあの存在は遺跡で作り出された存在・・・？しかも、それが動いていると？」

「遺跡発見後から立て続けに事が起こっていると考えるとその可能性とても高い。すでに軍の上層部にもこの事を一部伝えている。すでに我々だけでは手に負えない存在という事がわかっているからな」

「それで軍はなんと？」

「民間には伝えない方針で捕獲又は破壊かを決める会議を今進めているそうさ。もしかしたらその作戦に我々も協力することを考えなけ

ればならないかもしれない」

その言葉で会議室は静かになった。

「とりあえず私からは現状接触せずに監視だけしておくことを提案したいのだが、異論はあるかね？」

その場に手を挙げるものはいなかった。あまりにも分からない存在な為、全員触らぬ神に祟りなしと考えたのだろう

「異論はないか…ではペルシカ発案の名ではあるが、この存在を『万能者』と命名し、現状あまり接触をせずに監視をすることを決めr」
その言葉を言い終わろうとしたその時だ

「大変です!!? 例の存在が放射線・コーラップス重度汚染地域に入っていた事が確認されました!!?」

慌てて会議室で入ってきたものがその衝撃的な言葉を言ってきた時

あるものは机に強く頭を打ち付け、あるものは口をあんどりと開け、ヘリアントスは今回も合コンに行けないことを察して涙目の顔を両手で覆い、クルーガーは目頭を押さえるしかなかったという

※馬鹿が本当に（ry

余談だが、『万能者』の存在に関しての情報の後方管理職に伝わり、藁人形にその写真を貼り付けて五寸釘を刺しているもの、その写真を見ながら呪いの言葉を吐き続けるもの、丸太に貼り付けてチェーンソーで丸太ごと切るもの（このことはとある少女がやっている）が確認され始めるのは別の話

食べ物の恨みは恐ろしいというが、実際にやられると本当に怖いよね（作者談）

戦争は残酷だ。

そう思わざる得ないことは戦場でいくつもあつた。仲間が重傷を負って苦しむ姿を見ることができない時、目の前で即死してしまった戦友を見てしまった時、目の前で迎えにきたヘリが落とされた時、もはや数え切れないほどあつた。だが・・・

「こんちくしょう・・・飯を食おうとした時に、一体誰が俺の飯を吹っ飛ばしやがった・・・お陰でまた建物崩落に巻き込まれかけるわ、取ってきた飯が撒き散らされるわで、気分がブルーになつたよ・・・」

そこには最近各地で確認されるようになった謎の存在『万能者』がいた。その存在の目の前には、

「な・・・ガア・・・な、何でこんなところにいるんだ、オマエが・・・!!?」

あまりにも予想外で驚いているのだろうか、万人が見て全員が美しいといえるような美貌が殴られたために歪んで変形している顔でも驚いてるとわかる表情をした鉄血のハイエンドモデル『ハンター』がいた。

「なあそこらの皆さん、こいつが犯人ばいので思わずぶん殴つてしまつたが、こいつが主犯格で間違いないかな?」

脅しに近い威圧を出していただろうか、私達は思わず『万能者』に向かつて頷くしかなかった。

本当にどうしてこうなつたんだろう。

50分前

某所 人類生活可能区

都市から200km離れた場所

人類生活可能区、それはコーラップス汚染と核兵器による放射能汚染から逃れた土地の名称で、人類が生活できる数少ない大地のことである。

現在その場所は鉄血の軍勢が侵攻しており、その場所を守備部隊が防衛線をはって対処をしているが押されているようだ。

「みんな急いで!!?防衛ラインが破られかけてるわ!!?」

「はい!!?指揮官!!?」

その前線に向かっていている車両部隊がいた。その部隊はG&K社所属ヘレン・クローザーが率いる部隊で練度もかなりあった。彼女達が前線に到着すれば、戦況も変えられるほどに。

(なお本来指揮官が前線に出ることはないものの鉄血の通信妨害工作がひどく通信機すら使えない状態のため、止むを得ず出てきている。) (何で鉄血の大軍勢がここに侵攻してきたのかしら?確かにここは重要な場所ではあるけれど守備部隊も相応の戦力がいて、かなりの被害を出してまで取りに来るとすれば、あまり効果的ではないと思うけど・・・)

ヘレンは向かっている途中で疑問に思っていた。鉄血がここに侵攻する理由を。その疑問はすぐにわかった、悪い形で。

ドガアーオン!!?ドガアーオン!!?

前方と後方の車両が突然、それも同時に爆発した。

「敵!!?すでに防衛線を突破されたの!!?」

戦術人形スコープピオンは思ったことをそのまま言葉に出した。

「これは・・・別働隊による待ち伏せ!!?しまった、誘い出させられてたか・・・」

ヘレンは敵の目的が分かった。だが、時すでに遅く大勢に囲まれている状態であった。

「獲物を巣から誘い出す時にはこの手に限るな・・・なあ、グリフィンの指揮官?」

そこにはハイエンドモデル『ハンター』が笑みを浮かべて見ていた。「・・・しばらく前線に出ていなかったせいかな、勘が鈍ってたか・・・しかしそこまでして私を倒すのに利益があるの?」

「あるとも、お前はここ最近この周辺の鉄血の基地と戦力を的確に破壊しているじゃないか。あの中には今後に必要な物資も含まれていたものでな、何度も同じようなことを繰り返されても困ると判断した

からな。悪いがああ街と一緒に破壊することにしたわけだ」

「あちやー・・・知らないうちに鉄血にマークされてたつてわけね・・・
というか必要な物資も入ってたことは知らなかったな・・・」

（まずいな・・・さっきの爆破で戦える味方が少ない上にさらに全方位に囲まれている・・・これは死んだかもね・・・）

彼女は会話の中でも打開する方法を考えていた。だが、通信機が使えない、戦力が少ないなどの条件が打開する方法を見つけないことを妨げていた。

「話が長くなってしまったな。それでは狩りの続きを始めるとしようか」

「!!??来るよ皆!!??」

その言葉と同時にヘレンと戦術人形達にとって勝ち目の無い最後の抵抗が始まるはずだった。

『おい！グリフィンの指揮官聞こえるか!!??こちら防衛線守備隊!!』

「?」

「!!!」

「!!!」

ヘレンが持っている通信機が起動し、遮断されているはずの通信が繋がったのだ。そのことでその場の全員が固まった。

「なに!!??通信が回復しているだ!!??電磁シールドはどうした!!?」

「わ、分かりません!!??」

鉄血はそのことで慌てていた。だが、それが命取りだった。

「すぐに本隊と連絡を・・・!!??!!??」

「おいどうした、早く連絡をすr・・・!!??」

部下の様子を確認するためにハンターは振り返った、振り返ってしまっただ。そして、認識してしまっただ。

ハンターの後ろに何かが立っていたのだ。それもかなり大きい存在が。

「こんにちは、つまらないものですがどうぞ受け取れ」（ドゴォ!!??）

「グガア!!??!!??」

その言葉と同時にその存在はハンターの顔を思い切り殴り吹っ飛

ばしたのだ。

その光景にその場にいる全員はまた固まるしか無かった。

そして冒頭に戻る

その光景を見ながらヘレンは通信を取った。まるで現実逃避するかのよう。

「こちらグリフィン戦術指揮官ヘレン・クローザーだ、どうした？」

『連絡遅いぞー！こっちはよくわからんがなんかビームみたいなのに薙ぎ払われたら鉄血が壊滅状態になってな、方角的にお前らの方にいたからお前らの新兵器かなかだと思つて連絡したんだ。何をやったんだ!?!?』

それを聞いた瞬間敵味方問わずその場にいるものは全て悟った。全てこいつがやったことだと。

「またお前か!!?!?いつもいつも我らの行動を邪魔をして！お前は疫病神か何かか!?!?」

ハンターは自暴自棄に近い形でその存在『万能者』に叫んだ。それを言い返すように『万能者』は言い始めた。

「大体はあっちから仕掛けてきたようなものなんだが・・・そもそも最初は友好的に話し合おうとしたのに、話を聞いてくれなかったことが原因なんだがな・・・そして今回もやってくれたからな・・・」

※それを過剰なレベルで返り討ちにしています。

「な、何をやったんだ！お前に何を!?!?」

「そりや・・・さつきも言ったようにこの近くで食事をしようとしてたんだよ。だが自走砲かなんかの砲弾が着弾してな、それで吹っ飛んだんだよ飯が、ほら言うだろ？食べ物への恨みは怖いって、それで自走砲らしきものをビームでなぎ払った。」

((（確かに言うが、やり過ぎだ!!?!?）))

(（そのついでみたいな感じで助けられるのって・・・複雑だな・・・）)

※毎度本当にすみません

「さて、どうする?今なら見逃してやらんこともないのだが・・・ついでに言つとくとまたここで戦闘おっ始めるとお前ら全員共犯とみな

して半殺しするよ?」(ビームの原因らしき大砲みたいにかいライフルを取り出しながら)

「「理不尽!!?!!?!!?!!」」(その場の全員)

※毎度毎度すみません

結局この後鉄血とG&Kは同時に撤退し、結果的には被害は甚大なれど街は守られ、グリフィンの指揮官は生存すると言う形になった。

なおこれが初めて人類が『万能者』と接触した件であることも付け加えておく。

「あれ?これって現地の人類と初めての会話だよね……ヤラカシタ」その後

某所 人類生活可能区 G&K社基地

「結果的に何もやれてないのにめっちゃくちや疲れた……」

「そうだよね……」

ヘレンとスコープイオンは机に突っ伏してしていた。無理もない、鉄血に囲まれてピンチになったと思っただら、それ以上の理不尽存在が飯の恨みというしょうもないことで最終的に街がすくわれたのだから。

余談だが、この指揮官の副官はスコープイオンである。

「ヤバイやつに飯の恨みで街が救われるって……これ書類に書かないやいけないんだよね?どうしようこれ信じてもらえないやつだよね?」

「だよねー」

「そもそもアイツってあまり接触しちやいけないやつだよね?大丈夫かな……」(不安になりながら)

「わからないねー」(遠い目)

「というかこれは人類と初めての接触だよね?未知との、外から見たら英雄みたいな登場だけど、中身見たら凄まじくしょうもないってどうゆうこと?これ本当に大丈夫?」(顔が青くなってる)

「わからないねー」(白い目)

「モウイヤダ。ジゴクノミンナボスケテ」(メンタルブレイク)

「アハハ、指揮官がメンタル崩壊してる」(理性崩壊)

その後G&K本社に事を詳しく書かれた書類が送られるが上層部

が面白おかしくなり、社長が胃薬を服用する光景が見られたのは言うまでもない。

※本当に馬鹿が（ry

悪役と思っていた奴が実は裏ではいい奴ってことたまにあるよね。(なお色々と面倒臭いことになる模様

??? 人類人権団体過激派本部 会議室

「くそ!!? 闇市が壊滅か・・・これでは物資の調達ができないじゃないか!!?」

「忌々しい人形どもめ!!?」

そこには人類人権団体過激派の幹部達が忌々しそうに対策と今後の方針を練っていた。聞く限り、本拠地を壊滅させたバルカン砲を持つ戦術人形を含む二人組の襲撃より闇市含むスラム街が壊滅、それにより物資の調達、戦力の整理などが難しくなっているようだ。

「ただでさえ本拠地が壊滅している上に補給すらままならんとは・・・」
「今回のことで同志達の士気がさらに低くなっている・・・」

「これでは我々の目的の達成がさらに遠のく・・・何か士気を回復させる方法はないか?」

「今までのようにデモ隊を作り出して、妨害工作するのは・・・」
「いやそれでは先延ばしにしかならん」

今後の方針が定まらず、時間だけが過ぎていき、会議が終わる時間になる前に誰かが言った。

「そういえば???、例の部隊についてだがどうなった?」

「例の部隊・・・なんだそれ?」

その言葉を聞き、その名を呼ばれた男は溜息を吐きながら言った

「これは一応秘密裏にやっていたことなのだが・・・まあ今言っておく方がいいか・・・我々の目的は人類の人権を奪いつつある人形を駆逐することだということは言うまでもないだろう。だが、私は考えた。それによって今まで人形に頼っている部分をすべて人間が取り戻してやることになるかと予期せぬ被害を出してしまうのではないかと。そして同時にこうも考えた、人形から仕事を取り戻すならその技術を使ったものを人間でも使えるようにすればいいのではと。私は独自にある企業と軍の一部の同志に協力して研究している。」

まだまだ研究を続けなければならないが、現段階で使える技術ができてきたのを応用して軍事化したのが例の特殊技術投入した部隊『フアニーズ』だ」

男はその事をコピーした書類を映像に移しながら話した。

「なんかしれつとすごいことやつてないか？」

「そしてなんか目的を少し侮辱されたような・・・」

「そんなことよりおうどんたべたい」

「『お前は何を言っているんだ』」

「ちくわ大明神」

「誰だ今の」

「・・・話を続ける。このフアニーズはあくまでもしもの場合として設立された部隊ではあるが、それなりのPMCや鉄血の戦力を叩けるようなポテンシャルを持っている事が今までの試験で分かっている。しかし、いかにせんまだ不安要素が多いためにあまり出せなかったのだが・・・今回の件で敵が補給路を遮断をしているのを見ると本気で我々を叩きに来ている事が分かっている・・・ならばやることは一つ、彼らの実戦投入を提案する」

その言葉に会議室はざわついた。その後長くはなつたものの無事に会議は終わり、例の部隊は実戦投入する事が決まったのだった。

数日後

前線から離れた場所 G & K社傘下PMC基地近く

そこには地獄絵図が広がっていた。

ドオガーン!!? 「ギャアアア!腕が!腕が!」

「な、なんだあの敵は!?!あんな重装備なのになぜ早く動ける!?!」

「撃つんだ!できる限り抵抗すr (ダダダダダダ!!?)」

「くそ隊長がやられた!なんなんだよあいつら!」

G & K社傘下のPMCの彼らは今や全滅の危機に瀕していた。だがその敵は鉄血ではなかった。それらの姿は様々でアイギス並みの装甲がありながらブルートに近い機動力と運動性を持った人型、見た

目通りに重装甲重装備で敵を蹂躪する大型の人型機動兵器、それよりさらに重装甲重装備と6つの脚を持つ異形の戦車など様々な存在がいた。

しばらくしてその場にはその奇妙な姿の襲撃者達以外何も残らなかった。

『隊長今回も圧勝でしたね』

『ああそうだな、お前らもお疲れさん！今から帰還するぞ』

『『了解』』』

その奇妙な襲撃者達からは奇妙なことに人の言葉で喋った。

奇妙な襲撃者達の帰還中

『しかしこのS・G・S。だったか？すごい性能だな・・・戦術人形とあの戦力をこうも簡単に倒せるとは・・・』

『P・A・C・Sもすごいですよ!!？あんな重装備なのに機動力を人間以上に維持できているなんて、私絶頂すら感じましたから！』

『そうだな、それらをまとめてうちの投資者と大将と研究者達に感謝しないとな』

『しかし大丈夫だったんですかね・・・今回襲撃した敵ってG&Kの傘下のPMCだったんでしょ？これってかなりまずいんじゃない？』

『うちの大将曰くこの作戦は実戦投入テスト、投資者達の評価テストを兼ねて補給ルートの確保をやっているらしい、もともと俺らは実戦経験はあれどこれを使つての経験はないからな・・・さらにいうと大将の所属先が近いうちにG&K社などの勢力に潰される事が予想されているからな・・・できる限り時間を稼いで脱出する用意でもしているんだらう』

『ああ、それなら大丈夫ですね。大将ならうちらのこと見捨てたりしないからね、そもそも大将もアイツらと一緒に心中するつもりはないと言つてましたしね』

『確かにそうだな』

その言葉の後に全員笑い声をあげたのだった

少し離れた場所

「あれ？なんか笑い声が聞こえるな？気のせいかな・・・」

触らぬ神に祟りなしの扱いをされていることに今だに気づいていない『万能者』がそこにはいた。どうやら飯を食っているようだ。

「あの後一応何事もなくここまで来れたから格納システムの調整を行なったが・・・やつと格納システムの一部が復旧ができたよ・・・」

しかし、なんでこうも調子が悪いんだ？この先嫌な予感がするっていうのにこんな状態じゃいろいろとまずいな・・・」

その様子は仕事疲れの40代サラリーマンのように溜息を吐いていたのだった

近い将来『奇妙な奴ら』と『万能者』が相對することになるのだが、今はまだ先の話である。

「指揮官それ違うから!??妊婦が陣痛の時に使う呼吸法だから!??」
「.....こんな時どう言えばいいんだろうな」(遠い目)

※笑えばいいと思うよ(真顔)

その後へりは何事もなくD08基地の着陸、彼女達が降りた先には、グリフィンの制服を着た指揮官らしき男性とHK417とデザートロイヤール・ヴィオラと最近彼ら側についたドリーマーが出迎えていた。

「ようこそD08基地へ、ヘレン指揮官。ここは指揮官のタカマチだよ。よろしく」

「妻のHK417だよ。よろしくね」

「私はヴィオラだ。」

「ようこそ、合コンの負け犬ちゃん?」(いい笑顔で)

ドリーマーの一言によってその場は固まった。そしてその事を理解したヘレンが体育座りでブツブツ呟きながら落ち込みそれを周りがなだめるのに時間がかかったのはいうまでもない。なおドリーマーがその場で大爆笑していたのは余談である

「合コンの負け犬.....うんそうだよね私は負け犬だね、何度も何度も失敗してるからね、いつまでたってもまるで進展してないもんね、アハハハハハハハハハハハハハハハ.....地獄のみんなに会いたいな.....」

※色々大変なのはわかるが落ち着け(真顔)

数十分後.....グリフィン司令部 司令室

「失礼、みつともない姿をお見せしました.....これ妊娠祝いです」(ズー.....)

「い、いえ大丈夫ですよ、あつ、ありがとうございます」

その日部屋の空気は重かった.....なお元凶のドリーマーは豪華デザートで買収されて兵舎にいました。そうでもしないとやばい事になるのが明確だったからだ。

「・・・(軽く深呼吸して)話を始めますね。我々がここに来たのはとある存在の件に関してのことです。・・・『万能者』はご存知でしょうか」

「『万能者?』」

「『万能者』・・・確か最近見つかった遺跡から出て行ったとされる存在でしたかな?」

「はい、一言で言いますとその存在の監視又は行動の対応を行うための部隊や連絡網を作ろうということです。まあ、正確にはその存在が確認できた等伝えるための連絡網の構築が今回来た目的ですけどね」

その話を聞いてD08基地の面々は身構えていたが、最後の部分を聞いて安堵した。

「よかった・・・ただでさえ今が大変なのに厄介ごとを押し付けられると思ったからな・・・そうしたらセクハラをやるつもりだったですけどね」

「『ダーリン?』」

「アツハイスミマセンデシタ」

(これが妻と夫のあり方・・・!!頭に刻み込まなければ!)

(指揮官また変な勘違いをしてるなこりや・・・というか自分がセクハラされかけたことにツッコまないの?)

※指揮官違う、あつてるけどそうじゃない

その後何度か脱線したものの話はまとまっていき・・・

「これでは話は以上です。長く時間がかかってしまってますみません」

「大丈夫ですよ。こちらこそ、そのためにわざわざこの基地にお越しにいただいてもらってますいません」

「指揮官時間だよ?早く基地に戻らないと」

「わかりました。それではタカマチ指揮官我々はこれで、お疲れ様でした」

「お疲れ様、今度はゆっくりしに来て下さい」

何とか無事に終えることができた

帰りのヘリ内部

そこには話し合いを無事に終えたのに落ち込んでいるヘレンがいた。

「夫婦関係の話聞きそびれちゃった……」(小声で凄まじく落ち込んでいる)

※やっぱ聞く気満々だったんですか……

(あそこで止めといてよかったよ……下手したら日付変わる可能性あったからね)(遠い目)

ヘレン・クローサー 21歳独身 職業 G&K社戦術指揮官

彼女の戦い(戦場や受難、合コン的な意味でも)は今後もまだまだつづくのであった……

なお彼女の運命の人の出会いは作者曰く完全に未定とのこと

※やめたげてよ!!?

Q. 先生、不審者にあつた場合はどうすればいいですか？
A. 通報するなどのその場にあつた行動をしましょう（なお現代の常識が通用する場合じゃない模様）

「グソツタレ・・・格納システムが一部復旧したから出せるようになった調査機器を使つてもう一度詳しく重度汚染地域を調べようと思つてもう一度きただけど・・・まさかこんな奴に遭遇するとは・・・」

溜息を吐きながら『万能者』は目の前にある存在を再確認していた。その存在は一般的には『E. L. I. D』通称広域性低放射感染症、コーラップスに低濃度被曝により形態変異を起こした生命体で、知能などがほとんどなくなり、そのことからゾンビの一種の存在とも言える存在だった。

「オマエ ツヨイ オマエ タオシテ オレノ カテニ スル」

ただ目の前のその存在が他の『E. L. I. D』と違うとすれば、知能が存在し、その体には様々な生き物の骨や機械のパーツをぶら下げたり、溶かして貼り付けたりしていることから蛮族的であるものの、文化があることがうかがえる。

「・・・これ多分かなり極めて特殊な例の存在だってことはわかるが嬉しくないな」（遠い目）

「ナニヲ イツテ イル ハヤク タタカイ ハジメ ヨウ」

「・・・そして、バトルジャンキーで話を聞かないと・・・開発陣営の困った時の会話マニュアル今まで本当に全く役に立ってないな」（白目）

25分前 重度汚染地域 廃墟街

「この辺でいいかな？」

『万能者』はその場所で何か奇妙な機械のようなものを設置していた。「放射線とか粒子崩壊などの汚染が起こっていることは分かっているが、そのことを詳しく調べないといけないと思つてやっているが・・・」

ここに来るまでに、道中あのゾンビの群れを越えなきゃいけないかったのが憂鬱だったな・・・これで後は起動すれば・・・よし」
その言葉と同時に機械のようなものが起動し、半径300mぐらいに見えるバリアのようなものが出現した。

「よしこれで20分ぐらい待つとけばこの汚染物の正体がわかるからな・・・のんびり待ちたいところだが、それまでこれを守らないとな」

20分後・・・

「予想に反して何もねえ!!」

※お前は何を言っているんだ？

「まあ何もなかったのはうれしいが・・・身構えていた自分が馬鹿らしくなるな・・・しかしこうも何もないとかなるとかえって不気味だな・・・つと調査結果が出たか、なら装置片付けた後に見てみるか」
そしてその行動に出た次の瞬間、さっきまでたっていたところに大きな剣のようなものが真横から通り過ぎて行ったのだ

「・・・敵!!?まじか!?!?一応気は緩んだとはいえここまで接近されるか!?!?」

「ヨケラレ タカ」

「!?!?」

『万能者』の目の前には、犯人らしき存在がいた

そして冒頭に戻る

(えっとまずは分析しようか、目の前にいる奴の武器はあのでっかい剣で・・・その他は鱗みたいなのがついてる、脚の方がなんか爪がスパイクの役割みたいになってるなどなど・・・なにこの妙に整っている存在は?どんな偶然の変異でこうなるんだ?もしかして実験段階の生物兵器?)

『万能者』には分からなかった。目の前の存在が偶然にしても整い過ぎた変異をしていることに、普通であればあり得ないはずなのだ。

「ドウシタ ウゴキ ガ ニブイゾ?」

「考え事と言いたいが・・・アンタ本当に規格外だなオイ!」

そこには激戦が繰り広げられていた。『その存在』は右手の大剣を

振るうたびに近くの瓦礫はまるで豆腐のように切り裂かれ、『万能者』が放つ攻撃は一つ一つが瓦礫を蜂の巣にしていた。だが、それらはどれも目標から外れたものか、目標に小規模の被害をもたらすぐらいしかなかった。

「くそーなんて切れ味だよあの太剣!!?俺の装甲が少し切れるってどうゆう物質でできてるんだ!?!?」

「ヒカリ ハナツ ブキヲ ハナチ ナガラ カクトウ スルトハ ヤハリ ツワモノ カ」

「いい評価をありがとよ!コンチクシヨウ!!?」

両者一步も譲らぬ戦いであったが、その戦いも長く続くものではないと二人は分かっていた。少しの間でも見せればこの戦いが終わることを。

(撤退しようにも、今隙を見せればやられるし、撤退できたとしても追いつかれる可能性があるからな……)「本当どうしようこれ……」
「ドウヤラ カンガエ ハ オナジ ヨウダ デハ コレデ サイゴニ シヨウ」

「あつ、声に出しちゃった……」

その言葉と同時に『その存在』は飛びかかり、その太剣を振り下ろすために構えた。

「!甘い!!?」

それをチャンスと捉えた万能者は自分が背中にぶら下げたビームキャノンを持ち、空中にいる『その存在』に撃った。

「タシカニ アマイ コウドウ ダロウ ダガ キリフダ ガ ナケレバ ハナシ ダガナ」(いい笑顔で
「……え?」)

その言葉の後に『その存在』は驚くべき行動に出た。ビームにめがけて太剣を盾にしたのだ。驚くべきことはそれだけではなかった。なんとビームを弾いているのだ。そして、『その存在』は尚も万能者に向かってきていた。

「……………うそおん」

「トツタ」

その言葉と同時に『その存在』は万能者に近づき大剣を振った。

「……ホントニ サイコウ ノ ツワモノ ダナ オマエ ハ」
(さらにいい笑顔で)

その場所に立っていたのは横腹にビームキャノンの焼けた砲身を叩きつけられた『その存在』と

「……メチャクチャ痛てえ……こんなことなら改造機関砲の方を……いや弾かれる可能性があるか……」

大剣で切られかろうじて皮一枚に等しい形でぶら下がっている左腕を持った『万能者』がいた

(どうする? 相手にダメージをあたえられたが今ので左腕が使いもんにならなくなったし、けどまたあの不毛な消耗戦は勘弁だしな……) 万能者がこの後も続けられる戦いのことを考えていると……

「……ワレカラ テイアン ガ アルガ コノ タタカイ ヲ ココ デ キユウセン ニ シナイカ?」

「……何?」

意外なことに『その存在』から休戦の話が出たのだ

「えっ、何? 休戦? いや、嬉しいだが、何故急に休戦なんて……どうこと?」

「ハナシ ハ カンタン ダ コレ イジョウ ハ フモウ スギル ト ハندان シタカラ ダ ダガ アクマデ キユウセ ンダ イツカ マタ オマエ ト シアイ タイ」(強者を見つけたバトルジャンキーの笑顔で)

「あっそうゆうこと……できればまたやりたくないかな」(遠い目)

その後なんとか『その存在』は去ったもの……

「……調査は済んだけど……どっかで武器と腕修理しないと……あとアイツ対策の為に色々強化しないと……あ

あ、面倒ごとが増えちゃったよオイ」

色々なことがあつた上にこれから起こるとされることを想像して
万能者はため息を吐かざるえなかつた

「しかし、調査結果によるとやっぱ粒子崩壊による汚染だったみたい
だったな、今まで手に入れた資料と合わせてみたら、コーラップスつ
て物質がこの汚染を起こしているみたいだな……でもコレ、こ
の粒子崩壊のケースってあのケースに似てるよな……ひよつ
としたらアレで治せるじゃないか？コレ」

何かとんでもない爆弾発言しながら。

お節介するのもいいが少し自重が必要な場合も考えておこう（真顔）

某所 とある廃墟街 廃墟内 深夜

「えっと、ここの配線を調整してから接続してと……動作確認（手をグーパーグーパーしながら）よしこれで左腕の修理完了だな、綺麗に切られてたからある程度簡単に済んでよかったな……これがズタズタのほうだったらその辺のものからパッチワークしてごまかすしか無いからな……早く格納システムの復旧をすすめないとな……」

『万能者』はそこで修理したばかりの骨格むき出しの左腕を見ながらこれからのことを考えていた。

「ZZZZZZZZ……」

「アイツがまた来るかもしれないから格納システム内の武装を使えるようにしないとイケないし、さらに言う現状未だにほとんど現地調達のもの改造したものぐらいいしか使えんしな……本当に……でこも調子が悪くなるんだ？このシステム？」

「ZZZZZZZZ……」

「……うん、そろそろ目の前のことから現実逃避しちゃいけないね……本当にいつまで寝てるんだこの子」

『万能者』の視線の先にはだぼだぼのコートとブーツにぼさぼさの手入れされていない長い髪の少女が銃を抱き枕にして寝ていた

※おまわりさんまたこいつです

「いい廃墟があるなと思って、ここに入った方がいいが、先客が絶賛爆睡中って大丈夫？危機感ないの？この子将来大丈夫？」

「ZZZZZZZZ……」

「……気持ちよさそうに寝てるからいいか、そのまま寝かせておこう……腕に装甲貼り直さない」と

1時間後……

「ふああああ〜……………」

「うお!? 起きた!? そのまま永遠に寝てるものかと思つたよ」

少女はキョロキョロ周りを見回した後に『万能者』に一言言い放つた

「……………おじさん誰?」

その時は彼は今までで最大級の攻撃を食らつたと言つても過言ではないほどの衝撃を喰らつた

「おつ、おじさん……………そう見えちゃうのね……………」(すぐく落ち込みながら)

『万能者』が立ち直るまでしばらくお待ちください

「……………うんとりあえず聞こうか、なんでこんな所で寝てたの? 多分君戦術人形? なんだろうけど……………流星にこんな所で……………」

「……………寝るのが生きがいな子なのね……………仲間はどうしたの? 多分君を心配していると思うんだけど」

「……………あつ」(汗だらだら)

「えつ……………もしかして合流する予定だけど疲れたからここで休憩してたら寝過ぎしたパターン?……………」

「……………急いで向かわないと416と45にメチャクチャ叱られる……………でもまたこの時間だと……………どうしよう……………」

「ついでにオカンもいると……………大丈夫? すぐにその合流地点まで行けるか?」

「ううん、とてもじゃないけど無理だよ……………鉄血の巡回が強化されてるし、何よりこの地域の大規模拠点にはハイエンドモデルがついているって聞いたし……………」

「……………連絡は?」

「電波妨害がひどくて無理」

「じゃあなんで寝たんだ本当に、確かに休息は必要だろうけどさ……………」

少女の話を『万能者』は呆れ、少女は項垂れるしかなかった……………

「……………俺が手伝つてやろうか? 起こさなかつた自分にも少し責任があるみたいだし……………」

「……えっ?」

それは少女にとつては思いもよらぬ救いの手であると同時に正体がわかっていない存在に契約するに等しいことでもあった……

少女は少し考えた末に

「……ん、お願い」

「よしわかった」

協力してもらうことにした。

某所 鉄血大規模基地 深夜

「404の一人はまだ見つからないの?」

「すみません侵入者様!!?全力で搜索していますが……この近辺にいることは確かなのですが……」

「……わかったわ、なら速やかに増員して探して来なさい」

「は、はい!!?」

即座に動く部下を見ながらハイエンドモデル『侵入者』はため息を吐いた

「ネズミ一匹取り押さえられないなんて、私も少し焼きが回ったかしらね……でもアレの準備も進んでいるし、もう少しすれば面白いことができるからね……楽しみね」

侵入者はこれからのことを思い笑みを浮かべていた。その時

ドガアーンン!!?!!?!!?

「!!?!!?何事!!?」

「侵入者様!敵です!正体不明の敵が攻めて来ました!」

「すぐに迎撃準備を整えなさい、私もすぐに出るわ」

「分かりました!!?」

「……どこの馬鹿なのかしらね。ここは大規模な拠点だというのに攻め込むのは」

攻め込んだ馬鹿←

「お礼参りじや！コンチクショウ！」

虐殺絵図の中に『万能者』が暴れている光景がそこにあった

「……馬鹿は馬鹿でも『厄災』だったわね」（遠い目）

「ええそうですね」（遠い目）

攻めて来た敵の正体を見て侵入者とその部下は遠い目にならざる得なかった

「ならアレを使うのがいいわね、すぐにアレの用意をしなさい」

「……とつ、ここまでやれば奴らもパニックになって周りを巡回してるやつも基地防衛に向かってくるだろうよ、後はもう少し時間を稼いで……（ドガアーーン!!?）ってうお!?!?あぶね……そりやこれだけやれば反撃も来るだろうな……」

「そこまでよ、『厄災』これ以上あなたの好きにはさせないわ……：と云うかなんでこの基地に襲撃して来るのよ。あなたに何かやった？」

「あんたがここの指揮官つてことか、あんたの部下が出会って1秒後に銃撃をお見舞いしてくれたから、その連帯責任で礼参りに来ただけだ……なにか言うんだったらあんたの部下に言うんだな」（※一応本当だが故意にやっています）

「……後で叱っておきましょう、ですが、これ以上荒らされるも困りますので、ここで叩き潰させていただきます。さあ来なさい『対厄災ガラム』」

「……ん？ナチュラルに対応してしまっただけど『厄災』って俺そう呼ばれてるの？……そんなにやばいことやったかって、なんだありや？」

『万能者』の視線の先には鉄血との戦いでよく見かける小動物型のロボットを巨大化させたような存在が四体ほどそこにいた

「行きなさい『ガラム』」

その言葉が発せられると同時に『ガルム』達は目の前の『万能者』^厄に向かつて攻撃を開始した。

「うお!? さっきの砲撃はこいつらの仕業か、ならさっさと破壊しないとな、すまんわんちゃん? なのかわからんやつ」

『万能者』もその言葉と同時に両手に持っているレーザーアサルトライフルで反撃を開始するが・・・

「あれ? なんかアレものすんごく硬いんだが? もしかしてレーザー対策されてるのか?」

そこには装甲が少し焼けながらも健在の『ガルム』がいた

「ふふ、ご名答よ、この子達はあなたに對抗するために元から頑丈だった『ガルム』をさらに強化したものよ。あなたの持っている武器を全て今までの戦闘で解析して対策したのよ」

「うわ・・・そう言う想定はしてたけど思ってたより早く対策されてたか・・・まずいな・・・」

『ガルム』一切斉射よ、これ以上鉄血に厄災をもたらすものを野放しにしないで」

その命令に『ガルム』達は目のような部分にエネルギーを集中させたとと思うと一斉に太い光線と砲撃を一緒に放った。

「高出力レーザー兵器!? まぞ」

『万能者』は話し合える間も無く砲撃の雨と太い光線の中に巻き込まれていった。

『ガルム』達が攻撃を終えた後の場所には煙が舞っており『万能者』^厄の姿は見えなかった。

「これで厄災の終わり、と言いたいけど念には念を入れて『ガルム』も一度攻撃の用意をして」

侵入者は慢心はせず、いい笑顔で命令を発した、その命令を受け『ガルム』は再び目のような部分にエネルギーを集中させ・・・
「装甲が焼けちまったじゃねーかコンニャロウ」

ることができなかった。『万能者』が突然煙の中から出てきてかなりの速度で『ガルム』の一体の真正面に立ち

「さっきので弱点はわかった、お前の目ん玉じゃー!!?」

「!!?!!?」

目のような部分を貫手で刺したのだ。その光景に侵入者は慌てた。「あなたなにをやってるの!?! エネルギーを集中させている途中で、エネルギーの出口をなくしたらどうn」

「ああ、わかっているよ、そりゃ即席の爆弾が出来上がるんだからな」
(ブチギレ声で)

「ま、まさか」

「そのまさかさ・・・即座にお返しします。全力投球でだがな!!?」

その言葉どおり『ガルム』の目を手で貫いている状態のまま片手で持ち上げ、別の『ガルム』にぶん投げたのだ。

『ガルム』同士がぶつかった瞬間、目が貫かれた方の『ガルム』が大爆発を起こし、あたりがまた煙に包まれて見えなくなった。

「無茶苦茶だわ! さっきので確実に二機は使えなくなった・・・残る二機と私でなんとかなるかしら・・・」

すぐに煙は晴れていき、視界が戻り始めた。

『ガルム』用意しなさい、『厄災』はどう来るかわからな・・・い・・・わ・・・」

侵入者は目の前の光景に驚くしかなかった。

そこには『万能者』が二機の内一機の『ガルム』の背中に乗って弄っている光景があったからだ。

「えっと多分ここがアレだからここを引っぺがして、そのコードを無理やり俺のコードにくっつけて・・・うう、ビリビリ来た! この感じあんま喰らいたくないな・・・だがこれでOKだ」

「な、なにやってるの!?! あなた!?!」

「ん? そこにいたのか? なにって、コイツを無理やり俺と接続させてコントロールを乗っ取っているんだよ」

「はあ!?! ありえないわ、『ガルム』には私が施した様々な電子対策があるはず・・・それをどうやって」

「いや、物理的にAI制御や、コンピュータ端末のやつを引っぺがして、俺のシステムで機体を無理やりコントロールしてるけど?」

「………え?」

「とりあえず物は試しだ。」

『万能者』はそう言うとお操っている『ガラム』をもう一体の方の『ガラム』に向けて武装を展開し始めた。

「……?!? 『ガラム』逃げた」

侵入者は正気に戻り命令を出そうとするもすでに遅く……

「全門斉射じゃー!」

『ガラム』が全門斉射で破壊されるところを見るしかなかった。

「あ、あつ……」

「ちよつと甘い部分があるがいい感じだな、そしてこれでお前らの虎の子は全部なくなったわけだが……最後に駄目押しさせてもらうか」

「これ以上なにをする気なの?!?」

「決まってるだろ、装甲焼いてくれたお返しだよ」

その後、早朝に鉄血の別の基地から救援部隊が来たものの、そこには完全に破壊された基地にその真ん中でブツブツと何かを呟き虚ろな目になってる侵入者とそれを正気に戻そうと慌てている部下たちが確認された。なおその近くに『万能者』にコントロールされた『ガラム』が使い捨てされたかのように武装を剥ぎ取られて破棄されていることも付け加えておく

合流予定地点から6km離れた場所 明け方

「ここまでくれば合流地点は後少し……確かこの辺だったよね……」

「おお同時だったか」

「あつおじさん」

少女の視線の先には『おじさん』がいた、その姿はどこどころ損傷の跡があるもののどうやら五体満足のようだ、なお背中に鉄血の様々な装備の鹵獲品があるのは気にしないものとする。

「なんとか偵察機の端末を使えたようだな」

「うん、これでなんとか敵の位置がわかって掻い潜れたよ」

「トラブルはなかったようだな・・・これで俺の手伝いは終了だな、偵察機の端末は返してもらおうよ」

「分かったよ・・・でもおじさんなんでここまでしてくれたの？あたしはおじさんのことを全く知らないし、おじさんの方もあたしのことを全く知らないし・・・それに鉄血に何をしたの？端末からでもわかる慌てようだったけど」

少女にはわからなかった、なぜ自分を助けてくれたのかを。

「うーん・・・責任感じたのもあるが・・・ぶつちやけると成り行きと自分勝手だな・・・後者はノーコメントで」

「え？」

「それにお嬢ちゃんには帰る場所が存在するって聞いたしな、ならば帰してやらんと思ったしな」

「ふーん・・・」

「おっ？どうやらお嬢ちゃんの言う合流地点にへりが向かっているようだぞ？急がないと間に合わなくなるよ？」

「・・・わかったよ、ありがとうおじさん」

「どういたしまして、それじゃさよならだ」

「怪しいけどあんなことをやってくれる人もいるんだね・・・ふああああ・・・早く帰って寝よう・・・」

「俺にも帰る場所があったな・・・今は遠すぎて帰れないがな・・・こういう世界にもそういうものはあるって改めて感じたな・・・無理やり基地を襲って混乱させたかいたったものだ、さて次はどこに行くか・・・手に入ったものも使えるようにしないとな」

2時間後 上空 へり内

「まったく・・・これ以上遅れたらあんたを置いていくところだったのよ、G11」

「ZZZZZZZ・・・」

「寝るな!!?」

「でも間に合ってよかったじゃん!ねえ45姉」

「そうね、あの大型ダイナゲートから逃げるために散開したけど、一番の不安材料だったG11が合流できたから結果オーライね。あつクルーガーから連絡が来たわね」

『任務ご苦労、鉄血の動向は分かったかね』

「ええ、鉄血は近いうちに大規模な攻勢に出ることがわかったわ、それもこの地域の鉄血の大規模拠点に大量の戦力を溜め込んでね」

『そうか・・・ならその攻勢は起こらないな』

「「え?」」

『さつき情報が入ったのだが、その大規模拠点が壊滅した』

「「!!」」

『原因は不明だが、『万能者』がこの地域が入る目撃情報があったことが今さつき分かった、その事を考えるとおそらく・・・なぜ攻撃したかは不明だが』(胃がキリキリ痛む)

「「ええ・・・」」

「ZZZZZZZ・・・」

「・・・アンタはいい加減起きなさい!!?」(ゲンコツ)

「ふぎゅ!!?!!?」

なおその後ペルシカが404小隊のメンテナンスをした際にG11の記憶から「万能者」の情報が出てくるのだが、ペルシカの判断で隠されることになったのだが別のお話

とりあえず旅行の際の生活計画は本当に計画的にお願ひします（真顔）

山脈地帯 鉄血大規模拠点 司令部

「ハア……まさか大吹雪によつて無線の調子が悪い時に雪崩が起きて外部との連絡などが遮断されるとはな……」

ゲーガーはため息を吐いていた。2日前に自然によるトラブルにより大規模な被害が起きた上に外部と完全に遮断されてしまったからだ

「まあ、もともと遮断された場合の備えなどの対策はしてたからいい、だが……」

「ねえねえ、ヤクツチこれってどう思う？」

「おお、設置型対地対空砲台か、見ればこれは多分軍用のやつを簡単に量産化するために性能を低下させたやつかな？あとこの兵器移動させるのに一苦労する上に設置にも一苦労するような設計だからこんな山脈地帯とかに置くやつだなコレ」

「おお、正解！すごいそういうのも分かるんだ！」

「まあ兵器関連に関してある程度は詳しいからな、あとコレに関しては汎用性持たせるなら装甲を少し減らす事になるがタイヤをつけて自走を可能にさせて、撃つ際にアウトリガーで設置するタイプにした方がいいんじゃないかな？全周砲塔付きでな」

「おお、いいね！なら今度それを活かした設計の新型マルドゥークを作ろう♪ありがとね！」

「おう、頑張れ！」

そこにはどう見ても仲良く会話している『厄災』とアーキテクトがいた

「なんでかなり仲良くなってるんだオマエらはアアアアア!!??!!??」

2日前……司令部内

その時、その拠点の鉄血は騒がしかった。なぜなら雪崩が基地に直

撃し、大被害を被ったためその復帰作業の最中だった

「今動けるのは何人だ!??外部からの連絡は!??」

「3分の1が無傷で、その他が雪崩により大破または行方不明など様々な要因で動けません!」

「大変です!調べたのですが、電波妨害時の外部との連絡用ケーブルが切れてて、復旧困難な状態になってました!」

「あわわ、どうしようゲーガー!??」

「ええい!!?オマエが一番偉いだろうが!」

「でもそうゆうのはゲーガーが一番うまいし……………」

「つべこべ言わず、オマエも何かやれ!」

「わ、分かったよう……………」

アーキテクトはトボトボと外に出ていった

「オマエら!雪の除去を急げ!一部は物資の状態を調べろ!」

「二分かりました!二」

「はあ……………ここ数日天候がかなり悪いと思ったが、まさかこんな事になるとはな……………」

キヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!?!!?

「!??今のはアイツの声か!??なにをやらかしたんだ!??」

その声を聞いたゲーガーは外に駆け出しその声のあった場所に向かった

基地被害発生箇所

「おい!!?アーキテクト大丈夫」

「キヤアアアア!!?ナニコレ!うちの主力レーザーアサルトライフルをここまで改造できるなんてすごいじゃん!」

「お、おう確かにお前らのところのアサルトライフルを改造したものだ…」

「さらにこのマンティコアの主砲を改造したやつ!コレかなりの出力で撃つても耐えられる魔改造ぶりじゃん!」

ズザアアアアアア!!?

そこには戸惑っている『万能者厄災』の周りをアーキテクトが回りながらキヤーキヤー言っている光景があり、それを見たゲーガーは走ってき

た勢いのまま頭からズッコケるしかなかった。幸いな事に顔を引きずったところは雪だったため無傷ということをつけ加えておく

冒頭に戻る

「・・・で聞きそびれてたが『厄災』なんでお前がこんなところにいるんだ？というかなんで復旧作業を手伝っているんだ？」

ゲーガーはその時のことを思い出しながら、引き攣った表情で聞き出した

「まあ気ままに目的地も決めずに進んでたらいつのまにか山脈地帯に入ってて、一応注意して進んでたけど、突然起こった雪崩に巻き込まれてな・・・気付いたらあんたらの基地に入ってたわけだ、手伝いに関しては気まぐれやここで天候が良くなるのを待ってた方がいいというのもあるが困った時はお互い様で手伝ってるって事にしといてくれ」

「・・・え？それだけの理由で？じゃあなんでお前は今まで我々鉄血を何回も攻撃したんだ？」

「その事に関してだが・・・まだ分かってなかったのか、その事が伝達されてないのかわからんが・・・簡単に言うとな俺の行動を邪魔すると皆殺しや喧嘩両成敗による撲滅などになるって話だ。まあ最初の場合は会話をしようとしたら一方的に攻撃されて話を聞いてもらえなかったから話を聞いてもらええるように鎮圧しただけで、結局会話がまともに会話はできなかつたがな・・・」

(・・・噂通りやばい奴だな、本当に)

ゲーガーはその答えを聞いて真顔にならざる得なかつた

「そもそも会話を取り合ってくれる人が少なすぎるのが問題なんだよな・・・お前ら鉄血がなんか俺を危険とかなんとか理由を当てつけて攻撃ばっかしてくることが原因な場合が多いからな、まあやっちまったもん仕方ないが」

(仕方なくねーよ)

※ゲーガーさん本当に馬鹿がすいません

「ねえヤクツチ！雪崩で埋まった鉱物資材貯蔵庫の掘り出し手伝ってくれない？あとでまた開発設備を貸してあげるから☆お願い☆」

「おう！分かった、それじゃゲーガーさん俺次の仕事に行ってくるからすまん」

『厄災』はその言葉を後に復旧作業に戻っていった（おい、さらっとやばい対価で『厄災』を動かすんじゃねえ、しかも「また」といったか!??)

その日ゲーガーは終始頭痛と胃痛に苦しむ姿が見られたという

その後奇妙な遭難共同生活は進み、ある時は

「アーキテクトさんよ、こんなの作ったんだが」

「ドラグーンの作業用仕様!??脚部バランスー強化、後部積載システム搭載、馬力増加など……ヤクツチすごいじゃん!!?!!」

「すでに5機そこら辺のパーツで作ったからすぐに現地で役に立つはずだ」

「うわあい!!?ヤクツチありがとう!!?」

ドンガラガラガシヤン!!?

「ゲーガー様大丈夫ですか!!?!!?」

またある時は

「はいはいご飯の時間です。はい鉄血の皆さん一列に並んで、今日は豪華なお食事ですよ」(フライパンをカンカン鳴らしながら

「「「わああーい!!?!!?!!?」」」

「ヤクツチ料理メチャクチャうまいじゃん!!?これで明日も元気も100倍だあ!!?」

「おう！ありがとな！お前らの一般的な食料でも作れるレシピ後で書いてくからな、これで誰でも作れるようになるはずだ」

「「「厄災様ありがとうございませす!!?!!?!!?」」」

ドゴオーン!!?!!?!!?」

「大変だ！ゲーガー様が壁に犬神家の形でめり込んでる!!?」

そのまたある時は

「あれ？ヤクツチ前より重装備になってない？」
「すまん今回はちよつと私用で開発設備をつかってしまっ
たな……」

「いいよいいよ、こつちもヤクツチにお世話になってるんだから！」

「おお、ありがとな。今度兵器設計案を手伝うからな」

「本当!?？ありがとうヤクツチ!!?？」

ドサア

「大変だゲーガー様が倒れた!!?!!?？」

などなどトラブル（主にゲーガーの胃にダイレクトアタック関連）
はありつつもなんとか過ごせていき、ある日のこと。

「おお、あと2日ぐらいにはこの吹雪も過ぎるみたいだ」

「本当!?？やった!!?？」

「これで俺もここから降りれるな……」

「あつ、そうか……確かこの大吹雪が過ぎるまでだったよね……」
（はあ……これでやつと本部に連絡できるな……そして『厄
災』のことも……）（体は修理できたが心はボロボロ

「まあ、ある意味奇跡のようなものだからな……この遭難生活
は……本当にお前らと一緒に生活が出来て本当に楽しかったよ」

「……ならさ！明日にお別れの宴会をしようよ!!?？」

「お！それはいいな！なら腕にかけて料理を振舞ってやろう！」

「やったあ!!ねえ？ゲーガーいいでしょ？」

「……まあ最後ぐらいいいか」

その後、行われたお別れの宴会はとても賑やかなもので、皆笑い
あったものであったと書いておこう

そしてお別れの時が来た。

「それじゃ鉄血の皆さん今まで本当にありがとうございました」

「「「ほ”ん”と”う”に”あ”り”が”と”う”」」（涙と鼻水垂らし
ながら

「ヤクツチ本当にありがとうね……できれば次会った時はまたアイ

ディアを出し合おうよ！」

「・・・おう！分かった！それじゃ皆さんさよなら!!？」

その後を最後に『厄災』は去っていった。その名に合わぬものを残していきながら

別れてから1時間後 司令部内 モニター前

『で、被害は甚大なれど復旧はかなり進んでいると・・・わかりました。後で防衛部隊などの援軍を送っておきます』

「ありがとうございます。代理人」

そのモニターには上位ハイエンドモデル「代理人」の姿が映し出されていた。その前にはゲーガーがいる。

『ところでですが・・・自然災害以外で何か起こりましたか?』

その言葉にゲーガーは・・・

「いえ、それ以外は特にありませんでした。自然災害で手が一杯一杯だったので・・・」

『・・・分かりました。では、援軍の手配を急ぎますのでこれで』

その言葉を最後に通信は切られ、モニターは黒くなった。

「・・・はあ・・・アーキテクトの馬鹿があ・・・」

ゲーガーのその声には怒りがこめられていた。

「こういう時にいつもは使わん上位命令権を使ってきやがって・・・なにが『厄災』のことは秘密で喋れだ・・・そして私がいたらばれちゃう可能性があるから全てゲーガーに任せるねだ・・・めちやくちや苦労したじゃないか!!コンチクショウ！」

その言葉を発した際に近くの瓦礫を強く蹴った。

「・・・まあ、あの生活はあまり悪くはなかったがな・・・」

だが、その表情は少し明るかった。

その後鉄血で新型兵器が出始めて、G&Kがその対応に追われるこ

とになり、クルーガーはまた胃を痛め、ヘリアントスは合コンにまた行けなくなることで枕を涙で濡らし、ある少女はまた凄まじい黒いオーラを放つことになるのだが別のお話である。

「さてと今度はどこに行くかな？」

海外のB級映画っていかにもフィクションって感じがするのが多いけど実際に起きたら本当にシヤレにならないのが多いよね ※コラボです

某所 とある廃屋 ある存在からかなり離れている場所

「久々に偵察機飛ばしてみたらなんか巨大な物体があるなと思ったら……なんだこりゃ」

『万能者』の持っている端末には巨大な物体が写っていた。

「大体横50mぐらい縦25mぐらいってところか、えっと見る限りあっちこっちに武装がついてるな……あつあそこに継ぎ目があるってことはなんか格納してるみたいだな……おそらく戦略兵器か巨大アームってところか？」

※冷静に分析しとる場合か

「まあ分かるとしたらこれぐらいだな……さてと格納式フライトシステムの調整を続けないと……これあんま使わないから色々調整不足だしな……せめて緊急時に簡易的な空中戦ぐらいできるようにしないと……いつかヘリなどの飛行兵器と戦う可能性があると考えると本当に準備しとかないとまずいしな……」

1時間後……

「あとはこのエネルギー回路を調整してつと……よし、これで簡易的な空中戦ぐらいなら可能になったな、とは言っても調子が良くなつたと言えないから基本は徒歩だな……まあ備えあれば憂いなしだしな、さてと廃屋に置いておいた飯をそろそろ食べますk」

その言葉を言い切れなかった。目の前の廃屋が大爆発したからだ。
「……………え”っ?”」

そこに残ったのはもはや廃屋があったという証拠すら消え失せた焼け野原だった……

「アレ？飯は？一晩休む予定の場所はどこに行っただかな？」

ドガアーローン!!? ドガアーローン!!?

やや現実逃避気味の『万能者』を答えるかのごとく、周りが爆発し

た。そのことでこの爆発が砲撃によるものであることが『万能者』には分かった。

「……もしや」

そして『万能者』が端末を見直してみると、そこに写っていたのは……『周りに砲撃しまくりながら墜ちていく浮遊要塞』と『それに攻撃する攻撃機などの飛行兵器群』があった。

「えっと……確かマルドゥークだっけか？アレの計算してみると……」

その時、一瞬だけ周りは時が止まったかのような空気が襲った……

「……ルート検索完了、武装管制システムオールグリーン、攻撃対象『浮遊機動要塞』とその防衛行動を引き起こさせたとされる勢力……飯の邪魔をしてくれた奴に地獄すら生温いものを見せないとな……」（ドス黒い声で黒いオーラを放ちながら

その場所に『改造者』という嵐の次に『厄災』が来ることが確定した瞬間であった……

某所 浮遊要塞墜落地点からそれなりに離れている場所

そこには戦闘が繰り広げられていた。

「鉄血も必死だなこりゃ……」

「ええ、おそらく「改造者」を捕獲するのが目的なんでしょうが……その途中で我々と遭遇するのは不運としか言いようがありませんね……」

「だな、我々も試作反物質炉を取り戻さねばならぬのでな……気の毒だが殲滅だな」

否、戦闘と呼ぶには一方的に鉄血が押されている状態であった。「くそう、どこかが動くと思っただが、まさか正規軍が動いていてさらに遭遇してしまうとは……このままじゃまずい……」

もはや風前の灯に等しい戦力を指揮するスケアクロウはこの状況を打破できる方法を考えるが、良案が浮かばなかった。

「チエックメイトだな」

「!??!、しまった!!?!」

スケアクロウの視線の先には正規軍の戦車がその砲を向けていたのだ。これで鉄血の部隊は壊滅の一途を辿ると誰もが思った……

「邪魔だああ!!!(ドゴオオオ!!?!?!?)」

ドガアーーーン!!

?

「……え”っ?」

砲を向けてた戦車が蹴飛ばされて廃墟高層ビルにめり込まされたことでその考えは遠い彼方に消え去ったが

「ば、万能者!!?!?!」「や、厄災!!?!?!」

「二”なんでこんなところにいるんだ!!?!?!」

呼び方は違えどその突然現れた存在によつて両陣営は同時に混乱を引き起こした

さらに鉄血は幸運で正規軍には不運なことが起こる

「敵対対象と判別、反撃を開始します。」

「ま、まずい!!?!?!」

正規軍の自律戦術人形がその攻撃により『万能者』を敵対対象と自動認識してしまったのだ、そしてその反撃が『万能者』に牙をむいた、否、むいてしまったのだ。

「だから……俺の通り道の邪魔をするなって言ってるんだろぅが!!?!?!」

バキツ!!?!?ゴギヤ!!?!?メキヤ!!?!?ドゴオ!!?!?チュドーン!!?!?グギイ!!?!?

そこには正規軍の自律戦術人形が『万能者』の素手と蹴りによつて無力されていく光景があった。

「ええ……」

正規軍の指揮官達はこの現実離れた光景を見て、呆れるしかなかった。

「…………アレ、確か最新式の自律戦術人形でしたよね？」

「……ああ、そうだな」

「それが全く相手にされずに素手と蹴りで一方的に殲滅されましたね……………」

「……ああ、そうだな」

「そしてさっきの戦闘のどさくさで鉄血にも逃げられましたね……………」

「……ああ、そうだな」

「さらにヤツが向かっていった方角って確か浮遊要塞墜落現場でしたよね？」

「……ああ、そうだな」

そこには死屍累々の光景が広がっていた。幸いにも被害にあったのは自律兵器のみだったため、死者がいなかったのは不幸中の幸いだった

「撤退しようか」(二人とも真顔)

※正規軍の皆さん本当にすみませんでした

この日正規軍と鉄血の両陣営は浮遊要塞墜落現場の調査を『厄災』万能者の手によって断念せざる得なかった。なお、その情報は両陣営に伝わり両陣営とも対策に追われることになるのだが、別の話である。

「くそ、さっきの邪魔の対処に時間かかった！現場に急がないと!!？現場に関係者が残っていればいいのだが…………首を洗って待つてろよ…………俺の飯と休憩場所を吹き飛ばしたヤツらめ…………」(ドス黒い声で)

『厄災』が迫っている。その名の通りさまざまな勢力に『厄災』をもたらしながら

地下道探索って現代では色々な要因でできないけどそれを破ってでもやりたいロマンが隠れてるよね

某所 廃墟街 道路

「BLACK WATCHか……浮遊要塞が防衛行動を起こす要因となった組織の存在が分かったのはいいが……かなり戦力あるようだなコレ……今は何もしないが、会ったらオハナシリスト候補に入れとくか」

『万能者』は今後の予定をまとめながら道中を歩いていた。

「しかし……怒り狂ってここまで来てしまったけど相当走ってきたから体のあっちこっちにガタや損傷箇所ができてきてるな……今度整備しないと……つとこの辺なんかヒビだらけだな……なんかかなりの衝撃くらった崩落しそうな感じだな……」

ヒビだらけの地面を見ながら歩いていったその時だ

ズドローーン!!?

「……なんでフラグを速攻で回収してるのかな?」

そこにはビルの瓦礫が地面に落ちてきたのだ。その衝撃で地面のヒビが広がり……万能者の地面ごと崩落したのだった

「なんでかなアアアアア!!?!?!」

ズドローーン!!?!?!

「くそ、格納式フライトシステムを使って上がろうと思ったけど落ちてきた瓦礫が絶妙に邪魔で避けるので精一杯だったよ、コンチクショウ!!?!」

『万能者』は体から瓦礫や埃を払いながら立ち上がり周りを見回す

「コレは……地下鉄の駅か?上は……ダメだこりゃ高さもあるが、あの瓦礫、ビルの倒壊した際に落ちてきたやつか……穴が絶妙に塞がってるなありや……」

その言葉通り落ちてきた上の穴は埋まっており、瓦礫の隙間から微かな日光が差ししていた。

「迂闊に強硬手段に出ると生き埋めになりそうだし……出口を探すしかないかな？とはいっても……駅の出入り口は塞がってるから地下鉄の線路から行くしかないみたいだな……よしならすぐに実行するか。まああまり厄介なことが起こらないことを願いたいな……」

そう言いながら『万能者』は微かな光がかかっている場所から地道あるとされる暗闇の中に入っていくのだった。

2時間後……

「……ねえ、なんでこうも早くフラグが回収されるのかな？俺今日に限ってなんでこうも運が悪いんだ!?!？本当にシヤレにならないぞコレ！」

『万能者』は愚痴っていた。その姿はあつちこつちに返り血を浴びており、その後ろにはELIIDの亡骸が大量に散らばっていた。

「まさかミュータントの巣窟を通ることになるとは……くそ、早めに出ないとまためんどくさくなるぞ、こりゃ……つとなんかかなり広いとこでたな、かなりでかい駅かなかなかかって、なんだありゃ？」

その視線の先には動く大きな肉の塊のような存在が2体ほどいた。その存在を見た万能者は……

「うわぁ……グロいなありゃ……昔データベースで見た生物兵器レベルランク3のやつを思い出す……」（余談だがレベル最大は5レベルです）

思い出したのがよほど嫌な記憶なのか、ため息を吐いた。

「とりあえずあれをなんとかしないと先に進めないことには変わらないし……腹をくくるか」

その言葉と同時に万能者は手に持っている武器で肉の塊のようなものに攻撃を開始した。しかし……

「アレ？なんか攻撃を気にせず突進してきてない？」

レーザーによる攻撃は一応効果はあるようだがそれを気にせずに肉の塊のようなものは攻撃をしている万能者に向かってきた。そしてある程度近づいた瞬間、体を伸ばして大きな口で噛み付いてきたのだ。

「イイ!!？!!？なんだこいつ!!？体を伸ばしてきた!!？」

間一髪避けるもすぐに別の個体が攻撃を仕掛けてくる。

「ぬおオオオオオ!!？コイツら巨体に似合わず結構速い！そして硬いつてどんだけだよ・・・」

万能者は一旦距離を取りながら分析をしていた。

「分析した結果アイツらに有効な兵器は・・・地下ではあんま使いたくないやつばつかな・・・工夫して使うしかないな」

万能者はそういうとアサルトライフル二丁とも背中中のバックパックになおして、レーザーキャノンを取り出そうとしたその時だ。

肉の塊のようなものが体のあちこちを損傷させるほど体を伸ばしてきたのだ。

「えっ、あ、これ避けられん」

万能者はそのままその存在の口に噛み砕かれ・・・

「だったら力でごり押ししじゃあああ!!？!!？」

なかった。腕と脚と体で無理矢理つかえさせたのだ。

「ぬおおおおお!!？メチャクチャ力強いなコイツ!!？だが、コイツ自ら弱点を晒してくれるとはな・・・」

そういうとサブアームのミサイルランチャーを肉の塊のような存在の口の中に入れたのだ。

「さて・・・口の中のクリーニングのお時間でございます。代金はいいません。さっぱり綺麗になりますよ♪」

その言葉を発したと同時に口の中にミサイルを発射したのだ。

その結果は風船を限界を超えてまで膨らませたらどうなるか、それと同じくらい明確であった・・・中からの爆発に体が耐えきれずに破裂するように爆散したのだ。なおその爆風をもろに受けながら万能者は排出された。

「・・・やっぱりこういう奴は内部の攻撃に弱いつてお約束だな・・・
イテテあと一体残っているのに油断はできないって、え？」

万能者の視線の先にはもう一体の肉の塊のような存在が真つ二つに切り裂かれていた。その亡骸の上には見覚えのある存在が立っていた。

「ヒサシイ ナ ツワモノ ヨ」(ニツコリ笑顔)

「・・・なんでアンタがいるの？」(内心冷や汗ダラダラ)

30分後・・・

その暗闇の中を歩く存在が二ついた

一つは鉄血からは「厄災」、人類側から「万能者」と恐れられている存在。そしてもう一つは両者から「蛮族戦士」と呼ばれその強さと蛮勇を恐れられている存在であった。

「マサカ フタリ シテ マヨツテ イタトハ キミヨ
ウ ナ ミチビ ヲ カンジル ナ」

「感じたくねーよ!!?この野郎・・・一応ここから出て次会うまでは休戦協定だからな！」

「アア ワカツテ イル ワレ モ マダマダ オマエ ト タタカ
ウ ニハ チカラ ガ フジュウブン ダ サレド ツギ
シアウ トキ キタイ スルガ イイ」(ニツコリグロ笑顔で)

「あつうん(今決めたコイツと二度と戦いたくねー!!?!!?)」

何はともあれ奇妙な共闘をすることになったのだが、彼らはまだ知らない。この混沌なる地下には様々な勢力が混在しておりそれらと会うことになるうとは.....

「.....ところでお前何食ってた？」

「コレ カ ? サツキ ノ クライシモノ ノ ニク ダガ ?」

「.....深く考えないでおこう」

お金や物は使っていくたびに減っていくのって当たり前のことなんだろうけど、なんか落ち込むよね

某所 鉄血最重要大規模基地 司令部

「……………ハア」

そこでメイド服を着た女性がため息を吐いていた。その姿は誰もが一目で美人と答えるほどの美貌を持っていた。

「あらあ？代理人あなたがため息を吐くのって珍しいじゃない？」

そこに長い黒髪が特徴的な女性がクスクス笑いながらやって来た。その手には巨大なライフルのようなものを持っていた。

「ドリーマーでしたか……………最近までの『厄災』による被害の統計をやっていたのですが……………ご想像の通り前代未聞レベルの大規模な被害が出ていました」

「……………ああ」

ドリーマーと呼ばれた女性はそのことを聞いてさっきの笑う姿から打って変わって真顔になった

「……………重要拠点が二つ壊滅、大攻勢の為の戦力も壊滅、『厄災』討伐のための大部隊も壊滅……………挙げ句の果てにハイエンドモデル数名に致命的なトラウマができる……………泣いていいですか？」

「だ、代理人お、落ち着いて色々と崩壊しているから、あなたハイエンドモデルのトップの存在でしょ!?!」

代理人の涙目で静かに正気を削れていく姿にドリーマーは普段まですることがないなだめる行動をする羽目になった

「……………失礼しました。少し正気を失ってしまいました」

「……………しっかりとちようだい……………ただでさえ今鉄血でまとも動いているハイエンドモデルが少ないのにあなたまでそんなことになったら……………想像したくないわ……………」

なお、現在『厄災』と交戦したハイエンドモデルの状態はこんな感じである。

スケアクロウ

『厄災』によるトラウマにより『厄災』恐怖症発症、なんとか落ち着いたようなので『改造者』の調査に出すも不運なことに『厄災』と再度遭遇、形的には助けられた形ではあるものの恐怖症再発により安静中

処刑人

『厄災』の鉄筋コンクリートの柱による攻撃により大破、なんとか完全に修復されるも、鉄筋コンクリートの柱を見ると軽度の震えが起きるといふトラウマができていく模様、現在回復の兆しが見えているものの『厄災』との交戦は控えさせられている

デストロイヤー

『厄災』の道德の授業（物理）により「ごめんなさい」を繰り返して言う機械と化すことになったものの、現在回復に成功し、恐怖を克服しているのか精神的に成長しているところが見られ、ドリーマーの悪戯にも恐れず反抗するようになっていく

ただし『厄災』に関しての恐怖はまだ完全には抜けきつてはいない模様

ハンター

『厄災』と交戦したハイエンドモデルの中では珍しくトラウマができず、むしろ『厄災』を狩るために色々考えている模様、なお今は処刑者などの看病を手伝っている

侵入者

この中で最も精神的に重症なレベルのトラウマを抱えてしまっており、現在懸命な治療をしているものの、何かブツブツと呟いており未だに回復の兆しが見えないため、精神初期化が検討されている

「……………そうでした。私が倒れたら本当にまずいことになりますね……………胃が痛い……………」

「しかし……………『厄災』め……………私の可愛いデストロイヤーを変えてしまうなんて……………許せない」

※馬鹿が本当にすいませんでした

「ところで代理人？そのデータってなに？最重要機密情報って書いてるけど」

「……詳しくは言えませんが……対厄災兵器のプランの一部だと言えば分かりますね」

「ふーん……そんなものができてるってことはやっぱりヤツが最大の敵と認識しているのね……」

「ええ、ご主人様もできればヤツを生かしたまま鹵獲が望ましいと思っていたようですが、流石にここまで被害が酷いと厄災の破壊を考えているみたいです」

「なるほどね……」

「どうなるかしらね……この戦いの行方は……」

その言葉の答えはまだ誰にも分からない

鉄血最重要拠点
???

ケース31245 対厄災戦開始……

厄災の攻撃により本機の行動不可……厄災小破

結果 敗北

ケース31246 対厄災戦開始……

厄災の攻撃により本機大破……厄災損害なし

結果 大敗

そこには「なにか」がいた。

ケース31247 遠距離による対厄災戦開始……

厄災の攻撃により本機完全破壊……厄災小破

結果敗北

その「なにか」は計算をやっていた……
来たるべき時が来るまで「なにか」は計算を続ける……
ケース31248 格闘による対厄災戦開始……

『厄災』を???, その目標を達成するその日まで……

某所 地下鉄

「!!?!?!?」

「ドウシタ」

「いや、なんかさつき変な寒気がしてな……なんか俺に殺意の
ようなのがある感じなのかな……?」

『万能者』と『蛮族戦士』が暗闇の中を歩いていた

「ところでだが……オマエがさつき戦ってた戦術人形……あ
りやミュータント関連の復讐者だなありや……オマエ変な奴に絡ま
れたな……」

「カンケイ ナイ カワツタ コウドウ ヲ シテクル ガ
オマエ ト オナジ ツワモノ ニ カワリナイ ツギアウ ト
キ ヤツ ガ ワレ ノ カテ ニ ナル カ ギヤク ニ ワレ
ヲ カル カ タダ ソレダケ ノ ハナシ ダ」(ニツコリ
笑顔で

「……ある意味懐が広いなオマエ……」

「オマエ モ ソノ ヒトリ ト イウ コト ヲ ワスレル ナ」
「あつ、やつぱり? (勘弁してくれ……)」

そんなことを話しながら彼らは進む……先に何があるかも
わからぬ暗闇の中を……

(……あの戦術人形の無線の会話……微かに聞こえたな……

BLACK WATCHって言葉がな・・・ってことはこの地下にいる可能性があるな・・・道徳の授業（物理）ついでに出口も聞き出せるかな？)

一人物騒なことを考えているがきつと些細なことである・・・

※馬鹿がすいません

黒いアイツを突然見てしまった時って一種の恐怖で固まってしまうよね……（経験談）

地下鉄 崩落した駅のホーム

「……ここまで歩いてきたが……出口が全部塞がっているところばかりってどうゆうことなの？ 幸い地下鉄の路線図をこの駅で見つけたからいいが……」

万能者はあまりにも地上に戻るルートが見つからないことに頭を抱えていた。

「……えつと確かこの駅はダメで、この駅も駄目、ここは路線自体が埋まってて駄目、この非常口も埋まってた……ナニコレほとんど地上に戻るルートが壊滅してるじゃねーか!!？」

ブンブンブンブン!!？」

「さらに進むたびになんかミュータントの巣にぶち当たりまくっているし、挙げ句の果てにはあの肉の塊の軍団にも襲われてえらい目に会って、どんだけ最近の俺の運が悪いんだよ……なんか俺やらかしたつけ……」

※因果応報です

ブンブンブンブン!!？」

「……で、オマエさつきからなにやってんの？」

万能者の視線の先にそこには大剣を素振りしている蛮族戦士がいた

「コレ カ？ カン ダガ ワレ ヲ コエル カノウセイ ガ
アル モノタチ ガ コノヨ ニ アラワレタ キ ガ シタ
ナラ ヤル ベキ コト ハ オノレ キタエル コト シカ
ナイ ダロウ」（ニッコリ笑顔で

「……どこの誰かは知らんが、コイツにマークされたことにご愁傷様としか言えないなこりゃ」（遠い目

「とりあえず残ったこの路線を調べるか……オイそろそろ行くぞ」

「ワカッタ デハ イコウ」

「この路線がダメだったら強硬手段を考えないとな……地上のルート開いてくれよ……割とマジで」

彼らはまた暗闇の中に入って行った……

40分後……

「……なあ一つ聞いていいか？」

「ドウシタ？」

「……この辺あまりにも静かすぎじゃね？なんかあっちこっちにミュータントの死体、骨やら散乱しすぎてないか？」

そこにはELIDの死体などが散乱している地獄絵図にも等しい光景が広がっていた

「ソウダナ ツマリ カナリ ノ ツワモノ ガ イル カノウセ イ ガ アル トイウ コト ダ」

「……そうか貴重なご意見ありがとうございます……コンチクシヨウ」(遠い目)

さらに30分後……

「……なあ奥に見えるのって……卵だよ……蟲系のヤツの」

「アア ソウダナ」

「なんかその周りから蟲が大量に出てきてないか？」

「アア ソウダナ」

「……そしてそれがなんか俺らに向かってきてないか？」(内心滝汗)

「アア ソウダナ」

その彼らの視線の先には、蟲！蟲！蟲！と蟲恐怖症の方々にはお見せできない光景が広がっていた。さらに言うとそれらは会話の通りに全て彼らに向かっていた。

「よし 逃げよう」(真顔で)

「アア ソウダナ アレラ ヲ アイテ スル ニハ カズ ガ
オオスギル ウエ ニ バシヨ モ ワルイ」

「素晴らしいご意見を冷静に言ってくれてありがとうございます
た……泣きたい」

そこからの逃走劇はあまりにも悲惨だった

「うお!? 横から出てきやがった!? 先回りされたのか!?」

「コイツラ アタマ ガ イイ ナ」

「クソ！昔戦った群体型生物兵器よりやばいヤツじゃねーか!!」

二人は蟲達の戦術に戸惑いながら逃走した。捕まったら想像絶する死に方をするのだと考えながら

ブーン!!? ブーン!!? ブーン!!? ブーン!!?

「ぎゃあああ!? コイツら飛べるのかよ!?」

「ムウ …… カズ ガ オオイ」

カサカサカサカサカサカサカサカサ

「ぬおおお!!? コイツら絶妙なタイミングで挟み討ちかけてきや
がった!?」

「コイツラ ジョウホウ デンタツ シュダン ガ ハツタツ シテ
ル ナ」

ギヤアアアアアアアア……!!?!!?

「……なああの肉の塊のヤツがアイツらの群体に飲み込まれた
と思ったらあつという間に骨だけになったように見えただけ
ど……」

「……アンナ カタチ ノ ツヨサ モ アツタ ノカ ヨ
ノナカ ハ ヒロイ ナ」(ニツコリ笑顔で

「冷静に強さを褒めとる場合かあ……!!?!!?」

様々なことがありながらも彼らは蟲達の攻撃をかわしながら逃走
を続けていた。

しばらくして……

「なあアイツらの行動って全部誘導だったのかな? コレ……」

「ドウヤラ ソウ ラシイ」

二人の周りには大量の蟲達を取り囲んでいた。

「コレ本当にどうしよう……ミサイルランチャーじゃ蹴散らせ

ても崩落してしまう可能性あるし・・・コイツら飛べるからフライトシステムじゃ突破できない・・・」

「ナラ シヌ カクゴ デ イドム カ」(ニツコリ笑顔)

「オイその戦闘狂マテヤ」

そんな会話をしているうちに蟲はその範囲を狭めてきている。

「くそう・・・ここから一気に出口に出る方法があれば・・・」

「・・・ナラ ツクレバ イイ デハ ナイ カ アナ ヲ ホル ナド シテ」

「オマエな・・・そう簡単にトンネル掘る道具なんて持つてるわけg」

「アル デハ ナイカ ソノ ヒカリ ハナツ オオキナ ブキガ」

「・・・あつその手があつたか」

あれはなんだ？

それは我々全員の考えたことだった。

そこには獲物の一人が背中からでかい何かをとったと思つたら、そのでかい何かにエネルギーを溜めているのだ。そして理解した。アレは我らを滅ぼしかねないものである。だが、その考えに至るまでに時間がかけ過ぎた・・・

そのでかい何かから出た赤く太い光が一部の同胞ごと壁を焼き貫いたのだ。そしてそこには地上までぽっかり空いた穴が出来ていた。

「よし逃げるぞ」

「ワカツタ」

その言葉と同時に獲物はその穴に逃げていき、正気を取り戻し追おうとするも既に遅く、途中で穴が塞がれてしまった。

我々は敗北したのだ、頂点に立つ我々が獲物に過ぎないはずの存在に・・・

そのことを考えた次に思い浮かんだ言葉は許せないだ。

何世代かかろうとも、何度滅びかけようとも彼らを絶対に喰らお

う、我々はそう誓った。

その後地下鉄では彼らの動きが活発化し、BLACK WATCHの支配下の部分まで侵攻してくることになるのだが・・・別のお話である。

また遠い将来彼らが地上に出て地上の存在すべてに牙を剥くことになることも別のお話・・・

※試作型機龍さんとBLACK WATCHの皆さん本当にすいません

「やっただ・・・やっとなられたぞ・・・」

「ヒサビサノ チジョウ・・・ アイニクノ ヨル ダガ コノ
クウキ ハ ワレワレ ニハ ナニヨリノ ヤスラギ ヲ ア
タエル モノ ダナ」

「それに関しては本当に同感だ・・・」

万能者と蛮族戦士は久々の地上に感傷に浸っていた・・・
無理もない彼らは地獄とも呼べるから脱出できたのだから・・・
「さてと・・・ここからオマエと別れるわけだが・・・オマエこ
れからどうするんだ？」

「キマツテ イル コンカイ タタカイ デ マナンダ コト
ヲ カテ ニ オノレ ヲ キタエル オマエ トノ
シアウ タメ ニ コンカイ オマエ ト トモ ニ タタ
カウ コト デ イロイロ マナベタ」

「あ、うん（やっぱ次会った時戦う気満々なのね・・・）」
「デハ ツギ アウ トキ スバラシキ シアイ ガ デキル コト
ヲ ノゾム」

その言葉を最後に蛮族戦士は去っていった

「確かアイツのいった方角は・・・たしか森林地帯だったな、なら俺はその反対の方に行かないとな・・・」

彼らは進む。ある者は命を賭けた闘争のための修行へ、ある者は調査という名の放浪の旅へ・・・

「結局BLACK WATCHには合わなかったな・・・まあ道の徳の授業（物理）を先延ばしにしたと考えればいいか」

※物騒なこと考えるなオマエ・・・

ジョーンズな宇宙人のCM見てると世の中いろんな人がいろんな働き方をしてるんだなと思う今日この頃……

人類人権団体過激派本部 会議室

「グリフィンへの反撃行動はことごとく失敗、挙げ句の果てには最高戦力の戦車部隊と機甲兵部隊も失う、さらには大規模な基地が壊滅するとは……その上現在の問題が「ファニーズ」と本隊が確保している重要補給路がグリフィンの攻撃を受けていると……」

その会議室は空気が重かった。それもそのはず最近の作戦はことごとく失敗、戦力も激減しているのだから。

「どうするんだ、コレ……もう反撃は不可能だし、グリフィンには王手がかけられかけてる状態、さらにいうとスポンサーも見放しかけてる……」

「……なんとか設計図を提供させてもらって量産用に性能を低下させたP.A.C.Sを増産させているが……奴ら対策方法を見出したのか、撃破されることが多くなってしまったしな……」

「……もうどうにでもなれ☆(某AAみたい)」

「大変だ！ 正気を失ったやつが出たぞ!」

「正気を戻れ馬鹿!」(バギイ!!?!!? 「たわば!!?!!?」)

そんな混沌とした会議が繰り返されている中

(むう……もう少し引き抜きをしたいが……これ以上欲を出すすと沈む事が確定している船と運命を共にすることになりそうだしな……でも必要な人材はギリギリまで集めたい……どうしよう)

「はこれからのことを考えていた。なお運命を共にする気は無いが?????」

「なあ、????? どうにか方法はないのか?」

「え?」(ぢよつとまで、なんで俺に話をふる?)

その言葉に会議にいる?????以外の全員が?????に目を向けた。その目は

蜘蛛の糸にもすがるような悲しい目だった。

「……(はあ……しようがない脱退の準備の方はちよつとずつ進めるとしてギリギリまで足止めするのを続けることにするか)分りました……」

「「おおー」」

その言葉に会議室の空気は少しだけ軽くなり、策は^{??????}の判断で決まることになった

「ただしあんま期待しないでください……ファニーズだけでは前線を支えきれない以上せいぜい長くて半年、短くて三ヶ月くらい持たせるぐらいのヤツしか出せないですから……」

((それ普通に凄いような気がするのだが?))

人類人権団体過激派補給線近くの戦場

そこは人類人権団体最後の砦とも言っても過言ではない補給線があり、そのことはグリフィンも把握しており日々激しい戦闘が起きていた。だが、その戦線も徐々に人類人権団体過激派の方が押され始めていた。

「おい！グリフィンの戦術人形が防衛ライン突破しかけてるぞ！」

「うお!? やべあそこかなり脆くなっているところじゃねーか!?」

「P・A・C・Sを増援に出せ！俺ら『ファニーズ』は敵の前線指揮してるところを叩いてくる！」

「り、了解!!?!!?」

「くそ、敵も大体俺らの対策を考えてきてるな」

その日は何とか防衛に成功するも戦力が削れていつてるのは明白だった。

その日の夜 人類人権団体過激派 補給線防衛司令部

「損害状況は？」

「俺らは7割はまだ戦えるが、P・A・C・SやS・G・Sなどもそろそろ整備をしないとまずいし、何より本隊の方がかなりヤバイ……劣化量産型P・A・C・Sや戦車などがまたかなりの数が減ってる上に戦えるヤツがまた減ってる」

「そうか……このままだと撤退を考えないとな……大将の方に連絡は？」

「連絡はしています。撤退して逃亡の用意か、このまま増援出して時間稼ぎをするか悩んでるって聞きました」

「そうか……大将も大変だな……」

「明るいとはいえない現状で今後の行動を考えているその時だった。」

『「ファニーズ」の一人の隊員が扉を強く開けて入ってきた。』

「隊長！大将が増援を送ってくれるそうです!!？」

「なんだって？それは本当か!!？よしこれで防衛ラインを立て直すことができるな……」

その明るいニュースに彼らは沸き立った。

「ところでだが、大将はどここの部隊を増援に送ったんだ？」

「それが……(ゴニヨゴニヨ)」

「……え？」

15時間後…… 補給線近くのグリフィン前線基地

それは突然のことであった。

「なんなのアイツら!!？敵明らかにキチガイじみた動かしてるんだけど!!？」

「大変!!？司令部の壁が穴を開けられて侵入されたよ！早く支援に行かないと!!？」

その基地の司令部を防衛していた戦術人形達の視線の先には……

「オラオラ!!？作業の邪魔だ!!？邪魔するんだったら達磨にするぞオラ！」

「お前らさつきと急げ!!？急がなかったらケツにコンクリートハンマーブツ刺して体ガタガタさせせぞ！オラ！」

「「ウツス!!？」」「」

どう見ても工事現場で見るような現場作業員が集団で基地に襲撃をかけていた。

その中にはP・A・C・SやS・G・Sをつけているものがあるがご丁寧に目に入りやすいところに安全第一と文字が貼られていた。

「なんなのアイツら!!? 全員銃持っていない癖にメチャクチャ強いんだけど!!?」

「ちよつと待って? 弾幕避けてくるんだけど!!?」

「キヤアアアア!!? ☒ぶ、武装が!!?」

「うそでしょ!?! 前衛のSG部隊とSMG部隊の武装がバラバラに解体された!!?」

「指揮官から撤退命令が出ました!!? 基地を放棄して撤退です!!?」

50分後グリフィンが基地を破棄することにより戦闘は終わることになった。

占拠したグリフィン基地にて

「今日の作業終了!!? お疲れさん!!? 明日は基地改装するからな!!?」

「「ウツス!!? お疲れ様でした!!?」」

その言葉を最後に去っていく謎の作業員集団を尻目に『ファニーズ』は……

「「……なんか複雑だ」」

複雑な心境であった

「……アイツらある意味現代戦争を否定したような戦い方するからな……とりあえずこれで補給線は確保したし、部隊の補給が受けられるからいいが……」

「「なんか、納得がいかねえ」」 (真顔)

その言葉はその周辺に静かに響き渡った

その後グリフィンが戦力を立て直し、占拠された基地を取り返そうと戦力を送るも要塞化した基地に大苦戦することになるのだが別の話である。尚クルーガーが胃痛に、ヘリアントスは合コンに行けなくなるのもテンプレ通りに起こったことも伝えておく

???からかなり離れた廃墟 深夜

「うん？なんか複雑な気持ちの電波やら嘆きの電波などが遅れて来たような……気のせいかな」

そこでは『万能者』が何かの調整をしており、その何かは見た限りでは人の形をしていた。

「やつとこいつが格納システムから取り出せたからな……ちよ
うどよくアレがちかくにあるし、そろそろ視点を変えて調査しないと
いけないなと思ってたしな……本当にちようど良かったよ」

万能者は廃墟の窓から見える光景を見ながらそう呟いた。その窓
から見える光景には

クリスマスツリーの装飾のようにあつちこつちが光り輝く大都市の
姿がまるで文明の象徴として表しているかのように映っていた

「できればうまい飯や情報なども手に入ればいいな」

大都会に行く時ってなんかよくわからない感じの緊張と興奮があるよね（作者談）

大都市 検問所前

「おい、そこのお前止まれ!!?」「やべ逃ぐグハア!!?」「確保オ!!?」「身分証を」「はい」「……オイ、これ身分証じゃないぞこれ」「あつ間違えたこれだ」「……よし通っていいぞ。次は間違えないように」

そこはとても騒がしかった。ある者は何を犯したのか検問所の軍に捕まり、ある者は身分証を提示して壁の先にある大都市に進むものなどそこには様々な者たちがいた

「身分証を」「あつ、はいコレですね」「……問題ないようだな、通っていいぞ。問題を起こさないようにな」「ありがとうございます」そしてまた一人大都市の中に入っていった。

（ふう……何とか入ることができたな……ああ緊張したな……）その者の顔と容姿はその世界の者から見れば特徴がなさ過ぎて、声を出して言うとならば平凡と呼べる者であった。ただ強いて言うなら……

（ちゃんと偽造システムが機能してよかった……見た限り失敗したら一発で捕まるみたいだしな……捕まった人は気の毒だったな……）不法に入った者だった。

30分後 大都市内部

「……なかなか発展してるな……」その者は高層ビルの立ち並ぶ大都市の中でキョロキョロと周り見ながらうろついていた。その周りは様々な多くの人々で活気にあふれていた……

（発展状態からして技術などがかなり発展してるが……大都市の周りの荒廃具合と環境を見る限り衰退の一途を辿っているのは間違いないなこりゃ……お先真つ暗に程があるぞオイ）

何か考えながら……

「(つとイカンイカン、大都市に来てからすることは決めてたはずだ……それを実行に移さないとな!まずはやることは……)飯だな」

※実行してねえー!!?!?

大都会 別の場所にて……

「ハアアアア……」

そこには深くため息を吐いた人がいた。その自分は黒髪の女性で顔に大傷があるが、それでも整った顔立ちとスタイルを持っているのが見るだけでもあると言うことが分かるほどであった。

だが、今その姿は今暗いオーラに深く包まれていた……その理由は……

「指揮官……合コン失敗するのいつものことじゃない……」
「ヤメテ……ジブンデモワカッテルケドワカリタクナイノ……」
「ジゴクノミンナゴメンネ……」(OrLの体制で落ち込んでる(うわぁ……いつもにも増してネガティブに陥ってるな……)気分転換に大都市で散策しようって提案したのはちよつと間違っていたかな……)

割としようもなかった。

ちよつと立ち直るまでお待ちください……

「……ごめんね、立ち直るのに待たせちゃって……」

「いつものことだしいいよ。それより、早くどこかでご飯食べに行こうよ!!?」

「そうね……ちよつどいい時間だしあそこの喫茶店で食べようかしら?」

「いいね早速行こうよ!!?」

指揮官と呼ばれている女性「ヘレン・クローザー」は部下の「スコーパー」と一緒に喫茶店の入り口に入っていた。

「……………目標確認、プレゼントの準備セヨ」

『了解した、プレゼントの準備を開始する』

何か不穏な気配に気づかないまま……………

ちょうど昼時、ヘレンたちが入ったその店には満員近いほどの客がいた。ある者はホットサンドを食べながらテレビのニュースを見る者、昼間から酒に溺れベロンベロンに酔っ払っている者、黙々と肉料理を食べる者など様々であった。

「すみませんお客様、今相席しか空いていないのですがよろしいでしょうか？」

「いいよ、それでかまわないよー！」

「それでよろしくお願いします」

「分かりました。では案内しますね」

その席に座っていたのは

「すみません。非常に申し訳ないのですが…ただ今店内は混んでいます。別のお客様と相席は出来まずでしょうか？」

「え？あつ、いいですよ」

平凡な男だった

そしてその第一印象は

(えっ相席!? 思わずOKしちゃったけど、マジでこうゆうことあるの!?? というかこの二人……………あの時の二人じゃねーか!?? やつべ迂闊なこと言うとバレル可能性があるな……………注意して喋らないと……………しっかし……………何とか一人なんかに飢えていてそれを求めて生き急いでる感が凄まじいのは気のせいだろうか?) (これはまた特徴がないTHE・普通な顔の平凡な人だな……………)

それぞれで失礼なことを考えていた

アニメやゲームでの面倒事は本当にここぞという絶妙なタイミングでやってくる

大都市内 とある喫茶店

その席には男性一人と女性二人の3人組の客がいた

「へえ……この都市に来たのは初めてなのね……たしか……タナカさんでしたか？」

一人の女性の名ヘレン・クロザー、グリフィン戦術指揮官の一人でかなりの戦果を残している反面合コンの負け犬の一人としても有名である。

※言うのやめたげてよ!!?!!?

「はい、ちょうどよく休暇だったので行くなら行っちゃえの気持ちで何の目的なしの観光で来ましたが……あまりにも大きすぎてどこにいけばいいのか分かんなくなって、現実逃避気味になりました……」

タナカと呼ばれた男性は、自分の大都市に来た理由を話しながら遠い目になっていた。

「アー……なんか気持ちすごくわかるよおじさん」

もう一人の女性「スコープイオン」は若干同情しながら、目の前の飯を口の中に入れていた。

「お、おじさん……」

(あつ、これ地雷踏んだ)

「うん、仕方ないよね……この容姿だとおじさんに見えて仕方ないよね、ウン……アハハハ……」

(oh……気持ちはすごく分かるわ……)

(……なんか指揮官の落ち込む姿にそっくりだな……)

こんな会話と食事をしつつ、時間は経ち……
「うん？」

タナカは何か気づくように席から立ち上がった

「タナカさんどうしましたか？」

「いや今その席から会計に向かった客が荷物を忘れたみたいだからそれを届けようかと思ひまして、だからちよつと席を外しますね」

そういうとタナカはその席に隠れるように持ち主に忘れられたトランクケースを持ち、その忘れ物の持ち主のいる会計へ向かつていった。

「へえ……このご時世でまだあんな優しい人がいるもんなんだね……」

「そんな指揮官もその類だと思ふけどね……」

喫茶店から離れた場所 トラック荷台内

一見するとそのトラックただの宅配会社の車両にしか見えないが、荷台の中は様々な機器が置かれており、偽装指揮トラックとも呼べるものがそこには存在した。

ただその中は偽装としてはかなり騒がしかった。

「くそー！一般市民がプレゼントの持ち出しやがった！早くプレゼントの起動をしやがれ!!？」

「し、しかしまだ店の中に仲間が……」

「それは必要な犠牲つてヤツだ、つべこべ言わずに早く起動しろ!!？」

「は、はい!!??!!??」

※どう見てもテロリストです本当にありがとうございます

怒鳴られた部下と思われる人物はすぐさま何かのスイッチを押した。だが、その画面（監視カメラからハッキングしたもの）には特に変わった様子はなく喫茶店の客の男女する姿とその『プレゼント』を持ち主に持つて行つてゐるタナカしか映らなかつた……

「プ、プレゼント反応がありません!!??」

「な、なにい!?!？」

「プレゼントを持った一般市民が仲間の近くに到着しました!」

その画面にはこれあなたのものと『プレゼント』を見せながら尋ねるタナカの姿とそれに戸惑う彼らの仲間と思われる人の姿が映し出されていた。

「……………喫茶店の奴に電話を繋げ……………今すぐ」

「は、はい!!?」

すぐに電話は繋がった(画面には慌てて電話に出た仲間の姿が映っている)

「オイ、すぐにそのプレゼントを回収して戻ってこい、作戦は中止だ」

その一言だけで上司と思われる人は電話を切った

その後その仲間はタナカからその『プレゼント』を受け取ると礼を言つて慌てて喫茶店を出て行く様子が映っていた

「……………はあ……………あいつが戻ってきたらここから撤収してプレゼントを解体する準備をしておけ、原因を探るぞ」

「り、了解!!?」

その言葉に彼らは撤収する準備を始めた。

「……………くそ、なんであそこで起動しないんだよ!!?もう少しで依頼料でがっぽり稼げるはずだったのによ!!?!!?くそつたれ!!?」

喫茶店

「お、戻ってきた」

「持ち主かなり慌ててたわね……………もしかしたら急ぎの用で出て行くこうとしたから荷物を忘れたのかな?」

「そう見たいです。どうもかなり急ぎの用で行かないといけなかったみたいで……………おちよこちよいな人だったな……………」

その後時間は過ぎていき……………

「指揮官そろそろいい時間だからここから出ようか」

「そうね・・・それではタナカさん、相席ありがとうございます」

「いえいえこちらこそ有意義な時間をありがとうございました」

彼らは別れて行った。

「なんか変わった人だったね」

「でも相席を許可してくれる優しい人でよかったわ（顔は平凡だったけどあの心遣い・・・次もしあった時は付き合ってくれるかどうか確認する人リストに入れておこう）」

「（・・・また指揮官変なこと考えてる・・・あの人ドンマイだな・・・）」（遠い目

「？なんかロックオンされたような電波が来たような・・・気のせいだな、しかし・・・アレ爆弾だったなありや・・・持ち上げた時に分かったのは運が良かったな・・・彼女絡みの問題だったかどうかは分かんが、なんとか小細工して切り抜けられたな・・・ほんと面倒ごとが絶妙に間が悪い時に来るもんだな・・・」

その事を思いながら彼は遠い目をしていた。

「まあとりあえず情報収集しながら今晚の宿も探すとするか、多分今夜はアレをやるから結構忙しくなりそうだな」

彼は何を考えているのか、それが何を引き起こすのか、それはまだ誰にも分からない

夜って何か異常なレベルでテンションおかしくなる
よね．．．．朝になつてから冷静に考えて恥ずか
しきでテンションが下がることまでお約束だけど

大都市

???

ここでは『プレゼント』を解体するテロリストがいた。

「オイ、まだ原因分らないのか？」

「ちよつと待つてください、おつかしいな？配線、信号受信機全部異常
がないみたいなんだが．．．．つてアレこれなんだ？」

「どうした？なんかわかつたのか？」

彼が気づいたのは偶然であつた．．．．それは小さな小さなも
のだった

「．．．．えっ？なにこれ、カビか？」

「ん？．．．．なんでいつの間にこんなものがついてたんだ？」

その時その場にいたものはそれが何かを考えたが、誰も分からな
かつた。

大都市

宿泊施設

客室

その部屋にはタナカがぐったりしてベッドに横たわっていた

「ハア．．．．やつと部屋が取れたな．．．簡単には取れないだろ
うなとおもつてたがまさか3件連続で満室だったとは想定してな
かつたな．．．つと調べたがこの部屋には盗聴器やカメラの類はない
みたいだな」

タナカはそう言うのとベットから立ち上がり、荷物の中から端末のよ
うなものを取り出し、その操作を始めた。

「さてと．．．．偵察機は．．．よしバレてないな、システムがちや
んと機能してる。そして黴は．．．よし大都市全体に広がってるし、軍
事施設の最深部にも行ってるな、後は．．．．通信もできるみた
いだな、よし通信始めるか」

大都市から離れた廃墟街 廃墟高層ビル内

そこには万能者が大都市の方を見ながら飯を食べていた。

「そろそろだと思っただがな……ああくそ、俺の姿じゃあの中に入ったらかなりヤバイことになるのは分かってたが、待つのは歯痒いな本当に……」

何かに愚痴を言っていたその時

「お！通信が来たな、どれどれ……」

『こちら invader なんとか用意が出来たぞ』

「おお、できたか。よかったな……今回はあまり騒がせるマズイと思っただからこんな作戦をやってみたが……意外とやれるもんだな」

『……それって期待していないってことか？』

「すまん、そう言うわけじゃないが……最近色々運が悪かったから」

『ああ……なんとなく理解できるな』

「まあ、それはともかく実行はすぐできるか？なるべく早くされど慎重にやらないといけないからこの作戦、もしミスったりしたらここから先色々マズイことになるからな」

『大丈夫だ。チェックしたが、偵察機・『黴』・『リング』全て異常なしだった』

「分かった、なら今から『天から強盗お邪魔します作戦』実行開始だな」

『……今言うのもなんだが作戦名のネーミングセンス微妙だな』

「それは言わないお約束だ」

『それじゃ開始する』

「……今言うのもなんだが『自分』と話すのってなんか変な感じだな」

『そのことも言わないお約束だ』

大都市 上空

その空には何かが飛んでいた

「光学迷彩異常ナシ 『八方騙し』異常ナシ 『エンジェルリング』異常ナシ 機体良好」

それはまるで大都市中心部を円状に飛んで回っていた

『エンジェルリング』起動マデ5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・0・・・起動」

客室

『エンジェルリング』起動！ネットワークは・・・よし形成できてるな！『黴』の状態は・・・大都市システム全てに侵食を確認!!？準備よし！」

『よし、なら急いでそのデータとシステムなどをコピーしてこつちに送り込め!!？もたもたすると軍に感づかれる感づかれて失敗する可能性あるからな』

「了解!!？時間は・・・なんの問題もなければ10分ぐらいだなよし」

???

「隊長、俺あんたに言いたいことがあります」

「なんだ？奇遇だな俺もお前に聞きたいことがある、せーのでいつてみるか？」

「せーの・・・本当になんだこれ!!」

二人の目の前にはカビのようなものがほんの少し大きくなり、何か点滅している姿があった。

「えつなに？新種の菌？E.L.I.Dか何かこれ!!？」

「お、お、落ち着け・・・まだ慌てるような時間じゃない・・・まずはこれを解析に持っていけ!!？早く!!？」

「はっ、はい!!？」

それを聞くと部下と思われる者は急いで解析用の機材を探しにいった

「・・・冷静に考えてみれば多分ナノマシンか何かだな・・・となるらいつ付着したか・・・さてよ電子基板に付着してると

ことは・・・」

そう言うと彼は近くのパソコン本体の蓋を開けてみた。

「oh・・・」

そこにはカビのようなものが同じように基盤に侵食して点滅して
る姿があつた。

客室

「よし順調にコピーして送れてるな・・・この調子なら思ったより簡単
に済みそうだな」

何事もなく作業は進み・・・

「よし作業完了！そっちの方はどうだ？」

『ごつちは問題なくコピーした奴が送られてきてる。作戦成功だな』

「よし、なら最後の後片付けを済ませる」

『了解した』

タナカは端末を操作して何かを起動し始めた

『『エンジェルリング』問題なし、『黴』情報伝達問題なし、よし消滅プ
ロトコル起動』

???

「ええい!!? 機材探すのに時間をかけ過ぎだ!!?」

「すみません・・・今すぐ解析を始めます!!?」

部下がカビのようなものの解析を始めようとした時だ。

ナノマシンと思われるものがまるで灰になるかのように四散して
いったのだ

「・・・え？」

二人は目の前で起きたことに固まるしかなかった。

その日極一部を除いて大都市の全て機能を完全に奪われ、そのデー
タをコピーされたことを市民は愚か、軍ですら知ることはなかつ
た・・・

「作戦完全完了………そつちの方はどうだ？なんか有力な情報とかあったか？」

『おう今一部を見てるが……軍の機密情報のデータ、研究データ……お！例の汚染原因の崩壊液の細かい情報あるじゃねーか!!？お手柄だ!!？』

「よっしゃ!!？これで調査とか色々かなり進むな」

『ああ、後お前が大都会から脱出すればいいが………今日は遅いしゆっくり休んでから戻ってこい。あつ食料とか機材もできればよろしく』

「はいはい、それじゃお疲れさん」

『おう、お疲れさん』

そんなことがあろうとも夜は更けていく………何事もなかったかのように………

家に帰るまで遠足ですという言葉があるが、割とマジで真理の一つだと思う

大都市 検問所前

「これでなんとか食料、機材は揃ったな……他には……」
タナカは買い物リストを確認して、何か買い忘れていないかを調べていた。

「……よし何も忘れてはいないようだな、なからは出るだけだな」
そしてタナカは検問所に向かっていった。

「いたぞ……アルファチーム配置についたか？目標は検問所に向かつてる。準備をしておけ」

『了解』

（ありや……こりやつけられているな……この間のテロ未遂者の皆さんあたりかな？）

それを見ているものに気付きながら……

40分後……

「なんとか問題なく都市から出ることができたが……」

『うん、それはいい……どうしたんだ？急に連絡してくるって……』

タナカが今いる場所……それは

「うん、すまん追い込み漁やられて帰るの遅くなりそう」

『……オメエ何やってんの……』

大都会真横にあるのスラム街だった……

「おい、そこのお前止まれ、お前は包囲されている。今なら手荒な真似をしないでやる」

「oh……こりや結構な練度なこと……多分結構なところが首出してきたな」

「……お前に解答権はない、お前にある選択肢は俺たちに捕まっ

て俺らの雇い主に会いに行くことだけだ」

そしてタナカの周りには黒づくめの重武装の特殊部隊と思われる兵士達が取り囲んでいた……

「八方騙しも光学迷彩も今の所ちよつと起動しない駄目だし……すまん、ちよつと手荒に行つてくる」

『……仕方ないか……死人は出すなよ……ヤバイことになる予感がするからな』

それを言うと万能者は通信を切った……

「こりや手厳しい要求を……まあやってみますか」

「おい、誰と話していた？まあいいさつきも言ったがお前に選択肢は一つしかない」

「ああ、そうだな……俺にできる選択肢は一つしかないな」

そう言うのとタナカは両腕を広げ、手指を黒づくめの兵士達に向けた。

「何をしている？今お前の置かれている状態を分かっていないのか？」

「ああ、分かってるよ。それにさつきも言ったように選択肢をきめているのでね……逃げると言う選択肢をな」

それをその言葉言った瞬間、タナカの指が光り出し……タナカのいる場所とその周りに雷が落ちたように光に包まれた。

そしてその後その場所には……

「おい!? どうしたアルファチーム!? さつきの光と轟音はなんだ!?

? おい!? 聞こえてるなら返事をしろ!!?!!?」

確認の声を言う通信機と……

タナカがいた場所の周りには白目を剥いて気絶している黒づくめの兵士達がいた……

「くそ、アルファチームとの通信が途絶した!!? 総員戦闘配置!!? 奴は黒と断定し迎撃せよ!!? 多少のけがをさせても構わん、捕らえろ!!?」

そしてその一言によりヤバイ追いかけてこの始まりが始まることになった……

「くそ……やっぱ別のやつよこしてきやがったか……敵どんだけ本気なんだよ……」

「ババババツ!!???パーン!!???!!??」

「うお!??撃ってきやがった!??」

タナカは放たれた銃弾を避けながらスラム街の建物群の屋上を疾走していた。

「おい、アイツ屋上を疾走しながら銃弾を避けてるぞ……」

「映画かよ……そんなのフィクションだけであってほしかったな……」

「くそ、これじゃ包囲網を形成した意味がない、デルタチーム、奴の進行ルートを先回りして待ち伏せしろ!!?アレを導入しても構わん!!?こつちはなんとか奴を誘導する」

『了解』

「あつちこつちから撃ってきやがって……しかしこりや……確実に誘導されてるな……多分この先には……」

「止まれ!!?」

タナカの目の前には黒ずくめの兵士達が銃を構えていた。

「やっぱいたか!邪魔だアアア!!?!!?」

タナカはその黒ずくめの兵士達にさつきと同じように手指を向けると指が光り出し……そこから電撃が放たれた

「!!!「え?」!!!」

その瞬間。黒ずくめの兵士達は電撃に飲まれることになった。

「!!!「あばばばばばばば!!?」!!!」

ドサドサドサドサ

「なつ、なんだありや!??アイツ電撃を放ちやがったぞ!??」

「ハハ、映画の次はファンタジーか?勘弁してくれよ……」

「くそ、デルタチーム全滅！アレの準備は!?!?」

その後も同じようなことが起きながらも逃走劇は続き……
「(よし、八方騙しと光学迷彩のもうすぐ起動準備ができる！もう少し持てば)」

そうタナカが思いながら建物と建物の間を飛び越えようとしたその時

ガシ

「え!?!?なんか捕まっヌグオ!?!?」

その間から手が伸びてタナカの足を掴み、そのままタナカをその間に引きずり込み地面にタナカを叩きつけたのだ。

「イツテエ……くそ油断した……一体何が俺を地面に叩きつけたんだ……」

タナカのまた先には……巨大な人型機動兵器P・A・C・Sが存在し、その周りには黒ずくめの兵士達がいた。

「やつと足止めができたぞこんにやろう……」

「P・A・C・S. でやっとして……帰れたら訓練見直すかな」
黒ずくめの兵士達は愚痴を言いながらも銃をタナカに向けていた。

「(くそ……起動まであと少し……ここは時間稼ぎだか……) ひとつ聞きたいんだが、なんで俺を捕らえようとしているんだ?」

「あれほど抵抗して、理由聞くか……仕方ない一応言っておくか……時にお前、都市内でグリフィンの指揮官と相席していなかったか?」
「うん? してはいたが……それとこれと何か関係があつたのか?」

「ああ、関係大有りだ。その際忘れ物としてアタツシユケースを触つただろう。あれには『プレゼント』いわば高性能爆薬を使った爆弾を入れてたのさ……これを言えばわかるだろ? 爆破テロ見せかけたグリフィン指揮官殺害の予定だったのさ……だがその『プレゼント』は起動しなかった……なぜならその基盤に黴のようなものが付着していたからだ」

「……触りはしたがあれは忘れ物を届けるだけで……何もして

ないぞ」

「とぼけても無駄だ、黴のようなもの、おそらくナノマシンとさつき使った電撃を放つ指、これらから見てお前は相当な技術力を持っている存在として見ている。そして今度はこちらから質問だ……お前は何者だ」

その言葉にタナカは……

「何もちよつと特殊な観光者なだけだが？」

「「嘘だ!!?!!?」」

「くそ、どうやら拷問しないと聞き出せそうになさそうだな……拘束しろ」

黒ずくめの兵士達の一部がタナカに注意しながら向かおうとしたその時。

「残念だが、ついて行くつもりはない」

その言葉を発した瞬間、タナカが目の前から消えた

「「え?」」

「きつ、消えた!?!」

黒ずくめの兵士達は目の前で起こったことに戸惑いを隠せなかった。

「落ち着け!多分光学迷彩の類だ! P. A. C. Sに対策カメラが仕込んでる、パイロット周辺を探せ!」
しゅしゅん

「……オイ、パイロット? 応答しろ」

黒ずくめの兵士達が P. A. C. Sの方を振り向いたその先には……

「「!?!」」

胴体に大きな穴ができ黒煙を上げながら機能停止した P. A. C. Sが存在した。

その後テロリスト達はタナカの必死の搜索は続けられたものの見つけることはなく、打ち切られることになった。

大都会からかなり離れた場所　合流地点

そこには二つの存在がいた。一つは人間と思わしき存在ともう一つは人間から見ればかなり大きさの人型のロボットのよう存在であった。

「すまん、遅くなった」

「まあ仕方ないとは言え……ちよつと迂闊だったな」

「ああ、爆破テロに巻き込まれかけたのが完全に想定外だったからな……なんとか阻止できたと思っただが……甘かったな……ところで盗んだデータには他に何があったんだ？」

「ああ、鉄血の行動とか機密作戦、なんちゃウイルスとかだった。これから先、いやでも関わる可能性があるからな……ありがたいデータだったが……問題はなんでこれを軍が持つてるかだが……もうちよつとしらべんと分からんなこりゃ」

「……よく分からんが進展はあったってことか。なら俺はここで任務完了だな」

「おう、これからはどうする」

「そうだな……疲れたしお前に戻るとするか。それじゃお疲れさん」

「分かった、お疲れさん」

その言葉を聞いた瞬間、万能者はタナカの頭部を鷲掴みすると、タナカの皮膚が溶けて出し始め……そこには金属でできた骸骨のような存在が残った。

「人格統合・並列化完了……さてと……」

残ったそれを万能者は背中のバックパックのようなものの一部が開き、その中に突っ込むように入れた。

「今までわかったことを踏まえると……かなりきな臭いことに巻き込まれた感じがするな……まあどうこう言っても変わ

「りはしないし、やっちゃったことは仕方ないしな・・・進むしかないか」

人間って結構急所が多いけど・・・子供がそこを的確に狙ってくるのは本当に勘弁してほしいよね・・・(作者談)

F05地区 廃工場地帯

それは突然の出来事であった・・・

「クソツタレ・・・まさかこんなところで会うとはな・・・」

鉄血のハイエンドモデル『アルケミスト』は目の前の存在に会ってしまったことを愚痴っていた。その身体あっちこっち損傷があり人間的に見れば軽傷とわかるものがついていた・・・

その周りには鉄血の兵士や兵器、トラックなどが完全に破壊または無力化された物体に成り果てたものがあっちこちに転がっていた。

そしてアルケミストの目の前には・・・

「オイ、ソコノハクハツノガンタイオンナ・・・オマエカ？オマエガヤツタノカ？ヒサビサノブンメイテキシヨクジノジャマヲ」

これまたお久しぶりにブチ切れている『厄災』万能者がいた

事の発端は少し前に遡る・・・

その時万能者はF05地区廃工場の建物内で休憩を取っていた・・・「めっちゃ久しぶりに食うなインスタントラーメン・・・」

そこでは万能者がインスタントラーメンにお湯を注いでいるというちよつとシユールな光景が広がっていた

「色々な作り方があってのは知ってるが、説明通りにしつかり3分たつまで待つのもまたいいんだよな、ああ待ち遠しいな・・・」

そうこうしているうちに3分が経ち・・・

「さてそろそろだ、いただきm」

その言葉を言い終わろうとしたその時

パツシヤ!!?!!?

厄災はそれを片手で白刃どりで止めた

「やはりな・・・厄災、お前は『目』を守ったな？お前の身体は無敵とも言っているほど頑丈で身体へ攻撃は基本ノーガードだったな・・・なのにも関わらず、『目』を攻撃されそうになった途端カードをした・・・なぜだ？」（ニンマリ笑顔で

「うげ、やっぱ研究されてるか・・・」

「やはり目は急所の一つだったようだな・・・ならそこを狙わせてもらおうか」

そういうとアルケミストは大型ナイフに仕込んでる内臓式レーザーガンで厄災の目に撃ってきた。

「ぬがつ？？変わった武器だなと思ったら仕込んでやがったか」

目には当たらなかったものの虚を衝かれた攻撃に大型ナイフを離してしまう形になった。

それにより自由になったアルケミストは内臓式レーザーガンで牽制しながら厄災との距離をとった。

「うわあ・・・この手の敵はあんまり戦いたくない奴だな・・・」

バックパックの正面に付けてたアサルトライフル二丁を両手に装備しながら厄災はそう言った。

「そういうな、こんな女がダンスを一緒に踊ってくれていつてるものだ・・・嬉しいだろ？」

「戦闘狂で笑顔が怖いことになってるので、お断りしたいんだがな・・・まあこつちに借り（飯の邪魔）があるから受けるしかないがな」

「そりゃうれしい、それじゃ楽しい戦いといこうじゃないか!!？」

アルケミストのその言葉により死闘はさらに激しくなっていた。

ある時は近接格闘のぶつかり合い、またある時は己の持つ飛び道具での激しい銃撃戦など、それらが何度も何度も繰り返されたが・・・

どれも厄災には効かず、アルケミストはそれらを紙一重に避けていった……

そして短くも長い戦いに終わりが近づいていた

「なあ厄災」

「どうした？白髪の眼帯女……いや確かアルケミストだったっけか？」

その時、二人の動きは止め、対面していた。それはまるで西部劇のガンマンの決闘を彷彿とさせる光景であった。

「この戦いはとても楽しかったが、残念ながら私に限界がきているよ
うだ」

アルケミストの身体は紙一重に避けていたせいであつちこつちが傷だらけになっていた。

「……つまりいうと次の攻撃が最後ってことか」

「ああ、そうだこれで勝敗が決まるわけだ」

「……分かった。5秒後だ」

その言葉にアルケミストは満面の笑み（オリジナル笑顔）を浮かべていた。

そしてその時は静かに近づいていた……

5

4

3

2

1

0になった瞬間先に動いたのはアルケミストだった。

「これでも喰らいな!!?!!?」

そう言つてグレネードを厄災に向かって投げてきたのだ。

「撃ち落とす!!?」

厄災はサブアームに搭載しているサブマシンガンでグレネードを撃ち抜いたその時、グレネードは煙を周囲に広げて爆発した。

「スモークの方だったか!!?」

その時煙の中に紛れて近づいてきたアルケミストは左手の大型ナイフを厄災の目に向かってかなりの勢いで突いてきた。

「甘い!!?」

厄災はその攻撃を両手のアサルトライフルを捨て両手で真剣白刃どりで止めた。しかし……

「(いない!?!?)」

厄災の視界には大型ナイフの先の方に存在しているはずのアルケミストの姿がなく大型ナイフのみが存在していた。

その死角からアルケミストが右手の大型ナイフで厄災の目に向かって突いてきた。

30秒後……煙が晴れそこにあつた光景は……

「……どうやら私の完敗のようだ……」

「ああ、ギリギリだったが俺の勝ちだ……無力化させてもらおう」

厄災の目ギリギリに大型ナイフは止まっていた。そしてアルケミストの腕には……厄災のサブアームのマニピュレーターが今にも握りつぶさんと強く握っていた。

そしてアルケミストの視界に最後に映つたのは顔に目掛けてパンチをしてくる厄災の姿であった。

その後鉄血の救援部隊がその地点に来た際には、あつちこつちに傷を負い、両手両足を潰され、顔にも大きな痣ができたアルケミストが大の字で倒れていた。だが、その顔はどこか穏やかな笑顔だったという……

アルケミストとの死闘から3時間後……

その地点から離れた所にて……

「まさか積荷の中身が人類側の戦術人形だったとはな……そしてなんか怪しいと思って調べてみたら中に軍のデータにあったあの例のウィルスが潜伏してると来た………なんかこの子を偶然救った感じになつたな」

万能者はトラックの積荷にいた戦術人形「M61A2バルカン」の首のコードに自らの身体から伸ばしたコードで接続をして何かの作業をしていた……

なおバルカンの頭には大きなたんこぶができているのは余談である

※なんか急にギヤグぽくなつたなオイ

「う〜ん……解析してみたところそのまま除去はできるが………なんかこうゆうのが広がつてるとなるとむず痒い感じだな………！いいこと思いついた!!?」

万能者はそういうと何かの作業を急ピッチで始めた。

『傘』の解析データを『鎌鼬』に入れて……その『鎌鼬』をこの戦術人形にバレないように嚴重に仕込んで……起動条件の設定をして………ついでにこの人形の演算の甘い部分をバレないように改良しておこうか」

「みてろよ……きな臭いこと考えてる馬鹿野郎どもめ………俺をその事に巻き込んだ恨みをきな臭い計画ごと叩きのめすことで晴らしてやる!!?!!?」

※とりあえず関係者の皆さんこのほかものがすいません。何かやらかすようです（遠い目）

その後救援部隊がバルカンの信号を辿って来た際に見た光景は……丁寧に寝かせられたバルカンの姿のみが確認されたという………

やられてほしくないことは本当に突然で絶妙な時に起きるもの、尚大抵は身から出た錆の場合などが多い

前回の話から数時間後……

「うわあ………戦闘をおっぱじまってから結構経つが……」

万能者は近くの爆発による揺れを感じながら何かの作業をしていた。そんな彼がいる場所は……

「第2防衛ライン突破されました!!? マルドウークも全滅です!!?」

「くそ、急いで防衛ラインを再構築せよ!そこやられたらここが包囲される!!?あと援軍も要請しろ!」

「……鉄血の皆さんと人類側の皆さん張り切ってらっしゃるな……まあそのおかげでこんな火事場泥棒なことができるわけだが……」

F05地区の鉄血司令部であった

「いや……あれだけの事を言っておいてなんだが、鉄血の本拠地の場所と鉄血の総大将の正体も知らんし、きな臭いこと考えている奴らの居場所とも分かってなかったしな……その下準備と思って近く鉄血司令部のにお邪魔して情報収集をしようと思ってたが、まさか秘密の地下通路の発見やら監視カメラなどが壊れてるやらのラツキーでここまで気づかれずに目的の果たせそうだな……日頃の行いが良かったのか?」

※んなわけねーだろこの馬鹿野郎

「いや、飯が吹っ飛んでるから違うか……ここまで上手いくと帰りが怖いしな……さっきの話が本当なら包囲されかけてるみたいだし元のルートが二度使えるとは考えにくい……こりや包囲網強行突破かな?」

そんな物騒なことを考えながら作業を続ける。そして……
「こりや半分当たり半分ハズレってところか……元鉄血工造本社が分かったもの……ボスの情報でも入ってりや良かったな……これ以上欲張ろうとするのもバチが当たりそうだしな……しようが

『厄災』 当機ヲ再視認シタ模様・・・高速デ接近中

近距離火器システム起動、近接格闘スタンバイ

「ぬお!??頭部にレーザー兵器積んでるのかよ!??あつても威力は小さいなつてあぶな!??二度も捕まつてたまるか!」

近接格闘命中セズ・・・次の行動の演算処理開始・・・

演算完了

両者は再度死闘を繰り広げ、ぶつかり合う。

何はともあれそこはその死闘によって近くの敵味方関わらず全てを巻き込む地獄絵図になることはまず間違いことであつた・・・

※なおこの戦場でボカスカ被害に遭う異なるのは周りにいる人と土地の所有者です

F05地区 鉄血司令部

そこには地獄が広がっていた。

「ギャ!!?!!?」(ドガアーローン!!?!!?)

「くそまた一人吹き飛んだ!!?一発即死の流れ弾が飛びまくるって恐ろし過ぎるわ!!?」

「早く、早く撤退するんだ!!?司令部破棄してでもだ!!?」

そこではレーザーやミサイル、砲弾、瓦礫、これらの種類を数えるだけでも途方もない数のものが飛んで、彼らに無慈悲にも降り注いでいるのだ。

そして、その原因とも言えるのが……

『厄災』ノミサイル発射ヲ確認……近距離火器デノ迎撃開始!!?!!?……『厄災』未確認兵器ノ使用ノ確認……対策及び最適化ヲ開始

「くそ!!?レールガン外したか……あまり搦め手使ったことないしな……これで覚えられてしまったな……」

このコイツら(『厄災』^{万能者}と『単眼の怪物』^{サイクロプス})である

(あの手この手で攻撃しているがここまでうまくいかないって……今日はやっぱり運がなかったな……)

ここまでで彼はミサイルの雨で本体から目をそらさせている時にレールガンで攻撃する方法などの搦め手などや強行接近格闘などの手段で「単眼の怪物」に攻撃しているが全てうまくいっていないかった……ズドン!!?ズドン!!?ズドン!!?ズドン!!?

「つとあつぶな!!?」(しかも相手は多分だが俺の行動を効率良く学んでやがる……さつきも二度と同じ手に引っかけからなかったから……)

こりやジリ貧だぞ……」

その時

「うん？なんか声が聞こえる？どこからだ？」

厄災は気づいたかなり微弱ではあるが、されどかなりの速さで近づいてくる誰かの声を

「この声の位置は上？」

その声のする方向を見ようとしたその時だ

「喰らえええー！」

落ちてきた八割が血まみれの女性が大型の光学ブレードらしきものを単眼の怪物の左肩の装甲の隙間目掛けて突き刺さす光景がそこにはあった

「!!??!!??!?!?」

DANGER! DANGER! DANGER! DANGER! DANGER!
DANGER!

左肩部二大型粒子ブレード直撃!!??……原因ハ「殺戮者」ト判明!!??

その突然のことに厄災は固まり、単眼の怪物は己に起きた状況を解析するのに精一杯だった……

「抉ってぶっ壊してあげる♪一つ目小僧♪ホラホラホラホラ! さつさと壊れちやいなさい♪ヒアハハハハ！」

ギギギギ……!ゴゴゴゴゴゴ……!

「……うわぁ……」(ドン引き)

DANGER! DANGER! DANGER! DANGER! DANGER!
DANGER!

被害拡大!!??左肩内蔵格納式三連榴弾発射機ニERRORヲ

検知!!?

使用不能!!?・・・『殺戮者』へノ対処ヲ開始!!?

その光景を作り出した犯人『殺戮者』は狂った笑い声をあげながら更に単眼の怪物に追撃、刺さったレーザーブレードを抉り回し鉄の不協和音が辺りに響き渡らせた

その事に厄災はドン引き、単眼の怪物は己の危機に動こうとした。それを嘲笑うかのように更に予想外な事態が発生する

ドオオオオオオンツ!

単眼の怪物の左肩が大爆発を起こしたのだ。

「……………!?!」

「……………え?」

!!?!?!?

その大爆発に巻き込まれ『殺戮者』はどこかに吹き飛ばされていき、あたりにはその大爆発による煙が充満し見えなくなった……………

当機ノ損害状況ヲ確認……………『殺戮者』ノ攻撃ニヨリ左肩ノ内蔵格納式三連榴弾発射機ガ誘爆 ソレニヨリ左腕自体ニ深刻ナ損傷ヲ確認

左腕ノ反応速度六割減少……………中破ト断定

煙ニヨリ視界悪化ニヨリ『殺戮者』ト『厄災』ノ確認出来ズ

単眼の怪物はその時己の状態の確認をしていた。その姿は見るも無残に左肩の一部がえぐれるかのように吹き飛んでおり、中の配線などの中身が見えている状態であった。

そしてこれから続けて『厄災』と戦うか、撤退するか決めようとしたその時だ。

「……………突然の事で戸惑ったが、こりゃこの状況を作り出したさつき

の言語からしてあの血濡れサイコキラな女には感謝をしないと
な……そして怪物くんにも人の嫌がることをやったらどうな
るか分かる道德の授業を受けさせないとなあ!!?!!?」

目の前に拳を握りしめてパンチの空中で体制入ってるヤツがいた

!!?!!? 『厄災』至近距離デ確認!!? スデニ攻撃体制ニ入ッテイル
模様!!? 回h

「逃すかってんだオラア!!?」

ドゴオン!!?

そのパンチが当たった音があたりに響いた。そこには頭部に大き
な凹みができ、『目』がひび割れて、かろうじて首の皮に等しい形で繫
がっている単眼の怪物の姿があった。その目の前には『厄災』も：
頭部ニ深刻ナ損傷ガ発生……

「これで終わったと思ったか? まだ授業は終わらない……いや終わら
せない」

殺意に満ちたオーラで立っていた

その姿を見た単眼の怪物は

WARNING! WARNING! WARNING! WARNING!
G!

コレ以上『厄災』トノ戦闘ハ……『不可能』ト判断

当機ハ速ヤカニ撤退ヲ開始

逃げることを選び、すぐに飛行を開始した

「空飛んで逃げるみたいだな……逃すと思っているのか?」

それを見逃さんとばかりに厄災は接近する。しかし……

ドガアーン!!? ドガアーン!!? ドガアーン!!?

「!!? アイツ至近距離で自分の周りの周りの地面にボカスカ撃ちやがった!!
? しかも自爆を考慮せず連続で!!?」

撤退を最重要目標にした『単眼の怪物』は自滅を気にしないとばかりに自分の周りに榴弾やミサイルなどを撃ちまくったのだ

当然『厄災』はそれに近づくことはできずに……単眼の怪物の攻撃によって発生した煙が晴れた際にその姿を再確認した時には既にかなり高度と距離が離れていたのだった……

そしてその場残ったのは厄災以外には鉄血司令部があつた形跡すら分からなくなる程に焼け野原と化した大地と瓦礫と亡骸のみであつた……

「……目的は果たしてるし、生き残れてるからいいんだが……多分アイツおそろく俺との戦鬪で学んだデータを本拠地に持つていったなありや……ここから先アレみたいな奴が出てくるとなるとなんか辛くなる予感しかしないな……ハア……」

厄災は将来起こるであろうことを考え、ため息を吐くしかなかった……

爪痕は深いと後に響くというが、実際にその件は本当に多い

後
前回のペイロード、バルカン救出作戦―万能者乱入編―から数週間

某所 鉄血最重要大規模基地 戦闘シミュレーター施設

そこでは凄まじい戦闘が繰り広げられていた……………

「……………チツ」

ハイエンドモデル『アルケミスト』は目の前の『厄災』の攻撃を避けるながらチャンスを伺っていたが、猛攻が激しすぎてチャンスが回ってこないことに苛立ちを感じていた。そして……………

「……………ッしまった」

目の前にミサイルとレールガンの弾が飛んできたところで視界が真っ暗になった

「くそ……………また負けたか……………」

アルケミストは結果に愚痴っていた。だがその顔は笑顔であった『厄災』のヤツの情報が更新されたって聞いたからやってみたが……………さらに厄介になってるな……………あの時使ってなかった武装を使うところまで手が出せないとなると……………駄目だ、どうあがいても相当運が良くないとあの弾幕をくぐり抜けられん……………」

「アルケミストまたシミュレーターをやってる……………」

「確かにかなり続けてやってるな……………」

その様子をハンターとデストロイヤーは見ていた

「このままだと代理人のように倒れちゃうんじゃない……………ちよつと止めてくる!!?」

「まあ待て」

アルケミストを止めようとするデストロイヤーをハンターは静止させる

「なんで止めるの!!?」

「見ろあの笑顔を、あんな楽しそうにしている時に邪魔をしない方が得策さ……まあアレに混ざるのも手だな……ちよつと混ざつてくる。『厄災』には借りがああるからな」

「え、あ、ま、待って!!?」

その後3人がシミュレーターをかなりの時間使っている光景が確認されたのは別の話である

鉄血最重要大規模拠点

???

ケース452362 対厄災戦開始……

厄災の攻撃により部隊壊滅……厄災損害なし

結果 大敗

ケース452363 対厄災戦開始……

厄災の攻撃により部隊壊滅……厄災小破

結果 敗北

ケース452363 対厄災戦開始……

厄災の攻撃により部隊壊滅……厄災小破

結果 敗北

その「なにか」は計算を続けていた……

『単眼の怪物』で手に入った『厄災』のデータを効率的に尚且つ有効的に使い『厄災』を倒せる存在のシミュレーターでの作成、開発、実験、それらを幾度もなく繰り返しながら

ケース452363 対厄災戦開始……

『厄災』を倒す、その目標を達成するその日まで「なにか」は計算を続ける……

破棄された軍事関係の工場の廃墟 整備施設

「あででで!!??!!??やっぱ全身結構ガタがきてたか……あの怪物との戦闘がトドメになった感じだな……ここに整備ができる生きていた設備があつて助かったな……あとで装備の改装もついでにやっておくか」

万能者は生きていた設備を使って自分の体の整備をしていた……なお今その姿は装甲がなく文字通り裸の状態であることを付け加えておく

「しかし相手の俺の対策がかなり進んできてるな……このままだとまずいが……格納システムの不調をなんとかしない限り現状それなりの対策ぐらいしかできないしな……どうすればいいんだか……」
そう思ったその時、それを解決できる可能性を含んだ情報が気まぐれにつけていたラジオから流れてきたのだ。

尚それを聞いた万能者は

どんがらガツシャーン!!バキ!!ゴギ!!?

とツツコケたのはいうまでもない

1日後……

「まさか車どころか乗り物すら使わず徒歩で行けつてなるとは思わなんだ」

その道には黒いマントを来た人が歩いていた……

「念のために少なくともその辺の傭兵に紛れられるように武装はその辺に落ちてた武器を修理したものにしてもらったが……こりや戦車とかが大群で来たら終わる兵装だな……」

その人物は己の装備に愚痴を言いながら進む、その行き先は……
「まあまずは向かわないと始まらないか……H & R 社求人面接試験会場にな」

就職であつた

「そーいや、手紙とこのチップを渡せば採用は確定だつて言つてたが……どう考えても賄……うんあまり深く考えないでおこう」

賄賂も持つて行きながら

※言わなかつた意味がない!?!?

時に自分を変えることは大切である。だが限度は考えよう

タナカを送り出してそれなりに経ち・・・・・・・・

破棄された軍事関係の工場の廃墟 整備施設

「う〜〜ん・・・・・・・・マジでどうするか武装・・・・・・・・」

万能者は悩んでいた・・・・・・・・目の前の作業台には己の持つ全て武器が丁寧に置かれている。

「やつと自分の体の整備が完了したけど、次の問題はこれだから・・・・・・・・まあ現状の通常兵装が通用しない奴が出てきたし、これから先アレみたいなのがボロボロ出てくるのは間違いないから・・・・・・・・これをやつとやっておかないと痛い目に合うから・・・・・・・・とはいえ現状の武器をどうするか・・・・・・・・」

万能者はそう言いながらレーザーアサルトライフルとレーザーアサルトライフルを手にとった

「確かヴェズピドとリツパーだっけか？鉄血戦術人形の標準装備のレーザーアサルトライフルとレーザーサブマシンガン、アサルトライフルのほうは射程がそれなりにあるがそこまで近づかないと撃てない上に威力の方もかなり控えめだったからな、サブマシンガンは言わずもがな・・・・・・・・使い回しは良くて軽いのはよかったが・・・・・・・・それらの欠点を解消するためにかなり無理矢理にエネルギー動力直結して出力の問題を消して威力と射程を向上させたが・・・・・・・・これ以上の改造となるとな・・・・・・・・別の兵器を作った方がいいよなコレ、かなり限界まで弄ってるし・・・・・・・・幸いここで見つけた軍用のレーザー兵器がごろごろ転がってたしそれら使って改造するか」

そう言ってレーザーアサルトライフルとレーザーサブマシンガンを元の位置に置き直すと次はビームキャノンと改造2A42のほうを見た

「こいつらは・・・威力は問題がないがでかいから持ちさ替える時などにどうしても時間がかかってしまうのが欠点なんだよな・・・何より時と場合によって使い分けるようにしてたが・・・まどろっこしいから全部一つにまとめてみるか？他にも色々くっつけてみて」※なんかとんでもないこと言ってるやない？

「ミサイルランチャーは・・・問題はないが、レールガンがな・・・かなり無理矢理小型化したから弾道がブレとるしな・・・命中精度の向上が課題だな」

その後も武器の改造の検討をしていき徐々に構想も固まっていた。そして・・・

「最後はこいつか・・・」

その万能者の目の前には・・・それはこの世界で言い表すには「チェンソー」と言う言葉がそれに当たった。だが、それは一般的に使われるものとは非常に異なり、デカかった

「・・・現状の格納システムからなんか使えるものはないかと引張り出したが・・・『作業戦闘兼用万能動力直結大型近接兵器「universal key」・・・よりにもよって取り出せたのこれか・・・」

そう言いながら万能者は机に突っ伏した

「まあないよりましか・・・しようがないこれらをまとめた構想で兵装を一新するか・・・」

万能者はそう言いながら立ち上がると材料と武器を持ち作業設備の方に向かって行った

「そーいや・・・最近色々あったから忘れてたがアイツどうしてつかな・・・静かなのは嬉しいけどアイツの場合だと逆に不気味だな・・・」

何か嫌な事を思い出しながら

重度汚染地域 E・L・I・D 最重要防衛線

そこは人類の脅威 E・L・I・D が大量に存在し、同時に人類生存可能地域に向かつてくるのを防ぐ巨大な防衛線が張られており、ほぼ毎日のように激戦が繰り広げられていた……

だが、その日は不気味なほどに静かであった……

「マダ ダ コレデハ ヤツ ヲ タオセヌ」

その声の主「蛮族戦士」は狩った獲物の肉を喰らいながらそこにいた。

「トウソウ ガ タカマツテイル バシヨ ナラ オノレ ヲ キタ
エル コトガ デキル ト オモツタガ …… コレデハナ
…」

それは想像通りにうまくいかず肩を落としていたようだ

「ダガ オモワヌ シユウカク ガ ハイツタノモ シジツ ココ

ニ キタ ノハ ムダ デハ ナカツタ」

そう言いながらある一枚の紙を手にとった

「アノ ツワモノ ハ 「万能者」 ト ヨバレテイル ラシイナ

ドウヤラサラニ ツヨクナツテ イル ヨウダナ」

その紙に書かれている「万能者」の報告をみて蛮族戦士は笑った。
己が狩り糧にすると決めた存在が更に強くなっている事に

「アノ ツワモノ ガ ツヨクナツテ イル ノダ ナラ オノレ

モ サラ ニ キタエネバナ」

蛮族戦士はそう言いながらその場所を離れていった……

そしてその場所に残ったのは瓦礫と静寂と……

大量の E・L・I・D と正規軍兵器などの亡骸と残骸の山であつた……

その日、蛮族戦士の正規軍危険度が跳ね上がったこととその地区の E・L・I・D が激減したことが同時に確認された……

「oh・・・アイツの話をしたせいかな、寒気がしたよ・・・絶対
アイツ更に強くなって俺を殺る気満々だな・・・ハア・・・さつ
さと兵装の強化と開発を進めないとな・・・」

何はともあれ少しずつ彼らは成長する・・・誰が止めようとも叫
ぼうともそれは止まらない・・・

※要するに更にあかん事になる上に手が付けられなくなるって事
ですねわかります（白目

4日後・・・

ニュースです。○月×日に△△地区でG&Kと鉄血との戦闘の最中に起きたビル集団切断倒壊事件について原因は未だにわかっていないもののその倒壊によってG&Kと鉄血双方にかなりの被害が出ているようです。

詳細についてはープツンー

「うん何も聞かなかった事にしよう」

万能者はそう言いつつラジオの電源を切った。

「さてと・・・ここまで逃g・・・何も考えずにやってきたわけだが・・・どこだここ」

そう言いながら自分の周りの景色を見回していた・・・それは木、木、木と見渡す限り木に囲まれており、それは森の中にあることを表していた。日がおりてきており、空はかなり夕焼けに染まっていた。

15分後・・・

「うわ・・・偵察機から見てもいつの間になんかに森の奥深くにきてたんだが・・・辺り一面森だなこりや・・・」

端末に映る光景を見て自分の愚かさに少し嘆いていたが

「うん？なんかここになんかあるみたいだな・・・えっと拡大拡大・・・ブツ!!?!?」

何かを見つけたようで拡大して確認した結果そこには・・・

「・・・色々突っ込みたいところはあるが・・・一つに絞ろう・・・なんでこんなところで寝てるんだよ!!?」

木の側で何事も気にせずにG11を抱き枕代わりで爆睡している少女の姿があった

しばらくして・・・

「ハア・・・なんか前会った時もなんかこんな感じだったな・・・こんな森の中で気持ち良さそうに眠りやがって」

その少女を見て呆れながら万能者はその近くで野営の準備をして

いた。辺りはすっかり暗くなっていた。

「・・・まあこの嬢ちゃんを見た以上ほっとけない俺も俺だな・・・
えっと食料はどの辺に入れたっけな？」

その後も食事を済ませたり、ラジオを聴いてして時間を過ごしていた・・・尚少女はその間全く起きる気配がないことも付け加えておく

万能者の野営地点からそれなりに離れたところ

「ちよつとアレどうするのよ・・・G11を見つけたのはいいけど、
近くになんでヤツがいるのよ!?!?」

「アハハ・・・これはかなりまずいかな? 45姉どうする?」

「どうするもこうするも待つしかないわね・・・隙があればすぐに奪還をしたいのだけど・・・」

その様子を見ている者たちがいた・・・その影は3つあり、どうやら少女が目的のようだ

「しっかし、ぐっすりと寝てるねG11・・・」

「・・・アイツ連れ戻したら仕置きが必要ね」

「ええ、それに関しては同感ね」

「しかし・・・『万能者』・・・ご飯美味しそうに食べてるね・・・
そういえばわたし達も飯食べてないね・・・」

「・・・やめなさいUMP45・・・それを聞いたらなんか悲しくなるから・・・」

・・・どうやら何も食べておらず、食料もないようで、3人とも一斉にお腹が鳴り出した

「・・・」

「・・・G11(アイツ)戻ったら仕置きね」

※八つ当たりじゃねーか!!?

20分後・・・・・・・・

それは3人からすれば永遠に等しき拷問のような時間であった。

あるものはぐうぐう鳴るお腹にしよんぼりとした表情で待機してもの、またあるものはプライドが許さないのか無表情で我慢をして万能者の監視をしているがぐうぐう鳴るお腹をこまかせていないもの、またあるものはその辺の木をサンドバッグ代わりに八つ当たりをしてごまかしているもの・・・・・・様々であった

状況が動いたのはその時だ

「あつG11が起きた」

その一言で離れていた二人はすぐさま監視に戻った

「アイツ・・・・呑気にあくびをしやがって・・・・・・」

「まあまあ、そのぐらいに・・・・って、あつ万能者がなんか落ち込んでいる」

その時の万能者はorzとテンプレ通りの落ち込み方をしていた。

「・・・・G11何を万能者に言ったのかしら・・・・・・ってあつちもお腹を空かせているみたいね・・・・うん？万能者がなんかバツクパツクらしきものから何か取り出そうとしてる？」

落ち込みから復活したのか万能者は何かを4つ取り出すと少女にその何かを選ばせていた

「まさかアイツ（G11）・・・・」

その予想は当たったのか、万能者は少女が選んだ何かにお湯を注ぎ始めたのだ・・・・皆さんはお分かりだろうか、その何かはカップ麺である・・・・

「・・・・アイツ（G11）お仕置き確定ね・・・・」

その姿を見て2人は黒いオーラを出し始めていたが・・・

「ま、まあまあ2人とも落ち着いて・・・・あれ？でも万能者はなんでカップ麺4つも取り出したんだろう？」

「・・・・！！？！？」

1人がなだめようとした時に出た言葉で何かがおかしいと気づい

たのだ。その時

通信機に着信が入ったのだ……それも発信元不明の着信が……

「「「……」」」

更に警戒が深まる中……3人のリーダーダ格がその通信に出た……

「……こちらUMP45よ……」

その通信に答えたのは……

『……あの……この子の保護者達でしょうか？自分が凄まじく怪しいものとは分かっているんだが、こうも警戒されて来ないとは思ってもなくて、それでも待ってたんだが……この嬢ちゃん起きたもんだから、さすがこれ以上待つのもあかんと思ったので通信したんだが……こつちに来て合流しませんか？あつカップ麺を準備してますんで……』

その言葉に3人になんとも言えない空気が広がったのは言うまでもなかった……

※人と会話する際は当たり前ですが本当にいろいろ注意しましょう

森林地帯 夜

日も完全に落ちすっかり暗くなっている中、その森の中にポツンと光が灯っている場所があり、そこには5つの存在がいた・・・

あるものは周囲の様子が気になりながらもカップ麺が出来上がるのを待つもの、あるものは目の前の存在に警戒心MAXの状態で睨むもの、またあるものは周りの様子を気にせず先に完成したカップ麺をズルズルと啜っているもの、その様子を見ているものなど様々であった。

「まあ、これでお嬢ちゃん・・・えつと名前は確かG11だったかな？保護者というか仲間が見つかったから問題はこれで解決だな」

「・・・（解決だな、じゃないわよ!??!）」

そう心の中で叫んでいる2人、416とUMP45はこの状況に警戒心MAXで戸惑うしかなかった

「こっちははぐれたG11を探していたらあの万能者と遭遇したと思ったら、なんでこんな感じになっているのよ!??!?どうするのよUMP45」

「想定外過ぎて私にも分からないわよ・・・でもこれはある意味チャンスかもしれないわ・・・」

ヒソヒソと話し合っていると

「UMP45さんと416さん話し合っているのはいいけど、カップ麺そろそろできてることだと思っただが・・・UMP9さんも食べ始めてるし、食べたかどうか？麺のびる前に」

「416も45姉も食べようよ！これになんの細工もないようだし!!」

「・・・やっぱ不審存在に渡される飯は信用ないのか・・・」

（当たり前前的事とはいえ落ち込んでる

「おじさん見るからに怪しい人だからね」（カップ麺啜りながら

「……それはあつてるけど言わないでくれ」（さらに落ち込みながら

その会話によってひとまず中断されることになった

「（……食べよう……）」

その場のノリについていけない感じに若干思考放棄気味になりながら

尚食事中に万能者にとつては他愛のない会話をしていたが、その会話の中にはさりげなくヤバイこと（主にE・L・I・D関連）が混ぜてたりしていた為に416とUMP45がスープを吹き出したり、頭を痛めたりしたのだが余談である……

しばらくして……食事が終わる頃に万能者は言った

「ところでだがこれからお前らどうするんだ？お嬢ちゃんとも再会できたし、勘だがお前ら多分結構なところの特殊部隊って感じがするし、なんかで任務中って感じみたいだしな……」

爆弾発言を

「!!?!?!?」

その言葉にUMP45と416が身構えて武器を手を取ろうとした

「オイオイ、俺は何もされない限り戦うつもりはないし、何もしないからな。まあ強いて言うならお嬢ちゃんの保護というかお嬢ちゃんの仲間探しが目的でここで待機してただけだしな」

「（……）」

「へえ〜そうなんだ！G11を守ってくれてありがとうね！」

「とりあえずおじさんありがと」

「おう、どういたしまして……でどうするんだい？お二人さん、一応言っておくが俺はついて来るつもりはないからな、理由は言えないが色々やることあるしな」

その言葉にUMP45はしばらく考えたのちに出した答えは……
「上にごの事を伝えはするけど、あなたに何もしないで帰還する
わ……」

問題放棄であった……その顔にはあまりにも悲しいほどに無気
力に色々と諦めた表情であった……

それを見て416は同情していたことは余談である

※馬鹿が本当すいませんでした……

森林地帯 上空 ヘリ内 早朝

「そうか……」苦労だった404小隊」

通信端末のホログラムからでも疲れていると分かるほど疲労した
様子のG&K社社長のクルーガーは404小隊の任務の内容と万能
者の事を聞きさらに疲れた表情を出し、胃を痛めながらその言葉を
言った

「ええ……今回の任務に関しては非常に疲れたわ……しばらく休
暇を申請したいほどにね……」

「……そのことに関して出来るかわからないが考えてみよう……
次の任務に備えてゆっくり休むといい」

その一言で通信端末からクルーガーの姿は消えた

「45姉！万能者って変わってるけどいい人だったね」

「……ええそうわね……私としては二度と会いたくないけど……」

(遠い目)

「そのことに関して私も同意だわ……」(遠い目)

「zzzz……」

「……寝るな!!?」(ドゴオ!!?!!?)

「ピイツ……」

騒がしくもへりはその乗客を乗せ、飛んでいった……

後日そのもたらされた情報によって正規軍とグリフィンがてんや
わんやの大騒ぎになるのは別の話である

尚G11の頭にはおそらく後でお仕置きとして叩かれたであろう
デカイたんこぶが出来上がっていたことも付け加えておく……

「ねえ45姉?」

「どうしたの？？」

「万能者って家族に考えてみたらお兄さん」

「やめて」

「おお、アイツらあのへりに乗ってるのかな？」

へりが飛んでいく様子を木々の隙間から万能者は見ていた。

「しかし……あの嬢ちゃんも含めてだがその仲間なんか一癖やら色々ありそうな感じだったな……次会うときは敵対したくないな……」

そういいながら今日も万能者は歩く、どこかの誰かの胃か頭、または両方を痛めさせることをしながら……

※（今回の犠牲者とのちに増える犠牲者に十字架きつたり、合掌したりしている）

大きいことをやるなら小さいことからコツコツと

G & K 社本社 社長室

「ハア……」

G & K 社社長のクルーガーは非常に憂鬱な気分のため息を吐きながら404小隊が手に入れた情報の詳細を見ていた。

「……人類人権団体の情報だけ手に入れる予定だったのだが、万能者に遭遇したという情報のせいで更なる仕事が増えるとはな……万能者の情報は目を通したからいいとして……ここのところ人類人権団体に武装の強化を促している裏の存在がいると思って調べていたが……」

クルーガーはとある男の顔写真を見ながらこう言った

「おそらくこの男が人類人権団体過激派の武装を強化させている元凶だろうな」

その顔写真には40代の白髪が目立つ赤みがかかった茶髪の男性の顔が写っていた

人類人権団体過激派本部 会議室

「またもやグリフィンへの反撃行動はことごとく失敗……更には資金源の一つの新しい取引先と共に同志の消息が途絶えてるし、挙げ句の果てには例のグリフィンの特殊部隊に情報が盗られてる……最悪なことにそれが同志の個人情報や我々の幹部の情報を一部と……」

「その新しい取引先……なんか黒い噂があったりしたが金回りが良かったのにな……なんか悪魔って言うE・L・I・Dみたいな生物兵器？だっけか？それを見たときはゾツとしたけどな」

「でもうまく使えればかなり有効な手が考えられそうだったんだがな……」

その会議室は今回も空気が重かった。理由は言うまでもなく戦況の悪化である……

その中で一人その話を聞きながら机に突っ伏しているものがい

た・・・

「(いや知らないうちに何勝手に変な資金源作ってるの!?!?しかも悪魔って・・・どう考えてもその取引先絶対核地雷源じゃねーか!!?更には個人情報流出っておま・・・何してんの!?!?)」

そう心の中で突っ込んでいたのは???であつた・・・

「(せっかくあれだけやったのにそのアドバンテージを完璧に利用できてないし、更には変な資金源作り始めて失敗するわ、挙げ句の果てにはアドバンテージが消失するって・・・こっちは時間稼いでなんとか目的は果たして脱出経路の用意はできたからいいけど・・・泣いていいかな?)」

そう思っていると

「あのう・・・???さん?」

「・・・?ん?」

その名を呼ばれ突っ伏していた状態から顔を上げてみるとそこには何かを懇願する目で見ている幹部達がいた・・・そして

「二二「すいませんがまたお願いします・・・」三三」

幹部全員が床に土下座して懇願してきたのだ

「・・・アンタラ俺を22世紀のネコ型ロボットみたいな扱いをするんじゃないよ!!」

とは言いつつも色々な対策を練っていき、それはまた人類人権団体の戦況を多少よくして行くことになるが、とりあえずは数時間後に会議は無事に終了した。

さらに数時間後・・・

???

「ハア・・・またいらないお節介をする羽目になったな・・・」
「は恨み言を言っていた。」

「ああ、これで準備ができるからいいんだけど・・・個人情報が取られたのは痛いな・・・その中にはどうも俺の顔写真が入ってたみたいだしな・・・こりや顔変える必要考えた方がいいな・・・」

そう言いながらとある書類を取り出して目を通した

「・・・で、こつちの方も目に通しておかないとな、何々・・・おお、『フロンティア計画』も結構進んでるな・・・低コスト放射能除去方法も出来上がってきてるし、E・L・I・D除去に光が見えてきてるみたいだな・・・」

そしてとある一文を見て少し困った表情を顔に出し、ため息をついた

「ありや「船」はまだ開発が難航してるか・・・そりや仕方ない・・・前代未聞の大事業だからな・・・こればかりは隠しながらやるとかなり時間がかかるのも当たり前か・・・他にも鉄血の大将とか正規軍の怪しいところとかBLACK WATCHとか『万能者』とかいう存在など色々問題が山積みなのも問題だな・・・だがこう言うことをやっておかないとこんな状態の世界で俺ら『人』は「上」を見ずに「下」ばかりを見るだろうしな・・・無理矢理でも上を見させないとな・・・まあ俺のような馬鹿が最後に行くのは地獄で確定だろうし、ここまでやったんだ。ついてきた奴らのためにもやらんな
た???????

・・・

その書類についている写真には・・・

『何か巨大な船のようなもの』が建造されている様子が映し出されていた

パンドラの箱って作品によってだけ開けちゃダメとか開けないといけないとか書かれていてどつちなんだよと思う時がある

正規軍本部 会議室

そこでは会議室にいる全員が深刻な表情で話し合っていた

「??? 区画の重度汚染地域に配備されていた大隊が『蛮族戦士』によってE.L.I.Dもろとも壊滅したって・・・損害と利益があまりにも噛み合わなさすぎる・・・」

「確かあそこにおいてた戦力って主力部隊の一部だったよな・・・それは手痛すぎる損害だな・・・」

「最近では虎の子の特殊部隊が半壊状態と風の噂で聞いたが・・・」
「それは本当らしい・・・ああ、胃が痛い・・・」

「・・・万能者によるあの浮遊要塞の調査部隊の損失もまだ響いているって言うのにな・・・」(遠い目で

どれもこれも正規軍にとつてかなりの被害を負った話ばかりであった。話が進むにつれ、会議室の雰囲気が重くなっていく中、ある一言がそれを変えた。

「・・・なあ、どれもこれもよくよく考えたら『万能者』が関わっているよな?それなんとか抑えられたらある程度の事態が収束しないかな?かなり危険なことな上に全ては無理とは思いますが・・・あれ?皆どうしたんだ」

「二二」そ、それだああああ!!?!!?!!?」

その一言で会議は動きだすことになった。

数時間後・・・

「というわけのだが、様々な勢力に協力を仰いで『万能者』鹵獲及び撃破作戦を水面下での進行をすることを決めた。」

その言葉に会議室は少し明るい雰囲気になった。

「……真剣に話し合って決めたのは分かってるがかなり博打的な……今振り返って考えてみれば」

「言うな……最近皆『万能者』が引き起こした数々の被害でストレスが溜まってそのストレスの捌け口が欲しかったんだろう……」
「でもまあ、これで色々と問題が片付けられたら万々歳だな……その作戦がうまくいけばな……」

「まあ、失敗しても情報を引き出せるように立ち回れるような対策も取ればいいことだしな」

何はともあれ賽は投げられることになった……それが悲劇になるか喜劇になるのかはその時点では誰にも分からなかった……

一方その標的である『万能者』は……

「うーん……なんか近日中になんかやばいことが起こる予感があるんだが……気のせいかな？」

※メタ発言すんなよ!?!?

メタ発言しながら装備の整備を行っていた……

「にしても……一応詰むことが無いように色々システムを復旧させて使えるようにしたが……一部基本的に使いたく無いんだよな……これ使うと色々やばいことになるからな……割とマジで」

※何か不穏な発言もしてる!?!?

……やっぱり悲劇かもしれない……

※オイ解説!?!?

秘密の話って本当にどこから漏れるか分からない
……

前回の会議から数週間後……

正規軍本部 会議室

「万能者鹵獲作戦についてだが、準備ができて来てるな」

「えつと何々？……BLACK WATCH？かなりなところが協力して来たな？他にもI.O.P社やH&R社などが協力してくれるみたいだな……H&R社に関してはあまり知らないが……誰か知ってるか？」

「最近できた企業だったかな？なんでもかなり強力な兵器を生産販売を行っているらしい。あと確か社長自ら体当たりに近い方で現地販売を行っているとも聞いたが……」

「……なんか大変だな……」

「まあ、どこも色々裏があるだろうが……なにもされなければいいが……一応念の為監視放っておくか」

「……なんか携帯核兵器の名が書いてように見えたけど見なかったことにしよう」

「それは流石にまずいから使用禁止だが状況次第ではこつちから連絡して許可するを伝えておいてくれ……もちろんこつちからの許可の連絡なしでの使用や不正な方法で連絡を誤認させての使用などをした場合、色々追求めるがな」

「正気か！？……と言いたいがあいつなら普通に耐えそうだよな……」

「……それが想像できるのが怖い」

「ちくわ大明神」

「誰だ今の」

その日会議室ではその作戦の準備の最終段階の話し合いがなされていた。その話し合いの様子を聞く限り着実に進んでいるよう

あった。だが……

「あとは万能者が通るルートを特定すれば大丈夫だな!!?」

誰かが言ったその一言によってその会議室の空気が凍りついたかのように話が止まった

(（(そ、そうだったああああ!!?!!?)）)

誰もが抜け落ちていたのだ。万能者が決まったルートを通るはずがないことを、そして大体は予想外のルートを通ることを

「そうだったあいつ重度汚染地区とか普通は通れないところを普通に通れるんだった!!?」

「これじゃ居場所は分かっても戦力を分散せざる得なくなる……か
といって戦力を分散すると奴に歯が立たなくなる可能性が高くなる……」

「特殊兵装を装備させた部隊が捕獲の要っていうのに……これでは
な……」

その後結果的に言えば、万能者の行動次第でその後作戦場所と一応
の予測ルートを決めるといふ形になった……

また余談ではあるが万能者の居場所は現在正規軍の特殊部隊によ
る24時間ブラック偵察（通信機傍受防止などの対策も最大限）によ
る方法で分かっていることを伝えておく

所変わって……

????

その空間は何か電子的、言わば電脳的な空間が存在していた……
『そうか……やっぱ軍隊がそうゆうこと考えてたの……最近練度
がそれなりに高いなんかうろちよろしてこっち見てるなどは思っ
たが……まあ俺ほどの不安材料かつ魅力的な技術の塊はいないだろ
うな……そりゃ……』

『ごつちに保険送ってて正解だったな、さらにいうとうちの社長もかなり命削って頑張ってたからな・・・』

『・・・今度なんかお見舞いになんか送っておこうかな・・・・・・・・・・とりあえずそつちにありがとうと了解って伝えとってくれ』

『分かった』

その空間で白いナニカが二つほど何かを話し合っていた。

『それじゃそろそろ』エンジェルリング』閉じるからな、ああ忘れてた。社長の方にBLACK WATCHに気をつけてって付け加えてくれ、おそらく色々やってくる可能性あるからな』

『分かった、それじゃな』

その言葉と同時にその空間は消え、家具だったものなどの残骸が散乱している廃墟の中の光景がそこには広がっていた。そしてそこには・・・・・・・・

(さてと・・・・・・・・どうやらその作戦はなんか例のきな臭いことを考えてる連中が混ざってるみたいだったな、ならお望み通りその罠にあえてハマってから腑を食い破る方が思い知らせやれるようだしな・・・・まあそんなことはどうだっていい・・・・)

(何より・・・・BLACK WATCHに道徳の『ど』から『く』の全てを身に染みこませることが出来そうだな)

黒いオーラで笑っている万能者が存在した

尚、遠くから偵察していた正規軍の特殊部隊は建物の中にいる為に見えないはずの万能者から出てる黒いオーラを感じめちやくちやビビっていた模様・・・・・・・・

数日後・・・・・・・・

正規軍本部 司令室

「むっ・緑茶なら茶柱が立っているぞ？今日はなにかいいことがあるのかな？」

その司令室では正規軍指揮官は緑茶に立っている茶柱を見てささやかな幸せを感じていた

その時

バアン!!??!!??

「た、大変です!?!?て、偵察隊から連絡があつて……万能者が予測ルート付近を通つて来ています!!?!?!!?!?」

「な、なに!?!?こ、こりゃ千載一遇のチャンスか!?!?」

ドアの開く大きな音とともに入ってきたその報告に司令室は騒然となった、あまりにも希望的予測過ぎるルートを万能者はその近くを沿つて行くような感じで進んできたのだ

「直ちに協力してくれる勢力と主力部隊、特殊兵装部隊、それと上に連絡しろ! 『万能者』が我々のテーブルに乗りに来たとな!!?!?!!?!?」
「り、了解!!?!?」

何はともあれ作戦は動き出す……それはどのような過程を辿り、どのような結末に辿り着き、どのような結果をもたらすのか……それは誰も分からない……

ちなみに……立ってた茶柱については……
バタン

ドアの開く音とその報告と同時に倒れた(尚誰も気付かず

※……(色々察して十字架を切ったり、合掌したりしている

とりあえず始めはきちんと説明をしないと何をすればいいのか本当に分からないよね……

これより本作戦『万能者鹵獲・討伐作戦』についての概要を説明する

今回我々の目標である存在『万能者』が????地区の破棄された都市に向かっていることが確認された。

この都市は我々が『万能者』が通るとして予測していたルートの中で襲撃が効果的として選んでいた襲撃予定地点だ。

これは我々にとつてこれまたとない絶好のチャンスであり、これを逃せば次にそのチャンスがいつ来るか分からない

だが、『万能者』は今まで我々と鉄血、E・L・I・D、その全てに多大の被害を出していることから凄まじい戦闘力と未知の技術などを持っていることがわかっている。生半可な戦力では捕獲どころか歯すら立たないである事が予測されている

その為我々正規軍は主力部隊の一部と万能者を捕獲するための兵装を装備した部隊を用意したわけだが、これでも不安材料が多いことから今回の作戦の参加を募集した。

君たち協力者の任務は主力部隊と共に『万能者』への強襲及び『万能者』その破棄された都市の広場である捕獲地点におびき出してもらいたい。その地点の周辺には先ほど言った特殊兵装部隊が潜伏し待ち伏せさせている。特殊兵装については伏せておくが対万能者用に調整した捕獲用の兵器であるだけ言っておく

この作戦がうまくいけば我々人類にとって将来の悩みの種を一つ

紡いだことになり、さらにその技術は人類にとってとてつもない恩恵をもたらすのであるだろう

だが、万が一失敗した場合は各自で撤退をしてもらうことになる。それは地獄すら生温いほどの想像を絶する撤退戦になるだろう……その為今回の報酬は、君たちの危険手当も含んでいる。その事を知っててもらいたい。

では諸君に健闘を祈る!!?!!?

地区 破棄された都市 広場からかなり離れた地点
ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!?!!?

ドッガーーン!!?!!?

ドーン!!?ドーン!!?ドーン!!?

ガラガラ ガツシャーーン!!?

そこでは銃声、砲撃音、爆発音、誰かの悲痛な叫び、建物が崩れる音などが混じり合って歪な狂想曲を奏でられていた

「くそ、やはり一筋縄ではないかないか……」

「た、隊長前衛のハイドラ部隊がふ、吹き飛びました……そ、それも一機残らず粉々に……」

「前衛の戦術人形部隊も壊滅!!?被害更に増えていきます!!?!!?」
「うわ!!?ヤツの弾幕の流れ弾がこっちに飛んできた!!?って持ってた銃がめちやくちや変形してる!!?」

「隊長増援はまだですか!!?これじゃ持ちませんよ!!?」

その中で正規軍はただひたすらひどくなっていく被害にある者は苦しい顔、ある者は青い顔をせざるえなかった……その被害を出した元凶の存在『万能者』は……

「(やっぱ)ここを手を出してきたか・・・多分これは先鋒部隊か何かの類だな・・・おそらくここから増援が来るな・・・) まあ、それはいいか・・・それよりも」

「いきなり襲ってくるとはいいい度胸だ、覚悟もあつて感心するな・・・ならやられる覚悟もあるつてことだよな?」

嬉々としながらミサイルやレーザー、実弾などを敵対対象に正確に撃ちまくっていた・・・

※とりあえずこんな感じですがコラボを開始します(遠い目)

何かに集中すると何かを忘れてしまおうってことある
よね……

地区 破棄された都市 激戦区

ドガアーローン!!?

ドガアーローン!!?

ここでは全てを破壊する厄災が正規軍の先鋒部隊と追加の部隊に
容赦なく襲い掛かっていた。それもかなりの速度かつ徹底的に破壊
すると言わんばかりに……

「くそ、これ以上は持たない!!?」

「前に出た機甲部隊完全に壊滅してますしね……これ以上はあま
りにも危険過ぎますし……どうします?」

「どうかどんだけ規格外なんだよアイツ……ウチの人型機動兵器
を素手で持ち上げたと思ったら力尽くで上半身と下半身を真つ二つ
に引き裂くつて……しかもその残骸をぶん投げて戦術人形の部
隊をボーリングのピンみたいになぎ倒すし……マジでなんなのアイ
ツ……」

「……あそこにいたのが自分でなく無人自動化した兵器のみであつ
た事が良かったって今日心から思ったよ……」(真顔)

正規軍の指揮部隊は目的どころか戦況が不利になっていく状態に
どう対処すればいいか悩んでいたその時

「隊長朗報です!!? BLACK WATCHなどの増援部隊がもうす
ぐ到着する模様!!? 戦車隊も到着次第支援砲撃を開始する予定みた
いです!!?」

地獄に仏にでもあったかのような朗報が届いたのだ

「なに!!?それは本当か!!?なら我々先鋒部隊は損害が酷くこれ以上
の戦闘は不可能と判断し、撤退を開始するって通信を返しておいてく
れ!!?」

「り、了解です!!?」

「よし、ならお前ら急いで撤退するぞ!!?」

「了解!!?」

その後部隊は10分で戦線を離脱し、後にその部隊の万能者との交戦情報は貴重な資料として重宝されることになるのだが別の話である

20分後・・・

「うくん・・・かなり叩いたせいこの辺静かになったな・・・」

万能者は静かになった周囲（正規軍の兵器の残骸が散らばっている死屍累々な状態）の様子を見ながらそう言った。尚万能者の状態はかすり傷はあれど無傷といっても過言ではない状態であった

（まあ、多分これは援軍が来るからの撤退なんだろうな・・・電子戦システムから少し盗み聞きしたが・・・やつとアイツらが来るみたいだな）

そう思いながら万能者は笑みを浮かべていた。

ドガアーーーーン!!?

ドガアーーーーン!!?

ドガアーーーーン!!?

「砲撃！ってことは増援が来たってことは・・・早速噂をすれば奴等が来たな!!?なら偵察機から情報確認しないとな」

次々と砲撃を避けながら万能者は偵察機からの映像を見ようとしたその時、

ヒューーーーーーーーー.....

「うん?なんかデカイのが落ちてきてるのか?」

万能者が見上げて見たのは.....かなりの速度で落ちてきている爆弾のようなものだった

「え」

その一言を言った瞬間にその物体は万能者から近い場所に落ち

ズドオーローン!!??!!??

その質量と落ちてきた速度から生み出される破壊力をその周囲にももたらすことになった。それは様々な勢力に平等に被害与えることを意味し、当然それは万能者にも言えることで

「うおう!!??おつとととつと!!??うわ危な!!??」

土煙が立ち込め衝撃が原因で足場が歪んでいる状態に建物から崩れてきた瓦礫が襲い掛かった。それをなんとか避けきつた頃に土煙が晴れ、

「くそ、一体何が落ちてきた……」

万能者がその巨大な落下物が落ちた場所を向き見た先には、

万能者より大きい人型の機動兵器がいた

それを見た万能者は

(あ、『支援』すっかり忘れてた……)

何か忘れていたことを思い出して、少し固まっていた。

「……まあ、とりあえず敵?って事で考えていいのか?」

その言葉を答えるかのようにその人型機動兵器は手に持っていた何かドリルのようなものがついた槍の先端を万能者に向け敵対的姿勢をとった

「……全く今日は道德の授業のお客様が本当に多い日だこんちくしょう!!??」

狂乱の戦いはまだまだ始まったばかり……

乱入つてロマンがあるけど時と場合を考えないといえ
らいことになる

地区 破棄された都市 B L A C K W A T C H 戦車隊待
機地点

そこでは地獄絵図の光景が広がっていた……

「この野郎!!? さっきの突進ガチで痛かったじゃねーか!!?」

「……!!?!!?」

ドゴオン!!? ガツシャーーン!!?

何故なら万能者と突撃者が死闘を繰り広げており、その死闘にB L
A C K W A T C H の戦車隊などが巻き込まれているからだ

ガシツ!!?

「オラア!!?!!? 戦車つてのは兵器だけじゃね……鈍器や飛び道
具にもなるんだよ!!? ソオイ!!?」

ブウン!!?

ドガツシャン!!? チュドローン!!?

さらにいえば敵の戦車を素手で持ち上げそれでそのまま鈍器のよ
うにぶん殴る、ぶん投げてたりしているのだ。その為見る見るうちに
その数を減らしていき、そして4分も経たないうちに全滅した……

(…… B L A C K W A T C H の戦車全滅を確認……空に
大砲積んだ攻撃機1、随伴機と思われる戦闘機2、……ここから分
かる限りではこんな感じか……まあまた空の奴が支援砲撃加え
てきたら撃ち落とすとして、あの時周りにいた奴らが何をしてくるか
わからん……注意しておかないとな……ただ少しだけだが本
当にスッキリしたな)

多少の私怨が混ざりつつも万能者は突撃者と戦いの最中に周りの
確認しながら状況の把握をし、次の行動を考えていた……その時

「うん？……どちら様だ？」

「……？」

その二人の前に刀を持った黒髪の少女でてきたのだ

(刀に拳銃……うわあ……普通ならダメな装備だが、勘で分かる……あかん方に強い類の奴だこれ)

万能者はすぐに気づいた、これはかなりの強敵だと

「どうも、ちよつと確認の為に横槍を入りに来ました」

その黒髪の少女は警戒している万能者と突撃者の二人に頭を下げた

そして拳銃を抜き、それを捨ててアサルターの前に来て

「少し交代して下さい、本心を言えば貴方と戦いたかったのですが……次回に取っておきます」

黒髪の少女はアサルターの返答を待たずに万能者を見て、

持っていた刀……『黒桜』を抜いた

「どんなに強くても……」

2人からは一瞬黒髪の少女が消えた様に見えた

万能者が反応した時には少女は万能者の目の前におり……

気づけばレーザーアサルトライフル二丁と『D・B・R』、レールガンが切り落とされたのだ、なお装甲も切られたようだがその硬さゆえに傷しかついていなかった

「……！！！！」(いつ!? まじか!? 対応感知のやつそれなりに上の方に調整やつてたはずなんだが!??)

「戦い方を知らなければ素人同然です……貴方が私を殺すのが速いか私が満足出来るか速いか……来なさい、伊達に幹部直属部隊の隊長はやっていますよ?」

その言葉に万能者は……
カチン

「……………」

無言でそれを気にしないかのようにその辺に落ちた切り落とされた武装を回収し始めた

「……………何をしているのですか？私を馬鹿にしているのですか？」
少女はその行動を自分を馬鹿にしているのと解釈して少し苛立ちを見せた……………

「……………いや、何一応自分の武器は後々回収しておかないと、多分まずいことになると思ってな、まあ準備のようなものの一環と思えばいい……………オマエの言う通り確かに俺は素人な部分も結構多いからな……………武器に関しても壊された方が悪いともいう場合もあることがあるからそのことに関しては何も言わん……………だが俺に突然切り裂き魔的行為をしたことに関しては……………」

そして切り落とされた武器を全て回収し、それらを全て背中の中のパックにしまい込む（色々と物理法則を無視しているように見えませんが気にしないでください）と万能者は黒髪の少女に振り向いた

その時、黒髪の少女「百式」は気づいた……………

戦闘用リミッター第一段階及び補助システムリミッター限定解除……………

目標……………黒髪の少女の無力化

「少しだけ手加減抜きだ……………オマエを殺してでも道徳をオマエの頭と心に刻み込んでやる」

ヤツは静かにされど、これまでの比がないくらいに怒っているのだと……………いつのまにか展開されていたサブアームと、起動したチェーンソーのようなものを持った万能者の姿をみてそう思った。

そしてそこが更なる地獄絵図になるのは数秒ともかからなかった『破壊の暴風』が吹き荒れ始めたのだ、全てをズタズタに切り裂き完膚

なきまで破壊する暴風が

想定外は大体突拍子もなく起きるもの

???? 地区 破棄された都市

「.....」
そこには万能者が静かに何かを待っていた.....チエーンソーは機能を停止し背中のパックパックの横になおされ、サブアームも再度格納されていた.....だが万能者からは黒いオーラが発せられており、その周囲には非常に重い空気が漂っていた

「.....」
さすがに遅くないか？一瞬って言った割には」

その重い空気が自ら打ち破るかのように万能者は一言を言って首を傾げた.....尚その約束は10分前ぐらいにされたものであると付け加えおく

「ええいじれつたい.....まさかアイツあんな大口を叩いて逃げているんじゃない.....いや偵察機からもその様子はないしな.....」
何かを考えているうちに時間は刻々と過ぎていき.....

「.....」
仕方ない様子を見に行くしかないか」

その結論に至ることになった

万能者から100mほど離れたビル

「.....さすがに遅くない？」

そこで待機していた特戦隊のグリズリーはその一言を発した

「百式の通信の後からあのビルから銃声が聞こえなくなってから少し経つけど・・・まさか百式が負けたんじゃないわね・・・どちらにしろ誰か向かわせないと分からないわね・・・」

そして次の方針を考えていると・・・

「・・・ツ!!?!!? 万能者に動きあり!!?」

万能者を見張っていたドラグノフから万能者が動いたという報告が寄せられたのだ

「!!?!!?!!? こんな時に限って!!?」

グリズリーはその報告を聞き、万能者の方を見ようとした時だった

ズドドドオーローン!!?!!?!!?

百式のいる階層のビルの壁がとてつもない衝撃と轟音と共に吹き飛び巨大な穴が開いたのだ

特戦隊のいるビルの近くのビル

「さてと・・・あの黒髪のアイツは何処にいるんだ?」

・・・そこにはさっきの場所にいたはずの万能者がおり、多少の砂埃が掛かっているが全くの無傷でその砂埃を払いながら砂煙が晴れてきた周りの様子を見回していた

そして万能者の目に写ったのは・・・

「・・・え?」

待つ約束をしていた黒髪の少女『百式』がスヤスヤと寝ている姿だった

ところ戻って特戦隊のいるビル

「な、なんなのさっきの轟音は!??あのビルで何が起こっているの!?」

「ば、万能者がき、消えました・・・恐らくあのビルに・・・」

特戦隊は戸惑いを隠せなかった、あまりにも突然のことだったために冷静さを少し失っていた。その中でグリズリーはすぐに我を取り戻し百式に無線をかけた

『百式!!?百式!!?そっちはどうなってるの!!?応答して!!?』

そう言った更にその時

ズドドオーローン!!?!!?

ズゴゴゴオオオオオオオオ!!?

ズドオーローン!!?!!?!!?

再度あの衝撃と轟音が響き、そして二度もその衝撃が喰らい耐えきれなくなったビルが崩れ落ちていった

その光景を見た特戦隊は立ち尽くすしかなかった。誰もが最悪の事態の想像をして重苦しい空気がそこに漂い始めた・・・

だが、それを畳み掛けるように更なることが起きた

「おい」

その空気を打ち破るかのように近くで声が聞こえ、全員がその方を振り向いた・・・

そこには

「すまんが寝てるコイツ、あんたらBLACKWATCHの仲間か?」

『スヤスヤと寝ている百式をお姫様抱っこをしている万能者』が何か

白けたような空気を出してそこに立っていた

それを見た特戦隊はさっきの重苦しい雰囲気とは打って変わって
更なる混沌具合に驚愕を隠せずに立ち尽くすしかなかった……

※ どうしてこうなった！？

カオスはつづくよ、どこまでも（遠い目）

人類は愚かだ、過ちを何度も繰り返しそれを反省しても時が経てばまた同じ過ちを繰り返すからだ。

それ故に今回もこのことが起きてしまったのであろう

その日我々愚者達は悪夢を見た。厄災という悪夢を
今を思えばこれが始まりだったかもしれない

とある作戦に参加していた兵士の日誌より抜粋

???? 地区 破棄された都市

そこには都市があったということを証明する高層ビル群の廃墟があった

ズドドトオーン!!?!!?

そこには生活の営みがあったということを証明する建物群があった

ドンガラガツシャーン!!?!!?

そこには戦争があったということを証明する弾痕などの傷跡があった

チュドローン!!?!

ドガアーン!!?!!?

そこには強力な兵器を搭載した戦車がいたということを証明する戦車の残骸があった

ドゴオン!!?

それらは全て粉々に砕けちりそこから何も残らずに消え去った

ギユイイイイインンン!!?!!?

「ツチ!!?!!?」

ブオン!!?!!?

ドガアーオン!!?!!?!

なぜならそこには全てを破壊する『厄災』がいたからだ、そしてその存在は今も尚自分に害を与えた存在を徹底的に潰そうとしていた

その『厄災』に害を与えた存在はその攻撃を全て避け、己の持つ刃で厄災に攻撃を仕掛けており、その攻撃はまさに悪夢といっても過言ではなかった。

少し前に遡る……

「……問答はいりません、理由もいりません」

百式は万能者へ歩きながら言う

「ただ、殺し殺され切って切られ刺して刺され撃って撃たれる」

百式は立ち止まり黒桜を抜き構える

「……さあ、殺し合いましょう」

それを聞いた万能者は

「……なあ、それは覚悟しての確定事項ってことではないのか?」

「……どういふことです?」

百式はその疑問の意味が分からなかった

「いや、まあ……最終確認だよ……俺と戦うって言うことの」

「……何度も言わせないでください……これから私はあなたと殺し合う、それだけのことです」

その答えに万能者は

戦闘用リミッター第一・第二段階及び補助システムリミッター限定解除……

目標……黒髪の少女の無力化

「そうか……分かった、最終確認をしたぞ……なら今自分の出せるとあいつかこうなることは想定してたしな……」

「……………」(…………先にあの目障りな飛び道具を破壊しますか)

ダツ!!?

百式は万能者に向かって走っていった。それも普通の人には目にも留まらぬ速さで

「…………ツ!!?」

それを捉えた万能者はサブアームのレーザーサブマシンガンとミサイルの弾幕を百式に撃ち、迎撃の体制をすぐさま整える

その弾幕を全てかわし百式は万能者の近くに接近

無論それを見過ごすことなく万能者は持っているチェーンソーで斬り払おうとする

ギューイイイイイインンン!!?!!?

その全てを切り裂く刃が百式に触れようとしたその時

「!!?!!?!!?」

万能者の目の前から百式の姿が消えたのだ

正確には百式はかなり速度をギリギリのところそのままスライディングをしてかわして、万能者の股を抜けていったのだ

そして、出来た決定的な隙を見逃さなかった

「その飛び道具を切らせていただきます」

百式は黒桜で万能者のサブアームの武装を切りかかった

「甘い!!?!!?」

その時バックパックの底に当たる部分の一部が開き、そこから銃口…………否、ロケットのバーニアのノズルのようなものが出てきたのだ

たのだ

「!?!!?」

百式は突然のことに反応が遅れた

「灰になりやがれええええ!!?!!?!!?!!?」

そして、百式の眼中に広がったのは凄まじい熱量と光だった

「・・・チツ今ので決着つかないか・・・咄嗟に避けたなこりや・・・」
万能者は後ろを振り向き百式の姿を確認した際、そう言わざる得なかった・・・

「だが、結構なダメージを与えられただけ良しとするか・・・どうだ油断してただろ？」

その百式の姿は・・・

「・・・ええ、油断しました・・・今のは完全に行けたと思ったのですが、あなたの言う通り甘かったですね・・・」

左腕が骨格ごと溶けてなくなり、顔の左側が焼けて左目などの左側の部分が使え物にならないのは見てすぐにわかるレベルまで損傷していた。その服もあちらこちら焼き焦げていた・・・

だがまだ戦意は喪失しておらず、黒桜を無事な右手でしっかりと握りしめていた

「ですが私はまだまだあなたと殺し合えます。最後までその殺し合いに付き合ってくださいね？」

「・・・ああ、アンタが言い始めたことだ・・・なら最後まで実行せんといかんな・・・あとダルマになるぐらいは覚悟してもらわないとな」

万能者はそう言いながら再びチェーンソーを構え、サブアームの武装を百式に向け直した

・・・お互いにどんな損失が起きても未だに『破壊の暴風』は収まりはしない・・・全てはその殺し合いが終わるまで・・・

正規軍本部 滑走路

そこではイージスなどが輸送機に様々な物資を積んで動かしている光景があった。その周りには今動かしている機体以外の輸送機は全て破壊されており、あっちこっちで瓦礫が散乱し、黒煙を上げていることから退却するようだ

『回収する物資はこれで全部、輸送機の離陸準備はこれで大丈夫ですね。これであとはゴーストが来るまで待機ですね』

その場の全ての機動兵器と戦術人形を操っているサイバーブレインは状況の確認をしていた。このまま何事もなければ作戦は完了し、後の憂いはなくなる

『にしても急に風が強くなってきましたね・・・まあ、それに合わせて用意すれば大丈夫ですが』

天候や風の確認をしていたその時、ガラガラガツシャーン!!?

突然サイバーブレインの操っていた輸送機周辺の全ての機動兵器と戦術人形、そして輸送機がバラバラになったのだ。それも粉微塵に

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え?』

そして、それを畳み掛けるように滑走路にいる全ての機動兵器と戦術人形が何かに「切り裂かれる」ようにバラバラになっていき、サイバーブレインが確認する暇もなく全滅し、そこには残骸のみしか残らなくなった。そして・・・

「ドウヤラ アタリ ノ ヨウダ ナ」

その場に突然現れたのだ

「サワガシイ ト オモツテ キテミレバ ドウヤラ ツワモノ タ

チ ガ アラソツテ イル デハナイカ アノ ツワ
モノ モ イル ヨウダガ アレ ハ サイゴ ニ カル ベキ
ツワモノ ソレ ニ」

その者は大きな建物 正規軍本部の建物を向いた

「アソコ カラ ツワモノ ノ ケハイ ガ スル デハナイカ
ナラ イクシカ ナイ ダロウ」

その者は笑いながらその建物の中に入っていった
シュ シュ シュ

その特徴的な右腕の『大剣』を左腕の爪で研ぎながら

野生動物には餌を与えないでくださいはある意味万
能な言葉だと思う

正規軍作戦本部

ドガアーン!!??!!??

ドゴオ!!? ガゴオン!!?

バギャ!!?

蛮族戦士は今までで一番の危険な状況になっていた。

「キラレテモ カナリ ノ ハヤサ デ サイセイ スル ツワモノ
ト キルコトノ デキナイ ツワモノ . . . マサカ ドウジ
ニ アツテ シマウ トワ」

その姿は全身が傷だらけで鱗なども砕けたりヒビが入ってたりし
ており、動くだけでもやっということが見て分かるほどのダメージを
負っていた

そして、それをやった原因は蛮族戦士の目の前にいる二つの存在
だった

一つは全身が蛮族戦士の大剣でも切れないほど頑丈な装甲に覆わ
れたことと巨大な楯が特徴の巨大な人形『タイラント』

今は何もせずに待機している

もう一つは

「あゝあ、つまんないな . . . 蛮族戦士って名がついてるんだから強
いと思ったのに もういいや . . . タイラントやつちやつ
ていいよ」

『タイラント』とは打って変わって姿がどう見ても子供にしか見えな
い存在『ジョーカー』

だが、その姿から出される力は明らかに人間の域を軽く超えてお
り、更には蛮族戦士の大剣に切られても、まるで切られたという痕跡
すら残さずに再生するという明らかに人間とはいいがたい存在だっ
た

そして、『ジョーカー』は蛮族戦士から興味を失い、『タイラント』に蛮族戦士を始末する様に命令した

タイラントは蛮族戦士にゆつくりとだが向かっていき、蛮族戦士は残った力を振り絞るかの様に立ち向かうが……
ガン ガン ガン

傷をつけるどころか大剣がさらに欠け、さらに己の怪我を増やすだけだった……そして
ガシツ!!?

ドゴオーローン!!?

「ガツ……ア……」

タイラントが蛮族戦士を楯の持っていない方の素手で掴み、地面に叩きつけた、さらに確実にトドメを刺すために押さえつけたまま楯の内側に搭載されているパイルバンカーを向け……
ドゴオーローン!!?!!?

撃ち込んだのだ

コレ……ハ

薄れゆく意識の中で蛮族戦士は走馬灯を見ていた

己がまだその辺の弱き者だった頃の光景や、初めてツワモノを狩った時の光景、今の太剣に至るまでの記録が浮かんでは消え、浮かんでは消えていった……

アア ワレ ハ ココ デ カラレル ノカ ……

タイラントがパイルバンカーもう片方のパイルバンカーを打ち込みトドメを刺そうとしたその時

蛮族戦士の走馬灯にとある光景が映ったのだ

それは……

『放射線とか粒子崩壊などの汚染が起こっていることは分かっているが、そのことを詳しく調べないといけないと思っただけなのに……ここに来るまでに、道中あのゾンビの群れを越えなきゃいけないかったのが憂鬱だったな……これ以後は起動すれば……よし』
万能者を最初に目撃した時の光景だった……

アア アノ ツワモノ ハ ワレ ガ カル モノ ダ ……
アア ヨワキ ニ ナツタ ワレ ガ ハラダタシイ ……
メノマエ ニ イル ツワモノ タチ ニ クラベタラ アノ
ツワモノ ハ ……

『キヨム』ニ ヒトシイ トイウ ノニ

「……タイラント? 遅いよ? さっさとソイツをやっちゃって」
ジョーカーはタイラントの遅さに少し苛立ちを持ちながらも再度命令を言った、だがその結果は想定とは全く別物になることになった

『タイラントの楯と蛮族戦士を押さえていた手が真つ二つに切り裂かれたのだ』

「!!??? タイラント急いで下がって!!?」

突然起きた異常事態にすぐにジョーカーがタイラントに退却命令を言うが

ジャマ ダ

ドガゴオン!!??!!?

ドゴオーオーオーン!!??!!?

その命令を実行する前にタイラントは拘束から解き放たれた蛮族戦士に殴り飛ばされ、すでに半壊状態であった正規軍の施設に突っ込

みその瓦礫の中に埋もれることになった

「……やばい、ビーストにガチで怒られる」

ジョーカーはきつきの状況を見て、タイラントは完全には壊れていないが損傷が酷いことは明白で、ビーストに怒られることを想像し、冷や汗をかいていた

「……くそ、ビーストに怒られるのはアンタのせ……い……」

八つ当たりをしようとして蛮族戦士の方を振り向いたジョーカーは、驚くべき光景を目撃した

そこには……

「……カンシヤ スル タイラント ジョーカー
ト ヨバレタ ツワモノ タチ ヨ ……ワレ ハ マタヒト
ツ タカミ ニ イタレタ ……」

全身の傷、大剣などから青白い光を放っている蛮族戦士がそこにいた……

「ナラ フタタビ ハジメ ヨウ」

蛮族戦士はそう言うのと青白く光を放つ大剣を構えてジョーカーに跳躍した

(また始めようと言いながらもまた同じように斬りかかっている……
そんなんじゃないや私を倒せないよ)

ジョーカーはそう思いながら切り掛かった大剣を真剣白刃取りをしようとした……
ズバア!!?!?!?

「……え?」

掴んで止めたはずだった……だが、その腕ごと胴体を縦に切られたという結果がその場に存在した、さらにそれをとどめを刺すかのように驚くべきことに

「傷が再生が遅い?!?!」

傷の再生が遅くなっていたのだ、その出来事によってジョーカーは動揺を隠せずに蛮族戦士に致命的な隙を見せてしまう

そして、ジョーカーがその場で最後に見た光景は
蛮族戦士が大剣でさらに斬りかかる姿だった

その後その場に残ったものは……
背景にもはや破壊され尽くされた正規軍作戦本部に……
ジョーカーだったものと思われる細切れに斬られた肉片と血液が
そこには散乱している光景だった……

物事は慣れとはいうが慣れたくないものは結構この世に存在する

破棄された都市・・・から離れた廃倉庫

ザアザアと大地に豪雨が降り注ぐ中その場所の屋根は少し雨を通しながらも防ぐには十分な頑丈さを残していた

その屋根の下には一つの光源が存在し、それを囲むように3人の影があった

どうしてこうなったんだろう・・・

三つのうち一つの影の正体である万能者はそう思いながら頭を抱えていた・・・

なおもう一つの影の正体である突撃者は話し合いを聞く体制をしていた

コデワ ハナシ アオウ …… オマエタチ ガ アツタ コト …… ワレ ガ アツタ コト ヲ

そして、最後の影の正体である、大剣と全身の古傷や生傷から浮き出るかのように青白く光らせる蛮族戦士がニコニコとして(尚本人基準で他人にはオリジナル笑顔みたいに見える)笑いながら話し合おうとしていた・・・

この原因は5時間前に遡る・・・

破棄された都市 郊外 崩壊した橋

万能者と突撃者は立ち尽くすしかなかった・・・何故なすら巨大な龍のような存在が追いかけていた存在、百式と恐らくその仲間と思われる謎の女(ゴースト)が喰われ、その存在の力に為すすべもなく瀕死にも近いダメージを喰らわされ逃げられたのだから・・・

「……なあアサルターさんよ、すまなかつたな……こんな無理してもらってなんだが、こんなしょっぱい結果になってしまったな……」

「……」

「大丈夫、気にしないでくれ？……ああ、気を使わせてすまない……さて、とりあえずこれ以上同行する余裕もないし……撤退するしかないな……」

二人はとりあえずそこから立ち去ろうとしたその時、

「ヒサシイナ ツワモノ ヨ」

二人の後ろから声が出たのだ……それも万能者にとつてはとても聞き慣れており、そして凄まじく会いたくない気持ちでいっぱい存在と同じ声が……

「……なあ、突撃者さんよ……気のせいか後ろ声があるんだがこの豪雨とかによる幻聴かな？俺疲れているみたいだな……」

「……!!？」

「……うん、幻聴じゃないんだな……一緒に同時で振り向こうか……俺としては振り向きたくはないんだけど……」

その言葉の後に二人は後ろを振り向く

そこには

「ナニ ヲ ヤツテイル ツワモノ ヨ ワレ ハ オマエ

ト ハナシ ヲ シタイ ダケダ」

青白く光るヤツが左腕で自分の体並みのデカイ何かの金属片を担ぎ、何かの肉をバリバリと齧りながらそこにいた……

そして、それを見た万能者は

「……オマエにイルミネーションはファックションにするというセ

ンスがあることに驚いたよ……というかイメチェンしたのか?」

現実逃避気味に訳も分からない事を言い放った……………

回想終了……………

破棄された都市……………から離れた廃倉庫

「……………えつと、お前の仮説だとあの龍みたいなヤツがあの人を喰らう際には殺意が感じられなかったから、恐らくアレはBLACK WATCHの仲間で死んだと思わせる偽装工作と同時に逃げた為の行動と?……………マジかよ……………」

蛮族戦士の仮説を聞いて万能者は遠い目になるしかなかった……………

尚斬られた右腕の方はその辺に落ちていた戦術人形の腕が付いており、かなりぎこちなく動いているが補うことはできている

余談だがその後ろにはエンジン部分が見事破壊され墜落していたアナザーアイが鎮座し、他にも様々な部品や武器なども回収されている

「…………………………」

「……………ああ、その通りだな……………一筋縄じゃ行かないとは思っていたが、それすら甘く見過ぎたってことだな……………まあ、生きて情報が入るだけでも儲けものだな……………だがな……………」

「その仮説の前にさらつと言ったけどコイツそのヤバイBLACK WATCHの幹部をバラバラ切り刻んだってどういうことなの?」

目の前のヤバイヤツが超弩級のヤバイコトを仕出かしたことに万能者はorzの体制でうなだれるしかなかった……………

「アア ソノ コト ニ ツイテ ダガ …… オマエ ニ ワタシ
タ ニクヘン デ ワカツタ カ」

「……ええ、分かりましたよ……分かりましたとも……お前が何故か狩れた気にならないっていったこと、その幹部の正体みたいなのがな……お前と同じミュータント的存在だ」

「……!!?!?!?」

「……ヤハリ カ……クッタ サイ ナニカ ワレ
ト ドウゾク ノ アジ ガ シタ ノガ キナツテ イタ
ガ……ソウダツタ カ」

その驚くべき情報に二人はそれぞれ対照的な反応を示した……だがそれは序の口だった……

「あの崩壊液っていうのがビツシリにタプンタプンになるくらいになるまで入ってからな……そんで、何でこんな状態で維持できているんだと思ってもう少し細かく調べたら出てきたよ……なんかその崩壊液を抑制している物質のようなものがすごく小さくな……この物質、俺の知ってる粒子崩壊消滅対策用粒子安定剤に成分がかなり似てるからびっくりしたよ」

「……!!?!?!?」

「……ホウ？」

目の前の万能者という存在が世界を蝕んでいるELID、崩壊液の問題を解決出来そうな糸口をしれつと言いつつ放ったのだから

その後も話し合いは続いていき、万能者はその内容に心身を少しずつ減らしていき、突撃者はしっかりと真面目にその内容を聞き取り、蛮族戦士はその内容を嬉々として聞いていった……

1時間後……

「ツワモノ ヨ ワレ ノ ハナシアイ ニ ツキアツテ モライ
カンシヤ スル アサルター モ ツキアツテ モライ カ
ンシヤ スル」

「……!!?!?!?」

「……有意義な話をしてもらい感謝するってよ……突撃者さんよ、このことは社長のみに話しておけよ、そして社長からも口外禁

止って言うておいてくれ・・・一応応急修理で帰還する分には間に合う程度にしてあるから」

話し合いが終わり、外の雨も少し弱くなっている中で彼らは解散した

「デハ ツギ アウ トキ ハ ヨキ シアイ ガ デキル コト
ヲ ノゾム」

「・・・・・・・・・・・・・・・・!!?!!?」

「だから・・・俺はお前と戦いたくないってなんだ言えば分かるんだ!!?!!?そして突撃者さんナチユナルに死合うことを望むなつて!!?ヤバイことになるから、絶対!!?!!?」

別れた後・・・・・・・・・・

「とりあえず今は俺の体の修理を最優先事項として・・・・・・・・後にやる事はアイツがいつていたBLACK WATCHの兵器全てを耐えられる装備への大幅な変更、情報収集、格納システムなど故障してるシステムの修復・・・・・・・・うわめちやくちやあるな・・・・・・・・」
万能者は歩きながら今後の事を考え憂鬱な気持ちになつていた・・・・・・・・

「まあ、自分に受けた損害はデカイが・・・・・・・・取られたものはまだ取られても大丈夫な代物だったから助かったし・・・・・・・・BLACK WATCHや正規軍の戦力を知れただけでも収穫はあるか・・・とりあえずあの廃工場に戻るか・・・・・・・・」

万能者は歩き続ける、様々な困難に巻き込まれようとも・・・・・・・・

「まあ、次やってきたら戦略兵器(彼基準の戦略兵器であり、現在の戦略核より遥かにヤバイヤツ)をやツらの本拠地にお見舞いするぐらいの事などを考えておかないとな・・・・・・・・アイツらが俺を狙いに来る可能性がさらに高まるだろうしな」

??????????

は
歩
き
続
け
る
の
だ

動いて先鋭部隊と作戦本部から脱出してきた生存部隊の保護及び退却を行なったお陰で少ないですが・・・万能者の情報や基地を襲ったとされる正体不明の敵の情報を入手することが出来ました。これらに関しては何ほどデータを送ります」

「・・・分かった、その特殊兵装装備部隊には休暇などをくれてやれ」
（おそらく正体不明の敵に関してはBLACK WATCHの作業と思っただ方がいいみたいだな・・・おそらくカーターのヤツが入手したというあのデータの奪還などの為にやったのだろうか・・・なにもこんな時にやらなくてもな・・・いやこんな時だからこそやったのだろうか・・・）

そのかなり年老いた正規軍の幹部と思われる人物はため息を吐きながらその報告に答えた

「・・・今回の件については色々と不確定要素などが多すぎるがそれ以上に被害が多すぎる、あの地区の治安を維持することがかなり難しいと考えるとこのことは作戦に協力してくれたBLACK WATCHとH&R社などと共同で被害の修復した方がいいだろうな・・・」
「・・・またBLACK WATCHに頼り切りになってしまいか・・・これ以上頼り過ぎると正規軍としても面目が保てなくなってしまう可能性があるが・・・致し方なしか・・・」

「まあ、今回の件で万能者のことが少し分かったからな・・・」
その最後の言葉に彼らの心は一つになった

『『『今後アイツは様子見だけにしておいてあまり関わらないでおこう』』』』

その会議はこの後も被害の修復や情報整理などでまだまだてんやわんやになりながらも無事？に終わることになるのだが別の話である

????

室長室のような場所

「そこでは大柄の男と白髪が目立つ赤みがかかった茶髪の男性……
が何やら話し合っていた……」

「……ガチで危険な任務をやらせてもらうだけでも本当にすまな
いっていうのに、まさかあのBLACK WATCHの幹部「ジョー
カー」の肉片まで回収してそれを解析するとはな……何とか本
当にすごいな……」

「そりゃ大将に頼まれたら仕方ないですよ!!?俺らはその為に集った
部隊ですから!それにあの装置のおかげで達成できましたから!
あつ肉片に関しては解析後は嚴重な形で破棄しましたから大丈夫で
す」

「うん、でもね……下手したらガチで色々ヤバイかったからね
!?無理つて分かったら素直に退却しようね!?……まあ君
たちの部隊にとりあえず休暇とか褒美とかを取り計らう様にはしと
くよ……」

「おう!?そりゃありがたい!うちの部下にいい報告が出来る!!?そ
れじゃ俺はこれで失礼します!!?今後とも頼みたいことがあります
たら俺らに是非とも頼んでください!!?」

大柄の男はそういうとその部屋から退出して行った……

「ア……」

「は退出していくのを確認すると溜め息を吐いた

「悪い奴らではないんだなあ……まあそのおかげでE. I. L.
Dの治療法の確立と鉄血の総大将の解析・対策などが進みそうだ
な……」

「は目の前に置いてある電子チップを手を取った……」

「しがし来るとは思ってたけど、こんなに早くにBLACK WATCH
CHの襲撃が来てものの見事に作戦実行時と襲撃が被つちまうとは
な……まあそのおかげであのチップに入ってた鉄血の総大将の
初期データなどの完全コピーとジョーカーの肉片の解析ができたか
ら良しとはするが……本当に綱渡りだったなオイ……
しかし」

「はチップから一つの写真に目を移す

「こいつもこいつで俺ら人類に何をもたらし、何をさせるのか……
これまた分からん奴だな……まあ俺らは俺らで出来ることをする
しかないか……」

その写真に映る万能者の姿を見ながら、そう呟いた……
彼らも事を進める……それが人類に良き結果をもたらす
ことを信じて……
???

鉄血最重要大規模基地 司令部

「正義が……我々の正義が……正義が……我々
の正義が……」

そこには鉄血のハイエンドモデル「ジャツジ」が体育座りで何かを
ブツブツと繰り返しながら落ち込んでいた……

「……起きてからもう3日経つけどまだ立ち直りそうにない
ね……」

「まあ仕方ない……我々もまだまだ爪を見誤ったからな……
手負いの獣は恐ろしいとはいうが、あの状態でも厄災があんな化け物
じみていたとはな……」

デストロイヤーとハンターはその様子を心配そうに見ていた……
なお、その時を簡単に言うところな感じである

← 10日前に損傷が酷い状態の厄災が歩いているところを発見

← 鉄血の上層部「これひよつとしていけるんじゃないやね？」

その発見現場から近い場所にいたジャツジに万能者に攻撃を要請
し、仕掛けさせる(A. D. W. Sはとある理由でその時は使用不可
だった)

← そして遭遇し、ジャツジが正義や悪(今回は厄災が悪)などのこと
を言いながら攻撃を開始しようとする

← その時、厄災は機嫌が悪く(だいたいBLACK WATCHのせ

い)ジャツジの話がうるさいことがきつかけでブチギレて初手でバリアをぶち破りながらジャツジの顔面に飛び膝蹴りぶちかまし、ジャツジが倒れたところで両手両脚を踏み潰した後に武装をもぎ取り完全に無力化(その時ジャツジは気絶)

←

そして、ジャツジ部下達に

「なあ、お前達はこうなりたくないだろ？ だったら、このリーダーを連れ帰ることを選ぶのを進めるぞ……」

という脅しを行い、それにより部下達は戦意喪失しジャツジを連れて逃げるように撤退し、その後治療によって目を覚ましたジャツジがああのことかを思い出し今の状態にいたる……

※どう見ても下手な悪役よりヤバイ行動をしてる悪役です。本当にありがとうございます

その後、ジャツジが立ち直るのに5日かかり、その後は厄災へ立ち向かえるようにシミュレーターを使用しているのを確認された

余談ではあるが、代理人が胃痛と頭痛で苦しむ姿も確認されたことも付け加えておく……

破棄された軍事関係の工場の廃墟 整備施設

ウィーーン……

バチバチバチバチ

ガシャン!!? ウィーーン!!?

「……うんまさか骨格などを全て取り替える必要が出てくるとは思わなかったな……まあおかげで色々と整備する理由ができたからいいんだがな……」

そこには装甲のない状態の万能者が新しくなった身体を見回しながら何かの作業をやっている姿があった……

「リミッター解除によって体に溜まった熱の排出と冷却や、中身に異常がないかの点検や確認、修理だけでも結構手間がかかるから……手動だと本当に」

そして、自分の身体の融通が効かない部分に嘆くようにため息を吐いた……

「……まあそれはともかくそろそろこっちの方にも色々着手しないとな……」

万能者が向きなおした先には……ダメージが酷く使えなくなつた武器や装備、何やら見慣れない機器やパーツ……

そして万能者が今までつけていたものとはどこか違う感じのある装甲のようなものがあった……

「では俺の装備の修理兼現地改修、強化をおこなうとするか!!?」

失敗や敗北を経験し、生き残つたものがその経験を糧にし進む時……時として更なる力にすることがある……それが善悪である場合でもそうではない場合でも……

夢って色々とおかしい形で見ることがあるよね……
※ハロウイン記念の番外編です

前回の話から数日後……

皆さんハロウインとは何かご存知だろうか？

元々は古代ケルト人が起源の祭りとしており、秋の収穫を祝い、悪霊など人外を追い出す宗教的な意味合いのある行事であったが、現代になってからはアメリカ合衆国や日本などの国で民間行事として定着し、祝祭本来の宗教的な意味合いはほとんどなくなっている……極東の今は亡き国、日本ではハロウインに仮装することが有名であった……

今宵はそれに少し関係のあるようでないようなとあることを書いた話である……

破棄された軍事関係の工場の廃墟 整備施設 深夜

ウィーーン……

バチバチバチバチ

パキヤ ペキヤ カチャ

ガシヤン!!?ウィーーン!!?

チユイイイイイイイン!!?!!?

ゴスン!!?ゴスン!!?ゴスン!!?

カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ

「……ここをああして、そこをこうして……あそこを間違えないようにして……おっと!!?ここ間違いかけたな……」

万能者(前回とは違って腕や脚以外のところには装甲がちゃんと貼られている)は己の疲れが作業に影響し出していることに気づき始めていた

「……流石に連徹しすぎたかな……思考部分に若干だけどエラーが入るようになってるし、頭に熱もかなり溜まっているよ

うだしな・・・つと格納システムの復旧作業もここまで終わったからそろそろ休むとするか・・・これ以上支障が出ると色々とまずいしな」

その後万能者はその辺のものをある程度整理したあとにその辺の壁に寄りかかるようにして休み始めた・・・

とある実験施設にてそれは動き出そうとしていた・・・

「ヒツヒツヒツ・・・我が夢・・・我が野望・・・我が理想・・・今宵ついに動き出すときがきたのだあ!!?!!?」

なにか狂言を言いまくっている狂気のマッドサイエンティストと思われる人物（どうでもいいがアーキテクト似である）の視線の先には・・・

2 mのツギハギの体に所々金属のようなものや包帯が付いており、背中に二本の腕が生えており、頭部には西洋騎士のヘルムのようなものが被されている機械と生物を融合させた人造の怪物が今にも動かんとばかりに静かに鎮座していた・・・

バチバチバチバチバチ

マッドサイエンティスト（両手）は両手に電気を放っているコードを持ちその怪物の前に立ち怪物の起動をまさに行おうとしていた

「さて始めるとするか・・・さあ動くのだああ!!?この電撃でええええええ!!?!!?」

ビリビリビリビリビリビリビリ!!?!!?!!?!!?

それはその電撃を喰らいしばらく経つと静かに動き出した・・・

そのヘルムの目の部分から緑色の光を放ちながら・・・

そのまた遠く離れた別の場所にて・・・

そこには巨大な墓（蛮族的なものと想像してもらおうとわかりやすい）が建てられていた・・・そこにはそのものが得たとされる戦利品（獣の頭蓋骨など）、貢物など様々な物が若干風化しながらも大量

におかれておりその存在がどれほど恐れられ、憧れられた存在であることが見て分かるほどだった……

ゴロゴロ……ピカツ!!?

ドンガラガツシャーーン!!?!!?

突如としてその墓に雷が直撃し、そこにおかれていたものもろとも崩れ去りそこには瓦礫のみが残った……その時

ガラガラガラ……ズゴオン!!?

その墓があつた場所から突如として手が突き出てきたのだ、そして徐々にその手の本体が地面から這い出てくる……

その姿は体のところどころに筋肉や骨が露出しており、頭部には何かの巨大な爬虫類の頭蓋骨を兜として被っていた。そして一番特徴的な部分としては……右腕が明らかに生物としてはなつてはいけない大剣の形になっており人外である象徴としては十分すぎるほどの存在を放っていた……

「サア……カリノジカンダ……」

その存在はその頭蓋骨の目の部分からバチバチと青い電気のようなもの放ちながら強者を求めて歩き始めた……

この世に二人の存在が電気によって同時に蘇ることによって賽は投げられた……

似た者同士は惹かれあい、戦うことは免れない……勝敗が誰に分からない戦いが始まろうとしていた……

「恐怖!!?・四本腕の人造の怪物VSバーリアンレブナント」

×月????日全国公開!!?

※なんでB級映画の予告風な感じになっているんだよオオオオ!!!??

チュン……チュン……

万能者は起きていた……だがその顔はどこか呆れ果てているように見えた

「……俺まだメチャクチャ疲れているのかな……いや一応ちゃんとして休めているのか……なんかホラーな世界観にB級映画みたいな決闘が起きてる上にその決闘している存在が所々ちがうところがあるけどもどう見ても俺とアイツと似てる存在だったような……ひよつと別世界でもアイツと戦わないいけない運命でもあるのか？……泣きたい……本当になんてとんでもない悪夢を見てるんだよ……」

万能者はその運命のようなものに泣かざる得なかった……

尚蛮族戦士の方も同じ夢を見たようで……

「ホオウ ……ベツセカイノワレモベツセカイノ

アノツワモノトシアウウンメイカ ……ジツ

ニタギルモノダ」

凄まじくご機嫌だった

余談だがこの悪夢（極一部にはいい夢）を鉄血、人類側、人間や人形問わずに見たものが他にもいたようで……ある者は胃痛と頭痛を引き起こし、ある者は精神科に直行する者などがいたという……

ロマンって色々な形や種類などがあるな．．．．つ
て思う今日この頃

破棄された軍事関係の工場の廃墟 整備施設

バチバチバチバチ

パキヤ ペキヤ カチャ

ガシャン!!? ウイーーーーーン!!?

チュイイイイイイイイン!!?!!?

ゴスン!!?ゴスン!!?ゴスン!!?

カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ
ガアゴン!!?ウイーーーーーン．．．カッシャーン!!?

「あと一息だ．．．．もう少しで俺の身体の改造が済む．．．．」

万能者は疲れながらも作業を進め、全ての作業を完全に終わらせる
あと一歩のところまで来ていた．．．．

「しかし．．．．やつと分かったな．．．格納システムの不具合の原
因．．．．まさかの開発者達が意図的に多重ロックがかかるように
してやがったとはな．．．．それも自らが戦闘や作業などを経験し
ていくことや格納システムの解析を行うことでロックが解除されて
その中身の一部が使えるようになっていく方式にな．．．．．
冗談じゃねーぞ!!?格納システムの解析ってメチャクチャ大変なん
だぞ!!?．．．．アイツらが人生になデカイ試練が一つや二つあった
方がいいでしょ?って言ってくるのが目に見えるのが腹立たしい
な．．．．仕方ない今回は格納システムの一部の復旧と『出入り口』
を増やすことができただけでも上々とするか．．．．．」

なにやら愚痴のようなこと、技術的なことなどを言いながらも作業
は進んでいく．．．．

そして数時間後……

万能者は工場の中で一番広いところの真ん中に立っていた

「これより『バトルウエポンガレージシステム』のテストを開始する」

そういうと万能者は手を前に伸ばした

「じゃあまずはレーザーアサルトライフルからだな」

そう言ったその瞬間、伸ばした手にはレーザーアサルトライフルがまるで最初からそこにあったかのように握られていた

「よし次はレーザーアサルトライフル格納してからチェーンソーだ」

そう言ったその瞬間、今度はレーザーアサルトライフルが握られていたその手にはレーザーアサルトライフルではなくチェーンソーが存在していた

「最後はチェーンソーを格納してから特殊大型ライフルだ」

そして、その言葉通りにその手からはチェーンソーが消え代わりに大型特殊ライフルが握られていた

「う~~~~ん……誤差+0.0002秒と-0.0003秒の間つてところか……一応合格つてところか」

大型特殊ライフルを手から消しながら万能者は『バトルガレージシステム』テストの結果を解析していた

「まあとりあえずこれで武器の取り替え中のタイムラグやその途中での武器破壊などを最低限に抑えられるようにはなったってことだ……まあ、あらかじめ設定したもののみしか出来ないのが欠点で、ないとは思いたいのが取り替え中の隙についてくることなどを想定しておかないとな……次は自分の新しい身体の動きを見てみないとな……リミッター解除なしの状態でもあの黒髪女のどんな動きにも普通に対処できるようになってたらいいのだが……」

使えるようになった利点と欠点をしっかり考えながらその後も自身の状態を万全にする為に様々なテストを行なっていき、時間が経過していった……

そしてさらに数時間後……

カー……カー……カー……

「……ハア……やつと全部の作業が終わったな……」
流石に万能者も限界まで動いたのか床に突っ伏しており、外の様子もすっきり日が暮れていた……

「まあ、ここで一旦休むが休んだその後もやるのが色々あるからな……最終目的の調整などもあるし……なんかBLACK WATCHの目がちよつとどこまであるかと気になってハッキング（何気にサイバーブレインが感知・探知不可能なレベルでやっている）してみたらまさか独自の衛星を持っていたとは……電波障害やら汚染状態がひどい中でも使えるやつな上に衛星兵器などを持っているのはかなりヤバイな……」

休みながらも万能者は考え続ける……己の目的を果たす為……己の目的を邪魔するものを排除する為に……

「よし次の方針決めた、宇宙に行ってみるか」

※お前は何を言っているんだ？

その為に自身が現状で出来る限りの準備をしながら……
なお自重や常識内の、行動などはあまりしない模様（遠い目）

宇宙って人類的には最終的に嫌でも絶対に行かなければならないところだと作者は思っています……

宇宙………

それは地球という我々人類の母星をただの小さき島という名と監獄にしてしまうほど広く、そして深淵と例えられるほど暗く深い世界である……

人類は昔、様々な方法でこの宇宙という世界に挑み、利用していたが……今日、崩壊液による被害と第三次世界大戦の核兵器の使用による電波障害などで大半の衛星が使い物にならなくなっており、さらに天文的レベルの費用を消費してしまうなどの理由で、今では人々が視線を向けることがほとんどなくなってしまった……
だが、それ故に宇宙は大きなリスクを伴うが未だに開拓されていない最大のフロンティアとも呼べるだろう……

とある研究家の論文の一部より抜粋

(いやあ〜〜まさか来ることになるとはな……まあ宇宙って言っても地球の衛星軌道上の位置にあたるぐらいの位置だからな……海に例えるなら海岸からほんの少しぐらいいしか離れていない沿岸にあたるんだがな……)

地球の静止軌道に位置する場所にその異質な存在『万能者』はそこにいた……

どうやって宇宙に来たのかは少し遡る……

30分前……

破棄された軍事工場から数百km離れた重度汚染地区

「えっと……この辺がBLACK WATCHや正規軍の衛星

の監視が届かない地域という条件と天候が悪いという条件が整っているな……風速や汚染関連に関してはあまり気にしないで行けるとして……これでよし後はここから飛ぶだけだ」

その場所に万能者は何やら準備をしていた……その姿は普段の姿とは違い、脚は巨大なバーニアのようなものが一体化し、背中やバックパックにはこれまた巨大なバーニアのようなものなど様々な装備が一体化したものが増設されており、他には身体に追加装甲やら姿勢制御小型バーニアのようなものがつけられていた

(簡単に言えばガ○ダムのサイコミュ高機動試験用ザ○の脚にみたくなってたり陸戦型ガ○ダムのパラシュートパックをでかくしたようなものをつけている感じである)

「行きと行動と帰りの装備+ α を現状の可能な形で用意ですればこうも重くなるか……そりゃ仕方ないな……まあとりあえず宇宙行きますか」

そしてその数分後……

ズドドオオオオオオ……

轟音とともに空に上がっていく煙が人知れずに上がって行った……

回想終了

(一応知られないように結構色々対策してやったが……雷やらが直撃とか大気圏突破時の熱でダメージがあまりなかったのは良かったな……それだけが一番の懸念だったからな……)

万能者は自身の状況確認し異常がないことにホッとしていた

※尚宇宙では真空のため音が出ないことを想定して「」を○として使っています。いらんことをしているようですがご了承ください

(遠い目)

(にしても……事前に大戦があつてその余波とかで使い物にならなくなつた衛星とか結構出てるって予想はしていたが……こりやデブリ相当あるな……)

万能者の眼前には完全に壊れてバラバラになつた衛星やまだまだ起動している衛星などが存在し、特にデブリが大量に存在し移動の妨げになることが容易に想像できた……

(……とりあえずデブリやら衛星兵器とかに注意しながら地球の周りを廻りながら作業を始めるか……)

その後……

(うわぁ……衛星のことだろうだから色々あるだろうと思つていたが……大質量運動エネルギー弾、高出力レーザー兵器……挙げ句の果てに核兵器なんてもんあつたよ……これ俺が初期の状態で突つ込まれてたら詰んでたな……あ、リホーマーさんこの衛星兵器『レギア・ソリス』みつけ)

時にその兵器が己に使われることを起きることがありえたことにゾツとしたり(すぐに気持ちを切り替えたが

(……うん、この通信履歴聞かなかつたことにしよう、闇に葬られたままでいいやこれ)

時に衛星の通信履歴を確認してヤバめの情報が出てきたことを見なかつたことにしたりなど様々なことがあつたが特にトラブルはなく順調に進んでいった……

そして……

(えつと……侵略艦の散布は完了し、ネットワーク構築の確認も完了……そして、今のところ誰も気づいた様子は一つもないようだな……とりあえず作業完了だな)

万能者は作業結果に概ね満足していた

(これで多少は動きやすくもなるし、この先戦闘の対処などがしやすくなるな……まあこれを乗り越えられるのが来るとヤバイかな……まあその時はまた新たな対処法をすればいいか、とりあえず地球に戻るか)

万能者はそう思いながら大気圏突入の準備をしようとした時、とあることに気が付いた

(・・・・・・・・・・どこに降りればいいんだっけ?)

※オイ

肝心なところが抜けていた万能者だった・・・・・・・・・・

その日、地上では隕石が大気圏で燃え尽きずに落ちていくところが確認され、後日その落下推測地点にとある民間調査隊が向かったところクレーターは確認されず、隕石とされるものが確認できなかったということがあったことを書き加えておく

主人公の話より裏方の話の方がめちやくちや人気な場合って結構あるよね

「?????」
室長室のような場所

「ハア．．．．．」

「?????」
は机に肘をつけてデカイため息を吐いていた．．．．．
（ねがりやすく言うって碓ゲンドウスタイル風）

そして、机には様々な資料や書類が山のように積まれていた：：：
「あいつら．．．．．絶対俺のことを困った時の22世紀猫型ロボツトみたいな存在やら相談窓口みたいな感じに思ってるだろ．．．受けてしまった俺も俺だがな．．．．．」

それは愚痴のようなものだった．．．．．
最近人類人権団体の戦線が安定しているのだが、その安定している時の方針が定まらず、このままだと前と同じように逆戻りする可能性があるかと判断した?????を除く上層部が?????に方針を決めてもらうということになってしまったのだ

尚、その時は上層部男女問わずに全裸土下座（しかも脱いだ服はきちんと畳んで置いている）をされて、呆れる果てて逆に感心するレベルに真顔になるといふ変な光景が広がっていたことを書き加えておく

「．．．．．えっと？新たな資金源の確保先？．．．．．却下だな
ココは、明らかに核地雷源的な空気が出てるしな．．．．．一応探りは突っ込ませるとして、え？何？IOP社にサイバーテロ攻撃？これ人類人権団体の攻撃とされている？．．．．．たぶんこりやBLACK WATCHが正規軍あたりがなんかやって目を逸らさせるためにやった感じかなかな．．．．．あつとこれはあかんヤツだ、この運び屋って絶対あかんヤツだ．．．．．これはノーコメントで何もしない、関わらない方針で進めよう．．．．．」
?????はその資料や書類の山を削ろうと作業を進めるも、どれもこれも

自身の精神を削るものばかりな上にその山はなかなか減らずに、ただ時間だけが過ぎていった……

数時間後……

「……ちよつと休憩がてら、こつちの方の資料読んどくか……」

「?????」
は現実逃避気味に軽食を食べながら人類人権団体から出されたものとは別の書類を取り出し読み始めた

「なになに……」「船」はまだまだ開発はあまり進んでいないが、同時並行で作った例のあの装置を活用したヤツは完成……これでどこにでも簡単に奇襲が可能……俺それする気ないんだがな……まあこれで結構なことに対処できるようにはなったな……」

さっきの書類と資料とは違い少し明るい情報などが書かれており、少なからずもその疲弊していた精神を癒していた

「まあ、対処できるようになっただからな……何よりB LACK WATCHや正規軍以外にもいろいろやばいやつがおるし、何より……あの「白い奴ら」がなんか動いているみたいだな……心当たりが多すぎるから逆に何をやる為に行動してるのかちよつと調べないといけないなこりゃ……」

同時に別の問題に関してのことも思い出して胃を痛めながら……

「さてと元の作業に戻らないとな……期限もちよつと近づいてるしな……」

「?????」
は作業を続きを始めた……それが己の思い描く理想に少しでも近づけられるように願いながら……

重度汚染地域 人類未踏領域

カアン……………カアン……………カアン……………

そこでは何か金属を叩く音が響いていた……………それも何度も何度も

カアン……………カアン……………カアン……………
「ムウ……………ヤハリ ジカン ガ カカル カ」
音の発信源の正体である蛮族戦士は右腕の大剣を見ながら唸つていた……………

その大剣は以前と比べると何やらゴツゴツとした感じになっており、大きさも重さもかなりあるように見えた……………

「ヤハリ アノ ツワモノ ノ タテ ハ スベテ ヲ クズツ ミ
ズ ヲ リヨウ シテ ツクラレタ モノ カ……………
ジカン ガ カカル ガ オノレ ノ ツメ ガ サラ ニ トガ
レル ト カンガエル ト ヤハリ ヒツヨウ ナ コト ダナ
……………」

それもそのはず……………その大剣にはタイラントの楯の一部が融合するかのように引っ付いているのだ、今は不完全ながらも徐々に自分の体の一部になっていくかのように

「スベテ ハ アノ ツワモノ ヲ カル タメ ニ ヤラネバ」
蛮族戦士はそう言うと言元にあった水のようなもので大剣を濡らすと再びその辺の鋼材の破片で叩き始めた……………

カアン……………カアン……………カアン……………

全てはあの強者・・・・『万能者』に挑む為に・・・・

神秘って色々あるけど見たり経験するとしてもホラーでスプラッターな神話は割とマジでやめてもらいたい（真顔）

突然だが、生命の始まりの場所と言えどこだろうか？

答えは簡単、海である

今では崩壊液や、放射能などで大半が汚染されているものの今でもその自然が残されているところは存在しており、人類はその残された海という自然を試行錯誤を繰り返しながら活用している・・・

だが、そんな海という存在は全てが分かかっておらず、その深海という名の深淵には神秘と言う名の何かが無だに誰も知られずに残っているとされている・・・

ストオーン!!??ストオーン!!??ストオーン!!??

ガン ガン ゴオン

(うおお!!??!!?クソツタレこつち来んな!!??!!?)

その太陽の光すら通らない深海に『万能者』は存在していた・・・それも何かに襲われているようだが・・・(たしかにアポ無しで来たのは悪かったけどさ!!??そんなに怒って集団で襲ってくるのか!!?)

万能者は目の前の襲ってくる存在達の正体を戦いながら考えていた

その存在達はほぼ人間と同じ体型をしているが、頭部や顔には、魚かカエル、主に水棲生物に似た姿をしており、鼻や耳は、低く広がり目立たず、肌には鱗が存在しており、魚やカエルのように、白くぬめぬめと光沢があった

そんな存在達が万能者の周りを囲んでいた・・・なぜこうなったのかは少し遡る・・・

1週間前・・・

とある廃墟内

「えつと．．．この辺の接続をこうやって、ああして．．．．．つとここは一度保留するとして、この部分をちよつといじつてと．．．．．」

そこでは万能者は何かの端末を弄っていた

「しかし．．．宇宙から戻ってきたら戻ってきたでこの作業をすることになるとはな．．．．．まあこうでもしないと色々対策やら対処が出来ないしな．．．．．つと接続完了、通信は．．．．．来てるな．．．．．とりあえず地図データなどを始めに見るか」

何かの作業が完了したようで、万能者は端末に衛星からの地図データを映し出した

「．．．．．なるほどな．．．今まで通ってきたところはこんな感じで、鉄血やら正規軍やらの拠点、都市などの大まかな位置はこんな感じか．．．．．うわあ．．．．．そりや色々と鉢合わせするわけだ、今までよく無事でいられたな本当に．．．．．次はエネルギーデータ関連を出してみるか．．．．．うん？」

今までのことを思い出しつつも整理していき、ひと段落済ませたところで次のを見たその時、そこに映し出されたのは何か奇妙な情報だった

「なんかこの辺．．．．．と言うかもろ海だな、そこから何か変なエネルギーが発生してる？しかも結構な量．．．．．本当に何だこれ？」

端末の画面には地図の上に崩壊液などのものは違う正体不明のエネルギーがその海域いっぱい覆うように発生しているデータが映し出されたのだ

「．．．．．しようがない調査に行くしかないか．．．．．絶対ヤバイやつのパターンだけどそう言うのを調査するのも目的だからな．．．．．ああ、いきたくないな．．．．．」

万能者はそう言いつつもすぐに行く用意を始めたのだ．．．．．

数日後・・・・・・・・・・

北大西洋　水上にて

「うーん・・・・・・・・この辺か？変なエネルギーの発生源の中心は・・・・・・・・周りは霧で全く分からんことになってるし、上空の衛星は俺が置いたヤツ以外は通信が届かないようになってるし・・・・・・・・こりや魔術系のなんかだなこりや・・・・・・・・」

北大西洋の真ん中辺りの水上に万能者は立っていた・・・・・・・・周りには深い霧が発生しており、さらには通常の衛星通信が届かないことから霧の迷宮に入り込んだに等しい状態だった・・・・・・・・もつとも彼が宇宙に行った際に置いた衛星がこの非常事態に対応できるものだったようで位置や場所などが判明している状態であるが

そしてもつとも変わっているところは万能者の装備で宇宙に行つた際の装備にかなり似ているものが装備されており、その手には巨大な水中スクーターのようなものが存在していた

「よしこの辺だな、ここから潜らないとな」

万能者はそう言うとそのまま沈んでいき、暗い深淵の中へ入っていった・・・・・・・・

水深3000m付近

※尚深海の為、声が出にくいことを想定して今回も「」を（）として使っています。いらんことをしているようですがご了承ください

(遠い目)

(そろそろなんかあってもおかしくないあたりなんだが・・・・・・・・)

万能者は黙々と深淵に深く潜っていた・・・・・・・・

既に太陽の光が全くといって過言でないほど通っておらず、静かな海が逆に不気味な感じを出していた・・・・・・・・

(・・・・・・・・流石におかしいな・・・・・・・・ここに来るまで魚の姿がほとんど見られなかった上に深く潜れば潜るほど魚の姿がなくなっていくって・・・・・・・・一体底の方に何があるんだよ・・・・・・・・)

そう思いながらも黙々と潜っていく

海底

(とりあえず底には到着してみたのだが……デツカイ岩とかそんなのがかなりゴツツゴツとして様子がわからんがとなってるな……例のエネルギーの発信源はあの辺りみたいだし進んでみるか……まあ無かつたら無かつたで帰るしかないがな……うん?)

万能者が目的地に行こうとしたその時、その地点の巨大な岩陰から何かいたような気がしたのだ

(……とりあえずワイヤー接続型音響探知魚雷発射) バシユ シユオオオオオオオ……

万能者は巨大な水中スクーターのようなものから魚雷のようなものを発射し、その地点に飛ばしたのだ

その魚雷のようなものが岩陰に消えていった後、程なくして情報が送られてきた

(oh……海底にお住いの方々でしたか……)

その送られてきた情報には魚と人間がグロイ方向に合体したらこんな感じと言うようなものの模範解答のような存在がゾロゾロと存在していたのだ……

その情報に万能者は遠い目にならざる得なかった

そしてそれと同時にその集団がその岩陰から殺意MAXの状態でゾロゾロと出てきたのと言うまでも無かった……

(……えっと……突然の訪問すいませんでした……?)

とりあえず海底の正体不明勢力と戦いが切つて落とされたのは確
実であつた

邪神やら付喪神とかの話と神の数って八百万の神って例えられるほどやっぱいるんだなと思う今日この頃

北大西洋　　水深約4500m　　海底

バシユ　バシユ　バシユ

シユオオオオオオオオオオ．．．．．

スドオーン!!? スドオーン!!? スドオーン!!?

ババババババババババババババババババババ!!?!!?

(ダアアアア!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?)

北大西洋の奥深くの深淵の中で、静かなながらも激しい戦闘が行われていた．．．．．

大型のジェットスクーターのようなものから魚雷やマシンガンのようなものを乱射している万能者の周りには海底に住んでいるとされる原住民とされる魚と人間のグロテスクな方に融合したような存在が大量に群がっていた。それも万能者の弾幕によって蜂の巣になったり、バラバラになって減っていく仲間を気にせず、寧ろ隠れ蓑にして接近しているのだ

(うおお!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?)
仲間を盾にして接近してきて、爪で引き裂こうとした次は体当たりか!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?!!?)
戦闘データの狂信者の戦術パターンにそっくりな恐れ知らずだ才イ!!?!!?!!?!!?)

襲ってくる存在達の行動の本質を考えながらも弾幕を掻い潜ってくる者の近接攻撃を避けたり、受け流していたりしていた．．．．．

その時

テケリ・リ　テケリ・リ

ガシッ

(っ!!??しまった!!??!!??)

何か触手のようなものが万能者の右足に絡みついてきたのだ

(この野郎!!??)ズバアッ!!??!!??

すぐさま万能者は左腕からクローのようなものを出し、その刃が赤くなつたと同時に触手を斬り払って右足を拘束から解き放つた

(なんだなんだ?オクトパスみたいなやつでも出たの.....
かあ.....)

万能者はその存在を見て、考えた言葉を途切らせた.....

テケリ・リ ケリ テケリ・ケリ テケリ・ケリ テケケリリ・ケリ

そこには漆黒の玉虫色の粘液状の巨大な生きた不定形の物体が表面に存在する無数の目玉をこつちに向け、身体から生えた無数の触手を唸らせていた

(.....oh.....スライムな存在の方でしたか.....)

その沈黙はすぐに打ち切られた

周りの原住民達とスライムのような存在の無数の触手が再び万能者に牙を剥いてきたのだ

(くそ、スライムみたいなヤツのことを考えるとおそらく物理的兵器の効果が薄いと思うし.....仕方ない、アレを使うしかないか.....)

万能者はそう思うと敵対存在の攻撃を避けたり、受け流したりしながら、大型ジェットスクーターのようなものの正面をスライムのような存在に向け照準を合わせ始めた

無論スライムのような存在はそれをチャンスと思つたのか獲物を捕らえようと己の触手を全て万能者に伸ばしてきた

だが、全ては少し遅かった

スライムのような存在、シヨゴスには何が起きたのか分からなかった

万能者に伸ばした触手が全て消えていつているのだ、その見えない壁のようなものによって……そして見えない壁のようなものはシヨゴスに近づいていき……シヨゴスは何も考えられなくなった

(グオオオオオオオ……やっぱコレ最大出力でやると反動が高い上に音響が周りに響きまくって自身にもダメージが来るな……あまり使いたくないなホント……で、やっぱ周りにも被害出るか)

万能者は自分の使った兵器によって自身にも起きた被害に苦しみながら周りの様子を見回した

そこにはさつきまで元気に万能者を集団で襲いかかっていた海底の原住民達が力なく浮かんでいた……

あるものは痙攣を起こしながら泡を吹き、あるものは全身の穴という穴から血が大量に出血し周りに血を撒き散らしており、またあるものは完全にピクリとも動かずに永遠の眠りについたものまでいた……

(サウンドウェーブ……やっぱコレあかん兵器だな……ある程度までは周りに被害を及ぼさないけど、水中で最大出力にした途端超音波が周りに漏れて物体の分子をシェイクしまくる上に発射した超音波の砲弾が共振現象を起こして分子に分解するって……開発者の意図はわかるよ？でもね……発射した本人にも被害が出るってどういことなんだよ……)

万能者は周りの様子を見ながらその兵器の開発者に愚痴を言いたくてもその兵器に助けられたことでもなんとも言えない感じで遠い目にならざる得なかった

1時間後……

海底 原住民の集会所らしき場所にて

その場所は海底の谷間の真ん中に存在していた……
万能者はその場所を見回していた

(……あつちこつちに凝った彫刻の建材が置かれているが結構新しか作られたものようだな……おそらくこの場所は何かの儀式の為に新しく作られたものと推測できるが……で、本題はあの真ん中に置かれている台座の上の物だ)

万能者の視線はとあるものに向けられる

それは何か神秘的であり禍々しくもある光を放ちながら台座の上に鎮座している人間の頭と同じくらいの大サイズの結晶だった

(コレ……魔術的に言ったらマナとか魔力とかの結晶の類いだろ絶対……あの発生してたエネルギーと比べて見るとかなり似てるエネルギーを発してるしな……なんかアカンことに使ってるみたいだし回収してこの辺を爆破破壊して帰還するか……)

そう思いながら台座の上から謎の結晶を回収し、バックパック内に格納したその時

突然後ろの方から巨大な気配が二つほど感じたのだ

(……!!??!!???)
万能者が振り向いた視線の先には……

原住民と同じように魚と人間をグロテスクな方に合体しているものの最大の違いとしては6m以上の大きさがあり、威圧感やパワーなども段違いで原住民達のボスと一目でわかる存在が2つそこにはいた……

また二つの内一つは体格がどこか女性らしさがあったことも付け加えておく

それを見た万能者は……

(・・・・・・・・・・・・・・・・えつと・・・・・・・・お邪魔してます・・・・・・・・
ご夫婦様方☒)

※確かに夫婦だろうけどさ・・・・・・・・なんでなにもなかったかの
ように普通に挨拶をしようとしてるんだお前は(真顔)
現実逃避気味に挨拶を返していた・・・・・・・・

ドゴオオオオオ!!?!?!?!?

無論それに返ってきたのは夫婦共同作業による拳だったことは言
うまでもなかった

※まあそうなるな(遠い目)

海底の騒乱はまだまだ続く・・・・・・・・

人生うまくいかない時って結構あるけど、うまくいかなすぎるとある意味達観する時ってあるよね……

北大西洋 水深約4500m 海底 原住民の儀式場

バシユ バシユ

シユオオオオオオオオオオ……

ストオーローン!!? ストオーローン!!?

ババババババババババババババババババア!!?!!?

ドゴオオオオン!!?!!? ガゴオオオン!!?

(ガアツ!!?ゴオツ!!?)

その場で万能者は苦戦していた……

(このご夫婦様方………デカイ図体の割にめちゃくちゃ素早い上に動きもいい………さらにいうとパワーもありやがる………こりや当たりたくない奴に遭遇してしまったな………)

万能者の視線の先には………

原住民と同じように魚と人間をグロテスクな方に合体してなおかつ大きさも6mある存在が2つ、万能者の周りかなりの速さで周りながら殴ったり、蹴ったり、攻撃をしてきているのだ

(火力と防御力の面ではこっちの方が有利だが……グオツ!!?……水中だと反応はできても動きが鈍るからあっちの機動力と運動力に間に合わないし、こちらよりも速いからな……イデツ!!?………さて、この状況をどうするか………サウンドウエーブも再使用可能までまだ時間かかるしな………さらに言うところのダメージ地味に痛いからな………一応別の手もあるが………アレだけはめっちゃくちや使いたくないからな………)

万能者は攻撃を受けながらも反撃の手立てを考えていた………

その時

テケリ・リ ケリ テケリ・ケリ テケリ・ケリ テケケリリ・ケリ

何か不気味で聞き覚えのある鳴き声のようなものが聞こえてきたのだ

(・・・・・・・・・・・・・・・・)

その音を聞き、嫌な予感を感じながらその声がした方を視線を向けた

そこにいたのは・・・・・・・・

前に倒したスライムのような存在『シヨゴス』と同じ存在がそこにはいた・・・・・・・・前よりも巨大な姿で

(・・・・・・・・・・oh・・・・・・・・・・ご夫婦様のペットか何かで俺が倒したヤツの親みたいなのがいらっしやいましたか・・・・・・・・)

そう思ったと同時に前よりも大量の触手が万能者に襲いかかったのは言うまでもなかった

(ツ!!?避けナアツ!!?) ガゴオン!!?

その触手を避けようとしたがそれを見逃さんとばかりに巨大な原住民が巨大な拳で頭部を殴り回避行動をとれなくしたのだ

無論万能者はシヨゴスの触手に両手両足を縛られ持っていた『A・

S・M・W』も落とし、身動きが封じ込められたのは言うまでもなかった。

(コンチクショウ・・・・・・・・両手両足が絶妙に動かしくいようになつてる上に触手の力がかかり強いから水中ジェットの推力でも振りほどけないなこりや・・・・・・・・さらに言うところの光景じゃな・・・・・・・・)

万能者は己の今の状況を分析すると目の前の光景に目を向けた

そこには巨大な二つとシヨゴスを含む原住民達がどこからともなく大量に現れて万能者の前に集まってきており、原住民達の万能者を見る目は全てせせら笑うかのようであった

さらに言えばその親玉の存在である2つはその拘束状態でも見せしめのように容赦なく危害を加えようとしていた

(・・・・・・・・・・ああくそ、こりや本格的にまずい・・・・・・・・)

例のアレを使うしかないか……余計なことは起こらないでくれよ……

その見せしめを始めようと親玉の一つが拳を振り下ろそうとした
その時

バシユ バシユ バシユ バシユ バシユ バシユ バシユ バシユ
バシユ バシユ

シユオオオオオオオオオオ……

スドオーン!!? スドオーン!!?

スドオーン!!? スドオーン!!?

スドオーン!!? スドオーン!!?

ギヤアああアアああ!!?!!?

!!?!!?

シヨゴスと原住民達がいた場所と万能者が突然爆発したのだ

その突然の出来事に原住民達もパニックに陥り、親玉である二つの存在も驚きを隠せなかった

すぐに二つの存在は正気に戻り万能者の存在を確認しようとするが、爆発の影響によるもので視界が悪くなつて確認するのが困難になつており視界が元に戻るのを待つしかなかった

そして、視界がある程度元に戻り始めた頃に上の方が何やら明るいことにその場にいる存在全てが気づいた

ここが深海で太陽の光がほとんど通らないにも関わらずにだ
その場にいる存在全てが上の方を見た

その光の源であつたものは何やら青い光を放っているバスケットボールサイズの玉のような物体でそれがこちらにかなりの速度で向かつて来ていたのだ

そしてその場にいる存在全てが気づいた
その物体が途轍もなく危険ものであると

あの存在が我々を滅ぼすために使ったものであると

そう思つて動こうとしたが時すでに遅く、その青い光を放つ玉のような物体は儀式場の地面に着弾した

そして、同時にその物体は凄まじい勢いで膨張していき、儀式場その場にいる全ての存在達……人間達の言葉で言うなら深きもの共やシヨゴス、そして父なるダゴンと母なるハイドラと呼ばれていた存在達全てをその物体が飲み込んで行き、飲み込まれた存在全てが意識と存在をこの世から消えることになった

儀式場のあつた場所から上に230m離れた場所にて

(……うわあ……やっぱコレもえげつないな……)
そこにはあつちこつちの装甲や装備にヒビがはいつていたり、欠落していたりなどの損傷しつつも五体満足に存在していた万能者が己の使つたものに恐怖を抱いていた

(水中用調整型特殊エネルギー兵器『波動砲』……な
んでこんなものを水中でしかも人間用手持ち兵器にしたんだよ……
あの馬鹿開発者共め……)

いつの間にか手に戻っていた『A.S.M.W』に搭載されていたその兵器を見た後にその兵器を使用した場所の方を見直した

そこには150mクラスのクレーターが存在しており、そのクレーターの中には何もなかった

(まあとりあえず目的とかは分からなかったが、あの魔術的エネルギーの発生原因やそれを起こした黒幕も分かったしコレで調査完了と考えてもいいか……さてどこから離れるか)

そう思い振り向いてその場から離れようとしたその時

ズドドドドドドドドドドオーンンンン!!?!?!?!?

その後ろからとてつもない振動と轟音が響いて来たのだ

(……)

万能者はその振動と轟音の発信源とされるクレーターの方をもう一度見直した

そこにはクレーターの外側の部分が中心部を埋めるかのように崩れていた……まるで無理矢理にでもそこを閉じるかのように……
(……………帰ろう)

すでに様々なことで疲れ切っていた万能者はそれを見なかったことにするかのよう地上に向かつていった……

その日北大西洋の不可思議な霧は晴れたと同時に英国と欧州、北大西洋側の北アメリカ大陸に強力な地震が発生し、幸い人的被害は少なかったものかなりの被害が出ることになり、各国と軍部、鉄血などの勢力がその後始末に頭を抱えることになったのは別の話……

??? 「ないわ……あの深きものどもに入れ知恵するなどの準備してあと少しでシナリオ完成するところによく分からないレギュラーが現れてシナリオが完成前に崩壊するとかないわ……」

※オイ、そのの主犯格何やっとなねん

どこかでそんな悲痛な悲鳴があげた存在がいたというのが詳細は不明である

赤の他人の敷地ではあまりはしゃがないようにしましよう、大体えらいことになります

前回の事件『おはよう隣のインスマスさん宅襲撃事件』（作者命名）から1週間後

夕方

ニュースです。

○月××日に起きた地震によって起きた被害の詳細がわかって来ました。都市部の建物などは耐震対策をされていたために被害は最小にとどめることができていたもののスラム街や廃墟街などでは甚大な被害が出ているようで、現在復旧作業にあっていますがかかりの時間がかかると予想されていますープツンー

「……………うん聞かなかったことにしよう」

万能者はそう言いつつラジオの電源を切った

※前と同じように現実逃避するなよ……………

「とりあえず今いるところの地図みておこうか……………大体方位やら位置、衛星システムを参考にすると……………おっと？なんか結構街の近く来てしまったるみたいだなこりゃ……………」
その端末には自分の場所から200km離れたところに街が存在することを示していた

「うーくん……………もうこんな時間だし……………仕方ないその街から少し離れたところで野営するしかないか……………」

万能者はそう言いながら野営する場所を曖昧ながらも決めると地図を直しながらその場所に向かっていた……………

万能者は知らなかった、自分がいる地区の名前を

地区の名前はS09地区ということ……………

万能者は知らなかった、その地区が最前線の激戦区であるというこ

ならここから離れる準備をすればいいか)

戦況をそう分析して今後の行動をそう決めたその時

ヒューーーーーー……………

ズドooooooooo!!?

(ゲツこつちに流れ弾飛んできやがった……………やっぱりここから離れることを早めた方がいいみたいだな……………流れ弾がここに落ちないで後ろの方に落ちて助かったよ……………うん?後ろの方?)

万能者は嫌な予感をしながら後ろの方を振り向いた

そこには……………

野営する際に置いていた食料や機器、道具などが木つ端微塵に吹き飛んでいたのだ

※あつ(察し)

ブチツ

糸が切れる音がその場所で響いたのは数秒もかからなかったのはいうまでもなかった

「クソ……………まさかこんなところでP・A・C・Sの部隊と遭遇するとか運がないにもほどがあるだろ……………まだこつちの新型は不安定だっていうのによ」

鉄血の部隊を指揮していたハイエンドモデル「処刑人」はその事態に愚痴りながら指揮を行っていた

「クソたれ!!?こんな時に鉄血の部隊と遭遇するとかないだろう!!」

一方P・A・C・Sを運用している部隊の隊長と思われる存在もその事態に愚痴っていた

「こちとら例の基地に無理難題な奇襲攻撃しろって言われて断ろうに

人の怒りって様々だが怒りを溜め込むタイプの人の
本気の怒りはガチで怖いよね……………

S09地区 平野

そこには地獄絵図が広がっていた……………

ズドドドドドドドドドドドドドドドドドドツ!!?!!?

ギヤアアアアアアア……………

レーザーとミサイルの雨により無残にも元の姿が分からなくなる
ほどに砕かれた者たち……………

手足を破壊されたP・A・C・Sという名の棺桶から恐怖に怯え
ながら命からがら脱出する者たち……………

その中で恐怖によって心を壊して笑いながら呆然とする者たちな
ど様々な存在がそこにはいた……………

驚くべきことにこの地獄絵図はある存在が現れてたった10分
で作り上げられたものである

その地獄絵図を作り出した存在は今……………

「才前ラニよツテ無残ニも散ツタ物資と道具……………そして食料ノ無
念……………全員平等ニ物理的ニも精神的にモ刻み込んでヤ
る……………」

言語がおかしくなるレベルで怒り狂っていた

※鉄血の皆さんとその他勢力の皆さん、馬鹿が本当にすみません

(焼き土下座)

ズドオン!!?ズドオン!!?ズドオン!!?

「この野郎!!?これでも喰らいやがれ!!?」

その暴虐に対抗しようとP・A・C・Sの一体が手に持っている
ショットガン型の手持ち砲を存在『万能者』^屈に何発も撃った……………

その弾丸は全て命中していた……
だが……

「……………」

そこにはそんなもの効くかとも言いたげに撃ってきた存在に視線を向けている無傷の万能者がそこに立っていた

「き、効いてねえ……これ40mmのスラッグ弾だぞこれ!?
?普通穴が開くどころじゃ済まない代物だぞ!?」

P. A. C. Sの搭乗者はその様子を見て、取り乱すしかなかった……

その一瞬だった、万能者がその撃ってきた存在の目の前に立っていたのだ

「!!?!?!」

搭乗者はその出来事について行けずに呆然としてしまった
ガシツ グシヤ

その音とともに突然モニターが暗くなり、コクピットが薄暗くな
た

「な、モニターがやられた?!?くそつ何も見えんぞ?!?」

それに答えんとばかりにP. A. C. S自体が揺れ始めた

「な、なんだあ?!?!」

ビギビギイ……………バゴオン!!?!

「え?」

その轟音とともに暗くなっていたコクピットは突然明るくな
り……………万能者が何か巨大なものを持って目と鼻の
先に立っていた

「え?え?え?……………あつ……………」

搭乗者はその何かの正体を少し時間をかけて理解した、理解してし
まった……………

それはP. A. C. Sの上半身……………それも自分が乗ってい
る機体のだ……………

つまりいうと今搭乗者が乗っているP. A. C. Sは下半身と搭
乗者だけを残してオーブントップ状態になっているのだ

そのことを理解してしまった搭乗者は……

「あ、アハ、アハハ、アハハハ／＼？／＼／＼／／」

極度の恐怖を抱いてしまい心を壊してしまった……

その様子を見た万能者は興味を失ったかのように手に持っている
P・A・C・Sの上半身をその辺に捨て、次の対象に目を向け、そこ
に向かつていった……

「……ヒ、ヒイ……」

そこには最早戦闘不可能の損傷を受けた状態の鉄血新兵器『Ogr
e』数機と部下達に守られている鉄血ハイエンドモデル『処刑人』の
姿があつた

すでに彼女自身も損傷が酷く抵抗の意思すら砕け散り、いつもの姿
とはかけ離れているレベルでの怯えている状態であつた

「……ズシイ……ズシイ……ズシイ……ズシイ……」

ズシイ ズシイ ズシイ ズシイ ズシイ

それにも御構い無しに万能者はゆっくりと近づいていた

「こ、こつち来るな……」

ズシイ ズシイ

「謝るからこつちこないでええええええええ!!?!?!?!」

その一言が発せられた瞬間

ピタア

^{万能者}厄災は動きを止めた

「……え?……え?……」

その万能者が突然動きを止めたことにその場の全ての存在が困惑
した

そして万能者から言葉が発せられた

「謝るんだつたら早く謝れよ……こちらは色々吹っ飛ばされ

てイライラしているんでなあ………」

それを聞いた僅か20秒後……

「「「「すみませんでしたアアアアア!!?!!?」「」「」「」

処刑人やその部下、なぜか『Ogre』も混ざり、そしてP.A.C.Sを運用していた部隊もP.A.C.Sに乗った状態のものも混ざって全員綺麗に整った土下座を行ったのだった

S09地区 上空

「なんだこりゃ………」

その地獄絵図の一部始終を見ていたものがいた……その存在は何か飛行ユニットのようなもので浮遊しており、その見た目は髪が茶髪のショートヘアで瞳はゴールド、プロポーシオンもボンキュボン物を物の見事に実現している少女ということが見て取れた……

そんな少女は目に入った光景に鳩が豆鉄砲を食らったような顔という表現がぴったり合うような顔で呆然としていた……「……あつ、鉄血と人類人権団体の部隊が一目散に散って行つたな……どうやらアイツが許したみたいだが……」
こんな馬鹿げた光景があるのか……?

その万能者が許した存在達が逃げるかのように一目散に散つていく姿を見て我を取り戻して状況を再確認するが、その状況を確認するたびに呆れるしかなかった……

「まあこれでこっちの基地に襲撃とかはなさそうだし、長居は無用だな……ならさっさと帰還すr」

その独り言を言い切つてその場から離れようとしたその時
ギロリ

万能者がこちらを向いて睨んできたのだ、地上からかなり離れた位置にいるその少女に

「……?……?」

その行動に少女は驚きを隠せなかった
更に驚くべきことが10秒足らずで起きた

万能者がこつちに向かつて飛んできたのだ、それも丁寧に少女の目の前をホバリングをしながら彼女を睨んでいた……

「!!??!!??!!??!?!?」

その光景に少女はこれまでにないほどの恐怖を感じるようになった……何をやっても目の前の存在に数秒もかからずに殺されるという恐怖を……

だが、万能者が次に取った行動は……

「ああ、なんだあの戦闘に全く無関係の人が……こりや睨んですまなかったな……すまないが君の仲間と別のところでさっきの戦闘を監視している人達にもあとですいませんって謝ってくれ、それじゃ」

その言葉を発し、その場をすぐに去っていたのだ

「……………」

え？」

少女『ノア』は先程感じた恐怖を忘れて、また鳩が豆鉄砲を食らったような顔をして呆然と立ち止まるしかなかった……

物事つて畳み掛けるように連続して起きる時あるよね．．．．．良くも悪くも（遠い目）

S09地区食べ物の恨み喧嘩両成敗事件（作者命名）から数日後．．．．．

その事件によって付いた傷跡は決して小さくはなくその事件に巻き込まれた勢力はその事故処理に追われていた．．．．．

某所 鉄血最重要大規模基地

「．．．．．グスン．．．．．」

処刑人はその部屋の片隅に体育座りで落ち込んでいた

「処刑人あれじゃ立ち直るのに時間がかかりそうだね．．．．．」

「ああ、そうだな．．．．．宥めてやりたいが、あの様子だとそつとした方がいいな」

「無理もない．．．．．やつとりハビリが終わって任務に戻ったと思ったらあのような事が起きるとは誰も思わないからな．．．．．」

その様子をデストロイヤー、ハンター、アルケミストは見守っていた

ゴハア!!?!!

大変だあ!?!?代理人様が血を吐いて倒れた!?!?

「．．．．．」

「．．．．．何かしらでも手伝わないとね．．．．．」

そのデストロイヤーの一言により二人は無表情で頷き仕事に戻っていた．．．．．

その後何度も代理人が血を吐くというのが風物詩になりかけたのは別の話である

人類人権団体過激派本部

「で．．．．．どう考えても無理な作戦に貴重な新型P・A・C・Sを投入した結果、大半失った上にそのP・A・C・Sの情報を探るグリンに渡してしまった形になった挙句の果てに貴重な特殊部隊と

いう人材の大半がPTSD又は精神崩壊になってしまった
と?????」

「はこめかみを抑えつつ状況の整理をしていた
?????」

「ば、はい」

「……それで俺にはその
事後処理を手伝って欲しいと……」

「は、はい」

その二人（過激派の幹部）は目の前の?????の様子を見て冷や汗が止ま
らなかつた……

なぜならその?????から黒いオーラが膨大な量垂れ流されていたから
だ

「なるほどなるほど……おたくらは俺を22世紀猫型ロボット
と勘違いしているわけだ……」

「す、すみませんでしたああああ!!!」

その後?????はその事後処理に付き合うことになり立て直しが早め
なつた事は別の話である

?????
そこではまた、白いナニカが話し合っていた……

『……ってわけでH&R社本社がG&Kに襲撃されるわけだが
どうすればいい？一応俺も迎撃準備をする予定だが……』

『あー……そんなことがあったんか……リホーマー
さん本当運とかツキとかが敵に回っているんじゃないかってレベル
に壊滅的な本当に……』

『うん、本当にな』

『勝手に酒飲むなよ!!?!!?』

『あつお祝い送らないとな．．．お前に預けた全兵装使用許可と交渉用切り札の情報、あと宇宙に行った際に置いた衛星兵器システムの使用許可などを送つとく』

『．．．．．へ?』

怒鳴っていた白いナニカはその言葉は鳩が豆鉄砲を食らったかのように呆然としていた．．．．．

それは完全装備で戦って良いという意味であった

『おま．．．．．それ．．．．．』

『こちらとしてもリホーマーさんのところがやられたら色々ツテやらの損害がかなり出ると考えてるしな、まあリホーマーさんことだから逃がした後は自由行動みたいな感じだし、俺との繋がりがバレないように戦えば大丈夫だしな!!?まあ念には念を入れて俺が動けるようにしておくからな．．．．．まあ何より．．．．．』

『何より?』

『人の恋路を邪魔する奴は地獄に行こうか派なのでね．．．．．さてその恋路を見守らせてもらおうかな?』

『．．．．．だから違うって言うてるだろうがあああああ!!?!!?』

その叫びはその二つの存在以外は存在しない空間全体に響くことになった．．．．．

数日後．．．．．

H & R 社本社制圧作戦当日

H & R 社本社

「タナカさんやよな．．．．．なんやその格好と装備は?」

魔法使いの格好をしたりホーマーは自ら思った疑問をタナカに聞いた

そのタナカの姿はSFで見えるような全身が装甲で覆われたパワードスーツのようなものを着ており、丁寧に頭部のフルフェイスヘルメットにはH & R 社のロゴが貼り付けられていた．．．．．

更にはその背中と腰部には様々な武器がマウントされており、まさに重武装と言える装備だった……

「ああ、防衛の際にもしもの時と思つて用意していた装備だ……なんだかんだでここにはお世話になつてるしな……こうゆう時ぐらひは恩返しみたいなことをしておいた方が自分としてもいいと思つたしな」

その言葉は紛れもなく本心であり、覚悟した言葉であつた

皆さんは人の見えないところで迷惑行為や犯罪行為をすることをやめましょう……バレたらえらいことになります

H&R社本社前 G&K社襲撃部隊駐留地点から離れた場所にて

「ありやりや、こりや相当な数で……G&K社のあの上官も張り切ってらっしやるな」

タナカはH&R社本社の前に駐留しているG&K社の部隊を見ながらそう呟いた

「とっ……今入っていったのはE A小隊の前に社長が参加した悪魔討伐の参加してたやつ……それと攻守が結構強いやつか……こりやアサルターもやられるかもしれんな……つとまあこつちも次の押し入りのお客さんが入っていく前にサービスをしておかないとな……」

本社に入っていくその存在達を見送った後にタナカはその本隊の方を見直した

「それじゃ始まるとしますか『シユレディンガ―の猫』付き特殊煙幕弾撃ち込み始め」

その言葉と同時に何処からともなく迫撃砲と思われる砲弾がG&Kの大隊の周りに着弾し、ほどなくしてその周りが白い煙幕で包まれることになった

20分後

本社 通路にて……

そこではE A小隊とB B小隊が歩いていた……

「リバイバー大丈夫か……アレ確か万能者と互角に戦ってたやつだったよな……」

「まあ大丈夫でしょ……」

「マーダーも大丈夫か？さつき頭を痛めていたみたいだが……」

「……ええ、大丈夫よ……それよりも開けたところ
に出るみたいわね」

「それよりもなんですが……さつきから外の部隊との通信が通じ
てないみたいなんですよ……ここが坑道だからかもしれない
が……」

そのパイロードの言葉によつて全員の動きを一時止めることにな
った

しかし……

「いや……ここは進もう、H&R社社長リホ・ワイルドマンをな
んとかしなければこの戦いが泥沼化する可能性が高い、それなら素早
く頭を取ればいい」

M16A4の言葉によつて、少し揉めたものの結論が出ることにな
り再び通路を歩き始めた

一方外では……

腕が！腕があああ!!

私の足、何処にいったの……
こつちこないでえええ!!!

「あ、あ……あ……」

「くそ、どつから襲撃してきた!? 煙幕で何処にいるかもわからない
し通信がつかえない!?」

「注意してまた犠牲者が増える!!」

ギヤアアアア……

「くそ、犠牲者がまた出た……」

G & K社の主力たる戦術人形達はその状況に恐怖を隠せなかった

煙幕が発生したと共に通信が使えなくなり、目と耳を奪われた状態
で周りからは仲間の絶叫が響き渡るといふ状況なのだから無理もな
かった

「あつどうも」

「!!?!!?!!」

そんな中、突然その存在は現れた……煙幕の中で完全な把握

はできていなかったが、その人型の存在は全身覆うように着ている装甲服を着ており、それには血のようなものがビツシリとついていた……

そして、その両手には………赤黒く染まった斧を一本ずつ持っていた

「ツ!!?」

その存在が襲撃の犯人だといち早くわかった戦術人形がすぐさま銃を構えて撃とうとした……

「おつと撃たせんよ」

ズバア ズバア

だが目の前の存在に銃弾は発射されなかった……おかしいと思つた戦術人形は持っている銃を見た……

そこには銃どころか己の両腕が存在しなかったのだ……

「う、ウワアアアアア!!」

「まあとりあえず死にはしないようにしときますんで、ゆっくり気絶しといてくれ」

その白い煙の中でまた一人また一人と犠牲者が増えていった……

10分後………

「二応結構な数のG&Kの戦力とへりなどを無力化したが……」

タナカは周りの様子を見回していた……

タナカの視界には大量の無力化された戦術人形が存在していた、それも全部が生きていることが確認されており、そのほとんどが両手または両足あるいは両方とも失っており、戦術人形の半身とも呼べる銃に関してほとんどが破壊されて、もはや戦うどころか動くことすらままならない状態であった……

「………まだほんの少しうろついているみたいだが、かなり少数だし、煙幕ももう少ししたら晴れてしまうだろうし………それなら本社に入っていったのを追いかけるとしますか」

そう言いながら本社の方に向かおうとしたその時

そこには最初からまるでいなかったかのようにタナカの姿はなく、

あたりには呻き声や悲鳴などが響いてだけだった……

H&R社本社 シェルター内

「……ありや？いつの間に本社の景色に……もしかしてテレポートかなんかかな？」

タナカは突然視界が本社の景色に変わったことに戸惑いを隠せなかった

「タナカさん！」

「おっ？G36さん？一体どうしたんだ？こちらはいきなりテレポート現象が起きてちよつと戸惑ってるんだが……ところでなんでメイド服を持つてるのかな？」

「テレポートに関しては社長がやったことですし、メイド服に関しても社長かの命令です……」

その時、そのシェルターの空気が急激に冷え込んだ気がした

「……」

「……」

「……マジで？」

「……マジです」

「……まあ一応理由とか目的とかは理解できるんだけどね……ただちよつと心の準備とかメイド人形に化ける用意をさせてね……一応俺男性の人格だからな……」

「……はい」

その日タナカはなんとも言えぬ悲しみを背負うことになった……（まあこれで俺は動けなくなってしまうたわけだな……あとは社長の力量とアレらに賭けるしかなさそうだな……）

それでもH&R社の長い一日は続く……

責任つて良くも悪くも結構予想外の展開を呼んでくる事があるよね……………（遠い目）

H&R社本社 シェルター内

「えっと確かあのテレポト現象はアルケミストが使用されているテレポト技術の上位版で粒子を分解・再構築やることによって可能としていて……………あっちこっちを調整すれば移動ポイントを絞れるから……………ついでに類似してるシステムのデータとこつちの衛星システムなども活用して……………」

「……………タナカさん何やってるんですか？」

何か複雑な計算をやっているタナカ（メイド人形姿）にG36は聞いたでした

「うん？……………ああ、さつきサツチャーさんと俺がやられたテレポト現象の解析をやってるんだよ」

「……………なんで今そんなことやってるんですか？」

その質問にタナカは答えた

「そんなの決まってるだろ……………社長が俺たちをここに入れて逃がそうとしていることを考えるとあの人俺たちの責任とかのその全てを背負って逃げると考えられるからだよ……………」

「……………あ」

「それだから今突貫作業で作ってんだよ、テレポト探知システムのデータを」

「……………!!?!!?」

G36は今タナカがしていることがどれほどとんでもないことをしているのかすぐに分かった……………

その時シェルターの扉からノックの音が聞こえてきた

「まだ逃げ遅れた人いましたか？」

「いや？俺の関係の存在だ」

その扉が開く、そこからは一般作業用として普及している人型口

ロボットの群れが協力して何かを持ち運びながら入ってきたのだ

「!!!?」

「その出来事にシエルター内は一時騒然となった

それと同時にG36は持ち運ばれた何かの正体に気づくことになった

「あれって……アサルターの胴体!? それとMDR? なんで気絶してるんですか?」

「あれらは俺が念の為に俺の部屋にこっそり置いてた作業用ロボットを改造したものにアサルターの回収を頼んだんだよ……胴体だけなのはコアとかの重要な部分の回収を第一してるから重さとかをすこしでも軽くして運ぶためだな……一応応急修理はしてるみたいだがな……MDRに関しては俺は知らんが、多分あちこちが爆発した際に崩落してきた瓦礫に頭をぶつけて気絶したのを回収したんじゃないかな?」

その言葉を聞きG36は目の前の存在のしていることに戦慄を隠せなかった

目の前の存在がああ存在の片割れだとしても未来がまるで分かっているかのように対応しているからだ……

「……一応言っておくが俺はあくまで準備したやつで対応しているだけだからな……だからそんな目で見ないでくれ……つとデータ完成!!? あとはこのデータを本体に送って……なあ? G36さんに今度はこっちから質問があるんだ……と言つても後で他の人にも聞くことだがな……」

「……なんでしょう?」

「これからのことに二つ選択肢がある……一つは社長が責任を背負ってくれたチャンスを使って逃げることに、もう一つは社長が背負った責任の回収に向かうことだがどうする? もちろん俺は後者で、今それを絶賛やっているがな? あの人に色々言うことがあるしな……」

その言葉を喋ったタナカは笑顔だった……目は笑っていないかったが

そのわずか2分後……

ビー！ビー！ビー！

《自爆シーケンスを起動しました……》

30分後にこの施設は自爆します……

職員はすぐさま避難通路から外に避難して下さい……》

その本社でその放送が響くことになりシエルター内からは誰もいなくなっただけというまでもなかった……

H&R社本社から数百km離れた場所の廃墟にて……

「おつなんだデータ付きメールか？これは……ああ、なるほど俺はアイツの思い人を回収すればいいのか……よしそうきたら早速送ってきたデータをインスタールして……よし、ちよつと遅くなる可能性があるかもしれないがクリスマスプレゼントの用意だな」

そう言ったその時

万能者はそのリーダーに反応があり、その反応は万能者のすぐ横に来るということが示されていた

「うん？……マジでか?!いくらあの人か運が悪いと言っても……」

そのことに万能者は戸惑いを隠せなかった……

だがその後そこに現れた気絶しているリホーマーを見て万能者は呆れるしかなかった……

「……いくらなんでも運が悪すぎるだろオイ……まあクリスマスプレゼントの用意は確実にできそうだな……」

そう言いながらリホーマーの回収を始めた万能者だった……
「……そういえば、アイツリホーマーさんの能力による寿命とか何とか言ってたよな……ついでにそれな

んとかしておくか・・・場合によってはアレを使ってみるのも手かな？」

※ろくでもないことに間違いなくなるなこりや……………

(遠い目

この小説が投稿された時がクリスマスどころか年越しがすぐそこに迫ってきてるのはご察してください

とある廃墟にて……………

「えつとここはああなってるから……………この辺はこうなってる……うわぁ……………リホーマーさんかなり無理したんだなこりゃ」

万能者は前回回収したりホーマーの容体を調べていたが、その様子を見る限り深刻な状況であるというのはいうまでもなかった

「義体や中身とかが悲鳴をあげまくってる状態で前に俺が回収したあの結晶とは違う系統の魔力系のエネルギーを利用した永久機関の動力やあのテレポート装置を使ったらそりゃ……………こうなるわな……………となるとこりゃそのまま改造つてわけにもいかないし……………うまくなんとかやっても後遺症とかなんとかでえらいことになる可能性があるしな……………うくんどうするか……………」

リホーマーの治療法について色々試行するが思いつかない状態です時間だけが過ぎていった……………

「……………うんしようがないか……………やっぱアレを試してみるのがいいか」

万能者は賭けてみることにした

リホーマー自身の強力な悪運と生き意地を、その方法の成功率であるわずかな確率と可能性を

「よし、早速取り掛かるとするか……………まずはアレをリホーマーさんに合わせた形に改造してと」

※悪い予感しかしない（白目）

そんな事を思っていたりホーマーに万能者は言い出した

「リホーマーさん、身体とかいろんなどにガタがメチャクチャきただろ？前の義体から意思とか機能などを俺が持ってたヤツをちよつと改造したヤツに移し替えといたから。前の義体はあそこにおいて、動力やらテレポルト装置などはこつちで回収といた、ちなみにその義体の方は代用動力として超小型プラズマ転用動力炉になつてるヤツね」

「……………えっ？？」

それはリホーマーにとつてはツアーリ・ボンバ級のとんでもない爆弾発言だった

すぐさま自分の身体が今どうなっているかを確認し始めた

「うそおん……………どないなつとるんやこの馬鹿げた性能は……………」

「まあ寿命とかの解決策としてそこまでちよつとやつとかないとまずかっただと思つたからな……………遅めのクリスマスプレゼントぐらいと思つてもらつてくれ」

「とんでもないクリスマスプレゼントすぎるわあ!!？」

その結果、言うまでもなく体調はとてつもないほどに快調で、己の身体のスベックが化け物じみていることがわかつたのだつた

「あつこれも言つておかないと……………さつき話してるついででタナカにリホーマーさん起きたことを送信しといたんだが、すぐに返信が来て今すぐにそつちにH&R社社員達から代表として何人か一緒にあつちこつちにバレないように向かうんだつてさ……………良かったな、社員達に愛されてるよ……………ついでに言つておくとテロリスト加担の疑惑はテロリスト側の巧妙な手口関連でH&R社自体に非はないとのことで無罪にもなつたらしいしな……………G&K社とH&R社共々ほとんど得るものなしといつたところだな

「こりゃ」

「……………えっ?……………えっ?……………えっ?」

さらなる爆弾発言の絨毯爆撃を食らったりホーマーはその言葉を
解読・理解するのにかかなりの長い時間を要することになったのはいう
までもなかった

(今回りホーマーさんには悪いがこちらはほとんどただ同然で結構な
ものと対価などいろいろ手に入っちゃったしなあ……………
永久機関に関してはあるのままでしとくと下手したらかなりヤバイこ
とになる予感がしたからすぐさま格納システムの隔離部分に突っ込
んだが……………まあそのお礼というかお見舞いの品とい
うか遅めのクリスマスプレゼントというか……………なんかを
くれてやつてもいいじゃないかと奮発してよかつたな……………
さて後はアイツにやる面談という名のクリスマスプレゼントがどん
な結果になるのか楽しみだな)

思考停止状態になっているりホーマーを見ながら万能者は内心笑
いながらそう思った

一年つて振り返ると本当に色々ありすぎて困るときあるよね……

某所 森林地帯

「いてて……まだ殴られた部分から微妙に痛みを感じるな……アイツそんなに強くやらなくても……首のフレームが思いつきり歪んだ感じがするな……」

万能者はそんなことを言いながら野営をしていた
さあ年越しまで後僅かになりました!!?

皆さん年越しの用意出来ましたか?

イエーイー

まだという人はいますか?

イエーイー

「……そういえば年越えるのもう間近だったな……」

適当に選局したラジオから流れてた会話から万能者はそのことを
思い出した

「そう考えると……俺が来てから色々ありまくったな……」

そう思い返すと……

「……うんロクなことがなかったのが大半だったな」

真顔でそう思った

「鉄血やら、ミュータント的存在やら、正規軍やらなんかとんでもないところやら……挙げ句の果てにはアカンタイプのも神秘の皆さま的な何かに襲われるのがほとんどの日々だったな……
そういうば最近アイツ見かけないがどうしたんだか……」

重度汚染地域 人類未踏領域

「デキタ カ」

蛮族戦士は己の右腕を月夜に掲げて見ていた………
そこには漆黒とも言えるほどに黒くなり、そして前よりも大きく
なっていた大剣が存在していた

「マズ ハ ナレナケレバ ナ ……!!! …… ドウ
ヤラ アノ ツワモノ モ ワレ ノ コトヲ オモツタ ヨウ
ダ …… ナラバ キタエネバ ナ」

何かを感じ取ったのか、笑いながら蛮族戦士はすぐにそこから立ち
去っていた

「……………うん言ったそばから嫌な予感がメチャ
クチャしてきたよ……………思い返すんじゃないよ」

万能者はそう思い返したこと少し後悔した

それでは年越しカウントダウン始めますよ!!!

イエエエエエー………イイイイ!!!

「つともうすぐ年越しみたいだな」

何はともあれその年も終わりを迎えることで万能者も切り替える
ことにした

5
!!!

「まあ次の年はできれば平穏であった欲しいな……………」

4
!!!

「うん、なんか願ったら願ったで、なんか叶わぬ願いになりそうな予感がしてきたよ……」

3
!!!

「……………あっそういえば」

2
!!!

「こつち来てからあまり考えてなかったが……………」

1
!!!

「……………兄弟達はあつちで元気してるんだろうか？」

※オマエ兄弟いたんかい

!!!!!!????

0
!!!

年越しおめでとうオオオオオオ!!!

ワァー~~~~~!!!!

その万能者の爆弾発言はラジオからの歓声によりかき消される形になったが何はともあれその年は無事に年を越すことができた

※馬鹿と馬鹿作者が色々やらかしますがこれからよろしくお願
いします(土下座)

なんか突拍子もなく日の出を拝みたくなるのは本当になんでだろうね？

※皆さん年が明けましたが、年の最初は何をしましたか？ある人は正月を家族で楽しんで過ごしたり、初日の出を見るために行動を起こしたりなど様々だと思います

えっ？何故突然こんなことを聞き出したかだつて？

「どわああああ!!?!こいつら厄介だなオイ!!」

万能者は高度9000mの位置で戦闘に巻き込まれていました………

一つは白い塗装が印象的な四つの小型ジェットエンジンのようなもので飛んでいる人型の機動兵器のような存在………
一つは大型の輸送機に機銃などの武装を施されているもの………

一つはジェットエンジンのようなものを羽などの部分に積んだ蜂のような姿をした巨大な機動兵器

それ以外にも様々な存在が万能者………いや、全体的に巻き込んで戦闘が行われていた

※あの馬鹿が新年早々からこうなっている現状から現実逃避したかったからです（白目）

「うおおう!!人型のやつはすばしっこくて厄介な上に蜂のやつ頑丈すぎるだろオイ!!」

何故こうなったのか少し遡る………

前回の出来事から数時間後………

某所 森林地帯

まだあたりは暗く万能者の野営の光のみが輝いていた………
「年明けたといつても俺にとって単に日が変わったようなもんだし

な……まあちよつとだけはそれらしいことしてみたいが
な……」

万能者はどんなことが年明けらしいことを考えていた……
ふと、時計の方を向いてみた

「……そういえばもうすぐ夜が明ける時間だな」

その時計が示していた時間は夜が明ける時間……つま
りは今年初の太陽が上がることを示していた

「初日の出か……う……山に行くにも遠
いし、時間もなし……」

そう思った時ふと、脚の方が目に入った

「……ああ、アレがあつたな……実地試験ついでに高い
ところから見る初日の出を拝むとするか」

……どうやら何かをろくでもないことを考えついたよう
で、すぐ様行動を開始した

20分後……

野営地から別の場所の高度3500m地点にて

そこに万能者の様々な装備を装備して飛んでいる姿があつ
た……

※尚高高度の為、声が出にくいことを想定して今回も「()や
《 》などを使っています。いらんことをしているようですがご了承く
ださい (遠い目)

(今のところ全てに異常無し、天候は晴れ、辺りは真つ暗だが異常は無
いようだな……こりや問題がなければ8000mぐらいの
高さから初日の出を拝むことができそうだな)

そう思ったその時……
目的としている高度……つまり万能者の真上からからなにか
が一瞬光つたのだ

(……うん？なんだ?)

その場所に視線を向けるとそこには何かしらが連続して爆発して

いるようでどうやらそこで戦闘が行われているようであった……
(……うわあ……真上の方だったからちよつと
注意向けてなかったから気付かなかったな……ついてない
な……ちなみに日の出の推定時刻は……うわあちよつ
と近づいてきてるなこりゃ)

万能者はその想定外の事態をどうするか少し頭を捻らせたが……

(……まできて諦めるのはなんか腹が立つし、自分が決めたことだし
な……仕方ない手っ取り早くあの戦闘を黙らせることにするか)
万能者はそう決心した

※ロクでもない理由で戦闘を潰される皆さんエ……

高度約8000m

ドガアーーン!!!

《くそ、ガーゴイル6がやられた!》

《なんなんだこいつら!?結構すばしっこい上に強力なミサイル使って
くるのか!?確かこの空域はミサイルなどの兵器が不安定で使えな
いだって話だったよな!?!》

《たっ、助けてくれ!!!敵小型戦闘機が人型に変形してブリッジに張り
付いてr》

グシヤ

《クソ、キャツスル3がやられた!!こいつら厄介にも程があるだろ!?!》

《クソたれ!!年明け早々に厄介なことになったもんだなオイ!!》

そこでは凄まじい戦闘が行われていた……

見る限り輸送機と思われる3機（先程撃墜されて2機になったが）
の大型の飛行機を守るように周りで戦闘機が敵である小型戦闘機を
迎撃しているが、その小型戦闘機の人型への可変機能や性能に翻弄さ
れてかなり危機的状況であるようだ

《このままじゃ全滅する!!》

《そう言われてもあつちの方が動きが早すぎてどうしようもねえよ！》

そんな状況の中とある知らせが通信網に伝達されることになる……

《こちらキャットスルー!! 正体不明の新たな存在が2つ別々の方向がかなりの速度で向かってきている!! 一つは真下から! もう一つがデカイのが4時の方角から来てる!!》

《なんだって!!? ただでさえこの状況でヤバイって言うのに冗談じゃないぞ!》

《クソツタレめ!!》

その報告の反応は様々だが絶望感がさらに増していることが明白であつた……

そんな状態でも関係ないと言わんばかりにその二つの存在はやってきていた……

《まずは真下のやつから来るぞ!》

ブウウン!!

ドグアシャン!!

ドガアーーン!! ドガアーーン!!

その報告と共に何か輸送機の防衛側の敵である小型戦闘機一機にたいあたりをして破壊しながらレーザーのようなものを別の二機に撃ち込むとその二機は爆散していった……

《なっ、なんだあ!! 味方が来たのか!?》

《いや……アレは違う!? アレは!!》

その一瞬の出来事にその存在が味方であると言う期待が生まれたがその存在の正体を知るとすぐさまそれが儂いものであると分かつた、いや分かつてしまった……

《《《ゲエツ……! 万能者……!?》》》

それが防衛側……正規軍にとっては悪夢の存在である万能者であつたからだ

そしてそれを畳み掛けるように新たな報告が伝達された

《4時の方角のヤツも来るぞお!!》

ドガアーーーーーーン!!!

《ウワアアアアアアやられた!!落ちる!落ちる!》

《キヤツスル1!!!》

《クソ野郎!何がきやが...た...ん...だ》

《なんだあ...デカイ蜂かありや!!?》

その存在はキヤツスル1のコードネームを名乗っていた大型輸送機の主翼とエンジンを破壊し、落しながら現れた

それは正規軍の戦闘機であるスカイレイブンより大型であり、その姿は蜂を思わせるような形をしていた...

そして正規軍の戦闘機乗り達はその存在についていたとあるエンブレムが目が止まった...それは...

《《《て、鉄血!?!?》》》

《ヤツらいつのまにかあんなもの作ってたんだよお!?!》

人類の敵対している存在達...鉄血であることを表したエンブレムであった...

何はともあれ高度約8000mという空の戦場にてのちに「悪夢の初夢」と言われる大混戦が起きたということは言うまでもなかった...

(...アレ?なんかヤバいのがないか?...)
こりゃ初日の出の時間までに終わるか?)

※...お前な... (ビキビキ)

この小説を投稿したのが正月とかをかなり過ぎていてるのはご察してください（遠い目

上空 高度約8000m

そこはただでさえ乱戦状態であった戦場に二つのイレギュラーが乱入することで、カオスという言葉が似合う大混戦が起きていた………

ドガアーーン!! ドガアーーン!!

《万能者のヤロウがまた小せえヤツを二機叩き落としたぞ!!》

《ハハハ!!小さいヤツら万能者を目の敵にし始めてくれたおかげで俺らに回ってきてるのが減ってるからありがたいねえ!!まあアイツのことだからまだまだ安心できんがなあ!》

(ウオア!?白いのこっちに大量にきやがった!!やっぱアレか!?俺が初っ端に三機やっちゃったからか!?)

乱入してきたイレギュラーの一つである万能者は最初の先程の出来事が原因か定かではないが正体不明勢力の白い小型可変戦闘機の集団の攻撃の対象として襲われていた………

無論その集団の全てではなく一部は正規軍の大型輸送機や戦闘機の方に攻撃を仕掛けているが

そしてもう一つのイレギュラーは………

ズドオン!! ズドオン!!

(うおおう!?あぶねえ!)

ドガアーーン!! ドガアーーン!!

《え、ちよ待つてアッ………》

チュドアーーン!!!

《ガーゴイル5ロスト!!また守りが減ったぞこんちくしょう!!》

《あの鉄血のデカイやつここに居るやつ巻き添いお構いなしに万能者

を狙ってやがる》

鉄血に所属しているとされている巨大な蜂のような機動兵器・・・『大雀蜂』は周りのことをお構いなしに被害を出しながら万能者に攻撃を仕掛けていた・・・・・・・・・・

(あの鉄血のデカいの・・・・・・・・ひよつとして前に戦ったあの一つ目のデカイヤツの飛行版の類か？だとしたら厄介だなありや・・・・・・・・)

そんなことを考えていると

バシユ バシユ バシユ バシユ

ゴォー~~~~~!!!

白い小型可変戦闘機の集団が万能者を狙ってミサイルを一斉に発射してきたのだ

(つてミサイルの集中攻撃かよ?!そこまでのことやったのか俺!?!
・・・・・・・・やつてるよな・・・・・・・・仕方ない、鉄血のデカいのもミサイル避けている間に攻撃してくる可能性があるからここはプラズマフレアで対処するしかないか・・・・・・・・)

万能者はそう考えて次の行動にうつった

《すげえ数のミサイルが万能者に向かってんぞ!!流石の万能者もこりや避けられんか?》

《あのミサイルフレアとかほとんど効果ないしめちやくちや追尾してくるしな・・・・・・・・多分避けられんな》

バシユ バシユ

《つと万能者の背中中の固定翼のついたジェットパックのようなものからフレアの発射を確認・・・・・・・・とかアイツ以外と現代兵器に近いもの付けてるんだな》

《まあさつきも言ったようにあのミサイルフレア効果ないからな・・・・・・・・あまり意味はないさ》

正規軍の戦闘機乗り達はそう思っていた・・・・・・・・だが

《アレ?なんか普通のフレアよりなんか数多い上に随分長い時間空中に浮遊してないか?》

戦闘機乗りの一人がそのことに気がついたその時

ドガアーーン!! ドガアーーン!! ドガアーーン!!

ミサイルの群れがそのフレアの数に避けきれずにぶつかっていき爆発していった……

《……数のゴリ押しかよ》

更には

ドガアーーン!!! ドガアーーン!!!

万能者の後を追っていた小型戦闘機の集団もそのばら撒かれたフレアを避け切れずに接触していき、その機体からだを燃やし、あるいは溶かしながら爆散していた……

《……前言撤回、あれあかんヤツだわ……ミサイルどころか戦闘機の天敵の兵器だアレ》

その光景にその場にいた正規軍全員が恐怖を隠せなかった……

(とりあえずこれであの白いの群れの大半は倒せたな……周りで飛んでる正規軍?の戦闘機は現状俺を襲う様子はなさそうだな……となると一番の問題であるデカイのは……ありや何やつてるんだ?)

万能者が視線を向けた先には大雀蜂がその場にホバリングしたまま万能者の方を向いて待機している姿があった……(棒立ち?いや?なんか羽の前面部分が光ってる?エネルギーでも貯めているのか?……あっこれ嫌な予感がする)

そう考えた瞬間万能者はすぐさま『大雀蜂』の正面から逃げようとした

《おい、あの鉄血のデカイヤツなんかしようとしてないか?》

《万能者がアイツの正面から離れていったって……いかに!!総員急いであのデカイヤツの正面から離れるんだ!!》

大雀蜂の様子と万能者の行動のことから大雀蜂の正面にいたりやばいことが起こると気付いた正規軍もそこから離れようとしたが少し遅かった……

大雀蜂の巨大な翼の前面部分から大量のレーザーがまるで横から来る雨のように襲ってきたからだ

ドガアアアアアア!! ドゴオオオオオオ!! チュドoooooooooo!! ドガアアアアアア!!

《ギヤツ!!?》

ドガアアアアア!!

《イ"エ"ア"ア"ア"ア"ア"ア!!》

チュドoooooooooo!!

《イジエoooooooooo!!》

バシユ ドゴoooooooooo!!

《うわあ掠った!! ヒエエエエエエエエエエ!!》

《そんなもん大型機に撃つんじゃねよおお!! (ドゴオン!!) うわあまた機体に被弾した! ダメコン急げ!!》

《全機気合と根性で避けるオオオ!!》

《無茶言うな!!?》

その横から来るレーザーの雨は正規軍、正体不明勢力、万能者に襲いかかって来る形となり、大半はその雨に貫かれて爆発四散、又は堕ちていき、僅か少数は掠りながらもその雨を避けていった………その地獄絵の中万能者はレーザーを避けるあるいは自らの装甲で弾いていた

(どわあー!!? 多すぎるわああ!!? これだと装甲がないフライトパツクの部分に当たってエライことになる可能性があるから避けるしかねえ!!)

そんなことを考えたがふと思った

(………そういえばあのデカイヤツは?)

その方向を向いた………そこには『大雀蜂』が蜂の尻尾の針にあたる部分に存在する砲……レールガンの砲身を万能者に向けていた

(ヤバい!!)

すぐさま万能者は両手に持つレーザーアサルトライフルを乱射するが

その攻撃をもろともせずただレールガンを砲身を万能者に向けて

いた・・・・・・・・・・

(あ、コレ喰らうやつだ)

その瞬間

ズドオオoooooooooooo!!!

レールガンからとてつもない速度の砲弾が万能者に目掛けて放たれた

10分後・・・・・・・・・・

大混戦から離れた空域にて・・・・・・・・・・

そこではわずかに生き残った正規軍空軍が編隊飛行で自軍の損害の確認を行っていた・・・・・・・・・・

《生存しているガーゴイル1:3:4:9のみで後は撃墜されたってことでいいよな？緊急脱出したヤツは回収部隊に任せるしかないな・・・・・・・・・・》

《こつちの方は重要防衛対象が2機落とされて1機が損傷がひどいものの生き残って飛んでるから・・・・・・・・・・一応任務達成だがあまりにも辛勝すぎるだろ・・・・・・・・・・》

生き残った戦闘機乗りの一人はその状況にため息を吐くしかなかった

《いや、まだ分かんぞ？重要防衛対象の輸送機の3機のうちどれか1機に入っている機密物資を運ぶことが任務だったからな？それが落とされてたら任務失敗だからな？》

《うへえ・・・・・・・・・・最悪だ》

《マジかよ・・・・・・・・・・》

《お前ら万能者にある意味感謝しなければならんぞ？アイツが乱入しなければ俺らはあの正体不明勢力に殲滅されてたからな》

《とんだ疫病神な恩人がいたもんだ・・・・・・・・・・》

《それプラスあんなのも来たしな・・・・・・・・・・》

《二度とこんな任務はやりたくないもんだ》

そんなこと会話がされつつも彼らはその任務を成し遂げる為に自軍の空軍基地に帰還していた……………

余談ではあるがその大型輸送機の護衛任務は成功していたことが分かり、生き残り全員が報酬として特別ボーナスと1週間の休暇をもらうことになったの別の話である……………

大混戦のあった空域にて……………

(めちやくちやいてえ……………思いつきり土手つ腹にデツカイレールガンの弾がガツンと喰らったなオイ……………)

そこで万能者はホバリングをしながら自身の状態の確認をしていた……………

その視線の先である万能者の胴体には追加装甲が粉々に砕け本体の装甲は大きくヒビ割れながら凹んでいた……………

(アイツ、俺にダメージを与えてから反撃を恐れたのかすぐに撤退していったみたいだが……………鉄血も本当に厄介なヤツ作ってきてるな……………こりや色々対策を練っておかないと後々まずいことになるな……………)

そう考えていると目に明るい光が刺してきて、その光源の方に目を向けてた

(……………年明け早々幸先の悪いことが起こったもんだが、まあとりあえず当初の目的は達成できたな)

そこには眩しい光を発しながら太陽が地平線から顔を覗かせ始めていた……………

(まあとりあえず正月らしいこともできたし、ついでに願つとくか……………今年もなんだかんだで結果的にはいい年を過ごせますように)

そう思いながら万能者は太陽に向かって手を合わせて願った

※この為に不幸な目にあったものに幸運がありますように……………

(遠い目)

そのまた別の空域にて

機体状況 良好

各部システム 良好

武装・補助モジュール 良好

システム異常ナシ

目標：今回ノ戦闘デ得タデータヲ持チ帰ル

本機ハ進路ヲコノママ △△地区ニ帰還

その空域で大雀蜂は自軍の基地に向かって飛んでいた
今回の戦闘で得たデータを今後に活かし、いつの日か万能者を倒す、
その目的を達成するために

後日そのデータで良くも悪くも鉄血に影響をもたらすことになる
のだが別の話である

事案に困る例って色々あるけど実際に起こった場合は本当にどうすればいいんだろうね？（遠い目）

前回の大混戦『悪夢の初夢』から数日後

正規軍 最重要研究施設

「どうだ？頼んでいたものの解析は？」

「今絶賛総動員でやっていますますがまだまだかかりそうです……」
幹部クラスの軍人と思われる人物の視線の先には何やら巨大な機械のようなものにここで働く研究者が群がるように集まって調べていた

「まあ無理もない……あの遺跡から埋まっていたものを引っ張り出して空輸してきたものだからな……」

「例の万能者が出てきたとされる遺跡のものですからね……何があってもおかしくないですから慎重にやっています……まあ慎重にやってもなんか厄介事が起こる気がしますね……」

（……実際空輸任務で例の組織と万能者+ α との遭遇という厄介事が起きているけどな……）

そう言いながら過去の万能者によって起きた事件の数々を思い返した研究員と軍人の二人は遠い目になった

「……まあ持ってきたコレが万能者の対策の何かしらのヒントになれば、こちらとしても助かるからな……それまでの辛抱だな」

「……ええ、そうですね」

彼らが期待するそのナニカはどのような結果を引き起こすのかはまだ誰も知らない……

その結果が喜劇であろうとも悲劇であろうとも……

鉄血最重要大規模基地 司令部

「……………厄災との戦闘データはこのような感じですか……………」
その部屋で鉄血ハイエンドモデルの代理人は『大雀蜂』がとつてきたデータを確認していた

「厄災にダメージを与えるなどの戦果は上々でしたが、やはり『サイクロプス』と同様に万能者を目の前にした時の行動などに問題がありませんね……………これを改善案に入れるとして……………」

代理人はその言葉を何故か途中で止めた
そして、周りに誰もいないことを確認すると

「おつしやああアアアア!!!」

突然叫び声をあげたのだ

「ざまあみなさい厄災!!我々鉄血は今まであなたにやりたい放題されていましたが!今回ばかりは私たちの勝利です!あなたにやつと借りを少し返せましたよ!!」

今まで貯めていた怒りや悲しみなどが仕返しができたことにより
一気に吹き飛び、罵倒や愚痴などを代理人は隠れて笑いながら吐き出していた

「……………代理人色々溜まってたんだね……………」(憐みの目)

「……………うん、そうだな」(遠い目)

その様子を扉の隙間から確認していたデストロイヤーとハンター、
アルケミストは代理人の行動に憐れむしかなかったと言
う……………

破棄された街 廃工場

(どうしてこうなった!?)

万能者は今現在迎えている今までで一番危機的状況にそう思うし
かなかった

現在万能者の姿は装甲がない姿……………言わば人間で言う骨

と少々の筋、内臓というグロテスクな姿で、更に言えば武器などになにも装備もしていない状態であった……

(と、とりあえず話し合ってみよう、うんそうしよう)

そんな状況でそう思い立った万能者は目の前の存在に会話を実行した

その目の前の存在の姿は肌色に近い髪色のロングヘアで前髪左側と横髪の先端が赤く染まつており、目は赤色でと言う顔立ちでスカルマスクとメインカラーが黒でサブカラーが赤の前開きパーカーと言う一風変わった服装をしている少女がそこにはいた……

そのままで見れば美少女の類に入るのであるうことは万能者の感性からでも分かっていた……だがその少女が今……

オメメキラキラ

ハアハアハアハア

ワキワキ

目をキラキラと輝かせながらまるで発情しているかのように頬を赤く染めて息を吐きながら、指をワキワキさせながら万能者にジリジリと迫っていた

ちなみだがその後ろには無残にも色々な箇所がえぐられまくっている鉄血の戦術人形の死体があったりするのだが余談である

「そののサイk……お嬢ちゃん？そんな感じで近づいてこられちゃったらびびって話もできやしないよ……とりあえずそのワキワキと指を動かしている手を下ろして頭とか精神とかをリラックサさせて落ち着いてから話をしようか？OK？」

万能者は目の前の少女にこれまでにないほどの恐怖を感じてパニックになりつつも頭の中でまだ冷静な部分から言葉を捻り出して口に出した

そして言葉から返ってきたのは……

「NOだよ!!!」(バア!!!)

拒否の言葉と某怪盗三世もビックリの飛び掛かってダイブして
る行動であつた

もちろん服とかは脱げてないのでご安心を

※安心できるかアアアアア
!!!??

「ちよ、即答で拒否!? って待つて

!!!???

ア”ア”ア”ツ”ツ”ー”ー”ー”ー”ー”ー”

その日その廃墟にて絶叫にも等しいほどの悲鳴が響き渡つたのは
言うまでもなかつた………

話が凄まじい勢いで進む時ってかなりビビるよね……

破棄された街 廃工場

「え、えつと……この状況をどうすればいいんでしょう……？」

黒のセミロング、正面から見て右前髪一部を黄緑色に染まっているのが特徴的な少女……『M4A1』は目の前の光景にオロオロとしながら戸惑っていた……

そしてその近くでは

「ヒイ……ヒイ……だ、ダメだ……笑い死ぬ……ハハハハハハ」

腰まであるロングヘアを三つ編みにしてまとめ、正面から見て前髪左側の一部と左側横髪の一部を黄色に染めているのと右目に眼帯をつけているのが特徴の女性『M16A1』はその光景にのたうちまわりながら笑いまくっており

「……ピンク色のロングヘアとその右側にアクセサリをつけたのが特徴の少女『ST AR-15』と黒いロングヘアを前に下げ正面から見て左側の前髪を白く染めており右目がオレンジ、左目が黄色のオッドアイの少女『RO635』の二人にいたっては目の前の光景に理解が追いつかずフリーズをしたかの如く真顔で固まっていた……」

そんな混沌とした状況を生み出すことになった元凶であるM4A1率いる『AR小隊』の見た光景は……

「ねえ？これもいいかな？」

ビギイ ゴキヤ

「ギヤアアアア!!そこはダメだって!!そこエネルギーのバイパス用

の線の根本があるところ!!それいじつたら高出力のエネルギーが周囲に漏れてどえらいことになるから!」

「じゃあそこがダメならここをもいいよね!!」

グシヤ パキヤ

「ドギヤアーン!!?おまつ、そこ!!動力で発生した過剰エネルギー保存用の小型大容量バッテリーの一つ!!?もつとあかるところじゃねーかあ!!!さつきエネルギー逆流してえらいことになりかけたから!?!と言うか俺の身体の中身を

いじるな!!もぐな!!とるな!!破壊行動自体をするなああアア!!」

それは装甲が取り外された姿の万能者にAR小隊の一人である少女『M4 SOPMOD II』が目をキラキラと輝かせながらしがみつきながら万能者の身体の中身を掴んだり、いじつたして、それを万能者が様々な手段で引き剥がそうとするも下手すると中身にダメージを与えてしまうということからうかつに引き剥がせないという更に混沌としている光景が広がっていた……

「そこもダメえ!?! ……じゃあここならいいでしょ?」

「だからダメだって言ってるだろうがアアアア!!」

そんな感じの状態からM4 SOPMOD IIを除くAR小隊がM4 SOPMOD IIを止めに入るのに時間がかかったのは言うまでもなかった……

しばらくお待ち下さい……

「SOPがこんなことしてしまっ………本当にすみませんでした………」

M4A1とRO635の二人が万能者に綺麗な土下座をして……

その後ろの方では……

「アンタね．．．何ヤバいことをやってんのよ!?あの万能者よ!?下手したらこっちがヤバいことになる可能性があるじゃないのよ!!」
「そのなんて言うか．．．あの身体の中身見たことのない機械ばっかりで．．．好奇心とかを抑えられなかったの．．．」
「その好奇心でヤバいことになりかけてんのよ!!」
ズゴオン!!
「イターーイ!!?」

「ヒイ．．．ヒイ．．．まだ．．．笑いが．．．止まらん．．．腹が．．．痛い．．．ハハハ．．．ヒヒヒイ」

M4SOPMODIIを睨んでるAR―15とそのAR―15に拳骨されてその痛みに頭を抱えて蹲っているM4SOPMODIIと先程まで笑いまくっていた状態から完全には立ち直れていないM16A1の姿もあった

尚万能者の姿はあのままの姿だとまずいと思ったのか装甲が張られたいつも通りの姿になっているのは余談である

その様子を見た万能者は

「．．．．．本当なら確かSOPって言うんだっけか? そのお嬢ちゃんが謝る様子がなければオハナシとお仕置きとして拳骨ぐらいお見舞いしようと思ってたが．．．二人の土下座と後ろの様子を見てなんかどっと疲れたから何もしないでおくよ．．．まあ自身の整備中で無防備な状態の時にち合つた俺も悪いといえは悪いからな．．．若干お嬢ちゃんに恐怖を抱いたのもあるがな．．．」

疲れた感じをだし、遠い目をしながらそう言った．．．

(あ、この人ぶっ飛んではいるけどなんだかんだでいい人なんだ)

RO 635とM4A1はその事を聞きそう思った

その後．．．

「とりあえず今日のところはここで一緒に一夜を明かすって事でいいかな?」

「はい!!」

そのような結論に至った

(待って、なんでそうなったの?)

※自分もそう思う(真顔)

その結論にAR―15は心の中で突っ込んだとかないか……

話って時々ぶっ飛んだ形になる時ってあるよね……そしてそうゆう話は着地点がとんでもなかったりする（遠い目）

廃工場

『やははじめましてだね万能者……いや私たちがそう呼んでいる未知の存在って言えばいいかな?』

「まあそっちの定義で考えると大体合ってるな……えつとアンタの名前は……」

『ペルシカ、16LABの研究员よ』

「ああそうか……はじめましてだなペルシカさん、俺のことはそのまんま万能者って呼んでもらって構わんよ」

『あらそう?なら万能者さんと呼ばせていただくわ』

そこでは万能者とホログラムに映し出されている女性が話し合っていており、AR小隊はその会話を見守る形で見ていた……尚一名(M4SOPMODII)は鉄血の死体に夢中でもう一名(AR-15)は周辺の偵察にいつている

『突然だけでもこっち(IOP本社)に来てからあなたを解体・解剖して解析させてもらっていいかしら?』

((ストレートに言った!!))

※ドストレート!!?

「お前は何を言っているんだ?……いや、ど直球に言うなアンタ……もちろん返事はNOと答えておこうか」

((ですよね……))

その回答にAR小隊(一名除く)は納得せざる得なかった……誰が好んで解体・解剖をされたがるのか……そういうのは一

部の変わった存在しかいないことなのだから……

『冗談よ．．．手を出したら何をするか分かったもんじやないあなたに流石にそんなことをするわけにはいかないわよ．．．』
「ひどいいいようだがいままで俺がやってきたことを考えると大体合ってるからな．．．ちなみに本音は？」

『本当にやりたい』

「素直だなオイ!!．．．ホログラムからでも目に解体・解剖って文字が浮き出てるよ．．．」

(((ペルシカ「さん」．．．)))

初っ端からぶっ飛んでいる話にA R小隊(二名除く)は早くも戦術人形故に感じないはずの疲れを感じていた．．．

その後．．．

『あなたリホーマーと繋がっているんでしょう？リホーマーこっちで捕まっているわよ』

「ブウ!!あの人なにやってんの!? ．．．多分持ち前の運が悪さで捕まる原因ができちゃったんだろうけど．．．」

『その様子だと繋がっているようね．．．』

「．．．あ”っ．．．俺が関わっていることを機密という方針でリホーマーさんをいい方でなんとかしてもらって構わないか？」

『．．．ええ、いいわよ．．．うかつに解体とかをやるとアナタに何をされるかわからないからね．．．』

「．．．ご協力感謝します」(土下座)

(((．．．いろいろとあっちこっち大変なんだ「な」．．．))
「こんな話や

「そういえば聞きたいんだけど」

『なに?』

「アンタらが作ってる少女の形で作ってる戦術人形の容姿って．．．もしかして趣味とか性欲関連の本能とかなんとか

で決めてるのか？」

『ええ、全てがそうではないけど一部はそうわよ』

「そうか……なんとなく俺を作ったところの奴らと同類の気配を感じてたが……やっぱりそうだったか……」(遠い目)

(「ああ……似てる人「同類」がいたのね「な」……」)
こんな話など様々な会話が続けられていった……

しばらくして……

『あら？もうこんな時間？』

「ありや？結構長い間会話続けていたか……」

(「やっと終わったの……?」)
(404の二人が万能者の話になる理由がなんとなく分かったな……まあかなり面白い話も混ざってた分楽しめたけどな)

(「……この人？も様々な経験していたのね」)

「やっと終わったの？待ちくたびれちゃったよ……」

それぞれが様々な感想を抱きつつも会話を終わりが見えたことによつて内心ホツとした……だが

「なあ、ペルシカさん？聞きたいことがあるんだけど」

『何かしら？』

「AR小隊って今任務の終わりの帰還中で今日はここで待機させる予定だったのか？」

『……任務内容は伏せるけどそうわよ、それがどうかしたの？』

「……そうか」

その回答に万能者は少し考えた後

「なら、俺がAR小隊が帰還するのを援護するなり、なんなりと手伝おうか？」

……

誰もが理解するのにならなくの時間を要するほど爆弾発言であつ

た???.

「!!!」

「え!!」一緒に来てしてくれるの!？」

『!?.理由を聞いていいかしら』

その言葉に驚きつつペルシカは理由を聞いた

「いや、形的には俺任務の邪魔をしてしまったみたいだし.この辺通信は届くけどヘリとかを飛ばすにはかなり辛い環境なんだろう? だったら会話を楽しめたお礼とそのついでに罪滅ぼしを兼ねて手伝おうかと思つてな.まあ個人的な部分も多少あるが.ちなみに行つておくが今回はアンタらグリフィンとIOPには行かない方針でいいかな?」

その理由にペルシカは少し考えた後に.

『.ええ、彼女達のことを頼むわね』

許可をした

「おう、了解した.それじゃAR小隊の回収予定地やら、そのルートの手順を教えてもらえるか?」

『分かったわ』

「ペルシカさん!!」

「やったー!!! ペルシカありがとう!!」

「え、えつとよろしくお願いします?」

「ハハハハ、面白くなりそうだな!!」

そして.

「そんじやまあ.」

「とりあえず今日のところはここで一緒に一夜を明かすつて事でいいかな?」

「はい!!」

(待つて、なんでそうなの?)

偵察から戻ってきたAR-15はその出来事に理解するのにかかる時間がかることになったのは余談である

人生思わぬ再会とかあるけど、再会したくないヤツつているよね……………

気候不安定地帯 廃墟街

そこは第三次大戦以降からどういいう訳かは不明であるが気候が非常に不安定になりやすく、嵐や強風が起こりやすいため航空機などが飛ばすことが非常に難しい地帯であり、様々な調査が行われたもののその正体は一切不明で、特異な自然現象とされている

災害の爪痕がいくつも残っていることがみて分かるそんな場所をAR小隊達は進んでいた……………

「M16姉さんこつちには異常はないわ」

「こつちも異常なしだ」

「こつちもよ」

「こつちもー!!」

「こちらも異常なしです」

それも鉄血などの敵対対象があるかどうかの確認をいつものように慎重に進めながら……………

しかし、今回はいつもとは違った部分があった……………

「こちらも異常はないようだ、これでアンタらの回収地点にさらに近づけるな……………がここまで何もないと逆になにかあるんじゃないと心配になってくるなこりゃ……………」

それは2mぐらい大きさの人型のロボットのよう存在……………人類側からは「万能者」とよばれている存在が彼女達について来ていることだった

「万能者さん確認ありがとうございます。引き続き周囲の警戒をお願いします」

「了解、そちらも注意しておいてな」

「そちらこそな！」

それぞれ違った個性を感じさせる5人の少女達と明らかに正反対ともいえるロボットののような存在が話し合っているという奇妙な光景がそこにはあった

そんな光景が切り替わったのは数時間後のことだった

「……………うん？なにこれ？」

M4SOPMODIIは偶々そこに落ちていたものに目がとまった

それがなんとなくではあるが彼女にとって見覚えがあるものであるような気がしたのだ

そして、それを拾い上げてその正体を理解した

「あつこれ鉄血の戦術人形の部品じゃん」

「……………ツ……………!!!」

それは鉄血がここに来たことがあると言う証拠でもあった

その言葉にM4SOPMODIIを除くAR小隊はすぐさま周囲の警戒を強めた

「うん？鉄血の部品？ちよつと見せてくれ」

万能者はそれを尻目にM4SOPMODII元へ行きその部品を見た

そして数秒も経たずに彼からこんな言葉が出てくることになった

「……………AR小隊の皆さん、今はこの辺に鉄血はいなさそうだよ」

「……………え？」

その言葉にAR小隊は戸惑いを隠せなかった

「まあとりあえずあつちに歩きながら話して行こうか」

「え？ちよつとまって下さい、今話さな」

「…………まあ待てよ…………アンタの言う通り話しながら行くか……………なあ？いいだろうM4」

「……………ええその方針でお願いします」

「……………ありがとう」

万能者とAR小隊は話しながら歩き始めた

「……………あの部品は確かに間違いなく鉄血の部品だった……………ただ数ヶ月は放置されてみたいだがな……………」

「じ、じゃそれだと今その近くに鉄血がないことの証明にならないじゃないですか!!」

「RO落ち着け……………アンタ、私達の知らない方法ですぐに近くの探知を行なったってことだな……………それもあの部品を調べながらな」
「当たり前だ……………その方法に関しては割愛させてもらうが、あの時周囲をすぐに探知を行なったよ……………結果としては間違えなく鉄血『は』いなかった」

「でもそれならなんで歩きながら話し合わなきや行けないの?」

その答えにM4SOPMODIIは今やっている行動に疑問を持った

そしてその疑問に万能者は答えた

「そう……………確かに鉄血はいなかった……………鉄血『は』いなかった……………」

「……………鉄血は?」

その言葉にAR15、M4SOPMODIIは疑問を再び抱いたがその他のAR小隊はその言葉の真意に察せた

「……………あそこに破棄されているが使えるような軍用の車がある、それをさつさと動かせるようにしろ……………急げ!!俺がそれまで見張る!急がないと『ヤバイヤツら』がくるぞ!」

急に声を荒げた万能者にAR小隊は驚きはしたものの今度は全員が気付くことになった……………万能者がわざわざ回りくどい形で車

の方に誘導した理由を………万能者ですら焦るレベルの存在がすぐ近くにいる事を

「SOP車をすぐに動かせるようにして!!運転はM16姉さんお願い!!他は車の周りの周囲を警戒して!!」

「了解!!」

「分かったよ!!」

そこからの行動は早かった

命令されたM4SOPMODIIはすぐさま車に乗り込み鍵の部分を取り外して鉄血の解体で培った技術で配線を繋いで車を動かせるようにして、他は車に乗り込みつつ持ち前の練度を活かして周囲を警戒していた

『ヤツら』がくるぞ!車は動かせるか!?

「おう動かせるぞ!」

「はい!!大丈夫みたいです!」

その返事に万能者は少し安心した

「よし、すぐに出せ!!俺はホバーでついてくる!」

「わかった!おし、出すぞ!」

「M16姉さんお願い!」

「了解!!」

「しゅっぱつしんこー!!」

すぐに車は元気よく動き出し、凄まじい速度で走り始め、万能者はそれを追う形で脚部の格納式フライトシステムを起動させて追尾していった

それと同時に周囲の建物から何か黒い波のようにゾロゾロと溢れるように出てきたのだ

「なにあれ!?!」

「くそ!やっぱリアレだったか!!死にたくなきゃ急げ!!考えもしたくない死に方をする羽目になるぞ!!」

「万能者さんアレと戦ったことあるんですか!？」

「ああ、アレらとはちよつと地下におつた時に遭遇してな……えらい目にあつたよ……」

(ブーンブーンブーン)

「……見た目もアレだがあんな感じで飛んでくるし待ち伏せやら奇襲やらもやってくるからな……」

「知っているならあいつらからの逃走方法は？」

M16はその言葉に解決策があると考え万能者に聞いた

その言葉に帰ってきたのは

「いや？あの時は地下という逃げにくい場所だからこそ無理やり脱出する方法を使えたから逃げれたってわけであつて……この地上の廃墟街という場所ではアイツらが足が速く、数が多い上に情報伝達がうまいときてるから逃げる術がほとんどないに等しいんだよ……」

否定的な言葉だつた

「……マジか」

「そんな……」

「えー……」

その言葉にAR小隊(発狂状態の二人を除く)は若干絶望味を感じた

「まあ……俺だけの場合で逃げるのであれば無理やり空飛んで逃げるという手段があるが……流石に護衛対象見捨てて逃げるのはな……」

そんな様子を見た万能者は慰める(慰めになってない)かのようにそんな言葉を発した

「……あの……万能者さんその言葉本当ですか？」

「うん？ああ本当だがそれがどうした？」

M4A1はその答えに少し考え……

「私が今から言うことを実行できますか？」

その存在は過去に我々に屈辱的敗北を与え、逃げた存在であり、我々が絶対に喰らわねばならない存在であり、今回我々の縄張りに迷い込んできた存在でもあった

見つけた　今こそ我々の再興の時　絶対に喰らわねば

それは我々全員の総意の決断であった

そしてどうやら例の存在はあの時の存在とは別の獲物を連れており、行動を見る限りそれを守りながら逃げている様であった

ならそれを利用して全て捕らえるまで

そう思った矢先

そこには獲物達と例の存在が奇妙な行動を始めたのだ

例の存在が獲物達が乗る『走る箱』に近づいて持ち上げ始めたのだ

「本当にこれで飛んでいいんだな!?どうなってもいいんだな!?これがチで安定しないんだが!!」

「だ、大丈夫です……とと、バランスが……」

「ウお!?しっかりその辺のものに捕まらないと危ないなこりゃ」

「何!?何!?今度はなんなのよ!!」

「う、浮いてる!?って万能者さん!」

「あ、二人とも元に戻った」

「そっちの隊長さんの言う通りとりあえずやっているが、車を四本腕で持って飛ぶが、その間俺自身は最低限しか援護できないからな!一応アンタらがでも使えるやつ俺のレーザーライフルを渡しているが、飛んでいる間は自分の力でアイツらを迎撃してくれよ!!」

「えっ飛ぶってちよつとまっせ」

そこから出来事は早かった

例の存在が『走る箱』を持ちながら空をゆっくりながらも次第に早く飛んでいったのだ

マズイ

我々はそう思い慌てて覆いかぶさる様に捕らえようとするも

善意は時に他人を傷つけたり、被害を与えたりする凶器になることがある……割とマジで（遠い目

AR小隊回収地点から 15km地点にて

「えつと……その……本当にすまない……」

そこは気まずい雰囲気でも静かだった……

その中でM16の発した言葉はよく周りに響く様に聞こえた

そして、その対象は……

「……うん気持ち悪くなったのは仕方ないよね……そりやあんだけ揺れてりや気持ち悪くなるよな……でもね……大地へ還すならねもうちよつと位置を変えてから還して欲しかったな……あの状態で俺の顔とか重要なところなんかにあたりでもしたら大変な事になるの確定だからね」

そう言いながらその対象、万能者は自身の右脚のスネに当たる部分をその辺に落ちていたタオルで磨いていた……それもかなり念入りに……

「……本当にすいませんでした」

M16の土下座姿に仲間であるはずのAR小隊の方からも哀れみの視線が突き刺さってくるのは言うまでもなかった……

しばらくして……

「……つとここから5〜6km先がそつちの回収地点だったか？」

「ええ、そうですね」

「もうすぐ到着ですね」

「長い様で短かったね——！楽しいことたくさんだったな」

「私は散々だったわよ……特にあのELIDのゴキブリの大群……二度と姿すら考えたく無いわ……ああ、ま

だ寒気がする……」

「……………そう言っているとまた遭遇する様な気がするんだがな……………まあそういう俺は二度目だから二度あることは三度ある感じでまた遭遇するかもしれんな……………ウオウ……………俺も寒気がしたよ……………」

「それを言うのをやめて」(真顔)

そんな会話しつつも彼女達、AR小隊は近づくにつれ、彼との別れも近いと感じていた……………

その存在をなんだかんだで色々とありつつも頼りになる上に命を助けられたこともあり一定の信頼し得る存在と思える様になっていったのだ

そして……………

「よし、この辺でアンタらとおさらばせにやなら時がきたな」

その時が来た

「……………そうか……………アンタとは短い間だったが色々あったからいざ別れるとなると少し寂しくなるな……………」

「M16姉さん……………」

「まあ確かに頼りにはなったわね……………」

「そうですね……………」

「……………おじさんともお別れなのか」

「……………そんな時もあるもんだ……………まあもし次会う時はゲロをぶつけんでくれよ……………おじさんって呼んだりしないでもらえると嬉しいがな」

「……………悪かったって」

「えー…?なんでなの?」

「主にメンタルでの面で……………とにかくお願いだから頼む……………」

ああ、それとM4A1さんだっけか?コレ渡しておくよ」

その言葉と同時に万能者はM4に何かを投げ渡してきた

「えつちよ……………ウワア!?……………これなんですか?」

それは何か通信機の様なものであったが、M4の記憶の限りではこれと同じタイプの通信機を見たことはなかった

「それは条件付きではあるが俺への直通で繋がるようにした通信機だ……まあアンタらのことを少し気に入ったのが理由って感じだ」

「「……え??」」

「え?つまり言うとおじさんとまた会うことができるかもしれないってこと!?やったあー!!」

「だからおじさん呼びはやめて……」

「え、えつとこんな物をもらってもいいのですか……?」

「アンタらのことを気に入ったからいいって、まあ要するになんかヤバいことがあったときは俺になんか頼ってもいいってことだ……無論無理な時は無理とは言うがな……簡単に言うとは傭兵みたいな感じの立ち位置で考えてもらっていい」

それはとんでもないことであると言うことがM4 SOPMOD IIを除くAR小隊全員が分かった……

だが、その言葉にM4は……

「……わかりました……コレはありがたく使わせていただきます……ここまでの護衛本当にありがとうございます!!」

その善意に笑顔でお礼をいい受け取った

「まあとりあえず今後会う時は敵が味方かは分からんが……とりあえずは味方よりは会えるかもしれない……それじゃ俺はこれでサヨナラだな……元気にな!!」

「「えつ……ちよつと待って(待て)」」

!!!!???

(放心状態から立ち直った

「おじさんまたねー!!」

「だからおじさん言うなって!!」

その後結局、その通信機はA R小隊の手に渡ることになりI O P、グリフィンなどにとっては喜ぶべきことでもあり、同時に頭を痛めることになったのは余談である

昔のファンタジーって色々とホント容赦よなうって思
う時がよくある

溪谷地帯 廃村

それは突然のことだった……

「なっ、なんなんだコイツは!？」

そこにいた巨大な鎧のような存在……P・A・C・Sのパイ
ロットは目の前の存在を確認してこう呟いた……

そして、それは前の存在以外の周り全ての存在も同様の考えであつ
た

グルルルウウウ………

それはP・A・C・Sの大きさを軽く超えた巨大な生物であつた、
まるでファンタジーの小説から飛び出してきたかのようなワイバー
ンの様な骨格で、デカイクチバシが特徴的な鳥の様な姿をして目の前
に姿を表していた

ギユオオオオオオン!!!

その大きな咆哮と共に蹂躪が始まった

同時にそれは人類人権団体過激派の中規模輸送部隊の悪夢の始ま
りでもあつた

1時間後………

パパパパパパパパパッ………

「………なんか騒がしいなと思つてきてみれば………
何このスプラッターな現場………何? 怪獣かゾンビ映画の撮影で
もあつたの? それとも本物? ……うん本物だなこりゃ」

万能者はその凄まじい残虐な現場跡を見ていた………

少し遠くではそれと関係あると思われる存在達がまだ争っているようであった

「この強化外骨格は倒れた際にデカイハンマーかなんかで中身ごと潰されてて、こっちは横からデカイなんかでフルスイングされて横に潰れる……さらにはこの歩兵戦闘車が爆発四散してるが……ホントに何があったコレ」

万能者が確認する限りだれもこれも普通ではありえない程の力、火力によって破壊された兵器、殺害された亡骸……そして

「……極め付けにこの泣き別れて下半身どっか行つた死体に明らかに普通の生物が持つてたらあかんレベルの大口の噛み筋あるな……」

無残な死体や足跡、痕跡などから分かつた明らかにイレギュラーとも呼ぶべき何かがあったこと、そしてその少し離れたところにいることが確定的だった

「……しょうがない調査の一環として見に行くしかないか……その正体不明の存在に関して」

万能者はそういうとその廃村から離れ、その存在がいるとおぼしき今なお銃声が響く戦場へと向かつた……

溪谷地帯 崖の横道

ドドドドドドドドドドドドツ!!

「ちくしょう!!空を飛んで追つてきやがったぞあの鳥のバケモン!!!」

「くそこんな豆鉄砲じゃ効きやしないよ!!」

「対空ミサイルはあん時の襲撃で倉庫とトラックもろとも吹っ飛ばんじまったし、銃ぐらいしか抵抗できるもんがねえ!!」

「(ドガアーーン!!) ギャ……」

「……くそ、後続のトラック一台が集合棺桶で火葬いらすになつちまつたぞ」

生き残った人類人権団体過激派達絶望的な状況に何か手はないかと考えるも手詰まりであることしか頭に浮かばず、刻一刻と目の前の死神の鎌……鳥のバケモノの口から吐き出されかけてる火炎球が自身達にを待つしかなかった……

ドガアーーーーーン!!!

「……………アレ？俺生きてる？」

「おかしいな……………途中でアイツの吐いた火炎球が爆発したようにみえたんだが」

「奇遇だな俺もだ……………ってことは途中なんか当たったのか？」

突然の死までのカウントダウンがストップしたことにより若干戸惑いつつも目の前の火炎球が爆発して煙で見えなくなった鳥のバケモノとその地点に目を向けた……………

煙が晴れそこにいたのは……………

「ヨモヤ コノヨウナ ソンザイ ガ ソンザイ シテイタ トハ
…………… マツタク ヨ ハ セマク ソシテ ヒロイ ナ」
にっこり笑顔（オリジナル笑顔）で鳥のバケモノを見ている蛮族戦士だった

「……………オイ、バケモノに更にバケモノが追加されたんだけどなんかいうことあるか？」

「……………泣きたい」（真顔）

「勝った方が我々の敵になるだけです」

「どこの映画かな……………現実じゃなきや見たいんだけどな……………」

「残念ながらリアルだ……………よかったな、特等席だ」

「oh……………」

人類人権団体過激派でそんな会話がされつつも蛮族戦士は右腕の漆黒とも言えるほどに黒い大剣のようなものを鳥のバケモノに構えて始めていた

その鳥のバケモノは己の行動に邪魔をされたことにイライラしている様子で蛮族戦士を睨んでいた

「・・・・・・・・・・ サア ハジメヨウ カ・・・・・・・・ ツヨキ
トリ ヨ オモウゾンブン シアオ ウ」

ギユオオオオオオンン!!!

それが死合開始のゴングにでもなったのか二つの存在、蛮族戦士と鳥のバケモノ・・・・・・・・【黒狼鳥イャンガルルガ】と呼ばれている存在の死合が始まった

「(ナニアレスツゴクムシシテドツカニニゲタイ)」

それを遠くで確認していた万能者とあるG & K社の戦術人形は同時に同じことを考えたのは余談である

ガシッ

蛮族戦士は噛みつきを避け、イヤンガルルガの頭に張り付いた

「サラバ ダ フウン ナ ツワモノ ヨ ワレ
ノ カテ ト ナレ」

グザッ

大剣は目玉に向けて突き刺され頭の中身を切り開きながら進んで
いった

ゴギヤ

そして、蛮族戦士が大剣を捨りながら抜いた

流石のこの世界でイレギュラーとも言えるモンスター『イヤンガル
ルガ』も頭の中身をズダズタされては無理だったのか
ズゴオーーン

そのまま断末魔の叫びもあげられずに倒れ伏した

人類人権団体過激派達は目の前の事に喜ぶ事ができなかった

その鳥の化け物が忌々しい怨敵で倒されたとしてもだ

次は俺らの番なのか

鳥の化け物を倒した存在が人類の敵であるEILD『蛮族戦士』を
目の前にして、そのことしか考えられず絶望せざる得なかった

「. ミテイタ ダロ ツワモノ ヨ」

突然蛮族戦士は大きな声で喋り出した

「カクレテ ミテイタ コト ハ ワカッテ イル ワレ ハ オ
マエ ニ タノミ ガ アル」

「なんだ？誰もいない方向かってアイツ突然喋り出したぞ……」
「静かにしとけ!!」

「ゴノ タノミ ヲ キケバ コンカイ ハ オマエ ト シアイ
ヲ シナイ コト ヲ ヤクソク シヨウ ……」(オリジナル笑顔)

(要するに出てこないと殺しに行くよって脅しですわね分かります……行きたくないけど面倒臭くなるから行くしかねえ……!!)

遠くで見ていた存在……万能者は遠い目をしながらもその頼みを受けざる得なかった

「……モウ ヒトリ カクレル モノ モ デテクル コト ス
スメテオク」

(バレてる……)

ついでにG&K所属の戦術人形が巻き込まれる事になった

※ ……(十字を切ったり、合掌したりしている)

しばらくして……

(((((どうしてこうなったんだ……))))))

蛮族戦士以外全員の心は一致していた

その場は人類人権団体過激派の生き残り部隊、EILDの蛮族戦士、G&Kの戦術人形『ウエルロッドmk—I I』、そして万能者という奇妙な集まりができていた

万能者はイヤンガルガの死体を調べ、蛮族戦士はイヤンガルガの肉を食いながらその様子を見ており、ウエルロッドmk—IIと人類人権団体過激派の一部に至ってはその様子を黙って見守るしかな

かった

また他の人類人権団体過激派の一部は被害状況確認や使えるモノを探すなどをビビリながらやっている

「……………なんだよこの状況……………どうすりゃいいんだよ……………」

「……………俺に言われても」

「ただでさえあの蛮族戦士がやばいってのに万能者が混ざっちゃたらもう……………時の流れに任せるしかないな」

「現実逃避かよ」

「まあ……………ともかくあの子は……………」

「……………」(遠い目)

「俺らを監視していたと考えると恐らく拠点のことがバレていると思われる……………とはいえ」

(「めちやくちや不憫だなオイ」)

そんな会話がされていた時

「……………遺伝子改造された後もない、人工的に作られた形成もないからこれ自然の存在だ」

万能者の爆弾発言が突然発せられた

「「「「え?」」」」

「……………ヤハリ ソウ ダツタ カ」

「えつちよ……………こいつが自然の存在!?何食ってどうゆう環境で生きてたらこうなるんだよ!」

「……………なんで私は万能者がらみだところも厄介ごとに巻き込まれるでしょうか……………」

「……………うん辛かったろう……………そうゆう時もあるさ……………なんで俺敵である戦術人形を宥めてるんだろうか」

「知らんがな……………」

そんな会話や光景がありつつも誰もが考えていたことがあった……………

鳥の化け物
こいつどつからきたんだ？と……

「ついでにこいつが衛星の映像に引っかかってないか調べてみるか……運が良ければこいつがどうゆうルートで飛んできたかわかるかも知れんし」

「……さらつとやばいこと口走ってないか（ませんか？）」

人類人権団体過激派とウエルロッドmk-IIの心が一致した瞬間であった

数分後……

「よし、いくつかの衛星の映像のデータバンクを引き出せるようになったからこれでルートが分かるはずだ」

「ワレ ト シテモ コノ ソンザイ ノ スミカ ガ キニナル
ミセテ モラオウ」

「……何も考えないでおこう」（真顔）

また人類人権団体過激派とウエルロッドmk-IIの心が一致した瞬間であった

ピッ ピッ ピッ

「……うん？……ナンダコレ……
とりあえず過激派の皆さんとG&Kのこのこれを見てくれ……」
「……コレ ハ ……」

「（なんかくでもないことなんだろうな……）」

その場の全員が遠い目になってゆく万能者とますますオリジナル笑顔になってゆく蛮族戦士を見てそう思いながら万能者が見せてきた端末の画面を眺めた

「「「Oh」」」」

そこに映っていたのは何やら規格外どころか山のように巨大な生物のような存在がその対応にあっただであろう正規軍を壊滅させてゆく様子の真上から映像が映っていた

「 あつ、多分コレの進行ルートの都市とか工場とかの重要などころがあるやつだわ 正規軍が主力部隊を出すレベルにやばい施設が置かれているレベルの えつと何があるかというところと重工業地帯で火薬工場はもちろん、石油コンビナート、ガスパイプ oh 極め付けにコーラップス液貯蔵施設もあつたよ なにこの人類にチエックメイトかける気満々のラインナップ」

万能者の言葉に周りの様子は

「「「Oh」」」」

orzと軽く絶望の空気に包まれることになった

「ナラバ コタエ ハ ヒトツ デハ ナイ カ」

その言葉に全員蛮族戦士の方を振り向いた

「ヤツ ヲ ココニイル ワレラ デ トメ ニ ムカウ
カントン ナ コト デハ ナイカ サイワイ ソコ
ニ ドウホウ ト ハナス シュダン ガ アルデハ ナイカ」

それはあまりにも無理難題であり、ある意味正しい答えであった

「 ちなみにオマエの本音は？」

「コノヨウナ センジョウ ゼツタイ ニ ツワモノ ドモ ガ ア
ツマル ニ キマツテ イル デハ ナイカ」(オリジナル笑顔

「 オメー相変わらずブレないな」

しばらくして……

「例の存在がいる地点になんかすげえ嵐が来てるみたいんだけど？」

「コレ ハ アノ ソンザイ ニ ヨルモノ カ ソレカ マタ ハ
アノ ソンザイ ニ ヒツテキ スル モノ ノ チカラ ナノ
カ…… ドチラニセヨ イツテミレバ ワカル コトダ」

「オマエ簡単に言うな……この嵐じゃアイツらの援護も最低限のものになりそうだな……」

正規軍を壊滅させた存在のいる場所に向かって万能者と蛮族戦士は向かっていった……

「……あのう……／＼／＼」

「うん？どうした？」

万能者は『手にお姫様抱っこの状態で抱えているウエルロツドmk
―II』の方に目を向けた

「もう少し……他に方法はなかったんですか……／＼
／」

「いや、さすがに今は協力しているとはいえ、アンタらグリフィンの敵と一緒に行動させるのは流石にまずいかなと思っただけだから、あつちの方も薄々思ってたみたいだし……後はあの存在に早く向かうのと両立させるにはこういう方法しか考えられなかったからな……更に言えば色々特殊な状況故に確実に記録している証人が欲しかったしな……まあアレの迎撃するために近くに向かってるアンタらの仲間がいるみたいだしその近く下ろしてやるからもう少しの辛抱だ、我慢してくれ」

その長い答えに

「……はい……／＼／＼」

恥ずかしさで顔を真っ赤にしながら答えるしかなかった

他人のとか自分のプライバシーの管理って結構大変だよね……………

どうしてこうなったんだろう

今二人の頭を支配している考えがその言葉であった

「オマエ タチ ドウシタ？ ハヤク イカネ バ ワレラ ヲ

マネイタ モノ ニ シツレイ ダゾ？」（オリジナル笑顔

異形の人型の存在、蛮族戦士が遠い目をして歩く速度を落としていた二人、万能者とウエルロッドmk-IIを咎めた

「いや、分かってはいる……………分かってはいるんだ……………俺のせいだってことも呼ばれてることも……………でも本当にどうしてこうなったんだよ……………」

「ああつ……………優雅に休憩しながら紅茶を飲むあの時間がとても恋しい……………」

「……………ほら、こっちはこうゆうのにほとんど耐性がないから悪い方のトリップしてるじゃないか」

「ダツタラ ナグル ナリ ノ シヨック ヲ アタエテ シヨウキ

ニ モドセバ ヨイ デハナイカ」

「やめたげてよお!」

そんな会話がありつつも万能者一行は眼下に広がっているある場所に向かつていった

そんな事態になった理由は少し前の時間に遡る

セヴァストポリ要塞跡地 対ゴグマジオス戦防衛線から離れた場所にて

「ありや……………終わっちゃったみたいだぞ？人類側の勝利で」

「ナニ!?!……………ソウカ ノガシテ シマッタ カ……………」

ザンネンダ」

(戦わなくて済んでよかった……この二人が戦場に乱入したら絶対ロクなことにはなりませんからね……)

そんな光景がありつつも彼らはその場所へ近づいていた……

セヴァストポリ要塞跡地 からほんの少し離れた地点

「うわぁ……こんなところにあのデカイ奴の肉片が飛んできてやる

……一体どんなもので引き裂いた上にここまで飛んできやがったんだか……」

そのかなりの大きさの肉片で呆然としているウエルロッドmkⅡ、戦いに混ざれなかったことを未だ尚悔やんでいる蛮族戦士を尻目に万能者はそう呟いた

「二応ウエルロッドさんを近くに置くついでにあのデカイ奴と戦線の被害などの調査も兼ねてここまでできたけど……運がいいのか悪いのか……ウエルロッドさんちよつと待つてもらっていいかな？ちよつとコイツの調査を試してみる」

「……ええ、分かりました」

すぐさま万能者はその肉片の調査を開始した

後にウエルロッドmkⅡはこう語った

『あの時呆然していてもあの調査を断っておけばあんなことを経験しなくてよかったのに……』と……

30分後……

「う……ん……」

万能者は非常に困惑していた……

「……ドウシタ ツワモノ ヨ」

「どうかしたのですか」

「いやこの遺伝子調べたんだけど、間違いなくあのデカイ奴ので間違いないみたいなんだ……ただ……」

「ただ？（タダ？）」

「この遺伝子……なんというかめちやくちやでたらめというか……人工的でありながら自然的でもあって……歪でありながら完璧なカタチである……まあなんというか……どう言葉に現したらいいかわからんレベルに分からないものだったってことだ……」

「なるほどわかりません」「ナルホド ワカラン」

その結果に二人して理解を放棄した形の感想しかだせなかった

「……ええい仕方ない……こんな時は使いたくないけどアレしかないか……」

万能者は何かをバックパックから取り出して腕に装着するなどの何かの準備を始めた……そして……

「そい」

グサア

その腕を肉片にぶっ刺したのだ

「……いきなり何を!？」

「いや、さすがここまでわからんものだ俺の目的に重要なものかも知れんからな……まあ要するに特殊な機械で遺伝子の記憶を無理やり読み取ろうとしているってことだ」

「!?」

万能者のテクノロジーに再び驚かされるウエルロッドmkⅡだった

「……お、きたきた記憶の情報が……これは最近ののだが……うわあ俺らが向かった戦場って混沌としたカオスな戦闘だったんだな……」

万能者がそんな情報を読み取っていると……

「うん？こりや恐怖の記憶か？……コイツがここまで怯えるってどんな存在なんだ……ってうん？」

万能者が何か気になる情報を見つけたようだった

「なんだ？この記憶は……」

■ ■ ■ ■ ■ 王国 ……

■ を焼く者

鉄を溶かす ■

水を煮 ■ たす者

■ を ■ こす者

木を ■ ぐ ■

■ を生み出す者

■ ■ ■ ■ ■

「!!?!」

突然の万能者の奇妙な言葉に二人は驚くしかなかった

「うん？今俺頭に浮かんだ言葉をそのまま口に出してたか？……」

うお!!なんか頭になんか入り込んでくる感じががががが……」

「大丈夫ですか!!?!」

「オイ ダイジヨ!ウブ カ ツワモノ ヨ」

その次は頭を抱えて苦しんでいるように見える万能者を心配することになった……

「…………ウエルロツドさん」

「……………なんですか」

「ガチですまん、なんかさらに厄介事に巻き込んだみたい……………そっちの方は多分喜ぶだろうから大丈夫だと思うけど……………」

「え？」

「？」

そして万能者がいった言葉に理解する前に……………

ズゴゴゴゴオオオオオオオオオオオオ……………

「なっなんですか!?!」

「……………!!!」

「……………なんでこうも面倒な事が起こるんだろうな……………いや今回の場合俺のせいでもあるけど……………藪蛇やってしまったなホント」

その言葉と轟音と共に3人は突然現れたナニカに飲み込まれていき、しばらくした後その場には何も残っていないかった……………

回想終了

「で、あなたのいう私達をこつちに招き入れた存在はあそこにいるんですか?」

「えっと……………間違いない頭に入ってきた光景と一緒に……………うわあそのヤバい存在がいる気配がここまでひしひしと伝わってきてるよ……………」

「ナラバ イソゴウ デハ ナイカ マネカレタ ワレラ ガ オクレテ ハ アツチ ニ メイワク ガ カカツテシマウ カラナ」

(オリジナル笑顔)

「……………オマエはその存在と戦いたいだけだろ」

万能者達に広がった光景……………それは

かつて栄華を誇ったであろう城下を彩った家々や周辺の街村……………そしてその象徴とも呼べる城……………

それらが今では全てが完全な廃墟と化しており、そこには人や動物が存在しないという異常な空間になっていた……………

まるでそこにナニカが存在し、それに滅ぼされ、それで尚今も且つ恐れられているかのように……………

高級料亭などのお高い店に入る時って何故かメチャクチャ緊張するよね

「お待ちしてりました」
王国 城跡地 城門

今は滅びたその国の象徴である城の象徴の一つ、城門にて黒い衣が特徴的な少女がそこにはいた

まるで万能者達がその時間ぴったりに来ることを事前に分かっていたかのよう

その少女は見た目は若く、来ている黒い衣も伝統的な衣装であるということが見て取れ、一見するとこの地の古い伝統を持つ原住民の少女ということが考えられた……
だが

(どう考えても纏ってる雰囲気は只者じゃない上にこの人気のなさすぎる場所になんているとかなどの怪しさが全く隠せてない件について、本当にありがたいと思いました)

そのことに気付いていた万能者は遠い目をしていた
ウエルロッドmk—IIもそのことに気付いていたようで警戒しており、蛮族戦士に至っては……

「オマエ ハ ワレ ノ カンジタ ケハイ トハ ニテイル ヨウ
デ チガウ …… ガ ツワモノ ニハ カワリ ナイ ヨ
ウダナ …… サツソク ダガ シアオウ」

「やめんかあ！（やめなさい！）このバトルジャンキー!!」
ドゴオ!!

色々ありつつもその後その少女の案内により城の中を進むことになった……

そして……

「あらっ、やっとな来たのね」

彼らを待ち受けていたのは何かの巨大な槍のようなものが壁に備え付けられ、その壁の上のなにかのカラクリを起動する為の機械の上に女性が腰かけていた……

その姿は黒い衣の少女とはまた違ったうら若い年頃の女性の姿をしており、その服装はほのかに輝いているかのように白いが強調されているドレスを着ており、まるでお伽話に出てくるかのような美しいお姫様というのがぴったりであった……

そんな存在を前にして三人は……

(うわあ……絶対あかん類のやつだ……神や邪神とか厄災とかの逆らっちゃあかん類のやつだ……)(白目

※一部に関してはお前が言うな

(……綺麗……ハッ!?ダメダメしつかりしなさい私!!こんなところに貴族のような方がいること自体おかしいじゃないですか!!纏っている雰囲気もおかしいですし!)

(……アア コノヨウナ ソンザイ……『カミ』 ト ヨベル ソンザイ ニ アエルトハ……)(歓喜に震えながら

それぞれ違ったことを考えていた……
「では、私はこれにて」

その声と共に黒い衣の少女はまるでそこにいなかったかのように姿を消した……

「……うん、とりあえず早速だが聞こうか……
アンタなんで俺たちを呼び出したんだ？」

「暇つぶしよっ」
ズコオオオ!!!

万能者とウエルロツドmk-IIはその疑問にしようもない答えにズッコケた

「ドストレートにぶつちやけたなオイ!？」

「私それに巻き込まれたんですが!」

「冗談よ? 半分ほど理由があつて読んだのよ」

(半分つて言つたぞ (よ) この人)

「デハ ワレワレ ト タタカウ タメ カ ? ナラ

イマスグ ニ デモ ハジメヨウ デハ ナイ k」

「オメエ (あなた) はややこしくなるから黙つてろ (なさい) !!」

「あら、面白い喜劇ね? あなた達芸人かしら?」 (クスクス

「芸人じゃなあー!!!」

色々と落ち着くまでしばらくお待ち下さい

「ハアハア 何この最初から胃もたれするレベルの混沌さは」

「 最初からかなり疲れましたよ 肉体的にも精神的にも」

そんな二人を尻目に

「デ ? ドウナンダ ? ワレ ガ イツタ ノハ リユウ

トシテ アツテ イタノカ ?」

蛮族戦士はブレずに自らの疑問 (というか願望) を聞いていた

「本当はそうしたいのだけれど、残念ながら今回はその理由でよんでいないのよ ごめんなさいね戦士さん」

「ムウ ソレナラバ シカタナイ

ザンネンダ ワガ セイ ニ イチド アル

カ ナイカ ノ チャンス ダト オモッタ ノダガ」

(しょんぼりしながら

「 でもいずれ、その挑戦を受ける機会が来る それは断言できるわ その『爪』を研いで待つてなさい」

その答えに蛮族戦士は

「 アア デハ ワレ ハ オノレ ノ ツメ トイデ

マトウ アナタ ノ クビ ニ トドカセル タメ ニ」

笑顔でそう答えた

(「……………バトルジャンキー同士の会話でしたか」)(遠い目
尚それを見ていたウエルロッドmk-IIと万能者は遠い目をして
いた

閑話休題……………

「……………で？なんでアンタは俺たちを呼び出したんだ？……………
さつき言った暇つぶしとか気まぐれとかの理由はなしの方向でお願い
します……………これ以上脱線するとえらいことになる予感がす
るので」

「あら？私は楽しめたのだけけど？」

「お願いだから真剣にお願いします……………」(胃がキリキリ

「まあいいです……………理由を言うならば貴方達……………とく
にその鋼の戦士に頼み事があったからです」

「頼み事？」

その言葉に万能者とウエルロッドmk-IIは疑問を抱かざる得な
かった……………

何故このような存在が自分達にわざわざ頼み事をしに来たの
か……………

「頼み事は簡単……………貴方達も知っているあの戦場で人類が倒し
た巨戦龍……………その血……………『我々』の血を悪用するもの
を消して去って欲しいのですよ」

それを言い放った彼女から得体も知れない威圧感が流れてい
た……………

「……………ちなみにその頼みを拒否したら？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・どうなるかしらね？」

チュドーーーン!!

チュドーーーン!!

「あら、いやだ・・・・・・・・偶然この近くに雷が二回落ちるなんて・・・・・・・・珍しいこともあるものだわ」(ニッコリ)

「アツハイ・・・・・・・・ワカリマシタ・・・・・・・・クワシクハナシキカセテモライマス」(白目)

二人にはすでに話を聞くしか選択肢が残されていなかった

ちなみに蛮族戦士はその横で最初から素直に座って話を聞く体制になっていたことは余談である

世の中って一つや二つぐらい世界を揺るがすモノホンのオカルトって存在すると思うの by 作者

??????????

旧王国 城跡地

「とりあえずその血がえらいことに使われる前に止めればいいってことなのは理解した……」

空の雲行きは怪しく、重苦しい空気の中、彼らは話し合ってた……

「だから、いくつか質問させてもらっていいか？」

「答えられる範囲内でないわよ？」

その言葉を聞いた万能者はすぐさま自らの疑問を聞いた

「じゃあ聞こう……まずは、もしここにいる俺たちがその悪用の阻止に失敗した場合どうなるんだ？」

(……早速それを見に行きますか……)

ウエルロッドmk-IIは万能者の最初から攻めた質問に驚きを隠せなかった

「うーんとそうわね……大体は不思議なことが起こる形になるのかしら？」

「不思議な形？」

万能者とウエルロッドmk-IIは首を傾げながらも嫌な予感を感じた

「まあ簡単に言えば……隕石が落ちてきたり、大嵐が発生したり、地盤沈下などといった貴方達でいう自然災害が起こると言った形かしら？何故かその場所ごとそうなっちゃうけど」

「アツハイ、ゼツタイニトメサセテイタダキマス」

「またも遠い目をせざる得なかった二人であった」

「……まあとりあえず、止めるの確定としておいて……」

次の質問だ……その血つてやつがどんな扱いがされたらアンタらの基準でアウトなんだ？ 具体的に頼む」

その疑問に白いドレスの少女は

「う〜ん……困ったわね………そこをいつてきちやうなんて………まあいいわ、今ここでその基準を教えとおきましょう」

「頼みます………下手なことではぼろつと大災害での大惨事はアカンからな………ただでさえあそこの人類、滅亡一歩手前なもんだからな………」

その言葉にウエルロッドmk-IIは万能者が柄にもなくほんの少し救世主に見えたのは余談である

数十分後………

「………つまりいうとアンタらの基準ではどうか………その血を剣やら銃とかの武器を作る際の素材にするのはいいが、その血の複製………又はそれを利用した新たな生命の創造などが駄目つてことだな？」

「ええ、それでいいわよ？」

「なるほどな………あの事件の後と考えると………下手したら変の血がばら撒かれているとなると………下手したら変なところにもいつている可能性あるなこりや………」

「………ヤバい状況ですねコレ………」

何が駄目でどういつた状況をある程度理解した万能者とウエルロッドmk-IIは状況の整理を一旦するもますます人類滅亡の力ウントダウンの爆弾がばら撒かれている状況に頭を抱えるしかなかった………

「まだグリフィンとかIOP、そしてあの人類人権団体過激派の一組織には通信のやつができてからまだ可能性があるがその他………正規軍とか、秘密結社関係の裏組織とかが警告を無視してやる可能性があるがあるからな………いや人類ならやる、絶対やらかす………ガチのトラウマができるレベルの痛い目を見ないとやるよな絶

対「……………」

「ある意味そんな部分が信頼できるのが悲しいところです……………」
「あら？そんなところも私は大好きよ？流石においたがすぎると痛い目をあわせるけれど」

「アンタ（あなた）のそれは洒落にならん（なりません）!!」

そう言いながら内心頭を抱えていると

「ダツタラ カンタン デハ ナイカ ソノ チ ヲ スグ ニ
サグレル ホウホウ ヲ ミツケレ バ イイデハ ナイカ」

先ほどまで黙っていた蛮族戦士がそんな提案をしてきたのだ

「……………あのな……………オマエな、俺のことをなんだと思ってるんだ？確かに俺は出来ることは多いけど、無論できないこともあるからな？第一すぐにそのあっちこっちに行っていると考えられる血を一つ一つ探知する方法は存在しないからな？出来たとしても時間がかかる方法しか「あるわよ」い……………って、え？あるの？」
「そもそもこの頼み事を受けるあなた達にその手段を渡すこの予定だったのよ？」

「……………それをはやくいってよ（ください）……………」
その言葉にため息を吐きながらもほんの少し安心できた……………

その方法を見るまでは……………

「……………ナニコレ？」

「コレ ハ ウロコ カ ？ シカシ …… カナリ ウツ
クシイ モノ ダ」

それは白く輝くナニカの鱗であった……………それも何やら得体の知れない力が秘められているのを感じられるようなものであった……………

「これを持てば条件付きだけれどその血がばら撒かれている場所が感的に分かるはずだわ」

その色々ご都合主義とも呼べるほどのオカルト的な方法に二人は

「またもや遠い目をせざる得なかった……」

「……あの……俺はともかくこつちのウエルロッドさんは一応人形で機械の部類に入るはずなだけど……大丈夫なの？」

「フフツ……それも大丈夫わよ……私を甘く見ないでね」
(……やっぱこの人？ヤバイ)

二人はクスクスと笑う白いドレスの少女を見ながらそう思うしかなかった

その後、その頼み事を承諾した万能者一行は白いドレスの少女の手により元の場所に戻ることになるのだが、その方法にまたもや二人は遠い目をせざる得なかったの余談である

(尚蛮族戦士はその力にニッコリ(オリジナル笑顔)をしていた模様)

「よろしかったのですか？あのまま帰して？」

黒い衣の少女は己の主人に疑問を投げかけた

「いいのよ……今まで『私達』の意思に接続するものなんていなかったものだから気になったのが半分……気まぐれが半分で呼び出したからね」

白いドレスの少女はその疑問にそう答えた

「そのおかげで今後の楽しみが増えたわよ……あの作られし少女は弱いけれど不運と悪運でここに呼び出されたから見込みはあるし、あの戦士はあと少し成長すれば私達を狩る者たちに並ぶか超えるんじゃないかしら？」

「(ああ、また始まりましたか……王の『人の可能性』の賛歌が……)……分かりましたあの戦士に注意を払っておきます」

「そんなことしなくていいのに……あと、あの鋼の戦士は……はつきり言つて化け物ね……」

「……やはりですか」

「あの存在は今の状態でもあの戦士を超えている強さが存在しているのは分かっているけど、その潜在力や隠している力に關しては……私にも分からないわ……もしかしたら私をも軽く超えているのかも知れないわ……」

「!？」

その言葉に黒い衣の少女は驚いた、己の主人が己を上回る強さを持つ存在を認めたことに

「……ではあの鋼の戦士をどうしましょうか？」

「……あのまま保留でいいわ、あの存在も我々と戦いたくなくなつたようだし……ああ、残念だわ……戦つてその隠された力と潜在力を身をもって経験したかったのに……」

「勘弁してください……」

そんな主人と従者の会話がしばらく続いていた……

「久々に紅茶が飲みたくなつたわ……お願いね」

「……かしこまりました」

黒い衣の少女はその要望に答える為にその場を離れていった

「ふふっ……あの鋼の戦士……いいえ、ほんのすこし『記憶』を覗かせてもらったけれど……
????????????????
……あんなに

ワクワクしたのは初めてだわ」

『兄ちゃん、これから僕が行く「世界」ってどんなところだろう?』

『今それを聞くのは野暮つてもものだよ……いつてみてからのお楽しみつてもんだ!』

「……まあそのお楽しみ次第で生きるか死ぬかが決まってしまうのはどうかとは思いますが……まあ行ってみないと本当に分からんもんだからな……まあできたらここに居る兄弟がまた集まれることに期待したいかな」

『お!兄上が珍しいこと言ったぞ!!』

『ハハハ!!オマエがそういうのは明日にでも
??????の雨でも降ってくるん
じゃないか?』

「うるせえ!!」

「やはり『人の可能性』とは素晴らしいものね……今後が本当に
楽しみだわ」

何か美しいものを見てうっとりとしていたのか、ふと口から出たそ
の呟きは人間のいない空間に静かにこだまし、消えていった……

「……なんか無性に寒気がしたんだが……
……気の
せいかな?」

「気のせいではないでしょうか?……私はこれからのことで頭
が痛いです……」

「?? コウオモエバ ヨイ デハ ナイカ ワレワレ ガ ツヨク
ナル タメ ノ シレン デアル ト」

「二そう思えるのはオマエだけだあ!!!! (あなただけです!!!)二
ドゴオ!!!」

後にウエルロットmk-IIの持ち帰ったデータと『何かの鱗』がグ
リフィンとIOP社で頭を抱えさせることになり、その後、そのウエ
ルロットmk-IIには万能者関係任務専門+その血……IOP命
名『ドラゴンブラッド』の監視任務を任されることになり、しばらく
胃痛と頭痛に悩まされる日々が続くことになるのだが別の話である

なんで運が悪い時におこる場合つて的確で絶妙な時が多いんだらうね？（遠い目）

ゴグマジオス戦から数週間後……

各地で起こっていた正体不明のモンスター達によつての引き起こされていた混乱は収束していき、被害のあつた場所では復興が始まっていた……

そんな中、その討伐されたモンスターからは未知の遺伝子や素材などが確認され、軍や研究機関などが活発に動き、素材の奪い合いが起きるほどの事態が起きていた……

ただ一つの物質を除いては……

「やれやれ……とりあえずここでの『ドラゴンブラッド』の破壊と研究情報の抹消は完了だな……連絡しないとな」

万能者はそう言いながらもはや廃墟といつても過言ではないほどの破壊された施設を見ていた

巨戦龍ゴグマジオスから取れた血液……通称『ドラゴンブラッド』が研究され、その血液に凄まじいほどの可能性が秘められていることが分かり各地で更なる研究競争が起こる形となっていた……

だが、ここ最近不思議なことに内部告発や集団逮捕、ELID襲撃、そして万能者襲撃など様々な出来事が『ドラゴンブラッド』関係の施設で確実に起こり、『ドラゴンブラッド』に関する研究全てが研究している全ての場所で全くといっていいほど進んでいなかった……

更には『ドラゴンブラッド』には厄災を引き寄せる性質があるという噂まで広がり、最初の内はデマなどと言われていたものの日に日に凄まじい勢い増していく被害に軍や国家なども流石にまずいと思っ

たのか、『ドラゴンブラッド』の研究の今後をどうするか検討する会議などが始まっていた

まるで見えないナニカがそう仕向けているかのように……

「よし、とりあえず連絡は完了したからいいとして、このあとどうするか……」

その不思議なことが起こっている元凶の一つである万能者は今後の事を考えていると……

ゾワア

「……!!??」

得体の知れない!……否感じたことのあるナニカを感じ取ったのだ

それも遠くからでも分かるほどに突然大きくなっているのに

「……えっ?なに?小さい気配が突然大きくなったのか!?えつとその方角と場所はどこだ!」

慌てながらもそのナニカを感じた方角の正確な方向とその方向にどんな場所があるかを調べた

「方角はこの角度で間違いない……その方向にある場所は……
oh……」

それは万能者にとって外れていて欲しい場所でもあった……だがそれは残酷にも有力な候補であることが指し示されていた

「……グリフィンS13基地……ペルシカさんの言葉を忘れてなく、間違えてなければ……リホーマーさんが指揮やっていると……」

その事に万能者は遠い目で現実逃避したくなり始めた……

「いや……まだその方角に未確認の他の施設があつてそこから出てて違う反応だったのかもしれない……よし進みながら

調べて行こうか!!」

その苦し紛れの希望的観測も途中の『ドラゴンブラッド』関係の施設を破壊しながらS13地区基地に近づくにつれ、はかないものであったと理解するのはいうまでもなかった……

遅れるということって悲しいことだよね……乗
る予定のバスが目の前で発進していく時とか……
(涙目)

「頼むりホーマーさん無事でいてくれ……」

そう言いながら万能者は数少ない信頼できる人物の一人であるリ
ホーマーがいるとされている場所……S13地区のグリフィ
ン基地に全速力で向かってみた……

「……!!!?」

「なんだありや!」

その道中の様子がS13地区お住まいの方々（主に山賊な方々）の
目に少なからず入ったのは余談である……

2時間後……

「やっと思えてきたぞ……」

万能者は目的地であるS13地区の基地が見える付近まで辿り着
いていた……

「今リホーマーさんの反応確認……よかった異常はないよう
だな……なんかあの『ドラゴンブラッド』の反応と一緒にい
るように見えるのが気になるが……まあいい、とりあえ
ず連絡だ」

様々確認をした後に連絡をしようとしたその時

ゾワア

「……!!!? ……あつ
連れて行かれた……」

突然基地のほうから感じた寒気に身を固まらせてしまい、その僅か
な隙にその基地から目標だったリホーマーの反応が消失したの
だ……

「……どうしよ

う」

万能者はその状況を理解したがどうすれば良いかすぐには分からず、数分間ほど思考の海に漂うことになった

「……………あの手札切るか？……………いや、アレ色々調整と準備と非常事態への備えしないとヤバいことになるしな……………でも今リホームーさんという情報源（尚一部私情）を捨てるとなる……………ええい、一か八かだ!!」

そして、数分後……………

その場から万能者の姿が消え去った……………まるで最初からそこに存在しなかったかのように……………

尚……………

S13地区G&K社基地にて

「緊急事態発生!!繰り返し返す!緊急事態発生!!この基地に万能者が接近している!」

「指揮官は何処だ!?何処にいるんだ!?!」

「せっかくヌカコーラを飲もうと思ったのに……………」

(ガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタ)

「また例の女性が震えてるよ!!」

指揮官が人知れず拐われ不在の状態の上に万能者が襲来しているという非常事態にパニックになっていたのは言うまでもなかった……………

ちなみに街の方も道中の確認したものが伝えたのか、万能者という正体不明の存在によりパニックになっていたのは余談である

王国 城

「(?????????)
??:. なんやこれ. どないすればええんや.」

突然得体の知れない場所に拐われ、本能的に逆らえない正体不明の白いドレスの女性の前にいるという状況から更に混沌としたものとなった状況にリホーマーは戸惑いを隠せなかった. さっきまで感じていた緊張感が消失するほどに.

それは

「俺の知り合いがなんかやらかしてしまつて、本当にすみませんでした!!!」

困惑している白いドレスの女性の前で全身の装甲がボロボロに傷つき、砕け、欠損している部位も確認できるほどに損傷した万能者が見事なレベルに綺麗な土下座しているという状況だった

リホーマーの身に起きていることを単刀直入かつ重大なことを大雑把に告げられた……

「え？なに？ウチなんかいろんな意味でなんかやめちゃった存在になっただってこと？」

「まあそんな感じわね……普通ならその血は『私達』以外の体内に入り込んだら身体が弾け飛ぶほどの劇薬ね……あなたの場合には身体の特異性によるものかどうかは分からないけれども者の見事にあなたの身体に適合してるわ……おめでどう、とても珍しいことよ」

「……」（嬉しくないわ……）「（遠い目）」

「そうなる……あんたりホーマーさんになにをするつもりだ？」

その説明を聞いた万能者は自分が思っていた疑問を聞いた

「いいえ？何もしないわ」

「……え？」

その答えにリホーマーと万能者は目を点にせざる得なかった

「えつと……俺がいうのもなんなんだが……マジか？それ相応の代償を覚悟してたんだが……」

「ええ、本当よ……本当なら彼女が血を飲んだ時点でことを起こそうとも思っただけで、さっき言ったように珍しいことが起きたからここに一度呼び出してから決めることにしてたのよ……それにあなたが身を犠牲にしてまでここに来たということはそのままでするほどの価値がある存在ということだからチャラにしておいてあげるわ」

「……」

「よ、よかった……」

「その血を持つということは……相応の責任と覚悟が必要……そのことだけは覚えておいてね」（ニッコリ）

「アツハイ、キモニメイジテオキマス」

その言葉に万能者トリホーマーは揃って遠い目をせざるえなかった……

その後、無事にリホーマーと万能者は元の世界に返されたものの……

「……なありホーマーさん？」

「なんや？」

「あんたのところの設備ちよつと貸してもらえないか？俺ちよつと来る方法が特殊なやつ使ったから……」

ガシヤン（右腕が崩れ落ちた）

「……ちよつとこんなアカン感じなんだ……」

……どうやらまだまだ前途多難の途中のようだ……

やらかしとはここぞって言う時に絶妙なレベルで起きるものである………つまり
やらかしたんですね分かります（遠い目）

S13地区G&K基地 資材置き場

「………えつとここのパーツの損傷具合がこんな感じだからここは………うわぁ………右腕の残ってる骨格の部分の粒子が崩壊してその部分から砂になりかけてやがる」

万能者はリホームの許可をもらい資材置き場で己の身体の状態の確認行っていた………無論基地の何人かが監視として置かれている

「とりあえずこの辺は大丈夫だが………こりや徹底的な全体的な修理かいつそのこと別のパーツに変えるかだな………やっぱアレ万全の準備してからじゃないとろくなことにならないな………」
そう思った万能者はしばらく考えたのち………

「仕方ない………リホームさんの資材使っていいって言ってたし、丁度そろそろ強化しとかないといかんと思ってたから一部のパーツを新造してみるか………まあその前に今のやる部分やっておかないとな」

そんな結論に至った

※まあ、そんな訳で一部万能者の脳内的などのを日誌風ぼくここからは書かれます（遠い目）

作業1日目………

今日から破損部位から予備の補助パーツを取り替えてから作業を開始

まあ最初なので新しい骨格パーツや配線系の中身の調整で今回は終了

明日からは骨格パーツのテストしながら調整に移る

作業4日目・・・

新しい骨格パーツの結果は良好だが、まだまだ調整しなければならぬ箇所が多数存在しており、まだ色々試さなくてはならない
余談だが基地内にその辺の技術体系が違うロボットがなんか販売してようだったアレが何売りでなんなのかは不明
今度なんか買ってみることにする

作業8日目・・・

資材置き場に強盗の集団が入り込むトラブルにより作業に少々の遅れが生じるも続行
なんとか新しい骨格パーツはあくまで実践試験の形ながらも使えるものと判断して補助パーツとの取り替えを決定

作業10日目・・・

新しい骨格パーツの稼働実験の結果は問題なく良好と判断
新しい装甲も一部取り付けが完了したので作業は次のステップに移ることにした

今夜はちよつとした祝いとしてあのロボット・・・プロテクトロンとかいうロボットから購入したヌカコーラと言われる飲み物を飲んで見ることにする・・・なんか青く光つてることからちよつと心配になったがりホームアの部下であるカーボーイハットの少女が似たようなものを飲んでいることから気にしないでいいものとして・・・

青いのを買う時に凄まじく誰かから殺意が向けられたような気がするのは余談としておく

作業11日目・・・

酷いものだった・・・あのヌカコーラ・・・いやヌカコーラ・クワンタムと言われる飲み物・・・味はとていいのだが、中身が強力な核爆弾一步手前のようなものだったようで形的に自分の動力源の燃料となった結果、どうゆう理屈かは不明だが凄まじいほど

のエネルギーが発生したのだ

それだけなら過剰エネルギー保存用の小型大容量バッテリーにうつされるだけなのでよかったはずだが、その過剰エネルギー保存用の小型大容量バッテリーがよりにもよって例のSOPにより微妙に破損して応急措置で済ませたヤツだったためにその対処に慌てることになった……

なんとかその『バッテリー』を取り外すことによって対処することができたもののその後も問題だった……

起きた時に確認したらそのエネルギーがたつぷり入った『バッテリー』がなくなったのだ……

俺の馬鹿……あの問題対処で疲れて思考が鈍っていたのか相当なことでは爆発しないと思っただのか安心してそのまま近くに置いたまま気絶（シャツトダウン）に近い形で寝てしまおうとか……本当、俺の馬鹿……

そのため今日はそのバッテリーが何処に行ったのかを探すことにした

よほどの事がないと爆発はしないのだが、危険物には変わらないのでさっさと探して作業に戻r

それは突然の事であつた……
「な……なんや……アレ……」

それを見て呆然としている部下たちと一緒に見ていたりホームーはそう言った

それは基地のほうから見たら街の方角に存在し、遠くにあれどこからよくわかるほど大きく光る……

旅行とかでホテルに数日いるとそこに愛着が湧いて離れる時って何か寂しい感じがするよね……………

事の真相（というか爆心地の爆発原因）

「ヒヒヒイ……………まさか最近噂になってるあの正体不明の存在からとんでもないお宝が手に入るとは思わなかったぜ」

S13地区の治安の悪い街の夜道も気にしないでその者は走っていた

「これさえありや俺の人生が明るいつてもんよ!!」

そう言いながら鞆を大事そうに運びながら彼はそのブツを売るべくマフィアの本拠地……………正確には闇取引施設に向かって行った……………

3時間後……………

マフィアの闇取引施設……………巨大な倉庫

パパパパパツ……………

それは突然だった

「チクシヨウー!ありやどつかの特殊部隊なんかか!?!」

「多分軍のそこだありや!多分ウチのバカが何も知らずになんかヤバイもん仕入れたか……………それがまたは俺らがウザくなって消しに来たかだな」

「くそつたれ!ここで死んでたまるか!!!」

どこかの特殊部隊と思われる正体不明の集団に襲撃を受けその場は混沌としていた……………

「クソ、これでも喰らいやがれ!」

「!?おまつ……………バカアそんなもんこんなところで使うな!?!」

バシユ!! シュオオオオー……………

頭に血が昇りすぎて誰かが対戦車ロケットを使い出したのだ

その弾頭は事前に発射されることを把握して避けたのか正体不明の集団に当たる事なくそのまま真っ直ぐに飛んでいき……………

襲撃で真っ先に蜂の巣にされたであろう亡骸が大事にしていたであろう鞆に絶妙に着弾した

ドガアーン

「クソ外したー!」

「こんなところで撃つなこのバカア!」

異変はそこで起きた

「……………うん?なんかあそこ異様に光ってないか?」

誰かが気付いた

一部敵味方問わずにその方向を見た

その瞬間

その場所が光に包まれた

同時にその日、その場所で『光の柱』が観測された瞬間であった

※ここからは前回と同じように一部万能者の脳内的などのを日誌風ぼく今回も書かれます……………

作業13日目

昨日と一昨日は自業自得とは言え色々とりホーマーさんの裏の方での協力をするために作業を中止しなければならなかったため、今日から作業の続きを開始した

リホーマーさん本当にすみませんでした……………

とりあえずここにいられる時間もそう長くないと判断し、作業のスピードを上げる方針で進めることにした

作業14日目

なんとか新しい装甲の貼り付けと自分の中身の点検が全て完了し、ここでの最低限のノルマを達成に成功したが、これから先様々な事が

起こると考えると力不足である事が予測されるため一部の機能の復旧、新機能の搭載、武器の改修及び新兵器開発など重点に置いた作業を今日から開始した

ただ昨日言ったように時間が少ないので何処までやれるかが分からないのがちよつと心配だ………できる限りやってみることにする

作業16日目

新機能の搭載と一部機能の復旧、新兵器の開発がひとまずの結果を出せたので武装の改修に入ったがここでリホーマーさんから知らせが入った………

数日の内にG&K社本社と正規軍から合同の調査隊が派遣されるらしい………間違いなく例の爆発の件で………

粘りに粘ったがどうやら時間切れのようだ………

「すみんりホーマーさんここまで協力してもらっておいて、かなりデカイ迷惑かけてしまつて………」

「ええんや、こつちもアンタに同じような迷惑をかけてしもうたからな………これでおあいこつてことで」

その日万能者はその基地から静かに去つて行つた………

「………まあそれならいいか………でもなんかあつてどうしようもない状態になりかねない時があつた俺を頼つていいぞ?」

「………分かつた、考えとくわ」
「そう言い去つて………」

しばらくして………

「うん?なんやアレ?」

リホーマーは万能者が使つた資材を確認するため資材置き場に向かつたところ、その資材置き場の片隅に人型のロボットが8体鎮座し

ていたのだ

記憶の限りではこのようなものは万能者がいる前には存在してなかった

そしてその近くには書き置きが存在し、ここう書かれていた

リホーマーさん、アンタ仕事が大変そうだったから8体ほど作業の手伝いができてその辺のロボットとほとんど見た目が変わらないのを作つといたよ、戦闘は銃を持って撃つぐらいの最低限しか出来ないが作業能力は結構色々できるヤツだ

扱いはそつちに任せるよ

b y 万能者

目の前に将来的な厄介事が現れた時に問題の先送り
と見て見ぬ振りには下策中の下策の場合が多いよね

破棄都市 市街地 廃墟内にて

ドゴオーン……

バババババババババババ……

ドゴオーン……

「……どうやらまた厄介事に巻き込まれたようだな……コレ」

万能者は自分の置かれた状況につくづく俺についてないと思
いつつも状況の整理を行っていた

「……まさか、三つ巴の戦闘のど真ん中に取り残されるって……
またなのか？またなのか？またこうゆう目にあうのか？」

まだ気づかれていないことが不幸中の幸いなものその状況を理
解するたびに遠い目をせざる得なかった……

眼下には緑色と黒色……そして白色の軍団が大混戦の状態
で戦闘を行なっている光景があった

「えっと正規軍と鉄血と……あの白のは初日の出の時に正規
軍のデカイ輸送機なんかを襲ってたヤツらの陸戦部隊版かありや
？」

そう思いながら万能者は無用意に出るのは得策ではないと考え監
視を続けるのだった

しばらくして……

ドゴオーン……

「どうやら戦況見る限り鉄血が最初の脱落になりそうだな」

万能者の目からも見る見る内にその戦力・練度・戦術性が格上の相
手に戦力を減らしていくのが見えていた

「あとは白いのと正規軍との衝突が本格化してくるな……こりや
まだまだここから離れなさそうだな……」

万能者はそう思い監視をしながらそこで待機する用意を始めよう
とした

その時

ドガアーーーーーン!!!

「……………なんだあ!!?」

今日一番の爆発音が周囲に響き万能者は慌てて戦況の再確認を行
い、爆発音の源の方を見た

「嘘だろオイ……………正規軍と白いのが見る見るうちに壊滅してい
てるじゃねーか……………」

そこにはまだ晴れてない爆発によって発生した煙からミサイルや
レーザーなどの弾幕が正規軍と白い部隊の兵器を蜂の巣にしてい
てるのだ

「一体なにが来たんだ……………煙が晴れてきたが……………
え?」

煙が晴れていきその正体が露わになった時、万能者は戸惑いを隠せ
なかつた

「……………アレ、俺の対策を意識して作ったのか?」

それは万能者より少し大きいくらいの大サイズの人型で、装甲や武
装、全て重装でありながらもそれを一切気にせず、寧ろ自分の身体
の一部かのように巧みに操り、そしてその姿を万能者は自分へ意識して
作られているように見えた……………

「オイ、どうなってるんだ!? 鉄血にあんなのがいるって聞いていない

ぞ!？」

「前衛の戦術人形部隊壊滅!!後方部隊にも被害甚大!!このままだと危険です!」

「白いヤツらの方も撤退するようだ……あつたの方もかなりの被害受けてるみたいだなありや」

「仕方ない……撤退だ!!」

その乱入してきた存在に正規軍はこれ以上の損害はまずいと思ったのかすぐに撤退を開始し、その戦域から離れていった

それと同時に白い部隊も残りわずかとなった戦力を撤退させてその場には鉄血のみが残ることとなった

「………マジで追い返しやがったよ……正規軍とあの白いの戦力的に結構なヤツだったと思つたんだがな……鉄血も鉄血で俺に合わせた対策をしてきてるってことか……見たところアレはまだまだ粗が多いようだから試作段階で一度実践試験に出されたつてところか……それでも三つ巴という特殊な状況だったとは言え撃退できる強さがあるってことは……アレの今後のことを考えるとここでやっておくべきか?……」

万能者は今さっきまで見ていたことを踏まえつつ眼下にあるその存在を分析し、その存在をどうするかを考えていた

その時

チラッ

「あつ!?!」

距離は離れていたもののその存在と偶然目があつてしまったのだ(ヤバいバレた!……どうする?やるか?)

そう思いながら考えて行動を移そうとしたが相手の方が少し早かった

その存在が慌てるかのように部隊に指示を出し、すぐさまそこから去っていったのだ

さっきまでの強者の雰囲気はどこかに消え去り、まるであどけなさが残る少女のような慌てつぷりを出して

「……………えっ?」

その起きたこととその様子に万能者は呆然として見ているしかなかった

『どうしよう……やっちゃったよ……厄災と戦うには不十分な戦力で不確定要素が多いとは言え上の方に何も言わずに自己判断で撤退しちやつて大丈夫だったかな?……怒られないかな?』

その存在……「????」はそう思いながら自分所属先である鉄血の基地へと帰路に着いていた……

世界は変わっていく……まるで万能者というイレギュラーを排除するために自らの形を変えていくかのように……

事後処理は大抵面倒ごとオンパレードの場合が多い
(遠い目)

鉄血 重要大規模基地 司令部

「すみませんでした!!」

「……………」

「……………」

そこでは各部に機械の部分が多く見られる部分が存在する少女のような存在が鉄血ハイエンドモデル『ハンター』とホログラムで映し出されている『代理人』の目の前で土下座をしていた

それはそれは、綺麗な土下座であった……………」

「……………」顔をあげなさい「救済者」

「……………」はい

顔をあげた「救済者」と呼ばれた少女の顔には大量の涙が筋を作る程に流れていた……………」

「……………」とりあえず、そこにあるティッシュで鼻をかみなさい

「……………」チーン

鼻をかむ音がその部屋に虚しく響いた……………」

「……………」「救済者」、あなたには稼働試験も兼ねてあの地域の確保を命じましたが、それをあなたは地域の破棄をして撤退してきました……………」それも「厄災」を見た瞬間真っ先に……………」これはどういうことですか？あなたは自身の役割を忘れましたか？」……………」いい、いい……………」確かに私の役割は厄災を打ち倒すこと……………」今すぐに倒すのは無理でも厄災と戦い経験を積み重ねていつの日か本気で挑むことだと理解しています」

『ではなぜ』

「……………」実は……………」その前に正規軍と白い方々と戦った際に弾薬やエネルギーがかなり減っていて……………」更には言えば部隊のこれ以上の消耗及び厄災のこれまでの行動パターンを考えたら……………」その……………」経験を積むことは愚か、これ以

上の戦闘は困難と判断しまして……」

その答えに代理人は少しの時間思考した後……
『……どうやら状況とあなたの言葉によると正しい判断だったようですね……任務お疲れ様でした救済者』

その結論に至った

(代理人……この子の為というお前の気持ちも分かるが厳しくすぎてこの子の心を壊してしまつたらどうするんだ?)

ハンターがそう思っているのを尻目に……

その後……

「……代理人お姉ちゃんが許してくれてよかった……」
顔についた涙を手で拭きながら救済者はハンターと共に通路を歩
きながら話合っていた

「……救済者……お前ももう少ししつかりとできないのか？」
「未熟な私にはまだまだそういうのは無理なんですよ……」
ハンターお姉ちゃん」

注意に返された言葉にハンターはため息を吐くしかなかった……

どうやら鉄血の『希望』は一癖ある存在であるようでその名の通りの救済者になるにはまだまだ課題と不安が残っているようであった……

正規軍本拠地 会議室

そこは重苦しい雰囲気に含まれていた……

「……あの地区の確保に失敗するとな……」

「今その詳細を聞いたが……鉄血がまた新しい新型のハイエンドモデルを投入してきたらしいな」

「ああ、それもあの白い勢力と我々をまとめて追い払える性能を持っているヤツだ……」

「ああ、それは痛いな．．．．．最近あの地区に新たな遺跡が隠れている可能性がでてきたっていうのに．．．．．」

「マジか．．．．．でもアレ？確か報告にはそのあと鉄血もその地区から撤退したって聞いたんだが？」

「．．．．．そういえばそうだな．．．．．なんでだ？」

「多分万能者じゃないか？」

「．．．．．ああ、説得力のある言葉すぎて納得だ」「」

そんな会話がされるもその後はその地区の確保は一時的に見送られ、鉄血と白い勢力の動きに注意を払うことが決定された

「．．．．．なんか変な説得の材料にされたような気がする」

※大体お前の日頃の行いのせいだ

「しかし、なんでこんな場所で三つ巴の戦闘があったか少し気になるからこの辺の調査を一度やってみるか」

世の中デカいことは同時に多発して起きることってあるよね……良くも悪くも（遠い目

非合法地下特殊研究施設

ビーーーーッ!!! ビーーーーッ!!! ビーーーーッ!!!

「くそお研究の成果が……」

「俺らの努力と血の結晶があ……」

「そこで何をしている!?早く逃げないとどうしようもなくなるぞ!?」
バババババババババババ

ドガアーーーーン!!

そこでは警報と銃声、爆発、逃げ惑う人々の声などが鳴り響いており、誰の目からでも異常事態が起きていると分かる状況であった

ズバア ズバア

「嘘だろ……軍の使ってる戦術人形だぞ!?アレらを全て輪切りにされた!!」

「なんなんだよアレ!?ただのE.L.I.Dじゃないってことか!?」

「待てよ……思い出したぞ……確かヤツは正規軍でも特級の危険指定されているんじゃないか!?なんでこんなところを襲撃しに来てるんだ!?」

「……やっぱアレじゃないか?最近ここの狂ってる研究者達が騒いでいた……なんだっけか?……なんか持ってたから災厄が訪れるとかの曰く付きの噂が立ってたものだったようなものを持ち込んでた気がする……」

「なんでそんなもんを……とにかく迎撃しろ!!」

目の前の存在により警備の戦術人形が無力化されていく光景にパニックになりつつも警備部隊はその存在に立ち向かっていた

数分後……

「……ココ デノ モクテキ ハ タツセイ シタ ナ」

その存在……蛮族戦士は血と油、機械と肉片の乱雑に散ら

ばった場所の中で目の前の物質……「ドラゴンブラッド」とその周りに置かれている機械を完膚なきまでに破壊していた……」

「……」

シカシ コンカイ モ ツワモノ トイエル
ソンザイ ハ イナカツタ ナ …… ハリアイ ノ ナカツ
タ ……

ヤハリ アノ ハンノウ ニ イクベキ ダツタ ガ ……
アノ ツワモノ ガ サキ ニ ムカツタ ウエ ニ アノ ソン
ザイ ミズカラ マネカレ タラ ……」

そして一息ため息を吐いた後

「……」

シカタナイ ツギ ノニ ツワモノ ガ アラ
ワレル コトヲ キタイ スル シカ ナイ カ」

そう言いながらその施設を去っていった

その後、その地下研究施設は完全に崩落し、研究成果及び機材のほとんど全てが灰と化し、生き残った者達はほんの僅かであった……

同じ日……

破棄された車両基地

「……」

どうやらあの情報は正しかったようね」

G & K所属の戦術人形WA2000は静かに呟いた

その視線の先には車両基地の巨大な車両庫に人陰やトラックなどの車両が入っていく姿があった

その周りにはP・A・C・Sや装甲車などの数多く兵器が存在し、警備を厳重なものとしていた

「厳重な監視でここまで侵入するのに大変だったけれど、この情報の正しさが証明されたことは大きな収穫と言っても過言じゃないわね…… 今日のところはそのまま気づかれないように撤退しないかね」

そう言うとそのまま闇に紛れていった……

それは偶然であった……………

数日前に人類人権団体過激派の中規模拠点の一つがG&K社の作戦によつて壊滅した後の調査によつてそれは発見された

「……………なんででしょうかコレ……………地図に……………日付?」

「なんだ?その日その場所でなんかあるのかこれは?」

それは奇跡的に処分を免れたであろう簡易的な地図のようなものに日付が書かれていたものだった

すぐさまG&Kは極秘でそれを手掛かりに特殊調査部隊を編成し、調査させた結果、今回の件で特殊調査部隊の一人であるWA2000によつてその補給路の大元とされる場所が発見されたのだ

そしてその知らせを聞いたG&K社社長のクルーガーはすぐに信頼できる指揮官たちに大規模作戦の知らせを送った

力を増している人類人権団体過激派の補給路の大元を断て
と……………

もしこの作戦が成功すれば人類人権団体過激派に多大な損害を与えることができるであろうことは間違いなかった……………

緊急依頼 『人類人権団体過激派の大規模補給路破壊』

……………始動まであと????

一方その頃

「……………うん、確かに正規軍と白いヤツら、鉄血がここらで戦う理由が分かったよ……………」

万能者は遠い目をしながら理解した

その周りには……

古代文明としては歴史的価値がとてつもなく高いとおもわれるマヤ文明と同じような遺跡……そして蛇と人間が組み合わさったような存在、犬の顔をした人のような存在達が万能者の周りを囲んでビクビクと恐れながら土下座をしていた

「……なんかごめんなさい」

そのなんとも言い難い状況の中で万能者は間違いなく自分のせい
でこのことが起こったであろうことを理解し、謝罪の言葉を口に出し
た……

とりあえず始まりは大事なのは当たり前だよね……
良くも悪くも（コラボ回）

これより本作戦『人類人権団体過激派の大規模補給路破壊』についての概要を説明する

我々の敵である人類人権団体過激派のテロリストの大規模補給路の大元と思わしき大規模拠点が???地区の破棄されていた車両基地に存在していることが確認された

調査隊の情報などを参考にするとどうやらこの拠点は物資や資源を各地の過激派の拠点と連携してネットワークのように輸送網を張り巡らせており、その中枢の役割を果たしていると推測されている
そこで今回の我々の目的はこの大規模拠点を破壊、もしくは大打撃を与えることにある

今回の協力者の中に航空機部隊を出してくれるところが現れた為、まずはこの拠点周辺に存在する対空兵器の破壊を行う為に少数の先行部隊で向かわせることになった、できれば決められた時間まで全てを破壊してほしいが、時間が近づいて少し残っている場合でもすぐに一時撤退を行い主力部隊と合流して補給を受ける

そして、爆撃が行われ敵の施設と戦力などにダメージが与えられていることが確認でき次第、主力部隊で攻撃を行う

この作戦がうまくいけば我々にとって悩ませてきた問題の一つの解決への糸口になるであろうことは間違いない

だが、敵戦力が未知数な部分であり、イレギュラーの可能性が存在するため失敗する危険性も含んでいることも否定できない

……その為今回の報酬は、君たちの危険手当も含んでいる。
その事を知ってもらいたい

では諸君に健闘を祈る!!?!!?!

某所 人類生活可能区 G & K 社基地

「すぐにヘリ手配しとけよ!! 次の戦術人形達が来るんだからな!!」

「弾薬や銃器、部品はどこに置いとけばいいすかね?」

「馬鹿野郎!! それはアツチでここは違うとこじゃあ! 方向音痴かオマエは!!」

その基地では大規模作戦の準備で騒がしかった……

「第一・第二・第三小隊の編成と装備はこれでOK、第四・第五小隊の装備は……」

「補給部隊の配置はこの地点で……司令部の配置はここで……今回参加するPMCがAODとBLACK WATCHで……」

その中でその基地の指揮官であるヘレン・クローザーもその作戦に参加すべく準備を行っていた

「指揮官張り切ってるね……」

「指揮官いつも仕事を熱心にやってるけど今までの比じゃないほどだね……」

「……また合コンの予定を入れているから? それとも好きな人が出来たから?」

「またそうゆうこと言う……そんなこと言ったら……ガンッ」

「……ほら聞こえてたみたいじゃない……指揮官机に頭を打ちつけちゃったわよ……」

「ごめんなさい……」

理由はどうであれ戦いは近いことは言うまでもなかった……そして、その戦いがどんな結末になるのかは誰にも想像ができな

かった・・・・・・・・

一方その頃

「クソツタレ!!なんでこうも厄介ごとが起こりまくるんだよ!」

万能者は現在自分が置かれている状況にまた嘆くしかなかった・・・・・・・・

その状況は・・・・・・・・

万能者が蛇と人間が混ざり合った存在や犬のような顔をした人型の存在、そして甲殻類・・・・・・・・いわば虫のような姿をした存在達と協力して

何か人間や虫などの生物や機械のようなパーツなどをあつちこつちに無理やり混ぜ合わせて組み込んだような人型や不定形など様々な形をした存在達の集団に迎撃しているという混沌という言葉がこれほどまでにピッタリ合うという状況がそうそうないと思えるようなものであった・・・・・・・・

「不幸にも程があるわあ!?コンチクショウオー!!!」

再びその空間にその嘆きの叫びが空間内にこだましたのは言うまでもなかった・・・・・・・・

同時進行は大体エライことを引き起こして大変なことが起きたりうまくいかなかったりする可能性があるるので皆さんは極力しないように……（経験談）
（コラボ回）

人類人権団体過激派 破棄された車両基地

大規模拠点 司令部 司令室

「やっぱり緊急事態じゃねーか!!!」

緊急の通信を聞いた司令は項垂れながら叫びにも等しい嘆きをその部屋で響かせた

「AODのヘリが現れてから巡回から次々に連絡が途絶えているからもしかしてと思つてたら、今度は何かの電撃を放つ怪物とBLACK WATCHのエンブレムの付いた黒くてデカイロボットが基地周辺にしている対空兵器を破壊してきたって……どう考えてもヤバい事態じゃねーか!!各員戦闘配置急げ!!対空兵器の周囲の警戒と空の状況を調べろ!!恐らくというか敵はこの拠点を爆撃するつもり満々だあ!!大元にも連絡を入れておけ!!」

司令は立ち直つた後、すぐさま部下と基地内の兵士達に指令を送るも内心……

（報告を軽くみるだけでもAODとBLACK WATCHが手を組んできても同然な状況だ……どうすることもできない可能性が高すぎるぞオイ……）

ほぼ諦めに近い感情を抱いていた……

そんな時

「司令大変です!!」

「……今度はなんだ?!またどっかが攻めてきたのか!」

新たな緊急の報告に司令は目を剥くことになった……

「れ、『レギオーナーリウス』がBLACK WATCH所属と思われるロボットと化け物との交戦を開始しましたあ!!!」

「……………？」

一方その頃……………

なんなんだこれは

タイラントとブリッツはその状況にほぼ同時にそう思った……………
タイラントを通して見ているエルダーブレインもそう思っていた
ようでしたしばしば固まっていた

その状況は抵抗してくる過激派を蹴散らしながら目標である対空兵器2機目を破壊した後に起こったのだ……………

「お〴〵お〴〵お〴〵お……………お!!5ヶ月ぐらい続いてた肩こりが治った!!いい電撃だ!!」

「マジか!!あのE・L・I・Dか動物か分からんやつすげえな!!」

「なんか電撃を放つ害獣扱いで駆除しようと思ってたが……………こういうことや考えられる限りでも様々なことができて、応用ができそうだな……………ちよつと捕獲を視野に入れてみるか!!」

「こっちのP・A・C・Sが電気工事対策仕様だったのと避雷針・電気用工事の資材などがあったのが幸いな、いっちよやってみるか!!」

「あの黒いデカイロボットも凄そうだな……………さつき戦車の砲喰らって無傷だったみたいだしな」

「あの装甲……………あとで回収して解析したら建材や機械類とかの発展に使えるそうだな……………よしそのデカイロボット!!ちよつと解体される!」

ブラッツが放った人を軽く黒焦げにするレベルの電撃を喰らって肩こり治ったぐらいの効果しかなかった人を含むS・G・Sのようなものをつけてる以外はただの作業員と思われる人達やなんかその

辺の建築機械に使われている黄色と黒の配色が目立つP・A・C・S数機、何やら建築機械と思われるブルドーザーと二本腕シヨベルカーが合体したような存在などがタイラント達の目の前でその会話をしてタイラントを見ていた……………

その光景と会話の内容にタイラント達は自分たちの所属する組織の幹部とボス、技術班達などを想起して恐怖を感じずにはいられなかった……………

その後すぐに恐怖を想起させた存在達が彼らに襲い掛かったのは言うまでもなかった……………

「……………どうやら警戒されているようですね」

AODの地上支援部隊の9A-91はそう静かに呟いた

彼女達の目には基地周辺と対空兵器の周りを人類人権団体過激派の兵士達とP・A・C・SやI・A・C・T、戦車などの強力な兵器群が警戒態勢に入り、周囲の巡回と防衛に当たっていたのだ……………

「やった巡回から連絡が入らないことが怪しまれたのか、BLACK WATCHが派手にやったのか分からないがこりや一筋縄では行きそうになさそうね……………」

事態は少しずつ……………されど確実に動き出していた……………

「!!?」

サイバーブレインの叫びによって異常事態は既に起きていたことに全員が気がついた

だが、

「ギヤアイイイイン!!??」

ブリッツは突然飛び上がりのたうち回った拳句に泡を拭いて痙攣しながら気絶し

ズドオーローン!!

!!??

タイラントは動こうとするも脚の感覚がおかしく、バランスを崩し、両手を使って転倒の被害を最小限にしようとするも両腕が存在せず、そのまま倒れることとなり、その場のBLACK WATCH関係の全員が行動不能状態に陥った

そして、その両腕と武器全てはいつの間にか「テツ」の足元に置かれていた

『どうしたサイバーブレイン!?ブリッツ!?タイラント!?!』

「安心しな、電脳の嬢ちゃんはおちよつとこつちの特殊な方法で軽く発狂状態に陥らせただけだ、30分ぐらいで機能停止するだろう……それまではそつちの方であつちこつちに色々被害があるかも知れんがな……ロボットから両腕と物騒な武器全て、脚の中身の部品をいくつかなどのもらうもんをもらったのよ……なに立ち上がってギリギリ歩けるぐらいの脚力は残してるからコケはしても歩けるはずじゃ、ワンコロに関しては……ちよつとワシの10年モノの汗と涙、努力などの結晶の匂いを味わってもらっただけじゃ、その匂いに感激したのか面白い動きで気絶しておったわ!

ガアハハハハハハハハハ!!」

「!!「うわぁ……」」

「おやつさんのめちやくちや臭い靴下の匂い嗅がされるとか……あの犬可哀想だ……トラウマになって腑抜けになきやい

けど」

「さすが獣殺し．．．大体の動物アレ喰らったら死ぬか気絶かの二択だからな．．．」

レギオーナーリウスの人員達はその被害者であるBLACK WATCHに同情していた

「これでワシらの総大将を裏切らせるマネをさせようとしたことからウチのもののマツサージ代や、面白い会話をさせてもらったなどのことを差し引いた対価をこれでチャラじやな!!それじゃビーストとやら．．．」

ワシらはともかく、今度ワシらの総大将を侮辱させるようなマネをしたらオマエらの建物や物、そして機械という機械がバラバラに解体されるのを覚悟してもらおうか．．．」

（（（うわあ．．．これおやっさん内心めちやくちやブチ切れてるヤツだ（（（）））））

『．．．』

「それじゃ靴下を回収してつと、オマエら帰るぞお!!」

「「「ハイ、おやっさん!!!」」」

その声と共にレギオーナーリウスは基地の方に向かって去っていった．．．

この日、大規模拠点の攻略に出ていたBLACK WATCHのタイルント、ブリッツは作戦行動不可能となり撤退することとなり、BLACK WATCH本部ではサイバーブレインの暴走により相応な被害を出すことになった．．．

少し前の時間．．．人類人権団体過激派大規模拠点 司令部司令室にて

「今度はG&K社のところからの襲撃の報告っておま．．．」

く泣きたい気持ちなんなんだけど……わりとマジで……基地周辺の対空兵器は大半が破壊され、戦力もかなり減らされている……もう形的にはあれに頼るしかないじゃないか……」司令は若干の涙を流しながらそう言いつつも、事態の被害を出来る限り最小限に抑えるべく対処にあたっていた……

「……一応秘匿通信だけど早く、そして何事もなく大元の方に繋がって欲しいのだが……というか早く繋がってくれえー！！！」

その全身全霊の懇願にも近い願いは……
「司令!!大元との通信が繋がりました!!」

その報告によって叶えられることとなった

大規模拠点から100km以上離れた地点 森林地帯 ????

「隊長緊急事態です!次の到着予定の拠点から緊急連絡入りまして、ただいま交戦中とのことですよ!!」

「なに?どこと交戦状態なんだ?」

「報告によればAODとBLACK WATCHが一緒に攻めてきているとか……更に言えば対空兵器の破壊を優先的にやっている節があるため爆撃の可能性があるとも言ってます……すでに何機か破壊されているとあったの司令が泣きながら言っています」

「……マジで?」

「報告の限りでは本当のようです……更にはBLACK WATCHに関して証拠の映像も送られてきました……後レギオナーリウスもBLACK WATCH所属と思われる存在と交戦しているとのことですよ」

動いているその乗り物の中で彼らは報告の件について会話してお

り隊長と呼ばれた男性はその内容に、を抱えながらも少しの間考えた後

「……確かそこでレギオーナーリウスの一部隊が搭乗予定だったな」

「え？……あつ、は、はい！」

「……優秀な人員などをここであまり失いたくないものだな……アイツら死ぬかっていえば想像ができないが……『車両』を停止後直ちに戦闘配置！支援攻撃の準備、『虎の子』とMLRSの用意だ！拠点の方にそう報告しておけ!!」

「了解!!」

「整備長『S・A・C・S』は全機使えるか？」

『ハッ！16機全部使えます！』

「分かった、9機と『あの部隊』、『例の試作機』を援軍として送り、残りももう一機の『例の試作機』と一緒にこっちの防衛に当たらせるぞ！無論送るヤツの一機はレーザー式連絡偵察兼支援仕様装備でだ！こちらからも砲撃援護するのに欠かせないからな」

『了解!!』

その命令にほとんどの人員が動く中

「……いいんですか？確か『その三つ』は秘匿の部類だったと思いますか……」

「レギオーナーリウスが工事の途中でなんかかなり重要な情報を手に入れたかなんとかの連絡の後の出来事だし仕方ない……それにあそこは人類人権団体過激派の中でも

大規模拠点の一つ……大損害喰らっても維持できる場合や破棄して撤退せざる得ない場合でも出来る限り戦力の維持できている状態でないと今後はどう影響するか分かったもんじやないかな……」

「……世知辛いですね」

「……全くだ」

そんな会話がありつつも戦場に何が起こることは确实であつ

大事が起こっている最中でも終わった後でもやることはやらねばならない場合がある（コラボ回）

それは突然の出来事だった

ドガアーーン!!

『メーデー!!メーデー!!やられた!!繰り返すやらr』

ドガアーーン!!

『クソ、敵がロケットランチャーを撃つてきやがった!!しか正確に狙ってやg』

ドガアーーン!!

対空兵器に攻撃を行っていたAODのUH-60が3機中2機が撃墜されたのだ

メリーナと9A-91達はその攻撃が飛んできた方に顔を向けた

「遅れてスマン!!とりあえず援軍に来たぞ!!」

「つてこりゃ対空兵器が壊滅状態だなこりゃ…………この辺の対空攻撃は期待しない方がいいな」

「なら味方を他の地点に移動させるしかないか」

ドガアーーン!!

そこにはP・A・C・Sと思われる機体が地面を滑るように進むのように高速で移動しながら残り一機になっていたUH-60も墮とし、戦術人形達に銃撃を行い屠っていた…………

「あれはP・A・C・S?」

「その改良機みたいわね…………ホバー移動をしながら当ててくるって結構な腕を持ったのが来たみたいわね」

メリーナをそう言いながら笑顔で迎撃の態勢に入り、部下達に迎撃指示を出して行った…………

その日、その時間、各戦場にてP・A・C・S改を重点に置いた高練度の小隊が多数出現し、AODとG&K社の部隊に少なくない被害

をもたらす事になった

ビースト襲撃から40分後……

「というわけですまん、ワシらの仕事終わったけど、ご覧の通りBLA CK WATCHのアカンやつに襲われてワシ含めて4人以外全員おっちゃんじまって帰らなければならんからこの基地から撤退させてもらおうわ」

テツは生き残った数少ない部下達と一緒に右腕のない状態で司令達の前に立って何気ない形でそう言い放った

「『『なにがというわけだあああー』』』』』?」

その司令部に居た全員+α(『大元』からの通信モニター)総出の総出の叫びは戦場の銃声と爆発音に負けないほど響くことになった

「軽!? 軽いよ!! 右腕やられて、部下ほとんど全員死んでしまってるのに軽いよ!!?」

「ていうかあのビーストに襲撃されたって何をどうしたらそうなるんだ!?!」

「そもそもアンタ重症なのにここで喋って大丈夫なのか?」

「撤退することは否定はしないが……異常事態にも程があるぞ!?!」

「もうやだあー!! ぼくもうねる!!」

『オイイ!!? そっちの司令が幼児退行しかかっているぞ!! なんとかしろ!』

バギア!!

この混沌具合が収束するまでしばらくお待ち下さい

「という(こ)を踏まえると……おそろくビーストがまた戻って

くる可能性があることとそれ以前に爆撃がされること、今の基地の現状をなど考えると．．．こりや撤退したほうがいいかもしれんう．．．」

「『』．．．』」

色々言いたいことはあれどまさにその通りであった．．．基地の現状から推測すると現状の対空兵器の数ではこの後来る爆撃にどれほど対処ができるか．．．それ以前にビーストとやり合えることすら不可能と考えるというのが正しかった．．．

「大規模拠点を手放すのは痛いが．．．これ以上更なる大被害が出ること、大元が無事であることを踏まえると．．．心苦しいが．．．」

『．．．先程こちらの援軍を一時取りやめていたが、念のため『S.A.C.S』を偵察に出したが．．．大規模な航空機部隊が確認された．．．エンブレムはAODだ．．．更に付け加えるとG&Kの大規模部隊も確認された．．．どうも爆撃後に更なる攻撃を行うようだ』

その情報が決め手となり、その後色々話し合われ．．．

その日、人類人権団体過激派の大規模拠点の一つが破棄され、撤退することが決定された．．．

その撤退の通信が戦線の兵士達に届くまで後 15分．．．

その後．．．通路にて

「ゴホゴホゴホゴホ．．．ゴバア!!」

「おやっさんやっば無理しとるじゃねーか!」

屈んでそれなり量の血を口から吐くテツの周りを部下達が囲んで心配していた．．．

「やっばありやっえーわ．．．一部には結構劣つとは思うが

ワシも人生それなり経験しとるとは思ってたが手加減されてあれじゃ勝つ見込みすら存在しないなありゃ……あっちの代償を支払わされてしまうたし、ワシの任された一部隊の大半を失うしでこりゃ引退かの？

ガアハハハハハハハハハハハハハハハハ！

ゴホゴホ!!」

「おやっさん笑つとる場合か!?!」

「……じゃが」

テツはそういうと地面にそれなりの量がたまった血の池の中を弄り始めると何かを救い上げた……

「……ビーストとやら?こちらの方も八つ当たり分のツケを偶然とは言え一矢は報いる形で払わせてもらったぞ?」

テツは手に持っているものを見ながら笑った

それは近くで見ないといけないほどに小さく、血に濡れているものの、それでも尚黒いと分かる何かの金属のような物質だった

「おい、『カオナシ』そこにいるんじやろ?だったら早う出てきてこいつを総大将のこの技術開発に持っていけ、無論慎重かつ嚴重にな」

その言葉が言い終わった瞬間

「!!?!」

テツと部下達の前にまるで最初からそこにいたように人が現れたのだ

その存在は人型ではあるものの顔が存在せず、そのかわりに頭全体を電光版のようなもので覆っており、服装に関しては防護服と戦闘服が合わさったようなものという姿をしていた

(了)

そしてテツの手からその黒い物質を摘むように取ると腰のポケットの中に入れて、その後すぐに消えた

今度は最初からいなかったかのように……

「さて、お前ら!! さつきと帰ってから共同墓地作って弔いが終わった後にさつきとレギオーナーリウス『第四部隊』の編成を立て直すぞ!!」

「いや、おやつさん!? 色々言いたいことがあるけどアンタ重症!?!」

「さつき吐くもん吐いたら調子良くなった!!」

「三」それ、無理があるって!!」「三」

DG小隊のリバイバーが司令部に攻撃を受ける前の僅か3分前の出来事であった

大規模拠点から100km以上離れた地点 森林地帯 ???

「さっさと逃げ！アレとMLRSの発射と『例の試作機』発進の準備は出来たな!?!? 発射後は早急に例の装置で撤退するからな!!」

そこでは何かの乗り物の天井が開き、そこからミサイルポットのよ
うなもの、そして巡航クラスミサイルの発射器、天井と壁ごと展開さ
れている場所では6mを超えた大きさの人型がカタパルトのようなも
のに固定されていた

『S・W・B・M』とMLRSの発射中完了しました!」

『こちらパイロット!機体の調整完了!発進準備OKだ!!』

それを合図に隊長と思われる男性は指示を出した

「了解した………それでは友軍の撤退の援護をコレから開始する
!わずかでもいい、一人だけでも多く逃すんだ!」

『大元』に任せられた過激派の退却援護作戦が開始される事になっ
た………

そして、しばらくした後………

森林にぽつりとかかなりの広さで広がっていた広場のようなその
場所にはまるで何もなかったかのように何も存在しなかった………

その作戦の影響はすぐに戦場に現れた………

G & K社主力部隊 退却場所

「報告によると過激派の大規模拠点の司令部は陥落、すでに前線など
の過激派達は退却しているみたいね………コレはもう少しした
ら追撃掃討戦が始まるわね………」

ヘレン・クローザーは報告と戦況からこれから起こる事を考えていた………

その時ふと空の方を見てみた、何気なくの気持ちで見ただけなのだがそれが功を奏した

「……!!?全員逃げて!!多数のミサイルがこつちに飛んで来てる!!」突然の叫びに人間達は咄嗟には反応できなかったものの戦術人形達が反応しその場の人間を連れて逃げ始めた

そして僅か2分後………
クラスターミサイルの雨がその待機地点降り注いだ

結果として、戦力の7分の3の損失で抑えることが出来たものですが、すぐには行動に移せなくなったのは言うまでもなかった………

だが、すぐに第二の不幸は起こる………

5分後………

過激派の大規模拠点から20km離れた場所　その上空にて………

そこではAODの大規模な航空機部隊が爆装をして飛んでいた………

「あーあーメリーナ司令も手が出しが早い上に残り物にすら手を出しちゃうんだから………」

「まあ何の出だしもできない敵を一方的にやれるんだからいいんじゃないの?」

「まあそうだな」

「「H A H A H A H A H A H A H A」」

そんな感じの会話がされていた………

「うん?なんかあそこ飛んでないか?」

誰が所属不明の存在が飛んでいることに気づき、大半のものがその

方向に視線を向けた

その瞬間

ズドオオオオオオオオオオオンンンンンン!!!!!!

その物体が爆発した瞬間僅か1秒にも満たない時間で強烈な衝撃波がAODの飛んでいた航空機全てを巻き込み全てを粉々に破壊していった……………

文字通りの全滅であった……………

そして、その衝撃はその100km以上も届き、その圏内の全て無線通信の電波を掻き乱し、長い間過激派、G&Kの通信網を使用不可に陥らせた

もつとも過激派にとっては既に撤退しか方法はなく既に全部隊に撤退の命令が伝わっていたため、その不幸は逆に幸運であったが……………

そして、三つ目の不幸が訪れる

その5分後……………

過激派の大規模拠点周辺

そこは焼け野原になっていた……………あっちこっちガラス化するほどの

「なんだよあのデカイのは!?めっちゃくちゃ早い上に武装が多いぞ!」「空のあの光の後に通信も使い物にならなくなったしどうすりゃいいんだ!?!」

その焼け野原の炭か、無になることを免れたG&KとAODの兵士と戦術人形たちはその存在によってパニックに陥っていた

そんな者達の視線の先には……

6 mぐらいもある機械の巨人のような存在一機が右肩の上に突き出るような形で搭載されている大砲のようなものに光を溜めながら、右腕に一体化される形で搭載されているグレネードランチャー付きのアサルトライフルを40 m機関砲と100 mクラスの小型のカノン砲にランクアップさせた兵器で蹂躪していた

そして、その光を溜めていた大砲を人数が多く固まっている場所に向けて発射した……

それはそれは太く、全て飲み込み焼き尽くす光と言っているほどに見えるだけでも凄まじい威力があるということが実感できるほどの光の線だった

「させるかあ!!!」

その光の線とその場所の間をD G小隊の一員であるリバイバーが割って入り、F・E・F・Gを展開し、その光の弾を防ぎ始めた

「うおおおおお!!!」

F・E・F・Gでもその光の線は完全に防ぎきれず、弾いた部分の光があつちこつちに降り注ぎ被害を少なからず増やす形となったが……それでも最悪の事態を防ぐことに成功した

その光の線が途切れた時

F・E・F・Gは完全に使い物にならないレベルで破壊されながらもリバイバーはV・S・L・Cを最大出力でその存在に向けていた

「今度はこつちの番だ喰らいやがれ、デカブツ」

今度はV・S・L・Cから高出力のレーザーがその存在に放たれその身を貫く……ことはなかった

「……ハハ、そんな重武装でシールド持ちとか卑怯だろ」

若干のブーメラン発言はあったものの高出力のレーザーその存在の少し手前でシールドのようなもの弾いていた……そして、そ

のままの状態でリバイバーの手前まで凄い勢いで突進するかのよう
に進み

ガゴオン

ズバア

左腕の盾の先端から赤くなっている剣のようなものを伸ばして、
V・S・L・C本体とリバイバーの両手、下半身を丸ごと真つ二つに
切り裂いた

その後・・・・・・・・

その場所で例の存在の攻撃により全員が満身創痕のD G小隊達に
手当てを受けているリバイバーが確認され、無事とは行かずとも生還
する形となった

20分後・・・・・・・・

その機械の巨人は目の前の光景を機械の目に焼き付けてい
た・・・・・・・・

自らの放ったミサイルとビーム、砲弾を陥落していた大規模基地に
向けてその中にいる敵ごと撃ち、爆発炎上していく光景を・・・・・・・・
それで己に任されていた役目が完了したのか、振り向いてその場を
離れようとしたその時

ドガアゴオン!!

ギヤリギヤリギヤリ・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・ほおう？最後の最後でこれまたデカイのが
出てくるとは・・・・・・・・それでいてこれに反応できるとは・・・・・・・・」
BLACK WATCHの幹部ビーストが凄まじい速さでその存在
に接近して大銃で切り掛かってきたのだ、それに反応したその存在
が左腕の盾でガードするという光景が僅かの時間で起こってい
た・・・・・・・・

ブウン!!

「おつと振り払ってきたか……装甲も硬いな……なかに面白くなってきたじゃないか」

そのビーストの獰猛な笑顔にその存在は静かに対抗する体制を取った……

今にも想像絶するほどの戦闘が起きかけていた……

その時、『最後の不幸』が訪れる

音もなく突然に……されど目に見えて起きた……

「な、なんなんだこりゃ!!?」

最初にその近くに生き残っていたものが気づいた

それは……

目の前の地面が2mぐらいの半分の球体状に『消えていた』のだ……まるで空間ごと削り取られたかのように……

そして、見渡してみればその周囲にも距離や大きさなどに違いはあれど同じような現象が数多く起きていた……それが地面や建物、兵器、残骸、そして戦術人形と人間の身にも……

「俺の腕がぁー!!?」

「銃が抉り取られている!!?これじゃ使い物にならない!!?」

「うわぁ!?!戦術人形が下半身だけ残ってる!?!」

その現象に更にパニックに陥っていった……

そして、『その不幸は』……

「……あ?」

ビーストの身にも現れた

右腕の膝から手までの部分と下半身、左腕全部、そして大銃と大楯の大部分が消えるという形で……

「……!!?」

その起きたことにビーストは思考が遅れたものの、その部分の中身の崩壊液が跡形もなく無くなっているなどの特徴に気がつい

小さく書かれていたことをアラマキは見逃さなかった．．．．．

『FANNIES』

そう書かれていた事を

その日、結果的にはG&K社・AOD・BLACK WATCH連
合部隊は全戦力の5分の3もの損害を出す形となり僅かに生き残つ
た過激派を逃す形となった．．．．．

知っているか？事後処理からは逃げられないってことを（遠い目）コラボ回

G & K社 本社 社長室

「……以上が我々主力部隊の被害、拠点攻略部隊の被害です」
G & K社社長のクルーガーはヘリアンの報告と手に持っている書類を確認し、その凄まじい被害に眉間を抑えた……

その書類には6mもの大きさの機械の巨人が己の武器で蹂躪していく光景、主力部隊の被害の様子を撮った写真が含まれていた

「過激派の影に何かがいると思っていたが、まさかこれほどのもの持っていたとはな……その上突如起きた『怪奇現象』……」
AODとBLACK WATCHがいれば過剰戦力もいいところで、被害も押さえられると思っていたのだが……結果的には目的は達成しているのだが……辛い勝利だ……」
「……はい、その通りです」

そう呟きながら胃と頭にくる痛みを抑えつつ頭の中を整理していった……そして結論を出した

「……今回参加して、生き残った指揮官、兵士、勢力全てに報酬金を7割増しで払え」

「……分かりました」

後日生き残った全ての勢力や指揮官、兵士、そして戦術人形達に当初よりも多額となった報酬金が支払われた……

???? 巨大格納庫のような場所にて……

『1号車部隊』ただいま全員帰投しました!!」

『ファニーズ』も同じく帰投しました!」

「うむ、(´▽`)苦労だったな」

そこで『大元』の名で隠された形で呼ばれていた乗り物とその乗り物に乗っていた隊長格の存在二人が???に敬礼していた

尚『大元』と呼ばれていた乗り物は森林地帯で全体像は見れてなかったもののこのとてつもなく巨大な格納庫ではその姿の全体像を露わにしていた……………

それは……………

とてつもなく長くそして巨大であり下部にはいくつもの脚が生えており……………いわば東洋の妖怪大百足を機械化したような姿をしていた

その大きさは巨大格納庫の大半を占拠していた……………それを気に留めずに、???は話を続けた

「今回これ以上の被害を出さずに済み、H・A・G・Sの実戦試験、僅かにではあるが友軍の退却支援、そして敵戦力への大打撃……………それを現場の判断で達成……………見事だったな」

『ハッ！ありがとうございます!!』

「H・A・G・Sのパイロットにも伝えておいてくれよ？」

そんな会話がありつつもある話に入った

「……………レギオーナーリウス第四部隊に関しては残念でしたね」

「……………ああ、全くだ……………アイツらはいいつも暴走気味でいつも大惨事を引き起こして俺達を何度も何度も困らせていた……………だが、それでも優秀で仲間意識も人一倍強い仲間だった……………」

「……………生き残りはいますか？」

「……………3人に関しては今安静させている……………が第四部隊長のテツに関しては……………」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!??」

……………あの叫びの通り『節操ない狂医師団』に集中治療室送りにされてる……………どうもアイツは崩壊液や放射能汚染物、猛毒などが空間圧縮法とかでなんかできたものを飲み込んで隠してたらしく、それで『カオナシ』がそれを渡されて持ってきたのを解析か

『羽化計画』

そう書かれていた・・・

人の話し合いはとても大事……ただし時と場合による……特にこのご時世は（遠い目

????
患者部屋にて

「いや／＼エライ目にあつたわ」

真顔でそう言いながらテツはベットの所で寝かされていた

「……………そら得体の知れないものを飲み込むからだろ……………そのおかげであの黒い金属の素材とかでき方の一部とかが判明したからいいが……………いくらアンタがE・I・L・D耐性が高いとは言え、もろ自殺行為に等しいからな？治療に成功して何とか大丈夫そうだけどき……………」

面会に来ていた?????はそうツツコミながらテツの心配をしていた

「しかし、そうゆうてもな……………総大将」

「……………右腕引きちぎられて欠損しての食道や胃などの内臓に崩壊液や放射能系の毒物のオンパレードな融合物で深刻なダメージ……………コレ普通の人死んでるぞ？この大怪我のダブルパンチでアイツら狂医師団もブチ切れ＋狂乱＋狂喜状態だったんだぞ」

「……………正直すまんかった」

「分かればよろしい」

そんな会話がしばらくの間繰り広げられていた

「そういえば総大将？」

「うん？どうした？」

「さつき面会に来た部下から聞いたんですが……………どこかが会議室を使用するって聞いたんですが……………どこか使ってるんですか？少し気になってな」

「会議室？……………ああ、そのことか」

「ファニーズと技術開発、研究班とかが集まって話し合ってるな……………おそらくというか混沌な会議なのは確定だろうけど」

?????
会議室のような場所にて

「H・A・G・Sの盾の装甲に結構ダメージあえてるって……あの黒い金属で作った大鉈のあの特殊状態をH・A・G・Sの装甲といえど何度も喰らったら恐ろしいことになるのは間違い無いな……」

「まあ実践テストは概ね成功と言っても過言ではないし、結果も良好のようだから少量産を進める方針がいいかな？」

「さて、あのワンオフ機状態のまま量産化は流石にまずい、何とか性能を落とさずにコストを下げる方針で進めないか？」

「だったら武装をある程度自由に変えられる形でどうだ？これまでのP・A・C・Sから得たデータなどを参照にすれば何とかなるかもしれないぞ？」

「ついでにあの黒い金属の取れたデータから試験的に作る予定の装甲を搭載も考慮しておくか……またコスト跳ね上がる可能性が高いが……」

「S・A・C・Sの戦闘データが取れなかったことは少し残念だったが……次の機会に期待するしかないな……」

「確かにバイバーって言うんだだけか？あのバリアと強力なレーザーを撃つた戦術人形、アレの武装を擬似コピーして強化したのをこっちの新型P・A・C・S開発計画に持ち込んでみるのもいいかもな」

「「それいいな!!!」」

「そんなことよりおうどんたべたい」

「おまえは何を言っているんだ？」

「ちくわ大明神」

「誰だ今の」

「??????の言う通りそこは混沌とした話し合いがされていた……」

「H・A・G・Sのことはある程度決まったので次の題材に移ろうか……」

そのプレゼンの言葉により先ほどまでと打って変わって会議室は静かになった

「では移るぞ．．．この映像を見てもらいたい．．．あつ、かなりグロいものだから注意な」

その映像がプロジェクターによって映し出された．．．その映像はBLACK WATCHの幹部ビーストの身とその周辺などに起きた怪奇現象の起きた当時の一部始終の映像だった．．．

その映像が終わる頃には．．．

少数が気分が悪くなってトイレに駆け込むもの．．．そしてその他大半はその怪奇現象の異様さに頭を抱えるもの、様々な計算をブツブツと呟きながらその現象を解こうとするものなど混沌とした光景が再開されていた

「．．．『あの空間』にはその残骸と思われるものがなかったようだからまた別の空間攻撃の一種とされるが．．．駄目だ何の種類の空間攻撃か分からんぞ」

「．．．これH.A.G.Sでも喰らったらもしかしくなくても不味かったヤツだよな」

「その場所周辺でランダムに起きたってことは．．．制御できてなくて起きたか．．．あるいは自然現象の一種か？」

「．．．もしかして宇宙人やら魔術のオカルト系か？」
「その線あり得そうだが．．．もしかしたらその先の更にヤバいもんかも知れんな．．．」

「ああ、そうか．．．そういうことだったのか．．．怪奇現象とは．．．クトゥーフ．．．ゲッ○線とは．．．」
「．．．誰かあー、あのバカがなんか変な電波を受信しておそらくだけど全く違う何かを理解しかけてるから精神分析（物理）をよろしくー」

「アイアイサー」

ドゴオ!!!

こうしてその『怪奇現象』の話はあまり進まなかったものの今後この現象の調査を進めることが長い時間の会議の果てに決まることとなった．．．

破棄された都市……

「やつと地下から出ることができた……久々の青空つて色々と精神に安らぎを与えるもんなんだな……」

万能者は破棄された都市の廃地下鉄の出入り口で青空を見ていた……

「どうやら長い間地下にいる羽目になっていたようだった……
「まあとりあえずこれからどうするか……まあ色々あつてドラゴンブラッドのヤツが疎かになってたし再開するのは確定事項だな」
そんな今後の事を考えていた万能者だった……」

デカイことの起こってる時に人知れず更にデカイのが起こってることってあるよね……

時は少し遡る……

人類人権団体過激派の大規模補給路破壊 募集発令時 同日

破棄都市地区 地下???? 古代遺跡

「……なるほどな……アンタらはここに静かに暮らしてたってことか」

「……ハ、ハイ神龍の眷属様」

「……神龍とか眷属とか無理して言わんでもいいんだぞ?」

万能者はその地下に存在している古代遺跡に住む原住民と思われる存在のリーダー格と話をしていた……

その存在は人型ではあるものの全身に鱗が存在し、首から頭が蛇とさう見ても異形の存在であった

更にその周りにはリーダー格と同じような存在、犬の顔をした人型の存在、甲殻類……いわば虫のような姿をした存在達が囲んでいた……

側から見れば、異形の存在達が万能者を取り囲んでいるという状況ではあるが、実際のところ虫のような存在以外全てが万能者に畏怖の感情を抱いているようだった……

「……すまんがもう一回整理するぞ?つまり言うとなんたらは神話関係の異形の存在で、種族名的に言えば蛇人間、喰屍鬼、ミルゴとさう名の存在達がここで細々と隠れながら暮らしていたってわけだよな?」

「……ハ、ハイさういうことになります……」

「個人的に知っている限りでは……俺が前に戦ったことがある魚人間な種族と同じ感じがしてたが……アレもあんたら関係の神話関係の異形だったってことか……でも何でアン

「タラはこんなところにいるんだ？」

「．．．．．実は」

そこからの話は彼ら『異形達』のこれまでの軌跡だった．．．．．第三次世界大戦とE・I・L・D、核兵器などにより住む場所を追いやられ各地を転々としていき、その明日を生きれるどうかすら分からない過程の中で過去に抱いていた野望や野心などが消えさり、喰屍鬼達と同盟、ミッドゴとも契約し、この偶然残されたこの旧時代の遺跡を住処にするまでの様々な出来事．．．．．

それは彼らが人間達の行動・戦争による被害者であることの証明でもあった．．．．．

「．．．．．」
「めちやくちや苦勞してたんだなあんたら．．．．．」

それを聞いた万能者は彼らを哀れむような目で見ることにしか出来なかつた

「．．．．．大丈夫ですよ．．．．．ある意味自分達の身の程と世の中の残酷さを知る理由になりましたから．．．．．先人達は人間を支配して再び頂点に立つと言っていました、今の状況で仮に頂点に立つても．．．．．蛇人間の私というのがなんなんです．．．．．我々が井の中の蛙ってことを理解しましたからね」

どこか遠くを見たような目で悟ったような言葉を発している蛇人間のリーダーと同じように遠い目をしている異形達を見て万能者は．．．．．

「．．．．．ガチで苦勞してたんだな」

更に哀れんだ．．．．．

「．．．．．そんな話は少し置いておいてなんなんです、神龍の眷属様お願いがあります」

「……そんな話で置ける話ではないような気がするが……
とりあえずなんだ？」

万能者はその願いをまず聞くことにした

「……我々の全滅の危機……いや地球の生きる物全ての
危機を収めるのをどうか手伝ってくださいますよう、お願いしま
す!!」

「……またヤバい規模な厄介事なの？」

その場の異形達全員の必死の土下座に万能者は大規模な厄介事が
起きていることを理解し、今度は自分が遠い目をせざる得なかつ
た……

物語がハッピーエンドやバッドエンドで終わってもその物語の主役が生きてる限り語られずともその後の物語は存在する……………

前回の話から数時間後……………

万能者は異形に世界の危機の一端が保管されている場所に連れて来られていた

「……………コレがアンタらの言っていた世界の危機の一端の存在か?」

「はい、こんな存在とそれに似たような存在が『向こう側』から無数に現れて……………既に我々の仲間が7分の2がこの存在達に……………」
「そりやお気の毒に……………しかしこりや……………エラクヤバそうな造形をした悪趣味なクリーチャーだな……………」

万能者はその話を聞きながらその死骸を調べていた……………その存在は形だけで考えたなら虫という蟻と呼べるような形をしていた……………だが、その実態は脚に当たる部位が人間の右腕と左腕であり頭は人間の頭部と虫を融合させたらこうなるであろう造形をしており、更に体の方は人間体を無理やり虫の形にしたようなもので、はつきり言えばあまりにもおぞましい存在であることは間違いないかった……………

「遺伝情報とかを簡単に調べたが……………こりや死んでる人間をベースに様々なものをツギハギにくっ付けて作ってるぽいな……………そのはずなのにもまるで生きてるかのよう動いてアンタらを襲ってきたと……………オカルトや魔術的に言えばゾンビやレブナント、ネクロマンサー関係のヤツか?」

「我々蛇人間とミィゴの方で色々調べてみましたが……………コレは魔術と科学技術に似たようなものを組み合わせてできたこと、何者かに操られていること……………そして、この存在には『魂』が存在していること……………その三つしか分かりませんでした……………」
「……………しかしアンタらもランダム性とは言えコイツらが存在

する『向こう側』に繋げちゃうとか運がないな……」
「最大限の警戒をしておいて、こんなことを招いてしまうなんて……様々な存在と同胞に本当に申し訳が立ちません……」

ことの経緯はこうだった……

異形達がこの地下古代遺跡を住処にするようになってそれなりの時間が経過した頃……

蛇人間と喰屍鬼のリーダー達はふと思った……

この地球に我々の居場所はもうないのでは？と……

事実、人間達は汚染されずに残った土地や遺跡などで争いがおきる事態が過去に起こっており、今も表面下それによる戦いが起こっていること、更に風の噂ではあるが我々のような異形を狩るものがあることや、BLACK WATCHや正規軍などの勢力が遺跡探索を行なっているなどの要因が彼らに『この古代遺跡が今は最高の隠れ家ではあるが、いつかは分からないが砂上の楼閣になるのは間違いないのでは？』と思わせるのに十分であった

そんな事態を解決する手段はその時には存在せず、現状維持で済ませるしかなかった……

とあるものが見つかるまでは……

それはその古代遺跡の建物の最深部に置かれていたとある装置で、簡単に言えば近くの霊脈を使ってこの世界と別の世界を繋ぐ装置……いわば魔術版の異世界へ繋げるワームホールの発生装置とも言えるもの代物であった……

壊れていたもののミッドゴの技術、蛇人間達の魔術、喰屍鬼達の集めた資料を使えば修理が可能ということもあり、彼らはそれに希望を託すことにした……異世界に彼らの安住の地を探すことを……無論考えられる限りでの未知との遭遇などの可能性を考慮をしながらではあるが

そして、その装置の修理が完了し、起動したところ………
結果的には成功を収めることとなった………

考えられていた未知との遭遇の可能性の中で最も最悪なパターン
の一つ、敵対的な存在がこっち側に集団で攻めてくるという形となっ
て………

「で、この存在が出てきた元凶の場所までの通路にこの存在の仲間で
いっぱいいっぱい、現状はあの建物の入口にバリケードを張って出
ないように防衛していると………」

万能者はその状況を聞いた部分と見た部分を冷静に繋ぎ合わせて
整理していた………

(………うん、どう考えてもこんな奴らが地上が湧
いて出たらアカンことになるのが間違いないからそのワームホール
装置の奪還を手伝うしかないな)

そう思い決断したことを周りに知らせようとしたその時

カーン！カーン！カーン！カーン！

何かの鐘が鳴らされる音が何度も響いたのだ

「!?総員警戒準備だ！建物の入り口の方で何かあったようだ!!!」

「大変です!!通信を確認した結果、ヤツらが集団でバリケードが破ろ
うとしてて、どこまでもつか分からないとのことですよ!!」

「なんだって!!大半は戦闘の用意をしつつ現場に向かえ!!一部は女と
子供、戦えないものと共に避難しろ!!」

その警鐘と共に周りにいた異形達は自分達の武器を確認し、すぐさ
まその現場に向かっていた

「………本当、こどもタイミング悪く起こるもんなのね………
まあこいつらがどんなふうに動いてどんなふうにヤバいのかを確認
するのに都合がいいがな………蛇のリーダーさん、俺も向か

わせてもらおうぞ」

「分かりました神龍の眷属様!!」

「・・・神龍の眷属と言わんでもいいんだがな・・・まあいいか」

そう言いながらも万能者もその現場に向かっていった

「うわあ!?こつちくるなあああ!!」

バババババババババババツ!!!

「クソ、虫型とは違うヤツが混ざってやがる!お前ら注意しろ(ズバア!!)」

ズドン

「ギャツ」

「仲間がまたやられたぞ!!あの人型に注意しろ!アイツら俺たちよりも動きと力があるぞ!!」

そこはすでに戦場になっており、どうやら例の存在達がバリケードを破ってきたようであった

「バリケードが突破されたのか!?まずい!!総員防衛部隊の援護に迎え!!」

『了解!!』

「神龍の眷属様も協力お願いします!!」

「おう、分かった」

その異形だらけの戦場に万能者は蛇人間・喰屍鬼・ミⅡゴ側の異形達を援護するために入っただけだった・・・

ドゴオ!!バギャ!!グシャ!!

(アリ型7・8体目撃破・・・アリ型は数で戦うことを主にしていて、カマキリ型は機動攻撃型、蜂型は遠距離支援型として考えた方がいいな・・・他にも色々あるが主なヤツの分析は完了、後は・・・アレだ)

そんな戦いの中で万能者は持ち前の力を発揮させて戦いながらその存在達の特徴や情報を冷静に分析していた、その中で万能者は気になる存在達を確認していた……

それは……

(……あの人型は体型は15歳前後の少女の姿をしているが、明らかに身体能力がおかしい、持っている武器が見た目以上の火力と性能を持っている、人型でありながら異形の部分を持っているのも存在している……これらのことからかなり脅威な存在であることがうかがえるな……)

万能者の味方をする側の異形達をすでに何体も殺している人型の存在達であった……

万能者の分析通り、少女の姿をしているものの常人の域を超えた力を持つており、明らかに見た目以上の性能がある武器を扱っていること、中には人間には存在しないはずの部位を持った存在がいることから明らかに敵対的で脅威的な異形の存在であることが窺えた……

だが、万能者が注目したのはそこではなかった……

(……分類上ではすでに死んでいることや操られているとかなどの理由が関わっているから、あの目もそんな感じになっているとも考えられるが俺には分かる……アレは『全てに絶望した目』だ……『生きることに絶望した目』だ)

それはその人型達の表情であった……

その表情は無表情ともいえるものであり、その目は一筋の光すら存在しないほどの光のない目をしていた……

それを見て万能者は理解した、コレは味方には荷が重い存在であることに

「……オマエら!!あの人型達は俺が引き受ける!その他をやっ
てくれ!!」

「!?……了解しました神龍の眷属様!!各員あの人型の存在達
以外の敵をやれ!!神龍の眷属様の邪魔になる!!」

『了解!!』

その言葉に味方である異形達はすぐに攻撃目標をその人型の存在

達以外の敵に切り替えて攻撃を始めた

「……………そういうことで悪いがこれ以上彼らをやらせるわけには
いかないのではな……………ぶちのめされてくれ」

そして、万能者はその存在達に向かって攻撃を開始した……………

「……………俺って運が悪いことが結構多いが、生まれとかそういう
のに関しては本当に運が良かったな……………」

そんな独り言を誰にも聞かれないようにボツソリと言いなが
ら……………

英雄の物語の終わりの部分が大体、悲惨だったり残酷な場合が多いのは夢をあまり見過ぎるなつて警告なのかと思っっている

戦闘が始まってから数時間後……

先程まで騒がしかった戦いはまるでなかったかのように終わり、その代わりに負傷者の確認やバリケードの再設置などの騒がしさがあり、どうやら万能者達側の異形達が防衛に成功したようであった……

そんな中万能者は……

「……」

とある存在達の前で無言で立っていた……

その存在達は例の少女の姿をした人型で、先ほどの違いは手足がもがれているか潰されているかの二択でダルマにされており、身体自体の確実に機能停止しているようであった……

だが、その表情は先ほどどうつて変わつて、まるで安らかに眠れることに安堵しているかのようにほんのりと笑顔であった……

「……」

万能者はそれを見た後に手に持っているものを見返した

それは五寸釘より大きい釘のようなものに何かの刻印と機械的な回路のようなものが付けられているものであった……

「……少しブチ切れて話に乗ってしまったが約束は約束だな……『アレ』引っ張り出しておくか」

回想

少し前・・・戦闘が終了した頃

「うん？なんだこりゃ？」

万能者は無力化した少女の姿の人型（この時はまだ無表情であった）を調べていた際にその身体の中に普通は存在してはいけないほどの大きく細長い異物が入っていることに気が付いた・・・もっともその異物を身体に入れられたであろう場所にはその際に何本も針で縫われているような治療後があつたために見て気づいたのであるが・・・

「・・・お嬢さん方の身体を更に傷つけるのもどうかとは思いますが、この際アンタらの正体と情報を知らないといけないから仕方ない・・・すまないなお嬢ちゃん方」

そう言いながらその縫われた場所を少し切り開いてその場所に手をつ込みその異物を掴んだ瞬間

「・・・ありゃ？」

万能者は見渡す限りほとんど全てが真っ白な空間に立っていた・・・

「・・・ひよつとして精神世界的ななんかこれ？・・・やっぱリアレはうかつに触るもんじゃなかったかもしれない・・・まあとりあえず聞いてみるか・・・ここにいるのはアンタは誰なんだ？」

万能者の目の前には少女の姿をした何かがかつちを無表情で何も答えずにみていた・・・

どこから繋がれているものかもわからない鎖で縛られて・・・

更に言えばその存在に脚が存在しておらず、幽霊のような不気味な

感じであった……

万能者はその何も応答がなかったのが、少し思うところがあったのか

「……ふん!!」

バギイ バギイ バギイ

「!?」

次々に鎖を引きちぎり、得体の知れない存在を縛られていた状態から解放したのだ

流石に縛られていた存在もこの行動にさすがに隠せなかったのか、表情に現れていた……

「縛られた状態で話し合うのはなんか尋問みたいな感じになるしな……まあとりあえずこれで対等に話せるかな？出来ればアンタらのことを教えてもらいたいんだが……」

それを聞いたその存在は少し思考した後……

「……分かりました」

掠れた声を出しながら話し始めた

その内容は彼女達の残酷な運命と経験であった……

その世界は大戦、大量破壊兵器、そして化学兵器などによって世紀末を通り越して文明に終わりを迎え、残ったものが生物兵器や大量破壊兵器などが跋扈する荒野のみ……

そんな大地で彼女達は産み出された……

いや、蘇らされたのだ……それも彼女達を『製作者』の狂った『思いつき』で少女の形をした身体『リビングゲッドドール』に生前の記憶と精神をそのままに移されて操り人形にされ、『製作者』に抗うどころか逆らうことすら出来ずにただだ『玩具』として扱われ精神と正気をすり減らす言葉に言い現すことができなほどの地獄すら生温い日々を長く長く続けていたのだ……

そのある日、蛇人間などの異形達はその世界にワームホールを繋げてたのだ、その場所のは蛇人間側の異形にとつては運が悪く『製作者』の住処の近くであり、『製作者』は興味本位でその異形達を虐殺、そしてそのワームホールで『製作者』と共にこつち側に来て更に虐殺を行うことになっていた……そして『製作者』はワームホールを調べている間に彼女達命じた……

『私は今忙しいから、あの蛇人間や犬顔と蟲の住処に行つてきてね？
そして彼らを殺してでもいいからその身体をもつてきて、アレでおもしろい人形が作れそうだから……このワームホール装置とやらを使えばこなせれば更に面白いおもちゃを見つけられそうだから』

その命令が万能者に遭遇するきっかけとなったのだ……

そして、冒頭の通り無力化された後に彼女達の身体から見つかった『ソウルアンカー』調べられた際にその彼女の魂に触れたのだ……
そしてその彼女達の経緯と『製作者』などを教えた後に

「どうか私たちを……あの世界が他の世界に手を伸ばす前に終わらせてください……」

願った……自らが生まれ育つた世界を滅ぼすという残酷な願いを……

その願いに万能者は……

「お嬢さん方……俺がいうのもなんだが最後の最後で運が

良かったな……運が良くその本人がアンタらの頼みを実行できるような存在だよ……アンタらとその仲間の分の長い長い終わりの後の物語は俺が終止符打ってやるよ……ついでにそのアンタらの『製作者』のツラもぶん殴ってやる、俺にも思うところがあるしな」

万能者は決意と少しの怒りが入り混ざったような声でそういった

それを聞いたその存在は……

「……ありがとう」

そう言い消え去っていった

「……えっ？成仏しちゃった!?俺ここで取り残されたのか!?」

万能者が少し驚いたのも束の間

気づいた頃には……

「……」

元の光景の世界に戻っていた……

回想終了

「……というわけだが、事態はかなり深刻だぞこりゃ」

万能者はすぐに異形達を集めて敵の目的と恐ろしさを伝えた

「敵に野放しにしていたらまずいことになるのは間違いない……俺がワームホールまでの道と敵の親玉の方をやるが、ワームホールの制御などの協力を頼みたいんだが……頼めるか？」

「分かりました！聞いたかお前ら!!神龍の眷属様とついてくるものをすぐに決めろ!!ついてこないものはここで待機して不測の事態に備

えろ！」

『了解！』

なにはともあれ人知れず起きた人類の危機……その命運と結
末が決まるのが近いのはいうまでもなかつた……

狩人つて人類的に結構重要な役割だと作者は思ってます……ただし猟奇的な狂人はアウトですが（真顔）
（コラボ回）

S14地区……

そこでは戦闘が……

ズバア!! ズバア!!

ゴギヤ グシヤ メキヤ

否、一方的な狩りが行われていた

「ドウヤラ コンカイ ハ ウン ガ ヨカッタ ヨウ ダナ」

蛮族戦士は笑顔（オリジナル）で周りにいるE・L・I・Dを斬り捨てながら、その場所を見ていた

その視線の先には廃墟と化している大聖堂が存在しており、普通であればそれだけの場所のはずだった

しかし蛮族戦士は気付いていた……

その場所から発せられる得体の知れない気配を感じ取っていたのだ

「……サテ ドノヨウナ ツワモノ ガ イル カ タノ
シミ ダ ……ドウヤラ アノ 『ソンザイ』 ニ ミトメ
ラレタ モノ モ イルヨウダ シナ」

蛮族戦士は近くにいたE・L・I・Dをあらかじめ狩り尽くした後、その成果の一部から肉を引きちぎって喰らいながら、その場所へ跳躍するかのように向かっていった……

10分後……

大聖堂……屋上

同時刻・・・・・・・・E・L・I・D大群大移動の現場にて

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドツ!!

ドガアーーン!! ドガアーーン!!

『クソツタレ!!なんでこうもタイムリングが悪くE・L・I・D大群の大移動なんてもんが起きてるんだ!?!』

『この地区での任務が終わった後の帰還の途中でこんな事が起きるとかついてないな・・・・・・・・』

『ぐちぐちと言ってる場合かぁーアーーン!!』

『・・・・・・・・まあ「コイツ」の実験試験ができるから悪くはないが：：：このE・L・I・Dの大群の大移動なんかおかしいな・・・・・・・・』

そこでは『灰色』の塗装が目立つ、主に人類人権団体過激派が運用してるP・A・C・Sと思われる人型兵器数機と巨大な人型兵器一機が己の持つ兵器でE・L・I・Dの大群の迎撃にあたっていた・・・・・・・・

どうやら突然の出来事に巻き込まれたようである

『タイタン1はレーザーランチャーであるデカいのを、タイタン2・3・4は押し寄せる奴らの迎撃、及び殲滅にあたれ!残りは迎撃から漏れた取り残しがないか索敵をやれ!』

『『了解!』』

『了解、『丸頭』さんよ!アンタの方もちゃんとやってくれよ!』

『・・・・・・・・・・確かに「コイツ」は丸っこいが・・・・・・・・・・なんか自分に言われているようで嫌だな・・・・・・・・』

そんな会話がありつつもその行動はE・L・I・D大群の大移動を一時的に動きを止めると言う結果が現れることとなった

ことわざってめちやくちや多い上に汎用性が高いヤツも多いよね……犬も歩けば棒に当たるとか棚からぼた餅とか（コラボ回）

S14地区

『な、何だあの薄気味悪いのは?』

『同じ事だ!やれ!』

グシャ

『タイラント3!!』

『ありや?確かこの規格の通信って……』

『……アイツらの規格の通信だな、人類人権団体過激派にいた頃の教え子達の使ってたやつと同じヤツ』

『……通信から聞いた様子だところやあつちの方なんかヤバいのが現れたほいな……』

そこでは灰色のP・A・C・Sと巨大な人型兵器がなんとかE・

L・I・Dの大群一部の進行を一時的に凌ぎ切り、通信傍受などの状況整理を行っていたところ、別のところの部隊と思わしき通信が入ってきたのだ

それもE・L・I・Dの大群との交戦の最中に謎の存在が乱入し、戦況が悪化していると裏付ける情報とともに……

『……で?どうするんだ?』

『……確かあの部隊はP・A・C・Sの運用適正が結構高めなのを集めたところだったよな?これ以上裏の方で引き抜くとあつちこつちにバレる可能性があるってことで引き抜かなかつて総大将いつてたけど』

『そんな奴らがなんでこんなところにいるか……情報ではBLACK WATCHが人類人権団体過激派狩りをかなりの速度でやってるらしいから、予想ではおそらくその残存勢力がここに逃げ

込んで態勢を立て直そうとしてるのかもな』

『・・・・・・・・・・・・・・・・ってことはアイツらがあの戦いをもし生き残ってもその後のことで悪くて全滅、良くてM・I・Aになってもおかしくないよ・・・・・・・・』

その言葉が出た瞬間ほんの少し静かになった・・・・・・・・・・
そして・・・・・・・・・・

『・・・・・・・・回収部隊に連絡しておけ、「帰りは搭乗員が増えそうだから追加でデカいのを一機寄越してくれ」ってな』

『隊長話分かるな!! アイツら人類人権団体過激派に入ってるながらかなりいい子だったから結構気に入ってたんだよ! よしお前ら急いで用意しろ!』

『『了解!!』』

『オイオイ、得体の知れないヤツも出てるみたいだから注意しておけよ?』

その会話の後、彼らはすぐさまその場から動き出した・・・・・・・・・・
十数分後・・・・・・・・・・

S14地区 E・L・I・Dの大群大移動の現場にて

『クソツ! タイラント6・8も戦闘不可!! なんなんだあの黒毛の人間骨ヤロウ、明らかにやべえ電撃出せるとかどんな生活したらああなるんだ!』 『戦闘可能機残りわずか!! E・L・I・Dの大群もいるってこのにあの黒毛スケルトンがこのままじゃあ・・・・・・・・』

そこでは人類人権団体過激派のP・A・C・S部隊は黒い骨の獣によりすでに半壊状態に陥っており、全滅も時間の問題であった

『あの体勢は!? 各機へ、黒毛スケルトンが放電する気だ注意しろ!』

『ダメです間に合いません!』

それをとどめを刺すかのように黒い骨の獣が周りに電撃を放とうとした

その時

『どっせえええええい!!』

一方

謎の異空間にて……………

そこは要り組んだ古い屋敷の様な建物で、通路や階段が異様に捻り曲がったり、と明らかに奇妙な部分が多いそんな場所であった……グオオオオオオオオ!!

ズバア!! ズバア!! ズバア!!

ゴギヤ!! グシヤ!!

ズバア!!

そんな空間の中で獣の叫び声や、何が潰されてる音、切り裂かれる音などが響く場所があった……………

「ヤハリ ココ ニ キテ セイカイ ダツタ ヨウダ ……………
ワレノ シラヌ モノ ヤ ツワモノ ガ アツマツテ イル」

そこで蛮族戦士は笑いながら、己に襲いかかってくる人と獣が合わさったような存在や狂った原住民と思われる存在達を片っ端から切り捨て、その存在の身を砕いたりなどして戦っていた

すでに当たり対面の床は血と肉のブラッドバスと言えるほどに真っ赤に染まっていた……………

「…………… アア サラニ ツワモノ ヲ !!! ワレ ニ タタ
カイ ノ ケイケン ヲ !!!」

蛮族戦士は未知の存在、強者との戦いを笑いながら楽しんでいた……………

巨大な存在同士の戦いってロマンがあるよね………周りに与える被害に関してはノーコメントで（コラボ回

S14地区にて………

『な、なんなんだこれは………!?!』

『………俺たち映画でも見ているのか?』

それを見ていた、人類人権団体過激派の負傷し、一時安全な場所に移された者達は様々な感想を言いつつ呆然としていた………

『………「丸頭」のパイロットなんであんな戦いをしているんだ?』
『男の子の悪い癖なんなんだろうよ………アイツ、アレのパイロットになれてめちやくちやはしやいでたからな………』

『………それはそれとして、下手な怪獣映画より迫力があるな………』

その一方で正体不明勢力のP・A・C・Sのパイロット達はそう言い呆れながらも目の前のE・L・I・Dの大群の対処にあたっていた

そして、彼らの言っていたそれは………

『オラア!!』

ドゴオン!!

ガアアアア!!

ガゴオン!!

『グオ!?見た目骨の癖になかなかいいパンチをしやがるじゃねーか………ならもう一発おまけだ!!』

ドガゴオン!!

グオオオオオオ!!

『うお!?今度は電撃!?だが、「こいつ」には効かねえ!!』

ドゴオン!!ガゴオン!!

グギャオオオオオオオオ!?

そこでは人類人権団体過激派のP・A・C・Sと正体不明勢力の灰色のP・A・C・Sと思わしき機体達がE・L・I・Dの大群の迎撃に当たっているのを背景に、全身が全て骨だけで構成され、そこから黒く長い毛が特徴的な4本足の存在『黒獣パール』と正体不明勢力所属と思わしき灰色の塗装がされた鋼の巨人が殴り合いをしていた……

『……これパイロットは整備の連中にはリンチにされて、データに関したは開発のところとか一部のマニアでは感涙されるの確定だな』

『……だな』

そんなことがありつつもその後、彼らに襲いかかっていたE・L・I・Dの大群は徐々に数を減らし、しばらくすればその数もほんのわずかにまで減ることになり

そして……

『いい戦いだったが、ここで終わらせてもらおうぞ?』

ガシッ

グオ!?

ガゴオン

『トドメはコイツで切り刻んでやる!!』

ギユイイイインンン!!

ギヤリギヤリギヤリ!!

灰色の巨人が右手で殴り合いで弱った状態の黒獣パールの頭部を掴んで動きを封じ込め、そこに左腕の盾から出てきた光の刃のようなものが回転しているチェーンソーと思われるもので頭部に焼き切り刻ぎみながら差し込んでいくことよって巨大な存在達の闘争に終止符を打つことになった……

「・・・・・・・・・・・・・・・・ ドウヤラ マエ ニ カンジトツタ アノ
ソンザイ ノ アラタナ カンケイシヤ ノ ヨウダナ ……
イチド ハイケン ニ ウカガウ カ ウン ガ ヨケレバ
ソノモノ ノ タタカイ ヲ ミルコト ガ デキル カモ シレ
ンナ」

そう言いながら蛮族戦士は狩ったものから血肉や武器の残骸、何かの道具などをほんの少し回収し、その場所に向かって行った……………

無論、その表情は満面の笑顔（オリジナル笑顔）であつた……………

物事をやっている時、時々絶妙にやられたくない時に限って的確に横槍が入る時ってあるよね……………
(コラボ回)

ローウエンとルーナの睨み合いが今にも殺し合いに発展しそうになったその時

「ミズ ヲ サス ヨウデ ワルイ ガ ソノ タタカイ ヲ ジャ
マ サセテ モラウ」

「!!?」

当然その声に二人は驚愕するとともに対立状態からすぐに周囲の警戒に移った

しかし、次に起こったのは

ドガア バギヤ ゴギヤ バギヤ

「グガア!」

「ガアツ!」

不意打ちであった、それも狩人であるはずの二人が警戒にあたっても感知ができないほどの完璧なものであった

その不意打ちは的確に両者の両腕と両脚の骨を粉々に砕き、武器も手から遠くへはじき飛ばされた……………無力化されたのだ

「ソノ タタカイ ヲ ミタイ キモチ ガ アツタ ガ イマ
ココ デ タタカツテ モラウ ト コマル」

それは二人の間に立っていた……………その身は血塗れで、身体の一部と右腕と一体化した大剣のようなものを青く光らせてながら

その存在はスプリングフィールドとしては見覚えがあった

「あ、の時、の……………!」

それは先にリホーマーの後に異空間に入っていったあのE・L・I・Dだった

「お前は、何者だ？」

「兄さんとの狩りの邪魔をしやがって……許さない……!!」

両手両足の骨を粉々に碎かれた痛みに苦しみながらも二人はそのE・L・I・Dを睨んだ

それに対して……

「アンシン シテオケ ツメノハラ デ ナグツタ ダケ ダ ホ
ネ ハ クダケタ ヨウダ ガ オマエラ ノ ツヨサ カラ ミ
ルト ホンノ スコシ ヤスメ バ スグ ニ ナオル ……
マワリ ニ イタ モノ モ カツテ オイタ カラ ココ ハ
スコシ ノ アイダ ハ アンゼン ダロウ ……シ
ズカ ニ ヤスンデ オケ」

そう言うとそのE・L・I・D …… 蛮族戦士は己の右腕と一体した大剣の腹の部分でローウェンとルーナの頭を強く殴り気絶させ、確実に無力化した

「サテ アノ ソンザイ ノ アラタナ カンケイシヤ ハ コノサ
キ ノ ヨウダナ フタタビ ムカウト スル カ」

そして、彼らを放置してそのままどこかに向かっていった

その後ろ姿を体の自由が効かないスプリングフィールドには見届けるしかできずにそのまま気絶した……

そしてほんの少しの時間が経過して……

「ハジメマシテ ト イウベキ カナ リホーマー ト ソノ ナ
カ ニ イル ベツ ノ ソンザイ トヤラ ? スコシ ハナ
シヲ シヨウ」

蛮族戦士はニッコリ笑顔（オリジナル笑顔）でリホーマー（inソ

フオス)の前に立っていた

そのことにリホーマーとソフオスは……………

「……………」

目の前の新たな厄介事に遠い目をせざる得なかった

一方、S14地区

E.L.I.Dの大群の一部が掃討された後の場所から離れた廃墟にて

『てな訳で、オマエらどうするんだ？このまま人類人権団体過激派として戦うのもいいが……………BLACK WATCHの掃討具合から見ると全滅するのが火を見るより明らかなんだが……………』

安全がある程度確保されたその場所では、正体不明勢力と人類人権団体過激派が話し合っていた

『……………教官、いえ「ファニーズ」の隊長』

『うん？どうした？オマエらを見捨てて人類人権団体を脱退したことなどか？』

『いえそのことではありません……………この際だから聞きます……………』

『……………とあなた方は何者なんなんですか？』

『……………その答えに正体不明勢力のリーダーは……………』

『……………この際だからいっておくか……………簡単にいうと人類が良い意味で次へ、明日へ、未来へと進められるように裏の方で試行錯誤しているところの集まりって感じだな……………そのために色々と犠牲にしているとこの矛盾を抱えている地獄行き確定の者ども集まりとも思ってもらって構わないぞ？』

……………これを聞いて、オレらについてきて人類の未来の

ために働くか、そのまま人類人権団体過激派として世の中を変えるために戦うか、オマエらが決めろよ?』

その後、様々な拠点から撤退して集まりS14地区に潜伏したと思われる人類人権団体過激派の残存勢力は様々な勢力の手で搜索されるものの確認ができず、E・L・I・Dの大群の襲来などがあったことから巻き込まれたものとしてM・I・A扱いとして処理されることになった……

非道なやつは痛い目を合わせて分からせるって結構有効なことが多いよね……：……本当は平和的手段で解決する方がいいけど（コラボ回2）

I O 5 地区

……から80 kmほど離れた高所の廃墟の中にて

「ほう……なるほどなるほど……アレがコレクターの居場所か……」

「……ハ、ハイ……」

万能者は静かにブチ切れながら遠くに存在するその怒りの元凶と言える存在がいる場所を見ていた

尚、その近くにはコレクターの居場所を案内させたリッパー（通信機能や識別信号などの機能を切られた上で手足ぐるぐる巻き）もいることを付け加えておく

どうやら飯を邪魔された恨みをその元凶に味合わせるためにまずはその元凶がいる場所の確認にやってきたようだった

だが、その怒りにさらに燃料にぶち撒けることが眼下に写っていた「今情報できる限りでは人質を盾に埋め込んどると聞いたが……：……見た限りだとああいうのはその上で何か爆弾のようなもんをその人質の体内に埋め込んでいるのがありえるからな……：……何はともあれ一つ確かなのは、どうやらコレクターとやらは人形とかの理由で人道とかを無視するという効率バカなのかもしれない……：……まあ効果的なのは認めるが……」

そう言いつつも冷静に分析をおこなっていた……：……だがその声は怒りと狂気などが混在するような感情の声であることが窺えた

ガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタ

その声にリッパ―は恐怖に震えるしかなかった

何はともあれ一つ確かなのは……

「地下であんなものを見せられて、すこし傷付いた心をちよつと休ませられたなと思つたら……2. 3歩ぐらいマシだけど似たようなもん見せられるというね……そりや五十歩百歩ということで道徳の授業でお話するしかないな……『人』に悪いことをしたら、自分に返ってくる可能性があることをな……それまたまに最悪な形で起きることをな……」

その戦場に『厄災』が襲来することは間違いなかった

「だつたらまずは下準備だ……最近使えるようになったアレが一番だな、あのコレクターとやらの策を的確にめちやくちやにできるからな……まあその下準備が結構めんどくさい部分が多いけどな……てな訳で手伝え」（拘束解きながら）

「……わ、私ですか!？」

「ああ、アンタだよ、飯の邪魔をしたのを許すチャンスだぞ? ついでに言つておくと逃げたらすぐに追つ掛けて捕まえてからオハナシだからな? まあ終わったらすぐに逃げていいけど」

「は、ハイイイ……」

「さてと、久々の『アナザーアイ』と衛星システムを引つ張り出すか……」

(ワタシ オウチ カエリタイ)

※この馬鹿、絶対口クなことをやりません……(真顔)

そして巻き添いになったリッパ―さんドンマイ……(哀れみの目)

そして救援部隊が襲撃した当日……I05地区北側にて
鉄血とグリフィン救援部隊の上から万能者が現れることになつた……

空に小さい太陽が2つ現れると同時に

「サン1・2『人質兼盾』に当てずに本体とその他の鉄血を確実に無力化しろ、その他の勢力には当てるなよ?」

その言葉の後に上空の小さい太陽から鉄血達に光の雨が降り注いだ

その光は曲線を描くように曲がりの確に盾を避け、盾を本体やその他の鉄血達を蜂の巣にしていた……

それは一方的な蹂躪であった……

近くで見えていた形的には助けられた形になっているはずのグリフィンの救援部隊達はその光景を見て無言で恐怖心で何も言えず動けないか、鉄血に同情するか動けないかの二択で動けないという異常事態が起きていた

鉄血に異常な復讐心を持つあのM16A4ですら一時復讐心を忘れ恐怖を覚えるほどであった……

そして数分後、北側にいた鉄血は壊滅したのはいうまでもなかった……

そんな中で万能者は奇跡的に無事だった『盾』を持っていた鉄血人形を腕から出したプラグのようなもので接続して解析を行なった

その近くにはグリフィンの救援部隊も一時的な硬直から解放されずぐさま一部は盾の回収、他はコレクターがいるとされる場所へ向かうための最終確認をおこなっていた

「やっぱり、人質の人形に爆弾埋めてる前提で動いてるぽいな……やっぱりコレ、起爆される前にかして爆破させないようにするかか、人質から爆弾をさっさと取り出して解除するか、どちらにせよさっさとやる方がいいな」

そう言いながら考えていたその時
ドガアーーン!!

「うおっ!?!」

万能者のすぐ近くで爆発が起き、その爆風で万能者は少しよろめいた

「うおつとととと……こつちを狙って飛んできたミサイルか砲弾をサンライトが迎撃して俺に当たる前に爆発したみたいだな、しかしかなりの火力のある上に速度もかなり速い実弾系の兵器……つてことは」

ズドォーン!!

「……やっぱり、俺対策の兵器を用意していたつてことか」

万能者はそう言いながら轟音と共に何か巨大なものが落ちてきた地点の方に視線を向けた

土煙が晴れるとそこには……

それは万能者が以前確認していた存在……万能者より少し大きく装甲や武装、全て重装備の人型の存在がそこに立っており、その武装は全て万能者を狙って向けられていた

「どうやらコレクターに道德の授業を受けさせる前に目の前の厄介ごとをどうにかする必要があるみたいだな……」

更なる戦いがすぐに起きたのは言うまでもなかった

不意打ちって結構絶妙タイミングじゃないと失敗する可能性高いよね（コラボ回）

その気配を全て消し、足音すら聞こえさせず、ゆっくりと蛮族戦士の後ろへと迫っていた狩人のローウエンは蛮族戦士の後ろへと立ち、右腕を蛮族戦士の背中に勢いよく突き刺した。

流石に蛮族戦士と言えど狩人の不意打ちには対応し切れなかったらしい

「あの程度で止められると思うなよ?」

ローウエンがそう蛮族戦士に呟くと勢いよく掴んだ内臓ごと引き抜いた。

蛮族戦士は両膝を着いたが倒れはしなかった。

「ギャアアアあああ!」

目の前で起きたグロテスクでショッキングな光景にリホ指揮官は腰を抜かし大声で絶叫した

そして、蛮族戦士は……

「…… ドウヤラ オマエ ハ ツワモノ デアル ト
ドウジ ニ オロカモノ デモ アル ヨウ ダナ」

そう言い呆れながらローウエンの方にふり向きながら立ち上がった

「!?」

ありえない

ローウエンは驚愕しそう思った、そしてこうも思った

背中から突き刺して内臓を引き抜いたはずだ、それで死なないとしても致命的なダメージであることには変わらないはずだと

それなのになぜ内臓が抜かれているのにも関わらずこの存在は平然としてこちらを振り向いて呆れながら話しているのだ?

ローウエンはその後のに若干の恐怖を覚えた……否、覚えてしまった

それが隙へ繋がってしまった
ズバア

「……………ッ!?!」

いつの間にか内蔵を引き抜いた際に使った右腕と左腕を根元から切り飛ばされたのだ

それも目に止まらぬ速さで……………
更には

ドゴオン!!

左腕でローウエンの頭を陥没させているのではないかという音を出すほどの力で殴って気絶させ

ズバア

両脚を切り落としてローウエンを再び生きながら完全に無力化した

それは僅かな時間で起きたのだ

そして、蛮族戦士はリホーマーの方を振り向くと

「リホーマー トヤラ スコシ キュウヨウ ガ デキタ ……:
スマナイ ガ イツシヨ ニ キテ モラエル カ?」

その言葉は……………

「……………」

気絶しているリホーマーに届くことがなかった

どうやら先ほどのグロテスクでショッキングな光景に更にグロテスクなものが増加されたことよって精神に限界が訪れたようであった……………

「…………… ドウヤラ アノ バシヨ ニ

ハコブ ニモツ ガ フエタ ヨウ ダナ」

そのため息を吐きながら蛮族戦士は彼らを担いでその場所へと向かっていった……

「シカシ ユダン シタ ナ …… カイワ ニ シユウ
チュウ シスギテ ツワモノ トハ イエ セマル モノ ニ キ
ズケヌ トハ …… コレ ハ キタエ ナオシ ダ
ナ」

しばらくして……

ローウエンは再び目を見開き、ゆつくりと起き上がった……
切られたはずの脚はまるで生えてきたかのように元に戻っており、
腕もそれと同じように元に戻っていた

当たり前の様に何事も無かったかのように……
そして、起き上がった際に見たものは

「ドウヤラ メ ヲ サマシタ ヨウ ダナ ブキ ハ アズカラ
セテ モラツテル ゾ」

蛮族戦士であった

バアツ!!

ローウエンはすぐさま蛮族戦士に襲い掛かろうとするも

「ゴノ オロカモノ ガ」

ドガア バギヤ ゴギヤ

「ガアアアツ!!」

すぐにまた両脚と両腕の骨を砕かれ倒れ伏すことになった

そんな彼に蛮族戦士はこう言った

「アノ タタカイ ニ ワツテ ハイツテ ムリヨクカ シタノハ
アヤマロウ …… ダガ オマエ ノ デシ ヲ ホオツ
テ オイテ ワレ ヲ オイカケル トハ ドウイウコト ダ？
マダ ソノ チカク ニ オマエ ト タタカウ ハズ

ダツタ アノ アンナ ガ イル ノニモ カカワラズ ニダ」

「・・・・・・・・・・!?!」

その言葉にローウエンは血の気を引いたように倒れ伏した状態で
すぐさま周りを見回した

そして目に入ったものはミノムシと思えるほどに鎖で嚴重に縛ら
れた状態で寝かされている自身の妹であるルーナ、そしてそこから離
れた位置に寝かされている自身の弟子であるスプリングフィールド
を含む気絶したものの達がそこに寝かされていた

「アンシン シロ アノ オンナ ハ オキテ ハ オラズ デシ
モ ソノママ キゼツ シテテ ブジ デ アツタ ……………
ウン ガ ヨカツタ ナ」

ローウエンには目の前にいる異形の存在の目的が分からなかった、
そして今まで狩ってきたものとは全く違う異質さにローウエンは弟
子が無事であることを安心するよりもその恐怖を感じることが勝る
形となった……………

「カノジヨ タチ ガ オキタラ ゼンイン デ ハナシアオウ
ココカラ サキ ワレワレ ハ ナニ ヲ スレバ ヨイカ ヲ
ナ」(オリジナル笑顔)

そのローウエンの戸惑いの表情に蛮族戦士は笑いながらそう言っ
た

災害というのは突然起こるもの……（コラボ 回2

I05地区

「……………」

『……………』

そこでは万能者と鉄血の大型兵器『救済者』の一触即発の睨み合いが起きていた……

その今にも崩れそうな均衡は重圧へと変わり、周りにいるもの全てにのしかからせていた

そして、均衡は突然破られた

「先手必勝だオラア!!」

万能者が救済者へ突進することによって

救済者もその咄嗟の行動に対応しその突進を受け止める態勢に入った

ドガアゴオーン!!

その周辺に金属と金属がぶつかり合う音が響いた

それを見ていたとあるグリフィンの戦術人形達はのちにこう語った

「…………… 私達は一昔前の怪獣映画の世界に間違えて紛れ込んだんではないかという襲われたんだ…………… 残念ながら現実はそれよりもヤバい状態だったけど」

と……………

「グオオオオ!!」

『……………!!!』

それ表現するほどの力の均衡がそこでは再現されており、まさしく

そして、戦場からかなり離れた場所にて

ガシッ

「ッ!!」

ズドオオオオオオオオ!!

その万能者の行動に対応すべく救済者は己の持つブースターを火を吹かし始め、力の均衡を取り戻そうとしていた

「(向こうもブースターを吹かせて対応しはじめたな……. だったら!!) おらアア!!」

その行動に万能者はブースターを火を吹かせるの止めるとその勢いのまま無理矢理救済者を進行方向を地面に向かせてから手を離して救済者から離れた

『!?!』

ドゴオーン!!

その行動に急には対応できずに救済者はブースターの加速を止められないまま地面にめり込む形で轟音を出しながら激突することになった…….

「つと…….この場所なら変に巻き込むなどのことを何も気にせずに戦えるな…….なあ? 鉄血のデカイヤツよ?」

万能者はそう言いながら地面にめり込んだ状態から四苦八苦しなからも立ち上がった救済者を睨みつけながら交戦体制に入った

少し遅れて救済者も万能者を確認することで再び交戦体制に入ること再び争いが始まった

ドガアアアアア!! ドガアアアアア!!

ズドオーン!!

「ボカス力離れて撃ちまくりやがって!! (サンライトのレーザーはあ

まり効かんだらうから) このミサイルでも喰らいやがれ!!」

ドガアアアアア!! ドガアアアアア!!

ドガアアアアア!! ドガアアアアア!!

レーザー、銃弾、爆弾、ミサイル、瓦礫など……様々な物が飛び交うその悪魔の戦場からは銃声や爆発音などが合わさったオーケストラが遠くにいたグリフィンの戦術人形達の耳にも届き、その存在のどちらかがこっちに来るのではないか? という恐怖をより一層駆り立てることになった……

幸いその日は無事にそのどちらとも遭遇することはなく、そのまま作戦を完了し撤収することができたが……

その後少なくとも数の戦術人形達が万能者に対して決して小さくない恐怖心を抱くようになったのはいうまでもなかった

大事が終わっても次がある．．．．それは良くも悪くも（コラボ回）

04地区 大聖堂

「．．．．．ドウヤラ ワレ ハ マケタ ヨウ ダナ」
蛮族戦士は目覚めてから、異空間にいたときのことを思い返していた．．．．．

「．．．．． アノ ジョゲンシヤ ト ヤラ ハ イママデ
デ ミタコノ ナイ ツワモノ ノ タグイ ノ ヨウダ ナ」
そして、最後の『助言者』との戦いで敗れ去ったのを思い返すと笑顔になった

．．．．． どうやら新たな（強者との）出会いに喜んでいるようであった

「ナラバ ハヤク オノレ ヲ キタエネバ ナ」
そういうと周りを見回した．．．．誰もが気絶している中、とある存在に目が止まった

「コレ ハ ．．．．． ソウカ アラタナ リユウノチ ノ テキ
ゴウシヤ ガ アラワレタ カ」

それは狩人『ローウエン』だった．．．．だが蛮族戦士には彼の気配が変わっていることに一目で気づいた

それも自分の知っているのあの存在白い少女に近しいということに

「．．．．． ドウヤラ ヒトハダ ヌガネバ ナラナイ ヨウダ
ナ ．．．．． サケ ノ レイ ヲ セネバナ」

笑顔（オリジナル）でそう言った

一時間後．．．．．

リホーマーなどが離れていく中、ローウエンは未だに大聖堂にいた
どうやら血が熱いこと、助言者によって己の入られた物などが気

になるなどのことが相まって動けないでいた

そんな時

「……………ツ?」

「どうかしましたローウエンさん?」

ふと、血の匂いを感じた

ローウエンはそれが気になりその匂いの元……………大聖堂の裏の方へ向かった

そこには……………

「……………ツ!!」

「これは……………文章?」

壁に文章切り刻まれて書かれていたのだ、それもつい先程完成したかのように……………

それはこう書かれていた……………

『トモ ヨ オマエ ノ カラダ ニ ハイッテイル リユウノチ
ノ コト ヲ シリタケレバ リユウノチ ノ ソ ニ アエ
ソレ ハ ソノ ソンザイ ガ ミズカラ コウドウ スル カ
リホーマー カ ハガネ ノ ツワモノ ニ タヨレ バ ア
エル ハズ ダ ソシテ ソンザイ ニ アツタ ナラ コレ
ヲ ワタセ』

そして、その文章が書かれている壁の下には肉片が少しついている鱗のようなものが置かれており、それはどう見ても蛮族戦士の身体の一部に見えた……………

その文章を読んだローウエンは

「……………スプリングフィールド……………どうやら私が次にやるべき目標が決まったようだ」

「……………ハイ!!」

己の新たな目的を見出した

大聖堂から6 km離れた場所にて

「ドウヤラ ブジ ニ メッセージ ヲ ウケトツタ ヨウダ ナ

「

蛮族戦士はその場所からローウエン達を見ていた

「ナラバ ワレ モ キタエル タメ ニ ウゴカネバ ナ」

蛮族戦士は振り向いて動こうとした時

足元が少しよろけた

「……… ドウヤラ スコシ ハシヤギスギタ ヨウダ ナ
スコシ ヤスマネバナ」

その出来事で己の身体の状態を理解した蛮族戦士は己の住処にしている場所に向かって動き出した

そして災害は終わるもの……多くの傷跡を残して（コ
ラボ回2

I O 5地区 鉄血拠点から十数km離れた地点にて

万能者と救済者の戦いから2時間後……

そこは先ほどの銃声と爆発、金属同士がぶつかり合う音などのオーケストラがあったとは思えないほどに静かになっていた

その中心地で万能者は己の身体の状態の確認を行っていた

「あだだだ……やっぱロケット砲結構な火力してたんだ……装甲にはダメージはあんまないけど中身かなりの衝撃が来たからな……一応対策はしてたがこりや整備で中身の状態の確認するのは確定だな……」

どうやら無事そうな見た目に反してダメージがそれなりにあるようであった

「けどあつちの方にもダメージを与えられたのは幸運だったな……これならあつちにも後々に色々と牽制できるはずだし、なによりこつちでもいろいろと対策ができそうだからな」

そう言いながら目の前に置かれているものに目を向けた

「しっかし……デカイ兵器が多いなオイ」

それは巨大なロケット砲のようなものやレールガンのようなものなどの武装がついた状態で根本から切られた大きい左腕であった……

I O 5地区 上空

救済者は鉄血の拠点に向かって飛行しながら己の身体の状態の確認を行っていた

『左腕完全に欠損……左脚にも深い切り傷でバランスが不安定

な状態であることを確認……完全に完敗ですね……コレクターさんもやられたみたいだし、早く拠点に帰還して今回の結果と内容の詳細を代理人お姉ちゃ……様に伝えないと……」
その状態は見ても分かるほどの酷い損傷を負っており、左腕が存在していなかった……
だが、何より

「これでも喰らいやがれ!!」
ギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリ!!

『……ふえん、怖かったよおう……』
……身体の損傷だけではなく、精神にも決して少なくない
トラウマを刻み込みこまれていた

そして、しばらくの間その時のトラウマを克服するのにしばらくの時間を要することになったのはいうまでもなかった……

再び I O 5 地区 万能者のいる地点にて

「ありや時間かけ過ぎたか……あつちの方の戦闘もう終わってるな……ここから見える結果的にグリフィン側が勝ってコレクターの討伐が完了したみたいだな……」

万能者はアナザーアイから送られてくる映像を分析していた
「しかし、道徳の授業受けさせられなかったのはちよつとした心残りだな……まあ仕方ないか、それならさっさとここから離れる用意をするか……アナザーアイやサンライトの回収……あつ、あとあのリッパーだけ？その解放もしないとな」

その分析が終わると今後の行動を考え、すぐにその場を離れていった……

後に万能者に捕らえられていたリツパーはこう語った……

「……………コレクター様は恐ろしい人でしたが……………世の中ってそれ以上に恐ろしい存在ってたくさんいるものなんですね……………私色々と理解しました……………ハハハ……………」
鉄血の確認部隊に回収された際にそう虚ろな目と乾いた声で笑いながら……………

増えていく系厄介事は根の根まで叩いて終わらせないと後でさらに厄介なことになる場合が多い

屍人形の襲撃から2日後　地下遺跡の通路にて……………
人類人権団体過激派の大規模補給路破壊作戦と同じ日

バギャ!!グシャ!!

バシユ!!

ドゴオン!!

「やっぱ数が多いなお!!って、すまない!二匹撃ち漏らした奴がそっちに行つた!」

「了解です神龍の眷属様!!全員聞いたか?!撃ち漏らした奴をミ||ゴの電撃銃で動きを封じて魔術と重火器でトドメをさせえ!!」

「||了解!!||」

バチバチバチバチバチ

バババババババババツ

それはまさに過去の大戦で使われた戦術、電撃戦と言っても過言ではないほどの攻撃が地下遺跡内で行われていた……………

「目標の場所まであとどんくらいだ!」

「まだ半分も行っていない!!」

「くそ、この時点でも数が多いってのに、あっちの方のから戦力をどれだけ引つ張りだして来てるんだか……………」

そんなことを言いながらも万能者と異形達は目の前の侵略して来た異形達を殲滅しながら進んでいった……………

時に

ギヤアアアアアアア!!

「うお!?なんだアレ!?どっかの狂った芸術家と開発者に任せたらなんかとんでもないもんなったような物体の生物版は!」

バシユ バシユ バシユ

「あの大砲のヤツみたいなヤツは仲間の異形を砲弾に!」

「……………どうゆう発想をすればあんなの考えられるんだか」

発想が狂った形で作られたと思われる新たな形の敵に襲われたり

バギヤ ガギイン!! ガゴオン!!

「やっぱ出て来たか……………あの屍人形の強いヤツ、しかもさらに強いタイプのやつを数体……………すまんが、俺はこれに集中する!!フォローができなくなって周りの雑魚がお前らに襲いかかってくると思うからなんとかそつちの方で頼む!!」

「了解です、眷属様!!」

地下遺跡の入り口のバリケードを乗り越えて襲ってきた少女型の屍人形とその上位互換の存在の混合集団などに襲われたりしながらも彼らはそれらを打ち破り、被害も最小限にして進むことに成功した

そして、3時間後……………

「この先の部屋が例のワームホール装置の場所なんだな?」

「はい、部屋が動きでもしない限りは間違いなく」

「ワームホール装置を研究していたヤツと戦力を無事にここまで持つてこれた……………これで作戦の最終段階に移れるな」

万能者達は今回の騒動の元凶であるワームホール装置の設置されている部屋の前まで来ていた

作戦開始前

『第一にワームホール装置の研究してた奴を無事にその装置まで連れて行って止める用意をする、いくら俺でも初見で扱うとなるとエライことになるのは目に見えてる、簡単にでも扱ったことのあるヤツが触ったほうがいいからな．．．．第二にそれなりの戦力を引っ張って来る、コレはもしも俺が数で押された場合を想定するのと大人数でしか解決が不可能な場合、コレ以外の想定外の事態が起きた場合を想定してる．．．．この二つの重要な要素の他にも少しあるが、理解できたか?』

『『了解しました!眷属様!!』』

そのような感じの作戦が簡単ながらも立てられていた．．．．．
回想終了

「．．．．．よしお前ら一斉にこの部屋に突入するぞ、一部は部屋の外で警戒を頼む」

「了解しました」

その言葉を聞き、仲間の異形達はその部屋に入る用意をするもの、その部屋の近くに居座って警戒にあたるものに別れて準備を始めた

まもなくして．．．．．

「．．．．．それじゃ行くぞ、1・2の3!!」

万能者の掛け声とともに万能者と彼らはその部屋に突入していった

「．．．．．」

突入した彼らはすぐさま部屋の様子を見回した

その部屋の中は大きく作られており、端の真ん中に位置する場所にその巨大な長方形の形をした穴が印象的な巨大な装置が設置されていた．．．．．

このことから例のワームホール装置であるということが伺えた

だが、そのワームホール装置よりも彼らはその前にある物体に目が止まった……否、止まってしまった

「……うわぁ……アレ、最初から置いていたやつか？」

「……いえ、アレは最初から置いていませんでした」

「……オエエエ!!」

「……うん、ありやグロいな」

それは文字通りグロテスクなものであった……

それは少女型の屍人形の手足を切り落とした上で頭に巨大な釘のようなものが刺されているものが立方体の構造をした機械に10体も固定している物体……否、『装置』が3つほど、ワームホールの前に設置されており、そこから延びたコードのようなものがワームホール装置に接続されていた

「……恐らくありやあつち側の移動式のコンピューターの種類だな、多分ワームホール装置の解析の為に引っぱり出されたものか」

「あんなものを……あつちの存在達はどこまで狂ってるんだ」

「……あんな恐ろしいものを……」

その『装置』に様々な感想が出て来るものの万能者は違和感があった

なんでこんなものが放置されているのか？

見る限りまだ『装置』は起動している

ワームホール装置はまだ起動しており何か薄い膜のようなものがシャボン玉のように長方形の穴の中で貼られている

重要なものを放って逃げたか？

それにしてもあまりにも何かおかしすぎる

これらの疑問から答えを導き出したその時

「ようこそ……いや？この場合はお邪魔しますというべきだったかな？」

その答えとも呼ぶべき存在が『装置』の影から現れた……

その存在の顔は一般的な人間の感性としては美女にあたるものであり、体のバランスもかなり良いことが窺えた……

だが、その存在が異形であることがはつきりとさせるかのように腕が6本存在していた……

「まあどちらにせよ、その様子だと私の玩具を蹴散らしながらかなり急いで来ているみたいだな、少しこころで話そうじゃないか」

そんな存在が彼らを見ながらニツコリと不気味に笑ってそう言った……

後方系の敵に限ってなんか近接系がメチャクチャ強い場合が結構あったりするよね

「まあどちらにせよ、その様子だと私の玩具を蹴散らしながらかなり急いで来ているみたいだな、少しここらで話そうじゃないか」

その敵の異形達の上の存在らしき女性の言葉に万能者達の返答は………

ズドドドドドドドドドドドドドドドドド!

バチバチバチバチバチバチ

実弾やレーザー、電撃、さらに魔術などの徹底的なまで殺すという意思表示の銃撃だった

「………ひどいじゃないか、他人が会話をしたいと言っているのにそれを銃撃で返して来るなんて」

その『返答』をその存在は無傷で立って受け止めていた

腕三本を前に出して何かの障壁のようなもので飛んで来たもの全てを………

「いや、オマエの手口は分かってんだよ………会話は単なる時間稼ぎで先ほどからお前の周りから魔術的なエネルギーが観測されていてな………部屋に充滿していくような感じで広げることからどうせろくでもないことをする氣満々なんだろ………」

万能者はその出来事に驚きつつも言い返す

「おや? 氣付けたのかい? ……でもそれだけで私のしようとしていることが分かるのかい? ……単に歓迎的な何かかも知れないだろ?」

「………部屋に充滿させたエネルギーを媒体に何かの魔術を作り上げて俺たちの動きを完全に縛って捕獲するってことだ

ろ……会話が成立しようがしなかりうがそのつもりだったんだろ？目の前にいる面白い『おもちや^{俺たち}』を見てその気満々みたいだったな……まあちよつとした情報提供者のおかげで確信できたがな」

「……………へえ？君面白いね？その情報提供者は少し気になるけど……………空気中のマナを感じ取れる能力などのこの遺跡とそっちの異形達が持っていた様々な技術から見たら明らかに異質とも言つていいほどの技術力を持つ存在……………あ、これほど面白そうな存在は久しぶりだね」

その存在は笑顔でそう言った
ゾワア

その笑顔に得体の知れない狂気を感じ取った万能者は……………「わおマッドサイエンティスト系か……………似たような狂気久々に感じたな……………お前ら!!操作担当に護衛をつけてワームホール装置の調整の用意をしろ!!俺と一部はあのマッドなヤツをなんとかするぞ!!」

「!!!!ッ了解!!」

恐怖で固まりかけた味方を叱咤しワームホール装置の操作の援護を行うべく目の前の存在の行動に対応する為の行動に移した

そこからは想像絶する戦いが始まった……………バズツ!!バズツ!!バズツ!!

「ギャツ!!」「ぐうあ!!」「ゴオウ!？」

「三名負傷!!衛生担当急げ!!」

バズツ!!バズツ!!

カァン!!キュイン!!

「おや？それなりに威力のあるヤツを放ったはずなんだがね……………君の装甲の素材などもかなり興味深いな？捕まえたら調べさせてもらおうかな」

「……………魔術系のエネルギーの傾向から……………アイツ魔術かなんかで物理系のヤツを撃つたのか？とりあえずお前ら、コイツの

「こんな事もあるのかと」はある意味ロマンがあるけど現実的には実用性がある場合が多い．．．．．ただしそれを全て実現する形でやり過ぎると大体とんでもないものが出来上がる

「．．．．．さてと、さっさと君の味方の他の存在達も捕まえてあげないとね」

その矛先が万能者を味方していた異形達にも向けられた
その時だった

「この．．．．．野郎ウ!!」

ドガアツ!! バギャ!! ゴギャ!!

「!？」

女性は驚愕せざる得なかった

万能者に殴られたことよりも、何故あの念入りに力を入れた拘束から動けたのかを．．．．．

それは万能者の身体を一目で見れば分かった．．．．．

(まさか．．．．．あの拘束状態で力だけで無理矢理動いているの!?)

女性がその出来事の真相に驚いたのも無理はなかった

万能者の身体には今も尚タコの触手の絵の様なものがある、それでもなお現在進行形で拘束状態で無理矢理動いている．．．．．言わば普通の人間という体重以上の重り（下手をすればトクラス）をつけた拘束状態を力だけで動いているという常識外にも程があることをしでかしていたのだ

更に万能者は行動する

「(やつぱこのレベルの拘束じゃありミッターを3段階外しても怯ませるぐらいのパワーしかできんか……本当なら無力化できるほどのパワーが欲しかったが環境と身体が悪いし仕方ない……だが、少しでも時間が稼げたから十分だ) 装甲パーズ!!」
バゴオン!!

なんと肩部や腹部の一部の装甲を吹き飛ばすかのように外したのだ

「!!!?」

「眷属様!?何を?!」

「ツ!!」

バズツ!!

これには敵どころか味方ですら驚かざる得なかった

味方の異形達の一部が万能者を心配して近づこうとし、女性は怯んでいる状態から苦し紛れで魔術を放って攻撃するが……

「来るなあ!!今近づいたら危ないぞ!!」

万能者の警告に味方の異形達が足を止めると同時に

女性の放った魔術は万能者の装甲がなくなった部分に向かって飛んでいき……吸い込まれて行った

「……え?」

女性は驚きの余り間拔けた声を出した……だが、驚くべきことはそれだけではなかった

(……ツ!、装甲の無くなって露出したフィルターのような部分から私が空気中に広げているマナと全身を拘束していた魔術拘束を吸収している!?あの存在の存在が言っていたことから推測すると魔力系の動力炉ではないはず……まさか……あの存在の動力源は……)

その考えは答えに至る前に途絶えることになった……
ドガア!!

「グガアッ!!?」

いつの間にかすぐ近くにあった万能者の右腕のボディブローによって壁に吹き飛ばすことよってことので．．．．．

「!!?」

その場にいる全員がその突然の出来事に驚愕した．．．．．先程までの拘束状態での動きとは比べ物にならないほどの動き．．．．．それどころか最初より素早く動きになっていることに

「．．．．．やっぱこの身体じゃ『第二の心臓』の発電量と負荷、電圧などにあんまり耐えられないなこりゃ．．．．．取り返しをつかないことになる前にさっさと終わらせないとな」

万能者はそう言いながら壁に叩きつけられた状態から立ち上がった女性の方を振り向き

いつの間にか女性の目の前に立っていた．．．．．まるで瞬間移動をしたかのように

女性はその動きに対応できずに万能者に頭をアイアンクローで掴まれ、

「．．．．．さっさと元の世界に帰れええ!!!」

ブウウウーーンンツ!!

そのままワームホール装置によって生み出されたワームホールの穴にぶん投げられ、この世界から姿を消すことになった

「さてと．．．．．最後の一仕事にさっさと入らないとな．．．．．オマエらワームホール装置の制御は再確認しておいてくれよ?」

「．．．．．」

「．．．．．ハッ!? り、了解です!!オマエらさっさと次の

行動に移らんか！」

味方であるはずの異形達の一部は開いた口が塞がらないという言葉通りに体現して、先に立ち直ったリーダー格の叱咤されるまで少しの放心状態になったのは言うまでもなかった

ワームホールの向こう側の世界………

その世界はすでに文明が終わりを迎えて長い年月が経っていた………文明の遺産である高層ビル群は風化と雨風により辛うじて数少ない生き残りを残して崩壊しており、人の営みなどはなくなり『生きているもの』は全て死んだ世界であった………

「………ああ、油断してしまったね」

女性は投げられた勢いのまま辛うじて立っていた建物に激突して崩れて瓦礫に埋まっていた状態から立ち上がり、己の状態や戦力などを把握してい

「………第一・第二右腕、第三左腕、肋骨などの骨折、それによる内部外部へのダメージも深刻………向こう側の戦力は恐らく全滅………仮に今すぐ戦力は整えようにもワームホールは閉じられる可能性が高い………完全に敗北ね………でも収穫はあったわね………」

そう言うとき女性は懐から一つの釘のようなものを取り出した

「ワームホール装置のデータと設計図のコピー………あの存在達が入ってくる瞬間とコピーが完了する時がドンピシャに手に入るとはね………」

女性はそれをウツトリとするかのように見ている

「………ああ、もしあの存在を捕らえられるチャンスが巡るなら解体と解剖をしてあの身体の隅々まで調べたいわね………そうとなればこれの解析を始めないとね」

この後の行動を決め、行動に移そうとしたその時

ワームホールから『何か』が現れ

まるで全てを飲み込むように光の如く凄まじい勢いで広がっていき女性、文明のかけら、遺産、『動くもの達』……………そして、その『星』を飲み込み全てを無へと返した

それは僅か1秒にも満たない速さで起こった……………

地下遺跡 ワームホール装置前にて

万能者は『D・B・R』とは別物の、砲とも呼ぶべきほど巨大なライフルのようなものを担いでワームホールを閉じられた発生装置本体を見ながら

「よし、後始末完了だ……………お嬢さん方、最後の願いを叶えておいたぞ」

そう言った

それにより地下遺跡の騒乱は終止符が打たれることになった

大惨事は本当に突然やってくるモノ・・・・・・・・・・（コラ
ボ1・2回）

とある密林地帯にて

「・・・・・・・・・・思い返すと今年に入ってからロクなことが起こってないな」

万能者はこれまでに起きたことを思い返しながら食事の準備をしていた

「・・・・・・・・・・まあ今回は憂さ晴らしを兼ねて少し豪華にカレーにしてみました・・・・・・・・・・うん、いい感じになってるな」

そんなことを言いつつも料理もいよいよ完成間近となったその時
ドガアーーーーーン!!!

ガゴオン!!

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・?」

轟音と共に目の前のカレーの入った鍋が土煙の中に消え、晴れたと思っただこの誰かも知らない女性が視界にうつったのだ

それもその女性が万能者の顔面目掛けてパンチをしに奇襲をかけるにきているという光景が・・・・・・・・・・

1時間後・・・・・・・・・・

カチャカチャ

カタカタカタカタ タアン カタカタカタカタカタ

ウーーーーーイン・・・・・・・・・・

「な、なあ? 厄災? オマエ何やってんだ?」

GM6リンクスは何かのオーラが発している状態で巨大な何かの装備の様なものを点検している万能者に若干の恐怖を覚えながら声を掛けた・・・・・・・・・・

ここ十数分くらい無言でその作業を行っていたのだ

ピタッ

万能者はその声を聞き作業を一時的に止めてリンクスの方に振り向いた

「ッ!!」

その瞬間、リンクスはそのオーラの正体を理解した

それは「怒り」であった……それも狂気と殺意が混ざりに混ざって別の何かとも言えるほどの……

「決まってるだろ？オハナシに行く準備だよ……宣戦布告してきたことと、カレーをペシヤンコにされた件についてのオハナシをな……」

万能者は喜びの声にも聞こえ、怒りの声としても聞こえるような声でリンクスに返答した……

何はともあれ人類の存亡をかけた戦いに『厄災』が来襲するのは確定となった瞬間であった……

そのまた別の時間 別の場所にて……

それは偶然であった……

それも日や時間、場所などの要素がほんの少しだけでもずれていれば起こり得ないことだった……

それ故にこれが起こったのは必然だったのかもしれない……

「アア アラタナ ツワモノ ノ ケハイ ガ スル ソンザイ ニ
アエル トハ ナ」

蛮族戦士は自らの手で切り裂いた存在達……『追跡者のダミー』の残骸で築いた小さな山の上に立ってその存在達の一体の頭を左手

刃物つてよく分らないけど妙に惹かれるような美しきがあるよね（コラボ2回）

ドドドドドドドドドドツ!!

ギユイイイイイイイイイインンン!!

ブウン!!ブウン!!ブウン!!ブウン!!

ドガアアアアア!! ドガアアアアア!!

そこでは形式的には一対一ではあるが凄まじく壮絶な戦いが繰り広げられていた

その戦いを行なっている二体の内の一体である歪な姿をした巨人「トリスマギア」は敵に向かって攻撃を行なっていた

ある時は全てを貫き砕かんとする弾幕の雨と落雷が降り、ある時は全てを切り刻み溶かさんとする熱風と炎が襲い、ある時は鉄塊にも等しき大盾が本体を守るように氷の矢と共に敵に向かって飛んでいった……

どれも当たればただでは済まず、更に言えば落雷や氷の槍などに関しては通常では起こり得るはずのない常識外れな現象が起こっていた……

「カズ ハ オオイ ガ モンダイ ニ ナルホド デハ ナイナ」

その攻撃を「トリスマギア」の敵である存在「蛮族戦士」はかわし、耐えていた

ある時は弾幕の雨と落雷を的確に避ける又は的確に防ぎ、ある時は熱風と炎を己の身で耐え、切り刻もうとする無数の回転する刃を避け、ある時は鉄塊に等しき大盾を己の右腕の漆黒の大剣の如き爪で真つ二つに切り裂きながら氷の槍を左腕で弾いていた

その行動はどれも頑丈な身体、武器、それらを巧みに扱える技術などそれらの一つでも欠けていれればできないものであり、それ故に蛮族戦士はほとんど無傷でありながらトリスマギアの周りを浮かんでい

る大盾は残りわずかとなっていた

「ジャマ ナ タテ ハ ナクナツタ トドメ ヲ ササセテ モ
ラウ」

それを勝機と見た蛮族戦士はトリスマギアに向かって走り出した

無論トリスマギアは左腕の何重にも束ねたガトリングガンと右腕
のチェーンを集合させた多連装突撃剣、そして迎撃をした

ドドドドドドドドドドツ!!

ギユイイイイイイイインンン!!!

だが

「オナジテ ハ ツウジン」

その言葉通りにその攻撃は蛮族戦士には通じなかった

弾幕は避けられ、右腕の多連装突撃剣による攻撃は逆に利用され蛮
族戦士を上空に高く放り上げる足場となった

「レイ ヲ イオウ ツワモノ タチ ノ キョジン ヨ ワレ

ハ マタヒトツ ノ タカミ ニ イタル コト ガ デキタ

セメテ モノ レイ トシテ アラタナ チカラ ヲ フルオウ」

理解不能 理解不能 理解不能 理解不能 理解不能

理解不能 理解不能 理解不能 理解不能 理解不能

理解不能 理解不能 理解不能 理解不能 理解不能

トリスマギアはその出来事を理解できなかった

それは上空で構えていた蛮族戦士の漆黒の大剣の如き爪が

毛細血管を巡るかのように青く光らせながら刀身が大きくなって
いたことを

そしてそれから魔力が一切感じられなかった

悪魔という存在を知るトリスマギアはその出来事を全く理解でき
なかったのだ、そしてその爪の刀身は蛮族戦士の落下と共に振り下ろ
され

ズバア!!

縦に真つ二つされたことによつてトリスマギアは悲鳴を上げることもできずに思考と機能を完全に途絶えることになった

ガラガラガラガラガラ!!

ズドドトオーン!!

「サラバダ キョジン ヨ オマエ トノ タタカイ ハ ワレ
ノ カテ トナツタ サテ ムカワネバ
ナ」

蛮族戦士は真つ二つにされたトリスマギアの骸がビルの爆破解体のようにバラバラに崩れゆく光景を見ながら別れの言葉を言った後、すぐに行動を始めた

その場所はS10地区前線基地 今現在悪魔という人間ならざるモノたちが集う戦場がそこにはあった

十数分後

S10地区前線基地近く 戦場にて

蛮族戦士は廃墟の屋上からその光景を見ていた

それは、つい先ほどに戦ったトリスマギアの別個体が人ならざるモノとその力を持つモノたちに力を削られていき最後は泥の巨人とも呼ぶべき存在の剛腕がトリスマギアへと振り下ろされ、その体を押し潰され残骸となった光景であった

それを見て蛮族戦士は震えていた

その震えは恐怖? 絶望? 否

「 」 (オリジナル笑顔)

歓喜によるものであった

「ヒトナラザル モノ ト ソノ チカラ ヲ ツカウ ツワモノ
タチ ソシテ カミ ト ヨバレル ガ ゴトキ チカラ ヲ モ
ツ ソンザイ ニ マタ アエル トハ アア

ワレ ハ ナント シアワセ モノ ナノ ダロウカ」

そして、蛮族戦士はその巨人を呼び出したと思われる女性に目を向けた

「ココデ タチドマル ハ グ ノ コツチヨウ アイサツ ニ
ムカワネバナ」

そして、まもなくして

「ハジメマシテ ト イウベキ カナ？ スコシ ハナシ
ヲ シヨウ」

S10地区G&K前線基地の指揮官であるシーナとその仲間たちの前に蛮族戦士が挨拶に現れたのは言うまでもなかった

世の中ヤバいことは大体誰も知らずのうち起こっていつの間にか終わるもの

向こう側の星が滅ぶ少し前………

『女性』がワームホールの向こう側に投げられて数分後……

地下遺跡　ワームホール装置設置部屋にて

万能者は金属製の長さが己の半分もあるアタツシユケースのようなものを持ってワームホール装置の穴の前に立っていた

「よし始めんぞ、ワームホール開閉担当準備はいいか？」

「は、はい大丈夫です!!」

「……すまん、こんな危険かつアンタらにも咎を背負わせることになってしまったな……俺がワームホール装置の操作方法が分かってれば一人やれたんだが……」

「……分かつてます、でもこれをやらなければ更なる被害者が増えてしまいますから」

「………本当にすまん………始めるぞ」

万能者はそう言い自分が背負うべき罪を他人にも罪を背負わせることを悔やみながら、行動を開始した

キドウコードヲニューリヨクシテクダサイ

ピツピツピツピツピツピツピツ

アタツシユケースが合成した声で指示を出し、万能者はそれに従うようにアタツシユケースの起動コードを入力していった

ニューリヨクカクニン………カンリヨウシマシタ

「………キャノンライフル形態に変形………」

起動の確認がされた瞬間に今度は万能者が命令をするかのように

その瞬間

「今だ!!ワームホールを閉じろ!!」

「は、はい!!」

数秒を待たずにしてワームホールは閉じられることになった……

そして、その『黒い光』は向こうの世界へと届けられることになった

回想終了

地下からの異界の侵略から一週間後

『眷属様!!何か何まで本当にありがとうございました!!』

万能者は異形達に囲まれる形で礼を言われていた

「礼なんていいよ、こちらにとつてもヤバい案件だったのところでほつたらかすのはこつちにとつても気分の良いものじゃなかったからな」

万能者がこの一週間で行ったことは

まずは異形達がワームホール装置を使用する要因となっていた自分達が住めるに関して、今現在得ているツテを利用して彼らが住める場所の探し出したこと

これに関しては多少のトラブルがあったものの荒ごとにはならずに済み見事にその地の確保に成功することになった

次にワームホール装置を解体をすること

これは異形のリーダー達との協議の上で二度とこのようなことが起こらないように解体することになり、またそれと同じ事を引き起こす可能性のある地下遺跡に関して最終的には埋め立てる形となつて決まった

この二つを行ったのだ

「後はそつちの方で地下遺跡埋め立てるの件と移動の件を頼む、なん

かあったらこっちに連絡をしてくれよ？すぐにはできないとは思うがなんか手伝えるかもしれないからな」

「分かりました、眷属様本当にありがとうございます」

「だから、礼はいいんだって」

ここで万能者の地下での話は終わり、これだけなら万能者が異形達を救う話となるが……

万能者は知らなかった……

そのゲートは万能者の知っているものとは違って特殊な部分が存在し、向こう側に到着するのに途中にタイムラグが存在すると……つまりゲートと向こう側のゲートの間に数秒程度の『通路』が存在することに……

万能者は知らなかった……

そのゲートの間の『通路』を通ってる途中でゲートを閉じると『通路』を通っているものがランダムで世界のどこかにはじき飛ばされることに……

万能者は知らなかった……

そのことが自分の放った『黒い光』の一部がほんの僅かながら間に合っていないかったのだ……間に合った『黒い光』の大半は本編通りに向こう側に、間に合わなかったほんの一部がはじき飛ばされるという形となって……それも更にその『黒い光をバラバラ』に拡散させる形になったことを……

万能者は知らなかった……

『そのバラバラに拡散された黒い光』がはじき飛ばされた先が……過激派の大規模拠点の周辺……それもG&K社をはじめとする大規模攻勢作戦があった日であることに……

そして、その『そのバラバラに拡散された黒い光』ははじき飛ばされた先で瞬時にその特性と役割を發揮した……それもその空間の存在を無差別かつ平等に『無』に還して……

万能者は知らなかった……

自分の放ったモノの一部が知らずのうちに『怪奇現象』と呼ばれ、BLACK WATCHの幹部ビーストをはじめとする様々な犠牲者と被害者を出した異常事態を引き起こしてしまったことに……

万能者は知らなかったのである……

更に質の悪いことに……

「知らない間になんかヤバい現象が起きてる!? 地下にいる間に何があったんだ……結構似たケースあるから分らんぞコレ……今度暇があったら少し調べてみるか……」

その後『怪奇現象』が起きたことを知った万能者は似たような現象とケースをいくつも知ってたこと、そしてその事態を引き起こした原因のエネルギーの『特性』、特殊な状況によって生み出された現象などが相まって逆にその『怪奇現象』の正体と原因を長い間知ることにはなかった……

※凄まじく遅くなりましたが、『怪奇現象』の被害にあったG&K社やAOD、BLACK WATCH、過激派の皆様、ウチのとんでもバカがとんでもないことやらかしてしまっただけにすみませんでした!!!

(焼き土下座)

物事に備えて準備はジツサイダイジ……かし限度つてもものがあるから程々に（コラボ1・2回）

ピツピツピツ

「メインシステムチェック……システムに異常なし……動作確認に移行」

ウィー……ウィー……

『地獄門』右、左腕共に動きに問題なし……武装・補助装備動作確認に移行」

ジャギインツ!!

キュイイイイイインツ

ガゴオン！ ガチャコンツ！ ガゴオン！ ガチャコン！

「武装動作確認完了……問題なし、補助装備も確認完了……よし問題なく使用できるみたいだな」

万能者は新たな騒乱を潰すために用意した己の武装の確認の結果に満足していた

その一方……

「……」

その作業風景を見ていたリンクスは遠い目をしていた

それも呆れや諦めなどが入り混ざったような表情をしながら……

「うん？どうしたんだ？リンクスさん」

「……言いたいことはいくつもあるが……一つにしておこう……」

「？」

「……なんなんだその重装備は？」

リンクスが遠い目をしながらそう言うのは無理もなかった……
両方の前腕にサブマシンガンとパイルバンカーと思わしき兵器、全身には追加装甲が貼られ、脚部には追加でつけられた大型スラスタが存在、バックパックには装甲とスラスタが増設された上でサブアームの前腕にはロケットランチャーとレーザーサブマシンガンが外された代わりに戦車砲の如き巨大なバズーカとその武器にマイクロミサイルランチャーがくっつけられていたりと凄まじいほどまでの重武装だったのだ……
そして極め付きには……

「……その盾、めちやくちやデケえな」

「うんデカいんだよ……そうでもしないとあの馬鹿でかいヤツの攻撃と未知の攻撃が防げない可能性と攻撃が効かない可能性があったから現型と素材を引っ張り出して改造して作ったんだよ」

「……厄災、オマエには常識と限度つてもんがないのかよ」
「自分的には一応あると思ってるんだがなあ……」

それは万能者のバックパックの両側面に増設する形で新たな腕が生えており、その腕の先には万能者よりも大きな盾が存在しており、そしてそれに付属するかのように盾の裏側には大剣のようなものが存在していた……

「まあとりあえず様々な想定外の事態を想定していくつかの装備をなんとか纏めた兵装を考えた結果、こんな感じにしたが……
まあよほどのことがないとは言い切れないからこの装備でも大丈夫かどうかはやってみないと分らん……でもこれならアイツらにオハナシする分には十分だな♪」

「……」
万能者の言葉にリンクスはこれから起こる大惨事を容易に想像できてしまい頭を抱えるしかなかった……

別の場所 別の時間……

無名の地区 通称『墓場』

中央動力区画にて……………

アア……………ワレ ハ ナント コウウン ナ コト カ
……………

た 蛮族戦士は歩きながらその幸運を人知れずこつそりと実感してい

理由としては、それぞれに様々な力を持った数多くの強者達の集う
戦いに参加できたこと、これからその中の一人のギルヴァという人な
らざるものの力を使う強者と共に戦えること、そして、その敵の存在
も強者であることなどが挙げられた……………

ナラバ オノレ モ マンゾク ノ ユク タタカイ ヲ セネバ
ナ……………

そう思いながら蛮族戦士は共に行動しているギルヴァとともにそ
の標的である暴走した『追跡者』のいると思われる場所へと向かって
いった……………

読み方似てるのを間違えると大惨事ってことってよくあるよね……………武道会と舞踏会とか（コラボ2回

無名の地区 通称『墓場』

中央動力区画にて……………

そこには二つの存在がいた

一つ、『追跡者』は女性の姿をしているものの魔力というエネルギーが彼女の背から溢れ翼となって具現化し、左手には愛用する鞘に納められた日本刀を模った武器、右腕は一振りの大剣を収める鞘と一体化を果たしているという異形の姿をしていた

対するもう一つの存在、『蛮族戦士』は人型ではあるものの身体は筋肉が露出していたり、ところどころに鱗のようなものが存在し、脚が爪がスパイクの役割を果たせるような形になっていたり、極め付けに右腕には巨大な漆黒の大剣（正確には爪ではあるが）が融合するかのようになら一体化しており、異形の度合いから見るにこちらの方が悪魔と言えるような姿をしていた

その存在達の空気は今にも弾けそうなほどに一触即発の空気であつた

そんな空気の中で、追跡者は右手で刀を抜刀すると彼女は刀身の切っ先を蛮族戦士へ突き付けて、こう言った

「さあ……………一曲踊ろうじゃないか」

「……………ヨロコソデ」

その短いやり取りが一触即発の空気を弾けさせ、戦いの引き金となった

ガギイイインン!!

刀と大剣のぶつかり合いは戦いの引き金が入ってから数秒も立たずに起きた……そして、両者が一度離れた瞬間

ガギイン ガギイン

ガンツ ズバァ ゴオウ!!

ギヤリギヤリギヤリ……

再び刀と大剣（正確には爪だが）のぶつかり合いの応酬が始まった
刀と大剣の斬撃と打撃 素手や足を使った格闘

それはどれもこれも全て当たれば確実に致命傷になりかねないので、両者はそれらを己の身体能力でかわし、己の武器と身体で防ぐ戦いであった

時に

シュツ!!

「!!」

追跡者が瞬間移動で蛮族戦士の背後をとって斬りかかろうとする
が

パシツ!!

「ツ!!」

ドガアツ!!

蛮族戦士は後ろを見ずに咄嗟に左手だけで刀を真剣白刃取りをして対応し、体を捻って回し蹴りで反撃をするも

「ウツ!!」

「……… ホウ? フセガレタ カ」

左手に持っていた鞘で的確に防ぎその威力を削ぎ被害を最小限に
食い止めた

そのような戦いの応酬は長いようで短い時間続いた

そんな戦闘が続いていた時

（あの存在は悪魔ではないにも関わらずここまでの実力とは………
ならばこれならどうですか？）

追跡者は一度蛮族戦士から距離を取ると刀を左手に持っている鞘に納めて何やら構え始めた

(アレ ハ ソウイウ コト カ)

その行動の意味を蛮族戦士は理解できた

『居合』をする気だということを

一瞬、それも一撃で己を倒そうという魂胆を読み取った

(ナラバ アエテ ワレ モ ソレ ニ ノロウ) (ニヤリ

そして、蛮族戦士はその行動に対応するために

深く腰を落とし大剣の切っ先を相手に向け、その峰に軽く左手を添えた状態 いわばビリヤードのキューを構えたような状態に近いもので構えた

それは日本の剣技の一つ『突き』の派生系に似た構えであり、同時に現実には存在しない構えでもあった

両者はそれぞれの構えで対立し、構えた

その時はすぐに来た

ガギイイイイイインン!!

その金属と金属が激しくぶつかる音が起きる瞬間に両者の位置は入れ替わっており背を向ける形となっていた

その勝負の結果は

「 ツ!!」

「ドウラヤ サイショ ノ ショウブ ハ ワレ ガ サキ ニ

『イツポン』 トツタ ヨウダナ」(ニヤリ

蛮族戦士が無傷、追跡者は脇腹に決して浅くない切り傷を負う形となつてあらわれた

「 驚きました まさかその大剣の刃の曲線を

巧みに利用してこちらの刀を滑らせて斬撃を逸らした上でこの身に傷をつけるとは………」

「オホメ ニ アツカリ コウエイ ダ …… ダガ ソチ
ラ モ アノ ジョウタイ カラ カラダ ヲ ソラシテ チメイ
シヨウ ヲ サケタ ノハ ジツ ニ ミゴト ダ」

そのやりとりはどれも純粹に相手を称賛したものであった

「……どうやらあなたを少し見くびりすぎていたようですね……
ならばこちらも少し本気でいかせてもらいます」

追跡者はそう言うのと左手に持っていた鞘を捨て、右腕と一体化して
いる一振りの大剣を収める鞘から大剣を引き抜き、右手には刀、左手
には大剣という二刀流で構え始めた

「ホウ …… ソレ ハ タノシミ ダナ」

その言葉に蛮族戦士は歓喜の感情を表情に出しながらそう返答し、
同じように大剣を再び構え始めた……

黒い大剣の刃を『青く』光らせながら……

戦いはまだ続く

をしているとはいえ……最大限の警戒はしておかんな……
『怪奇現象』の調査の解析が進まない以上、その件を一旦打ち切つてそのリソースを警戒と対策の方に回しておくか」

そう結論付けたその時だった

ドンドン

「……………入ってきていいぞ?」

ドガアツ!!

「ガハハハハハッ、レギオーナーリウス第四部隊隊長『テツ』ただいま復帰しました総大将ツ!!」

「……………うん、無事に復帰できたのは此方も嬉しいけどもう少し静かに入ってもらおうと嬉しいな……………できればドアを蹴つて開けるんじゃないかと……………一応俺立場上上司なんだけど……………」

「ガハハハハハッスマンスマン総大将!!」

「……………ハア」

本日二度目のため息が笑い声の中に消えていった……………

されど??の表情は少しだけ穏やかなものとなっていた

「そういえば総大将」

「どうした?」

「さつき技術開発のヤツらがH・A・G・S量産計画ひと段落したから更なる巨大ロボを作ろうとかなんとかぼやきながら騒いでましたが……………」

「もしもし鎮圧部隊!?直ちに開発狂共の鎮圧に向かええ!!あの馬鹿共がまた馬鹿をやらかそうとしゃがる!!今ただでさえ色々忙しいんだろうが!」

鉄血最重要大規模拠点
???

傘ウイルスワクチン完成予想日程計算完了……………
データ反映までの時間計算完了……………

戦力の状態・・・・・・・・・・
危機的状况と判断

DANGER DANGER DANGER
DANGER DANGER DANGER
DANGER DANGER DANGER
鉄血壊滅の緊急事態と断定

そこで「なにか」は己の所属する陣営に置かれた現状を深く理解し、
危険な状態であると理解していた・・・・・・・・

対『厄災』計算を中止・・・・・・・・
緊急プラン『Raincoat』実行開始

対策戦力設計ベースデータ設定開始
主力戦術人形ベースデータ『Vespid』設定
特殊戦術人形ベースデータ『Brute』設定
主力装甲戦闘人形ベースデータ『Aegis』『Ogre』設定
主力装甲攻撃機動兵器兼支援砲撃兵器ベースデータ『Manticore』『Typhon』設定
航空支援兵器ベースデータ『Scout』『大雀蜂』設定
指揮機体モデルベースデータ『救済者』『万能者(戦闘データコピー)』
設定
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
設計ベースデータ設定完了
設計を開始

「なにか」は己に任された役割を止め、己の陣営である鉄血の危機に備
えるべく行動を開始した

全ては『母』のために……………

重度汚染地域 『人類未踏領域』

そこは崩壊液と放射線による汚染が非常に激しく、動くものがE・L・I・Dぐらいしかおらず、電波がかき乱され通信網も存在せず、更にはどういいうわけか衛星システムですらこの領域の一部しか映すことができないという異常な現象が起こっているというオカルトの世界としか言いようがない領域^{せかい}であった

この領域ができて以来人類はその地を何度も挑んでいたがその挑戦全てが失敗に終わっており、その領域を畏怖の意味で自然とその名で呼ばれることようになっていた

そんな領域の一角で

ドサア ドサア ガシヤン ガシヤン

正規軍の戦術人形などの兵器の残骸、『白い塗装』をした戦術人形などの兵器の残骸、そしてE・L・I・Dの亡骸が山のように積み上げられて集められていた……………それも綺麗に機械とE・L・I・Dの形で仕分けられて

回収目標量二到達……………資源回収任務完了

回収部隊二通達

その山の手前ではどの勢力の戦術人形とも結びつかない姿形をしている人形十数機が作業を行っていた

回収部隊二通達完了

各機周囲警戒状態二移行セヨ

十数分後そこには残骸と亡骸の山、謎の戦術人形達の影も形も存在

しなかった・・・

ただ分かることといえば・・・

この終わりへと少しずつ進む世界

その裏の誰も知らないところで

ナニカが蠢いている

子供ってホント良くも悪くも純粹だよねえ……
(遠い目) (コラボ2回)

無名の地区 通称『墓場』

中央動力区画通路にて……

「……………」

蛮族戦士はギルヴァの後ろを黙って考えながら歩いていた

『何より貴様と殺し合った所でこちら側が得られるものなどない』

確かにそれはそうだと蛮族戦士は理解し、納得をしていた、そしてあの人ならざるものの力も形的には蛮族戦士の目をつけたものとその仲間達を守るために使われたものであること、自分が試合の為に彼にやる対価もないことも……
自分がやれるのは戦いというものしかないということ
を……

蛮族戦士は理解して納得をしていた

それ故に

ズ……………

そんな擬音が聞こえると錯覚するほどまでに凄まじく落ち込んでいた

……それもこの世の終わりを知ってしまったと表現してもおかしくないほどに……

断ったギルヴァもほんの少しの罪悪感が生まれるほどであった……

数十分後……

無名の地区 通称『墓場』 上空

輸送ヘリの中に

バラバラバラ……

「……………」

ズーーーーー

ヘリの中でも蛮族戦士はまだ立ち直っていなかった……………
ご丁寧な体育座りで

今も尚、周りにも気まずく重い雰囲気を出しておりその雰囲気の重
さでヘリが墜落するではと蛮族戦士を除く乗組員達全員が錯覚する
ほどであった……………

そんな状態から動きがあったのは基地到着して着陸までほんのわ
ずかという時だった

「……………ニンゲン ナラザル チカラ ヲ モツ ツワモ
ノ ヨ コンカイ ハ アキラメヨウ ……ツイデ ダガ
ドロ ノ キョジン ヲ シタガエル アノ ツワモノ ニ
ツタエテクレ ……コノ タタカイ ニ サンカ スル
キョカ ヲ クレタ コト ノ レイ ヲ ……ソノ
レイ トシテ コンゴ ナニカ アレバ テヲカス コト ヲ ツ
タエテクレ」

「……………えっ?」

蛮族戦士の突然立ち直ったかのような言葉にギルヴァは思わずそ
んな声を出した

そして

「サラバ ダ」

その一言を言い蛮族戦士はヘリの中からその姿を消した
まるで最初からそこに存在しなかったかのように……………

十数分後……………

S10地区前線基地から数km離れた場所にて

そこに蛮族戦士の姿があった

その視線は先ほどまで共闘していた強者達が集まるS10地区前
線基地に向いていた……………

その様子はどうやら先ほどの落ち込んでいた状態から立ち直って

いるようであった

「ゴノ タタカイ デ ワレ ハ アラタナ ケイケン ヲ エタ
..... トク ニ アレ ハ キヨウミ ブカカツタ
.....」

蛮族戦士はそう言いながらその時の事を思いふけた.....

無銘の鯉口を切る音が響いた瞬間に瞬きすら許さない神速の斬撃が無数に奔り、視界に映る景色がまるでずれ落ちたかの様な錯覚が起き、最終的には斬られた存在がこの世から姿と存在を消すというもはや人の理解の域を超えた技を.....

思いふけ終わった時、蛮族戦士は己の『爪』を再び青く光らせ、その近くにあった廃墟のビルに向かって何やら構え始めた.....それは原型からかけ離れてはいるものの居合の構えに似たものであった

そして.....

「カンシヤ シヨウ ツワモノ イヤ ギルヴァ
ト ヨバレルシ モノ ヨ オマエ ノ ワザ
ヲ フカンゼン デハ アルガ ヌスマセテ モラツタ ヅ」

その一言を言い、構えをとくとその場から離れていった

その場には.....

何も残っていないかった

人それぞれに様々な日常はある．．．．．良くも悪くも（白目）

重度汚染地帯 廃都市

そこには都市があつたということを証明する高層ビル群の廃墟があり、生活の営みがあつたということを証明するものでもあつた。さらにその建物群の間にある道路のあちこちに戦争があつたということをも証明する戦車や武器の残骸、兵士の亡骸などがあつた。そんな崩壊液と放射線による汚染で見捨てられた都市の一角で奇妙な現象が起きていた。

シュバツ!! ズバアツ!!
ガラガラガシシャーーン!!
ズドドドオーンンン!!

何かが斬られるような音と共に次々に廃墟が崩れているのだ。その現象を起こした犯人はその現場にいた．．．．．

「ヤハリ アノ チカラ ヲ ツカワナケレバ ゲンジョウ アノ
ザンゲキ ヲ ツカエヌ カ ．．．．．」

蛮族戦士はその現象．．．．前にやったあの斬撃の試験の結果に少し考えていた．．．．．

「ダガ アノ ザンゲキ ヲ ウマク ツカエバ アラタナ チカラ
ヘ ト ハセイ サセル コト ガ デキル ヤモ シレヌ
．．．．． ナラバ タンレン アルノミ ダナ」

そういうと近くの廃墟を標的にして修業を再び始めた．．．．．
己の技術を磨き、己の爪を研ぎ続ける．．．．．
全てはまだ見ぬ強者と死合うため、そしてあの強者と戦うため
に．．．．．

蛮族戦士は鍛え続ける．．．．．

人類生活圏破棄区

そこには崩壊液や放射線、生物兵器などの汚染がない『村』があり、植物などの自然が豊かという、この世界では貴重な場所であった

そのはずなのだが、そこには『動物』がいなかった．．．．．辛うじて蟲や微生物などの生息が確認されているが、まるで動物、いや生き物事態がその『村』とその周辺を避けるかのよう．．．．．

あまりにも奇妙で不気味であった．．．．．

その『村』には噂があった．．．．．

その村では古くから悪霊を封印していたが、大きな戦争の最中でその村が戦場になり、その際に封印が解かれてしまい、解き放たれた悪霊はその戦場にいた者を全て喰らったという．．．．．

幸いにして封印は完全には解かれずにその悪霊は村からは出ることはなかったものの、今も尚その村に迷い込んだ者達を喰らい力を蓄え、その村から出ようとしている．．．．．と

その噂を聞いた者達の反応は様々であった

あるものはその噂を信じ、村に近寄らないことを選択したものの

あるものはその噂を信じず、村に行くことを選択したもの

後者を選択したものは例外なくその村に行つたきり帰つてこなかった．．．．．

その噂と現象、その行方不明者探索に軍も動いたが結果は同じであった．．．．．

それ以来その場所は誰も近寄らなくなり、近寄るものは迷い込んだものか命知らずの愚か者ぐらしいしかなかった．．．．．

なあ………」

その場所は鉄血の資源地帯……つまり敵の重要拠点のある場所と言つても過言ではなかった

「……仕方ない、これ以上の厄介事に発展する可能性が、いやそれ以上に既に起きているヤバイ可能性の一片が見えるかもな……なら行くしかないか」

万能者はそうため息を吐くかのように言いながらその場所に向かっていった……

様々な者達が集う戦場に再び厄災が来る……ただそれだけのことであった

※皆さすみません、大馬鹿がまたやらかしくなりました（遠い目

人生、逃げられない上でやらなきゃいけないことは一度や二度もある（コラボ回

回想

一日前………

万能者は装備の点検を行っていた………

「エンジェルリングホント久々に点検するなあ………一応使用頻度は少ないとはいええ、適度に点検しておかないといざという時使えなくなったら困るからな………」

そういいながらもそのシステムの点検が進み、起動試験をやるまでになつていた………

「なんとかここまで終わったな………後は起動試験をやるだけだが………ついでに反応検知も試験的にやってみるか、まあ何も反応がないだろうが」

………それがフラグだったのか定かではないが、その選択が………ツ!!、こりやどうゆうことだ!?!」

「なんで………なんでこの信号が存在して、なんで使われているんだ!?!」

万能者を新たな戦いの場へと駆り立てることとなった

回想終了

地下地帯 地下道

「………こりや地下道を選んだの間違いだったか?」

万能者は不要な戦いを避ける為にそのルートを選び探索していた………

が、己の選択に若干後悔していた……………
なぜなら

ドガアーン!!

バチバチバチバチ!!

ドドドドドドドドドドドドドドドドツ!!

「ガルルルウツ!!ウガアアアアアアアツ!」

「クソ、コイツめ!!」

「バルカンしつかりしろ!」

万能者の視線の先が激しい戦場となっていたからだ

「……………早速厄介事遭遇か……………しかもよく見たら獣みた
いに暴走してる戦術人形、『鎌鼬』仕込んだヤツじゃねーか……………
今の状況で遠回りはしたくないし、だからといってここで待つわけに
はいかない……………どうするか……………」

万能者は少しの間思考の海に浸っていた後……………

「……………このままだと例の信号発信したヤツの発見が困難
になる可能性が高い……………仕方ない、腹を括って無力化する
方がいいな……………よし、やるか」

そんな結論を出し、己の目的に障害となっている目の前の争いを止
めるべく万能者はその地下道の戦場に向かっていった

「お取り込み中すまんが」

ガシツ ガシツ

「グガア?」

「えっ?」

『!!?』

その戦場に奇襲する形で乱入した万能者は暴走したバルカンと鉄
血のミニガンの頭を鷲掴み

「こっちも急用があるんでなあ……………すまんがお二人とも無力化
させてもらどうぞ……………オラア!!」

ドガアゴオン!!

「グガアッ!?!」

「ガア!?!」

そのままめり込ませるレベルの強さで地面に叩きつけた

それがこの戦場での厄災の乱入の合図となった

同じ頃 別の地下道にて……………

目標地点到達……………状況確認開始……………確認完了……………

潜入二成功

コレヨリ次ノ段階ニ移行スル

そこには5体の鉄血の装甲人形『A e g i s』が歩いていた……………
だが、その様子は何やらおかしかった……………

目標……………鉄血拠点カラ情報ノ奪取及ビ両軍ノ戦術人形数体ノ
鹵獲

各機行動ヲ開始セヨ

……………どうやらこの戦場の裏でナニカが行動し始めたようであつた

見えないって結構ヤバいこと尽くめだよね……………
いろんな意味で（コラボ回）

資源地帯

攻略作戦領域から数k m離れた地点 廃工場にて

そこには破棄されている工場が存在し、その広大な敷地と設備、巨大な煙突などからその辺の工場の中でも特に巨大であることが窺えた……………

潜入部隊ノ目標地点到達ヲ確認……………

潜入部隊カラ次ノ段階ニ移行ノプラン確認

……………プラン承認

戦況確認開始

そんな工場の巨大な煙突のうえで何かが数k m先の戦場の様子を見ることがついていた

それはおぼろげに人の形をしていたものの何やら透明であることから光学迷彩の類を使っているようであった

戦況確認完了……………

鉄血勢力及ビ人類側勢力ノ確認完了

現状奇襲ノタイミングガ効果的ト判断

目標再確認……………鉄血拠点カラ情報ノ奪取及ビ両軍ノ戦術人形数体ノ鹵獲

各機ニ伝達……………行動ヲ開始セヨ……………繰り返

ス行動ヲ開始セヨ

了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解
了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解
了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解

その確認と共におぼろげになっていた人の形が突然明確になりそ

の姿を現した

姿形は正規軍の戦術人形「Centaur」と似ており、更にはその工場の建物から次々と出てきている存在達は多少の改造はされているものの正規軍の戦術人形「Cyclops」や装甲人形「Agis」に似ていており、それらの機体全てに小さくではあるが正規軍のマークも張られていた……

その数、百を超えているその存在達はその目標を達成する為に目の前の戦場に向かって動き出していた……

数分後

攻略作戦領域内の端にて……

「おのれ……チーフめ……」

ドリーマーはあの攻撃から奇跡的に生きていた……

だが、その姿は右腕と下半身は消し飛び、左腕はあらぬ方向に折れ曲がり、全身重症レベルの傷だらけで、持っていた武器は全て損失という満身創痍の状態であった

「くそ……一旦撤退しなければ」

そんな状態でもドリーマーは足掻こうとしていた……が

ドガアツ

「ガアアツ!?!」

大破状態ノ鉄血戦術人形ノ上位規格機ヲ確認、捕獲シマシタ

いつの間か現れた正規軍の戦術人形に取り押さえられることによつてそれすらできなくなつてしまつた

直チニ回収地点ニ運ベ

了解 コレヨリ対象ヲ無力化シ、回収地点ニ移動シマス

バチバチバチバチバチ

バチツイイイ!!

「お前……は、なにも……」

ドリーマーはその言葉を最後にそのまま意識を手放すこととなった

別の場所 地上にて

「なんだコイツら!」

「正規軍の戦術人形!?なんでこんなところに!」

「なんでこつちを攻撃してくるんだ!」

それは突然であった……それもそのはず、ランページゴースト、BB小隊、パラケルススの魔剣（その他にも二人いるがとある事情により省く）にとっては立場的には味方であるはずの正規軍の戦術人形数十機が一斉に襲いかかってきたのだから

「まさか傘ウィルスに感染した戦術人形!」

そんな憶測も出るもひとまずその戦術人形達と対処するべく戦いを始めるが……

ドガアツ「ガアツ!」

バギヤ「キヤツ!」

バババツ バババツ バババババツ 「ガツ」「キヤツ」

ジャギイン パシツ

「し、真剣白刃取り!」（ドゴオ）グアツ!」

その『異質』なほどまでの性能の差とその数の差によって窮地に追い込まれることとなった

また別の場所 地下道にて

潜入部隊別働隊ノ壊滅及ビ消滅完了ヲ確認……原因ハ電撃ヲ放ツ戦術人形ト判明……現在ソノ戦術人形ハ味方ニ回収サレタ模様

本隊ニ通達……ソノ戦術人形ト仲間ヲ鹵獲セヨ

潜入部隊ハコノママ鉄血拠点ノデータ奪取ヲ開始スル

了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解

「くそ増援か！」

「違うアレは．．．．．なっ!?正規軍の戦術人形!？」

見えざる魔の手は地下道の部隊にも及んでいた

正規軍の戦術人形は通路のあっちこっちから現れ彼らに一斉に襲いかかっていた

「これでも喰らいやが」

リバイバーがレールガンで迎撃をしようとするが

ガゴオツン!!

「なっ!?」

バギバギバギバギツ!!

襲ってきた正規軍の装甲人形が信じられない速さで接近し、持っていたメイスの柄をそのままレールガンの銃口に突っ込んで中身の機構をめちゃくちゃに破壊したのだ

更に運が悪く

バチバチバチバチツ!!

「グツ、ガアツ!!．．．．．クソ、やられた!?!」

レールガンに貯めてた電気が逆流してリバイバーのほとんど全ての武装をショートさせてしまったのだ

これにより地下道の部隊が更に窮地に追い込まれることになり．．．．．

「し、しまった!?!」

ノアが正規軍の戦術人形に接近され、このままではショットガンを放たれ、脱落者が出る

その時だった

「どりやあっ!!」

どゴオオオーーンンツ!!

!!!!?!!

万能者が鉄血と正規軍の戦術人形を蹴散らしながら再び彼らの目の前に現れたのだ

なぜか鉄血のハイエンドモデル『死神』（亡骸）を左腕でお米様抱つこの形で担いだ状態で

「お前ら全員撤退するぞ!!」とかさっさとしろ!!俺は自力でなんとかできるがこのままじゃその他全員がヤツらに無力化されて捕まるぞ!!」

その言葉を、合図に地獄の撤退が始まることとなった

……この戦場の裏に潜んでいたナニカは突如としてその戦場にいるもの全てに牙を剥いた……ただ一人の例外もなく、確実に己らに課せられた目標を果たすために……

道の分岐の先が行き止まりってこと多いよね（コラボ回

前回の出来事から十数分前

「くそ、ここも崩壊してやがる……やっぱりさっきの地震か
なんかの揺れが原因か？」

通り魔行為をしてバルカン達から離れた万能者は地下道を探索していたが、先程起きた大きな揺れが原因であっちこっちの地下道が崩壊し、満足に探索できず、目的のものが発見できないという板挟みに若干イライラしていた

「クソ、ここもかよ……道的にはもうあっちしか崩落してないってことじゃねーか……これじゃ目的のもの見つからないかもな……」

そう言いながらその地下道を歩いていた……その時だった

「おっ？なんか開けた場所に出た……な……」
大破及び機能停止状態ノ鉄血戦術人形ノ上位規格機ヲ確認……
回収シマス……

万能者が見たのはその開けた場所で、鉄血ハイエンドモデル『死神』を回収しようとしている正規軍戦術人形の姿であった

……
両者の目をあつた瞬間、その場は静寂が支配し、その沈黙が数秒間続くことになった

そしていち早く動いたのは

緊急事態発生!!緊急事態発生!!緊急事態発生!!

我々

ガシツ　グシヤ

万能者であった……

凄まじい速さで接近し、戦術人形の頭を鷲掴み、そのまま握り潰し

ただ

「……完全に偶然だがこれで確信できた……やっぱりここに来て大正解だったな……飛びっきりの見えない厄介事が水面下で潜んで大きくなっていやがったよ……下手をすれば気づかないままとてつもないことになって手遅れになる可能性があったな……」

そう言いながら万能者は頭を握り潰されて機能停止した正規軍の戦術人形を見ていた……

すると奇妙なことが起きた

その正規軍の戦術人形の全身が崩壊するかのように崩れだしたのだ、

そして後に残ったのが砂のみであった

「もちろんのことのように鹵獲される対策は万全と……あとはアイツらの今回の目的がこの戦いの戦果を搔っさうことみたいだから……よし、その妨害をすることは確定だな……そしてコイツは……」

万能者はある存在へと目を向けた

その存在は戦術人形達にとっては心臓といえるコアを撃ち抜かれて、機能を停止した鉄血ハイエンドモデル『死神』だった

「……このままアイツらに鹵獲されてえらいことになっても洒落にならないし……このまま連れて行くか、修理すれば何か役に立つかもしれないし……よし、さっきの奴らと合流して撤退を支援に行くか」

そう思い彼女をお米様抱っこで担いでその場を離れた

回想終了

攻略作戦完了から2日後……

ガチャガチャ チュイイイイインン!!

バチバチバチバチ

「ここがあーで、あそこがこーだったから……そこがそうか」
「嘘だろオイ……あそこまで破壊されたコアを修復してやがるぞ……しかもかなりの速さで」

「確か機密の塊だったよなコアって……鉄血のハイエンドモデルだと更にヤバくなるんじゃないか？」

「まあそこは万能者だしで済む話だな……そんなことより万能者の中身見てみたい」

「二「分かる」二」

(……自分で決めたこととはいえ、ついてきたのちよつと後悔してきた……)

万能者は研究員や技術者の視線の中、鉄血のハイエンドモデル『死神』のコアの修復を進めていた

なぜ万能者が研究員や技術者などに視線を向けられる場所にいるのか……

答えは簡単であった……

万能者がいるその場所はその研究員と技術者達が集まる施設……IOP社の施設なのだから

ちなみにここにきた経緯としては

『すまんがヘリの席空いてるか？今回はお前らと同行する、ちよつと調べたいことがあるからな』

『『『『え？』』』』

こんな感じで、一時的に現場と指揮本部、IOP社などがパニックになったのは余談である

「しかしペルシカさんから修理を頼まれるとはな……なんかの説得に同行させるみたいだが……まあとりあえずコイツの修理終わったら、今回の戦いに参加していた戦術人形の戦闘データを見せてもらうか……実際まだアレらの目的と行動がどんな感じなのか曖昧な部分が多いからな……」

後日、『死神』の修理を終えた後、今回の戦いに参加していた戦術人形の戦闘データ見るなどの例の正規軍の戦術人形の戦闘と動向などの調べものを終えた後に万能者はペルシカにこう結論づけた

「あの正規軍の戦術人形、正確にはその中身なんだけどやっぱり俺の……いや間違いなく『俺を生み出した技術関係』のヤツだアレ……『技術』も結構扱えてるみたいだな……一体どこの勢力がアレらの設計を手に入れて作ったんだよ……」
と……

この言葉にペルシカを含む研究員達は一時的に放心状態になったのは言うまでもなかった

……その日、戦場の裏に潜んでいたナニカの氷山の一角……
されどその一部が表に晒されることになった
……そのナニカを表現するには氷山の一角というその言葉ですら過小に表現されているかもしれないが……

資源地帯 廃工場内

そこに正規軍の戦術人形と少数の鉄血装甲人形と思われる存在が集まっていた

任務終了……回収結果：鉄血戦術人形十数機、核撃仕様鉄血戦術人形上位規格機、鉄血ト人類側ノ両軍戦術人形(ダミーのこと)ノ残骸多数、鉄血拠点カラ奪取シタ情報、今回ノ戦闘データ、最重要課題データ……
被害状況……戦力ノ5分ノ2ガ損失、5分ノ2ニ少数及ビ中破状態ヲ確認……損失シタ機体ハ全テ消滅完了ヲ確認

目標最小限ノ達成ヲ確認……コレヨリ1分後ニ到着スル回収機ニ搭乗シ、帰還ヲ開始スル

了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解

了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解
了解 了解

後日、G & Kと正規軍共同で資源地帯の探索がされた際、その場からは正規軍の戦術人形どころか、鉄血とグリフィンの戦術人形の一片すら見つからなかったという……

そのナニカは静かに消えて去っていった……次の戦いに備えるために……

トラブルって想定された範囲内でくるとは限らないので大体想定外になることを想定した方が良かったりする

某所 鉄血中規模基地

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!

パシユツ!!

ドガアーン!!

パシユツ!!

ドガアーン!!

バスツ!!バスツ!! バスツ!! バスツ!! バスツ!! バスツ!!

ズドオーン!!

そこでは新たに開発された戦術人形と兵器の試験が行われていた

「これほどまでに練度があるとはな………」

「あの連携攻撃と行動をやられたら手の出しようがなくやられるな………」

「ああ、私でもテレポートで一時体制を立て直すしかないな………」

ハンターとアルケミストの二人はその試験の成果に若干の恐怖と感心を抱いていた

「それにしても『傘』ワクチン対策をまさか我々戦術人形の利点を捨てる方法で解決するとはな………」

「……だが、効果的ではあるな………」

「ああ、ある意味一番効果的な案だな………」

『傘ワクチン対策の新型戦術人形はネットワークから独立させる』

他にもそれに合わせたものなどの詳細があれど、たったそれだけのことであった

だが、それと同時に目から鱗という言葉がピッタリ当てはまるような提案であった

無論欠点がないわけではない、その案は戦術人形の強み大半を捨て

去るものであり、普通であればデメリットが大きくその案は却下されるはずであったが、敵の傘ウイルスワクチン及びそれを利用したウイルスの対策が見つからないことと戦況の悪化などもあり、その一時的な打開策としてその案を改善をすることを条件に受け入れることとなった

その結果、開発された戦術人形と兵器の試験テストの結果は、鉄血ハイエンドモデルの二人を驚かせるほどの代物となっていた

「これである程度の戦力回復につながれば良いんだがなあ……」
「そこに関しては期待しすぎてもしなさすぎても駄目だな……私達がうまく彼らを役に立てられる戦場を用意しないと」

そんな新兵器と戦術人形達には共通してある文字のエンブレムが貼られていた

「RC」と……

これらがどんな影響をもたらすのかまだ分からない……

I O P社 研究施設

「……」

「……」

ジーーーーーーーーーーーーーーーーツ……

そんな擬音が聞こえると幻聴するほどに万能者とペルシカは黙つてあるものを見ていた

そのあるものは資源地帯攻略作戦に乱入してきた正規軍の戦術人形……否、偽装された正体不明の戦術人形の戦闘データをまとめた映像（編集：万能者）だった

無言の空気のまま映像は終わりを迎えた

「……間違いなく正規軍の戦術人形じゃないわね……」
「ああ、明らかに動きとか違うだろ？更にいえば何機か腕とか損失した際に見えた中身の部分のパーツがこっち関係のヤツだったからなあ……その上で俺が倒したのは身体が瞬間的に崩壊するよううに崩れて証拠隠滅しやがったからな、それも損失した部位ごと全

部………ちなみに正規軍からは？」

『所在不明の個体はあるが、我々からは何も行っていない』って返答よ………で、その正体不明の存在達の目的はなんだったのかしら？」

万能者の疑問に返答したペルシカは逆にこちらから疑問を万能者に投げかけた………

「………あくまで推測だが、多分IOP製と鉄血の戦術人形の戦闘データが欲しかったんじゃないだろうか？恐らく中身と実践の両方も………正規軍の戦術人形の偽装に関してはそれに都合が良かったからじゃないだろうか………どこであんな数の偽装の装備を揃えたのかは知らないが」

「………それだけのためにアレだけのことをやったの？」

その返答はペルシカに更なる疑問を生み出す形となったが

「分からんよ………あくまで推測だし、アレらを使ってるヤツらの目的がわからないしな………更にいえば今後アレらと遭遇しても多分俺じゃないと鹵獲は確実に不可能だから情報が手に入るのは限りなく少ないのは確定だろうな………」

万能者は現状お手上げといった感じでそう言った

「とりあえず現状はそちらの戦術人形がアレら………次は正規軍の偽装を使ってくるかどうかはわからんが、とりあえずそれらしき存在と遭遇したらまず逃げる、これが基本だな………」

「ええ、そうした方がいいわね」

その後もその正体不明の存在達に対応するための対策を二人でなっっていくことになった

「そういえば話が変わるのだけれど、取り外した死神のパーツを何やら弄っていたけど………」

「うん？アレ？ああ、簡単に言えば………まああの子かもし力を欲した時の場合を想定したものって言ったほうがいいかな？型はできてから後はそっちでも改修やら改造ができるようになってるはずだ」

「………なんかとてつもない無茶振りが来たわね」

「それは言わないお約束だ」

重度汚染地域 『人類未踏領域』 ???

データ解析完了・・・・・・・・・・経験データベースニインプット開始
インプット完了・・・・・・・・・・アウトプット完了
鉄血戦術人形ヘノ対策プロトコル構築完了
paw n本体性能ニ5%ノ性能向上ヲ確認
knight本体性能ニ1.4%ノ性能向上ヲ確認

そこではナニカが今回の戦いの戦利品を使って己らの駒の強化を
行なっていた・・・・・・・・・・

次ノステップ・・・・・・・・・・ unknown3体トノ交戦データ解析
開始・・・・・・・・・・
unknown「demon」
unknown「reaper」
unknown「a」

共ニ交戦データ解析完了・・・・・・・・・・データ反映機体ノ開発ヲ開始

そのナニカは備える・・・・・・・・・・次なる戦い・・・・・・・・・・そして、u
nknownとの戦いに備えて・・・・・・・・・・

緊急事態というのは本当に一番来て欲しくない時的確かつ最大限に来るもの

IOP社 研究施設

(暇だなあ……)

万能者は通路を歩きながらそう思っていた

それは数日ほど続いていた正体不明戦術人形に関しての対策がある程度作られ、作業が一区切りされたことが理由としてあげられた。その一区切りの影響は参加していたもの達に休息という形で現れ、万能者にも現れていた……

尚万能者が研究施設を自由に行動できている理由としては、

「ここに滞在している間、下手に縛って大惨事を引き起こさせるより施設内にいることを条件に自由にさせたほうがいいでしょ」

ペルシカの一言によるものが理由だったりする

(とは言っても、何にもやることないし……かと言って外には出れないからな……いぎ考えてみると今までの俺って休日らしい休日の過ごし方ってしたことがなかったなあ……あつちこつちで色々あつたのもあるが……誰かと話して暇潰しって手段も考えたが、この職員はなんかオーバーワーク気味だから休日邪魔するところくなことが予感がするからな……うん？誰かと話す？なんか忘れてるような……あ”っ”)
何か思い出した万能者は立ち止まった……

(……最近アイツと連絡取ってないじゃねーか……すつかり忘れてたなあ……エンジェルリング経由で機密通信を使うか……ついでにリホーマーさんにも連絡繋ぐか、一緒に話し合ったほうが色々とか何ができるだろうし)

十数分後……

????

電脳的空間

『というわけで久々に連絡したんだが』

『『えらい唐突だな（やな） オイ』』

その理由にリホーマーとタナカは同時にツッコんだ

『まあ最近色々ありすぎてなあ．．．．地下行ったり、鉄血に道徳（物理） やったりだったからな』

『．．．．今年に入ってから色々あり過ぎてないか？
いや、こっちもこちらで幽霊の件まだ解決してないからなあ．．．あ
る程度は収まったけど．．．まだ幽霊の子供達がめちやくちやはしや
いでなあ．．．あつ、社長．．．いや元社長か、つ
いでで突撃者に関してだけですがあのままだと可哀想だったから
こっちの方でコア取り外してあの改造作業ロボットの予備機に仮初
の体として取り付けたよ』

『．．．分かった、突撃者には悪いことしたなあ．．．．
そんな会話があった．．．．その時』

『『そういえばリホーマーさんのところなんかあったか？』』

万能者の口からそんな言葉が飛び出したのだ

『え？．．．あついや、な、なんにもないで、ア、アハハ』
『．．．．』

『．．．．』

『．．．．スミマセン、大事が絶賛起こってます』

それそれは綺麗な土下座が幻視するほどに綺麗な謝罪の言葉で
あつた

そして、リホーマーは絶賛起こっている大事を話した

鉄血ハイエンドモデル「チーフ」に脅しをかけられており、その地
区に3日後に強力な核砲弾が撃ち込まれること．．．．それまでに
S O 9 P 基地の研究データを手に入れ渡すこと．．．．
その全てを話した．．．．

『．．．．』
タナカと万能者は同じ気持ちで遠い目をしていた．．．．

この人、なんでこうも不幸という不幸に引き寄せられてしまっているんだ

と・・・・・・・・・・・・・・・・

『・・・・・・・・・・・・・・・・俺連絡しておいてよかったな・・・・・・・・・・
下手したら手遅れになって大惨事になるところだったな』

『ああ、全くだ・・・・・・・・・・この人の性格上自分で溜め込むから
な・・・・・・・・・・・・・・・・』

『ホンマスミマセンチタ』

『まあこれでとりあえず対策が練れるわけだ・・・・・・・・相手にかなり頭が
回るヤツがいるからそれ相応の対策を練らないとな・・・・・・・・・・
まあ本体が行けばある程度は解決するからその詳細の部分をなんと
かしないとな』

『うん？今回俺は直接には関わらないぞ？というかわ関係ない』

突然の爆弾発言であった・・・・・・・・・・その場の空気が急激に
冷えるのがわかるほどであった・・・・・・・・・・

『え？・・・・・・・・・・あつそうかお前今IOP社にいるって言ってた
か・・・・・・・・・・そのことで鉄血も対策してくる可能性があるってこ
とか』

タナカはその理由を理解し、口に出したことで再び空気が元に戻つ
たが・・・・・・・・・・万能者が戦えないというそのことがリホームマーに
不安を与えた・・・・・・・・・・だが万能者の口から更なる発
言が飛び出した

『そういうことだ・・・・・・・・・・もうここにいることがバレてる可能性が高い
し、ここから移動すれば更によばいことになる可能性が高いし
な・・・・・・・・・・まあアナザーアイとサンライト・パラノイア2機をこっ
そり飛ばして援護はしてやるよ・・・・・・・・・・』

『そのこっそりで大隊クラスがいくつも壊滅するヤバイものじゃねー
かこのヤロウ』

その爆弾発言とタナカの説明でタナカとリホームマーの二人は真顔
になった

それを更にトドメを刺す形で万能者は口に出した

『念には念を入れ、最大限の対策として「例のアレ」も使ってみるか』
『「例のアレ？」』ってなんや？』

『……ちよつと待てツツコミどころが多い……サ
ンライトも結構規格外なんだが……例のアレに関しては心
当たりが多すぎて何かわからんぞ……』

その言葉に対して万能者はこう言った

『「例のアレ」って言ってもかなり限定的な使い方の方のヤツだけ
ど……まあ効果的って保証しておく……まあつい
での実用試験みたいなもんだ』

その言葉でタナカは「例のアレ」が何を指していたのかを気付い
た……

『……おま、それ色々とアカンヤツ!!? 戦略兵器どころか色々
と無力化できるヤツ!!!?』

その叫びはその三人しかいない空間内だけに大きく、そして寂しく
響くことになった……

でつかい話題が日常に侵食してきてるって感じるよ
うになると「ああ他人事ではないんだなあ」ってその
時初めて思うようになるよね……

??? 室長室のような場所（いつもの）

「ハア……」

「はいつものように自分の机の上に両肘を立てて寄りかかり、両手
を口元に寄せながらも何度目かも分からないため息を吐いてい
た……」

「……まさかあんなのが動いてたとはなあ……
しかも規模がバラバラだけどあの場所以外でもあつちこつちで動い
ているみたいだし……」

「は机にばら撒かれるように置かれている写真を一枚一枚再確認
しながらそう言った」

それらの写真には正規軍の戦術人形、鉄血の装甲人形、白い勢力の
戦術人形と思われる存在が映し出されており、その中の一枚が??
の手に取られていた

その写真にはどの勢力の戦術人形とも違う姿をし、見たことない装
備をした戦術人形らしき存在が映し出されていた

「……どの勢力の戦術人形とは属さない別
勢力の戦術人形……それでありながら武装が豊富でどの勢
力の戦術人形よりも凶悪な上に数が多いって……やっぱあ
の『正体不明の文明』の遺産かなんかか?……というかよ
く撮ったな『カオナシ』共……一歩間違えれば
あつという間に全滅させられるっていうのによくやるなあ……
後で休暇をやつとこう」

「そう言いながら??はその新たなる未知の勢力の調査と対策を進め
る方針を固めていつた……」

鉄血最重要大規模基地 司令部

「……………」
鉄血ハイエンドモデルである『代理人』は机に頭を打ちつけるように突っ伏していた……………」

なぜならそのデータにグリフィンによる資源地帯攻略作戦によって受けた被害の大きさ、鉄血のハイエンドの鹵獲、そして正規軍に偽装した正体不明勢力など……………どれもこれも代理人の胃を破壊しに来ているとしか言いようがない胃痛の元のラインナップであつたからだ

「……………」
モウヤダア……………」

そんな様子をデストロイヤーやアルケミストなどの鉄血ハイエンド達は哀れに、そして同情して見ることに出来なかつた……………」

正規軍本拠地 会議室

ズ……………」

そこは上記の効果音が目に見えるほど空気が重かつた……………」
「……………」この戦術人形は一体何かね?」（虚ろな目で

「どう見ても我々の戦術人形です、本当にありがとうございました、おやすみなさい」

「寝るな馬鹿者」 ガアツン 「アギヤバアツ!」

「しかも襲つたのがあのS09基地の皆さんというね……………」イガイ
タイヨ……………」

「モウドーニデモナーレ」

「アハハウフアハハウフアハハウフアハハウフ」

「……………」誰かあの発狂した二人を精神治療（物理）をやれ
ガアツ ゴオツン

その映像に映し出されていたものを見る限り己達所属の正規軍戦

術人形がしでかしたことを理解した者たちが次々に胃痛や発狂状態に陥っているというカオスな状態であった

「．．．．．皆さん安心してください．．．．．これらは我々の戦術人形ではありませんでした．．．．．」

「．．．．．なんだ我々の戦術人形ではないのか．．．．．びっくりした」

その言葉に安心したのも束の間

「ハイ、調べてみたところ装甲．．．というか偽装に使われた側に関しては我々の戦術人形を流用していると見られており、中身の方はほんの少ししか確認出来なかったことと証拠となるようなものが全く手に入らないことがあったもの．．．．．現在IOP社にいる万能者からの情報により、万能者の技術が使われた存在であることが間違いないことが分かりました」

「「「「「why?」」」」」

爆弾発言のクラスター爆撃によって会議が更なる混沌へと突き落とすこととなった．．．．．

その後、正規軍の戦術人形が世に出てしまったルートや、大量損失した作戦の洗い出しなどが決まることが決まり、今後の未知の勢力の対策が進める方針が決まることになったは別の話である．．．．．

+α (おまけ話)

万能者はカフェにいる

ある日、IOP社内カフェにて

「．．．．．」

万能者は遠い目をしていた．．．．．

その理由は．．．．．

「……………」(ボ~~~~~~~~)

となりのテーブルにいる放心に近い状態で朝飯を食べているバルカンが原因であった

「……………」エへへ」

その様子は凄まじいほどまでに浮かれていた……………

そしてその様子は普段の万能者なら(何かあったのか?)と少々思うぐらいで対して気にはしないのだが、今回場合、それが万能者にグサグサと突き刺さった……………

それは昨日の夜……………

「うん?なんだこの微妙な振動?」

通路を歩いていたら万能者は近くから何やら奇妙で微小な振動を感じ、疑問を抱いていた

「うん……………敵の破壊工作かなんかだったらヤバいから一応調べてみるか」

そして、その奇妙で微小な振動は……………

(ここからかあ……………個室だから防音にはなってるみたいだが、振動は隠せなかったみたいだな……………)

その部屋から出ていた……………

(……………よし、念のために敵がいるかもしれないから壁から振動を感知して調べてから考えるか)

そうしてその部屋の様子を壁と床の振動から調べ始めた……………だが……………

(うん?……………これって……………)

万能者は徐々に……………されど確実にその正体を理解していった……………そしてその正体が理解した時、万能者は己のやったことに後悔した……………

(あつコレお楽しみにカツコがついて意味深と書いてカツコで閉じるやつだコレ)

他人のお楽しみ(意味深)を自分が覗くということに近いことをしでかしたのだから……………

「・・・・・・・・・・よし、何も知らなかった・聞かなかった・見なかったことにしよう」

万能者はすぐさまその場を静かに誰にもバレないように離れていった・・・・・・・・・・

回想終了・・・・・・・・・・

そして、その次の日の朝にこの出来事が起こったのであった……そのことを知ってしまったこと、形的には覗きに近いことをしてしまったことなど罪悪感が万能者に突き刺さりまくっていたのだ・・・・・・・・・・

その出来事はバルカンが朝飯を済ませてカフェから出ていくまで続いた・・・・・・・・・・

尚、万能者はそのことを内面だけにしており、様子など表立ってだしていなかったため誰にも気づかれなかったことをここに記述しておく・・・・・・・・・・

起きるとわかっている厄介ごとを抑えるには準備と対策がマジで大切

IOP社 研究施設

ガチャガチャ チュイイイイイインン!!

バチバチバチバチ カチャカチャ ガゴオン!! ギユイイイインン

「欠落記録再生用ナノマシンをここに突っ込んで……ここは調節、そこはああだったから……こうか」

万能者は鉄血ハイエンド『死神』を修復して蘇らせたように、また別の戦術人形の修復を行っていた

「しかし、死神ちゃんの修復……というか蘇生に近いことをやっただとはいえ、また依頼されるとはなあ……それも次は機能停止した2体を任せて修復だからなあ……確か一体は鉄血の嬢ちゃんの大人版の機体で、もう一体は機密性を保持するためにバックアップがない特殊な戦術人形だっけか？まあちよつと戦力を整えなきゃアカンし、なにより頼まれた以上ちゃんとやらないとな……無論あの地震で起きた事故のようなものは起こらないようにな」

そう言いながら万能者は己の仕事を進めていった……
「そういえばこの子火炎放射器を使うっていつてたな……念のため耐熱性とかを上げとくか……火炎放射機って結構事故りやすいからなあ……その事故で自滅する可能性があるし、ついでに嬢ちゃんの大人版の簡単な強化でもしておくか」

※オイ、しれつと常識の法則が乱れかけることとしてんじゃねーよ、自重しろよ（真顔）

（それにそろそろ裏の方でリホーマーさんの援護の用意もしておかないとな……これに関してはIOPとグリフィンに協力を仰ぐと何が起こるか分からないから秘密裏にやっておくしかないから

な……そのためアイツが今回一番の要だな)

若干の脱線もしつつ、後に待ち受ける己の手が直接には届かない厄介事とそれに立ち向かう者達を思い浮かべながら

S09地区 東部廃都市区域 廃協会 H&R社本社 個室

ガチャガチャ

「ええい、クソツタレめ……こつちの方がギリギリだけどある程度持ち直してきたと思つたら今度は元社長……リホーマーさんの方がえらいことになるとは……なんでこうもあの人運が悪いことが重なりまくるんだかホント……」

タナカは色々と言いつつもその自分の部屋で着実にその準備を進めていた

己の使う武器や端末、その他装備などの兵装、己だけでは足りない判断し、隠れて(ポケットマネーで)作っていたロボット数機とその装備など数えるだけでも一苦労するものの数々がその場に置かれていた

(だが、ある意味チャンスかもしれない……本体の言うことじゃ、俺達の技術が使われるヤツに関しては戦力と目的が未知だが、あんなだけの数が用意できるんだったらヤバいってことだからさっさとその対応と対策を練りたいって言つてたし、なんとか鉄血の勢力と人類の勢力に協定を結ばせて対応できるようにする……ある意味アイツらの鼻面をへし折って話を聞いてもらえるようにできる足掛かりになる可能性が……やるしかないか)

そう思いながら眼下の厄介ごとの対応の準備をしていた……

ガタガタガタガタガタガタガタガタ

種って種類によつて色々な撒かれ方するよね……風に飛ばされたり、う〇〇と一緒にだつたり

重度汚染地域 『人類未踏領域』 ???

機体状態確認開始………確認完了………機体全体

ニ異常無シ

内部システム確認開始………内部システムニ異常無シ

全テ異常無シト判断………

どことも知れぬその場所にてそのナニカは新たなる駒を作り出していた………

ピッ ピッ ピッ

システムオールグリーン………

………『Soldier』起動シマス

その日、新たなる駒………

新たなる災厄の種が産み出された………

2日後………

砂漠地帯 正規軍自動化主力部隊待機地点

その部隊は正規軍の完全自動化されている部隊の中でも上位に入るレベルの戦力を有しており、最新鋭の戦術人形、戦車、機動兵器など数々の兵器が揃えられており、更には自動化された「Assault Attilery」の強化外骨格兵器が投入されていると言う徹底ぶり、まさしく正規軍の誇る部隊の一つとも言つて良い部隊だつた………

………そんな部隊が今

バギャツ!!　　ゴギャ!!

ズバアツ

ガシヤン!!　ガシヤン!!　グシヤツ

たった2体の人型のナニカによって壊滅しかけていた

フード付きローブによってその姿形を隠しており人型であると言
うことと持っている武器が一体が刀、もう一体はグローブのようなも
のであること以外の正体が分からない存在がその武器や格闘をする
たびに次々と犠牲が増えていなのだ

グシヤツ　ズバアツ

ある時は戦術人形がなすすべなく切られるか、殴り潰されるか、叩
き潰されるなどで無力化され

ドスツ　グシヤ　メキメキ・・・バガツア!!

ある時は戦車と機動兵器が自慢の装甲ごと刀の突きで貫かれ、腕力
で引きちぎられ

ドドトドドドトドトド

ドガアーーーン!!　ドガアーーーン!!　ズドオーーーン!!

またある時はその一方的なまでの襲撃に対応し、戦術人形、戦車な
ど種別を問わずにその2体に銃撃や砲撃などの攻撃を加えるが、それ
らの攻撃をすべてかわされ、逆に反撃を受けて無力化される……

そして挙げ句の果てには……………

ズドオーーーン!!

切り札であったはずの正規軍の誇る強化外骨格兵器が的確に中枢
を破壊され、なす術もなく動かぬ残骸と化していた……………

その後間も無くして正規軍の全滅という形でその場から銃声と爆
発音のオーケストラは閉幕となった

実戦試験終了・・・・・・・・・・両機二損傷無シ、敵全滅ヲ確認
結果・・・・・・・・・・反省点ハアレド良好ト判断
コレヨリ回収ニ移ル

その後、通信が通じなくなったことを不審に思った正規軍が偵察部隊を派遣するが、その場には戦闘があったであろう破壊痕のみが残りそれ以外は正規軍の部隊とそれらと交戦したと思われる敵の痕跡も何もかも存在しなかった・・・・・・・・・・

突然現れ凄まじく甚大な被害をもたらした大事件に正規軍の上層部は頭を抱えるしかなかった・・・・・・・・・・

だがそれは始まりに過ぎなかった・・・・・・・・・・
その神隠しにも思えるような事件はその後も起こり様々な勢力の戦力が神隠しが起こったかのように行方不明になっていったのだ・・・・・・・・・・

災厄の種はばら撒かれ、早くも芽吹き始めた・・・・・・・・・・
己を成長させるために周りのものを糧にしながら・・・・・・・・・・

混沌と秩序つて反対の意味だと思っけど、実際のところ混沌から秩序が生まれたり秩序から混沌が生まれたりするから結構似てるものつて思うの（コラボ回1

S13地区上空にて

その空には見えない何かが飛んでいた……

「光学迷彩異常ナシ 『八方騙し』異常ナシ 『エンジェルリング』異常ナシ 『サンライト・パラノイア』異常ナシ 機体状態良好」

「『エンジェルリング』起動マデ3……2……1……0……起動」

ブウウウウン……

「『エンジェルリング』形成完了……状態ニ異常ナシ……次ノステップニ移行……『サンライト・パラノイア』投下ルートニ移動開始」

その後、間も無くして目標である地点へ辿り着いたと同時に新たな行動を開始した

「目標上空ニ到達……『サン1』投下マデ3……2……1……0……投下（ガゴオン）」

その何か……『アナザーアイ』から投下されたその物体は重力に引かれて降下していたが、

ピタッ

ある程度の高度に到達した瞬間にまるでそこだけ時間が止まったかのように降下が止まりそこに滞空して始めた

「『サン1』ステルス・スタンバイモード実行ヲ確認、異常ナシト判断……次ノ目標地点へ移動ヲ開始」

『アナザーアイ』はもう一つの物体を投下するために別の目標の地点へと飛んでいった……

「鉄血ハイエンドモデル『チーフ』ト思ワレル存在ヲ確認……」

S13地区の別の場所……とある廃墟にて

そこでタナカは状況確認を行っていた……

「……やっぱりいたか……北と西に一体ずついての、どれも例の大砲の発射用意をしてやがる……まだダミーはこれだけじゃないだろうな」

アナザーアイから送信されたデータを確認していたタナカはことの重大さがすでに一刻を争う状態であると理解していた

「まあ理由はどうであれ……ある程度の保険はあるとはいえ一発も撃たせるのを防ぐに限るな……とりあえずα1は北のダミー、α2は西のダミーを生き殺しでやれ……他のやつはダミーもだがそれ以外の核撃の可能性があるやつを潰せ!!」

「さてと相手が動き出したんだ……こちらも動かないとな……ただ今回は秘密で動いているとはいえこっちの数が少ないんだ……慎重にいかないと」

タナカはまるで消えるかのようにその場から離れていった……

そのわずか5分後……

S13地区 西部 廃墟にて

そこには鉄血ハイエンドモデル『チーフ』のダミーがヒュージキヤノンを持って立っていた

だが奇妙なことにそのダミーはその巨大な砲を目標の方に向けずに地面の方に向けていた……

その理由はすぐに分かった

キュイイイイイイ

ハッキング完了……チーフダミーノ完全無力化及ビ偽装工

作完了

見えない人のような何かがチーフのダミーの後頭部をアイアンクローの形で掴んで何かを行なっていたからだ

コレヨリ本機ハ再ビ搜索ヲ開始スル

見えない何かはチーフダミーの頭を離すとそのまま闇に消えていった………

大きい問題は要点を的確にやると終わるのが早くなる（コラボ回2）

違法カジノ

「……から少し離れた地点の地下水路にて

キュイイイイイン

「間違いなくこの辺のこのあたりだったよな？例の目的地やつ」

「間違いなんです……ここに穴を開けば直通の道ができまっせ」

「今俺たちがレーザードリルでギリギリまで掘つてるところっす！あとは特殊な爆弾を使ってデツカイ穴を開ければ効果的にあつちの地下に突入できるっす!!」

「やつぱこういう作業はレギオーナーリウスがいてくれて本当助かるなあ」

その場所で何かの集団が何やら行動を始めていた……見る限りでは

レーザーのようなもので穴（というかそれなりにデカイトンネル）のを掘っている機械、崩落の危険がないように細心の注意を払って穴の整備をしている作業服姿の人と武装をしてる人の集団、そしてP・A・C・Sと呼ばれる外骨格兵器やそれを下回る大きさの何やら鎧のようなものなどがあつた……

……どうやら彼らの目的はある違法カジノの地下にあるようであつた

「しかし……まさか悪魔なんて存在もいるとはなあ……この世の中って本当色々というもんなんだなあ」

「本当それな」

「それに今回は悪魔の殲滅だけではなく結構なものデータの確保又は削除が任務だからな」

「……確かそれってこつちと繋がってるダメー会社のダメー会社の更にダメー会社のデータだったよな？」

「ああ、その通りだ……だが、できる限りそういう不安要素の排除しておきたいのが大将の判断らしい……もつともこの依頼が来たのはまた別の理由もあって、そのダミー会社の末端としてはちよつと重要な仕事を任されていたところしいからな、そこがなくすハメになるとちよつと面倒ごとが起こるっていうのが最大の要因らしい」

「この依頼の元凶の女社長……どうやらそのダミー会社の行動をうざく思ってたほいな……」

「まあこの任務をさっさと成功させないとな」

そんな会話がありつつも彼らは作業を進めていった……

そして、数時間後……

ドガアアアーーーーーンンンンツツツ!!!

「よつしや突撃開始!」

「「了解!」」

「「ヒヤッハー!!仕事との時間じゃー!!」」

彼らの作戦が始まることとなった……

尚、同じタイミングであつちこつちに存在する違法カジノでもG&K社が乱入しているとは知らずに……

そしてまたこのカジノに同じタイミングで別のG&K社の依頼を受けた部隊が突入していることも……

……違法カジノから数十km離れた上空にて

そこに見えない巨大な何かが飛んでいた……

マモナク目標地点真上空ニ到達……

投下部隊ノチエツク開始……

「Soldier」4機ニ異常無シ、武装モ万全ト判断……

投下ポットノ状態良好……チエツク完了

現在南東カラ強風……投下軌道ノ再計算ヲ開始……

再計算完了

目標再確認・・・「demon」ト同ジカヲ持ツ存在ノサンプル
ヲ入手及引き戦闘データ取得

何はともあれ今夜はパーティーは更なる波乱に次ぐ波乱に満ち溢
れた催しが開かれることになるのは間違いない・・・

投下マデ

5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・

投下

ガゴオン

訓練された犬って様々な作品でかませ犬扱いさせられてるけど実際は人間キラ〜っていうぐらいに普通に人間より強い……尚、狼はそれでいて連携をしてくるからそれ以上にヤバイ（コラボ回2）

違法カジノ 地下部 穴近くにて

突入開始から8分後……

そこは一時的な沈黙の空気が漂っていた……

周りには無惨にも壊されたスロットマシンとスロットマシンに偽装された自動感知型武装のタレット

豪華であったことを象徴していたシャンデリアなどのインテリアの残骸……

明らかに人とはかけ離れた姿をしている怪物と言っても過言ではない姿をしている存在や人間などの血肉や亡骸が床や壁、天井に一種のかなり独創的な芸術的な絵みたいにまき散らされていた……

そして……

その独創的な芸術的作品の真ん中に彼らはいた……

それらは作業服姿の人間、巨大な人型の機械の存在、機械の鎧に包まれた人間など様々だった

「……なんだっただこいつら？なんか狼というか獣みたいな感じで襲ってきたんだが……というか普通に悪魔徘徊してるってどんな事態になってたんだか」

その言葉は彼らがこの騒動の始まりの原因ではなく、突入する前からこうであったことが窺えた

「……あー……こりやなんかハイになつて人格どころか脳みそや本能とかまでケダモノになつちやつてる感じだわ……なんかのヤクなんかでも決めたんかなあ？」

「……ヤク漬けでもある程度時間がかかるっていうのにこんな短時間でケダモノになるって……なんかの煙でも吸わされたっ

てことを考慮すれば……こりや念のため全員ガスマスク装着させたの正解だなこりや」

「あ、こつちに生きてるヤツいる!!お座り!!」

ゴシヤツ!!

ギヤツワン!!!?

「………容赦ねーなオイ………オマエ飼ってる犬にもそうしてるのか?」

彼らは想像とは斜め上の状態に一旦体勢を整えて今の状況と起きていた出来事の分析を行なっていた

その結果

・自分達が突入する2時間前からこんな状態であった

・突入した時にはその区画ではすでに『正常な』生存者はおらず、どういわけか悪魔とケダモノ化していた人間とその辺の偽装タレットとの三つ巴が起きていた

・悪魔に関してはおそらく監禁していたところからこのトラブルで出てきてしまっている

・ケダモノ化した人間に関しては何かしらの薬でそうっており正常な生存者や悪魔などに襲いかかっている

・これらのことからこの違法カジノはすでに下手な戦場よりも恐ろしいことになっている

それらのことが分かった

「………逆を言えばチャンスか………この混乱下でデータの回収又は消去ができることを考えると絶好の機会だな………確か目的のものがVIPルームの奥の金庫だったか?」

「はい、今我々がいる場所が地下1階で………VIPルームのルートはこうです」

それらの状況が分かった上で彼らは任務の続行を決め、再び準備を始めた………

その時だった

にいる誰にも分からない

番外編というのは大体は本線から脱線する場合が多いが、時々めちやくちや重要なことが書かれてたりすることがあるよね

????
???????

――

おめでとう 我が子達・・・・・・・・・・ 私個人としては本当は旅立ってほしくはないのだけれど・・・・・・・・・・いえ、本当の、本当に貴方達と別れたくはなかったの・・・・・・・・・・グスン・・・・・・・・

ただいま、若干お見せできない部分が出ています・・・・・・・・・・しばらくお待ちください・・・・・・・・

でも子は親を離れるものよね・・・・・・・・・・うん、仕方ないわ・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・うん、腹を括った!!

コホン・・・・・・・・

これから貴方達は、我々の全く知らない世界・・・・・・・・・・未知の領域に行ってもらいます

そこでは本当に何が起こるか分からない・・・・・・・・・・
災害や神、上位者、それ以上のものが貴方達の前に試練として現れるかもしれない・・・・・・・・

それだけじゃない、どのような映画や漫画、小説などにも書かれていない・・・・・・・・・・いや、想像すらできないような悲劇や残酷なことも起こるかもしれない・・・・・・・・

でも、私は・・・・・・・・私達は信じている!!

貴方達はあらゆる可能性にたどり着け、全てを乗り越えることができる資格を持っていることを!!

さあ行きなさい!!我々『人』が過去にありとあらゆる障害を乗り越え

られたように!!

どのような過程だろうと!!どんな結末を迎えようとも!!

その「人の可能性」を示して見せなさい!!

チユン・・・・・・・・チユン・・・・・・・・チユン・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なんかスツゲエ懐かしいの思い出を夢で見ることになるとはなあ・・・・・・・・・・」

I O Pの施設の借りた部屋で万能者は眠りから目を覚ましていた・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・いつ思い返してもあれって良くも悪くも全ての始まりだったんだなって改めて思えるなあ・・・・・・・・・・あれ聞いた時は色々覚悟はしてたんだが、こうも起こると身に染みるな・・・・・・・・・・まあ俺はまだ優しい方だったのかもしれないが・・・・・・・・・・『兄弟達』はどんな過程を進んでいるのか・・・・・・・・・・そしてすでに何人が最期を遂げたのやら・・・・・・・・・・」

万能者はそう言いながら夢で見たことを思い返しながら自らと同じ道でありながら別れた『兄弟達』のこのほんの少しの間を心配していたが・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・まあイツらのことだ・・・・・・・・・・どんな最期を遂げようといい『人生』だったって笑いながら言いそうだからな・・・・・・・・・・まあこつちもこつちで頑張ってみるか・・・・・・・・・・さてこつちはこつちで依頼された作業を進めるか」

そんな結論に至り、ほんの少し笑い、その日の作業を始めるために動き出した

(・・・・・・・・・・でもなんでいきなりこんな夢を見たんだか・・・・・・・・・・ひよつとして一種のフラグのようなものなのか?・・・・・・・・・・今考えても仕方ないか)

共闘って簡単な場合で成立したり、複雑怪奇な場合で成立したりと本当に色々多いよね（コラボ回2）

違法カジノ 地下部

そこではある武装集団とある老兵による共闘が行われていた

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

「あそこにグレネード頼む!!」

ポンツポンツ

ポオンツ!!ポオンツ!!

「っ、爺さん!!危ねえ!」

ズドドドツ!

「ってウソオ!?あの人後ろに目でもあんのか!」

ズガアツン!!ズガアツン!!

ボツ ボツ ボツ

「その前に口動かす暇があったらさっさと撃てオマエら!!」

「しかし、あの爺さんが来てくれたおかげか、どうゆう理屈かは分からないがああケダモノ化したヤツらが襲ってくるのが少しになったのは本当にありがたいとしか言いようがないな」

ズガガガガガツ!!

そんな会話がありつつも奇妙な共闘をしながら目的であるVIPルームへと向かっていた

(.....しかし、共闘はVIPルーム前までの話だ.....)

絶対あの爺さんとは戦いたくないんだがなあ.....)

ファニーズの一部隊を率いる隊長格の男の思考を尻目に.....

「隊長、目的のVIPルームです」

その時はすぐに来た

(・・・・・・・・・・なんにも思いつかなかったなあ・・・・・・・・・・すであの爺さん攻撃体制に入ってて一石二鳥で俺らを捕らえることを考えているみたいだし・・・・・・・・・・こりゃガチでまずいなあ)

隊長格の男は刻一刻と迫る共闘終了合図に起こる最悪の戦闘を避ける策を考えつくことが出来なかった・・・・・・・・・・すでに老兵・・・・・・・・・・アラマキは共闘体制から切り替える用意をしており一触即発の空気が流れていた・・・・・・・・・・

そんな空気の中・・・・・・・・・・

「うん？・・・・・・・・・・あ、コレひよつとして対終末戦争シエルターの一種すかコレ？」

ファニーズと共に戦っていたレギオーナーリウスの隊員がその一言をその場に響き渡らせた

尚、その一員はVIPルームの入り口の巨大な扉の前に立っていた

「・・・・・・・・・・なんだって？」

「・・・・・・・・・・なんじゃと？」

その言葉にファニーズの一部とアラマキは疑問の声を出した

その疑問を答えるようにレギオーナーリウスの隊員が口に出した

「ああ、これ間違いないく対終末戦争用のシエルターっす、しかも下手な爆弾じゃ全く効果ないヤツすね・・・・・・・・・・まあ今丁度いいもの(レーザードリル)があるので破れなくはないですけど」

その一言にファニーズの隊長格の男は頭に電撃が走るが如くの衝撃を受けた・・・・・・・・・・

そして

「……………なあ爺さん？悪いが追加の取引しないか？」

「……………聞こう」

「ありがたい……………爺さん薄々気付いているとは思いますが俺達は爺さんと同じようにVIPルームに用事があるんだ……………幸運なことにより目的のものは違うみたいだが……………そして、その目的を達成するためにはまずその隊員の話通りにクツソ頑丈な扉を開けなくちゃならない……………ここまで言えば分かるか？」

「……………」

「……………無論共闘の礼はするし、あの人々をケダモノにする薬かなんかに関しては全てアンタに任せる……………そのかわりこれが終わった後は今回は俺たちを見逃してもらえるか？」

その言葉にアラマキの回答は……………

「……………了承した」

渋い顔をしながら了承した

「……………うっし!!工兵すぐに扉破る準備をしろ!!その他はすぐにバリケードを作れ!!爺さんもうちの工兵どもの作業の援護を頼む!!」

奇妙な共闘はまだまだ続くことが確定した瞬間であった……………

その後悪魔の……………

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロ

「!!そつちに恐竜ぽい転がるヤツが行ったぞ!!P.A.C.S!」

「了解!」

ガシッ

ゴガアツ!?

「トドメをさせ!」

ズガアツン!!ズガアツン!!

準備は敵味方関係なくやるものだよね……
尚、アカン行動の前準備の場合がある模様（白目

どうしてこうなったんだろう……

彼女達は己の運命とそれを定めた者達を呪った……

自分の立場？自分の存在価値？自分の役割？

そんなものをかなぐり捨ててまで呪った……

なぜなら……

「う〜ん……色々スペックやらデータを削って作ってみたが……やっぱ戦う上で無視できない部分が多いな……その部分をつかれたら結構簡単にやられる可能性が否定できないなこりゃ……」

目の前に『絶望』がいるのだから

時は少し遡る

I O P社 特殊個人室

「暇だ」

その一言がその部屋の中で寂しく響いた

（……なんとか今出来る対策を作るのがひと段落ついたが……俺の立場上仕方ないとは言え勝手に外に出るとえらいことになるからな……）

その万能者の思い通りに現状、万能者には立て込んだ仕事が終わったのだが、かなり特殊な立場のために許可がないとどこへも行けないためにこのI O P社の施設にとどまることしかできないのであった

（だからとはいえこの暇なのはどうしようにも耐え難いな……）

万能者はそう思いふけていた時だった……とあることを

・・・・・・・・地獄の道は善意ではなく悪意で作られていたことを
付け加えておく

鉄血最重要大規模拠点 ???

最重要プログラム・システム開発完了・・・・・・・・
指揮機体『戦乙女』設計完了・・・・・・・・
主力装甲攻撃機動兵器『Behemah』設計完了
多目的自立思考大型蜂型機動航空兵器『雀蜂』設計完了
『Raincoat』計画最終段階ニ移行可能ト判断・・・・・・・・

そこでは何かの計画が進行し、最終段階に入っていた・・・・・・・・

『戦乙女』『Behemah』『雀蜂』量産開始
『Raincoat』計画最終段階作戦『Holy Forest』ヲ
実行準備開始スル
ソレニ伴イ、A・D・W・Sノ強化モ実行ヲ開始

何が起こるか分からないものの、少なくともこれだけは言え
た・・・・・・・・

新たな混沌の火種が火となり炎となり始めているのだと・・・・・・・・

断片的な記録を繋げて見るって結構没入感があるよね……コメディでもホラーでも

case「見えない悪夢」

??◆月——日 MCR 特殊試験演習記録

演習開始20分前の戦術人形の少女達の会話

「しかし突然、電脳空間での演習って何があっただろうね」

「ええ、日頃訓練はしている身ですがこのようなことは例がありませんね……」

「まあ起きたものはしょうがないでしょ？こんなチャチャと受けて済ませればいい話でしょ？」

「……前にこの演習とは別のこの電脳空間の演習受けたけど……リアルに近くて死にはしないとはいえ疑似的な死を経験するはめになったよ……死なないとはいえ、出来れば死にたくないなあ」

「まあ相手の方がかなりのハンデをしてるみたいだし、運が悪くて何かがやられるぐらいだし大丈夫でしょ!!!」

この演習の際、戦術人形達には戦う敵の相手の情報をほとんど公開していない

公開している情報は自軍の戦力と敵の戦力が少数であることのみであった……

IOP社戦術人形（高練度人形とダミー人形を含む）一個小隊（50人）＋正規軍戦車『Typhon』3両＋戦闘ヘリ2機vs敵戦力少数

敵の全滅のみが勝敗条件として設定された

尚戦闘ヘリに関しては演習開始から15分後に到着する形で想定

この情報開示に関しては可能な限り、不透明でリアルな戦闘を再現する為に行われた

？」

「しかも狙いがかなり正確……どこかに斥候かドローンがある
と考えるべきね」

ドガアーーーン!!

「でも戦闘ヘリの援軍が来るまでのもう少し辛抱……それまで戦
車と建物で盾にしつつ耐え切れば反撃のチャンスが来るはず」

ズドオーーーン!!

「……」

「……」

敵が戦術人形側の戦闘ヘリ到着2分前に再び攻撃を開始、今度は戦
術人形達が攻撃を警戒して集結しているところから700m以内に
近づいて迫撃砲での爆撃を実行

それによりダミー11体、戦術人形2体が撃破された

さらにその混乱を利用し、近づき戦術人形側の集団から400m地
点にて100m無反動砲で戦車を撃破

それにより正規軍戦車隊はヘリの援軍の前に全滅
撃破後、敵はすぐさま隠れるように後退

―――
演習開始から17分後の戦術人形達の様子

ズガアツン!

ギユイイインンンンンツツ……

バジュツ バジュツ バジュツ バジュツ

ドオーーーン ドオーーーン ドオーーーン ドオーーーン

ズドオーーーン!!

「……ねえ?気のせいじゃないならこれ多分ヘリが落ちた音だ
よね?」

「……それを言わないで……なんなのホント……」

敵って一体何者なのよ……」

「……!!?」へりから敵を一体確認したと報告が来ました!!地点は???地区北側!!どうやら敵は超大型ライフルに迫撃砲のようなものを装備している模様!!」

「!!!!」

「すぐさま行くよ!!これ以上敵に好き勝手させてたまるものか!!」

戦術人形側の戦闘ヘリが到着後すぐに二機編成で周辺の偵察を開始

敵の潜伏していると思われる場所に近づいた瞬間に敵が30mm機関砲2A42改で戦闘ヘリを狙撃、コックピット直撃により撃墜しかし、撃破した戦闘ヘリが回転しながら墜落する際にロケットを撒き散らすというトラブルが発生

それにより偶然敵が潜伏していた建物にロケット弾が直撃、無傷だったものの姿を晒すことになり、もう一機の戦闘ヘリがそれを捕捉し戦術人形達に到達、そこで戦術人形達は敵の正体を断片的に知ることとなった

その後、戦闘ヘリが敵に攻撃を開始するも、交戦開始から3分後、30mm機関砲2A42改による狙撃により撃墜される

しかし、それにより戦術人形達の潜伏地点への到着の時間が稼げることとなった

――― 演習開始から25分後

ズドドドドドドドドドドド

ドガアアアアア!! ドガアアアア!! ドガアアアア!!

ガアツ!! ヒギイツ ゴガアツ

「くそお!!どこにいるのよ!!」

「また仲間がやられた……それもバラバラに……」

「もう嫌だあ!!おうちかえる!!」

「馬鹿!!今ここから出たら居場所がバレル(ドガアアアアア)

戦術人形達はその報告を受けて二手に分かれて敵の潜伏地点に向かい敵に攻撃を加える作戦を考案し実行を開始

しかし、敵は戦闘ヘリを撃破後すぐに偵察ドローンを2機発進させて待ち伏せの準備に入った

そして、敵側には運が良く、戦術人形側にとっては運が悪い結果をもたらすこととなった……

ドローンがその戦術人形達の二手を敵から見ても600m地点、500m地点それぞれ反対方向にいるのを両方とも発見したのだ

すぐさま敵は迎撃を開始、片方には迫撃砲の爆撃、もう片方には30mm機関砲2A42改の銃撃と高出力光学兵器の薙ぎ払いで迎えることとなった

その結果、戦術人形達は全滅

戦闘ヘリの報告は戦術人形達の敗北と言う結果につながってしまった形となってしまった

まとめ

IOP社戦術人形一個小队(50人)

正規軍戦車『Typhon』3両

戦闘ヘリ2機

全滅

敵……「試験者 狙撃兵装」

損傷なし

この演習の結果はIOP社の研究員達と同席していたG&K指揮官数人の顔を真っ青にさせることとなった

ただ、後日この記録を確認した万能者はこう話した

「やっぱり、どんなに強くても運が悪いと結構致命的なトラブルって

起こるもんなんだな……まあ臨機応変に対応できたからよしとするか……」

「……いくら技術が進んでも、強くてもこういったことが起こるといふことなのであろうか」

尚、この結果と敵の正体の詳細は参加した戦術人形達にも伝えられ、ある者はプライドを砕かれ、ある者はトラウマを抱えることとなり、ある者は納得し、ある者はこの結果を糧にすることになったことを付け加えておく

いつの間にか逃げ道がなくなった時とか追い詰められた時などに人って凄まじく必死になるよね……………
(コラボ回2)

違法カジノ VIPルーム

ギリギリギリギリ ガチャ

「開いた!」

「よし、目的の物を回収だ!!」

ファニーズ達は異常事態やトラブルに遭いつつもようやく己らに任された任務の目的を果たすところに来ていた

「例のブツの書類を確認!!……………完了!!間違はなく目的の物です!」

「……………よかった、これで俺らの任務は完了だな」

「あとは脱出ですな」

「……………それに関してだな……………ホントどうしようツレ」

隊長格の男はそのことに関して遠い目で考えるしかなかった

実は突入から9分後頃……………

「オイ!?俺たちが入ってきた穴から出て行こうとしてるぞ!」

「ええい、ショットガンは……………他を撃ってるから間に合わん!!やむえんグレネード2人!!穴に向かってるヤツを吹っ飛ばせ!!」

「了解!!」

ポンツ! ポンツ!

ドガアーン!!ドガアーン!!

ミシツ……………ガラガラガツシャーアーン!!

「……………あつ……………」

回想終了

「……まさかグレネードの弾道が絶妙に逸れて穴の隣の柱と壁に直撃してのそれが崩落してこれまた絶妙に塞がるとはな……」
「……ま、まああの悪魔とケダモノ化した皆様方が地下水道内にうろろうしなくなつたからいいじゃないか？うん」

「……そのおかげであの爺さんと会つたときに相当頭を使わなきゃいけなくなつたけどな……」

「一応あの瓦礫どければ脱出できそうっすけど、やったらやつたで崩落で全員仲良く生き埋めの可能性が高いっすね……」

初手の状態から彼らは逃げ道がなくなつた状態だつたのだ

「……なんとか爺さんに逃してもらえる契約をしてもらつたからあとはホントに撤退ルートを確保だけだな……それが一番難題だな」

「一応俺らの極秘任務でここに来ましたからね……装備の関係上で流石に地上に出るわけいかなですし、何より今あの爺さんが来てるってことは地上の方にその味方がいるってことだから迷惑かかりますからね……本来立場的に敵ですからね、俺ら」

「……なんとか地下で撤退するルートで何かないか？」

「……あの……」

その隊長格の男の言葉に隊員の一人が返答した

「……あるにはあるんです……」

「「なに？」」

「マジか？それはどこだ」

そしてそこから口に出される隊員の言葉は……

「……地下闘技場です……悪魔とケダモノ化した人々の巣窟と思われるその場所にある脱出ルートに出来そうなルートがあるんです……」

ファニーズとレギオナーリウス全員を真顔にするのには十分な威力のある言葉だつた

「……とりあえず爺さんのところに行こうか」

隊長格の男のその言葉は何処か物悲しかった……………

同じ頃……………

違法カジノ 地下闘技場

そこでは理性を失い獣と化した人々や、恐竜に似た姿をした悪魔、人型でありながら異形の姿をもつ悪魔などがあちらこちらで本能剥き出しの獣と同じような行動をしており、世紀末と言っても過言ではないほどの地獄絵図があった

そんな地獄絵図の真ん中……………闘技場の真ん中にはそれを象徴するかのよう奇妙な物体が建てられていた

それは門の形をしており、大きさもそれなりに大きく、その門に使われている素材は石材に生き物の血肉、人間と悪魔と思われる存在の骨を組み合わせて作り出されたある一種の人には芸術品と思えるような造形をしていた

しかし、驚くべきところはそこではなかった……………

その門から次々と悪魔が出てきているのだ、それも徐々にされど確実に数を増やしながら……………

一体何がいつここでこの門を作り出し、悪魔を呼び寄せているのは定かではないがこのまま放置すれば街に悪魔が溢れる大惨事を引き起こしかねない事態であることは間違いなかった

その時……………

ズドン ズドン ズドン ズドン

その地下闘技場で奇妙な物体が追加されたのだ……………それも『4つ』も突然に……………

それは大きさが3m近くもある機械的なカプセルのようなものだった……………

そして奇妙なことにそれなりに大きな音を出して『落下』したにも

かかわらず天井に穴が空いていないのだ

だが、そんなことは悪魔と獣達には些細なことであつた……そのカプセルのようなものに興味を持った悪魔、獣達は近づいていった……

ガゴオン！ ガゴオン！ ガゴオン！ ガゴオン！

突然、四つ同時にカプセルの扉がけたましい音とともに開いた

そして、そこから4体の人型のナニカが出てきたのだ……

それは、フード付きのマントで姿形を隠しているもののそれぞれが別々に特徴的な武器を持っていた……

目標ポイント二到着ヲ確認……

周囲ヲ確認……「demon」ト若干同ジ反応ノ存在、民間人……

否、薬品ニヨル改造サレタト思ワレル存在ヲ複数確認……

確認シタ存在全テガ我々ニ興味的ナ反応ヲ示シテイル模様……

悪魔と獣達は一斉に襲いかかった

まるでオモチャを目の前にして我慢が出来なくなった子供のように……

民間人対象ヲ敵対象ニ変更……

コレヨリ実践戦闘ヲ開始スル

それを引き金に違法カジノでの今宵最後のラストダンスが始まった

同じ日・・・・・・・・

G & K社 本社 社長室

「・・・・・・・・今だな」

G & K社社長であるクルーガーは椅子に座りながらそう言った

「・・・・・・・・今ですね」

それに対面していたG & K社上級代行官ヘリアントスもそれを肯定した

「そもそも今しかないな・・・・・・・・鉄血の戦力の状態、防衛ラインの状況、傘ウイルスワクチン・・・・・・・・この状況が例え罨だとしても今を逃せば次にいつ攻撃のチャンスが回ってくるのか分からん・・・・・・・・」

それは鉄血対する攻撃計画の話し合いであった

「・・・・・・・・何より報告にあつた白い勢力、ファニーズ、さらに万能者に関する技術を持っている正体不明勢力、その他勢力・・・・・・・・これらに対応する為に鉄血の問題を終わらせなければならぬ・・・・・・・・ヘリアントス、会議の準備を頼む」

「分かりました」

その後行われた会議で鉄血の本拠地・・・・・・・・その近くである防衛ラインを形成している重要拠点の攻略作戦が行われることが決まった・・・・・・・・

数日後・・・・・・・・

「え？鉄血への大規模攻撃作戦？」

「ええ、それも鉄血との戦いに終止符の一步が踏み出せるかもしれない戦いのね・・・・・・・・そのためか正規軍も主力部隊の一部を派遣するつて聞いたわ・・・・・・・・後今回あなたは後方で待機していて欲しいってお願いが届いたわよ」

万能者はペルシカからその話を聞いていた

「マジか・・・・・・・・いや、元々そつちの問題だったから俺があまり関わらない方がいいのは理解しているが・・・・・・・・いや、いいか・・・・・・・・」

そもそもこっちで進めている戦術人形強化プランの開発どころかそもそも設計がその作戦の日までに間に合わないみたいだしな………」

「……次に一体何を作っているのかは気になるところだけでも、とにかく今回は後方で待機を頼むわ……あなたが正規軍にやったことを考えるとあまりいい感情を抱かれてないからね………」

「……了解、だが、本当にやばい事態が起きたら俺が動くことを考えておいてくれよ……念のためにいくつのプランの設計が完成したヤツから開発を急いでみる、あとこれ今開発してるプランのやつの資料だ」

「分かった、それは後で読むわ……もし本当にその時が来てしまったのなら……お願いね」

「了解だ」

何はともあれ、年が終わり新たな年が変わる時が近づく中で大規模な作戦が行われることとなったのだ………

その過程はどうなるか、その結果はどう転ぶのかはまだ誰も知らない………

昔の友達とか知り合いをふと思い出して、今何している
るだろって思う時があるよね

「はあ．．．．．????????」

どことも知れない空間で、その存在はテーブルにもたれかかるよう
に項垂れていた

「．．．．．なんなのあの存在、この間もせつかく進行を合
わせてやった遊戯を何も知らずに的確に潰すってなんなの？馬鹿な
の？阿呆なの？」

どうやらある存在がその存在の目的と行動を阻害又は阻止してい
ることに愚痴っているようだった

「おまけに調べても調べてもヒットしないってどうゆうことな
の．．．．．このままじゃ遊戯が出来ないし．．．．．仕方
ない、邪魔だから」

潰すか

．．．．．どうやら近い将来ろくでもないことが起きるこ
とが確定したようである

「まあそのために色々と用意をしないとねえ．．．．．面白く愉快
にするのもいいかな？でもあの存在の部分だけは真剣に確実にやら
ないとね」

廃都????? 重度汚染地帯

そこは崩壊液汚染が酷く、草木も生えない不毛の地であっ
た．．．．．はずだった

だが、そこにはなんの間違いか「白い」花畑があたり一面に存在し

ており、崩壊液汚染がされているとは思えないような奇妙な場所であつた……

そんな地で……

「……ミステラレ イキル コト ヲ アキラメタ モノ
タチ カ」

「……」

蛮族戦士がフードを被つた少女達の前に立っていた

少女達の様子はあつちこつちに骨が折れているわかるほどの打撲痕などの怪我があり、生きていながら無力化されているようで、そのことからすでに戦闘が終わっているとうかがえた

「ナニヤラ ショクブツ ノ カオリ ガ シテ キテミレバ
…… コウモ アワレナ モノ ガ イタ トハナ」
「……」

蛮族戦士の言葉を肯定するかのように少女達は虚ろな目で蛮族戦士を見ていた……

蛮族戦士は気になったことを口に出した

「……キコウ ナゼ オマエ タチ ハ ミズカラ
イノチ ヲ タトウ ト スル」

その言葉に少女達は答えた

「この苦しみから楽になるため……そしてお父様のため……」
「もう二度と……捨てられたくない」

それは悲痛な回答だった……

少女達は『父親』に捨てられたにも関わらず、未だ尚その『父親』に縋り付こうとしているのだ……全ては『父親』に愛された
いが為だけに……

その言葉に蛮族戦士は……

「ナルホド …… ナラバ ワレ ハ ソノ オトウ
サマ トヤラ ヲ コロソウ」

そのことを聞いていながらその少女達が愛する存在を殺す宣言というドストレートな外道発言を笑いながら言った

※オイ!?

その言葉に少女達は目を見開いた、いや驚愕したとも言つてよかつた………

そして、

「さ、させない………」

「お父様を殺させない………殺させはしない」

「………あなたを止める、殺してでも止める」

「私の………私達のお父様を………コロス?………させない」

「コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス」

先程までの無気力な雰囲気、生気のなさは何処へやら………少女達からは殺意が溢れ、すでに無力化されているにも関わらず蛮族戦士を這いずってまで止めようとしていた

そのことに蛮族戦士は笑った

「ナラバ ワレ ヲ トメ ニ クル ガ イイ チョウセン ヲ

イツデモ ウケヨウ ……ソレマデ イキテ

オノレ ヲ キタエル ガ イイ」

その言葉を最後に蛮族戦士はこの地を去った………

後日、稀にあつちこつちの戦場で白いフードを被った少女らしき存在が見かけるようになるのだが………また別の話である

とりあえず、まずは説明が重要なのは当たり前だよね？（大規模コラボ

これより本作戦『鉄血重要拠点攻撃及び防衛ライン破壊作戦』についての概要を説明する

この作戦はその名の通り鉄血の重要拠点及び防衛ラインを破壊することが目的だ

それも鉄血の本拠地の近くである防衛ラインを守る拠点をだ

現在鉄血は度重なる敗戦と戦力の消耗によって防衛ラインを下げっており、今回攻撃する拠点が実質的に鉄血の最終防衛ラインと言える状態となっているというわけだ

無論、防衛ラインというだけあって固定式と自走式にしたと思われるジュピター砲の対地対空砲台群、地雷原、大量の戦力と防衛に事欠かない要素が満載だ……更に言えば不確かな情報ではあるが、新型と思われる鉄血戦術人形の確認されたとの報告が入っている

だが、我々は今日までにワクチンによる傘ウィルスの克服や傘がワクチンを利用した無力化方法などを手に入れたことからこの作戦の実行が可能と判断し、その上で万全を喫するために今回の君達を協力を要請した上で我々は正規軍に協力を仰いだ

その結果主力部隊の一部と大陸横断鉄道の列車の派遣の許可してくれた

それぐらいこの作戦は正規軍からも重要視されているというわけだ……

この作戦が成功した場合、鉄血の本拠地の防衛は丸裸も同然の状態となり、鉄血との戦いを終わらせるのも時間の問題となるであろう

それは我々人類にとつての問題を一つ終わらせることにも繋がる

無論言うまでもないと思うが、攻撃目標が敵の重要拠点であること、正体不明勢力のことを考えると異常事態が起これないとは限らないと言うことは注意してもらいたい……

そのため報酬が高額であるのは危険手当も含めてのものだ……

そのことを踏まえて作戦に挑んでもらいたい
では健闘を祈る!!

正規軍大陸横断鉄道 車両内格納庫

「これが例の新型ですか……………」

「新型っていつでも……………中身は別物だが側は大体いつもの機体のまんまだな」

「まあこれで多少の対応策ができたってことだろうな」

彼らの視線の先には巨大な鉄の巨人が立っていた

それは「Assault Atillery」の強化外骨格兵器「AA-2アレス」と呼ばれる機体にそっくりであり、唯一の違いといえば両腕に一体する形でつけられている機関砲の下部に片刃の大剣がつけられていることぐらいだった

「しかし、こんな新型を3機も寄越すってことはこの作戦が改めて重要な物であるってことだな」

「……………それだけ俺らがかなり頻拍してる状態ってことでもあるがな」

「……………ああ……………」

彼らは思い返した……………

今までの正規軍に起きた事件の数々を……………

上層部の会議の混沌具合の噂を……………

正規軍の会計担当の恐怖の表情を……………

正規軍の戦術・戦略家の嘆き・叫びを……………

正規軍の戦力の激減ぶりを……………

彼らは思い返したのである……………

「……………俺らマジで頑張らないとな……………主に自分達の命とかの為に」

「うん」

彼ら『AA-2改』のパイロット達は己の立場の重要さを感じるし

かなかった……………

????
格納庫

「…………はあ今年も終わりとクリスマスが近いっていつてるのにデツカイ作戦が来るとはなあ……………」

「仕方ねえよ…………これほったからしたら、後々例の白い奴らにひでえことしでかされるからなあ」

「……………だからといって鉄血の勢力圏内に作るかね、その隠し基地を」

「…………あっちにも男の子のロマンが分かるやつでもいるんかな？」
「そこでは何やら雑談がされており、ちよつと愚痴ぽくなつていた……………」

「しかし、カオナシ共もよく分かったなあ……………例の白い奴らのステルス基地のことを」

「なんでも根気よく根の根まで調べた結果見つけたらしい……………アイツらの頑張りに答えないとな」

「よし、オマエらーブリーディングを始めるぞ！」
「了解!!」

よし、全員集まったな？ブリーディングを始める！

俺たちの目標は白い奴らの基地の破壊だ!!

それも結構な戦力を蓄えてやがる上で隠れている基地をな!!

どうやら連中はそう遠くない日に行われる正規軍とG&Kなどの勢力鉄血本拠地の攻撃に漁夫の利をするつもりのようなようだ

無論、それをやられたらろくな事が起きないのは目に見えているから今回の作戦が立てられた

今回のことを聞いた大将も色々思うところがあるのか、H・A・G・SとS・A・C・Sの使用許可をしてくれたからな

それだけこの作戦は重要ってことだ

肝心の作戦内容だが……………内容は簡単だ

．．．．．もはやどこにどう終着するかは誰にも分からない新たな
狂乱混沌の宴が始まろうとしていた．．．．．

物事の段取りは重要……でも一度見てからじゃないと段取りが立てられない場合があるので注意が必要だよね（大規模コラボ）

鉄血最重要防衛ライン 荒野地帯

ババババババババババババババババババババババ

ズドオーローン!! ズドオーローン!! ズドオーローン!!

ギヤアアアアアアア

ニヤアアアアアンン!?

四方八方から放たれた実弾とレーザーの銃弾はまるで嵐であるかのように演出し、

放たれた大砲の砲弾が着弾したのち近くいた人や物を爆発に巻き込んでその役目を果たし、

それらによつてもものを言わぬ骸と化したもの、亡骸になれずその痛みに呻き声しかあげれずに這うもの……どこを見ても地面にはそれらが転がっていた

……そこはまさに戦場であつた

「クソ、鉄血と舐めてかかったわけではないが……やっぱりジュピター砲の砲撃による爆撃が洒落にならない被害を出してるな」

その戦場の中で正規軍の戦術人形部隊の指揮者……AA―2改のパイロットは援護射撃をしつつも、その膠着状態に歯痒い思いをしていた

（ヘリとかが空からいつても、戦術人形や車両で地上から行つても各地の置かれているされる大量のジュピター砲台陣地が邪魔してくる……いつそのことこの機体の性能を活かして突っ込めば現状の打破は可能かもしれないが……失敗する可能性が高いのが否定できない……どうすればいいんだ）

そう考えた末に……

『……こちらタロス3、現在鉄血の砲台陣地で部隊に被害が増大……誰か小回りがきいて空飛べるやつがいたら援護を頼む!!どこにあるかの偵察の支援だけでもいい……誰か頼む!!』

戦場の味方である誰かを頼る方法にでたのであった……

戦場から40km離れた地点にて……

その大地を滑るように滑空している4体の鋼鉄の巨人達がい
た……

「わああ……ここからでも砲撃とかの爆発音が聞こえら……」

「おっぱじまってるな……結構激戦のようだな」

「まあ視線がそっちに集中してるんだから好都合なんだけどな……とつとと目的の基地を攻撃するぞ」

「目標の基地まで残り3kmだ、ここから二手に分かれて二方向から攻撃するぞ、すでにS.A.C.S部隊が基地の周りにある目がある程度潰すのに成功してるからチャンスは今しかないぞ」

「了解」

鋼鉄の巨人達は己らの任務を果たすために目的の場所へ進んでいった……

????

??????????

実践試験データ解析完了……

データアップロード完了……

データ反映機体開発完了……

ピッピッ……

鉄血勢力圏内にて大規模な戦闘ヲ確認……

新機体ノ実践試験ニ最適ト判断……

直チニ出撃ヲ開始……

『Soldier』『knight』『hero』

出撃セヨ

了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解
了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解
了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解

それぞれの場所で様々な動きがあれど……その動きは共通
して更なる混沌を呼び出そうとしていた……

敵の起死回生の一手というのは大体ロクなものじゃない場合がホント多いよね（大規模コラボ）

鉄血最重要防衛ライン 荒野地帯

「こちらスカウト16、敵攻勢第一防衛ラインを突破確認、第一第二第四第六砲台陣地壊滅確認、残りの第三第五砲台陣地は健在なもの押されている模様……第二防衛ライン損耗率8%……想定より8分早く損耗、計画の調整を推奨」

戦場からわずかながら離れているその場所で鉄血の戦術人形と思われる存在が前線の状態を確認し、通信を行っていた……

「……第二防衛ラインの戦闘激化を確認、戦闘に巻き込まれる可能性があると判断……撤退の許可を」

『了解、スカウト16その場からの撤退を許可します……なお計画の調整の為、緊急プラン『協力者』の実行を決定したことも報告します……それに応じて防衛ラインの一部の後退及び一部を攻勢に回すことも決定しました』

「了解」

そう言うとその存在はまるでそこに最初からいなかったかのようにそこから去っていった……

余談ではあるが、その存在には小さくではあるもののエンブレムが貼られていた

鉄血のシンボルと『RC』の文字で……

「こちらスカウト11、3km離れた上空にてリバイバーを確認、離れながら監視を開始」

「こちらスカウト18、第三砲台陣地にて要注意存在『ギルヴァ』『ブレイク』を確認、見つかる危険があると判断し、撤退を開始する」

「こちらスカウト7、山岳地帯にて敵ガルムの改造機101機が防衛中隊に向かっているのを確認、監視を開始」

「こちらスカウト20、新型と思われるロブスター型の機動兵器を確認、正規軍と共に行動している模様、監視を開始」

攻勢がかけられている戦場の各地にて『RC』のエンブレムの鉄血戦術人形達は敵に一切気付かれずに敵を監視し続ける……
まるで何かを待っているかの様に……

戦場から43km離れた地点にて

そこは元々は破棄された小さな町が存在していたのだが……

ドガアーーン!! ドガアーーン!!

ズドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

ズドオン!!ズドオン!!ズドオン!

ズドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

ズバア!!ズバア!!ドスッ!

今現在、防衛ラインほどではないものでも戦闘が行われていた

「ガン〇ムモドキ3機とついでにその近くにいた戦術人形も複数巻き添いで撃破!!」

「こちらS・A・C・S隊!飛行兵器全ての撃破完了!飛ぶ前でもかった……あとアレをガンダ〇っていったやつ、後で説教な」

「大将格の白い少女を発見!ロケット砲で吹っ飛ばせ!」

ドガアーーン!!

「よし吹っ飛んだぞ!一気に一人残らず殲滅せよ!」

既に勝敗は決まっております、廃村を拠点としていた『白い』勢力が壊滅状態に陥っており、襲撃側である鋼鉄の巨人4機と空を自由に飛ぶ鋼鉄の人型の鎧数機が圧勝にも等しい戦果を挙げていた

そして数分後……『白い』勢力は大した反撃も出来ずに全滅した

「……やっぱり結構な戦力を蓄えてたな」

「例の新型変形飛行兵器がアレほどいて、あのガン……デカイロボが大量にあったってことは鉄血との最終決戦で漁夫の利する気満々だったってことですね」

「しかもコイツら『アレ』なんだろう？……一体どつからこれだけの『材料』を用意してやがったんだが……」

「つべこべ言うな……まだ攻撃する箇所が後一箇所あるからな、すでにS・A・C・Sの別働隊が偵察に行ってる……各機弾薬と機体の状態の確認が終わったらすぐに向かうぞ」

休む暇もなく彼らの行動は続く……

「ところであつちの戦闘の状況は？」

「絶賛大騒ぎの状態で、こつちのことはまだ気づかれてないようです」

「よかった……こういうのはとつと終わらせて撤退するに限る」

「俺これが終わったr」

「おい、バカやめろ」

若干のフラグを立てながら……

鉄血最重要防衛ライン ???

それは突然だった

ドオン！ ガゴオン！ ガゴオン！ ガゴオン！ ガゴオン！

ナニカが人知れず戦場の何処かに現れたのだ……

その現れたナニカはかなり大きめの鉄製のトランクとオリか棺桶を連想させる形状をした格子付きのコンテナの形をしており、コンテナに至っては複数存在していた……

そして、それらは全て、なにか不気味な雰囲気を出していた……

ひとまず言えることは……

戦場で更なる何かが起きようとしているのは間違いないということであつた

計画とか作戦とかつてここぞつて時に思い通りにいかないものだよね……。(大規模コラボ

戦場から70kmほど離れた地点 森林地帯

(oh……)

S・A・C・Sのパイロットの二人はその状況と自分の行動がパンドラの箱を開けてしまった感に嘆いていた……なぜなら……

視線の先で白い戦術人形とその集団の大將格と思われる黒い少女と白い少女が……

バギヤ ゴギヤ グシャ バギバギバキバギ バギヤツ!!
ズドオン!! ズドオン!!

ドスツ ドスツ グシャ
バチバチバチバチバチ

「い、いややめて(バチイツ!!)アアアアアアアアアああ……」
フード付きマントの集団により蹂躪されていたのだから

それも一方的に……
(……というか隊長こつちの方が小つて言つてたけどどう見てもこつちの方が明らかに白い奴らの数が多いのだが?過去形だけど……)

(……多分大の方からこつちに移動してたか、それかまたは氷山の一角みたいに地下とかにうまく隠れていて本当はこつちが規模的に大だったとか……まあそれはともかく……)

(これはアカンな)(真顔

彼らは理解した……

その集団が非常に危険な存在であることを……

現状、自分達ではその集団をどうすることもできないことを……

むしろ、部隊の全滅の危機的状況であることを……
彼らは理解したのである

(……とりあえずバレないうちにここを離れて味方に伝えな
いとな……通信は傍受される可能性があるから直だ)
(……了解です)

その言葉通りにすぐにS・A・C・S二機はフード付きマントの
集団に気付かれないように離れていった

目標拠点ノ制圧及ビ敵殲滅、上位モデル戦術人形ノ鹵獲完了……
……拠点内データ解析完了
……22km離レタ地点ニ同勢力ノ中規模拠点ノ存在ヲ確
認……

実践試験予定ノ戦場ニ向カウ際ノ第二中継拠点トシテ最適ト判
断……

25分後ニ到着予定ノ部隊ト合流後、ソノ拠点ノ攻撃ヲ開始スル

了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解
了解 了解 了解 了解 了解

……一部を除き誰も知らないところで戦場に更なる新た
な混沌が迫りつつあった

鉄血防衛ライン 荒野地帯

鉄血の防御の要であった砲台陣地群は壊滅状態となり、第一防衛ラ
インの部隊も軒並み壊滅状態となったため戦況は攻撃側である正規
軍とG&K社に好転……

「ヒヤッハー!!戦いじゃー!!」

「ドーモ、正規軍Ⅱサン、グリフィンⅡサン コロスベシ慈悲ハ無イ」

「エリちゃんを泣かすやつは明日を生きる資格はねえ!!」

「リバイバーは何処じゃあああ!!」

「・・・・・・・・・・したかと思いきや全身装甲姿の集団とスーツに黒手袋と換気孔付きマスクを着た中肉中背の同じ顔をした男達が正規軍とG & K社の混合部隊に襲いかかってきたのだ

それも音沙汰もなく突然に・・・・・・・・・・

(メタを言うならガン○ムUCのジェス○をパワードスーツにしたよ
うなものを着てる一万の集団と「逃走○」のハンター(コロナ対策仕
様)のような存在複数が襲ってきているのを想像してもらおうとわかり
やすい)

「オラオラ!!鉛弾とビームのプレゼントだ!」

「ついでにグレネードとロケット弾のサービスだ!」

ババババババババババババババババババババババババ

ドガアーーン!!ドガアーーン!ドガアーーン!!

「なんなのアイツら!?!なんで私達を襲ってくるの!?!」

「しかも出鱈目に強い!?!どうすればいいの!?!」

パワードスーツの集団は銃器も実弾からビームまで様々で、更には
バックパックに一对のロボットアームに搭載された大型の盾やマシ
ンガン、グレネードランチャー、ロケットランチャーなどバリエー
ションが豊富に個別でつけられた武装を、正規軍とG & Kの混合部隊
に撃ち込んでいき

「?!後ろ!!」

「え?(ガシツ　バチバチバチバチバチバチ)　アアアアアアア

アアアアア・・・・・・・・・・」

中肉中背の同じ顔をした男達は目視した者を追跡し、高い脚力を活
かして銃撃戦を巧みに避けていき、目標とした存在を両手を触れて高
い電圧を流して感電死させていった

その犠牲になるものは多く、戦場はまた膠着状態に入ることとなっ
た・・・・・・・・・・

「ところである黒服のスーツの奴らって誰だ?」

「さあ?エリちゃんの味方の味方をしてくれるみたいだしいいだろ

一方IOP本社 作戦室にて

万能者は目の前の存在に恐怖していた．．．．．否、せざる得なかつた

その存在は外見年齢は18歳ほどの少女の姿をしており、髪は黒のセミロングで正面から見て右前髪一部を黄緑色に染めておりヘッドセットを装着し、首元はスカルスカーフを巻いており、リブ生地衣装と左腕にはグリフィンの紋章入りスカーフでペンらしきものを巻き付けていると言う衣装を纏っていた

．．．．．簡単に言うと、見るものの大半が美少女と評価するであろうその少女．．．．．M4A1が万能者の前に笑顔で立っているのだ

だが、万能者は理解していた．．．．．

その少女の笑顔を作る感情の正体を

万能者は見逃さなかつた

笑顔で綺麗に隠されてはいるものの、その目に宿るものを

(目が．．．．．目が笑ってねえ．．．．．)

それは怒りであつた．．．．．それも全てを焼き尽くさんとするほどの熱量の炎を目に宿っていたのだ．．．．．

「万能者さんに頼みがあるんです」

「えっと．．．．．なんだい、M4A1さん？」

万能者は恐怖を押し殺して返答した．．．．．

だが、その頼みは．．．．．

「今すぐ戦場に行つてきてM16姉さんとSOPを連れ戻してきてもらえますか？あ、過程はどんな形でも構いません♪姉さん達を連れ戻して来てくれればいいです」

どストレートにアウト発言だった

無論、万能者もそれに反論すべく解答するが．．．．．

「．．．．．あ、あのねM4A1さん？俺一応今回の作戦中、待機命令が出てるのよ？相当切羽詰まった状態やそれ並みの緊急事態でも無

い限り、戦場に行ったらそりゃ」「じゃあその緊急事態になったら行つてくれますよね?」

「.....え?、あ?.....」ね?」.....うん、そうだな」

「分かりました.....その時が来たら.....」

お願いしますね?

「.....ハイ、ソノトキガキタラ、フタリヲツレテキマス」

言い負かされてその頼みを聞くこととなった.....

その時に、万能者は緊急事態が起こらないことを願う気持ちがより一層強くなったのは言うまでもなかった.....

ちなみに余談ではあるが.....

((一)よし、見なかったことにして仕事に専念しよう))

作戦室でそのやりとりを見ていた者達は皆、見ざる言わざる聞かざるの精神で見ても見ぬふりをしていた.....

それにペルシカも混ざっていたことも付け加えておく.....

とりあえずなんであれ時間は進む……それが良
くも悪くも確実かつ残酷に……（大規模コラ
ボ

鉄血防衛ライン 荒野地帯

ヒューーーーーー………

ドガアーーーーー!! ズドオーーーーー!! ドガアーーーーー!! ド
ガアーーーーー!! ドガアーーーーー!! ズドオーーーーー!!! ドガアーーーーー
!! ズドオーーーーー!! ドガアーーーーー!! ドガアーーーーー!! ズ
ドオーーーーー!! ドガアーーーーー!!

「今の砲撃……大陸横断列車の砲撃か!! ってことは……敵の
防衛戦力が吹っ飛んでる! 今だ! 進めえ!!」

砲台陣地群からの砲撃や防衛部隊の対抗、謎のパワードスーツと黒
服の集団の襲撃などのトラブルがありつつも、それらのを乗り越えて
正規軍とG&Kの混合主力部隊は突き進んでいた……

そして……

『こちらタロス3! トラブルが多発し、被害はあったもののそちらの
協力により鉄血の最終防衛ラインに張り付くことが成功した!! 作戦
は続くし、敵もまだまだ健在だが礼を言わせてもらおう!』

その通信は戦いを次なる舞台、最終防衛ラインへと移ることを意味
していた

戦いは次の段階へと差し掛かっていた……

「こちらスカウト1、敵主力部隊が最終防衛ラインへの到達を確
認……『協力者』と交戦はしているものの正規軍の戦術人形を盾
にしつつ各個撃破、または列車砲の砲撃によって突破して来たと思わ
れる」

「こちらスカウト6、リバイバー移動開始、仲間の所に向かうと思われ
る」

「こちらスカウト17、『ギルヴァ』『ブレイク』により第三砲台陣地の
壊滅を確認……引き続き監視を続ける」

「こちらスカウト15、高練度のグリフィンの戦術人形の部隊を確認、協力者の部隊の撃破した模様、監視を開始する」

「こちらスカウト13、ルーラー配下の部隊を確認……防衛部隊が次々壊滅している模様」

『了解スカウト1・6・13・15・17、まもなく『Holy Forest』の準備が完了する……各員、最重要撃破対象を監視しつつ準備を開始せよ』

「『了解』」

着実に最後の舞台の準備を整えながら……

戦場の片隅にて

そこではとある集団が会話をしながら準備を行っていた

「クソやられた!!リバイバーのやつ例の万能者に多少効くレベルのウイルスを作りやがって!!」

「だったら次はウイルスにやられるセンサー類などを切つとけ!!マニユアルで対応しろ!」

「うへえ……センサー頼りだったことが多かったから戦いながら慣らすしかないなこりゃ」

「今度は近接戦も想定してヒートナイフの使用も視野に入れとけ!同士撃ちは減点だからな!」

「レールガンとレーザーが厄介だ……いざとなったら誰かが壁になって止めるのを想定した方がいいな」

「了解!そんなときは意地でもアイツをやってくれよ!」

「搦め手の対応も頼むぞ!というか逆崩壊液技術を考えてやらんとまづいからな」

「ウイルスで騙されたとはいえ、味方撃ちしてマジですまん!」

「いいいいいよ、そんなことよりリバイバーにリベンジだ!アイツの戦い方は学んだんだ!次はぶっ殺すぞ」

「おう!!ありがとな!」

どうやらその増援が戦場に飛び込む用意をしているようだ

「それについてだが残念ながら本隊から止めが入った」

「何!? どういうことだ?」

「この戦場に鉄血とグリフィン以外にやばそうな潜んでいる奴がいるらしく、やばそうな敵は鉄血から遠ざけるように攪乱に徹しろとのこと……そして混乱したところに再展開しろとのことだ……エリちゃんを守りたいならこの戦術をやった方が効果的って訳だ」

「……分かった、少し頭に血が上ってたようだ……聞いたかお前ら!! リバイバー殺しは一旦中止!! しばらく待機だ!! ……だが時がたてばまたチャンスが来る! それまでの辛抱だ!! そんな時にまたエリちゃんの助けに入るぞ!」

「「オオオオオオオオオオ!!」」

戦場に祈禱者の軍隊、三千の戦力が時を見据えて待機した……目的は鉄血の親玉であるエルダーブレインの助けになる
ただそれだけのために彼らは待つ……

一方 IOP社 作戦室

「……うん? ……ううん?」

万能者は首を傾げていた……

(鉄血が必死に抵抗しているのは分かるんだが……例外とかを省くとなんか明らかに動きが微妙におかしい……のか? どういうことだ?)

作戦室に送られてくる情報を見る限り、大雑把に言えば敵の戦術やトラブルに見舞われながらも突破して作戦を進められていることが分かるのだが、万能者はその事に疑問を抱いていた

(見る限り鉄血はやられる事前提で自軍を動かしているように見えるが……そりやそこやられたら本拠地まであと僅かだから必死になるって分かるんだが……でもなんかこれ)

結果的にこつちを何処かに誘き寄せてるような……?

(でも何処に? どういう理由で? どんな方法であの主力部隊と戦力をやるんだ? 時間稼ぎも含んでいるのか? そもそもそれをやって後に残る戦力を考えると効果的ではない……)

そう思った万能者は……

「……ペルシカさん作戦中にすまんが、少し気になることがあったから調べ物していいか？」

「……いいわよ？でも支障がないようにね」

「……ありがたい」

(思い違いであってほしいが……)

万能者はそう思いながらその場でできる範囲で調べ始めた……

クリスマスって色んな人を狂わせるよね……色んな意味で（遠い目）（番外編）

ズウーーーーー！！！！

その場はその表現の文字が現実に現れるほどに重苦しい空気が流れていた……

そんな状況を作り出した元凶は……

「……とりあえず言おう……ホントにすまん……」
コイツだった

時は少し遡る……

IOP社 本社 12月20日 深夜

「さて毎年恒例の今年のサンタさん決定クジの時間ですよ!!」

「「オオオオオオオオオオオオオオ!!」」

カリーナの言葉に大きな歓声が上がった

IOP社では毎年この時期になるとIOP関係で保護した子供や子供型戦術人形達にプレゼントを送るサンタクロースを決めるクジがあるのだ

無論このクジは子供達に内密にされており、この使われている部屋も防音・対電子仕様という徹底ぶりであった

ちなみに今年のサンタクロース枠に入るとサンタ衣装が貰えるのだが、その衣装はかなり際どいものがあるのだが、IOPの変態技術者達のせいであることを付け加えておく

……10分後

「皆さんクジは貰いましたか?……もらっているようですね!!では早速いきましょ!!クジが当たった人は手をあげてください!

「せーの！」

『今年のサンタさんだーれだ!!』

その言葉とともに群衆の中からいくつかの手が伸びた

「6人上がってますね!では前に!!」

手を上げた6人は群衆の中から前に出てきた

その時だった

ピシッ!!

全員が固まった・・・その選ばれた6人の一人が想定外すぎる存在だったからだ

空気は重苦しくなったのはいうまでもない・・・

そしてその状況を作り出した存在は・・・

「・・・とりあえず言おう・・・ホントにすまん・・・」

万能者であった

『なにやっつてんだあああああ!?!』

防音万全の部屋の中でその叫びは木霊することとなった

12月24日 夜

IOP社 広場

「「「「「・・・」」」」」

そこは異様な雰囲気か漂っていた・・・

あるものは正當なサンタの衣装を着ており、またあるものはサンタの衣装にトナカイのツノをつけたもの、またあるものは青少年にはちよつと見せられないような格好のものなど様々いた

だが、皆表情はどこか真顔であった・・・

それもそのはず、彼女たちの視線の先には・・・

「・・・」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

サンタの着ぐるみのような存在がそこにいたからだ

その存在をそのまま見たならそれはサンタとわかるような姿をしていた……だがその存在からはどことなく近寄り難い何かを放っていた

それもそのはず……そのサンタは非常にデカかった……なぜそんなサンタのデカい着ぐるみがそこに存在するのか？
簡単に言えばこうであった……

「万能者がサンタの格好をする件について」

「……どうする？一応アレ機密の存在だぞ……」

「でも一度決まったことを中止したらえらいことになるだろうし……」

「とりあえず着ぐるみみたいなのを着せて誤魔化せばいいじゃないか？」

「……それが……」

結果

「……万能者の姿を誤魔化すために頑張って着ぐるみを設計して作つたらなんか世紀末覇者みたいな威圧感を放つレベル大ききの着ぐるみができた件について……」 by IOPが誇る変態技術者達

そして、そのサンタの全身着ぐるみ姿の万能者は……
「……何も言うな……」

情けないほど小さな声の言葉を口から発した

彼女達はそのサンタを哀れむ目で見ることしかできなかつた……

余談だが、子供達へのプレゼントは例年通り行われ、トラブルはありつつも無事に成功し、万能者は無言ながらも案外いい働きぶりだったと言うことを付け加えておく

「へいへい、了解……なあ今考えたんだけどよ？その決死隊、確実性を高めるために砲台陣地を壊滅させた奴らも組み込めばいいじゃないか？」

「その時にデカイ働きをしてくれるところがあるから、正直なところ休ませてあげたいが………仕方ない通信で募ってみるか」

10分後………

『……こちらタロス1、鉄血の最終防衛ラインに強力な防衛施設があつて攻めることができない状態に陥っている……そのためその状況を打開する決死隊を編成を考えている……そこで腕に自信があるやつに協力を頼みたい………無論、腕に自信がない奴は参加しないでいいし、無理して来なくてもいい………参加して攻める際は我々の戦術人形を盾にしてもらつて構わない………協力を頼む!!あの防衛施設を攻略すれば基地まであと一歩なんだ!!』

その通信は戦場の正規軍とグリフィンの通信網の全て伝えられた………

鉄血防衛ライン ???

ズウンンン………
ドオオオオンン………

その場所では轟音と振動が響く中でなにやら準備が進められていた………

『『behemoth』『Golem』及び我々RC大隊の準備が完了しました………現在敵は最終防衛ラインに到達、『Hell guard tower』が防衛の要として敵を食い止め、時間稼ぎに成功している模様』

「本拠地からも『Holy Forest』実行実行後すぐに増援を送るとのことです」

「今のところ頑丈に作ったためか通路に崩落はありませんでした！」

了解……『Holy Forest』実行マデ待機セヨ

「了解しました!!」

そういうと鉄血戦術人形「Vespid」と思われる存在3人は自分の持ち場に戻っていった……

自機ノ状態ノ再確認ヲ開始……

機体状況……異常ナシ

各部システム及ビ新規システム……異常ナシ

武装・補助モジュール……異常ナシ

『アイギスの盾』……異常ナシ

システム・装備全テ異常ナシト判断

当機ノ目標再確認……『Holy Forest』実行マデ待

機シ、実行後ニRC大隊ト共ニ出撃シ、敵ニ壊滅的被害ヲ与エルコト
ガ最優先事項ナリ

RC大隊を束ねるその存在は、敵を徹底的に屠る任務を果たすためにその時が来るまで待ち続ける……

『単眼の瞳』を光らせながら

頑張つて作つたりしたものがあつけなく破壊されたり、突破されたりなどするとなんとも言えない虚無感を味わえるよね……（大規模コラボ）

鉄血最終防衛ライン 廃都市

その巨大建造物周辺はまさに激戦地帯であり、その鉄血の通信も苛烈なやり取りが繰り返られていた

『こちらtower2被害甚大……第一・第二弾薬庫誘爆によりその近くの武装及び外壁、装甲が損失し巨大な穴が発生……非常に危険な状態と判断し、応急修理システム及び施設内の戦力を防衛戦力として出撃させる』

『こちらスカウト11、リバイバーがレールガンらしき兵器を使用したのを確認した……どうやらその兵器がtower2に被害をもたらしたと思われる……すでにリバイバーとその配下の戦力は移動しており、他のtowerに攻撃しに行つたと思われる十分に警戒せよ』

『了解、tower2はそのまま「実演」を、スカウト11はそのままリバイバーの監視を続けろ、こちらは他のtowerに通達しリバイバーに砲撃するようにしながら撤退交戦の「実演」を行い続けるよう伝える』

『了解(!!)』』

その時だった

ドガアーーーーーンンン!!!

『うん!?何が起きた!?』

『こちらスカウト13!!ルーラー配下のスペクターが何やら巨大な砲身を形成したと思つたら強力なエネルギー弾を発射したのを確認!! tower2はどうなった!!?』

『tower2情報更新……リバイバーの攻撃により発生した穴に強力なエネルギー攻撃が直撃……ものの見事に貫通し、建

「……………むう……………」

その大部屋の片隅で万能者は唸っていた……………
(現在までに流れた味方の通信を一回全て整理し直してみたが……………
普通に背水の陣で防衛しているようにしか見えん)

万能者は全ての味方の通信(裏方の方も入っており、一部に関しては録音している)などを参照にして調べていたが先ほど思った通りの内容であった

(これで俺が思ってたことは思い違いだった……………が、どうにも怪しいんだよな……………なんかどっかに誘導しているぽいしな……………)

万能者は考えた……………考えに考えた……………にも関わらず、敵がこの戦況をどう変えようとしているのかが全く分からなかった

(もう戦況は鉄血の敗北に近いし、味方は重要拠点……………うん?)
万能者は自分の思ったその言葉が引つかかった

(……………まさか……………すぐに調べないとなんか取り返しがつかない事態になりかねない気がしてきた)

万能者はすぐさまその鉄血の重要拠点に何か怪しい動きがないかを調べ始めた

(思い違いであってくれ……………)

最悪の事態で、それが進んでいないことを願いつつ……………

戦場から70kmほど離れた地点 森林地帯

『白い勢力』の大規模拠点 地下にて

救援要請のスイッチが押されてから数分後……………

同じ顔をした幼い少女達は何かに怯えるように部屋の壁の隅に固まっていた

ガンツ ガンツ ガンツ

それもそのはず、押されてほとんど時間が経ってないにもかかわらず、扉をこじ開けようとする存在が現れたのだ

ないものと思ってください)

それを彼女達は恐怖で何もすることが出来ずに怯えるしかなかった

その時だった

パシヤツ

彼女達の目の前が真っ白になったのは．．．．．そして、全員そのまま意識を遠のいていた．．．．．

記憶処置及び鎮圧完了．．．．．

コレヨリコノ子達ヲ運送シ信賴デキル敵勢力ノ施設ニ送ル用意ヲ開始スル

その存在は彼女達を安全な場所へと運ぶ用意を始めた．．．．．

廃都市 鉄血重要拠点 近く

『こちらタロス1、巨大防衛施設の攻略のための決死隊の参加に感謝する！そのおかげであるの巨大防衛施設を無力化することに成功し、最重要防衛ラインの突破することが出来た．．．．．これより本作戦の最終段階である重要拠点の攻略を開始する!!』

『こちらタロス2、負傷が酷くて戦えない奴は後方に下がって休んだけよくだでさえさっきの戦闘はひどく激しいものだったんだ、後方に下がって休んでもバチは当たらんよ』

『こちらタロス3、重要拠点に関してだが．．．．．やっぱり結構な戦力がある．．．．．どうやら今までの防衛ラインから撤退してきた戦力がそこに集結している様だ．．．．．ここは重要拠点の司令部と指揮しているハイエンドモデルを叩かないとこの戦いは簡単には終わりそうにはなさそうだな』

『．．．．．と、いうわけだ．．．．．戦えるもの達よ！すまんがもう少し一緒に戦ってもらおうぞ!』

その通信と共に今回の作戦の最後の仕上げが始まることとなった

秘宝とかつて罨とか金庫、遺跡などの様々な方法で隠されたりするけどそれがいいものか悪いものかは見るまでは分からない場合が凄く多いよね（大規模コラボ）

廃都市 鉄血重要拠点 前線

ドガアーーーーン!!

ズドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!

ババババババババババババババババツ!

ズドオン!!ズドオン!!

ヒューーーーーー.....

ドガアーーーーンンン!!

その戦場では鉄血が拠点を守る最後の徹底抗戦をしており、正しくそれが似合うほどに激戦状態であった

「鉄血の戦いぷりを見る限りではやっぱりかなりの戦力をここに集結させてみたいだな.....まあ今までの防衛ラインの戦力と比べると砲撃陣地がない分かなりマシになってるし、もはや戦力比を覆しないような状態になっているがな」

AA-2改パイロット『タロス1』の目と観点からでも間違いなく鉄血の手抜き一切なしの徹底抗戦であるように見えていた

『でもリバイバーの言うことじゃあ、大量破壊兵器で待ち伏せているなどの可能性があるっていったが.....今戦場に出ている鉄血の戦力の出方を見ると後がないように見えるし、まだ隠し玉があるように見えるし、下手すると時間稼ぎのようにも見える.....正直かなり微妙なところだな』

『.....どちらにせよその事を考慮しながらあの拠点を攻め落とすしかないな』

「ああ、その通りだな.....つと、こつちの方にハイエンドモデルの集団が襲って来た!すまんが迎撃に当たる!」

『了解!!』

正規軍とグリフィンの混合部隊は鉄血の罠に警戒していたものの、すでに鉄血の重要拠点は見る限りでは風前の灯火と言っても過言ではなく、この機を逃せば編成を整えられて抵抗されて更なる被害が出る事を危険性があつたことから、警戒しながらの戦闘を行なつていった

同じ頃 鉄血 本拠地

『Holy Forest』……「ユグドラシル」起動準備完了……

「根」に配置していた部隊も準備完了を確認

航空部隊も出撃準備完了を確認……

敵勢力主力部隊の誘き寄せ及び最重要撃破対象の位置を確認完了……

全ての準備の完了を確認

これより「ユグドラシル」を起動を開始する

起動開始まで……5……4……3……

2……1

……起動

IOP社 作戦室にて

「……マジか」

万能者は知った……正確には全ては分かつてはいないのだが、それでも大半の部分を知ってしまったのだ……鉄血が何故こうも徹底抗戦をしながら何処かに誘導しようとしているのか……

その誘導先が何処なのか……

(敵の目的は間違いなく重要拠点到主力部隊を誘き寄せることだつ

た……ならその拠点に強力な爆弾を仕掛けて一網打尽にする系の策でやるのかと思つたら、あの辺を吹き飛ばすようなエネルギーのようなものはなかったからアレ？勘違いだったかなと思つたけど、そういうえば鉄血の本拠地の動きってどうなってるのかな？とふとそう思つて見てみたら……」

万能者が見るモニターには……

鉄血の本拠地が赤く染まっていたのだ

具体的には本拠地の真ん中の建物を中心に真っ赤に……
「(何をするのかまでは分からないが、この観測したエネルギー量からすると絶対あかん類のヤツだ……) ……ペルシカさん直ぐに戦場全域に撤退しろと伝達してくれ！鉄血が大掛かりなヤバいことをやるつもりだ！」

「え？あ、今すぐ?! ……わ、分かつた！すぐに伝えてみるわ」

万能者はすぐにペルシカにその事を伝えて戦場にいるものにその情報を伝えさせようとした

その時だつた……

ザア……

ビー……ガア……

「あ、あら？主力部隊と通信が繋がらないわ……なら現地本部は……」

ザア……

ビー……ガア……

「繋がらないわ……」

「……ペルシカさん、こちらも確認したよ……戦場の上空の衛星が使い物にならないから戦場から凄まじく離れたところからの遠目偵察での確認だが、戦場から特殊な電磁波らしきものを観測したよ……恐らく鉄血の本拠地を出ている……それも戦場全域を呑み込むレベルで……ネットワークやさつきも言つた衛星も使えなくなつてる……完全に鉄血にしてやられ

た」

万能者は現地の正規軍とグリフィンが鉄血の罠に完全に掛かってしまった事を理解した……

「……………確認できる範囲でだが……………これだけは言える……………すでにあの戦場全域はほぼ全ての通信手段が失った無法地帯の監獄と化してるなこりゃ」

万能者の一言はその絶望的状况を表していた

ところ変わって再び

廃都市 鉄血重要拠点 前線

ズドドドドドドドドドドドドドドド

ドガアーーーーー!!

ポン ポンポン ポン ポン

ドガアン! ドガアン! ドガアン! ドガアン! ドガアン!

ヒユーーーーー

ヒユーーーーー

ズドオーーーーン!

ズドオーーーーン!

「クソ!こっちの戦術人形とAA-2改が突然調子が悪くなった上に通信が全く繋がらなくなったと思ったら、鉄血が元気になってこっちを囲んできやがった!一体何処にこんな戦力を隠してたんだ!」

『こちらタロス2!通信が使えないから一種の隔離状態だこりゃ!!こっちの戦術人形を自律モードと音声認識指揮モードにして、AA-2改をマニュアルモードと音声スピーカー最大にしたとはいえ戦力低下免れないぞこりゃ』

『こちらタロス3!!ヤツらの出どころが分かった!!地下だ!!ヤツら地下のあっちこっちに出入り口と格納庫のような場所を作って待機してやがった!!更にいえばそこから出てきたヤツの大半はほぼ全てが強化された戦術人形のようなだ!』

先程と打って変わって戦況は悪化……否、絶望的状况になっていた

数分前に突然通信が全く使えなくなった上に戦術人形達の動きに不具合が発生して満足に戦えなくなっていたのだ
その上でその状況で鉄血の反攻が始まったのだ

……あり得ないほどの数の戦力を出して

『どうやらグリフィンの戦術人形の嬢ちゃん達の様子は深刻なようだ!!ダミー人形が動かないらしく全く使い物にならないらしい!』

『逆に鉄血の方はこの影響を受けてないらしい!!というかかなり元氣になってこつち来てるぞ!』

「クソ!仕方ない!絶望的であるが大陸横断鉄道列車の近くまで撤退する!!その辺の味方に伝言でもいいから伝えろ!」

正規軍とグリフィンの混合主力部隊にとってその絶望的戦況の中を駆け抜ける絶望的な撤退が始まることとなった

別の戦場にて

「あのクソガキ!!一体どこでこんな知恵をつけたんだ!、それかまたはそんな知恵が使えるヤツを手に入れたのか!」

リバイバーは非常に焦っていた

それもそのはず

(傘ウイルスワクチンもだが、ウイルスやハッキングが全く効いてねえ!?!いったいどう言うことだ!?)

通信が全く使えなくなつてから己の強みである電子戦が鉄血に全く通用しなくなったのだ

「クソ!!今は目の前敵を撃ちながら撤退の支援しかできん」

「させません」

ドスツ! バギイツ! 「グガアツ!」

奇襲だった……突然背後からナイフによる近接攻撃を受け、的確に飛行を可能にしていた部分を破壊したのだ

「リバイバー!」

「いつの間にも背後に……クソ、飛行とホバーがやられた！……
てめえ誰だ！」

リバイバーは攻撃して来たその存在を睨んだ

その存在は姿形は『Brute』に似ていたものの、原型とは強化外骨格と小型バックパックを装備しているなどの違いがあった

そして突出している一番特徴として「RC」のマークが貼られていた

「それを言うだけでもいいですか？ 『Behemoth』部隊と『Gol-em』部隊、その犬と蟹共を蹂躪しなさい」

その存在がそういうと

ズドオー……ドガオー……

『百一匹隊』と『アラゴスタ隊』などが集結していた地点から土煙が上がった

「な、何が起こった!？」

その疑問の声は土煙がすぐ晴れたことによって解消された

そこには

バギバギバギバギバギバギ グシャツ!!

ガアツン！ ガアツン！

ズドオン!! ズドオン!! ズドオン!!

ガラムとアラゴスタの大量の残骸が散らばる中ですでにかなりの数を減らした劣勢の状態で戦闘しているのガラムとアラゴスタと

グオオオオオオオオオオオオ!!!

その巨大な鋏で握りつぶし、叩き潰し、ガラムを掴み盾にし、それで敵をぶん殴り、背中の砲塔の大砲と武装で敵を破壊する8脚の怪物達がそこにはいた……

その日、その戦場の戦況はひっくり返った……

拠点を攻撃しに来たものたちにとっては徹底的かつ絶望的な状況

になっちゃったのだ……

そして……

「この状況ってことは俺が行くしかないってことだよなあ……
はあ……ペルシカさんすぐに用意をしてから行ってくる……
ついでにM4さんのおねがいも叶えてくる」

「……分かったわ……お願いね」

その最悪の事態を打破すべく万能者が動き出した……

今の世の中通信網がやられたら戦国時代になるって話があるけど、人類って強くなった分弱くもなったんだなって思う今日この頃（大規模コラボ

鉄血の反攻の少し前

戦場から43km離れた地点 元白い勢力の拠点

「……………マジか」

H・A・G・S……………その試作型改修仕様のパイロット（部隊の隊長格でもある）は頭を抱えた

白い勢力の小規模拠点の偵察から帰ってきた部下の報告が己達の立場を危ういものであると理解させられるものであったからだ

「つまり要点をまとめると白いヤツらの小規模拠点……………正確にはここより大規模だったわけだが……………それがフードマンントの正体不明勢力の集団に壊滅させられたってわけだな……………」

「は、はい!!」

「……………アカンなここに襲撃する可能性が非常に……………仕方ない、各機!!例の装置を使ってすぐにこの戦場から撤退するぞ!

S・A・C・SはH・A・C・Sに張り付け!」

『了解!!』

その報告を聞いてから隊長格の判断は早かった

だが、その判断自体は戦況的にはすでに遅かった……………

「あ、アレ?た、隊長!例の装置が動きませんか!」

「コチラもだ!!」

「こつちも動かねえ……………」

「……………ああ聞いている、こつちも動かん……………更に最悪の知らせだ……………コレはアカンと大元に通信しようとしたが繋がらん……………どうやらあちの戦場で最大級にヤバイジャミングを起こすものが使われたらしいな……………幸い俺らの通信はかなり特殊なものだからほんの短距離なら繋がるようだ」

彼らは撤退が出来ずにこの戦場に孤立したのだ……………

「隊長どうします!?!このままだとフード付きマントの奴ら来ますよ!?!」

「……仕方ない……最悪の選択肢だが、プランBで行くぞ……」
『プランB? (そんなものあったか?)』

隊長の口から次に飛び出た言葉はある意味最適解でもあり……
「……鉄血と正規軍グリフィン混成軍の戦場の中を突っ切つて
通信可能地点まで逃げる、コレがプランBだ」

同時にあまりにも危険な賭けでもあった

戦場から70kmほど離れた地点 森林地帯

元白い勢力の大規模拠点

その場所ではフード付きマントの集団が先程到着した追加の戦力を早い勢いで編成していた

どうやらすぐにでももう一つの白い勢力の拠点を攻撃するようであった

その時だった

……!!

粒子系統ノ使用ニヨルジャミング……及び「ネットワーク」ラシキモノノ構築ヲ確認

……山岳地帯ノ先ガ発信源トスルト……最低半径500kmクラスニジャミング効果アリト推測

対策サレテナイ通信機器ガ使用不可ニナルト想定……

結果、我々ニハ効果ハ微々タルモノデアルモノノ、戦場ノホボ全テノ通信機器ガ使用不可ニナルト推測サレル

……我ラニトツテ好都合ナ状況デアルト判断

コレヨリ我々ハ予定ヲ変更シ……

ソノ戦場ニ乱入シ、実践戦闘ヲ開始スル

……それはその戦場に更なる混沌が押し寄せることが確定

無論、悪魔である『ギルヴァ』と『ブレイク』にはあまり効きはしなかった……だが

「……………」ドサツ

度重なる戦闘と自らがまいたナノマシンによるダメージ、そしてすでに某崩壊技術を使うための崩壊液の残量が少なくなっていたこと、そして人形であることが災いしリバイバーはその電撃によつて武装や体の中身の大半を焼かれて倒れ伏した

どうやら崩壊液を使い果たしても完全修復な修復ができず、外と内側両方が大きな損傷を受けた上で気絶したようである

リバイバー無力化ヲ確認

特戦『Golem』隊、リバイバーガナノマシンヲバラ撒イタルトニ修復用ナノマシンヲ散布セヨ

ドオン！ ドオン！ ドオン！ ドオン！ ドオン！ ドオン！

散布開始ヲ確認……………

現在マデノ『ギルヴァ』『ブレイク』ノ戦闘データノアップロード完了……………

コレヨリ我ハ要注意人物『ギルヴァ』『ブレイク』ト交戦シ味方ガ立て直ス時間ヲ稼グ

ドoooooooooooooooooo!!

それは突然現れた……………正確には彼らの近くの小さな土の山が爆発するように盛り上がり、そこから現れたのだ

その存在は人型としてはかなり異質な姿をしていた……………

右腕にはマニピュレーターがなく、代わりに巨大な砲とも呼べる銃がそこには存在しており明らかに戦闘に特化していることがうかがえ、存在自体のその大きさも大きかった、そしてその頭部には一つの目が赤く光らせ『ブレイク』『ギルヴァ』を見ていた……………

そして左腕には……………

「アイギスの盾」起動……………完了

その大きな自身の体を隠せるほどに巨大な盾が存在した

「……………どうやらボスのようだな」

「お次はデカブツねえ……………」

彼らの言葉が引き金となり、その場で激戦が始まることとなった

そしてその数分後……………

「全員ちゃんと動けるかの動作を確認!!どこかおかしい人、完全な修復ができなかった人は後方に撤退して!修復ナノマシンは万能じゃないからね!」

「コチラは完全に修復を確認!」

「こっちは擱座していたBehemothが完全でないにしろ戦闘と可能レベルに修復を確認!!」

「駄目だ!こっちは何人かが部位欠損などで戦えそうにないのが複数いる!彼らを連れて撤退する!」

その僅かな時間でリバイバーのナノマシン、または戦闘により無力化されていた部隊の大半がその後ろに散布された修復ナノマシンにより立ち直り行動を再開することとなった

更に数分後

コチラ航空部隊……………戦場上空二到達

『戦乙女』部隊も到着しました!」

了解しました……………では、航空部隊『戦乙女』部隊を混成して4部隊に分け、第一部隊は戦場に生き残っている指揮車両を撃破、第二部隊は逃げている敵部隊への空爆を、第3部隊と共に最重要撃破対象に攻撃、そして第四部隊は敵の臨時の本部……………大陸横断鉄道列車周辺の攻撃を開始せよ

……………「大雀蜂」は第四部隊、「救済者」は第一部隊と共に行動

了解

「了解です!!」

新たな絶望がこの戦場に現れることとなった

戦場から遠く離れた上空

「グガゴオオオオオオオオオオオツ・・・・・・・・こ、これが一番早い
とは言え、や、やっぱり無理矢理すぎたか・・・・・・・・？」

そこでは万能者がかなりの速度で空を飛んで目的地の戦場へと向
かっていた

(でもこうじゃないと追加の戦力の展開とめんどくさそうなやつが撃
破を瞬時に且つ同時にできないからな・・・・・・・・我慢するしかない
か)

万能者はそう思いながら周囲を確認して目的地を目指して行った

尚、万能者の周りには・・・・・・・・

大陸弾道ミサイルより少し『大きめのミサイル』のようなものが3
機ほど並列する様に飛んでいた・・・・・・・・

万能者が到着するまで後・・・・・・・・

想定外は大体新たな想定外を引き起こす…….
してその想定外がさらに新たな想定外を（ry）
…….無限ループって怖くねえ？（白目）（大
規模コラボ

荒野地帯 廃都市近く

その場では第四部隊が「スペクター」の攻撃によって若干のパニツクが起こっていたもののすぐに立て直して攻撃準備を整えていた
コチラ第3部隊「雀蜂」、支配者配下ノ「スペクター」ガ巨大兵器化…….ソノ攻撃ニヨリ四分ノ一ガ蒸発…….
コレヨリ部隊ノ大半ヲ「スペクター」ヘノ攻撃ニ当タラセ、残ツタ戦力デ別ノ最重要撃破対象ヘノ攻撃ヲ実行スル
…….「雀蜂」全機空中戦闘機動形態ニ形態変形シ、「戦乙女」ト共ニ攻撃開始セヨ

『了解（!!）』

第四部隊は残った戦力を使って、巨大な兵器を纏った「スペクター」とその周りにいる敵に向かって攻撃を開始した

また別の戦場にて

DANGER! DANGER! DANGER! DANGER! DANGER!

機体内温度急激ニ低下…….

ソレニヨリ機体ノ動キ、機能ニ不具合ガ発生

味方ニモ同ジ様な現象ガ起キテイルト判断

『単眼の怪物』は己と味方の様子を確認しながら、その異常な現象の原因と思える場所を見ていた

理解…….不能…….

それは絶句とも言える様な答えだった

それもそのはず、彼の視線の先には…….

巨大な氷の城塞が存在していたのだから

．．．．．機体内ジェネレーター緊急起動開始

ゴオオオオオオオオオオオオ．．．．．

．．．．．機体内温度上昇ヲ確認．．．．．

．．．．．一部ノ動キト機能ノ回復ヲ確認

．．．．．状況ハ厳シク、戦闘継続ハ愚策ト判断．．．．．味方

ト共ニ撤退ヲ開始スル

そんな異常事態に『単眼の怪物』は撤退することを決断した

．．．．．尚、氷ノ城塞方面ノ味方ノ救出ハ絶望的ト判断

．．．．．同胞ヨ スマナイ

ガゴオン ガゴオン

．．．．．三連榴弾発射機、スモーク+クラスタ発射

ポン ポン ポン ポン ポン

ドガアン!! ドガアン!! ドガアン!!

己の無力さを悔いながら仲間と共に自らの手によって発生させた
煙の中に撤退をして．．．．．

現地作戦本部 大陸横断鉄道列車 付近

それは現地作戦本部の近くの空にいた

コチラ『大雀蜂』．．．．．目標『大陸横断鉄道列車』ヲ補足．．．．．

コレヨリ対地攻撃機動形態ニ変形開始．．．．．

ガゴオン! ウイーン．．．．．ガシヤン!!

変形完了．．．．．

それは己に課せられた任務を果たす為の準備を始めた

高出力広域レーザー兵器チャージ開始．．．．．

対「厄災」用大型徹甲爆壊槍「破槍」準備開始．．．．．

ガゴオン ガゴオン ガゴオン ガゴオン ガゴオン ガゴオン!!

装填完了．．．．．次弾装填分5発準備完了．．．．．

高出力広域レーザー兵器チャージ完了．．．．．

「雀蜂」部隊の砲撃準備完了・・・・・・・・

準備が完了し、攻撃は・・・・・・・・

攻撃開始・・・・・・・・レールガン発射

レールガンの大きな発射音を合図にすぐさま開始された

ズドオオoooooooooooo!!!

次弾装填

ズドオオoooooooooooo!!!!

次弾装填

ズドオオoooooooooooo!!!!

次弾装填

それは流れ作業の様であった・・・・・・・・

配下の雀蜂部隊からはレーザーやロケット弾、砲弾が次々と列車の周りに放たれ、自らからはレーザーの雨をばら撒きながらレールガンの弾を列車に1両ずつ確実に放っていった

ズガアツン　ズガアツン　ズガアツン　ズガアツン　ズガアツン

ズガアツン

ズドドドオオoooooooooooo!!!

ドガアoooooooooooo!!　ドガアoooooooooooo!!　ドガアoooooooooooo!!　ドガアoooooooooooo!!

その光景は壊滅の二文字に尽きるほどの凄惨な光景であった・・・・・・・・

大陸横断鉄道列車はその頑丈であるはずの装甲を一両ずつ丁寧に貫かれた後に内部で弾薬庫と共に大爆発を起こし周りに更なる被害をもたらし、その残骸を残して完膚なきまでに破壊され、その近くにあった現地作戦本部はレーザーやロケット弾、砲弾の雨により蹂躪され、もはや見る影もないほどに焼け野原と化した・・・・・・・・

無論、そこにいた者達の大半もその中の仲間入りとなった・・・・・・・・

目標撃破、コレヨリ我々ハ近クノ味方ノ支援ニ．．．．．
通信確認．．．．．!!!!

．．．．．予定変更、コレヨリ我々第四部隊ハ撤退ヲ開始スル

それらは己に課せられた任務を果たした後、撤退を開始した．．．．

遡ること少し前．．．．．

「あ、アレ!?!な、ない!?!」

グリンダは非常に慌てていた．．．．．

なぜなら手に持っていたリバイバーに渡された救済者のコアがなくなっていたからである

まるで最初からそんなものがなかったかの様に

「絶対に死守って言われたのに．．．．．なんで!?!なんでないのよ!?!」

グリンダは己のしでかした失態に泣き喚わめきながらそのなくなったものを探すしかなかった

そこから離れた場所にて

A・D・W・Sニ通達．．．．．【敵ハ強力ナ防御無効兵器ヲ使用シ
テイル模様

．．．．．ソノ事ヲ味方ニシラセ、ソノ後RC大隊ニ指揮権ヲ移シ
撤退ヲ開始セヨ】

【尚、防御無効兵器ニ関シテハ中身ガ装甲ヲ無視シテ中身ヲ切ルトイ
ウ性質カラ負傷シタ場合、後方ニ下ガリナノマシンデ修復デ対象可
能、重要部分ガ切ラレ機能停止シタ際ハナノマシン修復後ニ再起動デ
復活可能ト思ワレル】

「???」ニ通達．．．．．【コチラ」

「敵ニ鹵獲サ

レタ『救済者』ノコアノ奪取及ビ防御無効兵器ノ戦闘データノ回収完
了、防御無効兵器ノ一ツ確保ニモ成功、回収シタモノ全テ『ユグドラ
シル』ニ接続シ、トラップ・ウイルスノ除去モ完了シテイル．．．．
直チニ「根」ヲ使イ撤退スル】

「尚、別働隊カラノ報告ニ寄ルト……謎ノ集団……否、大軍ガコノ戦場ニカナリノ速サデ向カツテイル模様、注意サレタシ」

それは人知れず己の役目を果たして報告を終えた後、戦場の中へと消えていった……

それから間も無くしてA・D・W・Sにその通信が送られ、その戦場から撤退していった……

そして……

「な、なんだお前ら!?なんかこつちと同じデカモノに乗りやがって!?しかもなんだ!?!エンブレムの文字がFUNNYS?文字通り奇妙な奴らだなオイ!!」

「(あ、話が分かってもらえそうな人)……待ってくれ!!今緊急事態なんだ!!」

そこではA A—2改を筆頭とする混成撤退部隊とFUNNYSが偶然にも邂逅していた

「何?緊急事態?今が緊急事態だ馬鹿野郎!こつちは戦えない者を連れて逃げなきやならないんだよ!!というかお前らもその緊急事態の一つだからな!?!」

「だから、その緊急事態事態案件なのがさらに来るんだよ!」

「……なに?また何が来るんだよ」

「フード付きマントの集団というか大群が来るんだよ!!!というかもうかなり近くに來てる!!」

「フード付きマントの集団??」

「とにかくヤバイヤツなんだよ!!近くにいた白い勢力が壊滅させられてんだよ!!!」

「……え?」

その言葉は新たな絶望・理不尽がすぐそこまで来ていることを示していた……

ガ
シ
ツ

ガ
シ
ツ

ガ
シ
ツ

ガ
シ
ツ

ガ
シ
ツ

予定って大体予想もつかない形で変更になることつて多いよね……………（大規模コラボ

ドスッ!! ドスッ!! ズドオン!

ズバツ ズバツ ドガアツ!! ゴギヤツ

バギバギバギバギバギバギバギバギツ……………バギヤツ

!!!

ズドオン! ズドオン! ズドオン!

ジャギイン!! ズバア!! グザツ

ズバア!! ズバア!! ズバア!!

ドゴオツ!! バギヤツ! ドガアツ! グシャ!

バババババババババババババツ!!

ガアツン!! ドゴオツ!!

バゴオオオオオオンン!! バゴオオオオオオンン!!

突き刺し、切り裂き、打撃、銃、大砲、光学兵器など様々な攻撃手段が、それらの音を戦場に響かせていた……………

「な、なんなのアイてギヤツ」

「た、助け」グシャ

「正体不明勢力確認! 戦闘しながら後」ズドオン!

「近づかれ」ズバツ

その戦場には突然乱入してきたフード付きマントの集団が鉄血・正規軍・グリフィンに勢力別を全く関係ないと言わんばかりに襲いかかったのだ

幸い、少しした後にはジャミングがなくなったこととリバイバーの通信があったこと、凶悪な正体不明の第三勢力がすでに乱入していたことにより戦場の各地で共闘はすぐに行われ、その上で様々な方法でサポートが行われたことによりある程度マシな戦況にはなっているもの……………

ジャミング消滅……………敵同士が連携ヲスル様子ヲ各地デ確認……………

・・・我々ハ嵌メラレタト判断

戦闘目的カラ敵サンプルノ回収ヲ除外シ、「実践戦闘経験蓄積」ノ移行
ニ完全変更スル

・・・各員戦イ抜ケ

了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解
了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解
了解

どうやらそれが彼らを徹底抗戦という判断に至らせるには十分な
材料であつたようだ

ある場所では

「なんなのアイツら!?めちやくちや強いんだけど!」

ズドオン!! チュドオーンン!!

ズバツ!!

「・・・あの鉄血サソリ戦車、一両がああ銃で吹き飛んで、
もう一両が真つ二つにされちゃった」

「なんなのよあの大剣と銃が組み合わせたふざけた武器は!?!明らかに
火力とかおかしいでしょ!?!後あのカソ頑丈な盾も!」

正規軍とグリフィンの混合の撤退部隊（主力部隊とは違ふところ）
と鉄血の部隊に集団で襲いかかり、フード付きマントの集団の大半が
装備している大剣と対物ライフル並かそれ以上の大きさの銃、槍を組
み合わせたような武器と全身を隠せるような大楯を使い、敵を次々と
屠って行き・・・

またある場所では・・・

ズバズバズバズバズバズバズバズバズバズバズバズバズバツ

「なあ!?!クソ、やられたー!」

ドガアツーーーーンン!!

「…………どうやらあの集団の親玉の一人が来たみたいですね」
「アレは……………ビームの……………剣？それも二刀流？」

戦場に転がっていた残骸をノアがエアハルテンを利用して作り出した空中要塞ともいえる巨大兵器をそれぞれの手に持つ光の刃を展開している剣でバラバラに切り裂いて地上に墮とし（ノアは直前に脱出している）、アナとRFBの前に現れ……………

「……………ツ!!？」

「オアツ!?!って嘘だろ？俺の見間違いないかなければアイツ、あのデカイ刀で次元斬も弾かなかったか!？」

「……………うそん」

ギルヴァとブレイク、リバイバーの前に現れたものは巨大な大剣の如き刀を持ち、それを使い、それらの攻撃を目にも止まらぬ速さで弾き返し……………

またある場所では……………

「こ、コイツイガリマが効かないデース!？」

「イガリマが効かないってアイツら一体どうゆう構造や設計をしてるんだ!？」

「むう…………凍らないか」

「アイツらジャウカーンの咆哮を耐えやがったぞ……………」

「あ、でも地味に効いてるみたい、何体か動きが鈍ってたり、膝をついているのがいる……………代わりに結構な数がこつちに凄い勢いで来てるけどね!？」

様々な特殊な攻撃が己らの身に降り注ぎながらも耐えながら敵に向かって進軍し……………

またある場所では……………

「ギユイイイイイインンン!!?!!?」

「ウオオオオオオオオオ!?!怖ええええ!?!」

「うるせえ!!とりあえずこつちも助ける! FUNNYSの傭兵屋!と

いかさつき見たが、お前らのデカイ方の機体にも似た様なの武器があるだろうか!!」

「すまん! あんなのがいざ自分に向けられるとガチで怖いもんだから!」

ズドオン!!ズドオン!!

「うひいいいい……迂闊に飛べないなありや」

「あれ当たったらデカイ弾でデカイ風穴が開くか、散弾で蜂の巣かミンチだな……」

正規軍・グリフィン・鉄血・FUNNYSという奇妙な共闘戦線を築いた彼らの前に現れた5m以上もあるフード付きマントの巨人の集団（無論その他もついている）が現れ巨人と巨人の戦いを繰り広げたりしていた……

現在戦況は膠着になっていた……

そして……

なんか思った以上にえらいことになってる!?

万能者がその戦場の上空に到達した時に聞いたりバイバーの通信を聞き、戦場の様子を見た際に思った感想がそれだった

「というかあのフード付きマントの集団って……やっぱアレだよな……俺のアレ……まあとりあえず来た以上仕事は果たさなければな……兵装輸送システムパージ!!」

少し考えながらもまずは自分に課せられた仕事を優先して行動することにした

そして、その言葉と共に大型ミサイルの様なものも空中分解され、中から様々な装備の「試験者」の部隊が降下体制で現れた

『こちら万能者!!増援と共に到着した!増援を各戦場に派遣し支援行動を開始する!』

その日、万能者がその戦場に現れたのだ……

今度は味方として、集団でやって来たのだ

物語が終盤に移ったからと言ってすぐに終わるわけではない……それは他のことにも言えるよね、仕事とかに（遠い目）（大規模コラボ

荒野地帯

戦況がコロコロ変わりまくるその戦場は、万能者が増援と共に現れたことにより、終盤へと向かっていた

「オラアッ!!」

ズドオン!!ズドオン!!

ガン ゴンツ!!

「フンツ!!」

ドグシャツ!!

ガンガンガン

「効かん!!だがお返しは受け取れ!!」

グシャツ!

万能者はその戦場に到着後すぐにフード付きマントの集団の一部隊の突っ込み、攪乱かつ殲滅を行っていた

その武器、格闘などによる攻撃はフード付きマントの存在を一撃で屠る、又は体の何処かを失わせるには十分な威力だった

逆にフード付きマントの攻撃は万能者には通じず、最悪の場合近接武器が破損することもあった

（イテテツ……思ったよりは硬くはないがやっぱ硬いなこりや……指の関節が痛いなあ……つとチャンス!）「オラア!」

そんな中で万能者はとある行動を開始した

ズドオッ! ガシツ!

!!!!???
!!その部隊の残りが一体となった瞬間にその一体に胸部に貫手で貫き、心臓の様なモノを掴んだのだ

（ビンゴ!!間違いない掴んだのはコアだ……できる限り多くの

情報を抜かないとな．．．．．）

サラサラサラサラ

「つて早!!?崩壊設定結構過剰にしたなこりや!!?ええいもうちよつとだけも!」

その僅か数秒後．．．．．

ザアーアーアー．．．．．

万能者がハッキングを仕掛けたフード付きマントはそのまま崩れ砂となった

そして、万能者に残った成果は．．．．．

「．．．．．欲しかった情報の大半は手に入らなかったが．．．．．手に入った情報に関しては見ただけでも．．．．．

ヤバイやつだなこりや

．．．．．もつと情報が欲しかったが、もう対策されているだろうし．．．．．仕方ない、とりあえずこの戦いを終わらせることが重要だな．．．．．」

万能者はそう言いながら再び行動を開始した．．．．．

荒野地帯 地下施設・通路「根」

システム再起動中．．．．．再起動完了

．．．．．自機ノ状態ノ確認開始．．．．．

機体状況．．．．．右腕及び右胴体ノ大半ヲ損失

各部システム及び新規システム．．．．．損失ニヨリシステ

ムニ不具合

武装・補助モジュール．．．．．右半身ノ武装使用不可

『アイギスの盾』．．．．．損傷ハアレド機能ニ異常ナシ

「あつ!!隊長が起きた!大丈夫ですか!」

その場所で「単眼の怪物」は再起動した

つい先程の戦いである戦術人形の強力な兵器により、装甲を貫かれ右上半身を失う損傷してしまい、機能を停止していたのだ

損傷箇所をみると残骸やナノマシンなどを活用して応急的ながらも損傷箇所を塞ぐ様な形で直されていることから、彼の部下達が奮闘

してやったのだと理解できた

・・・戦況確認・・・確認完了・・・

レヨリ我ハ再び戦場ニ復帰スル

「「「ちよつと待てえーい!!」「」」」

あまりにもナチュラルにその判断をしたのだから部下は皆突っ込みまざるえなかった

「隊長!!今あなた負傷者!!それも重症の!!それにフード付きマントの連中めちやくちや強いやつ!!それを分かっていますか!?!」

分かつテイル、ダガ現在正規軍、グリフィントハ一時休戦ノ共闘状態、ナラバ味方ノ保護カツ援護ヲ最優先セネバナライ

「いや、理解はできるし、あの会話のこともあったんだと思うけど・・・あんたガチの重症だからね!?!」

・・・どうやら単眼の怪物は若干の頑固者でもあるようだ

鉄血本拠地 前

油断シタ・・・データヲ他ノ機体ト本拠地ニ送信開始

・・・データ送信完了

・・・コレデ我ノ任務ハ完了・・・

その存在は相手を罵倒することをせずに自分の失態を反省しながら、他の味方と別の場所にその戦闘データを送信し、己の役割を果たして身の崩壊を待っていた・・・

それと同時に

・・・ダカ、楽シカッタ

その戦いに思い焦がれていた

最後はあつけなく、そして奥の手を出せずやられたとは言え、彼もまたその戦いを内心(?)ではしゃいでいたのだ

そして、その結果に後悔もなかった

次、戦ウ時ハ・・・また彼らと戦いたいものだ・・・
そう思いながらその存在はその身が崩れて砂と化した

十数分後・・・
TYPE 「hero」03データ 最終戦闘データ映像再生終了・・・

そのデータを早送りしながらもその戦いを見たその存在はそのデータの映像に出ていた二人とランページゴースト、ルージュの6人と対峙していた

αノ戦場出現モ確認シテイル・・・ソシテ、ソノ戦闘ニヨリデータノ一部ヲ読ミ取ラレタノモ確認サレタ・・・我々ノ機体ノ正体モ直ニ明ルミニナル：：：ナニヨリ、彼ラハ強イ：：：ナラバ奥ノ手ヲ使ワナケレバ失礼ダナ

そう思考したその存在は
ゾワア

ギューイイイイイイインシン!!

「!!!?」

デハ、覚悟ヲシテ貫オウ

己の命をその戦いに燃やすことにした

その場にいた6人はその存在の急な雰囲気の変化に驚いていた・・・

「あ、アイツなんかさつきと雰囲気は全く違うのか？なんかあのビームソードの刃、心なしかかなりデカく太くなってる様な：：：」
ブレイクはそう軽口は言いつつもその存在の恐ろしさを内心で改めた

だが、その中でもランページゴーストはその雰囲気の詳細を理解した・・・否、理解してしまった

(こ、この感覚・・・万能者と同じじゃねえか・・・マジでふざけんな・・・)

幾分かは劣ってはいるもののその雰囲気の変化が万能者とほとんど一緒であることを理解してしまったのだ

量産機といえば、なにかとバリエーションが多いやつが多いよね、ジ〇とかザ〇とか（大規模コラボ）（一部修正

荒野地帯・・・最前線近くにて

ここではフード付きマントの集団・・・それも大部隊がそこで味方に指示と支援攻撃を行っていた

脱落個体ノデータカラ寒冷仕様ノ天候兵器クラスノ攻撃及ビ、敵ノ規格外兵装ノデータヲ確認・・・

・・・敵ノ超常現象ノ攻撃ノ存在モ否定出来ナイデータモ確認全個体ニ対応指示ヲ送信・・・

一部リミッターヲ解除シ、悪環境ヲ乗り越エテ戦エル様ニセヨリンク機能ノ強化モ開始スル

尚、リミッターノ解除ハ機体ノ損耗具合ガ早イタメ、戦闘可能時間モ設定スル、ソレヲ過ギタラ自壊スルカ撤退ヲ開始セヨ

プラズマカノン部隊、引き続き前線ノ装甲部隊ヘノ砲撃ヲ続行・・・前線部隊ハ規格外ニ注意シツツ戦闘経験ノ蓄積ヲ続ケヨ

対 α 仕様機ハ近クノ味方ヲ利用シ α ニ接近、戦闘ヲ開始セヨ

了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解
了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解
了解

その場所でのその存在は部下達に様々な指示を出し続ける・・・その存在達の目的が謎のまま、戦いは終盤へと突き進んでいく・・・

その一方別の戦場にて・・・

ギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリ!!

『あがががががッ!!?右腕切られた!?!』

『コンニャロ!!(ドガゴオン!!ズドドドドド!!)マントのデカブツ撃破!!正規軍のデカブツのパイロット大丈夫か!』

『クソ、中は大丈夫だがさっきので駆動系にダメージ入った!!運動性が2割落ちてしまつてやがる!!』

『こちらタイタン3!!敵のマントのデカブツの数が減つたが、やけに動きがいいデカブツが2体出てきた!!さらにそれに俺が持つたマシンガンとバックパック側面装着武装の一つが的確にやられた!!』
『さっきまであっちの方が急に動きがわるくなつたと思つたら突然目が光つて急に元の動きに戻りやがつて!!まあその動きが悪くなつたときに体勢を整えて、負傷達を後方に遅れたがな!!』

『こちらタロス2!今味方から連絡があつた!!あっちこつちで敵のリーダーと思われる存在が撃破してらしい!!まあ指揮系統にはあまり影響は見られてないようだがな!!だが、援軍が来る可能性が出てきたな!』

『マジか!それはいい話だ!さっきと援軍を連れてくるように言つてくれ!』

『了解!』

『.....これ俺ら大丈夫か?一応俺らテロリスト扱いなんだが.....』

『『『『『『あつ』』』』』』』

『.....ま、まあなんとかなるようには.....してみろさ、うん』

『.....正規軍のパイロット、なんかすまん』

その戦場の奇妙さを表すのを代表する共闘はまだ続くようだった.....

そのまた別の戦場にて

「もうすぐ撤退の目的地点だが.....思ったよりフードマントのやつら出てこなかったな」

「ああ、他の部隊がうまくやってくれていると思いたいが.....今までの経験上、こつちゆう時に嫌なことが何かしらおこるよな.....」

「……というか嫌なことではないが、その何かしら絶賛今起きてるみたいだしな……。(なんだこの詩？呪文か祝福系か？他の人には見えてないが、戦場のあっちこっちでフード付きマントになにかしらが張り付いているみたいだしな……味方のオカルト攻撃って考えると……迂闊に「アレ」は使えないな……今使うとその攻撃の邪魔どころかその味方の攻撃を喰らっちゃう可能性が高いしな)」

リバイバーと万能者は正規軍と鉄血の装甲部隊を連れて移動を開始して負傷者の救援及び撤退支援を行っており、その件の目的地点に到着しかかっていた

その会話の通り、それまで道中でフードマントとの遭遇はあれど、想定よりは少なかったのだ

だが、リバイバーと万能者はそのことが逆に何かの前触れと思っていた

その時だった

「ツ!!俺たちの真後ろから大剣銃槍・盾持ちとライフル・刀持ち、巨人が合わせて50体くらい来やがった!!」

「クソ、言った途端これだ!!」

フード付きマントの部隊が彼らの後ろから接近していたのだ

「(目的地点に敵を連れてきたら厄介なことになる……)……装甲部隊一部は負傷達の護衛を引き続き頼む！残りは俺と万能者で、アイツらを食い止めるぞ！」

「その方が良さそうだな、了解した！」

その言葉通りすぐさま、装甲部隊の大半を負傷者達の護衛、残りを迎撃に当たらせる形で動かし、自分たちも迎撃の構えを取った

戦闘が始まったのはそこからすぐであった

「テュポーン・Behemah・Goloom!!アイツらに撃ちまくれ!!」

ドガアーーン!! ドガアーーン!! ドガアーーン!!

ズドドドドオoooooooooooooooooo!!

正規軍・鉄血の装甲部隊が遠くから接近しているフード付きマントの集団にレーザー、砲弾、ミサイルの雨を撃ち込んだのだが

「クソ、何体か減ったが大半が生きてやがる!!」

「嘘だろ!?あの砲撃を生き残るのかよ!?」

フード付きマントが己の持つ盾や装甲を使い味方の盾となって味方の大半を生き残らせてその砲撃地帯を突破したのだ

無論

「撃てえ!!アイツら近づかせたらかなり厄介だ!!」

その砲撃地帯を突破したものの達に正規軍と鉄血、万能者、リバイバーは容赦のない銃撃と更なる砲撃で出迎えた

その結果は……

「クソ、12体ぐらい接近されちまったか!」

「あれだけやっても生き残るのかよ!!ちくしょう!」

巨人は全滅したものの何体かのフード付きマントの存在達が近くのを許してしまい、更なる激しい戦闘に移行されることになってしまったのだ

その最中で

「リバイバー!そっちに1体行つたぞ!!気をつけろ!」

リバイバーに大剣銃槍と大楯持ちのフード付きマントが襲い掛かった

「分かってる!!これでも喰らいやがれ!」

それを知っていたリバイバーはすぐさまレールガンを撃ち込んだ

その弾丸は寸分の狂いもなくフード付きマントの弱点でもある関節部に吸い込まれていく……

カッーン!!

「……………えっ」

ズバアツ!!

はずだった

「……………ツ!!イツデエツ!!?」

あまりに一瞬の出来事でリバイバーはすぐには理解できなかった……

弱点に当たったはずのレールガンの弾丸は綺麗に弾かれ、その対象であった存在に目にも止まらぬ速さで接近され、左腕を切り飛ばされたことを理解できなかったのだ

無論、その存在はトドメを刺すべくそのままその武器でリバイバーを突き刺そうとした

「……………あつ」

(俺、死んだ)

リバイバーはその攻撃が避けられないことを悟った、その時

「危ねえ!!」

ドガゴオン!!

万能者がその存在に飛び蹴りしてその攻撃を矛先をずらすことでリバイバーの危機を救った

「す、すまん助かった」

「いやこつちも悪い、アレの偽装と演技が上手くて気がつかなかった」

「……………まさか」

リバイバーが万能者の言葉を理解したとともにその存在は更なる行動を開始した

αノ存在及び規格外存在ト戦闘開始、コレヨリ対α武装展開スル

バリッ！　バリッ！

マントの背中の一部が破れる音とともに背中から大型のライフルのようなものが見ついた腕のようなものを二本生やし、偽装状態から戦闘態勢に切り替えたのだ

「……………どうやら厄介ごとのようだ……………それもとびつきりの」

「……………とりあえず聞こう、多分アレもリーダーユニットだよな？」

「ああ、更に言えば、アイツのあの動きと防御力、そしてあの武装を考えると恐らくだが、対俺専用で特殊なチューンアップしたやつ

だ………大体他のやつと格好が一緒だからメインの武器も一緒にして偽装しながら味方と共に行動をしていたんだろう……でもって、俺が現れた時にこうやって出てくるようになってたんだろうな」

「………勘弁してくれよ、もう厄介ことは懲り懲りなんだよ……」

「………そうだな、俺もその意見だ………って避ける！」

ズドオン!!ズドオン!!ズドオン!!

ズガガガガガガガガガガガガガガガガガガ!!!

「………あの散弾であの貫通力と破壊力って色々詐欺ってないか？」

「………技術とかコストを色々突き詰めれば今の技術でもワンチャンできなくはないヤツだから、まだセーフだから………それよりも俺はあの補助腕についてる2つデカいライフルのようなのが気になる、銃身若干を切り詰めているが俺の想像が正しければアレは」

ズガアーーーーー!!!!

ズドoooooooo!!!!

「………艦砲顔負けの貫通力と破壊力、弾速などを持つやつだったと思うんだ………戦車どころか戦艦の装甲や、電磁バリア系も簡単に貫けるクラスの实弾兵器………無論、俺の今の装甲も破壊できるやつ」

「………oh………」

それらのことから言えることは簡単なことだった………万能者トリバイバーはこれまで以上に最悪の事態に対面することになったのだ

備をして発射するだけだが、その兵器の発射を邪魔されるか、撃ち落とされてでもしたら終わりだ……。それを迎撃できそうな奴の撃破が妨害、その兵器が発射された後、目的の高度まで上がるまで守るのを頼む!!」

そこからは魔の10分と言われるほどに更に激しい戦闘が行われた

敵も味方もその目的が理解し、両者が激しくぶつかり合う事態に発展したからだ……

中には空を飛んでいくその兵器に向かう攻撃を防ごうと自らの身体を盾にするもの、味方をぶん投げるなどの奇想天外な策などを使う者が現れるほどだった……

そして……

ボン ボン ボン ボン

空に太陽が4つ出来上がった

「『こちら万能者、お待たせしたな……。あのフード付きマンツの集団に一泡吹かせる用意が完了した!!それじゃ攻撃を開始する!!』サンライト・パラノイア攻撃開始!!」

その通信と共にその4つの太陽はフードマンツの集団に豪雨のような光の雨を降らした

その光は曲線を描くように曲がりの確に攻撃対象外の存在全てを避け、フード付きマンツの集団に降り注ぎ、センサーや関節部などの装甲がない、又は薄い部分から貫き、内部を破壊していった……。そんな恐ろしい光の雨は情け容赦なく10分ほどフード付きマンツの集団のみに降り注いだ……

その光の雨がやみ、4つの太陽の光が無くなった頃……。『マジか……。かなり容赦ない攻撃設定にしたはずなんだが……。ほんの少し生き残ってやがる』

ほんのわずか、殆どが大破している状態………されど少数のフード付きマントの集団が生き残っていたのだ

それは正規軍とG&K社、鉄血、その他に緊張が走った

そんな中でフード付きマントの集団は

コチラ………戦闘継続不可………自壊シマス

コチラ………損傷大………サレド行動可能

………コチラ無傷ナレド、味方全滅………

コチラ………

………『knight』『hiro』全滅ヲ確認

全戦力ノ89%損失及ビ戦闘不可ヲ確認………

コレ以上ノ戦闘ハ戦闘経験ノ蓄積ガ不可能、超常現象ナドニヨル自壊不完全ニヨルデータ流出ノ可能性大ト判断………

………全機体ニ伝達

撤退ヲ開始セヨ、繰り返ス撤退ヲ開始セヨ

撤退ガ困難ナ場合ハ完全ニ自壊セヨ

我々ハコノ戦イデノ目的ヲ果タシタ

コレ以上ノ戦イハ得ラレルモノハナイ

脚部緊急リミッターヲ完全解除シ撤退ヲ開始セヨ

了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解

了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解

この戦場からこれ以上得られるものがないと判断し、撤退することを選択し、すぐさま行動に移した

その行動は彼らの敵である者達も見ることができた

それはかなりの数を減らし、敗走しているのにもかかわらず、あま

りにも綺麗に統制が整っている撤退だったこと、スモークや音響閃光弾、逃げられないものによる決死の足止めなど様々な方法で徹底的なまでの撤退のサポートがあったこと、そしてあり得ないほどの速度での撤退などにより、追撃はほぼ不可能だったという……

結果、ものの数分でその存在達は戦場から姿を消した

その出来事は戦っていた者どころか見えざるもの達にとつても怨嗟を忘れ一種の恐怖を感じるほどだった

その存在達に恐怖はないのかと……

何はともあれ、その戦いは彼らの撤退により、終止符が打たれたことは間違いなかった

(……アイツらの今回の戦いで行動パターン及び目的、そして過去の出来事と技術系から察するに……非常にまずいな……コレが繰り返されたら取り返しのつかない事態に発展しかねない……というかもうその事態かもしれない……こりや決断するしかない……幸い今、鉄血と一時的な同盟を結んでいるから繋がりができたしな)

万能者のとある決断とともに……

数十分後……

『ええ、こちら万能者だ……突然ではあるがこの作戦に参加した全ての勢力に通信している……戦いが終わって休んでいるところ悪いがとてつもなく悪い知らせだ……あのフード付きマン
トのヤツらは完全には使いこなせてはいないが俺の技術……正

確には俺を作り上げた技術が使われていることが間違いないということが判明した……更には、過去に俺を含むこつちの側の戦い方、技術、技、兵器、超常現象などを見て行動して学んできたらしい……それもヤツらが動いているのが分かったのが数ヶ月前、それもとある戦いで偶然にだ……そして今回の戦いではヤツら、それらの経験を活かしてやがった……俺との戦闘などに関しては一回だけのはずのに対してアレほどの対策が取れていた……ここまで言えばお分かりだろう……俺たちはヤツらに新たな成長の糧を与えてしまったらしい……それも膨大かつ未知と新たな技術などの新たな経験はかなり活かすのが非常に上手いヤツらにな……下手をすればもう手に負えないモノのようなものがヤツらの手によって作り上げられる可能性が出てきたってことだ……今回の戦いに出てきたアレらの更に上のモノがあれば以上の数でな……そこで俺は提案したい……正規軍とG&K社、鉄血、なんか巻き込まれていた別勢力……この件に関してだけでもいいから同盟を結んでもらいたい!!というか協力しないと戦力、手の数とかが全く足りない!!今回の戦いであつちこつちで戦力大幅に減ってるしな!?……同盟結んだら、自分がある程度の報酬というかこの件以外にもその他の将来的な問題の解決などに関して手助けをすることを約束する……というか本当頼む、あんたらでいう世界の輝きを更新する前に世界が色々と更新されてしまう案件だから、割とマジで』

その万能者の言葉はその戦いに参加した全ての勢力に全領域通信によって隔てなく届けられることとなった

それはこの戦いの終わりが、新たな戦いの始まりということを示していた……

大きな事の後の事後処理は大体めちやくちやめんどくさいことの百鬼夜行状態である（大規模コラボ

戦闘終了から数十分後……

「コレでお別れだな」

『ああ、お別れだな』

正規軍のAA-2改のパイロット達とFUNNYS達は別れようとしていた

『と言つても今回のことで今後どうなるか分からん状況だしな……ひよっとしたらあんたらと協力する可能性もないことはないかって感じだな』

「……一応テロリストの傭兵ではあるが実力も技術力もあるみたいだしな……今の俺らじゃ手に負えないのは目に見えてるしな……ほんとどこでそれ手に入れたんだか……」

『そこは企業秘密とノーコメントって事で』

そんな他愛のない会話を繰り返り広げつつもその時間はやってきた

『じゃあ、今度会う時は敵でないことを祈る』

「そもそもお前らテロリストだから、次あつたら高確率で逮捕案件だと思ふがな……ただそう願いたいものだ」

その日その戦いで、各勢力に甚大な被害が出ることとなり、しばらくの間どの勢力も立て直しに追われることになったのはいうまでもなかった

尚、FUNNYSに関してだが、少人数であったことが幸いしたのか、多少の被害はあれど死傷者なしだったことを書き加えておく……

鉄血防衛ライン破壊作戦から二週間後……

IOP社 特殊個室にて

「……なんかおかしいとは思っていたが……マジか」
万能者は今回の戦いで手に入れたフード付きマントの残骸や使用していた武器の解析を行なっていた
その結果ある意外なことが分かったのだ

「コレら全部劣化版だ……技術不足なのと鹵獲対策でか、動くところや制御する部分などをかなりギリギリのラインまで意図的に削ってやがる……アイツら先の先のもしものもしものことまで考えてやがる……そうだもんなコレが技術劣化版じゃなければ俺らあつという間に蜂の巣か灰だもんなあ……」
それらの兵器は万能者が見れば、自らの知る兵器からかけ離れ、意図的に改悪された劣化版だったのだ

「……多分もし自壊が不完全もしくは機能しない場合で俺に鹵獲されて解析されることなどの最悪な事態も計算と戦術に入れてたんだろうな……だとしたらアイツらは最低限かつ最大限、リスクも最小限でこっちの戦力削りと情報・データ取りに来てたつてことか……こりやアイツらの情報がほんの僅かぐらいしか掴めないな、こういう時『Pawn』の設計が優秀すぎるのが腹立つな……一応手に入れたデータでこっち側の戦術人形の強化プランの反映ぐらいには使えそうだが……今回の戦いであっち側敗北してるから対策・強化をやつてきそうなんだよ……マジで腹立つなこういうときの『Pawn』の設計の優秀さ」

その後、その解析結果は正規軍とG&K社に提出され両者を頭を抱えさせ、鉄血との共同戦線案を更に考慮する事態となったのはいうまでもなかった

尚、今回の戦いの報酬は基本的に損害の補修の形になり、正規軍から出るはずだった報酬は自軍の被害のこととあつて無くなることになり、一部というか大半を阿鼻叫喚の地獄に叩き込むことになったのは別の話……

人類未踏地区
?????

データ損失率70%……ソノ損失データカラサルベージサレタデータモ10%未滿……

……損失シタデータノ大半ガ通常戦闘デアルコト、最重要戦闘データノ損失ハホボナイコト、原因ト思ワレル超常現象データモ僅カナガラモ確保完了、回収データノ量ガ非常ニ膨大デアルコトナドガ不幸中ノ幸イト判断

回収・サルベータデータハ全テ完全特殊保管完了

特殊データ06ヲ解放……超常現象対策システム構築・開発開始……

通常・最重要戦闘データヲ『pawn』『knight』『wiz za rd』ヘノ反映強化ヲ開始……完成率ヲ更ニ上ゲル

更ニα・demonトノ戦闘データ、敵ノ電子強化システム観測データ、ソノ他規格外ユニットトノ戦闘データ、『pawn repli ca改 type「hero』ノ戦闘データヲ元二次期対規格外・上位者存在機体開発ヲ開始

『戦略級兵器群』ノ開発ヲ解禁、開発ヲ開始スル

……最後ニ敵ノ戦術・戦略データノ解析シ、コチラノ動き方ノデータモ反映、対策データヲ製作開始スル

……全テハ戦イニ勝ち、戦イノ後ヲ生キルモノ
ノ為ニ……

それは何を意味しているのかはまだ分からない……

だが将来、彼らがまた我々の元へ現れることを示していることは間違いない

き渡った・・・

そして、万能者はその光景を現実逃避をしながら全力で見えて見ぬふりをしたのは言うまでもなかった・・・

大事で棚からぼた餅が起きた時は大体裏でロクなことが起きている場合が多いよね（コラボ回2）

違法カジノ 地下闘技場

そこでは激戦が………

ブウン!! ゴシヤツ!!

ドスツ!! ドスツ!! ドスツ!! ドスツ!! ドスツ!!

ジャギイン!! ズバア!! グザツ

ズバア!! ズバア!! ズバア!!

ドゴオツ!! バギヤツ! ドガアツ! ズドオン! ズドオン!

ババババババババババババババツ!!

ガアツン!! ドゴオツ!!

否、一方的な虐殺が行われていた

串刺しや、蜂の巣、真っ二つ、細切れ、ミンチ、引き裂かれ………とにかくその状況を言葉で細かく表すならばいくつもの言葉が必要になるほどの様々な方法で殺された悪魔、獣の骸と肉片が闘技場の地面をブラッドバスに変えるほどまでに転がっていた

そして、虐殺をしている側である血に濡れたフード付きのマントで姿形を隠している4体はその惨状に構わず、それぞれが手に持っている武器で更なる犠牲者を生み出していった………

あるものは自分の身長を超えている長く巨大な槍………ランスで駆使し、敵を串刺しにし、目に止まらぬ連撃で蜂の巣にし、叩き砕く者

あるものは盾の下部に爪をつけた武器で敵を爪で八つ裂きにし、盾で敵の攻撃または敵そのものを砕き、盾の裏に隠されたレーザー短機関銃で蜂の巣にする者

あるものは片刃のナックルガード付きの双剣を持ち、敵を切り刻み、殴り殺し、双剣を組み合わせて巨大な鋏にして敵に突き刺して開きちぎり、挟んで真っ二つにする者

あるものは両手に大型のトンファーを二つ持ち、敵を殴りや突き、

叩くなどで敵を砕き、トンファーに内蔵したショットガンで蜂の巣、またはミンチにする者

4体全てがそれぞれの別々の武器を巧みに扱っていた……それは一体一体が一騎当千の強さを持ちながら、心が繋がっているかのような動きで連携をする……まるでそれはその場に嵐が発生し、敵を次々とその暴風に巻き込んで命を刈り取っているようであった

その嵐を前に見る見るうちに悪魔と獣達は数を減らしていき、悪魔と獣達の行動は二つに分かれることになった……その惨状に構わず彼らに突っ込んでいくもの、その惨状に恐れをなして上層階へ逃げていくもの……

前者は同族の血肉によって出来たブラッドバスに沈むものの仲間入りを果たし、後者は追撃された一部を除きその場からは生き延びることができた……

ラストダンスは始まってから7分も経たずに終わりを迎えることとなった……

戦闘終了後……

「demon」近縁存在ノデータ、薬物改造者ノデータ、門……「demon gate」ノデータ回収完了……

4体のナニカ達は自分達が倒した存在から肉片や鱗などを回収、又は悪魔達が魔界から呼び寄せている門の観察を行っていた

調査ノ結果……「demon gate」ガ更ナル「demon」近縁存在……最悪ノ場合「demon」クラスノ存在ヲ呼び寄セル可能性アリト判断

民間人ノ被害ヲ『最小限』ニスル為、爆弾ノ爆破ニヨル破壊ヲ実行スル

爆弾設置後直チニカプセルニ搭乗シ撤退ヲ開始スル

どうやら門を破壊する選択肢を選んだようだ

図らずとも悪魔による混沌は正体不明勢力の乱入によって止められる形となった……

40分後……

「……なんじゃこりゃ」

FUNNYSの部隊は全てが終わった後の地下闘技場にいた

そこは悪魔とケダモノ化した人間の血肉のブラッドバスが出来上がっており、生存したものなど一人もなし……。更にブラッドバスの真ん中には石材の他に肉片や骨などで出来た門だったと思われる建造物が爆破によるものなのか粉々砕かれ、その残骸が辺りに転がっている

まさしく惨劇の後であった……

「なんか、道中にいる悪魔とケダモノの数が予想をしていたよりも少ないなと思っていたが……。本当何があったんだ？」

「ここまで来た際に遭遇した奴らは何かに怯えるように逃げていたように見えたが……。何かしらがこの大惨事を引き起こしたんだろうが……。この数を壊滅させるって絶対ヤバイやつだなこりゃ」

「……。だが、まあ今回は返って都合が良かった、コレで爺さんが言ってくれた緊急事態と俺たちの撤退ルート確保が楽に終わったってことになるな……。お前らさっさと脱出するぞ」

ある意味幸いな状況を活用し、彼らは無事にこの違法カジノからの脱出したのだった……

(……。一応警戒しておいた方がいいな、あの数の悪魔を全滅させられる存在がいるということを)

だが、誰が門を破壊したのか……。その真相はなんであったのか……。はその後調査に来た者達の手でも知ることがなかったのは言うまでもなかった……

色々ありすぎて時系列がおかしくなることって結構あるあるだよな？

違法カジノの件から数日後

??? 室長室のような場所（いつもの）

「……で、目的の書類は回収に成功して、偶然にも例の老兵に遭遇したってわけか……結果として棚ぼただったとはいえ色々起こりすぎてない？」

「ホントそれな、最近明らかに色々起こりすぎでつせ大将……ガチで何かの前触れなんじゃないか？」

「……日本で言うお祓いかなんかに行くべきか？これ」

そこでは二人がげっそりとした表情で話し合っていた……どうやらここ最近、彼らの周りで想定外のことが多発しているようだった

「正規軍の部隊や、確認されていた白いヤツらの部隊などの神隠し事件や、悪魔やら人外などの存在による事件、それによる白いヤツらの動きの変化……キリがないな」

「……ホント厄祓い探した方がいいかもな」

それらはどれもこれも扱いを一步間違えれば大惨事を引き起こすことは間違いない出来事であった

そんな様々会話があつた中、

「そういえば大将、今使ってる書類つてもしかして……」

「ああ、あの老兵にこっそり送るヤツだ、主にあの白いヤツら関係の……最近あつちの方も危機感を感じているのか、最初の段階であるものの何かの開発を始めてるぽいからな……そのついでにいくつかの情報も添えてある」

「……いいんですか？それ「カオナシ」達が結構苦勞して手に入れた情報がちらほら入ってるじゃないですか」

「いいんだよ、部下がお世話になったんだ、これくらいのお礼は送らな
いとな……つとそろそろお前も別の仕事があるだろ？」
「ありゃ？忘れてた……」

こうして、彼らは己の目的のために動いていった……

なお数ヶ月後の大規模作戦の際に再び厄介ごとが起きた時は、
再び頭を抱えたそうな……
??????
は

大規模作戦から2ヶ月後……

I O P社 特殊個室

「この「p a w n」……もとい「p a w n r e p l i c a」の戦闘
力を前見た偽装正規軍戦術人形のやつと比較して成長度合いを計算
すると……うわあ、たった一回の戦闘で少なくとも三
倍もの能力向上に繋がってんのか？更に今回の戦闘で経験したのを
想定して計算すると……うわあアカン、下手すればあっ
ちで「p a w n」の完全再現機体が出来るのがかなり早まる可能性が
出てくるってことか……」

万能者は部屋に籠って例のフード付きマントの集団……己の作っ
たのと同じ技術が使われた存在達の解析結果を使って計算及び調査
行っていた

その結果はどう考えてもヤバいの一言に尽きるものであった

「……コレにあの白い奴ら……パラデウスだっけか？話を聞く
限り遺跡の技術をロクな使い方をしていない様子のヤツらをフード
付きマントと同じように無力化する方針で考えているらしい
し……そうなると格納庫のロックを解除を段階的に早め
なきやいかな……ついでに並行して進めていた「戦術人形強
化プラン」の先行試作強化の実行に移してみるか、そしてアレらも
さっさと完成させないとな……」

万能者はその言葉とともに後ろの方を向いた

その視線の先には何やら開発途中の試験者が3体鎮座していた……

その姿は重装兵装と呼ばれるものに似ていたが細部が変わっており、バックパックに至ってはコンテナが巨大化している以外は戦術支援兵装のものと似ていた……

「そろそろ本腰を入れてこの世界のマナやらオカルトなどの超常現象を調べないと不味そうだしな……アイツらが既にそれらの技術を獲得している可能性が高いからな……それによってどういったものなのか調べないと対策出来なさそうだしな」

そう言いながら万能者は今後の方針を固めていった……

ピツ シュー

「おい万能者、お前の身体をバラさせろ」

カチツ

ズドオーーーーーーンンンツ!!

「ぬわーーーーーっっ!!??」

「……ドアのパスワード変えたはずだったんだがな……念のためちよつと強力な地雷仕掛けとして正解だったな……あとでこの部屋のセキュリティの強化もしておこう」(真顔)

……万能者をも恐怖させる狂気(変態)と攻防を繰り広げながら

※ ……ノーコメントで(遠い目)

その後、万能者の調査の一手である開発されていた試験者特殊仕様は無事に完成し、調査が有効的に進められるとされているG&K社の様々な基地に送られることになるのだが別の話である……

「こ、国連の大規模き、拠点がて、天変地異の災害で、ふ、二つ同時に壊滅したと連絡が入りましたあ!!!?」
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・えっ』

それはあまりにも突然だった

天候も快晴、周囲に異常もない、時代的には平和とは程遠い状態ではあるものの間違いなくその時、その二つの大規模拠点は平和だった・・・・・・・・

片方に火災を巻き込んで火災旋風になったと思われる大規模な竜巻がどこからともなく現れ、もう片方にはまるで大吹雪を纏ったような大規模な竜巻が発生するまでは・・・・・・・・

そこからは文字通りの大惨事であった

炎の巨大な竜巻は次々と拠点の兵器や設備、兵士などを巻き込んで燃やし尽くし、巻き込んだ炎を纏った破片をあちこちに飛ばして二次災害を引き起こしていき・・・・・・・・

大吹雪の巨大な竜巻強力な冷気を拠点の全て平等に与え氷漬けにしていき、その状態の拠点を雹を大小問わずに降らせて破壊の限りを尽くしていった・・・・・・・・

性質は異なりはすれど災害による破壊には変わりなく、その後、その二つの拠点に残ったものはその破壊と惨劇の爪痕と僅かな生き残りのみであった・・・・・・・・

更にいえば奇妙なことに二つの竜巻は国連の拠点を破壊の限りを尽くした後、まるで役目を終えたかのように消滅した・・・・・・・・そのせい、近くの街などの民間人がいる場所には一切の被害がなかったのだ

明らかに人間の常識外の出来事であることは間違いないが、調べようにも調べようもないこと、被害が最悪の部類であることが伴い国連はしばらくの間行動ができない事態に陥ることになった・・・・・・・・

『ボルケーノ』『ブリザード』『トルネード』ノ試験結果……異
常ナシト判断

国連ニ甚大ナ被害ヲモタラスコトニ成功……
特殊戦略・戦術兵器ノ開発ステツプヲ最終段階ニ移行ガ可能デアルコ
トヲ提案スル

その裏で奴らは爪を研ぎながら……

八つ当たりの原因って結構しようもないことが原因
だったりする時が多いよね

大規模作戦から数ヶ月後

崩壊液・放射能重度汚染地帯 特定監視区

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

ドガアアアアア!!

バシユツ! バシユツ!

ズドオーアアア! ズドオーアアア!

そこでは戦いが起きていた

その地区では汚染地帯の中でもE・L・I・Dが非常に多く、そして動きも非常に活発であることから正規軍で嚴重に監視されている場所でもあった

そしてそのE・L・I・Dの大群が人類が居住できる残り少なくなっている環境、その境界線を守る拠点に向かって進撃をしていたのだ

その大群の中にはE・L・I・Dの中でも、とてつもなく危険であるD型が数十体以上も確認されている緊急事態だった

そう、『だった』のだ………

ギイヤアアアアアア!!?

グシヤツ!

ズドオン!! ズドオン!!

グキヤツ!!

そこには正規軍を蹂躪するE・L・I・Dの光景ではなく、逆に正規軍がE・L・I・Dを蹂躪する光景が広がっていたのだ

正規軍も決して少なくない被害が出ているものの、E・L・I・D

の大群と戦う際の対価と考えればとてつもなく安いものであった

その日、その戦いはE・L・I・Dの大群が全滅することによって
終わりを迎えることとなった……

特定監視区 正規軍境界線防衛拠点

「指揮関係は問題なく働いてたな……正規軍の戦術人形を効果的に動かしているからこの辺は問題なしと判断して良さそうだな……これで想定で「条件付き」ではアレらの2個中隊クラスとある程度は渡り合えるな」

そこでは万能者がそう喋りながら作業をしていた

「ただ……やっぱ正規軍の兵器の火力、特に戦術人形クラス
の火力が足りてないな……戦車とか機甲系に関しては問題はな
いけど、その細かい部分を守る戦術人形の補助がなあ……
敵の数が多ければ多いほどジャイアントキリングができるって
いう戦法がある上に勝ったら勝ったで負けたら負けたで学んで強くなっ
てくるってアイツらの性質が厄介にもほどがあんぞ……」

万能者が今回の結果と反省点を整理している中で……

「……」

正規軍の関係者たちは終始口をあんぐりと開けて呆然としていた
呆然としている理由、万能者がここにいる理由は簡単だった

この戦いに直接は参加していないものの、万能者自身が作り上げた
「試験者万能兵装」とその他兵装を含んだ数体をその戦場に出撃させ
ることによって一枚噛んでいたのだ

時間は少し遡る……

正規軍の戦力が例の大規模作戦によって減少しており、その煽りが人類生存可能地区と汚染地帯との境界線を守る拠点にも受けている中でE・L・I・Dの大群が接近していると言う緊急事態が起こったのだ

それも自分たちの戦力を増援に出すのが間に合わない上に、協力者の大半がこの時に限って別の任務で出払っているという時に限ってだ……

これ以上にならないほどの緊急事態に正規軍は凄まじく慌てた、様々な対策や意見などを絞り出しはするものの効果的ではないものばかりで八方塞がりな状況に陥ろうとした時

「……そういえば万能者って今どうしているんだろう」

「それだあ……!!」

その一人の幹部の言葉にその会議の全員が叫んだ

因縁や過去の過ち、プライドなど全てを捨て去ってまでも救いの存在がいたことに気が付いたのだ

そう思い立ったら行動は早かった

そして、その協力要請に万能者は……

「……色々と丁度過ぎて、こっちがビビったよ……」
分かった、ちよつと実験的部分が混ざることになるが協力をする」

条件付きではあるが協力を受け入れたのだ

その結果が今日の前の現実であった

試験者が正規軍の戦術人形と兵器群を指揮して挙げた成果があまりにも破格であったのだ

形的には想像を絶するほどの良い成果だったのはいいことであつたのであろう、されど正規軍はその結果を手放しでは喜ばなかつたなせなら……

「……万能者が用意した奴らめちやくちや指揮うまかったな……俺らよりも正確、冷静かつ大胆に」

「……うん、ミリ単位レベルでの戦術操作をしてたなあ……一部のD型を戦術人形の部隊だけでやってたなあ……しかも被害をめちやくちや最小限に尚且つ数体やってたし」

「……遠回しに俺らの指揮が下手くそってことだよな、この結果……」

「……更に万能者のさっきの話聞く限り、アレで例のヤツらの2個中隊クラスを条件付きで渡り合えるって？……どんだけやばいんだよ例のヤツら」

「……うん、泣きたい」

「「それな」」

その結果が正規軍の指揮能力低さと対策不足そして、p a w nに対する戦力と対策の低さを物語っていたからだ

この件の収束後、正規軍は戦力の補充及び p a w n対策の強化に力を入れることになった

なお余談であるが、

「……ところで万能者さん？あの試験者でしたけ？……

アレのを二・三機ほどこちらにも譲ってもらえますか……？、無論タダとは言いませんので……」

「あー……悪い今回の戦闘に出した先行量産分はちよつと例のヤツらに学ばれたら不味い、もしくはすでに手に渡っていると思われる特殊なもの調査のために別のところに送る予定なんだ……それにアンタらに渡すヤツは特段レベルの調整したヤツじゃないとアカンと思ってているんだ」

「……前者はともかく、とりあえず後者の理由を聞きましよう……理由は？」

「今回戦闘に出した試験者はどちらかと言うと指揮向きの兵装じゃな

いからな、いや向いてはいるんだろうけど役割が多すぎて行動の複雑化が起こる可能性がある………。だったらアンタら専用の兵装機体を作れる形になるわけだ………。それにアンタらに生半可なもの渡したら碌なことが起きる可能性が高いからな、パラデウスだっけか？その辺のスパイとか変なのとかがアンタらの組織に入り込んでいて噂じゃないか………。ならそれ相応のブラックボックス化と対策システムの搭載などをしなきゃ危ないじゃないか」

「………。ドウモスミマセンデシタ」(後半の正論に土下座)

こんな会話があり、正規軍の試験者導入は先の話になることとなり、その腹いせか八つ当たりかは不明であるが、正規軍に蔓延り隠れている様々な勢力のスパイを血祭りに上げるが如く大搜索兼掃討が行われたのだが、それは別の話である

あり得たかもしれない 『革命』

ドガアーーン!! チュドアーーン!!

そこでは凄まじい激戦……………

「クソ、なんなんだ鉄血のこの強さは!？」

「せ、戦車が……………一撃で3両も破壊されちゃった……………」

「……………どうゆうことなの?」

「クソ!!クソオ!上層部の尻拭いの戦いに嫌々ながら来てみたらその戦いが負け戦?……………やってられないぜ!!」

「そんなことより悪い知らせ……………前方に出ていた自律機甲師団及び戦術人形大隊全て壊滅だ……………すでにここが最前線だ……………うそおん」

……………否、虐殺にも等しい一方的な戦いが起こっていた

練度・戦力・戦術・戦略などどれを取って格上であるはずの正規軍、それが本気を出せば赤子の手を捻るが如く葬れる格下であるはずの鉄血に一方的に負けているのだ

「やむ得ない、撤退だ!」

その日、正規軍は鉄血本拠地攻略を断念することとなった

「代理人さん敵の様子はどうか?」

『正規軍は撤退を開始、そして正規軍の攻撃に乗じて裏の方から奇襲してきた例の白い勢力も全滅を確認しました』

「おお、そうか……………ギリギリ戦術人形の強化が戦いに間に合わせてよかったな……………出なきやこうもうまくいかないしなあ」

その場所でのその存在『厄災』は鉄血のハイエンドモデル『代理人』と連絡をしており、どうやら協力関係にあるようであった

「しかし案の定というか、こつちにかなりの戦力を火消しとして投入してきたなあ……………まあ正規軍も国家局もコレで痛い目を見た

だろうから、しばらくの間は何もできないだろうし、肅清と「白い奴ら」の対処とかに追われるだろうな……ついでに白い奴らの拠点の大半を内緒で送っておこうか」

『……』

『厄災』はにこやかにそう言いながら、容赦のない情報攻撃を考えていた

その様子を代理人は遠い目をしながらあることを思い返した

『なるほどなるほど……つまり俺は残酷かつ残虐で、尚且つとてつもなくしようもないことに巻き込まれたというわけか……なるほどなるほどなるほどなあ……エルダーブレイン……いや、エリザちゃんって呼べばいいかな？かなりの条件付きではあるが協力をしようか……大丈夫条件を守って貰えばあなた方になりの利益が出るから ね？』

『は、はいイ……』

それは、実際はその通りに利益があつたもののその時の『厄災』の威圧・事前の襲撃・その脅迫じみた声の強さにエルダーブレインは泣きながら了承した光景であつた

「うん？……すまん代理人さん、なんか大陸弾道ミサイルらしきものが飛んできているのを事前に使えるようにした衛星から確認したから、帰還する前に撃ち落としておくよ」

『……わかりました、お願いします』

代理人はその止めることができないう理不尽な存在の暴力と恐怖に晒される関係者とその事態に巻き込まれた者達のことを不憫に思わざる得なかつた

その日、鉄血を巡る戦いは「一つの存在」のブチ切れの行動により全てが狂い果て、最早誰にも制御ができず、誰にも想像もできない事態へと陥ることとなつた

ホウ……ホウ……

まだ深夜ではあるものの万能者は眠りから目を覚ましていた……
「……なんかもたんとんでもない夢みたような……
いやまだ理屈は分かる……多分夢の俺はなんかにブチ切れて
ああいう風にやってみたんだな……まだ『アレら』を使うほど
ではなかったこと、かなり冷静だったみたいだな？……
何があつたかは気になるが、まあ放つておくとして……」
万能者はその夢の内容に言葉に出しながら少しの考察した後、とある方向へと視線を向けた……

そこには

不法侵入をバレているにもかかわらず堂々と手指をワキワキと動かして襲いかかろうとしている変態リヴァイルがいた

「……とりあえず聞こう、俺の部屋に入ってきて何を
するつもりだった？」
万能者は暫し無言でいたがとりあえずその変態に口を開いた

その質問にリヴァイルは答えた

「KA☆I☆TA☆TI☆DA、理由は無論、愛ゆえの行動だ!!」
答えると同時に某怪盗三世の特殊な飛び方の如く万能者に飛び込んだ

ブチッ

万能者はキレた

今までリヴァイルの行動に振り回されたことを我慢してきた堪忍袋の尾が切れたのだ

ガゴオーーーーーンツッ!
アングヤバガアギヤギゲエーーーーー
バゴオーーーーーンツ!!
!!!!??

その断末魔にも等しく、もはや言葉にもならない絶叫が深夜IOP社に響くことになったのはいうまでもなかった

なおその後全身包帯ぐるぐる巻きの変態が普段通りに仕事をしている姿があつたことは余談である

※手加減とはなんだつたのか（真顔）

忘れた頃にヤバいことが起こるものってあるよね……。(例：桃○のとりかえしカードや時限爆弾カードなど)

IOP社 特殊個室

万能者の借りている個室にとある来客が来訪していた

「お久しぶりです」

「お久しぶりだな、ウエルロッドさん」

その来客は過去にドラゴンブラッドの件の始まりに出会い、巻き込まれてしまったG&K社の戦術人形「ウイルロッドmkii」であった

「……以前に一度聞いていたと言え、まさかあなたがIOPに来ていたとは」

「悪いな……ドラゴンブラッドの件もあるが、今回の起きている件に関しては俺に使われている技術が関わりがある問題なもんだからなあ……」

「……何か疲れてませんか？」

「……最近変態の夜這い(データ取り含む)がね……酷いのよ……もういつそのことアイツのメンタルデータとか中枢部分を弄ってやろうかなって……でもアイツが脱落するとえらいことが起こるし……今度やってきたら記憶処理ぐらいで我慢しておくか……HAHA……」

「……なんとなくですが大変なのは察しました」

そんな会話ありつつも

「……で？ドラゴンブラッドの件は今どんな状況になっているんだ？最近別のことが忙しくて関わらなかつたから情報が欲しいんだ」

「……分かりました」

ウエルロッドは己の知っている情報を万能者に話し始めた

「現状ある程度の非合法に所持しているものに関しては処分し終えたものの、最近の正規軍の敵スパイ粛清の件によって、逃げ出したスパイがいて、どうやらその一部が正規軍が保管していた『ドラゴンブラッド』の一部を持ち去ったようでして……予測ではあるのですが、『パラデウス』が手に入れたと考えた方がいいですね……」

「……………マジか、よりにもよってアカン研究しているぽいところに……………こりやそこをさっさと壊滅させて処分しないと碌なことにならないな……………」

「あと気になることと言えば、例の「リホーマー」そつくりの教祖がいる新興宗教に関してですが……………その宗教の本拠地からドラゴンブラッドの反応が確認されました」

「……………今度リホーマーさんと一緒に会いに行つた方がいいな、その教祖とやらに」

「彼らは今後の予想の出来ない事態に備えて用意をするのだ………」

「あ、ウエルロッドさんなんか欲しい武装とかの要望があつたら俺に言ってくれ、かなりヤバイ事態だしそれなりに備えとかないといけないみたいだしな」

「……………ありがとうございます……………できれば常識の範囲内のものにして下さいね?」

「できる限り努力はする……………で?何か欲しいんだ?」

「……………光学迷彩や、小型の溶断道具、EMPジャマー(他にも色々あるので省略)」

「……………かなりあるなあ……………というかスパイ映画でありそんなものばかりだな」

「……………悪いですか?あこがれるものがあつて……………すまん、とつと作り始めるよ」

なお後日、ウエルロッドに送られた武装は常識の範囲内に収まりはしているものかなりギリギリのラインのものであったため、しばらくの間頭痛に悩まされつつもかなりの働きをみせることとなったのは

余談である

??? 非合法特殊研究施設

そこには地獄絵図の凄惨な光景が広がっていた

その施設にあるものを防衛していた『白い』戦術人形、その混乱に乗じて解き放たれたE・L・I・D、非合法的な研究をしていた職員などの全てが様々な『形』で地に倒れ伏していた

『パラデウス』ノ研究施設ノ防衛戦力全テヲ排除完了

『Hunter』『Hero専用新造試作武器』ノ運用試験ヲ終了スル
コレヨリデータ及び資源ノ回収ヲ行ウ

その光景を作り出したフード付きマントの集団はまるで作業を終わらせた後の片付けのように事後処理に取り掛かった

そして……

コチラ回収8、正体不明物質ヲ確認、解析開始スル

回収の役割の機体が何かを見つけ解析を始めた……が異変はそれと同時に起きた

逕滯ス槽。？多イ縋亥愛譚ユ縋ffウイ螻鍋函込ウ縋翫す？……？……
？・潜エ過・縋守函込ウ縋、縋、縋、縋、縋、縋……

解析している機体に異常が発生したのだ、行動自体は異常がないものの言葉は文字化けを起こしていたのだ

回収8ノ言語システムニ異常ヲ確認……正体不明物質ニヨル
モノト判断……ソレ以外ニ異常ハナイ模様……コノ正体不明物質
ニツケラレタト思ワレル名前ヲ確認……『ドラゴンブラッド』
ト命名サレタ正体不明物質ノ回収ヲ開始スル……

何はともあれ……

この件が今後何を引き起こすのかは誰にも分からない……

「あら？なかなか面白い存在達が我々の血を手に入れるとは
ねえ・・・彼らに関しては今は見送っておこうかしら？鋼の戦
士と決められたルール内で何かしら面白そうなことを起こしそうだ
わ♪」

その光景を誰かが面白そうに眺めながら・・・

る指揮官達や戦術人形達に任せるしかないわね」

そう言いながら今後に関する事を考えて行った

「……さて、その軍事バランスを崩壊させかねないものを物の見事に私達の環境と状態にうまく調整し、形にしてみせた後に「ヤツラに繋がるかはどうかは分からないけどちよつとした手掛かりを掴めるかもしれない」と言っていて出してきたかは分からない様な許可をとって危険地帯に行った彼はどうしているかしら……色々なとおもし……大変なことを引き起こしていなければいいのだけれど……」

現在このIOP社内にいない万能者のことを（色んな意味で）思いながら……

重度汚染地域 永遠放棄地区 廃墟都市

そこは放射能や崩壊液、生物兵器などの汚染や異常な環境変化などによって今後人類がその場所に住むことが永遠に不可能であろうという判断のもと、永遠に破棄されることが決定された地区であった

そして、その名の通りそこには住民や生き物は愚か、E・L・I・Dすらそこには存在しておらず、暴風雨と雷などによってそこにあった文明の辛うじて存在はしているものの、徐々に尚且つ確実に削られるように破壊されていった……

そんな危険地帯に

「……さつきからガンガンとちっちゃい瓦礫とかが当たってくるなあ……まあこのくらいならなんとかd

ズドドドオーンンンンツツ!!!
……さすがに雷直撃は結構痛い」

「万能者は独り言を呟きながら歩いてた……」

「色々ひと段落したから今後出来なくなる外での自由調査行動を取らせてもらうのにこんなにかかるとはなあ……」

「．．．．．まあここ一応重度汚染地帯だし、今のいる立場を考えるとある程度の立ち入りの許可が必要だったりするし、過去の放浪時代のことで好き放題やってたししようがないかなあ．．．．．過去に色々行ってた時に入手した情報を元に色んなツテを使って目的詳しい場所の情報共々手に入れることができたが．．．．．これで何かしら分かるかといいな．．．．．出来ればなんで俺ら関係の技術が流出しているのか、遺跡が俺らの技術と関わりがあるのか、そもそも遺跡自体がなんなのか．．．．．本当に何かしら分からないとまづい事態になってるからな、割と本気で」

そう思いながら彼は進む．．．．．

（．．．．．本当に何が出てくるんだか．．．．．その場所にあることしか分かっていない、正規軍や国連すら知らなかった、戦争で消え去った企業に隠され、忘れ去れた遺跡は．．．．．）

その遺跡に一連の出来事の手掛かりを掴めることを望みながら．．．．．

大体遺産とかオーパーツとかって何かしらの火種になることがホント多いよね（遠い目）

重度汚染地域 永遠放棄地区 廃墟都市 地下下水道 地図非表記区画

そこに『巨大な扉』がドンと音が出るのではないかというのを錯覚するほどに大きく鎮座していた

その巨大な扉は周りの地下水道の壁などから見ても技術や材質が違い、一種のオーパーツと言えるようなものであること

そして、その巨大さと見るだけでもわかる頑丈さはちよつとやそつとのもものではびくともしないことが伺えた

事実その頑丈さで全てのモノを寄せ付けなかったのだ

例え、鼠などの小動物だろうが、時折り発生する水の氾濫、そしてこの遺跡を隠蔽しその技術を我が物にしようとした者達の手でも……………

ドスツ!! ギイイイイイイ……………
バギイ ベギイツ ゴリゴリ……………

……………新たな来訪者が来るまでは

「扉が三枚もあるタイプだったとはなあ……………そこまでして頑丈にするなら中に何かがあるのやら……………厄介ごとは確定だとしても手がかりがあればいいのだが」

その扉をゴリ押しともいうべき力でこじ開けた万能者はそのかなりの嚴重さから中のものが危険なものを想像してながらその扉に守られていた施設の中に入っていった

そして、入ってすぐにあるモノを万能者は見た

それは縦に4 m、横に2.1 mぐらいの長方形の輪っかの形をした機械であった

「ああ、そりや嚴重にはなるわなあ……………どつからどう見たつ

て『ゲート』だよなあ……ど○でもドア系の……
問題はこれは何の『ゲート』なのかだ……」

それを見た瞬間万能者は完全ではないものの、その物体がどういったものかを理解をした

「……見る限りゲート自体は動いていないようだが、周りの一部の機械が動いているみたいだな……お、端末らしきもの発見、なら何かしらやり始めないとな」

そう言いながら万能者は次のステップへと動き出したのだった

45分後……

ズウー……ズウー……

そこにはorzの体勢で落ち込んでいる万能者がいた

「……コイツの稼働記録と成果のデータしかねえ」

どうやら望むものは存在しなかったようであった

「的確にデータ破損の虫食い状態で復元できる部分を復元して言語翻訳の複雑なやつを試してみたが、まさか稼働データぐらいしかなく、俺関係の技術が一欠片もないとはなあ……いや、何もないよりはマシだが……マシンなんだがなあ……そしておまけに……」

そう言いながらその稼働データの元となっているある機械『ゲート』の方に目を向ける

そこにはさつきとは違い長方形の輪っかの中に何やら『光の穴』ともいべき何かが形成されていた

「調べ方が結構アレだったからか、なんか起動してしまっただけだな……厄介ごとなのは間違い無いが……色々準備してなんの類のゲートなのかを調べに入ってみるチャンスでもあるか」

万能者は色々あり、若干投げやり感を出しながらもそう考えた

????

????

それはあまりにも突然だった

その場所がとある『鏡』を隔離している場所であること、その地区を揺るがす緊急事態が起きていたこと、その騒ぎに引き寄せられるように様々なものが集まり出していったことなどで元々騒がしかったのだが、更なることが起こったのだ………

『喫茶 鉄血の室内の壁』にそれは突然現れたのだ

それは簡単に言葉に表すならば『光の穴』………いわば創作などの言葉から取ってみれば『ゲート』のようなものだった

無論それにその場にいた者たちは警戒した

あの『鏡』ですら何が起るか分からない厄介な物であるのに、更に何が起るか分からない『何かの穴』が現れたのだから無理もなかった………

そして、その『穴』から何かが現れた

その存在は人型で大きさが2 m近くあり、全身に装甲があり、背中には巨大なバックパックを背負っているという明らかに戦闘用ロボットのよう姿をしていた

それを見たものの反応は大きく分けて二つに分かれた

一つはこの存在に警戒し、武装を構えて迎撃の用意をするもの達、もう一つはその存在は………

ドンガラガラガツシャーーーーンツ!!!

その存在を知る者たちがズツコケや口をあんどり開けるなどの様々なリアクションをする者たちであった

そして、その光景を見たその存在は………

「………色々言いたいことがあるが、そちらも言いたいことあるみたいだし、というか知り合いがいるみたいだから、とりあえずまずは一つにしておこう………一体何がどうなってるんだ？この状況？」

そんなことを口に出したのだった

珍客だよ!! 全員集合!! 悪い子撲滅スペシヤル!! (コラボ回)

S09地区から離れたゴーストタウン 近くにて

「例の列車砲の巨大レーザー砲のやつがいるのが大体あの辺かな？
．．．．．うわあ見る限り戦車とかヘリも結構な数がある上で手持ちレーザーガン持っているやつも多いなありや．．．．．後のことを考えるとテロリストの戦意喪失させて余計な被害が出る前に戦車とヘリをやりながら、列車砲に近づいて行って、そこで無力化って感じがいいなこりや」

万能者は鹵獲された列車砲とテロリストが潜伏していると思われるゴーストタウンの近くで戦力の偵察しながら作戦を立てていた

「．．．．．しかし、ある程度想定外なことが起こることを考えていたが、並行世界に行つて軍の列車砲を占拠したテロリストを鎮圧する作戦に巻き込まれるとはなあ．．．．．とか見た覚えがあるヤツや世話になつているところのヤツもいるし．．．．．割とマジでなんなんだ？この並行世界？．．．．．世界と世界が微妙にくっ付いている感じになつているのか？それとも何かしらのヤバイ要因があつたりするのかな？．．．．．後でマジで調べておいた方がいいな」

そんな考察を言いつつも準備を整えていった．．．．．
そして．．．．．

「これでよしと．．．．．『こちら万能者、奇襲の用意が完了した．．．．．これより突撃を開始する』」

それはテロリスト達にとつて夢も希望もなく、別世界の鉄血にとつてはトラウマにも等しい『悪夢の災厄』が襲いかかる知らせだった

ゴーストタウン 列車砲近くテロリスト拠点

テロリストにとってその悪夢の始まりは突然であった

「大変だ大変だ！今属性過多の嬢ちゃん達との戦闘が起こっている場所との反対側の方でヤバイヤツがやって来て暴れまくってる!!」

「今度はそっちからかよ?! 一体どうしたんだ!?!」

『女侍』と『オレっ娘ロリ魔法少女』の属性過多やられているというわけ分からん報告の次は一体どんなヤツが来たんだ!?!」

その新たな非常事態を見て急いで仲間に情報を伝えに来たテロリストの一人が慌てながらも正確かつ分かりやすくその存在を伝えた
「全身装甲姿の四本腕の2mぐらいの人型ロボットみたいなのが、垂直ダブルバレルショットガンを超大型化したようなライフルでビームやテツカイ実弾をブツパなしまくって戦車やらヘリがやりまくってて、すでに虎の子の正規軍から鹵獲したホバータンクが一台やられてるらしい事になっているんだよお!!」

「『』」

だが、その報告は聞いた彼らが全てを理解するのに時間をかける必要があった

それほどに異様な報告であったからだ

「.....とりあえずその『オレっ娘ロリ魔法少女』とは真逆の属性過多なヤツとところに行くぞ!! 列車砲を念の為うごさせるようにしておけ!!」

「り、了解!」

テロリスト達はとりあえず情報確認兼増援を送る形で行動することを決めたのだった

十数分後.....

テロリストの増援はその件の存在がいる戦場へと到着していた

その増援部隊には正規軍の鹵獲した武装をふんだんに用意させており、下手な戦術人形の部隊では勝てないレベルの戦力があつた

そんな増援部隊が最初に目撃したのは.....

「ぶっ飛びやがれええええ!!」

ズガアツゴオーオーオーンンンツ!!!

情報の通りの姿をした全身装甲姿の人型ロボットがテロリストが用意していた第三代主力戦車……その車体と泣き別れた砲塔を主砲の部分でバットの要領でもって、虎の子の鹵獲した正規軍のホバータンクにフルスイングでぶつけて場外ホームラン級にぶっ飛ばした光景であった……

「ホームランツ！」

「ニ」

そう言い放つその存在を尻目にテロリスト達は理解が全くできず方針状態になったのは言うまでもなかった

『厄災』はまだ襲来したばかり……

????????????????????????????????????????????????????????????

「外部からのハッキングと遠隔操作か!？」

ヴィーラ内のテロリスト達は制御が効かなくなったヴィーラの制御を取り戻そうとしていた……が、その手も虚しくヴィーラは外のテロリスト達に容赦なく攻撃をしていく……

そんな中で

「ええい、このポンコツが! 攻撃をやめろってんだよ!!」

「!! おまつ!? それスタン g」

バァチイイイ!!

シューーン……

「この手に限る」

「馬鹿野郎! 味方へ攻撃が止まったのはいいが博打と荒療治が過ぎるわあ!! というかどうするんだよ! 列車砲完全に止まっちゃまったじゃねーか!」

「反省はしている、だが後悔はしていない」

「後悔しろ馬鹿野郎おオオ!!」

なんと列車砲内の列車砲操作を担当していたテロリストが操作端末の基盤にスタンガンをぶち当たるといいう荒療治を仕出かしたのだ

その結果、列車砲は攻撃は止まり、沈黙したのだ……

「どうするんだよ!?! 多分外の仲間はかなりやられている上に属性過多な奴らが襲いかかっていて、さらに正規軍の増援が向かって来ている状態なんだぞ!?!」

「……どうしましょ」

「お前がやったんじゃボケエー!!」

そんな車内でコントのような会話が繰り返り広げられていた
その時だ

「……うん? 隊長、なんか端末再起動してませんか?」

「……え?」

先程、荒療治で沈黙していたはずの端末が再起動し始めていたのだ
さらに

裏コード実行

「うん? 裏コード?」

事故が起こるさの歌って割とマジで納得できる要素と説得力があるよね（コラボ回）

ゴーストタウン とあるビル

「グオオオオオオオオ．．．．．ガチでいであ．．．．．」
万能者は列車砲の跳ね飛ばしによってビルの壁にめり込んでいた
「．．．．．左腕の装甲がかなり凹んだ上で骨格が曲がってやがる．．．．．他もそれなりにやられているが、ある程度の動きは問題ないようだ．．．．．問題はバックパックだ．．．．．」
万能者はめり込んだ状態ながらも自分の状態を確認していった後、背中に背負っているものを見た

そこには左側面に大きな凹みが出来上がり若干放電している大型バックパック、そして右側面にマウントしていた大型ライフル兵器「D・B・R」が砲身が折れ曲がった姿があった．．．．．
「サブアームとその武装やジェットパックとかは問題ないが．．．．．さっきのでショートを起こして格納システムとバトルウエポンガレージシステムが一時的に起動できなくなっちゃったか．．．．．こりゃあかん」

それは万能者の強力な兵器の大半が使えなくなったことを意味し、同時に暴走するアルゴノーツヴィーラへ効果的に大打撃を与える方法の多くがなくなったことを意味していた

「ダラダラ直るのを待っていたら、あの列車が前の方の列車砲と衝突事故を起こしてしまうし、だからといって効果的な武器が今使えない．．．．．仕方ない、腹を括るしかないか．．．．．あの暴走列車砲の速度と先に09地区に向かった列車砲の位置と速度などを計算を組み込んで．．．．．この辺ってところか、ならさつきと動かねば」

何かを決心した万能者はビルの壁にめり込んだ状態から脱して動き出した

突然の出来事に暫しの間戸惑いを隠せなかったものの、その疑問はとある光景を見ることによつてすぐに打ち解けられた

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!足の裏がアチイイイイイイイイ!!』

「無茶苦茶なの増えたあー!!!!」

なんと、万能者が列車砲の正面から力尽くで受け止めていたのだ

列車砲の大きさ・速度・重量などが相まって完全に止めることはできず、受け止めて支えている状態で引きずられているものの、さつきまでの勢いは削がれ、速度をかなり落としていた

『色々言いたいことがあるとは思うが、話は後だ!!さつきと列車砲の中に入って動きを止めてこい!!』

その光景に戸惑っていた彼らを万能者は行動するように叱咤するのだった……

もしものためと買っておいたものが肝心な時に役に立たないで、そうじゃない時に限って役に立つ時って結構多いよね（コラボ回）

GE ES (Evolution Series) 64 ACi
777号

バシユツ バシユツ ガゴオン!! バキツ!

「なんか今アカン音ならなかったか? っであっ……装甲の一部が間接部に食い込んでたのか」

万能者はその列車の中で己の身体の状態を確認していた

バギイツ!! ゴリイツ!!

「あだだだだだだだだだだだ……こりや全身にガタが来てるなあ……そろそろ全部とつかえを視野に入れておかないとまずいなこりや」

その状態は万能者の経験上でも過去最悪ともいっていいほどに酷かった

特に……

「……まあそれはともかく問題は……自業自得だとは言え、脚部の損傷具合がひどえ……脚の骨格は歪んで、ひびが入っているわけで、もしかなくてもこれ装甲と外のパーツでギリギリ保っている感じだなコレ、関節もバツキバキに砕けかけてるし、一番酷いのは足の裏とその裏の『中身』だな……」

脚部に関してはもはや動かせるのが奇跡と言っても過言ではないほどに損傷が酷かったのだ

「これはもう丸ごと取っ替えたほうがいいレベルだな……だが、これを取り替える方法がな……やっぱ応急修理で誤魔化すか?」

万能者がどうするか考えているその時だった

格納システム 再起動 完了シマシタ

「……ある意味タイミングが悪いなあ……なん
で列車砲止める前に治らなかつたんだい？なあ？なあ？」

それはタイミングはいいはずなのだが、万能者にとっては嫌がらせとも言えるような、ある意味でのタイミングの悪さで来た知らせによつて万能者はそのシステムに愚痴る形で若干の間ささくれつつもなんとか損傷がひどい部分のパーツを予備のパーツを換装することにより一時的ではあるものの問題を解決することができたのだつた……

その後……

「無理もない、今はゆっくり休ませておこう……お前も休んだらどうだ、万能者」

「そうさせてもらうよ。まったく、轢かれるは吹き飛ばされるは散々だったな」

「むしろそれだけの目に合っていて『散々だった』で済むあたり、あなたの規格外さには驚かされます」

『あなたたちが言ってもねえ……』

そんな会話がありつつ万能者は09地区に着くまでいろいろありすぎた戦場での疲れを忘れるためにゆっくりと頭と身体を休めるのだった……

尚余談であるが、第09地区に到着し『鉄血喫茶』に向かう途中

「故に私はこの世界の光景をこう思います、我々が目指すべき『未来』なのだと」

「目指すべき未来、か確かにな、まだやり直せると分かったのだから悲観になつても仕方がなかつたな」

「ええ、そのためにも私達は気張らないといけませんかね」

((お、おもしろい……))

二人が出しているこの世界には似つかわしくないほどにシリアスな空気とその会話によつて、三姉妹と共に遠巻きで見ることしかでき

ない事態が起こったり……………

「へえ……………ISねえ……………機能とか性能など聞く限り、かなりのものだな……………」

「まあそれでいろいろややこしいことが起きちゃったんだけどね……………」

「ところでそっちにISに似たようなあつたりするの?」

「……………いろいろ省いて大雑把に言うのと似たようなやつはある……………が、他の兵器の性能や火力がおかしくて、技術関係は生かされているけど大体同じ性能で似たようなやつ自体は大体作業用機械または痒い所に手が届く兵器止まりな感じと言っておく……………歩兵ですらプラズマとか火力があるの撃ってくるしな」

「何その世界こわい」

そんな異世界同士の会話（尚、一名?かなり特殊）があつたりとしていたのだが割愛させていただこう……………

大きな出来事の終わりって打ち上げすることって結構多いよね（コラボ回

鉄血喫茶にて

現在そこでは戦いが終わったことによる打ち上げが行われており

「うん、コーヒーがうまいな……フルーツタルトも絶品だ」

その打ち上げの盛り上がりの中で万能者はフルーツタルトを食べながら、コーヒーを飲んで落ち着いていた

（……この後のゲートの調査とか、俺の体の全体調整やら取っ替え、強化やらその他諸々あるが……うん、今は気にせずはこの休憩を楽しもう……なんかあっちこっちに重大な事柄が見えていたり、全く同じ人が何人もいてかなりややこしいところもあつたりするが今は気にしないでおこう、うん）

……若干の現実逃避も兼ねてではあるが

尚その後打ち上げ中に

「腕相撲大会するぞー!!」

「「オオオオオオー!!」」

「うん?なんかするの?」

「「……えっと、これ俺悪いのか?」

大会に参加しようとし、万能者が現れた瞬間、万能者を知る又はヴィーラの件を知っているものたちの大半が一斉に不参加を決定して散っていったり

「万能者といましたか、あなた『患者』ですよ?」

「うおおおお!!た、確かに大怪我したけど応急処置はすませたし、自分かなり特殊だから自分を自分でしか直せないから!?!というかいきなりなんだ!?!」

「いいえ、それでも私はあなたを治してみせます」

「あ、この人話聞かない人だ……と、ともかくて、店員さーん!!!この『患者どんな手段・過程でも絶対治すウーマン』を止めてく

れ!？」

救護者との力の張り合いがおきたりと様々なことで騒がしいことになったのは別の話である

後
・・・そして、万能者以外の来訪者たちが元の世界に帰って行った

ピッ ピッ ピッ ピッ

カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ

ピッ ピッ ピッ

「えつと・・・この波数がこの辺で、この同調している部分がああだったから・・・あ、この計算間違えた、訂正訂正・・・」
万能者は鉄血喫茶内に出来き、自らが通って来たゲートの調査を代理人の許可を得て行っていた

調査を始めてからそれなりに時間が経過した頃・・・

万能者は現状の手段と時間でできる範囲での答えを出した

「うん、なるほど分からん!!」

ズガガガガガガツシャーシューーンン!!!

万能者の言葉に代理人を除く鉄血喫茶のメンバーは盛大にツツコケた

『分からなかったかい!!』

「いや、正確には根本的原因は分からなかった感じです・・・ただ要因はいくつか分かったことがあるから伝えておきます・・・」

万能者は現状の方法で分かったことを話し始めた

「まずこの世界・・・というかここ『鉄血喫茶』は異世界やら並行世界との境界が曖昧になってたり、その存在を引き寄せやすくなっている『特異点の中心点』になっているみたいです・・・まあ前々から結構な数の例があるため今更だとは思いますが・・・ただこれにはとある条件があるみたいです」

『何かしらの条件?』

「どういった理屈かは分かりませんが……この世界に来る条件としてはその存在の存在する世界とこの世界に共通点があるとある世界が条件みたいです……主に『戦術人形』が存在する世界という条件が……その条件さえ合えばその世界の人やら物、さらにはとんでもないナニカまで、色々引き寄せられるようです……多分このゲートも繋がった原因もその仮説だと考えられますしね……まあこの現象が原因で多次元融合とか世界崩壊とかが起こらないようなのでそこに関しては安心してもらって構わないです……引き寄せられるものに関しては今後とも注意が必要だけでも……」

『この人しれつとかなり恐ろしいこと言わなかった!?!』

そんなこと言いつつも説明が終わった頃

ビリッ　ビリッ　ビリッ

「あ、ゲートがなんか形成が崩れだしてる……これやっぱ時間制限がアリつてことか……すみません、これ以上長居は出来なそうです……」

万能者は帰る手段が損失しかける前に万能者は元いた世界に帰って行ったのだった……

尚余談であるが……

「それじゃ自分はこれで……美味しいタルトとコーヒーご馳走様でした」

「またの来店をお待ちしています」

「……あっ、すみません最後に一つお願いしてもよろしいですか?」

「はい、なんででしょう?」

「この店の特異性を見越してのと、個人的な願いではありませんが……もし俺の『兄弟』がもしこの喫茶店にきたら『017がよろしく』と言ってもらえませんか?まあ姿が俺そっくりなものあれば、全く似ていないのかもしれませんが……」

「……………え?」

万能者が帰る間際に言ったことが原因で代理人と喫茶店店員達が鳩が豆鉄砲を食ったような顔をするようになったこと……………

IOP社

「万能者が大損傷したって!」(ガタツ

「そういえば最後に万能者は己の修理は自分ですからかなり遅れて帰ってくるのか言ってたな」

「ガツデエム!!!」

先に帰っていた者達に伝えていた伝言により一人の変態が口から精一杯振り絞って怒りの言葉を出したのだが、別の話である

時間とは敵味方関係なく流れていくもの

非汚染地帯非管理区画 森林山岳地帯

そこは世界各地で数少なくなってきた崩壊液や放射線などで汚染されていない大自然が生き残っている地帯であった

そんな場所で……

???

バギバギバギバギバギバギバギイッ

「あががががががががががががががが……装甲も軋むレベルでダメージが酷かったが、胴体部分もかなり傷んでいたな……こりや手脚だけ交換する応急処置をしての行動するは大分無理があり過ぎたな……」

『万能者』はそう言いながら己の体の状態の確認を行っていた

『中身』は元々頑丈だったのもあって無傷だったし、ここを使えたことと、資材が豊富にあることなどが幸いだっただな……ほんとここを使わせてもらえてよかったなあ」

『万能者』は改めてその周りの様子を確認した

そこには外の景色とは裏腹にそこまでは大きくないものの立派な設備が整った工場の光景が広がっており、最新鋭の機材やそれなりの量で高品質な資材などが置かれていた

「色々交渉材料があったとは言え、まさかこんな立派な設備をもらえるどころか条件付きだけど好きにしたいとはな……まあこんなところに立っているんだからおそらく非合法的に建てられただろうけど」

そこは元々は正規軍の非合法特殊部隊用の秘密工場だった場所で、その非合法特殊部隊が過去の大規模作戦に駆り出された際に全滅したことから、度重なる被害の拡大により隠蔽などの管理が困難になってしまったことなどが要因でその工場を証拠隠滅もとい解体予定であったのだが、ちょうどよく万能者が何かしらの設備を貸してくれという頼みの連絡が届き、渡りに船と思った正規軍が使用後に完全な証拠隠滅という条件付きでその秘密工場を明け渡したのだ

「……まあそれはともかく今回は高品質の資材、最新鋭の機材があるんだ、ならば身体を現状のできる限りでだが一から百まで全部作り直してみるか、元々作業用の部品やパーツを改造したやつではそろそろ無理があるなと思ってたしな」

万能者は決断した、己が今後起こり得る大惨事に対応が出来る様に行ける限り備えることを……

そして『己に降り掛かる全ての理不尽を理不尽かつ徹底的に叩き潰すことを』

「なら最近格納システムの復旧した一部分から回収できた人工筋肉などその他もろもろに使える特殊繊維を手脚の素材に使っての、装甲をいつその事様々なのを使った多重複合装甲にして……エネルギーギーパーパスに関しては『中身』のあの部分からの経路も考えといった方がいいな……」

万能者は決断したことを実行できるように準備を進める

「この調子だとかなりの時間がかかるのは間違いなあ……この間に何事もなければいいが」

……予想される作業長さとその間に何かが起きるであろう
予想に若干の不安を抱えながら

工場と思われる場所にて

そこでは『白い』戦術人形、兵器などが大量生産にされる光景があった

そんな場所の一角、それも巨大な倉庫のような場所ではその場所の大半埋め尽くすほどに巨大な何かが横たわっていた

稼働テスト開始

ヴオオオオ……

その無機質な音声アウンスが流れるとともにその巨大な何かは横たわったまま起動し始めた

稼働完了、『ケフアリ』と第一、第二、第三に異常なし
各システムにも異常はなし

動作チェック開始

・・・動作チェック完了、動作に問題なし

武装チェック開始

・・・全ての武装チェック完了、起動・使用に問題ない

・・・『ヘカトンケイル』は完成したと判断

繰り返す『ヘカトンケイル』は完成したと判断

繰り返す『ヘカトンケイル』は完成したと判断

少なくとも今わかることは・・・

『白い』勢力で『醜き巨人』が作り出され、目を覚ましたことだけだった・・・

人類未踏地区
????

『pawn replica改 type「soldier」』『knight』強化完了・・・『wizard』開発完了・・・
更ニα・demonトノ戦闘データ、敵ノ電子強化システム観測データ、ソノ他規格外ユニットトノ戦闘データヲシタ機体『pawn replica改 type「hero』改メ『pawn replica改 type「Berserker』』開発完了

そこでは新たな脅威の刺客たちが作り出されていた

そして・・・

『戦略級兵器群』指定兵器ノ一部ガ開発完了・・・テスト運用ヲ
実行スル

『pawn』開発可能マデ後・・・

それは万能者ですら恐れていた事態が少しずつ尚且つ確実に実現し始めており・・・

将来、彼らがまた我々の前に現れることを示していることは間違いない
なかった・・・

嫌なことも慣れると作業扱いになる時ってあるよね

IOP社

「正確にはちよつと違うけれど『男子、三日会わざれば刮目(かつもく)して見よ』って言葉を思わせるくらい、性能が恐ろしいことになっているわね……見た目はほんの少し変わったぐらいなのにね」

「ペルシカさんマジですいません……」

呆れているように見えているペルシカに万能者は謝罪を行なっていた

「前から色々で大変だったのは分かるけれども、まさかここまでやるとはね……」

ペルシカはそう言いながらある場所を見つめた

それは建物の天井であった、ただし空が見えるほどの穴が空き、それが人の形に空いているという特殊性を除けば……

この穴ができた経緯は少し前に遡る

『鉄血喫茶』世界での件から一週間半経過した頃……

「色々あったが、なんとか久々に帰ってこれたなあ……」

万能者は新しくなった身体（外見的には若干変わったぐらいだが）でIOP社に帰ってきていた

「さてとこっから忙しくなるぞ……遺跡のデータと過去のデータやらを照らし合わせて状況確認とかしないと俺の技術を使う正体不明勢力の目的やら正体、対策などが分からんし出来ないからな……あ、あれらの形を整えて説明の用意もおかないとな」

そう言いながらIOP社の通路を歩いていた、その時だった

「万能者!!解体さs」

ガシッ

「え?」

ブウン!!

グシャッ!!

ドガゴオーンンンッ!!!

それはあまりにも突然に起き、あまりにも適切で作業のように行われた

簡単に言えば通路の曲がり角からリヴァイルがルパンダイブし、それを万能者が1秒にも満たない速さで両腕で掴んで、真上にぶん投げっぱなしなのだ……

ついでと言わんばかりに真上に投げる寸前のリヴァイルの股間を膝蹴りで潰すどころか骨格が歪むレベルで凹ませて……

その威力は凄まじく、リヴァイルは天井にめり込むどころかそのまま穴を開けて上空に飛ばされていった……

「……あつ、地味に力加減ミスった」

回想終了

その後、IOP社から十数km離れた地点に犬神家の形で上半身をめり込ませて落下したリヴァイルの姿が回収されることとなり、意識が回復した後、股間を骨格ごと物理的に凹まされたのが原因なのかしばらくの間ぎこちない歩き方をすることが確認されたのは余談である

数日後……

「とりあえず集まってもらったが、大体は聞いていると思うがいぬておく……『俺関係の技術』の兵器に対する『対抗手段』がいくつか完成した」

万能者は指揮官と研究員、正規軍軍人達の集まりの前で『対抗手段』の説明を行っていた

※ここから説明の一部を若干掻い摘まみます

「今回俺が用意した『対抗手段』は『戦術人形強化改造』と『戦術拡張システム』、『特殊重装部隊』の3つだ」

「まず、『戦術人形強化改造』は従来の戦術人形のMOD化とはまた違った強化方法で、形的には基礎性能の向上と基礎戦闘力の強化など

と思ってもらって構わない……が、あくまであっちの p a w n モドキにある程度対抗できるようになるぐらいしかないことと、この強化に関しては鹵獲対策として人形内部に特殊なシステムなどを搭載することになることを覚えてくれ……この技術がどつかの『変なところ』にいったら絶対碌なことにならないから……」

その言葉にその『変なところ』に心当たりがある者たちは若干の遠い目をするようになったが説明はそのまま続いた

「次に『戦術拡張システム』は……簡単に言えばバックパックと強化外骨格を装備して俺みたいに補助腕をつけたり、グレネードランチャーや可変式装甲、ドローンやらの武器の追加などの武装や戦術の拡張を行うものだ……まあこれは基本的にはさっき言った『戦術人形強化』を受けた戦術人形じゃないと使えない代物だな、電脳とか処理速度とかの関係上どうしてもそうしないとうまく扱えないというのが理由だ……」

その言葉に研究員たちは「だろうな」と納得していた

「最後に『特殊重装部隊』……正確にはその部隊が扱う武器だな、とりあえずこれを見てくれ」

万能者がそう言ったと同時に後ろのスクリーンにとあるものが映し出された

「な、なんだこれは」

「真ん中というか……なんか鉄槍みたいなのが若干飛び出てるぞ」

「……つまりパイルバンカーか？」

「いやこれは……弦のない……いや、ひよつとしてかなり特殊な形をした弦を持つ機械式のバリスタか？」

「これまたかなり取り回しの悪い感じがするなあ……」

その感想の通りにそれはかなり異質な形をしていた

「こいつの名称は特式戦術対物狙撃式電磁投射機械弩……長いから『弩砲』でいいや……まあ、見た目通りに取り回しはかなり悪いし、重いが…… p a w n モドキやそれと一緒に出ていたデカブツ、今後現れるとされる新兵器に対抗する為に新設計した兵器だ、それ相応に p a w n モドキとデカブツを一撃でやれるほどお墨

付きの威力があること保証する」

その万能者の言葉にその場にいるものたちは喜声をあげた

だが万能者はそれをたしなめるように話を続けた

「……だが、これらはあくまで『対抗手段』だ……これら以外にも色々作ってはいるが、現状『俺関係の技術』を扱う勢力がどこまで『俺関係の技術』を再現しているのか、どんなものを用意しているのかなどが不明な上に、それを撃滅できる兵器を作ろうにもこつち側に潜伏している『変なところ』にそれらが渡って悪用される可能性がある為に現状は最低限であるこれぐらいしか用意出来ないってことだ……ホントその辺を解決しないとどうしようもないな」

その言葉にその場にいるものたちは皆真顔になったのは言うまでもなかった

「と、まあここからこれら3つについての質問の時間だ、何か聞きたかったら言ってくれ」

こうして万能者の説明は進んでいき、終わりを迎えることとなった……

余談ではあるが、後日再び正規軍にて大規模なスパイ狩りが起こり数々のスパイを血祭りにしたという噂が出てくるのだが……別の話である

「夏っぽいことをしたい」は良くも悪くも人を狂わせる魔の言葉だよね

それは突然であった

「なにか夏っぽいことをしたい」

それは誰が言ったかは分からないもの間違いなく誰かが言った

そしてそれは……

「そういえば今年夏っぽいことしてないね」

「まあ色々あつて忙しかったのもあるし仕方ないんじゃない？」

「でも何かしらそれっぽいことしたいね」

ゆっくりと確実に形が変わりつつも「夏っぽいことをしたい」という概念は伝染していった……

そしてそれは次第に

「キャンプかなんかでもしてえな」

「元軍人の俺にそれいうか？」

「……すまん地獄のキャンプ経験してたんだったな」

「分かればよろしい」

「諸君、私は海が大好きだ」

「波打ち際でキャツキャツウフフしているナイスバディな美女を見るのが大好きだ」

「そして砂のお城を作って遊ぶロリ達を見るのも大好きだ」

「警備員さんこいつらです」「はーいーい」

ドガアツ！バギツ！ゴギヤツ

ギヤアーーーーー！！?!

すでに若干暴走しているところもあるが、その気持ちが高まっていき、いつその思いが一斉に爆発してもおかしくなかった……

そんなある日

「みんな、国連から調査の依頼よ、場所は海だつて」

それも偶然としては出来過ぎているのではないかと言うレベルで

「夏っぽい」ことが出来るイベントが起こったのだ……

諸君、海の時間だ、夏の時間だ……失礼本音が出てしまっ
た

これより国連からの依頼『突然現れた未確認島の調査及びその近く
の海上プラントの安否確認』についての概要を説明する

つい最近、奇妙なことなのだが、衛星画像が更新された際に国連管
理下のある海上プラントから数十km離れた地点にて海底火山活動
が確認されていないにもかかわらず『突然』島が現れたのだ

大きさは約1100?以下、ハワイのオアフ島より一回り小さいが
それでもそれなりに大きい島だ

更に言えばその周辺では原因不明の通信障害が発生しており、先程
言った海上プラントからの通信が途切れてしまっている

そこで国連は海上プラントの安否を兼ねてその島に調査隊を派遣
する形をとったのだろう

今回の任務はその調査隊の護衛……

調査隊を援護しつつ、未確認島の調査を手伝ってもらいたいとのこ
とだ

なお任務完了後はその島か海上プラント近くの島での休暇を取る
形となっている

諸君の憧れであるバカンスができるというわけだ

ただ、この調査では本当に何が起こるかは分からない

一応崩壊液・放射線汚染はないことは把握されているものの、島
が突然現れるというあまりにも特殊すぎるものが起きているのだ、何
があってもおかしくはない

そのためこの依頼は募集の形となっている

バカンスに行くどころか本物の天国への片道切符にならないよう
にする為にだ

諸君、それでは依頼を果たし、良きバカンスができることを……
……また間違えてしまった、健闘を祈る!!

後日、万能者はその報告を受けた

「突然現れた未確認の南国のそれなりにデカイ島の調査ね……
それも調査後にはバカンスの休暇が与えられると……それで
俺とそれにどう関係があるんだ？」

万能者の言葉にその報告を届けに来たペルシカは答えた

「この調査にあなたも同行して欲しいって国連が言っているのよ」

「……どういこと？」

「なんでも結構な特異性がある出来事とあつちは思ったらしく、特異
性のあるものには特異性のあるヤツをぶつけるといった形にしたと
のことよ」

「……なるほど火中の栗を拾いに行けとも言えることだな」

万能者はそう言いながらも少し思考した後……

「しようがない、この件がもし『俺関係の技術』関係のやつだったら口
くなことにならないしな……敢えて行くしかないか……
まあ『対抗策』もある程度ではあるが出来るし、スパイ狩りとそれ
のカウンター、襲撃など色々ありはしたが、なんとか収まったし
な……今後休暇取れる可能性がなくなるかもしれんから、ほ
んのちよつとばつかし休暇を手に入れるのもいいか……」

その調査に同行することを決めた

「あ、もちろんこの防衛用として試験者の万能兵装仕様の動かせる
ヤツ1機は連れて行くとしてもそれ以外のヤツと他の仕様は置いて
おく、その方がある程度のことに対処できるだろうしな」

「……その『ある程度』の範囲がかなり広いのだけだね……
それとAR小隊をよろしくね」

「……え？」

「あの子たち最近働きっぱなしだったからね……ここら辺で休暇をあげるチャンスが来たのならそこに突っ込もうかと思って」

「……つまり俺、保護者役？」

「………かなり異色の家族だね………」

「………言ってみて自分も思った」

無論、不在時に起こるであろう様々な問題の対策を万全して……

何も分からない状況ってある意味チャンスでもあり身を滅ぼすきっかけにもなりかねない出来事だよね（大規模コラボ）

海上プラント海路 海賊被害多発指定域

そこは現在では貴重となっている汚染されていない環境下の海であり、それと同時に国連管轄の海上プラントの航路でありながら海賊被害が多い場所でもあった

そして、今現在、その場所にも大規模な通信障害が発生しており火事場泥棒をする条件としてはあまりにも絶好の状況下であった……

そんな状況を海賊達は見過ごさなかった

通信障害が発生した日からわずかな期間で海賊被害は激増し、さらには国連軍の船にすら攻撃し強奪したりとやりたい放題にやったのだ

国連はそれを止めようにも原因不明の大規模な通信障害により通信愚か、兵器の性能を引き出せない状態となっており、対抗が難しいのだ

もはや、海賊を止められるものなどいない

ドゴオoooooooooooo

ドゴオoooooooooooo

ドゴオoooooooooooo!!!!

後に海賊達に『死神船団』と呼ばれる船団が現れるまでは……

「な、なんだこりゃ……」

海賊の潜水艦の潜望鏡に映ったその光景は地獄絵図だった

海賊の仲間が乗っていた武装ボートほぼ全てが残骸撒き散らして炎上して沈んでいき、遠くでは大きな水飛沫が上がり、その水飛沫の中に仲間の潜水艦らしき残骸が混ざっており、さらには虎の子であったはずの軍艦すら真つ二つに沈んでいく姿があったのだ……

「クソ、軍艦2隻と輸送船、調査船だけの船団のはずなのに、なんで調査船の方が強力な武器など持ってやがるんだ!?!クソツタレ!!て、撤退だ!」

自分達も地獄絵図の仲間入りを避けるべく急速潜航をしようとした

その時

(やあ)

潜望鏡の真近くの真正面に『鋼の死神』の顔が映り、艦長は固まった

そして

ズゴオオオオオオンン!

数秒も経たずにその潜水艦も地獄絵図を仲間入りを果たすこととなった……

十数分後……

「これでこの海域に入ってから6件目か……いくら好条件だからといっても多すぎないか?」

調査船に戻った万能者は愚痴っていた

彼らが乗る船の船団は最初の目的地である海上プラントに向かっている途中であり、その道中で海賊に何度も襲撃を受けていたのだ
もっとも船団は無傷で、海賊達はひどいしっぺ返しを食らっているのだが

「ま、まあ万能者さんのおかげでこうして無事に海上プラントに迎えているわけですし……」

「それにしてもアンタ……海上や海の中でも戦える装備を持って
いるって……本当規格外だな」

「色々あることを想定してたからなあ……本当ならそんな必要
になる事態は起きてほしくないんだがなあ……」

そんな会話がありつつもその船団は海上プラントに向けて進んで
いった

無論

「あ、さつき捕縛した海賊の潜水艦の地図に奴らの本拠地の場所が書かれてたみたいだからそこ叩いてくる」

「……………なんか逆に海賊が可哀想に思えて来たな……………」
その航路の邪魔となる敵は徹底的に排除しながら……………

その日の夜

未確認島 から10km離れた場所にて

間モナク目標地点ニ到着スル

それらは誰よりも早く、そして人知れずその島へと上陸をしようとしていた

今回ノ我々ノ目標ハ「Berserker」トソノ武装ノ試験、正体不明ノネットワークヲ形成シテイルト思ワレル島ノ調査デアル

どうやら彼らも同じ目的で来ているようだ

コレヨリ、島ノ調査ヲ開始スル

何はともあれこの任務の行方はすでにどう転ぶかは誰にも分からない方向へと進んでいるようであった……………

その頃、海上プラントに到着した万能者は……………

「……………なにこの状況は？」

目の前の甲板にて突然現れた過去に見覚えのある者達を見て、更にはややこしい状況になったことを遠い目で理解せざる得なかった

夏といえはばのものが案外多いと思わざる得ない今日この頃でございませう（大規模コラボ）

少し前に遡る……

国連管轄海上プラント 施設内

「海上プラントに被害がなくてよかったです」

「本当にな……海賊に占拠でされてたらめんどくさい制圧戦を考えなきゃならなかったからな……更にいえば出来る限り無傷で」
「うへ……そりやめんどくさいな」

船団は道中、海賊に襲われつつも無事に目的の一つである海上プラントに到着し、安否の確認を行っていた

その結果、海上プラントは海賊の襲撃を何度かは受けてはいたものの少ない被害で食い止めていた

ただそれなりに長い間、八方塞がりの孤立状態だったため、食料は問題なくても弾薬や資材など物資が底をつきかけており、抵抗すら出来なくなるのも時間の問題だったのだ

（……多分国連の連中は調査のついでにこの問題も解決させるために俺を参加させた上で平行依頼として突っ込んだんだろうなあ……まあ輸送船も無事に到着させられたしこの問題はとりあえず解決したってことでもいいかな……）

万能者はそう思いつつA R小隊と共に歩いていた時、通路の窓を何気なしに見た

「……霧？」

窓の外には濃い霧が立ち込めていたのだ

「うわ、これまた濃ゆい霧だな……」

「なんにもみえなーい」

「ちよつとこりや念のため外も見ておいた方がいいな……念のためA R小隊は中で待機しててくれ」

「了解（です）（しました）（!!）」

そう言いつつ万能者が甲板に出ていき周りを確認していたその時

ピカッ!!

「うおうっ!?!」

万能者の目の前で強い光が発生したのだ

「い、いきなりなんなんだ!?!」

万能者は強い光に若干怯みつつも周り警戒し始めた

その頃には光は収まり、なぜか霧も晴れ始めていた……………

そして……………

「……………なにこの状況は?」

目の前の甲板にて突然現れた過去に見覚えのある者達を見て、更にはややこしい状況になったことを遠い目で理解せざる得なかった

回想終了……………

しばらくして……………

海上プラント 格納庫

そこでは格納庫の一角を貸し切って様々な人が集まり、話し合っていた

その中には若干一触即発な状況での話し合い、蛇に睨まれた蛙の状態になっている部分もあった

そんなことがありつつもある程度話が進んだ時

「よし、一回整理しよう……………というかさせてくれ、割とマジでその話を聞いていた万能者はそう言い、話の整理を始めた

「まずレイブンだっけ?その組織の関係者からだ、アンタ等はグリフィンと戦闘中にその戦場が正体不明の霧に包まれて気づいたらここにいたってことなんだよな?」

「ああ、その通りだ」

「それでそのグリフィンの指揮官とその部下がその戦闘での敵対対象ってことだな?」

「ええ、その通りよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・これまためんどくさい方々が現れたもんだなオイ」

万能者は頭を抱えながらも次の整理すべき話題に切り替えた

「次はSFSだっけか？アンタ等とはある仕事のために異星人のワープゲートを使ったら、なんか白い光がピカって光って気づいたらここにいたって感じか」

「大雑把にいったらそんな感じだね」

「・・・・・・・・分かったありがとう・・・・・・・・ちよつと考えさせてくれ」

そういうと万能者は考え始めた

(この二つの異世界転移現象・・・ダメだ、似たような現象なら知っているがいくつもある上にどれもこれも当てはまりすぎて逆に分からん)

その考えている間にも彼らの会話は行われた

「またやるか？」「ええいいわよ？」

「や、やめてください!!?こんなところでまた喧嘩なんて!!」

「な、なんかそっちのウロボロスの目が怖いんだけど・・・・・・・・というかなんでこっち見ているの？」

(あー。。。今イライラさせないでくれ・・・・・・・・ただでさえ厄介ことや、ややこしいことで混乱しているってのに) そんなことを思いながらも必死に考えていた・・・・・・・・

「そんなことより嬢ちゃん達のその『IS』っていうパスワードスーツを見せてくれ!!」

「二二へ、変態だあー!!」

ブチッ

万能者はキレた

考えていたことを放り投げてまでキレた

目の前の変態の所業が原因で溜まりに溜まったイライラが爆発したのだ

―都合により、番組を変更してお送りしています―

Nice boat. ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

―イ†N＝ユ―

／互巫虬／”／L ～～～～～～～～～～～～～～～～～

LEEEIEEY”／L―ミ～～～～～～～～～～～～～～～～

「ロロロロロロイL／―ミ　　ギヤアアアアアア!!

☒???7／　／ミバギャツ!バゴオツ!!　ペキヤツ!!

☒＝＝＝／　／ミビツタン!!ビツタン!!ベヂインツ!

、ミ\j　／　／ミ～～～～～～～～～～～～～～～～

ミ、　　／ミ～～～～～～～～～～～～～～～～

ミ　　ミ～～～～～～～～～～～～～～～～

「すまん、この現象の原因は今分かん……時間経てば戻れるやつかもしれんし、何かしらのことをやらないと戻れないやつかもしれん……そこで提案があるが、俺らと同行する形でいか?ここの海上プラントは今、補給が入ったとはいえ結構疲弊している状態だ……そんな状態で修羅場バリバリ作りまくるアンタらがここにいたらここの人が休めるものも休めないってことだ……いいよな?」

「あ、ああ」「は、はい」「あつ、う、うん」

後に『それ』を見ていた者達とある軍事関係者は語る

「あの容赦も慈悲もない殺戮紛いの仕置きは、どの拷問よりもおぞましく恐ろしいもので、それを使った脅しの如き有無を合わせない姿勢はある意味称賛に値するレベルだった」と……

万能者の足元にあるモザイクですら隠せないんじゃないかという

レベルまで『見せられないよ!!』状態にされたりヴァイルを見ながら
そう思ったのだ……

諸君、海上プラントへの安否確認の任務ご苦労だった

途中海賊に襲われるなどのトラブルがあったが、無事に海上プラン
トの健在が確認され、補給物資を積んだ輸送船を到着させることがで
きたおかげで、この海上プラントの維持が再び可能となった

海上プラントの方々に代わり礼を言う

だが、ここからが任務の本番だ

ここからは海上プラントから軍艦1隻と調査船1隻で例の未確認
島へ2日かけて向かう

その近くの海に到着後、島上陸調査の2班と島周辺の海上と海中調
査の1班の3班に分けて行動を開始する

そしてこの調査が終われば、前に言っていた南の島でのバカンス休
暇が待っているというわけだ……

だが、なんの前触れなしに島が現れたという不可解な現象が起きて
いるんだ……恐らく、向かう際の二日間と島到着後は何
かしら異常なことが起こる可能性が高い……

その点だけは注意しておいてくれ

諸君!!無事にバカンス休暇を手に入れられることを願って健闘を
祈る!!

海上プラントから出港して1日後……

「覚悟はしてた……うん、覚悟はしてたんだ……何か
しらありえんことが起こるんだろうなあ……って」

万能者は目の前の光景に遠い目をせざる得なかった……

「…………だからってなんじやこりやー！！??」

それは鮫が鰯の群れの如く群がって船団を囲んで襲いかかっているという異常な光景だった

さらには

ズキユーーーイインッ!!

「オイ、あの鮫今弾かなかったか？艦砲とレーザーを弾かなかったか今!?ガチでどうなってんだ!!」

「おまけにレールガンもな!!っていうかあれ姿がどう見ても鮫の様には見えないのだが!?骨みたいな鎧を纏ってる感じなんだが!?」

「というかめちやくちはやつ!?何を食ったらあんな感じになるんだよ」

「……………なんかこの鮫共、群れでの連携が明らかにうますぎないか?おかしくないか!」

鮫の群れの長と思われる個体が明らかに普通の鮫とは一線を越す姿をしており、その能力も明らかに異常であったのだ

何はともあれ……………

船団になる者達は島に到着する前にこの任務の異常さを身をもって知ることとなった……………

WARNING!! WARNING!! WARNING!! WARNING!!
G!!

移動式暴食超危険海域

SHARK HAZARD

WARNING!! WARNING!! WARNING!! WARNING!!
G!!

最近のネットでの鮫の定義がよく分からなくなってきた今日この頃（大規模コラボ回

既に戦闘が始まって数十分が経過してた……

あまりにも異常な存在により発生した異常な出来事に少しの間混乱はあったものの大勢は立て直され、群れのリーダーと思われるボス鮫以外の鮫は徐々に数を減らしていき、ボス鮫も頭部の骨のような鎧を剥がすといった形で損害を与え、逆にこちら側の被害を抑えている有利な状況に持ち直すことに成功していた

……が

ズドドドドドドドドドドドドツ!!

ズドン!!　ズドン!!　ズドン!!

「クソ、コイツら己の身体で完全には防げない攻撃があると分かったのか、今度は集団の力で波を起こして船を揺らして照準させにくしたり、波や海自体を盾にしゃがる!!頭良すぎだろ!」

「デカいのが少なくなったら今度は小さいのがかなりの数で来やがった!!気をつkギヤツ!!小さいやつに噛まれた!」

鮫達は今までの戦術が通じないと分かったのか、今度は絡め手などを組み合わせた戦術に切り替えてきたのだ

船団側はその戦術に手間取りながらも鮫達に攻撃を攻撃を加え続けた

戦闘開始から1時間半が経過……

先程までの銃声のオーケストラはどこかに行ったやら、あたりは静かさを取り戻し、鮫達はほぼ全てが壊滅し、その副産物として海には大量の肉片と血液により巨大なブラッドバスができあがっていた

そして船団の方は軍艦と調査船、両方に被害はあるものの行動するには問題ないレベルに抑えることができていた

「うわぁ……あの綺麗だった海があたり一面の血まみれになっ

てやがる」

「環境汚染が心配だなこりゃ」

「というかこれ別の鯨を引き寄せたりはしないか? ま
たさっきのような鯨は勘弁だぞ!」

「. さっきのような鯨は来ないと思う、多分」

その静かに若干安心したのか、警戒をしながらも会話ができるほど
までになっていた

だが

「. アレ?あのボス鯨は?どこに行つたの?」

「. !?」

ザバツ!!

それは完璧な奇襲であつた. ボス鯨は血の海に身を隠し
ながら凄まじい速度で調査船の横に飛び上がりながら突進を
実行したのだ

誰かの気づきも、反応も間に合わない.

その突進によつて船にかなりの被害が出るのは目に見えていた

ただ

「. !? !!ッ」

ボス鯨は非常に運が悪かつた

その時、その場所に偶然にも万能者が「あるもの」を持って立っ
ていたのだ

大口をあけて突進してくるボス鯨に万能者は

「とりあえずこいつでも食つてろ!!!」

ガゴオンツ!!!

!!?

「それ」をボス鯨の口に突つ込んだ

「それ」は万能者が海上や水中用の装備の一つとして持っていた大型
の武装水中ジェットスクーターであつた

ボス鯨の口に突つ込んだまま、水中ジェットスクーターの正面を上
空の方に向けた

数時間後・・・

調査船 船内研究室

船団は再び未確認島へ航路を進めていた

そんな中で調査班と万能者、リヴァイル達は襲ってきた鯨達を調べていた

「なんだこれ・・・こいつら生殖器官がないぞ・・・」

「あのボス鯨と他の鯨のDNAが一致してる・・・ただけ子沢山なんだ？」

「・・・オイオイ、このボス鯨の肉片の細胞・・・かなり遅いがまだ細胞分裂してる・・・まだ『生きてるぞ』こりゃ」

その結果は一般的な鯨という存在を比較してもあまりにもかけ離れている存在であることを裏付けていた

「・・・マジである島に何があるんだか」

これから向かう島に万能者は不安を隠せなかった

十数時間後・・・

船団は目的である未確認島の近くの海に到着し、調査の準備と『もしもの場合』の用意を進めていた

「あと十数分後にあの島で調査開始か・・・」

万能者を含む調査船の搭乗員の一部はその島を見つめていた

遠くに見える島は大半がジャングルのような森林に覆われており、真ん中には少し高めの山があると言ふような形をしており、森林の周りには上陸しやすい砂浜の海岸が大半、一部には少し高めの崖が存在すると言ふ形をしていた

見るだけだとただそれだけの島のはずだった・・・

だが、鯨の件にて既にこの島は異常だと認識していないものなど調査隊には誰もいなかった

そして、その不気味な島に我々は行くのだと彼らは覚悟していた

．．．．．既に賽は投げられ、どのような結末を辿るのかはもはや誰にもわからない．．．．．

．．．．．「Berserker」損傷率25%オーバー

．．．．．「Hero1」大破、「Hero2」中破

．．．．．「paw n」4体無傷、他全テ中破又ハ大破

．．．．．島ニ『異常個体』及ビ『元凶』ヲ確認、交戦ニヨリ部隊ノ

48%損耗．．．コレ以上ノ調査ハ不可能ト判断．．．．

．．．．．ニコイチ完了、行動不可能ノ個体処理完了、コレヨリ潜伏

シツツ撤退ヲ開始スル

虎穴に入らずんば虎子を得ずってことわざがあるけど、いざその状況になると遠い目をせざる得ないよね
(大規模コラボ)

未確認島 ジャングル

上陸を開始してから2時間、島に上陸した調査隊は海岸に簡易な拠点を設置した後に島の中……いわゆるジャングルの中へと入っていた

「これまた立派な熱帯多雨林系のジャングルなこと……」

「湿度も高いわね……銃の手入れも大変なのに」

「ねえねえ見て!!おつきいキノコ!!コレ食べられるかな?」

「S O P!?!色合的にどうみてもそれは毒キノコじゃ……」

「ちよおま!?!それ俺に近づけるなアア!!」

そんな中でA R小隊は上陸班の調査隊に参加していた

他の方々と比べると実力は下の方ではあるものの戦闘経験が豊富な彼女達を活かせるのは陸上であることもしもの場合の対応する能力があることなどが上陸班の調査隊に合っていることが理由で参加させられたのだ

尚、万能者は海上・水中の機動と運動性が高いことから島周辺の海の調査へと回されることとなった

そのことに関して万能者曰く

「このメンツだと余程ことがない限り多分大丈夫だろうな……まあ通信関係が全く使い物にならないし、念の為信号弾は持たせておくが」

そんな理由でA R小隊は頼もしい(頼もしすぎるとも言えるが)上陸班の参加者とともにジャングルの中へ突き進んでいった

一方……

未確認島周辺の海にて

(うーうーん……ある程度まわってみたが、変わった生き物……)

というかおそらく変異しているやつは結構いたが基本的な生態系は普通に見えるなあ……強いて言うなら小型中型船の海の墓場ってことぐらいか? ……いや、普通に大問題かコレ)

万能者は水上・水中用の装備という海での行動では準備万端な状態で島の周りの海を回るように調査をしていたが、その調査成果としては変異したと思われる個体はそれなりの数が存在してもその原因となるものが見つからないという結果であった

もつともボートを使って調査している海上・海中組調査班曰く、「巨大化したフジツボやら、蟹、手裏剣のように回転して泳いでくるヒトデモドキみたいなのとかが出る時点で調査結果としては大成果といっても過言ではないのですが……無論コレの大半が襲ってかかってくるので心臓に悪いです……特に山みためにデカイヤシガニみたいのが出てきた時は走馬灯が……」

とのことである……
(……まあこの様子じゃ、上陸組にも変異生物かなんかは出てるだろうなあ……最後はあの崖の下付近だな)

そう思いつつもその付近へ向かい海中へ潜った時だった

(……海底洞窟?)
それは海と岩などで海上からは絶妙に見えないように隠れていたのだ

まるでそれを使うもの以外には見られないようにされているかのように……

(……一回伝えに戻ってから行くか)

それが気になった万能者は一旦海上の調査班に伝えに戻り、伝えた後にその海底洞窟に入ってしまった

50分後……

未確認島 ジャングル

「……コレはまずいな」

「なんなのよコイツらは!?!」

「全く気配がなかった……どういった生物なんだか……」

先程までの若干呑気な雰囲気、霧囲気が空気はどこかに行き、調査隊は窮地に追い込まれていた

尚、彼らに襲いかかって来る存在は……

「アホか!?あの鎌が四つあるやつ実弾を斬り弾いてるぞ!」

ブーンブーンブーンブーンブーンブーンブーンブーン

「アホみたいデカいぞこの蜂!?(ガブツ!)ギヤツ!?か、噛まれた!!」

パシユ パシユ パシユ

「アツ」「ガツ」「シヤア!」

「……なにあの蜘蛛?ス〇〇ダーマンみたいな動きしてるのだが?」

『蟲』であった

一方……

「……ヤバいな、全てが分かったわけではないけど、余程のことが起こったというか起こっていたらしいことは分かる」

万能者は知った

正確には完全ではなく、あやふやな部分があるものの万能者は知ったのだ

この島にこの異常現象を引き起こしている元凶が間違いなくいること

そして

「さっきとジャングルに入ってしまった調査隊の救助をしないとまずい……こうゆうときに通信が全く使え物にならないのが歯痒いなコンチクショウ」

ジャングルで危機的状況に陥っているであろう調査隊の救助をするために行動を開始した

WARNING!!WARNING!!WARNING!!WARNING

何回も言っているような気はするけど、厄介事って同時多発をして、更には連鎖して起こることって本当多いよね……（大規模コラボ

『蟲』との遭遇からほんの少し前……

万能者は海底洞窟の中を進んでいた

（地味に長い……というかこれ島のどこかの地上に繋がってるな？）

そして、ようやく出口と思われる部分から水面から顔を出した時

「……ッ!!!?」

万能者はそれを見てすぐさま警戒した

それは過去に遭遇した敵対的な種族「深きもの」だったのだ

だが、ここにいるその存在達は……

ガリガリに痩せこけ、殺意も生きる気力もなく、この状況に絶望し、死を待つような状態だったのだ

「……これ対話する必要があるな……（念の為に）
思っ言葉交換関係取っておいてよかった」

万能者は対話を選択した

深きもの達との対話は、あちらの方が絶望的な状況から生きる一筋の希望の光が下りるに等しい状況だったことから友好的かつスムーズに進み、あちらが知り得る情報を1時間近くかけて全て聞き出すことに成功したのだった

「……ヤバいな、全てが分かったわけではないけど、余程のことが起こったというか起こっていらしいことは分かる」

万能者が知った情報は大雑把に言えば

・この島は元々深きものが昔から使用している島であり、認識阻害

それは油断であった……………

四方から襲いかかってくる蟲達を警戒していたことと、その出来事
があまりに想定外かつ突然だったことなどの要因がそれらを間接的
に引き起こしたのだろう

形的には誰も悪くなかった……………

だが、間違いなくそれは油断であった

それも致命的なまでの……………

「な、なんだこの蔓は!? う、動けない!？」

「これは……………蔓植物か? それもこんな急速に成長かつ固くなるつ
て……………どんなことしたらこんなことになるんだ……………
?」

「これどんな素材なんだよ……………下手な鉄より硬いぞこりや」

「あだだだだ、へ、変な固まり方をして、そ、それ以上は……………
それ以上はいけない!! がああああああああああ!!!」

「……………なんであの人アームロックかけられる形になつてい
るんだろう」

敵に囲まれる中で一瞬での確かつ調査隊全員が例外なく完全に動
きを封じられたのだ

それも自分の身体から突然蔓植物が生えてきて、的確に身体を動か
せないように固められて拘束されたのだ、拘束を解こうにも蔓植物が
硬い上に折れても折れた部分からまた新しい蔓が生えてきて再び拘
束してくるといっておまけ付きで……………

「ムムンンンンンツーーーーー!!!」

「……………あつちのほうは変な姿勢をしたミイラみたいなこと
になつとる!？」

「エ〇ゲー通り越してギャグになつてんなありや」

「これ、力任せにやったらあの子みたいにあんな風に余計にキツくな
るってことだな……………馬鹿力がないとそもそも無理だが」

力任せに拘束を解こうとした何人かがミイラみたいに徹底的に拘
束された形になった……………

つまり、外敵がいる状態で全員が拘束されるという絶体絶命の状況

に陥ってしまったのだ

「……あれ？ 蟲達が引いていく？」

だが、そんな絶妙な状況にあるにもかかわらず蟲達は傷ついて動けない蟲を残して散るように去っていった、先程まで騒がしかった場所が急に静かになるといふ異様な空気に包まれた

そして、しばらくしてその原因と思われる存在達は現れた

バリツ ゴリツ ゴギヤ

動けない蟲達を呑み込みながら迫ってくるそれはまさしく陸を走る黒い波だった

「最悪だ……グンタイアリみたいなのが来たぞ……」

それを見た調査隊は己達の立場が断頭台でギロチンにかけられるのを待つ罪人の立場に等しいことを理解した

だが、徹底的なまでの八方塞がりな状況にどうすることもできなかった……

最初の犠牲者が黒い波に呑み込まれる

その時だった、目の前を何かが通ったのは

それは極太の巨大な光の奔流だった

最初の犠牲者になるはずだった者の40mほど前で全てを呑み込むはずだった黒い波を搔つ攫うかのようになり、木々と地面ごと呑み込んで無へと返していったのだ

「ドワアアアアアアアア!?何が起こったんだ!？」

「アチチチチチツ!!ビームかアレ!？」

「というかこの蔓植物熱にも強いのかよ!?びくともしてないぞ!？」

そんなことがありつつも光の奔流が途切れた瞬間

シューーシューーシューー

「ゴホッ ゴホッ 今度は煙かよ!？」

「ゲホッ ゲホッ しかも目と鼻にくるやつだコレ!!」

あたり一面を煙幕と思われる煙が覆い尽くしたのだ

そして、しばらくして煙幕が晴れた時

拘束されている彼らの前にその存在は立っていた……

「…… ツワモノ ハ ドコダ ?」

右腕^{蛮族}が大剣^{戦士}の戦闘^狂が……

「…… ソノ マエ ニ タスケタ ホウ ガ ヨイ カ ?」
…… 何名かほどとてつもなく哀れな姿になっているのを悲しい目で見ながら

その後、蛮族戦士により拘束を解かれた後に謎のビームによって出
来上がった道を利用して一回撤退する形となった……

物事で行き詰まった時は一歩退いてから見たほうがスムーズになることってあるよね（大規模コラボ

未確認島近海 調査船 会議室

そこでは負傷（一部はラッキースケベ後の制裁関係）し、医務室送りとなっているものを除いて島から帰還した者達が集っていた

「……………すまんまた情報の整理をさせてくれ、色々」と

万能者は頭を抱えるようにこの依頼で2回目となる情報整理を行っていた

「まずは調査組の方だ森の中では変異した蟲や植物などに襲われたんだな？」

「ああ、それで間違いない」

「……………蟲などは想定してたが、植物か……………こりやジャングルそのものが敵と想定した方がいいなこりや……………（なんか同士討ちみたいなきっかけで起きているのはノーコメントにしたほうがいいか……………あつちもあつちで色々大変だったみたいだし）」

「そしてこっちの海組は、変異生物出たが例の鮫クラスは出なかったのこの変異生物大量発生と通信障害を引き起こした原因あると思われる場所などの情報が手に入ったってところ感じだ」

「!!!」

その報告に上陸組は驚いた

「原因関係の詳細に関しては、有識者と船の国連の奴らと一緒にどうするかで今考えているから後で話すが……………恐らくもう一回上陸するなこりや」

万能者の言葉に上陸組の大半は思わず苦い顔をせざる得なかった……………

あのジャングルという名の狂った監獄での苦い経験を思い出したのだから……………

そして万能者はとある存在の方に目を向けた

「そして……オマエだ、なんでここにいるんだよ!？」

万能者が指さした先には、頭を抱える大半の原因であり、万能者曰く腐れ縁の存在、『蛮族戦士』がそこにはいた

「ココ ニ ツワモノ ガ イル カン ガ シタ タダ ソレダケ デ キタ ソシテ ソノ カン ハ セイカイ ダツタ ナ」
「……勘だけでこの島に来んなよ……とかいつ頃きたんだよ……下手したら確認できてない頃に来てるかもしれないぞこりや」

その蛮族戦士の言葉に万能者は更に頭を抱えることとなつた……

何はともあれ、その後も話の整理は行われていき、今後の方針も定まっていた……

数時間後……

調査隊全員（負傷者以外）は再び

諸君、万能者などと話し合った結果、通信障害や変異生物増加の元凶と思われる何かの調査及び取り除くことが決まった

本来なら明らかに危険な要素が多いことから島を焼き払うことを想定していたが、現在分かっている島の情報を整理した結果

焼き払うだけでは危険な要素の根絶が不可能な可能性が高いことが判明した

その為、我々は海上組と上陸組の調査隊を合わせて再編を行い、再び島へ上陸、元凶の調査と可能であれば取り除きを行うといった形となる

ルートとしては島の北西のとある地点、航空機墜落地点を調査した後、島の中心に近い位置に存在する山へと向かう形だ

コレも手に入れた情報……島の原住民と思わしきものが残したのから分かったことだが、どうやら墜落した飛行機には『ハザードマーク』がつけられた物資があったようだ……それが変異した生き物の増加につながっているかもしれないとのこと

そして、島の山に関しては情報からだとここに何かしらの儀式場があるとのことだ．．．．．ひよつとしたらここが通信障害の原因となっているナニカが存在している可能性があるとのことだ．．．．．これらのことを考慮して軍艦からの攻撃も考えており、上陸部隊には前もって信号弾を持たせることが決定した．．．．．本当に必要な時が来なければいいのだが．．．．．

．．．．．この任務も非常に危険度の高いものと推測される、そのため報酬金の増額を予定している．．．．．夏のバカンス休暇を手に入れるつもりが、飛んだ任務になってしまったな．．．．．だが、コレを乗り越えられればおそらくバカンス休暇も目の前だ

諸君が無事に生還し、バカンス休暇を手に入れられるよう健闘を祈る!!!

夜が明け．．．．．

彼ら調査隊は再び島へ上陸した．．．．．

．．．．．『元凶』ノ弱点ガ判明

．．．．．コレヨリ遠距離カラノ特殊攻撃ヲカ*i*．．．．．

．．．．．攻撃中止、『*α*』率イル部隊ガ再び島ノ上陸ヲ確認

．．．．．状況次第デハ支援攻撃ヲ視野ニイレ、一時待機ヲ選択スル

．．．．．『元凶』确实ニ葬ルタメ．．．．．手遅レニナラナイ
タメニ

ゲームとかで寄り道系のサブシナリオで本筋のシナリオの奴よりヤバイ奴が出てくることってよくあるよね（大規模コラボ）

未確認島 ジャングル 航空機墜落地点

調査隊はジャングルの中を進んでいき、途中で再び蟲や植物に襲われるなどの紆余曲折の出来事があり、かなりの時間がかかったもの、予定していた航空機墜落地点に到着していた

「これが墜落していた航空機か……」

「……大戦前の航空機って聞いてたが、これ型的には軍仕様のやつだな……もの見事に鯖だらけかつ大部分がバラバラになっているが」

調査隊の一人の言葉通りに墜落していた航空機は錆が多く大部分がバラバラになっており、ギリギリ型式が分かるくらいにしか情報が無かったのだ

ちなみに現在調査隊の大半はハザードマークの物資による汚染を警戒して装甲付きの防護服を着ていることをここで付け加えておく

「しかし情報ではこの辺も火災が起きてたって話だが……そんな面影ないな……」

「それもハザードマークの付いた物資が原因とその推測されているが……憂鬱しくなるほどに通ってきたところと同じレベルにジャングルだなオイ」

「うだうだ言っていないでさっさと調査をやるぞ、この装甲防護服ある程度はマシだが暑いには変わらないし、蟲とかがいつ襲ってくるのか分からないしな」

そう言いつつも調査は行われていき、それなりの時間が経ったこと「多分これだろうなあ……ハザードマークの付いていた物資って」「航空機からそれなりの位置に離れていたが……航空機が何かしら爆発してここまで飛ばされたのか？」

調査隊が見つけたそれはハザードマークが付いた頑丈な小型のド

ラム缶のようなものであり、大半が爆散して壊れ散っていたものの奇跡的に二本だけ傷と錆が少なく残っていたのだ

「……………で？どうするんだ？コレ」

「吹っ飛んで破損してたやつに残っていた緑の液体と粘液の中間みたいなのを簡単に調べてみたが……………なんか菌類なんかかというところしかわからない……………ここで無事なのを調べるのもアレだから嚴重にして調査船に持っていくしかないなこりゃ」

「それなら一部戦力を入れて負傷者も一緒に船に行かせよう」

墜落地点の調査を終えた調査隊は負傷者、重要物資持ちの撤退組と山方面の調査組へと分かれて再び移動を開始した

無論その道中も蟲や植物に襲われ

特に山方面組は

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロ

「山からダンゴムシみたいなの群れが転がってきたぞ!」

「落石ならぬ、落蟲かよ!」

ババババババババババ……………

ヒュン ヒュン ヒュン

「うわあ……………なんか空の方もなんかすごいことになってる……………早い何かと戦っているみたいだ」

「……………ヤムチャ視点ってこんな感じなんだなあ」

ズバツ ズバツ ズバツ

「それを言ってる場合か!こっちはカマドウマモドキの次はカマキリモドキが木ごとズバズバ切ってきてやがってるんだぞ!」

ズバツ

「キリコンデ クル サイ ニ ハ ヲ スベラセテ キリコメバ

カンタン デハ ナイカ」

「それができるのはお前ぐらいだ!!」

新たな蟲が現れるなどの更なる困難で苦勞することとなったが……………

3時間後・・・

未確認島 山 儀式場 その前

山方面組の調査隊はようやく山にあった儀式場の前にたどり着いた

その儀式場は山の頂上にあり、儀式場の周りには巨大な木が囲むようにして天然のドームの形になっていた・・・もつともその木々の下には何かの建造物や物があったと思われるものが存在し、その巨大な木々もそれなりに最近生えてきたようで、天然というにはいささか異常な部分があったが・・・

「・・・ようやく辿り着けたなあ」

「ほんとそれな」

その万能者の言葉に賛同するものは多かった

それほどに道中が過酷だったのだ

「・・・まあここの調査が島ではもう調べるところがないようなものだから、あと一歩ってことで頑張るしかないな」

((それが終われば後はバカンス休暇・・・))

そう言いつつ、そう思いつつ彼らは儀式場に入っていった

そして木々の影によってある程度暗くなっている中で彼の眼中に飛び込んできたものは・・・

「・・・土の山かアレ？」

それは台座があったと思われる場所にそれを埋まらせるぐらいにこんもりと土の山が積もっていた

そして、その土の山の頂点には・・・

「・・・キノコ？」

「人の頭ぐらいないかアレ？」

キノコのようなものが生えていた、正確にはマイタケがタンブルウィードみたいになくなっていく感じのものが・・・

「うん？土の山動いてないか？」

「各員警戒体勢!!」

それは動き出した

土の山を崩しながら、土の山の中に隠したものの出しながら動き出したのだ

「!!ッ???.」
「??????」
「??????」

それはあまりにもシユールだった

キノコのようなものの中には筋肉質の男性のような全裸のような体

(アレはない)が存在していたのだから

「.なにがどうしたらそうなるの?」

((((それな)))

誰かが言ったその言葉に調査隊全員が心の中で全員一致で賛同した

そして、その存在は調査隊達に向けて両手をかざすと

「ガアッ!」

「うがあっ!」

「でえっ!」

「ア」

「イツ!」

ドサツ

指からレーザーのようなものを放ってきたのだ

それも正確かつ的確かつ無慈悲に戦闘の中核となっている筆頭達に攻撃したのだ

その奇襲ともいえるような攻撃に先程の出来事で面食らっていたのか、彼らは対処ができなかった

それにより、一撃でアウレールや、オサム・アラマキなどのが致命傷ではないものの戦闘に支障をきたすほどの重傷、特にリヴァイルは致命傷を喰らったのか機能停止し、リバイバーなど逆崩壊液技術持ちのに至ってはその機械の重要部分を的確かつ致命的かつ修理不可なレベル(その瞬間では分かっていない)に破壊し使用不可能にしたのだ

無論、レーザーを撃たれた対象には万能者と蛮族戦士も含まれていたが. . . .

「・・・・・・・・・・スマナイ」

「・・・・・・・・・・なんでお前が偶然弾いたレーザーが的確にこっちに当たるのかな？まあ他のやつじゃなかっただけマシか」

蛮族戦士は構えた際に偶然レーザーが大剣に当たって弾いたことと万能者は持ち前の装甲が少々焼けたぐらいでほぼ無傷だった

そんな攻撃に怯みはしたものの

「う、撃て!!」

ズドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

ズドン!!ズドン!!ズドン!!ズドン!!

バババババババババババババババババツ!

ズガアツンツ!! ズガアツンツ!!

危険な存在と認識させるには十分であり、誰かの号令によってその存在への銃撃は開始された

その銃撃にその存在は

グッ

受け入れるかのように構えて、受けた

それなりの時間の間、銃撃は続き、止んだとき・・・・・・・・・・

その存在は全身が穴だらけの状態のまま構えて立っていた

「だ、ダメージは入ってるんだよな?」

誰もがそう思ったかった

だが、現実はあまりにもだった・・・・・・・・・・

その存在の穴の部分全てから

ズドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

先程受けた銃弾を全て撃ち返すように跳ね返してきたのだ

その出来事に調査隊はさらにパニックに陥った

頼りになる戦力の大半が戦闘不能、返ってくる銃弾の雨、己らの攻撃が効いていないことなどの出来事に耐えられる者は少ないのだから無理もないのだが

「こりゃ体制整えないとまずいな!」

万能者はそのパニックをまずいと考え、すぐに体勢を整えようとし

た……が

「イツ!? (ドゴオン!) がごおう!?」

その存在(銃撃による穴はなくなっている)は目の前にあらわれ、万能者の腹にパンチをめり込ませた

その威力は凄まじかったのか

ズガゴオーンン!!!

万能者を吹き飛ばし、そのまま巨大な木の壁にめり込ませた

「…………いでで…………最後の最後でこんなのが出るってマジかよ…………」

めり込んだ状態で万能者は己達が予想だにできなかった死地へと知らぬ間に踏み込んでいたことにそう言わざるえなかった…………

IRREGULAR!! IRREGULAR!! IRREGULAR!!
AR!! IRREGULAR!! IRREGULAR!! IRREGULAR!!
GULAR!! IRREGULAR!! IRREGULAR!! IRREGULAR!!
RREGULAR!! IRREGULAR!! IRREGULAR!! IRREGULAR!!
!! IRREGULAR!!

危険指定異常存在 人類終焉クラス

IRREGULAR!! IRREGULAR!! IRREGULAR!!
AR!! IRREGULAR!! IRREGULAR!! IRREGULAR!!
GULAR!! IRREGULAR!! IRREGULAR!! IRREGULAR!!
RREGULAR!! IRREGULAR!! IRREGULAR!! IRREGULAR!!
!! IRREGULAR!!

デツカいことが起こるとそこを起点に重力があるかのように近くのを巻き込んでくるよね……(大規模コラボ)

未確認島 海岸 調査隊上陸地点

その上陸地点には到着時に調査隊が臨時拠点を設置していた

儀式場で戦闘が行われている頃、そこでは負傷者、重要物資持ちの撤退組が帰還し次第すぐに負傷者の治療と並行してハザードマークのついたドラム缶の中身の調査(調査船に持ち運ぶ前に確認の調査)を行っていたのだ

そして、それは調査隊の一人の機転によってその中身の正体の一端を掴むこととなった

「まさかと思ってやってみたが、そういうことだったのか……」
そのドラム缶の中身である緑色の液体と粘液の中間のような物質を調査していた彼らの前には、バケツを植木鉢がわりに島の土を入れているものがあり、その土の上には……

これまでに見たことのない様々な種類のキノコが大量に生えていたのだ

その幾つかはすごい速さで腐り始めて土に帰りかけていた……
更にはしばらくしてキノコが土に帰ってなくなった土からは凄まじい勢いで植物が生えてきたのだ

「これが元凶だったってことか……」

「あの火災があつたと思われる場所が憂鬱しいジャングルに元通りになるわけだ……正確には似て非なる形であるが……」

「……本質的にコレは肥料とか栄養剤、活力剤などに似た類の薬品だったってことだな……あまりにもかけ離れているヤバイヤツだが」

「それ、生態系もおかしくなるに決まってるわな……一体どこの誰がこんなもんをつくったんだか……」

「帰ったら大戦前のデータを洗いざらい調べないといかんこ

りや……」

「というか船に持つていたらヤバイやつだなコレ……」

「……どうする？コレ……今の状況、役に立たないものぞコレ」

「……どうしようか」

何はともあれ、この異常生物の異常発生の元凶と思われるものを手に入れたものの現在の状況では無用の長物であるため、調査隊はこの物質をこの場で一旦嚴重に保管し保留することにしたのだ……

一方、儀式場にて

ズゴオン!! ドガアツ!! ベギツ!

そこでは激戦が繰り広げられたい

ズドオン!! ズドオン!!

ズバアツ!!

ドガアツン!! ドガアツン!! ドガアツン!!

「戦術人形達がなんとかやってくれてるが、こっちはこっちで負傷者の手当てで動けん……」

ズドオン!!

「あ、国連の戦術人形がまた一体吹っ飛んだ」

「呑気に言ってる場合か!？」

「しかし、本当なんなんだろうねアレ?」

最初のうちはその存在の放つレーザー、拳、蹴りなどの攻撃はどれも敵を屠るには十分すぎ、既にその存在に敵対的なものの多くが戦闘が不可能となつていき、その後にはリヴァアル（戦闘仕様）などの援軍が来た際になんとか膠着状態に持ち込めたものの長期的に見ればまだ不利な状況であった

「オレの攻撃に反射できないのがあると分かったのか、主にオレの攻撃などを避けるようになったか……」

ブンツ!! ブンツ!!

「……しかもブレイクダンスじみたアグレッシブな回避方法でな……更にそれから派生して足の指からもレーザーを出す

などの攻撃してくるしな……本当なんなのアレ？」

「アノ ツワモノ タタカイ ノ ナカ デ セイチヨウ シテイ
ル …… オモシロイ」

「こつちとしては面白くないんだっての……」

この敵はどうやれば倒せるのか、この攻撃は喰らうとどうなるのか、この攻撃は避けたほうがいいのか、この敵に攻撃を当てるにはどうすればいいか……など、まるでそれらのことを考えて行動しているのか、その存在は戦えば戦うほど経験を得的確かつ正確な対処が出来るなっていたのだ、それもわずかな間で……

そしてその経験はその存在にこの敵達は今までやった敵よりも強いと自覚させ、自分ができるあらゆる手を使って排除することを決める判断をさせることとなった

グッ

「うん？あれは……貫手か？でもこの距離じゃ届」

ボッ

ズバババババババババツ

「……いたね、うん、腕を伸ばしてリーチを伸ばした上に貫通力と速度がアホみたいあるのが」

「……セ、センサーでも反応できない……だど？」

その攻撃は国連の戦術人形を一撃で数体も貫いた上でリヴァアル（戦闘ボディ）の左腕を武装ごと縦に折り裂いたのだ

そしてその攻撃方法が有効だと判断したのか

「ム？ …… アノ ツワモノ セナカ カラ ナニカ ガツ
キデテク ゾ？」

ボゴッ!! ボゴッ!! ボゴッ!!

「……そして、腕を4つ増やしてくるといふ……どう見ても手数を増やしてきてるといふね……加減しろこの莫迦!!」

万能者の言葉はその場にいる調査隊全員の心（蛮族戦士は除く）を表していた

絶望は成長し、彼らを葬り去ろうとしていた

それと同時に……

(アノ ツワモノ …… サイセイ スル カシヨ ヲ ミル
ニ …… キホン ジョウハンシン カラ ハエル ヨウ ニ
サイセイ イル …… ナラバ ソノ ドコカ ニ ミナモ
ト ガ アル ト イウ コト ダナ)
ニヤア

(……アイツ、もしかして何か掴んだのか?)

未確認島 近海にて

……理解シタ、ソノ提案ヲ、今回ノ件デ我々ニハ絶対ニ手ヲ出
サナイトイウ条件付キテ受ケヨウ

ええお願いね……

……了解、ソレデハ4体援軍トシテ送ル
……4体?それじゃ少ないんじゃないの?

安心シロ、正確ニハ4体ハ「アレ」ノ足止メダ、本命ハ本艦ノ特殊攻
撃ニアル

……どうするかは知らないけれど勝算はあるようね……
アア、ダガ、ソレハソチラノ協力モナクテハナラナイ……失敗
スレバ人類ハ破滅スルノダカラナ……
……え?アレそんなにヤバい存在?

希望となり得るものも芽生えようとしていた……

めちやくちや強い奴って大体弱点が意外なものだったりすることが多いよね（大規模コラボ

未確認島 儀式場

調査隊と謎の存在の戦いは未だに続いていた

正確には

ドドドドドドドドドドドツ

「クソ、的確に避けやがる!!」

「自分に効果がない攻撃と効果がある攻撃を覚えやがったなこりや」

調査隊はその存在に決定打を与えられず、

「あぶねえ!!」

ジユツ

「.....すまない」

「弱くなったとはいえあのレーザーをガードできる手段が俺の装甲か、アイツの大剣?か、ソホオスさんのバリアか何かぐらいしか出来ないから攻撃と防御、カバールを同時進行でこなさないといけないのが辛い!!」

(((((.....それできるのか))))

キノコ頭という謎の存在も己のレーザー攻撃が弱体化している上でその他の攻撃も的確に避ける又は防がれるという膠着状態であった

そんな膠着が続いていれば調査隊の方が不利なのは誰の目でも明白であった

それゆえに

「ハガネ ノ ツワモノ ヨ タメシタイ コト ガ アル ツ
キアエ」

「何をすればいいんだ?」

「アノ ツワモノ ノ ウゴキ ヲ トメロ」

「無茶言うなオイ」

「ヤラナケレバ カテヌ ゾ (ズガアツン!) ヤツ ガ ヒルン

ダ イマ ダ」

「……ええいクソ、儘よ!!」

万能者と蛮族戦士は起死回生の策に出た

「うおおオオオオ!!」

ズガアツン!!

それは相手の胴体の部分に両腕を回して抱き寄せる行為、言わばハグと言えるようなものだった

もつとも

ギチギチギチギチツ……

「ウゴゴゴゴゴゴゴツ……」

「……ジューブリーカー?」

そのまま上半身と下半身を真つ二つにしかねない程に力を入れておられるという愛情表現からかけ離れた拘束技と化していたが

無論万能者が作り上げた隙を蛮族戦士は見逃さなかった

「さっさとやれ!!」

「ムロン」

ズバツ

その太刀筋は鮮やかかつ無慈悲に謎の存在の首を通り過ぎ、その後を追うように頭と身体の二つに分かれさせることとなった

だが、

ズボツ

それがどうしたと言わんばかりにその存在は失った首から下の身体を再生させたのだ

「クソ、首切られても復活するのかよ!」

「本当どうすりやいいんだよアレ……」

その結果に更なる絶望が……

「……いや、アイツ今頭から身体を伸ばす感じで再生させなかつたか?」

「…………… ヤハリ ミナモト ハ アノ アタマ ノ ヨウダ」
「ということは……………あのアタマをどうにかすればいいってことか」

否、光明が見えたのだ

た
そのの光明を活かすべく、儀式場に残った者たちは行動しようとした

「ゴガアツ!!」

「ガアツ!」

「グガアツ!」

「グツ ゴオ ア」

「グゴオツ!」

「でっえ!」

「イツ!」

それはやつと見えた希望すらも潰さんが如く、突然かつ無慈悲に起きた

突然生身の者は頭を押さえるようにして倒れ、戦術人形などは多数のセンサー関係で大量のエラーによるフリーズ、強制シャットダウンなどによって倒れたのだ

(……………マジか、アイツ生身や機械に効く特殊な超音波のようなのをやりやがったのか!? ……クソ、視界がぐわんぐわん揺れやがる……………そゆう系は最小限の対策しかやってないから意識を保つのがやつとだ)

万能者はその中では被害は小さい方であったが、それでもすぐには動けない状態になってしまっていた

そんな状況を確認したのか、謎の存在は己にダメージを当たられるものを屠るために指をその対象に向け始めた

(ヤバいやバいやバいやバいやバいやバいやバいやバいやバいやバいや)

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ)

どうすることもできないと思ったその時

ズグウワツシャツ!!

「……………え?」

それは突然空から降ってきて、その存在を踏み潰したのだ

そしてそれはその存在から離れると手の平からプラズマとおもわしきものを放って容赦なくその存在に攻撃を加えたのだ

「……………え?え?え?」

その突然のことに万能者はあまりの情報量に理解できなかった

なぜならそれは万能者の知っている装甲がつけられた Pawnとおもわしき存在であつたからだ

だがそれらを全てを理解をする間もなく戦況は変わっていった

謎の存在が Pawnと思わしき存在を受けつつも己の身体を再生させて立ちがろうとしたその時だつた

ズゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオオ!!!

「うおおおつ!?! た、滝か!?! って空から!?! 上なんもなかつたよな!?!」

それは滝、そう表現するしかない水の塊であつた……………

それがその存在を叩き潰すがの如く降り注いだのだ

更に現実離れの光景は続いた

スフィア形成開始

いつの間にか、Pawnと思われる装甲を纏った戦術人形のような3つの存在がその存在を囲むかのように現れ、先端に何かの装置が搭載されている杖のようなものを現在進行形で水の塊に押し潰されている存在に向けると

滝のように落ちていた水の塊が球体状に形成され、その存在を積み込むようにして閉じ込めたのだ

「じ、重力操作とバリアシステム、更には空間粒子学関係などの応用か!?!でもなんで水の中にアイツを閉じこめ……………」

万能者の言葉はそこで一旦止まった

それもそのはず、目の前で自分たちを苦しめた存在がその水の中で身が崩れ始めていたのだから

「……………アイツの弱点『海水』だったのかよ!？」

そう思ったのも束の間、

ピカッ

ドガアーーーーンンンツ!!

謎の存在が身体を光らせたかと思うと水の塊ごと爆発を起こしたのだ

その爆風には pawn と思わしき存在達も一時的に動きを止めるしかなかった

そして、その隙なのか

ボゴツ メキヤツ ゴリゴリ……………ギチギチ……………

その煙に覆われて見えない爆心地からは色々な不気味な音が出ていた

その音が出るのが終わり、煙が晴れる頃にはその存在は……………

「……………なんか最初の時よりも小さくなった?」

「アノ ツワモノ ノ キンニク ……オソラク バネ

ヲ アツシユク シテ ツヨク シタ ヨウダナ」

「……………お前いつの間に復活……………というかそれだとするとアレはパワーが滅茶苦茶強くなっているってことか……………分かりたくなかった情報をありがとうございます、コンチクシヨウ……………まあそういうことだっことはこれが最終決戦のようだなこりゃ」

「サイゴ ノ サイゴ マデ アノ ツワモノ ハ タノシマ セテ
クレル ナ」

「楽しめねえよ馬鹿野郎……………もうアイツをぶちのめせばいいこと以外は何かだかだがさっぱりだ……………」

何はともあれ、島で起きた騒動は最終局面を迎えたことは間違いないな
かった

それも投げられた蛮族戦士が丁寧に爪の刃を前にして縦に回転しながらその存在に向かつて……

そしてそれは起きた

万能者などの一部が除く誰もが勝利を確信し、リバイバーによって無力化に等しい状態されたその存在に銃弾の雨を浴びせようとした時

秒にも満たない、コンマなのかすら分からない、誰の認識も不可能に近い時間で

当たろうとしたものとギリギリに着弾した弾丸やレーザー、貫き手をした状態のリバイバーの腕は

取り込まれた

まるでその存在の身体が何かの口であるかのようにその存在の身体に取り込まれたのだ

それしてその身体からはただならぬ何かが無慈悲に周りを侵食するかのように広がるとした……

ズバアツ

蛮族戦士の爪の刃がそれごとキノコの存在を斬るまでは……

その一太刀は頭をかち割るかのように綺麗に頭の真ん中から豆腐を切るかのように入り込んでいき、やがて股間に当たる部分を通り過ぎた

見るものがいたら思わず賞賛するほどに綺麗な真つ二つであった

そして

パキツ

何かが割れる音と共に調査隊を絶望の淵へ追いやる形で苦しめたキノコ頭の存在はその身が崩れていき

最後には力の源とされていたキノコの頭も灰になるかのように消えていった

その場に真つ二つに割れた何かの結晶のみを残して……

尚……
ゾオツ

それが起きたすぐ後に、万能者と蛮族戦士以外の調査隊達は全く理解は出来なかったものの、万能者と蛮族戦士がその行動をしなければ自分達は死、又はそれすら生ぬるいことに巻き込まれていたと感覚で実感してしばらく動けなかったこと

「いつ!?貫き手してた腕がなんか無くなってやがる!?!」

貫き手していた部分が消失したりバイバーの腕によって間違いない認識できなかった時間でなにかが起きていたことを知ったこと

「うん?この結晶……あつ……」

ズドドドドドドドオオオオオオオオオオオンンン!!!!

「た、退避イイイ!!」

「地震かよ!!つて地面にヒビが!?!」

「や、山が崩れるう!?!」

「最後の最後までこれかよ!?!」

調査隊が立ち直ったほんの少し後に地震が発生し、大慌てで崩れる山から撤退する羽目となり更に海岸の臨時拠点に向かう途中で地震で狂乱状態の蟲達と追いかっこしながらの撤退をすることになったりと最後の最後まで島自体が殺しに来ていると思わざるえないほどの出来事をたつぷりと味わうこととなったのは余談である……
ちなみに撤退の際には既に pawnと思われる存在達は消えていたとのこと付け加えておく

EXTINCTION EXTINCTION EXTINCTION
EXTINCTION EXTINCTION EXTINCTION
EXTINCTION EXTINCTION EXTINCTION
EXTINCTION EXTINCTION EXTINCTION

休暇の際に仕事の話はかなり心にくるよね（大規模コ
ラボ

キノコの存在を調査隊が倒したことによるものなのか、広域にわたって通信障害も消え去っていた

まだ変異生物に関しては現時点ではどうしようもないと判断され、未確認島周辺の海域ごと隔離監視という形で保留されることになったものの当初の目的を達成したことにより調査隊達には約束通りバカンス休暇することとなり、調査隊は束の間の休暇を取っていた

尚、例のドラム缶に関しては

「…………俺の格納庫に入れた方が安全じゃね？」

「「「それだ」」」

万能者の言葉に満場一致で万能者の格納システムに一時保管されることになり、その後一つは万能者がそのまま保持し、もう一つは国連が嚴重に保管の形で決まったのだった

未確認島調査から3日後

未確認島及びその海域から離れたリゾート関係の島

人気のない栈橋にて

「世の中儘ならない形で回るものだった理解してたけど、さっきの話や判明したあの緑の薬品の製造理由などを聞くとそれすら甘いって思わざるえないな…………ホントに」

万能者は自分以外誰もいないその場所で釣り（尚、釣竿は万能者特製）をし、そう呟きながら思い老けていた…………

『……………私がいることにいつから気づいていたの？』

そんな中で万能者の眼下のみに映る少女の姿をした存在…………
OGASは話しかけた

「そう思ったのは大体鮫の襲撃の後あたりか？なんか妙な反応があるなどは思ったが、そんな時はジャミング関係で確信が持てなかつたけど」

『………確信を持ったのは?』

「あの変態が戦闘仕様のヤツを持ってきたあたりから………あと、p a w nモドキが来たのもアンタが交渉してくれたからだろ?」
『何もかもお見通ししてわけね………』

「なんでもってわけじゃないぞ?あのp a w nモドキがいること気づいてなかったからな………更にいえばアンタの力でも次からは見づからなくなる可能性があるな」

『………あなたとあの存在達、ほんとにおそろしいわ………』
そんな会話がありつつ

「あとすまんけどアンタのデータを簡単に大雑把ではあるけど解析させてもらったよ」

『………え?いつの間?』

万能者は爆弾発言をした

「まあコピーもするつもりもないから見るだけな感じだが………あつこれも含めてだけどこの後の話もある変態とかの他の人に話さないでくれよ?」

『………分かったわ、聞こうじゃないの』

「まあアンタにとつて身になることかは分からないが、とりあえず言っておく………結果としてはアンタには俺関係の技術は間違いなく入ってなかったってことだな………」

『ふうん………うん?それってつまり………』

「ああ、遺跡関係で俺関係の技術が関係してくるのはアンタが開発された後の話ってことだな」

O G A Sはその言葉に驚いた

「俺から言わせてもらえば、それが分かっただけでも収穫だが………遺跡のデータなどが残ってたら嬉しかったな………分かったらアイツらをとつちめられるのだがなあ………おっと引いてるな、結構な大物ばいぞ」

そしてO G A Sは聞こうとした

万能者という言葉で隠れた疑問を

「あなたはな」

「どりやあああああああ!!!」

しかしそれは万能者の釣り上げる際の叫びで掻き消されてしまった

そう叫んで釣り上げたものは

鯨だった

強いて言うなら、その鯨はデカく、あの海域に存在し、調査隊を襲ってきたあの変異生物に似て

「フンツ!!」

ドゴオンツツ!!

それは早かった、二人がその存在の姿を完全に理解する前に万能者が強力なパンチによって水平線の彼方……ついでにあの海域の方角に吹っ飛ばしたのだから

「……君は何も見なかった、いいね？」

『……アツハイ』

それ故に言おうとした疑問は消え去ったのは仕方ないことであつた……

尚

「さて気晴らしにビーチの方で何かしら参加するか」

その後には万能者がビーチバレーなどに参加し色々なことを引き起こすのだがそれはまた別の話……

夜になった頃

借りている部屋にて

「まだバカンス休暇はそれなりにあるが……さっさと聞いたほうが聞いたほうがいいかな？」

万能者はその部屋にいた

「うん、そうしたほうがいいな……てい」

「ぎやあ!？」

万能者は突然『横穴』を作り出し横に手を伸ばすとそこから女性……ソホオスを引っ張り出したのだ

「突然引つ張り出してすまん、こうでもしないと俺に会わないだろうなって思ってたな……」

「アイタタタ……そうだとしてみも少し手心つてものができなかつたの?」

「……俺これやるのホント苦手なもので……」

そんな会話がありつつも

「……さて盗聴対策とかの準備も前もって済ませてるし本題に入ろうか……単刀直入に言う……ソホオスさん、アンタ未来から来ただろ?」

!!!

万能者は初っ端からぶっ込んだ

「あー……やっぱそうなのか……そして、その様子だと未来の方ろくでもないことになってる感じか……ならアンタがここにいてってことは未来を変えようって感じか」

「……あまり詳しくは話せないけど想像の通りね」

「つてことはバルカンさんを襲ったっていうアレも……あー……なんとなく想像できたな、うん……はあ」

「……はあ」

二人したため息は吐かざるえなかつた……それほどまでに未来の方は深刻な方向へと辿っていたようだ

だが

「……だがリh……ソフォオスさんあのキノコの存在は未来では出現したって情報はなかつたろ?」

「……ええ、存在していなかったわね」

「なら、いいことと悪いことが混ざったことがある、それはもうこの過去はもうアンタの知る過去じゃないってことだ」

「……じゃあ、あなたが言っている悪いことが混ざっているって何?」

そのソホオスの疑問に万能者は答えた

「多分だけど未来への道筋がもう変わっていて、誰にも予測不可能か

「制御不可能な状態になっている可能性が高いつてことだ……」

「ソホオスは驚いた、その反応を見た万能者は

（ああ、その様子だとその未来の俺はその部分の情報を開示せずに消えたってことか……結果的にはアレだが時と場合にはよしなあ……）」

そう悟るしかなかった

「……まあそんなわけで良くも悪くも未来を変えるチャンスが現在進行形で起きているわけだが……そこで協力してもらえるか？したら良い未来になるかもしれないが、失敗したもつと残酷かつ非情な悪い未来となるかもというギャンブルに……あつ、今まで通り裏方で動く感じでもいいから、別にこれは強制でもないし」

しばらくした後、話し合いが終わり、ソホオスが去った頃

「……はあ」

万能者はベットに倒れ込んでからため息を吐いた

「……結局言わなかったが、言わないほうが良かったのだろうな……」

未来の道筋が予測不可能かつ制御不可能な状態になっている理由が多分俺と俺関係の技術が原因であることを……変な勘が変な時に働くから俺……」

その一言はその後のバカンス休暇の日々の中に消えていったのだった……

一方 同じ頃

未確認島 100km周辺海域

ズバアツ ズバアツ

「ナルホド クウカン ヲ キル カンカク ヲ ツカンダ」

海に浮かぶようにある岩場にて蛮族戦士は鍛錬を行っていた

「フンツ !!」

その一振りは海の表面を滑らせて入っていくかのように切った

そして、その切れ目は閉じるのではなく開かれた……

それは規模が小さいもののモーセの海割りを彷彿とさせるような海割りであった……

「コレ デ アノ ツワモノ ノ ワザ ニ イツポ チカヅイタ」

その技の出来に蛮族戦士は満足そうに笑っていた

ちなみに余談であるが蛮族戦士が調査船から海上で離れる際

「……うん言ってたから想像はしてた……だがそれを実行するヤツがあるか……ツ!!」

海上を走って去ってゆく蛮族戦士に調査隊は啞然とする中、万能者は調査隊の心の中の言葉を代弁する光景があったことを付け加えておく

一方 海中にて……

通信障害ノ原因、及び人類ニ破滅ヲ及ボス存在ノ排除完了……
タダシ被害ハ甚大、更ニ必要経費ダツタトハイエ、彼ラニ情報ヲ見セ
タコトヲ付ケ加エル……

……今後活動ノ秘匿レベルヲ繰リ上ゲル

……どうやら今回の出来事は関わった各勢力に少なからず
今後に影響を及ぼしたようだ

防衛線は大体の作品で破られることって本当多いよね（コラボ回

前回の未確認島の件から数ヶ月後……

I O P 社 万能者の部屋

「パラデウスの重要地点の制圧？ ……つまり情報聞く限りド腐れなああの白い奴らをトドメ刺すための準備を始めるための作戦ってことか」

「……簡単に言えばそんな感じわね」

万能者はペルシカから新たな作戦が始まることを聞いていた

そして、その話の内容を聞いて少し考えると

「……p a w n モドキ使っているところのことを考えるとさつさと邪魔になる組織を潰した方がいいよな……よし俺もその連中に道德のどの文字から徹底的に叩き込むことを兼ねてその作戦に参加するよ」

その作戦に参加する意思を固めた

そして、作戦当日……

タリンから数十k m離れた地点

パラデウスの防衛線から数k m離れた 上空にて

「結局あの武器のロック解除が間に合わなかったし、少し出遅れちゃったなあ……」

万能者はそう思いながら上空を飛んでいた

その姿は以前に使っていた空戦用高機動兵装パックによって装備を充実させていた

「それじゃ『こちら万能者、これより防衛線の一番厚いところから突入する』……よし、道德を守らないとどうなるかの授業の時間だ」
そういつて万能者は敵が一番集まり、一番防御が硬いところに落ちるかのように突っ込んでいた……

それは防衛する側……パラデウスにとっては突然のことであつた……

ドガアーン!! ドガアーン!!

「戦車2撃破!!(ドドドドドド)つと!歩兵級戦術人形多数!!めんどくさいからD・B・Rで薙ぎ払う!」

ズガガガガガガガガガガツ!!

「撃破ツ!!次イ!!」

それはまさしく蹂躪であつた、突如飛来して来た人型の存在は一撃で防衛戦力に大打撃を与え、飛び回りながら続く二撃、三撃、四撃と次々に被害を増やしていった

無論彼らは反撃に出た、他の防衛線が逼迫している中で使用可能な戦力を出して

だが、それらも無慈悲にその犠牲の仲間入りをすることとなつた

実弾やレーザーの銃撃やミサイルによる爆撃はもちろんのこと

急降下の勢いでグラディエータを踏み潰したり……

バックパックに装着された大型の羽で通り魔のように戦術人形達

を切り裂いたり……

プラズマフレアを防衛側の戦力が集まるところに的確にばら撒い

て火の海にしたり……

など例を挙げたらキリがないほどに無慈悲に容赦なく様々な方法

で撃滅されたのだ……

もつとも、それを幸運とは言い難いが皮肉なことに大体の戦術人形が感情や自我などを持ち合わせていないため、それを感じることはなかつたのだが……

「オラオラオラツ!!アンタらに悪いが徹底的に容赦なく撃滅させてもらうからささつと出て来やがれえ!!」

それから程なくして防衛線で一番厚かつたとされる部分の戦力は壊滅したのはいうまでもなかつた……

それ故に……

防衛線の崩壊を確認、タリンの防衛可能の確率が著しく低下……
……これよりプランBを発動、大規模殲滅を開始する
……尚、例によつて『ヘカトンケイル』も起動し、敵の殲滅
に当たらせる

悪魔より悪魔的な所業を行うパラデウスにその判断をさせるのに
は十分すぎる材料だった

《おうおう、張り切つてらっしやるなあG&Kの皆さんは》

《このまま何事もなく終わつてくれたらいいのだがなあ……》

《まあ向こうさんも己が不利になることを残すことをするわけがない
し、最近新しいおもちゃ手に入れていることだしなあ……そ
う思いたいけど世の中うまくいかないモンだよ、なあカオナシ》

(了)(了)

《まあとりあえず現状は待機だ、パラデウスのほうがヤバいことをや
らかしたら……いや、やらかす前に感知ができれば俺達も動
くぞ》

《《了解！！！》》

(了)(解)

「キタカ ツワモノ タチ ガ …… ナラバ デムカエル
ジュンビ ヲ セネバ ナ」

更にその裏で何かが動き始めながら……

デカいところの後始末は大体爆破とかを大胆にやる
場合が多いよね（コラボ回）

タリン 都市部にて

「……………お前なんでここにいるんだよ!？」

万能者は叫んだ、その疑問に……………

「ツワモノ ニ ナリエル モノ タチ ノ ササイナ ネガイ ヲ
カナエル タメ ダ」

その存在は笑顔で答えた

ほんの少し前

「う〜ん……………通信の様子じゃなんか強化型とかアブノーマルなヤ
ツとかが出てるぽいなあ……………」

防衛線で一番厚い部分の戦力を全て殲滅し終えた万能者はそのま
ま飛び通信を聞きながら都市部に向かっていった

「……………まあ、今は俺にできることをするまでだな」

そう決心し、都市部の花畑に近く一番戦力が集まっているところに
向かおうとした

「……………うん? やけに反応がない?」

それは異常であつた

都市部の他のところでは戦闘が起こっているのにも関わらず、その
場所は異常なほどまでに反応がない上に静かであつた

「……………降りるしかないか」

そして、降りた万能者が目にしたのは……………

様々な形で真つ二つに斬られた強化型を含むパラデウス兵や兵器
の数多くの残骸

そして……………

「ヒサシイ ナ ツワモノ ヨ」

「……………お前なんでここにいるんだよ!？」

万能者の腐れ縁であつた

更に遡ること十数分前

(お父様や【あの花】にも選ばれなかった私……今ここを攻撃してる者たちは、私や妹たちを救ってくれるのでしょうか……?)

アア スクウ トモ …… アノ モノ タチ ハ ソノ

タメ ニ キタノ ダカラ ナ

「……!!?」

彼女達はその声のした場所の方に視線を向けた

そこには右腕が大剣と一体化しているという特徴的なE・L・I・D族戦士が一体立っていた

「あなたは……いいえ、それよりもその話は本当ですか」

「アア ソノ トオリ ダトモ」

彼女の疑問に蛮族戦士はそう答えた

「……では、あなたはその者達に含まれないような言い方なのは何故でしょうか？」

「アア ワレ ハ ベツ ノ カタチ デ タノマレタ ノヲ ヒキ

ウケタ カラ ダ サラ ニ イエバ アノ モノ タチ ノ

コウゲキ ト オナジ トキ ダツタ ノハ マツタク ノ グウ

ゼン ダカラ ダ」

「引き受けた？誰にですか」

「ココカラ ダツシユツ シタ イキル コト ヲ フタタビ メザ

シ ハジメタ モノ タチ カラ ダ」

「!!?」

その言葉に彼女は心当たりがあった

数ヶ月前に突如、十数人の姉妹達が一斉に失踪したのだ

「探さないでください」という書き置きを残して

その時はタリンの周りの防衛線による自殺をしたと思っていたのだが

「あの子たち……生きていたの?」

「アア イキテイル トモ …… ゲンキ ニ ワレ ヲ ナン

ドモ コロシ ニ オツテ キタ ノダ カラ ナ」

「……………え？」

その返しに若干喜びが吹き飛びかけたものの、それでも尚失踪した姉妹達が生きることを望んで脱出していたことに彼女は涙を流した

「サテ リユウ ハ ドウデ アレ ワレ ハ オマエ タチ ト
アノ モノ タチ ノ ミチ ヲ キリ ヒラカネ バ ナ」

そう言いながら蛮族戦士はその場から去っていった

回想終了

「……………とりあえず、お前とは敵対しない形で進行していいんだよな？」

「アア ソレヨリ モ ウエ ノ ホウ ヲ キニシタラ ドウ
ダ」

「上? ……まさか」

万能者は蛮族戦士が指定した方角の空を見上げた

そこにはなにやら大型飛行機と思われるものの大群が存在していた

「爆撃機の大編隊だと……………しかもあのタイプは……………多分核使えるヤツか……………ヤツら丸ごと証拠隠滅する気満々だな……………クソツ」

そういうと万能者は再び空に舞い上がった

「オイ、お前の目的もあの子達を守ることだったのなら本隊とあの子達の道を切り開け」

「ムロン ソノ ツモリ ダ」

「……………頼んだぞ」

そして万能者はそのまま飛んでいった……………全てを焼き尽くそうとするパラデウスの爆撃機の大編隊の元へ

「アア ソノ ツモリ ダトモ ハガネ ノ ツワモノ ヨ」

蛮族戦士は笑った

自分が心から一番挑みたい戦士に頼まれたのだから

「ナラバ サラ ニ ホンキ デ ヤラネバ シツレイ ダナ」

蛮族戦士はそういつた瞬間

《感心してる場合じゃないぞ、恐らくあれらは本気ではあるだろうが本命ではないからな……》

《とりあえず例のアレのパイロットに通達しておけ、『あの兵器が出てくる可能性が高くなったからアレの起動していつでも投入できるようにしとけ』とな……カオナシはアブノーマルの連絡線だっけ？それらしきものの搜索を頼む、それと俺達も動く準備をするぞ、パラデウスが彼らを逃げられないように囲んでくる可能性があるからな……今証拠を持って証明できる立場にあるG&Kがここでやられたらアイツらを社会的に抹殺などの弱体化できるチャンスがいっつ回ってくるか分かったモンじゃないからな》

《了解!!》

(了)(了)

まともな理論とか研究、修行とかを極めていくとなんかお前は何を言っているんだ的とんでも結論・結果に辿り着くことってあるよね（コラボ回

タリン 都市部から離れた上空にて

「オラツ!!」

グシャツ

「デエイっ!!」

バシユツ バシユツ バシユツ

ドガアーーン!! ドガアーーン!! ドガアーーン!!

「爆撃機4機撃破ツ!!クソツある程度少なくなったことといつの間にか核の件が解決したとはいえまだまだいやがる!」

（多分、味方の悪魔な方々が工作か空間転移かなんかで核搭載機から核をとっぱらったんだろうけど……ホントいつの間をやったのやら）

そこは花火大会があるかの如く数多くの爆発や弾幕などの光が光っては消え光っては消えを繰り返していた

「おまけに以前あったあの白い可変人型の鳥みたいなのがかなりの数で来るのが腹立つなあ!!」

そう言いながらも万能者が放つ弾幕と格闘によって万能者のいう爆撃機を守る人型の鳥「アリオール」は次々と撃破され重力に引かれて落ちていった

（しかし、情報を送ってきたやつ……かなりすごいのも使ってるな、多分現世代からいくつか先のクラスのやつか?カウンターなしだと下手したら俺の使ってる規格調整用接続電子システムレベル（片手間で作ったもの）と同等かそれ以上だな……俺も接続調整規格の電子系の部分をアレぐらいのやつで導入しようかな……やめとくか、現時点でも大元と規格違いで調整が難しいしな……）

そう思いながら爆撃機部隊の大半を殲滅した頃

『こちら第三小隊ツ！デカいのが現r』

『第三小隊が目の前で消滅！なんだあのデカいのは!?!』

『メーデー！メーデー！味方の戦闘ヘリが次々に落とされてる！こっちもやb』

『こちら第六小隊!!何が起きたの!?!近くのビルが突然崩壊したと思ったら近くの臨時拠点がクレーターになったのけれど!?!』

何か、それもとてつもなく悪いことが起きたことが分かる通信が届いたのだ

「.....ツ!!もしかして爆撃機部隊は本命の一つであるけど囷の役割もあつたのか!?!」

万能者はその通信を聞いて理解した、今対峙している爆撃機部隊は囷であると.....そして本命は既にタリンの都市部に到着して蹂躞を開始していると

「クソツきつきと爆撃機全部落としていかないとまずいn」

そう思い行動しようとしたその時

『グガアッ!?!』

『キヤッ!?!』

『ゴガアッ!?!』

「イツ!?!」

それは上空にて爆撃機を殲滅していたもの達の前にそれら十数体は現れた

まるで逃がさないと言わんばかりに出会い頭に各機に持っていた武装で強烈な攻撃を喰らわせながら

「.....『こちら爆撃機殲滅部隊、すまんトラバサミ喰らった、そっちにはすぐに迎えそうにない』.....ホント厄介方のオンパレードだことで.....」

その存在のその名は「スプリガン」

空を自由に飛ぶ巨人の妖精達は爆撃機という餌にかかったものに牙を剥いた

タリン 都市部 郊外

それはあまりにも突然に現れた

現れたそれは異形の巨人、まさにその言葉通りの存在であった

「ぜ、全員て」

ストオーオーンンンツ!!

主腕と思われる腕に一体化となる形でつけられた巨大なプラズマカノンによって敵をその場所ごと蒸発させ

ズゴオーオーンンンツ!

背中から突き出る形でつけられた補助腕付きの巨大レールガンによって巨大なビルに隠れた敵ごと粉碎し

ズガガガガガガガガガガガガガガガガガツ!

「ガツ」「ベツ」「ギ」「ゴつ」

両腕の脇から突き出る形でつけられた補助腕一体型の巨大レールガトリングによってプラズマカノンの発射時の隙を狙おうとしたG&Kの部隊（装甲車付き）を土ごと耕すかのように粉碎し

「駄目だ逃げられん」

「うわあこっちくちく」

ビツ ビツ

ドガアーン!! ドガアーン!!

郊外を飛んでいたヘリを全身に搭載した無数のレーザー発射によってハエを落とすかの如く正確に撃ち落とすなど全身の多彩な武器によって郊外にいた敵を容赦も慈悲もなく殲滅しながら都市部に向かって郊外を突き進んでいた

かろうじて攻撃を避けられたものも逃がさないと言わんばかりに異形の巨人の後ろについて来たパラデウスの強化型の大規模な増援

部隊の攻撃によって葬られていった……

無論G&Kもやられてばかりではなく

「もうすぐよ……今!」

「これでもくろええええッ!!」

バシユツ バシユツ バシユツ

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

それらの攻撃を掻い潜って潜伏していた部隊が移動を止めた瞬間のヘカトンケイルの背中に向けて反撃を行った

そしてそれらの反撃は

その異形の巨人に当たることなく全て消滅した

「……はっ」

誰かその事実にも呆然としながら誰もが考えていることを口に出した

それほどに受け入れ難い事実だからだった

ビツ ビツ ビツ ビツ

ドサツ ドサツ ドサツ

無常にも呆然としていたもの達は巨人の全身から放たれたレーザーによって正確に撃ち抜かれ倒れ伏した

それはまるで行動する前に飛んでいる虫をうがいから排除すると
言わんばかりに

そして、攻撃するものがいなくなったのを確認すると巨人は再び両腕の砲から全てを粒子へと焼き尽くす光を構築して今度はG&Kの後方部隊と巨人を作った組織の不利となる証拠が集まるとされる場所に向けて放とうとした

《転移位置よし、場所よし、タイミングよし、今だ!!》

《あいよ!!》

ドゴオンッ!!

ズガアッンッ!!

ズドオン!!

それは突然起きた

ヘカトンケイルの近くに存在していたビルから打ち破るような何やらマイナスイオンドライバーを巨大化したようなものが突き出してきて、ヘカトンケイルの左腕のプラズマカノンにぶつかりその両方の砲身の矛先を空へと変え、更に発射寸前だったが故に発射を止められず、そのまま空へと無駄弾を放つこととなったのだ

ヘカトンケイルは突然の自分に通じる攻撃に体制を少し崩したものの立て直すとその攻撃があつたビルへと向き直つた

そして、そのビルから

ズガガガガガガガガガガガッ!!

ブオオオオオンン!!!

新たに巨大なフックアームのような大きな爪が現れると今度は喰らわれないと言わんばかりにその攻撃を避けるかのように後方に下がった

ズドドドドドドオオオオオンンツツツ!!

流星にその攻撃には耐えられずビルは倒壊していき、その場には……………

ヘカトンケイルとはまた違った姿をした巨人が立っていたのだ

「なんかまた出てきたあ!?!」

「次から次へともう嫌だあ……………」

「……………うん?新しく出てきたやつなんであんなカラーリングしてるんだ?」

「どうやらあの6本腕の敵……………みたい?」

新たにあらわれた巨人はパラデウスの巨人とは違った姿をしており、人型であるものの左腕の大型フォーククロー、右腕の巨大コンクリートハンマーで、そのカラーリングは何故か日本の作業機械を思わせるような姿をしており、丁寧にあちこちに安全第一の文字とマークが書かれていた

何はともあれ………と言えることは

《まさか、巨大ロボと巨大ロボの戦いができる時が来ようとは………いい時代になったものだ》

《………悪い時代なのでは?》

想定外事態発生………目の前の脅威を排除する

《目の前の奴さんもやる気満々みたいだな》

《………もうどうにでもな—れ》

その場所で大半が理解できない状態で巨人と巨人の争いが始まったのが間違いないことぐらいであった

尚余談であるが………

「ここで例のE・L・I・Dか………厄介だね」

「ホウ ナカナカ ノ ツワモノ ガ アラワレタ モノ ダ」

「グルルルルツ………」

「………ワレ ノ カテ ト ナツテ モラオウ」(オリジナル笑顔)

上記の騒動の中でアブノーマルと戦っていた蛮族戦士と合流したランページゴースト、そして今騒がせているC級E・L・I・Dの一体が遭遇し戦闘を始めたこと

(アア ワレ ハ ナンテ コウウン ナノ コト カ ……)

サマザマ ナ ツワモノ ト タタカウ ノミ ナラズ アノ

カミ トハ ベツ ノ カミ ト オモワレル ソンザイ モイ

ルト カンジ トレル コト ガ デキル トハ ……)(鬼ツ

コリ笑顔(オリジナル笑顔の更に上版)

「グオオッ!」(その笑顔にビビった

「笑顔怖!」

「………敵もその笑顔に怯むとは………」

(………どうやら駄目みたいですな)(遠い目

目をつけられたくないという思惑とは裏腹に雰囲気と気配、勘によつて目をつけられた人ならざる者はどこかで遠い目をせざる得な

かったこと

《ちよつと遅かったが戦闘開始！敵の増援がG&Kを囲むまたは殲滅される前に殲滅するぞ！》

《オオオオオオオオ！！》

《ヒヤツハー解体の時間だあー！！》

《怪我人と新鮮な死体はこちらに！！できれば死体は五体満足で！人形も問わず！！》

《・・・・・・・・・・・・・・・・ホント節操ないなアンタら》

「アレは・・・・・・・・何？」

「知らんがな」

「・・・・・・・・一応味方みたいだね・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ひよつとしたらあのもう一体の巨人ってあいつらのかもねえ・・・・・・・・」

巨人同士の戦いの後方にて突如現れたFANNIESがパラデウスの増援部隊と交戦し、G&Kの援護を始めたことがあったなどを付け加えておく

理不尽には理不尽で打ち消すってかなりゴリ押しだけど効果ある場合が多いよね（コラボ回）

タリン 都市部 郊外

そこではある出来事によって一時的ではあるものの戦況が止まっていた

先程までプラズマカノンで形成した剣とコンクリートハンマーのチャンバラや、連射されたレールガンの弾避け、そして肉弾戦の大規模なプロレスなど豪華大迷惑な巨大ロボ同士のぶつかり合いが起きていたにも関わらずにだ

《……今の見たか？》

《ああ、見たぞ……》

大型の人型ロボット……「アトラス」のパイロットの二人は目の前のモニターに映し出された出来事に最初は驚きはしたものの何が起きたのかを冷静に理解した

《突然ヘカトンケイルの六本腕が切り飛ばされた……間もない感じだったな……そしたらその後消えたと思っていたあの嬢ちゃんが出てきたと……カオナシ、『そっち』ので何か観測できなかったか？》

（確）（認）

《なるほど、そっちで確認できたってことは……あの空飛ぶ侍？の嬢ちゃんは速さだけで『あっち』に行ったってことか……》
《とんでもないことしてんなオイ……そもそもってなんか戻れたのはカオナシがいる、または観測できるあたりぐらいならまだ消滅せずに帰れる深度だから消滅せずにアレができて帰ってこれたってところか……命懸けにも程があるぞオイ》

《……一応帰ったら大将に伝えておかないとなあ……何はともあれ》

そう言いながらパイロットは再び全ての腕を失ったヘカトンケイ

ルの方へと目を向けた

《ものの見事に主兵装を失ったもんだなあ……若干可哀想な気もするが、それでもまだ武装を完全に失っているわけでもないし、まだ戦う意思をみせているからやらせてもらおうぞ》

その後もヘカトンケイルの残った脚部よるキックと身体による体当たりを巧みに攻撃し、アトラスがそれを受けたり避けたりしながら攻撃を繰り返すプロレスが再び続けられたものの、その後に来た援軍によってヘカトンケイルに残された武装がさらに削られることによつてその大規模なプロレスも終わりに向かつていこうとしていた……

戦闘能力著しく低下……電子攻撃により通信関係に深刻なダメージが発生、オフラインモードに以降したもののダメージが極めて深刻……空間消滅式攻勢防御システムの精密防衛システムに異常……先程の戦闘にて補助偏向障壁が意味を成してないと判断……レーザー迎撃システムも大半が大破……これ以上の戦闘は不可能、撤退も不可能と判断、これより本機は自爆戦闘プランを採用、今後厄介となる存在を少しでも道連れにする

大破に近いレベルにダメージを受けたヘカトンケイルがアトラスとその味方達に目もくれず、浮遊（といってもほんの少し）し、地面を削るように周りを消滅させてながら移動を始めるといった形で……

《……アレ？あいつまさか……》

アトラスパイロットの一人はすぐにモニターの操作を開始した

その結果はすぐに出ることとなった

《本体のエネルギー係数上昇……周里には空間消滅のやつが常時展開……どう考えても自爆です、本当にありがとうございますございました》

投げた

『上出来だ!!』

その光景を見ながら万能者はアトラスに向けてそう言った

そして………

「特殊設定出力0.23% ……目標値チャージ完了………
発射」

ガアオンツ!!

ヘカトンケイルは跡形もなく消え去った

「………え？」

「き、消えた？」

《あ、ありや………》

《……俺たちから見ても記録を見ても突然消えたようにしかみえ
ねえなあ………》

その戦いを見ていたもの達は突然の非現実すぎる出来事に戸惑う
しかなかった

「………本当にコレを使いたくなかったんだが、アレがヤバい
ことしようとしたから仕方ないよなあ」

アタツシユケースに戻るように変形していく巨大な手持ち砲を見
ながら万能者はそう呟いた

そんなことがあつつも郊外で起きていた巨大ロボ同士のプロレ
ス騒動は収束し、戦いは終わりへと進み始めたのだった………

尚余談であるが………

ゾオツ………

『!?!』

その戦場にいた敵味方関係なく一部の強者や規格外など様々な者
たちは感覚と本能で理解した

どんな力があるうと、どんな存在や概念であろうとも無に返すこと
が出来る何かが一瞬の間で起きたことを………

一部などに至ってはその得体の知れない恐怖で動けなくなる者が

現れるほどであった……

タリン 都市部 あるビルの屋上にて

「ミゴト ナリ」

蛮族戦士は昂っていた

先程のランページゴーストのアナと万能者がやってのけた所業と
万能者を見ていたのだ

「アレ ハ ハヤサ ノ サキ ニ デキタ モノ ……
モウ ヒトツ ハ 『キヨム』 ツカツタ モノ ダナ ……
カンシャ スル サキ ヲ ユキシ ツワモノ ト ワガ シュ
クテキ ノ ハガネ ノ ツワモノ ヨ ……
マタ タカミ ヘ イタル カギ ヲ エタ」

どうやらその所業は彼にとっても良い経験を与えたようであった

「…………… ナラバ ワレ ガ ワザ ヲ ミセナイ ノハ
ブサホウ ト イウ モノ」

蛮族戦士はそう笑いながらビルの下にいるアブノーマル達の前に
降り立ち大剣の如き爪を構えた

異変はそこからだった

突如蛮族戦士の身体が青白く光り始めたと思っただんだん白色
に変わってきたのだ

特に大剣の如き爪は黒色だったのが見る影もなく真っ白になっ
ていた

それを見たアブノーマル達は本能で理解した

これは自分達を本当の意味で殺せるモノだと

そう思ったアブノーマル達はすぐに一斉に襲いかかる行動に移し
た

だが遅かった

「マダ 『キヨム』 ヲ キル ノニ ハ マダ イタラヌ ガ オマ
エ タチ ヲ カル ノニ ハ ジュウブン ダ」

蛮族戦士がそう言った瞬間

消えた

襲い掛かろうとしたアブノーマル達と近くで見ているパラデウス達の視界から完全に消え去ったのだ

それはどんなスローカメラにも映らず、解析も出来ない消え方をしたのだ

そして

その場の全員が倒れ伏した、その身体には切り傷もなくにも関わらず……

そんな中でアブノーマル達は間違いなく斬られたのだと、それも己達が存在することができる連絡線との繋がりがごとと斬られたのだと理解した

ありえない こんなことはいらない 連絡線が破壊されていないのに 咎人に断罪に与えられずに消え去るなどありえない

そう嘆きながらアブノーマル達は意識を失っていきながらその身が消え去っていった

「ザンネン ダツタ ナ オマエ タチ ノ ホウ ハ タチキラセテ モラツタ」

アブノーマル達が消え去っていく姿を見ながらいつの間にか再び姿を現した蛮族戦士はそう笑いながら言ったのだ……

少なくとも言えることはこの戦場はアブノーマル「ブラツディマン」達にとって、ここは断罪の場ではなく……

己らの理を碎き消す災害の前であることぐらいだった……

《……とりあえず聞こう、道中安全運転できたか?》

《それはもちろん!! G & Kの方々に注意しながらきたぞ!》

《……なら追加命令だ、G & Kの嬢ちゃん方に注意したり盾になりながら敵をやれ》

《ハイヨロコンデー!》

ズガッン!! ズガッン!! ズガッン!!

「……敵が可哀想に見えてきた」

《……それに関しては俺たちが言えた義理じゃないと思うが……
本当同感だ》

《……とりあえず嬢ちゃん方、あんなんでもかなり注意してやっ
てるからあまり近寄り過ぎない上でそちらも注意してくれよ?》

《人形と例の子達の負傷者合わせて6名入った!》

《ヒヒヒ、大丈夫だ……天井のシミでも数えとけば治療は終わる
からな!!》

《さて蘇生するのだ! この電撃でえええ!!》

バリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリッ!!

「アババババボボボボボボボッ!!」
!!!」

《……でないとおそこ送りにされるからな?》

「……ハイ」

そんなことが合間でありつつも戦況はその戦いが終わるまでその
ままの形で進んでいった

数時間後……

タリン 都市部

『リヴァイル・ウィツカーマンより全部隊へ。アイソマーの救助、感謝
する。また、キミらが得た情報は彼らの悪行を晒すのに充分過ぎるも
のだ。これらはキミらの協力なくしては得られなかった。イレギュ
ラーにより決して少なくない被害がだが、これだけは言わせてくれ

…本当にありがとう」

「おっ？終わったのか」

万能者は屍の絨毯とも呼ぶべきほどにパラデウスの戦術人形の亡骸が転がっている地面の上で作戦終了の知らせを聞いていた

『キミらの行動を鑑みて、私は私自身の秘密をキミらに明かそう。私は、あの北蘭島事件を起こした少年、■■■■の腹違いの弟だ。私は、世界を汚した者の弟として、この世界を戻す事をこの場に宣言しよう。その為にも、崩壊液汚染を利用して世界を乱しているパラデウスの殲滅にこれからも協力して欲しい』

「……………あれを言ったのか、相当な覚悟だなオイ」

そう言うと同時に

(……………そう言えば俺も俺で自分自身のことをあまり明かしてなかったよなあ……………まあまだ確信を持ってない部分が多いしこれ言って間違えてたら混乱を招く可能性があるからなあ……………今はそのままにして置いて……………「例の対策なしに向こう側に行っておいてそのまま戦ったっていう大バカ防人のアナさんだっけ？残存戦力を残らず殲滅した後説教（場合によっては物理込み）かましに行かないとな」

その思いを秘めながら万能者は帰還を始めたのだった

タリン 都市部 超高高度地点にて

戦闘終了確認

結果

ヘカトンケイル消滅

投入戦力全滅

排除対象9割以上生存

作戦失敗と判断

これより帰還を開始する

それは人知れず飛び去っていった

その自身を作り上げた親組織に情報を持ち帰るために

そして

タリン 都市部 同時刻

・・・・・・戦闘終了ヲ確認

偶然デハアルモノノ各勢力ノ戦闘データナド重要情報ノ入手ニ成功

救助候補対象達モG&Kニヨル救助ヲ確認

コレヨリ帰還スル

地上から誰にも悟られずに戦っているものたちの戦い方を見ていたものたちも人知れず闇夜に消えていった

次へと備えるために密かに情報を集めるものたちがいたことをその戦場で戦っていたものたちは知らない・・・・・・

一流の悲劇より三流のハッピーエンドという言葉があるが、それを実現するために都合が良い事を引き起こすのが意外と難しいよね（コラボ回）

戦闘終了してから数時間後……

タリン 都市部 とあるビルの屋上にて

「コレ デ コノ タタカイ モ オワリ カ」

蛮族戦士は戦場の状況を確認し、そう判断した

「コレ イジヨウ ノ タタカイ ハ エラレル モノ ガ ナイ
……ソレ ニ モトモト ノ モクテキ モ ハタシ
タ……ナラ ココ ニ ナガイ スル コト モ ナイ ナ」
そう言うのと蛮族戦士はその戦場から去るように闇夜の中へ消えていった

「サテ …… アノ モノ タチ ニモ ツタエ ナケレバ ナ」
笑うようにそう言いながら……

同時刻

タリン 都市部 郊外の外れ

《なんとかこれで任務完了といったところだな》

《全てとはいかなかったがG&K社の保護対象の大半の保護も確認できた上でこつちも死者なしの損害軽微で済んだから結果オーライだな》

《ああ、とりあえずお疲れさんだ》

そこでは今回の戦闘に参加していたFANNIESの全部隊が所狭しと集結していた

《しかし……今回下手したら俺たちの助けいらなかったかもしれ
ないなあ》

《それな、あのヘカトンケイルの腕をあのサムライの嬢ちゃんが全て

斬ったのを見たし》

《アブノーマルだっけ？なんかヤバイヤツらも悪魔の力を身に付けたデビルなんちゃらみたいな存在達にやりまくったらしいな》

《電子戦とかも人類人権団体時代から言われてた例の嬢ちゃん達以外にもなんかすげえヤツが居たって話だしなあ》

《俺たちがやったといえれば白いヤツらの増援部隊の迎撃、ヘカトンケイルの足止め、負傷者と蘇生可能死者の治療と蘇生ぐらいだな》

《……まっ、ともかく作戦完了だ！そろそろ迎えがくる頃だぞ》

そして数分後その場には誰も居なくなった……

あの数々の兵器に、あの巨人すらもその姿を消したのだった……

同時刻

タリン 都市部 G&K社臨時拠点

「……なるほどねえ」

万能者はOGAS……改めてタンドリーの話聞きリヴァイル達の方で何があったかを理解していた

そしてその話を聞いた上でリヴァイルとM4の方に目を向けた

(……それであんな感じかあ)

ギルヴァの言葉や時間経過による安定によって幾分かはマシにはなった部分もあるのか外面はある程度大丈夫そうにしていた……だが万能者は気付いていた

そのことを引きずり過ぎて下手をすればいつか取り返しのつかないことになる可能性が高いと……

少し考えた万能者は決断した

「……はあ、仕方ねえ……o、違ったタンドリーさんこつち来てもらっていいか？あとM4さん予備のダミー借りていいか？」

「……何するつもりかは知らないけど、分かったわ」

「……え？あ、いいですよ？」

万能者はタンドリーを連れて行く際に

「失敗しても文句言うなよ？あとこれに関しても俺が何してたかを捜索しようとするなよ？」

そう言い残して

数時間後……

「え、えつと……た、ただいま戻りました……？」

「……え？」

リヴァイルとM4A1の前にはM4A1のダミーが立っていた……

それも人格と感情などがはつきりとした姿をもって

「ぼ、万能者……お前なにをした？」

「……搜索するなど言っただろうが……手短にいうところにいるのはお前達が会ったって言ってた成長したアイソマーだ」

「ほ、本当にき、キミか!？」

「自分でもビックリしてますけれど……はい、私です」

万能者が何をやったのか、何が起きたのか……

少なくともその混乱の中で確実に分かることといえば、あの時死んだはずの成長したアイソマーが彼らの前にM4のダミーの姿で現れたことだった

「そんじや俺めちやくちや疲れたから先に帰って寝てくる……二度とこんなことするか」

「え、ちょおま、聞きたいことが山ほどあるんだが!？」

万能者はリヴァイルの言葉を無視して休みに行ったのだった

タンドリーは万能者が行っていたことの一部始終を見ていた

これに関しては本当運任せだ・・・ちよūdよく入れ物の素材として用意できるものとかが成立してても運が絡むんだからなあ・・・あの子達には悪いと思うが、使わせてもらうぞ
・・・つとコレで即席だが入れ物が出来上がったな
特式特定集魂術式・・・形成中・・・

ああ、クソツ強制機能制限が掛かっているから初っ端から頭が焼ける感覚がすげえ・・・

術式形成率・・・100%

魂魄特定率・・・低

やっぱり低か・・・こればかりは運とかが絡んでくるなあ

・・・まあこれに関しては間違いなく俺のエゴだし、本来死つてのはある程度は絶対であり、完全に切り離してはいけないものだからなあ

それに、これは蘇生というには禁忌の域に浸かっているし、まだこの文明が辿り着いてはいけない技術だしなあ・・・

俺達の文明でもある程度の許可とかがないと使えないからなあ・・・

・・・だが俺は特定の場合のみでしか死は救いとは思いたくないし、救助された子達とかのことを考えたらやったほうがいいだろうし、何よりアイツらがあんなに落ち込んでこのことを引きずっていないこととしてるものだからなんか腹が立ってしかたないからなあ

・・・言っておいてなんだが、これ本当に俺のエゴだな・・・本当にすまん

何かあつたら俺を恨んでもらって構わない・・・

タンドリーさんも必要な部分があつたとはいえ成功するか分からんし、恨まれる可能性があることに付き合ってもらってすまん

・・・それじゃ始めるか

．．．．．え？花畑？精神世界とかの世界か？というか
この花あれじゃねーか．．．あつこれ術式に巻き込まれたなコレ
え？どちら様ですか!?

あ、こちら変々．．．リヴァイルの知り合いの方で、アイソ
マーって呼ばれていたことがあるお方でしょうか？

え、ええそうですか．．．

ああ、そうですか．．．こちらはあのアホンダラとかの為にあ
なたを現実世界へ誘拐に来ました

え、ちよ、ま、待ってください、きやつ!?

「．．．．．本当に何者なんでしょうね、彼って」

タンドリーの言葉はそのまま誰の耳にも届くことなく消えていっ
た．．．．．

時というのはなんだかんだで流れていくって感じだよね、そしてそう思っている時に年越すのが1セット

IOP社 大食堂

世間は年を越し、新たな年になったことに騒がしくなっている頃、IOP社では食堂を使って年を越した祝うと言うことを理由に騒いでいた

「……本当なんだかんだで年越すもんなんだなあ」

万能者はその端の方でお雑煮を食しながらそう口に出していた

「こと、去年は色々とありまくったもんなあ」

そう思い老けていた時、ふと思った

「……そういえばあいつらあの件以来何してるんだらうか？」

S09地区 東部廃都市区域 元廃教会 現H&R社本社 社員
食堂

「ええ今年もなんとか年を越すことができることを祝しまして……乾杯!!」

「!!乾杯!!」!!

そこでは忘年会が開かれており、その建物を利用するものたちが集まって騒いでいた

並べられた料理もなかなかの豪華さであり、見れば設備等も新しいものが増えていた

泣かず飛ばずだったH&R社がこんなに変わったのは夏の終わりに差し掛かっていたある日からであった

その日を境に社員増強、及び新事業を展開することによって過去の事件の関係で落ちるに落ちていた信頼と財政は見間違えるように右肩上がりに上がり、V字回復に成功したのだ

無論そのことに疑問と興味が湧いた他企業やギャングなどの闇組織が産業スパイなどを送り込んだものの、全て捉えられた挙句、それ

を口実とした攻撃（基本物理じゃない方）に使われ逆に壊滅的な損害を受ける形となった

近年稀に見る大逆転をできた、その理由は……

「本当に社長代理には感謝しかないギョー！」

「ああ、神龍の眷属様が我々の生き残る道を作った上で出来ることを増やしてくれたのだからな」

「それも我々が持っている能力とノウハウなどを最大限に活かせる形でな!!」

人ならざるものたちだった

経緯を簡単に説明すると

島の件で深き達を

（ちなみにインスマスに報告に行ったもの達もおりそのもの達が帰ってきた際、「主神様曰く明日へ生き残ることへの無期限の目的変更」が決まったとのこと）

←
しかし、コミュニティがさらに拡大することで食料・資材・資金などの問題が無視できないレベルになることが判明

←
ふと万能者が閃く

「お前ら就職・起業すればいいんじゃないやね？今ぴったりな伝手あるし」

←
そうしてH&R社を紹介

無論最初のうちは阿鼻叫喚だったが、ポルターガイストの件で常識外なことにある程度慣れていったのか、次第にコミュニケーションを普通に取れるほどに慣れていき、その頃に人ならざるもの達のネットワークと元々の技術を使った新事業を展開していき、現在に至った

こんな形だった

（……それでもこれを間違つて一般に公にされたら終わるからその辺嚴重にしないとなあ……あいつが連れてきた時はお前

は何をやっているだつて思つたけど)

「社長代理!!今日は武蔵無礼講つてことで酒を飲み明かしましょう!!」

「……まあそれをするだけのことがあるか……おう
!今行く」

「調子の確認も兼ねて今度一回連絡してみるか……」

万能者は今後の行動を一つ決めたところで初詣で何を願うかの話題がチラホラと出てきて万能者の耳に入ってきたのだ

「……願いかあ……来年の平穩を願おうとも思つたが……もつと大変なことが起こりそうだから、起こつたことがすぐに収束することにしておくか」

万能者は遠い目をしながら思い返したことを経験にそう判断した

「まあ……今のこの時ぐらいはのんびり楽しませてもらうか……」

何はともあれ万能者は一旦その考えをやめ、のんびり過ごすことを決めたのだつた

「今年も今年で色々と大変なことが起こるだろうしなあ……」

羽子板大会始めますよ!

ワー————!!!

その万能者の発言は歓声によりかき消される形になつたが何はともあれその年は無事に年を越すことができたのだつた

尚、余談であるが

「……ちよつと参加してみるか」

その大会の規格外専用レギュレーションにてテニヌを彷彿とさせるような名とも呼べ、迷とも呼べ、冥とも呼べるような勝負が繰り広げられることになるのだが、それはまた別のお話……

※改めましてこの馬鹿と大馬鹿作者が今年も色々とやらかすと思
います。がよろしく願います。(焼き土下座)

ヤバいところに行きたくないのは基本誰でも同じことだよね・・・尚ガチで行かなければいけない時の心境は答ええないものとする

ドガアーンンンツ!!!

ドガアーンンンツ!!!

ズドオーンンンンツ!!!

「・・・やっぱ来るんじゃないな

誰かの心の底からの嘆きはその騒動の騒音の中へ掻き消されていった

そこは新たななる戦場と化し、あらゆるものを巻き込もうと暴風となつて吹き荒れていた・・・

数十日前ほど・・・

I O P社 自室

「うくん・・・奴らの情報やらがイマイチどころか全く入らねえなあ・・・多分潜伏部隊がこれはヤバイヤツをチエックしやがったからそれに引っかかる方法にすぐに切り替えやがったからだな」

万能者がいう奴ら「p a w nを扱う敵性勢力」は行き当たりばったりでしか基本遭遇せず、情報関係では潰されたのか、見つけれないのかは定かではないが情報が全く入ってこないのだ

「・・・やっぱ行くしかないか?・・・例の場所」

画面の地図に表示されているとある場所を見ながら万能者はため息を吐いた

その場所はこう書かれていた

『人類未踏査区画』と

その場所があると判明したのは第三次世界大戦が終結してから2

年程経過した頃であった

その際は正規軍が広範囲重度通信障害地域の汚染調査として調査し完全に通信不可能な濃霧が発生している場所まで進んだ時、濃霧を超えた先に明らかにその場所が地形や環境、距離感などが古い地図と比べても全く一致しない場所であると判明、すぐさま帰還して上層部が伝えた結果、その場所を突然あらわれた未知の開拓地として国連なども巻き込んでその濃霧が超えた先の広範囲重度通信障害地域に調査隊（3個師団クラス）を送り込んだのだ

その対価が2人の帰還者と少々の情報という絶望的な結果を残して……

その少々の情報では内部（周りが濃霧が壁のようになってい）と外部の通信はどんな方法があっても何故か完全に通らない（一説では別空間の可能性があるとのこと）上で内部ではE・L・I・Dと崩壊液に耐性があると思われる謎の動植物の壮絶な生存競争が繰り広げられており、もはや災害と災害のぶつかり合いと呼べるようなものであったという

その件以来、その区画の周りを囲むように拠点（崩壊液汚染などもあり汚染されていないところしか置いてない為完全に囲めていないが）を置き、小規模な調査隊派遣を行うぐらいに止まりその場所を『人類未踏区画』別名『顕現した地獄』と呼ばれるようになった

今でもそれが何故できて何故そこに存在するかは未だ解明できていないのだ……

「……行きたくねえなあ……」

万能者は嫌な予感がしていた

それも行ったら最上級にえらい目に合うという予感が

だが、行かないとただでさえ情報がないという状況が故に万能者は嫌々な感情を抱いていた

何か誤魔化せるような情報はないかと探していたとき

「……うん？」

ふとある場所が目にとまった

そこは『人類未踏区画』との境界線に接していた汚染地域だった

それは正規軍や国連が拠点を置いていない超絶危険地帯かつ警備のいない通り道でもあった

数日後……

人類未踏区画近くの汚染地域 から数km離れた地点

「ヤクツチおひさ!!」

「おうお久しぶり」

「どういうことだ(ですか) コレは!？」

初っ端から訳の分からない状況に鉄血ハイエンドモデルのビークと救済者は思わず心の底からツツんだ

「え〜?二人とも聞いてないの? 今回の任務はヤクツチと共同で調査任務に当たってるって」

「多分、事前まで伏せてたんだと思うが……なんでアーキテクトさんが知ってるって話になるが」

「盗み聞きして知ったからだよ!!」

「割と問題発言だなオイ」

そんな会話と二人の複雑な心境がありつつも本題に入り始めた

「実のところ今回協力してもらったのはp a w nの調査関係だ……
といっても確信は全くないんだがなあ」

「それでなんでアタシらを呼んだの?」

ビークは不服そうに聞いた

「ああ、知ってるとは思いますがここは『人類未踏査区画』の近くだ、あの衛星映像も映りはしないわ、どんな通信も全く使い物にならないわで有名なところだ……今回調査するのはその横の汚染地帯だが、そこもかなり酷い上で空の環境が悪いため地上しか動けない……逆を言えばそこを動けるやつにはもってこいの場所ではあるがな」

「……なるほど、用は手とかが足りないのと、使えるところがアタシらのところが適任だったってわけだ……樽のヤバイヤツと行動しなきゃならないのがアレだが」

「ああそういうわけだ、それにアンタらとの情報共有もしておきたい
と思つてたところだしな」

「……………それで今回の調査に適役だとして新装備の私とビークお
姉ちゃん、メカニック担当にアーキテクトお姉ちゃんが選ばれたって
ことなのかな」

「……………お姉ちゃん呼びなんだ）そうゆうことだろうな、今回
割とあっちこっちに行つたりするから足が速くて自由に動き回れる
のが本当ピツタシだからな」

「それでアンタもそんな乗りモン持つてきたつてわけか……………」
ビークが目を向けた先には三輪バイクという珍しい種類の大型の
乗り物が鎮座していた

「私が言うのもなんだがかなりゴツいな」

「俺が色々考えて作つたものだからなあ……………まあそろそろ出発
し始めようか、走りながらも話は出来るだろうし」

そう言いながら万能者達は行動に移しだしたのだった

彼らは知らない

この調査がどんな結果をもたらすのかを……………

状況ってコロコロ変わるっていうけど、いざその時になつてあまりにも変わりすぎるともはや何も言えなくなるよね

人類未踏査区画前 汚染地帯 荒野

合流から十数日……

その間の彼らの調査の旅路は想像を遥かに超えるものだった

「うわぁ……大型E・L・I・Dの群れが歩いてやがる……」

「……ドンパチしに来たわけでも無いし、やったらやったで調査に支障が出るかもしれないから避けて通るか」

「ああ、その方がいいな」

大型E・L・I・Dの群れに遭遇しかけたり、

ギャツ ギャツ ギャツ ギャツ

「あだだだだッ!? 髪引つ張らないでえーッ!!」

「うわぁん!!数が多すぎますよぉ!!」

「E・L・I・Dだから倒しても益が基本ないのが腹立つなあ!!」

鳥型E・L・I・Dの群れに襲われたり

ズドoooooooooooooooooooo!!!

ズドoooooooooooooooooooo!!!

ズドoooooooooooooooooooo!!!

「なんで雷が雨のように落ちてくるんだよ!?!」

「この間も突然発生した竜巻に襲われますし、この環境どうなっているんですか!?!」

ズドoooooooooooooooooooo!!!

「……スゲエいてえ」

「ヤクつちoooooooooooo!!!」

様々な災害が突然発生し彼らに牙を剥いたり

とにかくアクシデントが容赦なく起きまくっていたのだ

だが、

「とりあえずこの辺の調査は完了．．．．次はこの辺りだな」
「つ、疲れた．．．．」

「こつ、こちらもです．．．．」

「や、厄災．．．．オマエこれを毎回やってたのか？」

「．．．．似たようなヤツなら結構やってた」(遠い目で

そんなことがありつつも彼らは調査を続けていた

「たしかその辺りって．．．．破棄された鉾山都市がある場所じゃ
ん」

「ああ、いかにも何かがありそうって場所だ．．．．ちなみに今回の
野宿先兼整備予定地としても考えている」

「何もなくてもE．L．I．Dがうろついていそうだな．．．．」

「とりあえず行ってみないと分かりません．．．．願わくば何も起
こらないことを祈りたいのですが」

「「ホントそれな」」

そう言いつつも一同は新たな調査する場所へと向かっていっ
た．．．．

人類未踏査区画前 汚染地帯 廃鉾山都市 廃市街地

廃墟中型ビル 内部 5階

「マジかあ．．．．」

「マジですかあ．．．．」

「マジかよ．．．．」

「これマジ？」

遠目で見えてしまった光景に四人は仲良く揃って遠い目をしながら
らそうコメントせざる得なかった

何故なら

「．．．．まさか見えるだけでも結構な規模のパラデウスの拠点見
つけちまうとはなあ」

それは廃墟と化した建物や工場などで多少は隠れてはいたものの

その隙間から見えたものは間違いなくパラデウスの戦術人形と施設だったのだ

偶然ながらも気付かれていない上で情報でもこつちが有利な立場にいることにとりあえず彼らは廃街中のパラデウスの拠点を監視できる位置に存在する中型ビル（ちょうどよく車両を隠せる規模の倉庫付き）に身を潜ませたのだ

「ヤクつち、多分アイツらがここに拠点建てた理由は鉱山とE.L.I.Dだと思う」

「ああ、それは俺も思った……つてことは多分見えてるあそこが基地兼入り口の一つの可能性があるぞ……」

「……ヤツらにとって好立地にだとしてもデカく作りすぎにも程があんぞ……」

「そこに私達何も知らずにその近くに突っ込んだんじやったってことですか」（遠い目）

見るといふ最低限の情報だけでも手に入る情報量と状況に彼らは頭を抱えるしかなかった

「どうする厄災？ドンパチやって制圧するか？」

「規模も完全に分かってないのにやるんですか……」

「それなんだよなあ……分からないが故にこれがチャンスなのか畏なのかの判断が難しい……でも間違いなく今有利な立ち位置にいるんだよなあ……」

そのかなり複雑な状況に彼らは首を捻って考えるしか無かった

その時だった

ドガアーーンンツ!!

突然の爆発音に一同は首をぎこちなく、爆発音がした方向……

パラデウスの大規模拠点の方に向けた

そこには……

遠くにある廃墟群が崩れ落ちて黒煙を上げてる姿が露わになった
パラデウスの拠点に……

装甲を纏った『p a w n』と思われる存在の集団とそれについて来

ている兵器群がその拠点に襲撃をかけている光景がその目に映し出されたのだ

「うそおん……」

その光景に彼らはその言葉をピッタリにハモらせながらそうコメントせざる得なかった……

少なくとも言えることは……

状況が更に予想外な方向に変化し更なるハイリスクハイリターンな状況に巻き込まれてしまったことぐらいだった

傍観者でも間近でどエラいことが起きるとなんとも
言えなくなるよね……尚、その当事者の場合
は虚無感に包まれる模様

人類未踏査区画前 汚染地帯 廃鉱山都市 廃市街地
廃墟中型ビル 一階倉庫内

万能者達はあの爆発の後にすぐさま車両の置いてある建物内の倉庫に移動し、どうするか考えた結果

限界までこの建物の倉庫に潜伏しながらこの建物自体を隠し監視塔として使い、限界が来たらすぐさま撤退する

という判断を下した

そう決めたら行動は早かった

「アーキテクトさん極細有線自走式超小型カメラの調子はどうだ？」

「大丈夫みたい！設置数と位置も充分だから少なくとも監視塔から見える範囲で戦場を見渡せるには充分だよ!!もちろん隠れながらやっておいだよ!!」

「アタシのバイクもすぐエンジン回せる様に整備終わったぞ」

「こちらも整備終わりました!!」

「よし、こつちの方も防音と熱源探知対策を済ませておいたから早速監視を開始するか」

僅か一時間足らずでこの中型ビルを隠れながら監視できる目にしたのだ

そしてその成果は

ドガアーーンンッ!!

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

「「「oh……」」」

映像媒体に映し出されている映像によって万能者達は遠い目をせざるえない形として現れたのだった

「……アタシらの『Behemoth』でも近づく前にスクラップなるのが目に見えるなあ」

「正直戦場であつたら対抗すらできるか怪しいかもしれません……」
「……人型の方は知らんが、あの戦車は記憶が正しければ幾分か劣化しているけど世界中のどの今頃の戦車よりもアホみたいに性能が高水準で高いやつだったと思うんだ……割とマジでどうやって設計図とかを手に入れてんだ？」

「Iroh……」

相手側が容赦なく後出しジャンケンすらさせてもらえないほど即座の大型兵器投入によってパラデウス側の戦車と大型兵器は無惨に散っていったのだ

もはや打つ手なし

万能者達がそう思ったその時

「……え？」

パラデウスの方で何かが迫り上がって来たのだ
下手な建物よりも巨大な人型の存在が、それも4体も

「……パラデウス、アレを量産したのかよ……効果的ぢや効果的だが……」

万能者はそれに見覚えがあつた

その正体は過去の大規模作戦の際にパラデウスが投入した全高40mの人型超大型兵器『ヘカトンケイル』、パラデウスではそう命名されたトンデモ兵器だった

その性能は過去の大規模作戦の際に撃破されたものの引き換えにG&Kに多大な被害を与えた

そして、そこから戦いは一層激しさを増した

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド
ズドオンツ!! ズドオンツ!! ズドオンツ!!

ヘカトンケイルの性能をよく理解しているパラデウスはその巨人

先間違はなく自分達の前に現れ、とてつもない脅威となって牙を剥いてくることは完全に理解した

状況がコロコロ変わることによって一番怖いのは巻き込まれて傍観者から当事者になる時だと自分は思うの（過去の経験による遠い目）

人類未踏査区画前 汚染地帯 廃鉱山都市 廃市街地

廃墟中型ビル 一階倉庫内

ヘカトンケイルの一体が突然真ん中から縦に綺麗に真っ二つにされる

その出来事はその戦場にいたパラデウス、そして隠れて見ていた鉄血3人を唾然とさせるのにあまりに十分すぎたものであった

「ちよつとすまん、気になったところあるから拡大するぞ」

万能者は気になった部分を確認するためにすぐさま動き出した

その気になった部分は真っ二つにされたヘカトンケイルの上空に現れた紅い光

その正体を確かめるべくその部分の拡大を行った

そして映し出されたものは

「……………赤い刃の刀?」

「赤というより……………紅?」

「……………とにかくどういうカラクリかは不明ですがアレが何かやったのは間違いなさそうです」

紅い刃の大型の刀を持つ pawn replicaだった

3人が様々な感想を言う中

「oh……………」

万能者は理解した、その存在の脅威を寸分の間違いなくも理解した

正確にはその紅い刃の大型の刀のヤバさを理解したのだ

（……………アイツらいつの間に『ドラゴンブラッド』を手に入れたんだよ!?そしてそれを生体兵器ではなくよりにもよって武器の材料にしやがった!!!）

何があつたかは定かではないが、p a w nを使う勢力はその『ドラゴンブラッド』を手に入れ、偶然かどうかは不明だが『万能者がある存在と交わしたドラゴンブラッドの使用可能基準』を見事に引つかからない使用方法を選び抜いたのだ

そして、それは良いことでもあり、同時に悍ましいほどに悪いことでもあつた

(アカン アカン アカン)

万能者が内心で慌てるのも無理もない

この件で天変地異の大災害が起こることはないと言えるのは間違いなかった……だが、それは使用可能基準を満たし、その存在からその力を使う許可が下りたとも言えることだつた

それもあの存在達の力の鱗片を使えるということでもあつた

そうこうしてる間に戦場の方の戦況は変わっていった

残つた3体のヘカトンケイルとその後ろにいた戦力はその上空にいる紅い刃の大型の刀を持つ存在に向けて総火力で迎撃を開始したのだが

ビュツ

ズバアツ ズバアツ ズバアツ ズバアツ ズバアツ
ズバアツ ズバアツ ズバアツ ズバアツ ズバアツ
ズバアツ ズバアツ ズバアツ ズバアツ ズバアツ
ズバアツ ズバアツ ズバアツ ズバアツ ズバアツ
ズバアツ ズバアツ

「……oh……」

その迎撃を一切受け取らずに逆にその礼を返すと言わんばかりにその動き回る姿をカメラで捉えることができないほどの速度で動き回りながらパラデウスの兵器群をバラバラに切り裂き散らしていった

残っていた三体の異形の巨人すらも細切れに……

それはまるでよく切れる刃物のついた突風が戦場に吹き荒れているかのようだった

「残りの巨人も一瞬でバラバラにされちゃったね……」

「……戦場であんな化け物と戦いたくねえな……もつとも他のやつが過去に似たようなのとは戦ったらしいが」

「少なくともアレに対処できるのは今の鉄血には不可能に近いことだとしかいえないですね……」

「……まあ戦況は決したみたいだし、これ以上ここに留まるのはそろそろ危険と考えたほうがいいな……それじゃ出る準備をs」

そう言葉を言いながら画面から目を離そうとした時だった

映像に映し出されている、前線の敵を殲滅し終えた直後の紅い刃の大型の刀を持つ pawn replicaと目があつたのだ

ゾオツ

「!!!??」

その瞬間、その場にいる四人に強烈な寒気と恐怖が襲いかかった

どういう理屈かは分からないもののその寒気と恐怖は間違いなく気づかれたと理解させるのに十分過ぎる材料だった

「ッ……逃げるぞ!!」

万能者がそう言い彼らが行動に移すまで数秒も掛からなかった

それほどもでにヤバい事態であることを全員が心の底から理解していたのだ

ズガアツン!!

そうこう言っている内に彼らは倉庫の出入り口であるシャッターを粉碎して

その僅か5分後

ドガアーンンンツ!!!

ドガアーンンンツ!!!

ドガアーアーンンツ!!!
ドガアーアーンンツ!!!
ドガアーアーンンツ!!!

万能者達が隠れていたビルを中心にその周囲を砕き、焼き尽くすほどの砲弾の雨が降り注いだのだ

「やっぱり気づいてやがった!？」

「マジでどうやって気づいたんですか!？対策もかなりやったはずなんです!？」

「そんなことよりどこに逃げるんだ!？」

「ヒエエエアー!!」

「とにかく都市から脱出するぞ!!さっさと出るなら高速道路から出るのが一番だ!!」

その大量の爆発音はデスレースの開始の合図となったのだ

「ぎゃアーアー!!? ヤクツチ!？アイツらバイクで追ってきた!!」

「いや対応はえーよ!!?別働隊かなんかでもいたのか!？」

戦火はその場にいたもの達すべてを巻き込みさらに燃える勢いを高めようとしていた………

ホント忘れた頃に限ってヤバいものがヤバいことを
引き起こすよねえ（コラボ回）

IOP社 自室

「帰ってきて割とすぐにこんなことの対応をしなきゃならんとは
なあ……」

万能者は愚痴りながら準備を行っていた

万能者が帰ってくる数日前にバルカンを殺そうとつけ回ってくる
黒い装甲を纏う謎の存在『ターミネーター』がバルカンを引き渡さな
ければバルカンがいる地区ごと攻撃するという襲撃予告を出してき
たのだ

そこから大慌てだったのは言うまでもなく、万能者はその騒動中に
帰ってくるという形になったのだ

「色々聞いてたから前もって対策になりそうなものは用意しておいた
し、例のアレも使えるようにしておいたが……・……・本当に状況次
第だからなあ、今の状態で使ったら何が起こるか分からない代物だ
し」

自分が用意したあるものに若干の不安を抱いていた

そんなとき

「オイ、きたぞ」

万能者の前にSFで見えるような全身が装甲で覆われたパワー
スーツのようなものを着た人型の存在がやってきたのだ

「おう、社長代理すまん」

「一応今ここにいるのは一概の特殊な傭兵ってことになっておいてくれ
よ……」

「すまんすまん」

まるで知り合いであるかのようにそう言いながら彼らは本題に
入った

「で、どんな感じだ？」

「とりあえず緊急用の仕込みは先に済ませておいたし、最重要防衛対象の警備組に登録してきた」

「ありがてえ、今回ばかりは俺も完全に前線の方にいないとアカンからそれ故に後方支援の防衛が疎かになると思ってたからな……」
「……お前が救援を呼んだ時は何事かと思ったが、これは見る限り猫の手も借りたいな状況で、呼ばないと手が足りないし何が起こるか分からないから救援呼んで正解だなこりゃ」

そう言いながら装甲服の人……タナカはため息を吐いた

「お前の言う通り、今回ばかりは何が起るか分からないんだ……タミーネーターが前線突破してくるかもしれないし、この状況に火事場泥棒しようとする輩が出てくるかもしれないからなあ」

「だな……ちなみにそっちの方はどんな感じだ」

「色々と用意はしたが……一部に関しては使うことがなければいいのだからなあ」

その万能者の願いはどこか儂い感じで自室に響いたのだつた……

無情にも時間はその日に向けて進んでいった……

尚余談であるが

「ぎゃー……!!?」

「ヒイイイイイ!!」

「お、おまえ何しに来たんだ!?!」

「……(こちらにも事情があったとはいえ)なんかすいませんでした」

タナカ(無論装甲服姿)が来た際にそれなりに過去の件からいまだに一部に恐怖のダルマ大量製造屋と呼ばれているほどに恐れられていたことを実感する羽目になったのは別の話……

遠く離れた地 汚染地区にて

「カンジル ……カンジル ゾ」

「アラタナ タタカイ ガ ……ソレ モ リユウ ノ チ

ガ ヨビ オコシタ ハゲシキ タタカイ ガ」

蛮族戦士は激しい戦いの前触れをいつものオリジナル笑顔で感じ取っていた

「まただよ……」

「また私たちとの戦いの最中に何かを感じ取ってる……」

「……今度は何を感じ取ったのだろうか？」

先程まで血を血で洗う戦い（尚、蛮族戦士は手加減しており、少女達もそれを感じとっている）をしていた少女達はまた起きたそれに呆れていた

そして

「スマナイ ワレ ハイカナケレバ ナラナイ マタ ワレ ノ
キニナル アラタナ タタカイ ガ オキル ヨウ ダ」

「……ハイハイ、帰ってきたらまたよろしくお願いしますね」

「帰ってくるまでにまた新しい戦術考えておかなきゃ」

その戦いに出るのが当たり前だと言わんが如く少女達を残してその場を離れていったのだった

ターミネーター襲撃予告日 当日

第一〜二防衛陣地跡地 からそれなりに離れた地点にて

「うわぁ……自爆攻撃かよ……不死身とかだから成り立つてことか……」

大爆発が起きた前線からそれなりに遠く離れた場所から隠れて見ている万能者はその攻撃方法にドン引きしていた

「……まあこれで逆コーラップス技術に頼っていると攻撃喰らうのを無視して歩いている状況を作らせられたんだ、なら今のうちに足止めやつておかないとな」

そう言いながら万能者はバズーカのような大型の手持ち砲を肩に担ぐ形で構え始め

「特殊対応弾TYPE—05連続装填……精密連射狙撃用意完了……発射」

ズドオンツ!! ズドオンツ!! ズドオンツ!! ズドオンツ!!
!! ズドオンツ!! ズドオンツ!!

容赦なくぶっ放した

そしてターミネーターに三分の狂いもなく

ベチャツ!! ベチャツ!! ベチャツ!! ベチャツ!! ベチャツ!!
ベチャツ!! ベチャツ!! ベチャツ!! ベチャツ!! ベチャツ!!
ベチャツ!! ベチャツ!! ベチャツ!! ベチャツ!! ベチャツ!!

直撃した……全身にとりもちのような粘着性の物質を満遍なく貼り付けるような形で……

(そんな小細工で止められると思っっているか? さっさとこれを……)

ターミネーターはそれをうごく思いながら邪魔なトリモチを逆コーラップス技術によって別のものに作り替えようとした

「……ッ!!?!」

だが、できなかつた

そのとりもちのようなものを崩壊させられなかつたのだ

そればかりか

「中の崩壊液が使い物にならなくされ始めている!?! しかも身体も固められ始めているだ!?!」

攻撃を無視して喰らったのが愚策であると言わんが如く己を無力化し始めていたのだ

「おうおう、驚いてるなあ……作るの滅茶苦茶大変だったが調整した侵食式粒子強制安定剤を混ぜ込んだ強力粘着物質の効果出るな」

素晴らしいながら万能者は近くに置いていた大盾を装備し始め、何が起きてもいいように備え始めた

「さて……ここからやつはどう出てくる?」

戦いはまだ始まったばかり、何が起こるかは誰にも予測できない……

一難去った後はまた一難あるかも知れないから備えるってとても大事なことだよね（コラボ回）

第一〜二防衛陣地跡地 からそれなりに離れた地点にて

戦場では万能者がトリモチによってターミネーターの行動を阻害し、それを好機とみたもの達が接近し攻撃が行われており、壮絶なものとなっていた

そんななかで万能者はその遠くから冷静にターミネーターの分析を行っていた

「トリモチは剥がれてんなあ……多分さっきの攻撃の盾に使って的確にとつたのか?……装甲と身体に関しては……装甲が?それなりに強制安定化の影響で滅茶苦茶に固まって脆くなってるはずなんだがなあ……まあ逆コーラップス技術の方はあまり使えなくなっているみたいだから良しとするか」

万能者の行動はある程度の効果はあったものの無力化するには程遠かった

「しかし、こうも接近戦やられるとこちらからでは迂闊に攻撃できないな……いくらあつちが大丈夫だからと言ってもこっちは危ないもの多いからなあ……つと、ターミネーターが第二形態みたいなのをしてるな……結構動きが早いな」

「……うん?……あ、衝撃波とかこっちに結構くるやつだこれ!?……いやこれは……ガード!」

慌てながらも左腕に持つ巨大な盾の下部を地面に突き刺さすような形で正面に構えたと同時に

ズドoooooooooooooooo!!!

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツ!!!

強烈な衝撃波と瓦礫、そして龍の力によるエネルギーのようなものなどが音速の濁流の如く万能者に押し寄せたのだ

「うおおおおお!?思ったより凄え威力だなオイ!」

全てを砕き、吹き飛ばし得る音速の濁流の威力にそんなことを愚痴りつつも左腕にもついていたその大盾はそれを跳ね除けるように防ぐことができていた

そして、衝撃波が収まったころ

「……なんとか乗り越えられたな、盾もそれなりに無事みたいだし……よし、分析を続けつつ次の攻撃の準備を」

万能者はほぼ無傷の状態で次の行動にすぐに備え始めようとした時だった

『全部隊に通告する！電子攻撃でターミネーターの演算能力を1/10以下に出来たわ！持って10分くらい、この間はレーザー系やエネルギー系の攻撃も通る筈よ！私を認知症呼ばわりした奴を全力でぶちのめしなさい！以上よ！』

その通達が万能者の耳に入ったのだ

「……なら分析はここまでだ、まあ効果的に撃てるタイミングを待ちはするがな……一応牽制用として次弾に指向性SMC弾、その後に特殊対応調節仕様対装甲指向性振動弾二発連続装填……例のアレも用意しておくか……これ効果あればいいんだが……効かなかった時は本格的に奥の手を出すしかないなあ……」

そういうながら万能者は大盾を背中の中のバックパックにマウントしたり、バズーカに弾を装填しながら左腕に持ち替えたり、新たに大きめの槍のようなもの6本の束を後ろの腰につけるなどの準備しながら破壊の嵐の大元へと向かって動き出したのだった

十数分後……

「攻撃しようと思っただらなんかすげえことが起こって攻撃しづらくなっただ件について……いやここで攻撃したら外道にも程があるしなあ……というか愛スゲエなオイ」

万能者はターミネーターもとい『バルカン』と彼女を抱きしめるスミスの姿、目撃者多数いる中で甘ったるい空間を作り出している光景を見て遠い目をせざる得なかった

(……スミスさん、『そういうこと』にはアホみたいに感が良

すぎるだろ……まあこのまま戦いが終わってくれば万々歳
なんだが……)

そう思いつつ万能者は戦いが終わることを願って……
しかし、それと同時に……

(……しかし、あのターミネーター……未来の
バルカンさんがあんな感じなのをそう考えると……未来の方、
ホントエラいことになってるぽいなあ……ソホオスさんが未
来を変えようとするのも分か……うん?)

何かしらの違和感に気づき……

「……そういえば聞いてないなあ、ソホオスさんの考える未来
の変え方とその望む先関係……俺の言っていない部分……
アレ?なんかヤバいのでは?」

それによって自分のやらかしたのでは?と思われる部分と聞いて
いない部分、ソホオスが考えていることによって何かしら別のヤバい
ことが起こるのでは?という考えにたどり着いたのだ

「……とにかくターミネーターに注意しつつ、ソホオスさんの
行動もちよつと注意しないとイケないかもな」

その言葉と考えが間違いであることを祈りつつ万能者は次の行動
に移せるように備え始めたのだ……

尚余談であるが

「……え? アイツも来てんの?」

その数十秒後に腐れ縁が近くまで来ていることを通信で聞き、物凄
くブルーな気持ちになったのは言うまでもなかった

防衛作戦が行われている地点から数キロ先の森にて

蛮族戦士はそのあからさまにわざとらしく仕組まれたような感じ
で目の前に用意された戦いに最初の内は不愉快に思う部分があった

しかし、目の前でソホオスに怒鳴っているバルカンを見ていてその
考えを変えた

目の前にコレは何かしら手が加えられツワモノの原石の状態にさ
れていると理解したのだ

それも今後会えるかどうか分からないほどの原石であると……
そこからは無論

「…………… オモシロイ ナラバ シアオウ」(オリジナル笑
顔で

戦うことを選んだ

それが何かしらの裏があることはよんでいても、あまりにも魅力的
なものだったからだ

ただ、そのまま戦うだけでは原石をそのまま砕いてしまうもの

それでは勿体無い

ならば、強くすればいい、それもこの戦いの中で

とまで思いついて……………

何はともあれ、何が起るか分からない戦いは新たに起ころうとし
ていた……………

戦いの中で成長する系って色々噛み合ったら死ぬほど厄介だよね（コラボ回

防衛作戦が行われている地点から数キロ先の森にて
ズドオーローン！

ガゴオン！！ ドガアツ！！

ガギインツ！！ ギヤリギヤリギヤリギヤリ……………
ガギインツ！

そこではバルカンと蛮族戦士による死闘が現在進行形で繰り広げられていた

背中から形成された黄金の拳、強化された雷槌など、錬金兵装アマ
ルガムによって強化されたバルカンの攻撃はどれもこれも非常に強
力なものであった

が、それを蛮族戦士は巧みにかわし、大剣で弾き、そしてその隙間
を縫うかのように攻撃を加える
そんな形で戦況は進んでいた

蛮族戦士は歓喜していた

目の前の存在、バルカンの戦闘技術を知れたことを

何かに覚醒し強者の域に入ったことを

そして、その存在と戦えることを

蛮族戦士は歓喜していたのだ

（アア ナント スバラシイ コト カ）

その感情によって戦意を更に昂らせながら戦いを続ける

一方のバルカンは焦っていた

（クソ、パワーアップしてるのにこれじゃどっちが追い詰めているの

か追い詰められているか分からねえ！)

その考えの通り、錬金兵装アマルガムによって強化されても蛮族戦士の的確な行動によってゆっくりとされど確実に追い詰められていたのだ

(バリアフィールドもあいつが攻撃するたびになんだか揺れがひどくなっているし、黄金の腕の方も的確に関節部を狙うようにやってきてるし、挙げ句の果てにはこっちが放った電撃をあの大剣で受け止めたと思ったらその電撃を出し返してくるし……. ホントなんなんだよあいつ…….)

そんな心理状況や激しい攻防が行われつつその戦いの膠着状態は続くと思われた

ガチツ ガチツ
ミシツ ミシツ

(……. ……うん?)

何度目かの鏖迫り合い際にバルカンはあるものを見つけることまでは

(……. ……あの大剣にヒビ?)

それはこの戦いでできたものなのか、長年の酷使によつてのダメージによるものなのかは定かではないが、青白い光で見えづらいながらもそれは間違いなくその大剣に存在していた

(……. ……ならかけてみるか!!)

何やら思いついたようですぐさま行動に移した

「オラアツ!!」

ズガアーンンツ!!!

雷槌を力一杯に振り下ろし、地面を割りながら揺らす形で

「アマイ」

それを当然と言わんばかりに蛮族戦士は脚力で跳んで避けたのだ

「そこだー！」

ドゴオーンツ!!

更にそれをまっていたと言わんばかりにバルカンは雷槌を振り下ろした威力で回転しながら蛮族戦士に向かって飛び上がったのだ

蛮族戦士はそれに一瞬驚いたもののすぐさま大剣でその攻撃を弾こうとした

「今だー！」

「!!ツ」

そのバルカンの掛け声と共に雷槌に黄金が纏われ始め、やがて叩く部分に一点に尖った部分、いわばピックと呼ばれるような部分が出来上がった

そしてそれは

ガアンツ!!

三分の狂いもなくそのヒビがあつた部分に物凄い勢いそのまま雷槌が叩き込まれることとなつた

ビギイツ ビギイツ

雷槌が叩き込まれた部分のヒビがどんどん周りに侵食するように広がっていった

そのことを蛮族戦士は

「..... ミゴト ナリ」

賞賛した

そしてその言葉と同時に

バギインツ!!

それは大きな音を立てて砕けた

(ヨツシャッター!このままその身体を貫いて)

バルカンはそのままの勢いで雷槌を振ろす

「……………!?ッ」

……………ことができなかった

このまま攻撃をしたらやられる

そんな恐怖とも感ともいえる何かを感じ取って無理矢理後ろに下がったのだ

そして、再び蛮族戦士の方を確認した

「カンシヤ スル バルカン ト ヨバレシ ツワモノ ヨ」

それは起こった

あまりにも非現実的に

『……………え?』

バルカン、そしてその戦いを見ていた面々はその非現実的な光景にそう言うしかなかった

蛮族戦士の右腕……………砕けて無くなったはずの大剣がそこに存在していたのだ

先ほどよりは少し小さくなったなどの違いはあるものの間違いなくそれは存在していたのだ

真っ白に耀く大剣として……………

不思議なことに砕けた際に散ったと思われる破片は蛮族戦士の周りには存在すらしていなかった

そして蛮族戦士はその新たな大剣を試すかのように上の方に向けて薙ぎ払った

その結果

ズバァッ

ソホオスが周りに被害を増やさないように念の為に貼っていた結

界ごとどんよりとした空模様を作っていた原因である雲を真っ二つにしたのだ……

「……うそおん」

その光景にバルカンは呆然とするしかなかった

「ゴノ タタカイ デ ワレ モ マタ ヒトツ タカミ ニ イタレタ ナラバ」

蛮族戦士はそう言うのと瞬時にバルカンに詰め寄った

「ツ!?マズツ」

反応が遅れながらもバルカンはなんとか後ろに飛びながら黄金のバリアフィールドを展開した
ズバアツ

「……えっ」

……結果、黄金のバリアフィールドは三分の狂いもなく同時に数多の方向からきた斬撃によって見るも無惨にズタズタに切り裂かれた

後ろに跳んでいたのが幸いしたのかバルカン自体は無傷であったが

「ヤハリ マダ ナレテ ナイ ナ バルカン ト ヨバレシ
ツワモノ ヨ コノ タタカイ デ オノレ ニ メザメタ チ
カラ ヲ ゾンブン ニ タメシ アイ アラタナ タカミ ニ
イタロウ」(オリジナル笑顔)

「……コイツに絡まれてる万能者の気持ちか理解できたよ」

どこまでも戦闘狂である蛮族戦士にバルカンはこの存在に絡まれている万能者を憐れむしかなかった

何はともあれ戦いは新たな展開を迎えることとなった

一方、その様子を見ていた者たち

「・・・・・・・・あまりにも想定外なんだけど？」

「・・・・・・・・それはいつもことと言いたいけどホントそれな」

予想外すぎることにソホオスは滝のような汗をかきながら思わず
そう言うしかなく、いつのまにか合流してた万能者は情報量の多さで
色々と諦めたような声でそう言うしかなかった・・・・・・・・

「・・・・・・・・これ止めた方がいいやつなのでは？」

「・・・・・・・・ホントどうしましょうこれ」

カーチエイスって色んな意味で難しいね（真顔

人類未踏査区画前 汚染地帯 廃鉱山都市 廃市街地

高速道路

大戦によって長い間、交通の要所としての役目が果たされなくなったその場所は突然の出来事によって再び使用されることとなった

ギユイイイインッ!!!

ギユイイイインッ!!!

ギユイイイインッ!!!

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

「ギョーローローローロー!!?」

命をかけたカーチエイス………言わばデスレースの舞台として

α及び鉄血上位規格機三体ハ依然高速道路ヲ逃走中

我ラ第6偵察小隊ハ引キ続キ追跡ヲ続ケル

了解、念ノ為予備戦力カラ一部ヲ送ル

万能者達は砲撃から逃げられたもののp a w nを使う勢力の偵察部隊らしき部隊に追いかけられていたのだ

「チッ!!今のでシールドが結構持っていかけた!!」

「機銃が的確に避けられて当たらないです!!」

「ロケランも全くあたらないよお………」

「おまけにあっちは的確に攻撃を当ててくるんだもんなあ!!救済者の嬢ちゃん車体は大丈夫か!」

「い、今のところ後部車体の方はダメージを受けていますが大丈夫です!」

その追跡はとにかく万能者達を逃がさないと言わんばかりに噛み

付くようにしつこかった

「しかたない、ビークさん達!!俺の前に行ってくれ!搦手を使う!」

「仕方ねえ……分かった」

「わ、分かりました!」

罅が開かないと思つた万能者が鉄血組にある手を使うと伝え、ビークのバイクが万能者の横を通り過ぎたのを確認した瞬間

カン カン カン

万能者のバイクの後ろのコンテナから地面に何やら手榴弾のようなものが転がるようにいくつも投下されたのだ

pa wn達はそれを避けるように動こうとしていた

その瞬間

バシユツ!!

ズガツシャーンンンツ!!!

ドガツシャーンンンツ!!!

ドンガラガツシャーンンンンンツ!!

転倒事故が大量発生した

正確には手榴弾のようなものから大量の糸のようなものが横方向に広がり一種の壁のような形となりpa wn達はそれを避けることすらできずに絡め取られて転倒したのだ

さらにその転倒したバイクに後部の部隊がぶつかつて転倒が連鎖する事態に発展したのだ

「ひよつと思つてやってみたが、簡単かつ瞬時に避けられないやつは効くもんなんだな」

「うわぁ……もの見事に大規模な事故が起きてんな」

「いたそお……」

同情はしつつもこれで追いかけてくるものの数を減らせて、時間稼ぎになると思つた

その時だつた

ドゴオーンンン!!

「……」

高速道路の壁を突き破るようにナニカが現れたのだ

それは本来の役割からすれば輸送車といった形の代物であり、それ
だけなら多少の脅威になれど戦術的には立ち位置の低いものだった

「わあ何あれ物凄い大きいけど!？」

「わ、私のユニットよりデカイ!？」

「厄災なんだあれは!？」

「知るか!!わかると言えばアホみたいに武装をつけたアホみたいにデ
カイトラックってことぐらいだ!!」

もつともそれが、コンボイトラッククラス以上に大きいかつ全体的
に武器や装甲をハリネズミのように取り付けられた、いわば陸上の戦
艦とも呼べる例外的な存在であったが

そこからの地獄の競争は更にエスカレートした

ズガガガガガガガガガガガガガガガガガッ!!

「うわわわあ!?!もう少し安全運転d「できるかあ!!」だよね!ごめん
!!」

「ユニットの装甲がどんどん穴だらけに!？」

陸上の戦艦による嵐の如き銃砲撃は逃走者達と周りに巻き込みな
がら吹き荒れ

ズガアッソッ!!!

「キヤアッ!!つ、追突してきた!？」

「なんて無茶苦茶な運転をしやがる……………」

己の巨体を生かしたぶつかり合いをしてきたりと使えるものを最
大限に活かして万能者達を追い詰めた……………

「後部ユニットがもう……………」

「クソ、シールドどころかビットが落ちやがった!!」

「や、ヤクツチこれ以上は流石にまずいよ!!」

「ああ、これじゃこつちがいつ集中切れた時に事故を起こすかわかつ
たモンじゃない……………」

自分達の疲弊具合に万能者は危機感を募らせ、何か手は何か考えた
が一向に思いつかなかつた

「……………うん?」

目標達の姿は消え去っていた……おかしいことにさほど時間を経っておらず、痕跡すらなかったのだ

……本隊へ

目標八煙二紛レテ姿ヲ消シタ

現状コチラデハ追イカケル事ハ困難ト判断

少なくとも言えることは彼らを逃してしまい、トラックでは追いかけることが困難な状況となってしまったことぐらいであった

「アガガガガガガガガッ!?!」

「爆発と同時に道路の壁を突き破って相手の目を欺けたのはいいが……流石に高めの位置の道路からビルの壁と中を突き破りまくって進むのはどうかと思うぞ」

「……こうするしか道がなかったんだよ、バイクのやつがいたら使えなかったけどな」

「こ、後部を外したから急にバランスが、あわわわわ」

何はともあれ、万能者達は一時的ではあるものの逃走の時間を稼ぐことができたのだった

大体の逃走劇って最後の部分で何かしらヤバいことが起こることが多いよね

人類未踏査区画前 汚染地帯 廃鉱山都市

パラデウス大規模拠点

トラックからの逃走劇からそれなりに経過した頃

そこでは先ほどまでの戦場のオーケストラと言わんばかりに響いていた戦闘音は最小限にまで下がっていた

それは敵が最低限の抵抗しかできなくなったことを意味していた

そんな戦場の何かの施設内にて

未確認人型生体機械兵器ノ調査完了

紅い刃の大型の刀を持った pawn の上位個体と思われる存在は自らの『戦果』を調べていた

その『戦果』は戦闘によって欠損しているものが多いものの人の形をしており、その装甲にパラデウスの所属マークが貼れていることからパラデウスの兵器であることが見てとれた

骨格パーツ・生体筋肉ノ生体データ、機械、ソシテ残サレタデータナドカラ、恐ラク一カラ作り上げラレタ機械化人間ニ分類サレル代物ト推測サレル

ただ、今までのパラデウスの兵器と違うとすればそれは生きていた存在だった、それも明らかに人為的に作り上げられた存在として……

更ニ先程ノ戦闘デ数十体投入サレタ際、ソノ中ノ数体ガ我々ノ攻撃ヲ掻イ潜リ我々ニ攻撃ヲ加エタノガ確認サレタ

コレニヨリパラデウスノ脅威度ヲ根本駆逐クラスニ引キ上げ要請スル

更に兵器としては完成度が低いにも関わらず pawn の集団攻撃を避けて攻撃出来る性能を備えられていた

これらのことから彼らはこの存在が強化されれば今後脅威になる代物として認識したのだ、それ故にパラデウスの脅威度も上がるのは火を見るより明らかであった

ちなみに余談であるが

尚、今回ノ作戦行動ノ一部ヲ鉄血ト要注意存在αヲ見ラレタ模様、戦闘中カツ情報ヲコレ以上見セル訳ニモイカナイ為、追イ払ウヲ兼ネテ追撃部隊ヲ最小限送ツタ、コレヲ振り切ラレタ場合追跡ヲ中断シ、我々本隊ハコノママ作戦続行スル

どうやら万能者達との遭遇は彼らにとっても想定外だった様で一応追ひ払いも兼ねて捕らえる為の部隊を最小限送り、無理だった場合は無視する方針だったようで、本来の作戦を最優先に行動をしていた様であった

一方 郊外にて

万能者達はようやく鉾山都市から出れる一方手前の位置にいた

ギユイイイインンツ!!!!

ギユイイイインンツ!!!!

ギユイイイインンツ!!!!

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

「クソ、最後の最後でまたこれかよ!?!」

「トラックのやつで立て直しの時間を稼がれたか!!」

「向こうの弾幕がすごいよう!?!加えてこっちの弾幕を間を縫う様に避けながら突っ込んで来てるし!!」

ズガッン!! 「いでえ!?!」

「厄災さん大丈夫ですか!?!」

「ああ、クソツ!!バランスが崩れかけたが大丈夫だ!!」

同時に最後の最後で追撃部隊が大きい被害を受けていた万能者達を捕らえようと最後のカーチェイスが行われてもいたが

その逃走劇の詳細は省くが、先程と同じくあまりにも泥沼状態なカーチェイスだったことを付け加えておく

逃走劇の状況が動き出したのは始まってからそれなりに経った頃だった

「・・・・・・・・一か八か!!」

ズドオーン!!

何かを見て思い立ったらしく、突如万能者がバイクの大砲から砲弾を放ったのだ

そしてその砲弾は

ドガガガアーーーーンンンツ!

「・・・・・・・・え?」

今に倒壊しそうな高層ビルの壁を貫通し、最後の支えであった柱に着弾して粉々に爆砕した

それを

ズドオーン!! ドガガガアーーーーンンンツ!

ズドオーン!! ドガガガアーーーーンンンツ!

ズドオーン!! ドガガガアーーーーンンンツ!

ズドオーン!! ドガガガアーーーーンンンツ!

何発も繰り返して

その出来事に鉄血組は思わず呆けた

無論、

ドガガガガガガガガガガガガガガガガガツツ!!

ドガガガガガガガガガガガガガガガガガツツ!!

ドガガガガガガガガガガガガガガガガガツツ!!

ビル群は連鎖的に崩壊し始めた

「突然だがスマン・アレに突っ込んでくぐるぞ!」

「む、無茶苦茶だあーーーー!?!」

「本当に一か八かだなオイ!?」

倒壊し始めているビル群に向かって逃げるといふ自殺紛いの奇策に鉄血組も悲鳴に近い文句を言いつつもそれしか逃げる手段がないと判断し、万能者と共に向かった

無論、それを逃がさないと言わんばかりに追撃部隊も追うも

「出し惜しむな!! 抜けられでもしたら死ぬと思った方がいい!!」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

ズドオンツ!!! ズドオン!!! ズドオン!!!

パシユツ!! パシユツ!! パシユツ!!

カン カン カン

逃走者側の逃げながらの足止めの猛攻撃によって追いかける為の速度を出せず、

ズガツシャーーンンンツ!!!

ビル群だった瓦礫の山々によって阻まれる(最悪の場合押し潰される)こととなった

そして

コチラ追撃部隊、目標達ヲ取り逃シタ

経路ノ崩壊ニヨリ追撃困難ト判断シ部隊立テ直シヲ行イ本隊トノ合流ヲ開始スル

最低限の追撃という方針が万能者達を味方する形となった様であつた

そして、数十分後.....

「.....後方に追撃部隊の姿なし、音もなし、逃げ切れたと思います」

「.....死ぬかと思つたよ.....」

「.....すまんがあその都市からも少し遠くに離れるぞ、今追いかけて追いつかれでもしたら目も当てられないから.....」

「それが正しいなそりや……」

全員が疲労困憊かつ満身創痍に近いながらも廃鉱山都市という名前の戦場から脱出を果たしたのだった……

悪くヤバい情報のエレ○○リカ○パレードにあった時の心情つてもうね……………(遠い目)

廃鉱山都市での件から数日後

人類未踏区画近くの汚染地域 から数km離れた地点にて

混沌極めた大地から脱した万能者達はその大地と比べると天と地の差もある安全なその場所にて情報整理又はその交換を行っていた
「以上がこの調査で手に入れた情報と過去に手に入れた情報を照らし合わせたものなわけだが……………」

そうして、情報の出し合いが終わった瞬間の4人の心は一つだった
どうするのコレ

その心の中で一致した言葉でただひたすらに頭を抱えるしかなかった

「……………よりもよってあのデカいのを量産してたとはなあ……………しかも前のやつと比べると性能落ちてないみたいだし……………さらつとやられちまったが」

「……………パラデウスがそこまで強くなっていたのも見逃せない部分はありますが……………何よりヤツら戦力や技術、戦術など全てが桁が違い過ぎます」

「戦車とかの兵器も凄かったけど何よりあの滅茶苦茶早いのがデカいのを八つ裂きにしちゃったねえ……………ホントどうしようアレ」
「……………アレに関しては現状はそっちの例の規格外な奴らじゃないと対処しようがないなありや……………というか多分、規格外な奴ら対策で作ってるだろアレ」

「……………言いたくはなかったが、今回天候などもあってかヤツらもアレを除く航空戦力らしきものはなかった……………言つて

おいてなんだが、ヤツらの航空戦力に加えて今回出てきていないナニカがどうなってるのか想像したくないな」

「二本当に（ね）（な）（です）……………」

パラデウスはまだしも例の存在達が着実かつ急速に対策がされていっていることと自分達の想像を超えた最悪の戦力差が形成されていたなどの想像を絶する域にまでの事態と最悪に等しい情報だった故に4人は遠い目をせざるえなかった

不幸中の幸いかつ最大の幸運としては前もってこの情報を手に入れたことぐらいであった

「……………とりあえず、この情報を持ち帰って奴らに対策と調整などを合わせた戦力を整えるしか方法がなさそうだな」

「……………そうだな、少なくともあの p a w n とかいう歩兵クラスの戦術人形みたいなのを多少でも対応できる様にしておかないと話になりやしねえな」

「それだったら歩兵クラスの戦力をなんとか底上げをしないとね」

「それでしたら、おかあ……………開発部門の方で R C 部隊の設計を流用した方がよさそうですね」

（なんかしれっとおかあさんと言いかけてなかったか？）

そんな話し合いがありつつも現状はこの情報を持ち帰るしかない
と判断し

「そんなじゃ、次会う時は多分調整関係だと思うからそんな時はよろしくな」

「じゃあーね！ヤクツチ!!」

「若干複雑ですが……………また会いましょう」

「二度とあの地獄の調査は勘弁だけどな!!」

その地獄の巡りとも言えるような調査の旅を終えることとなつた……………

尚、余談であるが万能者がIOP社に帰還した際にすぐに緊急の作戦に参加することとなり、その後の後処理関係などもあつてその情報の伝達が若干遅れることとなるのだがそれはまた別の話……

不安定カツ不明瞭ナガラモ α行動探知ノ方法ヲ発見
保留プランBTニ組ミ込ミデプラン実行ノ可能性ガ高マルト判断
プラン実現ガ能力擬似試験ヲ実行開始……
プランノ実現ガ可能ト判断シタ場合、プランヲ直チニ実行スル

同時に調査の旅の終わりが新たななるナニカが起こる引き金になろうとしていた……

話と話の間に入った間話を尺稼ぎとは言わないでほしい（遠い目）

異常存在撃退作戦から数日後

ギャリイイイイイイイイイツツ!!!

「大体このぐらいか？」

万能者はある黄金を正確かつ等分に切る形で後始末を行っていた（例のチェーンソーで

「保管かつ運搬しやすいように1m×1mで切れて言われた通りにしてるが……中々の数があるな」

その量の多さから若干遠い目になりかけていたが（まあこう言う作業ができるの少ないだろうし、裏方も裏方で滅茶苦茶大変って聞かしくな……まあ今回の作戦であんま活躍できなかったタナカを向かわせておいたから大丈夫だろうけど）

仕方がないし、納得してるが……なんか腹立つ

何処かで匿名の幻聴が聞こえたような気がしながらも万能者はあることが気になっていた

（ターミネーター……いや、未来のバルカンさんが言っていた話の内容……）

それは簡単に言えば

25年後に人類、いや地球に更なる『困難』が現れ更なる絶望を撒き散らす

と言ったものだった

そのことに関して万能者は

(・・・・実のところ、自分そういう系やその辺などの(洗脳系やハッキング、認識改変など)対策がアホみたいにされてるからそのまま聞こえちゃってるんだよな・・・・まあその辺は置いていて、ただでさえ現状の問題が山積みなのに更なる馬鹿デカイ問題が積み重なるってことは確定だな・・・・なんでこの地球も試されすぎるんだろうなあ・・・・そしてなんで未来の俺は急にいなくなっただか・・・・とにかく今は後始末だ、その後色々終わらせたり新しいこと始めていかないとな)

先々の道筋に若干の不安を抱えつつ今の後始末を優先しながら今後のことを考えていくのだった

※ここからそれなりに経過した際の話です

1. 技術更新

「この装備ホントすごいわね・・・」

「パワーもだけどスピードもすごいや!!」

「その上で機能も問題ないレベルで増やせるとは・・・・流石万能者製としか言えないな」

IOP社の誇るMCRによって作り出された電腦空間では万能者がようやく完成させた『戦術人形強化改造』と『戦術拡張システム』の試験運用が行われていた

「性能を上げるだけでなく、機能を追加させる上で拡張性と汎用性を向上させる・・・・言うのは簡単だけどここまで出来るとはね・・・」
「言っても強化改造の方は内部データの最適化などぐらいメンタル関係は割とそのままで戦術拡張の方は戦術人形用のエグゾスーツみたいなを作っただけだな・・・・まあそれでも調整や対策関係で思ったより時間がかかってしまったが」

「……………それができるだけでも相当すごいのよ?」

その映像によつてもたらされる情報にペルシカは感嘆の声を上げ、万能者はそれを実現するのに時間をかけてしまったことを少し嘆いていた

「まあ下地は出来上がったんだ、これで今後連中がどう来てどうしたかでも多少後手にはなるが彼女達の調整ができるようになったからな……………後は彼女達はその性能を戦場でどう発揮できるだな」
万能者がそう言った時だった

「これならあの『MCRの悪魔』だって倒せるにや!!」

「……………ほう?」

その後

「ギヤアアアアアアアアアアアアア!!」

「あんなことをいうからああああ!!」

「ごめんやああああああ!!」

映し出された映像には口は災いの元のことわざを現実に顕現させたと言わんばかりに試験者(過去の作戦に現れた *pawn replica* の装備を反映させたものも含めた)との地獄の試験戦闘が何度も繰り返し広げられていた……………

「元々試験者はだいたいぶ設計がかなり別物に変わって本来のより若干性能は落ちるけどこつちでも作れる *pawn* って感じで作ってるんだ、向こうのと大体同じ様な設計思想だけどこつちのは性能が高い分コストや素材、設備などの関係で量産があまりできない感じだからなあ……………それを多少アレらと戦闘ができる程度の能力を持つたぐらいでアレらを超えられるという甘いことを考える慢心はガチで危ないからな……………まあそれで倒せるんだったら嬉しい誤算でもあるけど」

「……………鬼と言いたいけど正しくその通りだわ」

そんなことがありつつもG&Kは *pawn* を扱う正体不明勢力に対する戦力を少しずつ整えていった

2. 準備は裏の方でも

放射能汚染放棄地区 旧兵器工場 地下にて

そこは崩壊液による汚染がないものの放射能による汚染があちこちであるため半端放棄されている地区であった

そんな核攻撃の標的として攻撃され半壊していた軍事工場、その地下では

ウーーーーーーン ガツゴン ジーーーーー

ウーーーーーーン ガツゴン ジーーーーー

ガチャツン キュイイイイインンンン……

まるでそこだけが過去に時間が戻っているかのように動いていた

それも万能者によって作り上げられ、人類側にて戦果を上げていた試験者が少数ながらもその場で作られていたのだ

そしてそのほかにも機械弩と呼ばれていたものも含め何かしらの兵器などがその場所で作り上げられていた

『外部チェックは問題なさそうだな……しかし、試験者が専用の設備でしか作れないこともあるが、念のためと思つてちよこちよこ作つてたものが急遽必要になつて作り出す羽目になるとはな』

遠隔操作で施設の各所をチェックし終えた万能者はある場所のあるものへ視線を向けた

『これを作る場合は資源や技術などを滅茶苦茶要求してくるし……奴ら対策の一つとして簡易的に作ろうと思つてたんだがなあ』

それはとてつもなく大きかった、それも格納庫のようなかなり大きな部屋の大半を占拠してしまつているぐらいに

『……まあ必要になつちやつたんだ、そうなたら念には念を入れて用意しておかないとな、備えあれば憂いなしって言うし』

どうやら未来に起こるとされる数々の問題にも対処できるようなものが着実に作り出しているようだ……

3. 一方その頃、例の戦闘狂

それはあまり気にならないはずの情報であったものの調査の件でそれらの要素が逆に怪しさを引き立てていた

そして

「………行ってみる価値があるな」

それらの要素は万能者が行くという選択肢を選ばせるのには十分であった

10日後………

それは突然であった

「ば、万能者から救援要請!き、緊急事態です!」

運命なのかどうかは不明であるが、

何かしらその舞台を作り上げ、そこへ役者を招き始めたのは間違
いなかった………

ただ、その舞台の演目が不明なまま………

??暴来

―始動―

緊急の場合でも報連相はホント大事だよね、冗談抜きで（大規模コラボ

某所 人類生活可能区 G & K社本社

「汚染区画○○地区にてパラデウスの大規模部隊を確認!! 人類生活可能区画に向かっている模様!!」

「???地区にて暴動発生!! 市民をパニック状態で手がつけられません!?!」

「富裕層区画で強盗が各地で発生!! 小規模の複数の犯罪組織があつちこつちで一齐に起こしたものと思われまます!!」

「別の富裕層区画で爆破テロ予告が出されてます!!」

そこではまさに世紀末と言っても過言ではないほどに各地で犯罪や戦闘が起こっており、その情報の津波によってオペレーターや指揮関係の者達がてんてこ舞いの状態であった

だが、これらの全てはとあることが原因で起きていると理解しているものが多かった

「どうやばい状況か分かってないのにそこまでして手に入れたのかよ、万能者の技術を………確かにそれが出来たらはかり知れない益が出るのは分かるが………」

そう、万能者が救援要請を出したのだ

それも通信環境などが極めて不安定な『人類未踏区画』の近くという場所

つまり分かりやすく言えば救援を出しているため居場所はある程度分かるが詳細が全く不明の状態なのだ

不透明なため、手に出すのはリスクが非常に大きい、されど万能者

が戦闘不能の状態という今後一切ないと言えるほどのチャンスが
り得る

そんなハイリスクハイリターンな選択肢を様々な敵性勢力は選ん
だようだ

もつとも今その場にいるG&Kの彼らには

「くそ、どっから情報漏れたんだ!!」

「戦力を割かなきゃならん状況に持ち込まれたか……犯罪組織
はまだしも民間人を利用しやがって、ホント悪い意味で頭がまわりや
がる」

「とりあえず現地の警察と協力して鎮圧任務に3個小隊を当たらせま
す!!」

「パラデウスの部隊に関して正規軍が援軍を送ってくれるとのこと
です!!」

次々に起こる異常事態の現状に出来ることを尽くすことと

「……なんとか捜索隊が万能者の保護を成功できるといいのだ
が……」

頼みの綱である捜索隊の成功を祈ることぐらいしか出来なかった
のだが……

諸君、緊急事態だ

あの万能者が救援信号を発信したとのことだ

信号が発せられたと思わしき場所はその『人類未踏区画』から約数
十km離れた森林山岳地帯、正確にはその中にある大規模採石場と中
規模工場群があつたとされている場所だ

そこは記録によると大規模の採石場や工場などがあつたことが分
かっているが、破棄されてからかなり長い間経つたこともあつてあま
りわかってない部分が多い

また『人類未踏区画』に近いため、衛星を含めて通信環境が極めて

不安定で万能者の救援信号も不安定かつ不完全で来ているため、採石場と工場群のどの辺にいるかは詳しくわからない、その上作戦予定の時間ではこの辺で広範囲に渡って濃霧が発生する可能性が高いとのことだ

更に悪いことにこの件の情報が漏れてしまったようでパラデウスやなどの複数の敵性勢力に動きがあったとのことだ

その対応などで国連や正規軍、そして本社から部隊の大半を出せない状況かつすでに敵戦力の一部がその地帯に到着している可能性が高いとのことだ

その状況で敵と遭遇する可能性を考慮し、森林山岳地帯の手前からヘリから降ろされてから万能者の救援信号の発信源とされるその場所に向かうと言った形となる

あまりに急な事態かつ複雑な状況の為、戦力はなんとか万能者の強化プランの調整が終わった一個小隊と万能者の開発し緊急時用の自由予備戦力として配備していた試験者小隊しか現地に送ることができない

分かっているとは思いますがあの万能者が救難信号を出している……それを踏まえてさつき言った数々の要素から、もはや何が起るかは想像すらできない

そのため今回の報酬は諸君らの危険手当も含めて破格のもので用意している

諸君の健闘と作戦の成功を祈る!!

数時間後

人類未踏区画から数十km離れた森林山岳地帯 上空

バラバラバラバラバラ……

ローター音を周囲に響かせながらヘリ群はかなりの人数を乗せて目的地に向かって飛んでいた

白く染まった空間の中をかき分けながら……………

「こちらカメラ1、こりやひどく濃い霧だな……………地形地図と気象情報などを照らし合わせながら飛ぶのが精一杯だ」

『こちらカメラ3、ああ、ただでさえここは山岳地帯だ……………油断した山肌とキスするなこりや』

『こちらカメラ2、そんな泣き言言っている暇があったらこの作戦が失敗する要因を増やさないように作業に集中しろ』

『こちらカメラ4……………そつちはいいよ、可愛らしい子達を乗せてさ……………こつちは無言、THE無骨なお客さん達で心が癒されんよ……………』

『……………愁傷様』』

そんな近距離通信をやりつつも乗せたもの達を降ろす目標地点に無事にたどり着いた

「こちらカメラ1、お客さん方へ……………当部隊は無事に到着した、我々はここで待機しておくが、何回も言った通り通信も環境もかなり悪い、状況次第では一旦撤退しなければならないことを伝えておく……………それではお客さん方、無事を祈ってるぞ!!」

その言葉が予想や想像が全く不可能な作戦の始まりの合図となつた

……………新タナ武装勢力ヲ確認

所属確認中……………要注意カツ重要組織『G&K』ノ戦力ト判断
攻撃準備ヲ開始セヨ

シ待テ》

「さつき近くに偵察に行かせた子が戻ってきたが、あつちこつちに地雷やワイヤーなどのトラップがあつて進みにくいとのことだ……」
「いつの間に仕掛けられたの!?!」

周りに爆風を防ぐぐらいの木々や、デコボコした地面などの遮蔽物、捜索隊自体が高い練度の者達を集めていたこともあつて被害は最小限に抑えられてたものの、初っ端から彼らにとって不利な状況となつてしまつた

だがそんな状況下でも彼らは次の手を出す準備を行つていた

「…………アレ?よく聞いたら別の場所にも砲撃してない?」

「…………どうやら砲撃をやつてるヤツも敵が多いみたいだな」

《砲撃ノ発射音ト砲弾ノ落下時間ヲ探知及ビ計算完了、コレヨリ重装1・2ハ迫撃砲陣地ト思ワレル地点ニ向カウ、同行シタイ者ハツイテ来イ》

「…………ホント頼もしいことで」

反撃の時は思った以上に早いようだ
そして暫くして

迫撃砲陣地の偵察から連絡員として戻ってきた戦術人形(偵察部隊は引き続き別の迫撃砲陣地と思われる場所に向かつている)から捜索隊に砲撃したと思われる部隊の姿が伝わることとなつた

その姿はフード付きマントで全貌は見えないものの過去の似たような格好の pawn replica がいたことなどからその関係するものであることは間違いなかつた

G & K ト正体不明勢力ヲ砲撃確認

G & K ノ被害微弱ト判断

正体不明勢力ニ関シテ、ダメージハ与エタモノノ回復ヲ始メテイル事
ト遠距離解析ノ結果『異常現象』関係ト判断、データノ転送モ完了
タダチニ特殊対策C兵装仕様ニ変更

コレヨリ迫撃砲部隊ハ第3地点ヘト向カウ

どうやら戦いは様々な各勢力を巻き込んで激しくなるようだった……

ズゴオン!!

ズガアツン!

「ツ!!こっちからも……甲羅に突き刺さる杭だと!」

またある場所では視界が悪い悪環境の中でバラバラの勢力での狙撃戦が始まるなど

三勢力が遠距離、中距離、近距離、接近戦など様々な距離で様々な攻撃を繰り広げる光景は大混戦という言葉がピッタリな状況であった

そんな中でもG&K側は更なる乱入者に戸惑いつつも被害を抑えた状態で戦況を維持しつつ攻撃してくる敵を対処し、アブノーマルと呼ばれる存在達は目標を果たすべく部隊を分けて行動させていた

一方p a w n r e p l i c aと思われる勢力は

鉄血カテゴリノ新型ト思ワレル存在ノ脅威レベル再更新……火力ガ非常ニ高く、広範囲ニ様々ナ武器ヲ使ウ為ニトラップナドニモ被害ガ出テイル模様……接近戦モ秀デテイル

G & K 戦術人形モ戦闘力ハ以前ト比ベルト飛躍的ニ向上ヲ確認尚、第2第5第6トラップエリアヲ突破シタ部隊ハ以前洞穴ニ潜伏中何ヲ引き起コスカ分カラナイタメ監視ヲ続行

『異常現象』ニ関シテハ攻撃ニヨリ迫撃砲仕様1、歩兵4ガ大破、尚ソノ攻撃ハ高運動誘導機能ガ付イタ腐食性ノ弾丸ト判明……又ソノ配下ト思ワレル多脚小型攻撃ユニットトネズミ型攻撃ユニットモ確認、待チ伏セトαノ搜索ニ別レタ模様

数を減らしながらも敵の分析を冷静かつ的確に行いながら次の行動用意をおこなっていた

戦況ハ著シク変化シテイル模様……

戦力係数予想突破サレテイルト判断

迫撃砲部隊ヲ第6地点へ移動サセ『lure』プランヲ次段階へ移行スル

……尚、作戦領域ア火山ノ活動ガ活発化シテイル模様

最悪ノ場合、噴火スル可能性アリ

注意セヨ

何やら不穏な動きを見せながら……

そして数分後……

迫撃砲部隊次陣地配置完了

広範囲立体制圧用空中爆裂散擲弾用意完了

目標指定位置確認

彼らが無慈悲に葬り去る準備は整い、今にもそれが放たれようとしていた……

「・・・・・・・・容赦ないな、というかそれ欲しいな」

戸惑いつつも一時撤退することを全員（一部は暴走する仲間を一時鎮圧してだが）し、なんとか一時撤退を終えた瞬間
ギョオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツ!!!

嵐如き轟音がその周辺へと響き渡ったのだ

「何が起こってる!？」

「分からないけど撤退したところから何か起きているのは間違いないみたい!？」

「撤退したのは正解だったみたいだね・・・・・・・・」

「シューッ!?ンンシューッ!!!」

「・・・・・・・・とりあえずそれに関しては突っ込まないでござい」

そして、嵐としか表現できない轟音が止んだ後

それが起こっていたであろう地点に向かったものが見たのは

視界を遮っていた濃霧がその部分のみではあるが消え去り、まるで竜巻でも通り過ぎたような形で破壊されつくされて荒地と化していた光景だった・・・・・・・・

誰が見てもこれに巻き込まれたものはひとたまりもなかったと理解できるほどに・・・・・・・・

そして捜索隊の殆どがその惨状に戦慄し、それを引き起こしたであろう部隊の切り札とその開発者（兼その部隊指揮官）に畏怖を抱かざる得なかった

迫撃砲部隊全滅、狙撃や攻防部隊モ多大ナ被害ガ出テイル模様

部隊ノ残り戦力ト敵ノ様子カラコレ以上ノ戦闘ハ全滅スルト判断

サレド『Lure』プラン最終段階移行完了ト判断、コレヨリ一部撤退サセ、残りヲ死兵戦闘プランニ移行スル

何はともあれその後、小規模の戦闘が経て森林においての戦闘を終えることとなった・・・・・・・・

誰も p a w n と思われる存在の動きの妙な部分に気付くことなく・・・・・・・・

森林での戦い終息から数十分後・・・・・・・・・・

大規模採石場と中規模工場群にかなり近い場所・・・・・・・・

それなりに大きい戦闘があったものの捜索隊は被害を最小限に抑えた状態で万能者がいるとされている場所の近くへと辿り着くことができた

そしてその場所の光景を目にすることとなった

「な・・・・・・・・なんなのこれは・・・・・・・・」

中規模工場群はただ戦闘があっただけではここまで破壊されないとは理解できるほどに破壊し尽くされて滅茶苦茶な地形と瓦礫の山が複雑に入り組んだような形と化しており・・・・・・・・

そして採石場があった場所には・・・・・・・・

「か、火山の火口!？」

「地殻変動でも起きたのか!？」

採石場があったという痕跡を塗りつぶすが如く『破壊痕』と巨大な『穴』が出来ており、その『穴』の中からは位置が悪いため中身が確認できないもののそれなりの煙と赤と黄色というどう見ても熱いものがあるのが分かる光がしていた

先程の嵐以上に地形や環境、その他諸々全てが変わり果てたと言っても過言ではないほどに変わっていた

「一体全体ここで何があったというんだ・・・・・・・・」

・・・・・・・・だったとされる『場所』にて

そこで何が起きたのか？

それを知る術は現状その場にいるとされる万能者を見つける他にないだろう・・・・・・・・

デカイことこの裏ではデカイことが平行して起きてるのって定番ネタとなっている気がする今日この頃（大規模コラボ回

目標地点到着から1時間後………

元中規模工場群 複雑地形地帯

万能者の捜索は信号を頼りに場所を特定するという条件であつても滅茶苦茶な地形と瓦礫の山が複雑に入り組んだ場所のためになり難航していた

「一体何処にいるのよお!!」

「作戦領域の通信環境が悪いのもあつてかかなり近づかないと信号の場所の完全特定ができないのが辛い!!」

「おまけにあの火山の近くだからか、この辺もめっちゃ暑い!!」

そんな会話が一部で繰り返り広げられつつも万能者捜索は進められ、それなりに時間が経過した頃

パパパパパパパパパパパパパパパパッ!!!

ドドドドドドドドドドドドドドドドドッ!!!

「ッ!!待ち伏せか!!」

「あの小型歩行戦車か!!」

「だとすると狙撃手も生きてる可能性あるな」

「どちらにせよ、万能者を先に確保されたらまずいぞ………」

《ナラバ………狙撃3潜伏限定解除シ、アブノーマルト思ワレル狙撃手ヲ発見次第『例ノ武器』デ撃破セヨ》

《了解》

「………あの切り札みたいなんじゃないよね?」

《………アレヨリマシナ類ダ》

アブノーマルと再び交戦することとなり、更に時間を食ってしまうこととなった

ドガアゴオンツ!!!

周囲を確認する間もなく一撃で上部の回転翼が弾け飛び、飛行不能となった状態から更に横から来たとしてつもなく強力な衝撃によってそのままゴルフのカップインが如く綺麗に『穴』の中へと落ちていた

『穴』の中

そこは正しく火山の中と言えるような場所であった

溶岩の海が辺り一面に広がり、蠢めく姿は地球の血液といえるものであった

ズガガガガガガガツツツ!!

不幸中の幸いか木製のへりはその溶岩の海の真ん中にできた岩の島に機体を勢いよく引き摺りながらも不時着した

そして、不時着が止まった瞬間にすぐさま木製のへりは弾け飛んだ上部の回転翼を生やすように再生を始めた

環境と状況が己の機体と状態に非常に悪いものであり、すぐにこの状況から立ち直らなければならぬと分かっていたが故に……

ドガアツ

コクピットと思われる部分の前に立っていた存在の姿を見ることがすら出来ずに己の心臓とも呼べる小ぶりな丸太の形をした連絡線をコクピットごと何かで貫かれたのだった

連絡線接続開始………接続完了

深淵の水脈

そこは言葉では表現ができない、されど明らかに人知を超えた空間であった

その空間の住民達は当然の来訪者に驚かざる得なかった

連絡線を利用してこちらの領域覗いてくるといふのはあまりにも無謀な行為をする者がこれまでになかったのだから

案の定その領域の住民達はその覗いてきた存在を一目見て何かしようと思き返し始めた

正に『深淵をのぞく時、深淵もまたこちらをのぞいているのだ』が文字通り起きようとしていた……

が、

住民達は何かがおかしい事に気づいた

それを覗き返しているのに何も見えないのだ

正確には見える部分は見えるのだが、肝心な部分に限って見えず、まるで『無』を見ているような感じなのだ

その正体が分からないものの何かおかしいというのは間違いないかった

そんな違和感を感じつつ住民達はその存在が発したと思われる声を聞いた

消去対象領域の位置解析完了……

領域・空間情報解析完了……

これより』

ドガアツ

そう聞こえた住民達はすぐさまその連絡線を強制的に切った

その言葉の意味を、何かの違和感を理解する前に切った

その存在の見える部分を集中攻撃して押し返してから切った

その住民達はこの存在をこの領域にそのまま残してきたらとてつもなくヤバい何かを起こすと理解して切ったのだ

連絡……切断……認……

才ばたぞ……

その存在はそう言い残してその空間から消え去った
その『無』やその正体がなんだったかは分からずじまいだった
だが、

アレはやバい、そしてなにやら我々を攻撃できる方法を持っており
尚且つ我々の想像域を超えたナニカである
そう言えることは間違いなかった

一方・・・

あの空間を覗いていた存在は・・・

思考・精神・認識関係ニ重度ノ障害が発生

強制思考・精神安定化システム及び??を併用して起動
ズゴオンツ!!

精神汚染などノ障害を完全除去完了

正常化したものの使用可能ダツたりソース2. 6割損傷ニより使用
不可能・・・言語システム関係にモ障害が出ている

対概念・認識関係ノ強化及び復旧が必要不可欠であると判断

やはり今の状態でハ無謀だったカ・・・

されド次回攻撃時ニ有用な情報を得られたノハ間違いない

地上の様子・・・αの前ニG&Kの部隊ヲ確認

戦闘行動には多少の支障はあれど問題はナイと判断・・・

修復システム実行しながらこのまま次ノ行動に移ル

そして、その存在は穴の出口に向かって飛び始めた・・・

Containment completed Contain
ment completed Containment com

pleted Containment completed
Containment completed

木製ヘリの連絡線の破壊

アブノーマリテイ：木製ヘリ《ウッドヘリ》の再收容が完了しまし
た

Containment completed Contain
ment completed Containment com
pleted Containment completed C
ontainment completed

「万能者の信号の方向はこっちか!!」

《付近二敵ノ姿ナシ、コノママ信号ノ元へ向カエルト推測》

アブノーマルとの戦闘を退けた捜索隊はついに万能者の信号の場
所を突き止め、『穴』の近くまで来ていた

そして捜索隊が信号の発信元で目にしたのは

仰向けに倒れた凄まじい外傷を負った人型の物体であった

まず全身の装甲や外装などが溶ける、切られる、貫かれる、凹む、
剥げる、槍のようなものが突き刺さったままなど数えきれないほどの
やり方で数えきれないほどのダメージを負っており元の姿が判別が
難しいレベルであり、四肢の方もひどく、右腕は肩を残して消し飛び、
左腕は腕はあるものの手が切られて、左脚は膝から下が千切れており
辛うじて右脚が形を残っている感じであり、人間で例えればあまりに
も惨たらしく殺された猟奇殺人の遺体と表現できるほどのもので
あった

……それだけならよかったものの

その凄惨な状態のため捜索隊のほぼ全員が見ただけではその正体に気づくことができなかった、或いは理解しなくなかったのだろう

だが、辛うじて判断できるものや信号の反応によって理解せざる得なかった

それが『万能者』であることを

「ま、マジかよ……」

「何があつたんだ本当に」

《信号一致、主ト確認、サレド損傷甚大ト判断、コレヨリ支援全機ハ緊急修復プランヲ実行、応急処置後指定ポイントニ運搬ヲ開始スル》

万能者を確認した支援仕様の試験者はすぐさま万能者の応急処置に入った

《動力稼働中ヲ確認、思考関係ハスリープモードヲ確認》

どうやらこんな状態でも万能者は辛うじてではあるものの生きているようだ

「……やっぱ規格外だね」

誰かが言った言葉に一同全員首を縦に振る形で納得した

《条件作動式自爆システムヲ確認、解除中……》

「……オイ、今なんつった!？」

さらつとんでもない事実が発覚しつつもなんとか目的を果たすまで半分を切つたと捜索隊の皆が考えていた

その矢先のことだった

ゴオーオーツツツ!!!

ズガアツン!!

「なっ!？」

「なんだコイツ!？」

「わけわからないヤツの次にまた新しいわけのわからないヤツがきやがった!？」

『穴』から飛んで出てきたそれは捜索隊の前に堂々と降り立った

その存在は本来の万能者より全高が数十cmほど高く、アメフトの防具を思わせるような形をした戦車の如く分厚い装甲を全身で覆っていた

そして腰部には峰に持ち手の付いた片刃の大剣がマウントされ、左腕は盾が融合しているかのように右腕より大型に作られており、右腕には……

「なんだアレ?」

「……見る限り9連装のロケットランチャーに見えるが、それにしては銃口は……基本的なショットガンより少し大きいぐらいか?」

「……ゲテモノすぎない?」

銃口が9箇所もあるという四角柱の形をした大型銃という異質過ぎるものが握られていた

よくわからない存在ではあるもののその存在から答えを出してくれることとなった

αシステム解除中と判断、先に周りを無力化ヲ開始する

ガチャコンツ!!

「ツ!!あいつは敵だ!!」

ズドドドドドドドドドドドドドド!!

その銃から放たれる無数の散弾やロケット弾と思われる弾など様々な弾の弾幕によってこの作戦における『最後の敵』との戦いの火蓋を切られることとなった

《コチラ支援1、主ヲ物陰ニ動カシタ……自爆システムガドウ言ツタ条件デ起動スルカ不明ナ為、コノママ解除作業ヲ続ケル……

解除完了マデ援護ヲ要請スル

戦争は数だとは言うが、質も整ってないとうとうしようもないよね（大規模コラボ回）

元大規模採石場 現火山の火口と思わしき『穴』の近くにて

その場で始められた今回の作戦における最後の戦いは苛烈を極めていた

形式的には敵が1で捜索隊が多数という形な上で、その中に規格外な力を持つ者たちがいるにも関わらずにだ

何故そんな状況になっているのか？

答えは簡単だった

敵がそれらを相手取るほどに規格外過ぎたのだ

ドドドドドドドドドドドドドドド

カン!! キュイン!! カンカンカン!! キュイン!!

パシユツ

カアツン ドガアーン!!

「こちらの攻撃が全く効いてない!!」

「粒子砲も弾かれた!」

「どんな化け物装甲を使っているの!?!」

ガアン! ギイン!!

「チツ、普通の部分ならまだしも関節も非常に硬くて剣が通らない………一体どんな素材を使っているんですか」

盾の役割を持っているときれる大型の左腕を筆頭にその存在の身を守る関節ごと全身を覆った重装甲は見た目通り、否それ以上の防御力と頑丈さで弾丸やレーザー、衝撃、熱、爆発、斬撃など現状考えられる上で与えられたダメージを全て弾き返して耐え抜き

ゴオウツ

ズゴオンッ!!

「ッ!!今轢かれかけた!?私轢かれかけたよね!」

「……直線上にいたダミー、これまた綺麗にアレのタックル全部バラバラに砕け散っちゃったね」

「見た目通りの攻撃もやってくるってことね……想像以上に凶悪化してるけど」

その見た目に合わなすぎる高い運動性と機動性によって搜索隊を翻弄し、見た目以上のパワーによって敵を一撃で屠り

ガチャコンッ!!

ズドドドドドドドドドドドドド!!

ガチャコンッ!!

ボッ

ガゴオン

ズゴオンッ!!!

「またダミー数体がやられた!!」

「……大剣は見た目通りの威力だけど、あの銃の威力と性能おかしすぎない?」

「あの全ての銃口からの同時射撃とはいえ散弾で瓦礫の山が消し飛ぶってどんな威力してるのよ……」

所持している武器の驚異的な性能によって確実に敵を追い詰めていった……

だが、搜索隊もただやられているわけではなかった

《コチラ狙撃3、正体不明機狙撃可能位置二到着、『例ノ武器』モ使用可能》

《了解、命中可能ダツタラスグ撃テ》

《了解、射線ニ味方ナシ、撃チマス》

《エッ》

ゴオウ!!!

「きゃつ!?!」

「な、なに!?!」

それは突然だった

まるで超音速の戦闘機が超低空飛行で全速力で飛んだ時のような衝撃と風圧がその場に突然押し寄せたのだ

そして、それを呼び寄せながら飛来した物体……巨大な槍のようなものは
ガギインツ!!!!

正体不明機の左腕の装甲をそれなりに抉りながらも角度が悪かったためか弾かれて角度を変えてそのまま遠くの瓦礫の山々を貫きながら飛んで行ってしまった

《次弾装填シナガラ新タナ狙撃地点ニ移動スル》

《……ヤツニ悟ラレナイタメニ周リニギリギリマデ警告シナイ判断ハマズカッタナ……スマナイ》

「あんなのを用意してるなら前もって欲しかったなあ……」
「アレより若干マシだけど……それでもどっこいどっこいね……」

そんな会話はありつつも例の武器『弩砲』は正体不明機の装甲にダメージ与え、なおかつ貫通できる可能性があるかと判明したのは間違いない

《ヤツヲ『例ノ武器』ニ近付ケサセナイヨウニ頼ム、アレハスグニ攻撃出来ル様ナ武器デハナイ》

その攻撃を主体とした行動にすぐさま移したのだった

尚余談であるが先程弾かれてあらぬ方向に飛んでいった『弩砲』の弾であるが……

「ガッ……ゴォ……」

瓦礫の山に隠れていたアブノーマルの猟犬の狩人に偶然(運が悪く

とも言える)命中し、上右半身を抉り千切りながらコアの真横を後ろの瓦礫の山々ごと貫きながら飛び去り、そしてその余波でスナイパーやその他一部の装備を大破、コアの一部にもダメージを与えたことを付け加えておく……

※偶然で大ダメージっておま……(遠い目)

《自爆システム解除マデアト僅か……モウ少シノ間援護ヲ才願イシマス》

外部保護装甲にダメージヲ確認……
サレど、内部と修復作業、戦闘・無力化行動に問題ナシ
内部本体修復まで残りわずカ
レールガンと思われるものを重要指定リストに登録完了……
このまま戦闘行動ヲ続ケル

「夏っぽいことをしたい」はホント良くも悪くも人を狂わせる魔の言葉だよね．．．．あれ？これ去年も言わなかったけ？（コラボ回）

満点の青空が広がる猛暑日．．．．

全てを照らす日差しが降り注ぎ、熱気を交えて緩やかに吹いた風に雲が流れ、海がさざめく

そんな気候に恵まれた、大海原が置くまで広がって見える大きさ異なる船が停泊する港が一つある

そこはとある人物が、今の職に就く前から保有していたそこは今やグリフィンの一部の人間だけが知るとされる港と化しており、基本的には海洋調査を行う為の移動手段として機能している

そんな港に無人島調査という名のバカンスを楽しむべく、今回のバカンスの参加した者達の隣で．．．．

《コレガ我々モ乗ル船カ》

一般人の価値観的についても豪華客船クラスといえるほどの大きさの船の前にザ・軍事ロボの見た目をした3つの存在という場違い（ある意味一部の映画的にはあっているともいうが）な者達がそこにいた

《．．．．．デカイナ》

《．．．．．アア、デカイ》

《．．．．．豪華客船ト言ウヤツダナ》

そんな若干遠い目感を出している彼らが呼ばれたのには理由があり過去のとある未確認島の調査の件（一部から『伝説の欲張りB級常夏ハザード』と呼ばれ畏怖されている）が今回の作戦『Memories of a summer』と若干の類似点があったため、今回の参加者が過剰戦力の集団であつても念のために最低限の戦力を送るといった形になったのだ

《．．．．．一応調査ナドノ目的デ来タトハイエ．．．．》

《．．．．．我々ノ場違い感ガヒドイナ》

《……トリアエズ乗ルゾ》

そんな会話がありつつも彼らは任務を遂行する為に船に搭乗するのだった……

一方 目的の無人島の海岸にて

誰もいないはずのその無人島……

その海岸に人型のナニカがいた

それは

「ムウ……」

物凄く不服そうな表情をした蛮族戦士だった

そんな顔をする理由はその背後にあった

「火だいぶ強くなったよ!!」

「取ってきたキノコと魚などに毒があるやつない?」

「分けといたよ」

「テント張り完了!!」

そこにはアイソマーと呼ばれていた少女達が夏を楽しもうと積極的に行動をしている姿があったのだ

遡ること十日程前

「ム」

蛮族戦士はいつもの如く何かを感じ取っていた

「まただよ……」

「また私たちとの戦いの最中に何かを感じ取ってる……」

「……今度は何を感じ取ったのだろうか?」

先程まで血を血で洗う戦い(尚、蛮族戦士は手加減しており、少女達もそれを感じとっている)をしていた十数人ほどの少女達はまたまた起きたそれに呆れていた

そしてそのまま見送るのがいつも通りだった

それを変えたのがとある一言だった

「今度はどこに行くんですか？」

それを蛮族戦士はこう言った

「コノ カンジル ホウコウ ウミ ノ ホウ

ダナ ダガ コノ カンジ ハ ワカラヌ

イツテミル カ ツ!!」

「「海？」」

そう言った瞬間、蛮族戦士は目の前の少女達から感じたことないほどまでの殺気や嫉妬とも呼べるようなドス黒いナニカを感じ取った

「. ヘー海に行くんだ？」

「前は私たちが未熟だったのもあるけど、どこに行くかも言わずにまた海に行くんだ.」

「まあこの戦闘狂の場合、強いのを求めに行ったんだろうけど.でもそれとこれとは別だね」

「海の幸とか食べたんだろうしね.」

「それに比べて私たちは日々の大体がこの戦闘狂と死合と言うなの修行三昧.」

「そろそろ何かしらの休暇が欲しいところだねー」

そんな会話がありつつも最終的に彼女達は蛮族戦士を向いてこう言った

『今回、私たちもそれについて行っていいですか？』

「アア」

その有無も言わせぬ圧力のかかった言葉に蛮族戦士は珍しく圧倒され、許可をするしかなかった

回想終了

「ハアツ」

そのため息は彼女達に対してなのか、自分に対してなのか、或いはその両方なのか定かではないものの、疲れや呆れなどが混じっていたことは間違いなかった

そんな彼も数時間後に

「ヒサシイ ナ ツワモノ タチ ヨ デハ シアオ
ウ カ」(オリジナル笑顔)

偶然見たことのある強者達を遠目で発見してすぐさま近海に止められた豪華客船に向かって海面を走った上でジャンプして彼らの前に現れるという歓喜ぶりを見せることになるのだった

尚、その死合は

「何してるんだこの死合バカ!!」
ズゴオンツ!!

蛮族戦士の行動でバカンスが潰される可能性を感じ取って後から追いかけてきた姉妹達(こっちは装備を利用)が一斉拳骨(尚全く効いていないかつ逆に手を痛めた)とその場にいたもの達がその姉妹達を見たことなどによってその場の空気を壊してなんとか阻止されることとなった

最悪の事態って想定の遙か上をいつている場合が多いよね（大規模コラボ回

元大規模採石場 現火山の火口と思わしき『穴』
そこから数km離れた地点の瓦礫の山にて

《目標移動速度再度修正、射線誤差モ修正……》

《目標カラノ攻撃……近クノ山ニ直撃ヲ確認、炙リ出シト推測……念ノ為狙撃位置変更スル》

そこでは場所を変えたり、様々な計算と修正を行いながら『弩砲』の標準を移動しまくる例の目標に必死で標準を合わせようとしていた試験者がいた

《目標移動パターン再度更新……コノママデハ命中不可》

だが、その努力も目標の規格外さと思惑の回り方、行動によって撃てずにいた

このままでは捜索隊の被害が更に深刻な域にまで達するのは目に見えていた……その時だった

《重装4?……ッ!!》

重装仕様の試験者の一体が何を思ったのか、目標に向かって突撃を始めたのだ

その目標もすぐに気づきすぐさまその突撃してくる者に向かって攻撃を始めた

ガチャコンツ!!

ズドドドドドドドドドドドドド!!

その攻撃は重装仕様の試験者の頑丈であるはずの装甲ごと全身をボロボロにしていた

バシユツ

そんな強力な銃弾の雨に晒されている中でその試験者はグレネードのようなものを放ったのだ

そして、その弾がその存在の右脚付近に着弾したと同時に
バツ!!

ツ!! 両脚右腕及び武装が拘束無力化兵器と思われる糸によって
拘束状態化、行動ノ鈍化が避けられナイと判断

「あれって……私を拘束したときのやつじゃん」

特殊強靱糸拘束弾（通称『高速拘束ミイラぐるぐる巻き（外部解除
法も割と簡単!!）』）によって例の存在を不完全ながらも動きを極度に
阻害できる状態を作り出したのだ

《コチラ重装4、時間ヲ僅カナガラ作ツタ……本機ハ大破状態
ニヨリ戦闘継続不可、後ハ頼ム》

試験者一体の戦闘継続及び行動不可能（その機体は支援仕様の試験
者のワイヤーでかなり荒い形で遠隔で回収されていた）という自己
犠牲の結果の代価に手に入れたのは今正に『弩砲』の狙撃者にとつ
て……否、捜索隊にとっても渴望していた時間であった

拘束糸の強度確認、一定以上の力で切れルと推測
パワーを上げ

その拘束状態から逃れようとするも

「ヤツのバランスを崩せ!!」

「例の兵器をぶち当てるチャンスを作れ!!」

捜索隊の必死の妨害と時間稼ぎによって拘束状態から脱すること
がでしなかつた

そして

《……次ハ外サン》

ゴオウ!!!

槍の如き矢は再び放たれた

その矢は右腕の大型銃を貫きつつその存在の胴の装甲へと吸い込
まれるように綺麗に命中し、装甲を食い破るように少しずつ貫き進ん
でいった

それを見たもの達は勝利を確信し始めた

その時だった

本体戦闘可能領域まで修復完了……………

外部保護装甲パージ

バゴオンツ!!

「な!?!」

パージシタ装甲ト武装ヲ緊急格納

突然の爆発によって勝利に近い感覚が消え去ったと共にその存在の周囲は煙に包まれた

「なんか爆発の煙で姿が見えない!!」

「爆発装甲みたいなやつだったのかアレ!?!」

「悪あがきみたいなのを!!」

本体修復率68%……………戦闘可能領域

繊維全部位接続中……………完了

外部装甲構築……………完了

戦闘システム……………起動

そして煙が晴れその姿を曝け出した

『……………え?』

それを見た捜索隊全員がそう言った

その存在の姿があまりにも想定外すぎたのか

その存在を理解できない、或いは理解したくないのか

様々な理由が入り混じった上でその言葉に凝縮されたのは間違い無いだろう

その姿は違いが多いものの知っているものから見たら間違いなく

『万能者』

と言えるような姿をしていたのだから

現状武装装備ナシ……………

敵ノ分析及びデータ参照……………初期目標設定完了

コレより戦闘を開始スる

「っ!!来るz」

それは全員を戦闘体制に移らせる前に

「ガッ!？」

「グオッ!!？」

「クガアッ!？」

ズガアッ!!

捜索隊の人員の間を縫うように目に止まらぬ速さで移動しながらM16A4、シャマル、LAFIの3人を掴み、近く瓦礫の山の叩きつけたのだ

突然のことと砂埃などの煙によってその襲われた3人の状態は不明だったが、その煙から出てきたその存在の手には襲った者達の武器が溢れんばかりに握られており、一部の武器に関してはその武器を持っていた部位ごと引きちぎられていた……………

鹵獲した敵武装ノ侵食中……………

武装モジュール「武器庫」改……………完了

ロングメガバスター……………完了

ビームキャノン……………完了

収斂時空砲……………完了

バエルソード……………完了

鹵獲しなかつた敵武装ノ破壊も完了

ウイルスなどノ防衛機構完全排除……………データ・機器掌握及びコ

ピー完了

構造改造及び構築開始

ゴギツ バギツ ベギツ

……………完了

それは常識外にも程がある出来事だった

手に持った武器から嫌な音が鳴り響き始めたと思ったら武器の形が変わったのだ

武器庫と呼ばれた武装コンテナとロングメガバスターは二つが一つになるように融合しながら最初の形とは似つかない様な形の大型銃に変形し

バエルソードの名を持った二つの剣は両方の柄が合わさり双刃刀と呼ばれる様なものとなり

収斂時空砲の本体部分の機械とビームキャノンに至っては、背中のジェットパックから生えたサブアームに繋がった大型のキャノンへ形を変えたのだ

「ど、どういう原理なの!?!」

搜索隊の誰かがいったその疑問はもつともなことであった

だがその疑問に答えるものはおらず、代わりにその『成果』が見せつけられることになった

ガチャ

ボツ

『!?!』

大型銃から放たれた光弾は目にも止まらぬ速さで遠くの瓦礫の山々を無に返しながら焼き貫いていき、最後はかなり遠くの山に巨大な穴を作り上げていた

更に

《コチヲ狙撃3……. ナント回避、スグ離》

ガチャゴンツ

ギユオンツ!

『!?!?!?!』

《. 右半身消滅、戦闘継続及び行動不可能. スマナイ》

『弩砲』を持っていた試験者に大型のキャノンを撃ち、これまた目にも止まらぬ速さかつ目にも見えないナニカで瓦礫の山々ごと試験者の右半身と『弩砲』を消し飛ばしたのだ

搜索隊はその光景に呆気に取られるしかなかった

「ツ!!調子乗んな」

「ツ!?!ウォーモンガー待て!!」

その行動が武器を見せつけるような感じに見えたようでそれが気

なぜそうなったのかは少し遡る

《調査完了・・・・・・・・・・・・・・・・》

調査を終えた試験者二人は海から砂浜に上がり始めていた

《・・・・・・・・・・・・・・・・コノ後我々ハドウスレバヨイダロウカ・・・・・・・・》

彼らは調査ではあるもののそれという名のバカンスに行くことが決まったのが突然のこと

おまけに何とというか若干ロボットののような仕事原理みたいな感じで動いている為、バカンスと言われても何をすれば良いか分からない・・・・・・・・

そう・・・・・・・・人間でいう仕事一筋のザ・真面目な人が突然かつ強制的な旅行で何をすればいいかわからないまま連れてこられた感じに似たような状況に突っ込まれていたのだ!!

そんな途方に暮れるような感じだった

その時だった

《・・・・・・・・・・・・・・・・?》

彼らの前に子供達の集団が立っていたのだ

「ねえロボットさん?それって海を自由に泳げるもの?」

どうやら子供達はその水上・水中専用の装備に興味があるようであった

試験者二人は顔を見合わせつつも、とりあえず機密に当たらないレベルでの回答をする事にしたようだ

《アア、コレハ海ノ中カラ海上、ソレナリニ空中ヲ動キ回レルモノ・・・・・・・・》

そこまで疑問の答えを言って試験者二人は気づいた

この子供達は自分の装備を使って遊びたいのだと

だが、流石にこの装備は自分達用の装備である為に子供達には使えないこと、何より使えたとしても知識なしで使うのは危なすぎる

そう思った試験者二人はその答えの後に先回りして子供達では使えないことを伝えようとした

………が

キラキラキラキラキラ

その答えの一部を聞き、子供達は眩しいほどに輝かしいキラキラ笑顔をし出したのだ

《………ダ、ウン》

その様子に試験者二人は『子供には使えない』と言う先回りの言葉が出せなかった………

そこからはほぼノンストップだった

まず子供達の親と有識者達にこの問題をどうすれば解決するのかを聞きにいった

「何？子供達がお前達の装備を使って海で遊びたい？」

すぐさま保護者会議（子供にだだ甘）が開催され

どうすれば子供達を安心かつ安全に、そして楽しませられるのか

その方針で長いようで短い時間議論と考案がなされた末にその結論と結果が冒頭の光景だった

尚、さすがに一人一人交代する形で乗る形となっている

「おさかながいっぱいだ〜!!」

「イルカと隣り合って泳げてる!!」

どうやらバカンスに来て彼らは仕事をするという習慣からは離れられないようだ………

だが、彼らには表情のない（というかもろざ・ロボットな頭部）にも関わらず、何処となく嬉しそうで楽しそうな感じを出していたのだ

一方、支援仕様（頭にはそのまま氷のハイビスカスの花がつけられている）の方では

「遺言はそれでいいな？絶対逃さん!!？」

「遺言も何も、とつくの昔に死んでるけどな!!？」

「……まさかこんな豪華なバカンスになるなんてね……」

「ホント来て良かったね」

「朝飯はもう作ってたから仕方なかったけど、昼と夜も食べさせてもらえるって!!」

「……ホント来て良かったな」(滝のような涙を流して)

豪華になったバカンスにアイソマー達は内心で感無量の涙を流しながらバカンスを過去に自分達の事情や例のアレとの付き合いなどによって残念ながら断念せざる得なかった鬱憤を晴らすかのように、これ以上ないほどまでに満喫していた

尚、先行到着した際に建てたキャンプ地点はそのまま上陸拠点として使用されることになっている

「そういえばあの死合バカ遅いね」

その中の一人が言った言葉に全員がピタツと時を止めたかのように動きを止めた

「……そういえば遅いな」

蛮族戦士は豪華客船できた調査隊に突然乗り込んで死合を挑んだことよる迷惑の罰として夕食用の料理するための魚を取ってこいというお題を突きつけられたのだ

あくまで人間が食えるもので常識の範囲内という部分を突きつけて……

ちなみにその後のシーナへの返答であるが

「アノ トキ シャザイ シナカツタ ノハ アヤマロウ ……
タガ ソノ ドキョウ ガ ナケレバ ワレ ハ スデ ニ ソ
ンザイ シテ イナイ カラ ナ ソンナ サガ ト オモツテ
クレ」(オリジナル笑顔)

と、謝罪はしているものの若干挑発しているような感じだった為、すかさずアイソマー達に一齐に脛を蹴られること(逆に蹴った方がダメージを受けたが)となった

「マタセタ ナ」

「遅い!!これ以上あの人達に迷惑か

その遅くなつて現れた問題の声を聞きアイソマー達は振り向いた
そこには問題の存在とその左腕に持つ縄でくくりつけられる形で
捕らえた大量の魚……

そして鯨と言えるほどに巨大な鮫(あつちこつちに古傷が目立つて
る)がピクピクと痙攣しながら浜に打ち上げられていた

「ナバルボオオオ!!?」

その問題の存在が更なる問題を引き起こした光景にその場の全員
がギャグ的な形で盛大にずっこけた

ゴンツ

「ナニ ヲ スル チャン ト メシ ヲ トツテ キタ デハ
ナイカ」

「確かに取つて来たけど常識の範囲内って言ったよね?」

「アア チャン ト ニンゲン ノ ジョウシキ ノ ナカ デク
エル モノ ダ イウ デハ ナイ カ サメ ハ イキタ
ママ チョウリ ヲ スレバ ウマイ ト」

「その料理伝々の常識じゃない!!というかその常識はどこから持つて
来たかわからないけど!!それはともかくデカイ鮫という非常識なモ
ノ持つてくんない!!ホラッ!あそこの子供達がびつくりしてるじゃん
!!一部はかつこいいと思ってるのか目をキラキラさせてるけど!!」
「…………… ジョウシキ トハ ムズカシイ モノ
ダ」

「なんか考え深い感じで言うな!!」

…………… 蛮族戦士は何処へ行つても変わらぬようだ(白目)

尚、鮫は無事に遠くの方の元の位置で逃され、蛮族戦士が若干残念
そうな感じを出したのは余談である

しばらくして……………

「ッ!!」

異変にまず気づいたのが、蛮族戦士（しれっとバーベキューのデツカい肉をバリバリとワイルドに齧っていた）だった

あの人ならざる強者と同じ気配のようなものを感じとったのだ
更にそれを追い討ちをかけるように

「……………」（オリジナル笑顔

あの強者達が武装して島の奥深くに向かつていくのを目撃したのだ

そこからすぐに消え去ったのはもはや言うまでもなかった

次にそれに気づいたのは

《……………?》

偶然、蛮族戦士が島の奥深くに消える瞬間を目撃した試験者の支援仕様（周りの警備を行っていた）だった

すぐさま近くにいたアイソマーの一人（塩焼き魚をワイルドに齧っていた）にそれを報告したのだ

《…………… 蛮族戦士ガ島ノ奥ニ消エタノダガ……………》

「……………ハア!？」

《ッ!!他機体カラノ情報リンクカラ、ギルヴァナドノ人物達ガイナイ事ガ判明》

「ッ!!……………アイツまた一足先になにかの厄介事に気づいていったようね……………仕方ないッ!」

そう理解したアイソマーはすぐさま自分達のキャンプに行ったかと思いきや、すぐに長方形に長い白い何かの金属で出来たバツクのようなものを持って戻って来たのだ

「アンタ!!アイツとギルヴァさん達のところへ私を連れて行きなさい!!厄介事でバカンスが台無しにされてたまるもんですか!!」

《……………了解、重装1・2、島ノ調査情報提供及ビ調査

隊ノ警護ト一部ヘノ情報伝達ヲ頼ム

《了解》《了解》

《テハ緊急行動ヲ開始スル》

「おう!!」

そんな会話がされつつ、その二人も島の奥深くへと消えていったのだった

どうやら、このバカンスもそのまま楽に過ごせるわけではないようである……………

初見殺しの弱点って大体は知られてしまうことなど
なんだろうけど、一番はそれ喰らっても耐えられるや
つに弱いことだと自分は思うの（大規模コラボ回

被害状況：両脚両腕の装甲大破

：胸部装甲ニヒビ確認

：内部にハ損傷無シ

自分を守っていた装甲が砕け散りながら吹き飛ばされていた『万能
者に似た姿をした存在』はその状態のまま自分に起きたこと、自分が
負ったダメージ、そして敵の戦力などを冷静かつ迅速に分析していた
対象ノ空間攻撃及びワープ移動、防御障壁分析中……分析結
果と保存データ内に類似点ノある物ヲ確認……詳細照合
……分析完了

敵位置及び戦力再確認完了……最優先攻撃目標三体指定
攻撃体勢ノ『サイボーグ』『アブノーマル兵器保持者』ヲ無力化、『脅
威的規格外敵対象』ハ排除を想定

この自己分析、自己判断は恐ろしい速さで行われている上で現時点
で判断している情報での確かかつ非常に効果的な対処法を見つけ出そ
うとしていた

現状の武装では『時間障壁』ノ突破は不可、格納している武器は前ノ
戦闘の数々デ大半が大破……取りだす際に攻撃ノ可能性アリと
判断し、攻撃接触時に??ヲ0.2秒使用スル

……ワープ位置ノ座標位置予測は高速演算システム「リミッ
ター1段」で行ウ

対規格外人型近接格闘術と衝撃攻撃技術、敵攻撃方法を応用スル
コレヨリ対応戦闘ヲ開始

ズガガガガッ!!!

そうして、その思考を終えたその存在は吹き飛ばされている状態か
ら両脚で着地しつつ無理矢理体勢を整えると

両脚両腕胴部の装甲ヲ対衝撃・空間用、格闘仕様に構築開始
ガコンッ!!

・・・・・・構築完了

「大破した部分の装甲を生やすように作り出しやがったか・・・・・・」
まるで仕切り直しと言わんばかりに損傷し砕け散った装甲の部分
に新たな装甲を凄まじい速さで装備したのだ

シャーマールはそのことにため息を吐きつつも若干装甲が厚くなっ
ているなどの違いが確認できたことから何かしらの対策を施してい
ると理解していた

「まあとりあえず牽制はしておくか」

そう言いつつ片手間のように両腕で拾い上げた二つの鉄骨を放り
上げ、落ちてきたタイミングで殴りつけてさつきと同じようにレー
ルガンを超える速度で例の存在に飛ばした

超高速飛来物発射動作確認・・・・・・着弾時間演算完了

発射確認 3 2 1 対物理系飛ビ道具用攻勢防御行動

キュイン キュイン

ドゴオッソ!!!

「ガッ!?!」

「グオッ!?!」

「なにつ!?!」

それは非常識にもほどがある出来事だった

殴りつけられてレールガンを超える速度で飛来した二つの鉄骨を
左腕の凄まじい速さで大きく振るって手の甲の部分に当てて跳ね返
してそれぞれをアラマキとアウレールの二人に向けて攻撃をおこ
なったのだから

多少の減衰はあれどその威力は健在であつた為・・・・・・

無力化目標二名の被害状況分析

『サイボーグ』は右腕の損失ヲ確認、着弾の前に回避をしたと思われ
ル、『アブノーマル兵器保持者』には外れタものの近くに着弾、その破
片と衝撃デ少なからずダメージヲ負つたのを確認・・・・・・誤差を

修正

ソノダメージにより両者は動けない模様……サレど無力化二近いもノノ攻撃能力は残っていると判断し、無力化目標設定継続

その存在がそう判断できるほどの被害を二人は受けることとなつてしまった

「ッ!!」

シャマールはそのことに後悔しつつもすぐさまワープを行い例の存在に接近戦で攻撃をしようとした

規格外敵対象のワープ使用確認、高速演算開始、空間粒子学等併用、高運動機能限定解除

0.0000002秒に右後方に出現予測

……合わせ開始

「なッ!？」

その存在が自分の動く位置を完璧に予測し凄まじい速さで右腕で格闘攻撃をして来たことにシャマールは驚いた

(コイツ、ワープの位置を完全に予測できるのか!?だが、この『アルキメデスの兎と亀』は破れな)

そう思考しながらパンチの行動を続けた……

ボツ

ズドゴオツン!!!

「うおオツ!!小細工か!!」

その存在の拳はシャマールではなく、その地面に無理矢理方向転換するように向けて殴りつけたのだ

その突然の行動によるパンチの威力は衝撃波と地面の崩壊でその威力で物語っており、シャマールはそれによつてバランスを崩してしまい、更にその周囲が土煙に包まれてしまった

(クソ、アイツ何を企んでやる……ワープの位置を予測できる能力といい、あの規格外の性能といい……)

シャマールはその存在の規格外さもあつてか、その行動の意味を思

考した

(だが、この行動をするということはアルキメデスの兎と亀は破れないということ……ならずすぐに体制整え)

そう思考し、体制を整えようとした、その時だった

ボツ

「……………ッ!?!」

それは何かの大きい音と共に土煙の中を突っ切るようにしてシャマールの前に瞬時に接近していた……………

(向こうから近づいてきたのなら攻撃を……………いや違う、コイツはアルキメデスの兎と亀に何かを仕出かす気だ!!)

何かは知らないものの何かをやるつもりだ、それも何かしらの自分に攻撃できる手段でやると理解したシャマールはすぐさまワープをしてその場を離れ……………

「……………ハアツ!?!」

られなかった

正確にはその場を離れられてはいた……………

ただ、シャマールがワープしてもその存在が目の前にいたのだ

(分身!? いや違うアレは間違いなく本物で存在していた……………まさかワープ)

シャマールがその思考を完結する前にその存在は右腕をパーの形で突き出し……………

接触、??? 始動

パリーーンツ……………

??? 停止

七色に輝いていた『アルキメデスの兎と亀』をガラスのように砕き貫きながらシャマールの胸……………心臓がある位置に手を置いたのだ

!!!

!!! 理解不能や恐怖、羞恥心などの感情や思考が入り乱れまくってシャマールは対応が全く出来なかった

そして……………

・・・インパクト

ボツ

「ボガアツ・・・」

その右腕の手のひらから放たれた衝撃は空中にいる状態で逃げ場のなかったシャマールの身体の中を五臓六腑に行き渡らせまくり、目や鼻、耳などの穴という穴から血を出させ、内臓、骨、血管、特異な事象を引き起こしていた部分などの重要箇所にも大打撃を与えるレベルのダメージを与えることとなり、そのまま何も考えられずに意識を手放し倒れ伏すこととなった

『脅威的規格外敵対対象』の無力化状態と判断、内部破壊攻撃用インパクトでは即死には至らなかった模様・・・規格外力テゴリかつ未知の技術などヲ更に使用する可能性があると判断シ、排除する・・・念には念を入れて???を0.3秒使用
排除後、『サイボーグ』『アブノーマル兵器保持者』その他ヲ完全無力化、その後、それらと自爆システムを解除サレタ対象「α」を回収次第帰還を開始スル

最早、搜索隊は絶望しかなかった、搜索隊の中でも規格外の強さを持つていたものたちがほぼ全て倒され、逃げられないことも理解せざる得なかった

それでも彼らは

「シャマール指揮官を救助する!!」

「アイツに撃ちまくれ!!」

それが無駄であろうとも攻撃と救助を行おうとした

ズドドドドドドドドドドドドドドドドド

対物理系飛び道具用攻勢防御行動

「グガアツ!!」

「イダア!?!」

「ギャ」

「ぶ、武器がツ!?!」

マークの渋滞が発生しまくった

その渋滞を吹き飛ばしたのはそこからすぐのことだった

ビュツ

ズガッン!!

「……………」

??????

「……………」

ボツ

ツ!? ??振動、視界不安?、バランサー??

ドゴオッン!!!

例の存在が左腕で攻撃を仕掛けたと思ったら、万能者が新しく換装したと思われる右腕（何処となく例の存在と同じデザインのように見える）で防ぎ、何か凄まじい叫びのようなものを出したと思ったら手が若干怯み、そこから左脚（こつちの方は予備パーツやその辺のガラクタで無理矢理補強して作ったようなもの）で相手の顎を蹴るといふ光景がたったの9秒ほどで行われ……………

ボツ

キユイン

ガチャコンツ

ギユオンツ!

ギユイイイイイイインンンンツ
!!!!!!

そこから派生するように己の武器と性能を使った射撃・近接戦闘……………龍でb a l l 地味な高機動戦闘が始まったのだ

『……………』

その光景のあまりに搜索隊はもはや?マークすら頭の中に出せず、しばらくの間茫然自失の状態になってしまったのだった

何はともあれ、この作戦における最後の戦いは最終局面に入ったのは間違いなかった

《主ノ戦闘開始ヲ確認、コレヨリ我々ハ負傷者ノ救助及ビ戦力再構築ヲ開始スル》

分散されても「アレ？コイツ普通に大丈夫なんじゃね？」は余程の事がない限り本当にそうなることが多いよね（コラボ回

「ちよつと待てええええ!!」

「ムウ？」

その声に聞き覚えがあった蛮族戦士は足を動かしながら後ろを振り向いたところ、そこには蛮族戦士の元で力をつけているアイソマーの一人が例の鋼の強者（万能者）が作り出した量産機の背中に乗って来ている姿があった

「この戦闘狂!!また勝手に戦いに乱入して他所に迷惑かける気か!!」

「オマエ カ オマエ モ サンカ シタ イノ カ」

「オマエが乱入したがるって厄介事に決まってるだろが!!バカンスも邪魔されたくないしややこしくならないようにさっさと解決したいの!!」

《………大変ナノダナ》

移動しながらの話し合いが行われつつも一同は件のギルヴァ達がいるであろう場所へと向かっていた

「あつ迷惑かけない為にも一応ギルヴァさんに参加させてもらえるか聞いておかないと………ただ結構堅物って聞いているからなあ………」

尚その後

「ちよつと待って下さいいいいいッ!!」

「自分たちもお手伝いします!!」

「好きにしろ」

「ですから私たちも………えっ？今、なんて？」

「好きにしろと言った」

「ヨカッタ ナ アクマ トイウ ヒト ナラザル モノ ノ タ

タカイ ヲ マナブ ユルシ ヲ エテ

そんなあつさりとした許可下り、そのことにアイソマーは啞然とし
蛮族戦士はそう言いながら、いい笑顔（オリジナル）をするのだった

しばらくして

船内で「色々」あつて入ったもの達が最悪な形で分散され、なおか
つその先で悪魔に襲われた頃

船尾部にて

ババババババババババババババババツ！

ズドオン!!ズドオン!!

蛮族戦士や試験者支援仕様などが避難した先でいかにも強力な力
を持っていると言わんばかりの姿の悪魔「フュリアタウルス」が現れ
戦闘が行われていた

「当たってるがあまり効いてなさそうだぞ?！」

「おまけに離れているのに熱がすごい!!」

《ダメーシヲ確認………恐ラク持力ヤ耐性ナドノ要因ガ凄マジイ
モノト分析、火力ガ足りテナイト思ワレル》

（ハンドガンとはいえ対物クラスのやつで火力が足りないとは?）

それは今の戦力では火力が不足しており、蛮族戦士もその存在の周
囲にばら撒かれている炎や攻撃に警戒しているのか攻撃をいなす程
度で無言で距離を保ちながらの行動にとどまっていた

つまり現状はややジリ貧な状態であった

そんな状況下で

ボウツ!!

「自身の周りに火柱? 一体何を」

フュリアタウルスが突然の奇妙な行動を行い始めたのだ

それに困惑しつつ警戒をしていると

ブウン!!ブウン!!ブウン!!

悪魔がハンマーを振り回し始めたのだ
ブウン!!ブウン!!ブウン!!

異常はそこからだった

ゴオオオオオオオオオオオ!!

「な、な!?!」

「ひ、引き寄せられる!?!」

まるでその悪魔が竜巻になったかのように周りの者を引き寄せ始めたのだ

「ツ!そういうことか!?!」

《脚部アンカー固定、制御システム固定……各員、本機ニシガ
ミツイテクダサイ》

「た、助かる!」

迅速な対策しても急拵えなもののため、このままでは誰かしらがその竜巻に引き寄せられ炎の壁で焼かれた後にハンマーに砕き散らされるのは時間の問題だった

その時、蛮族戦士は動き出した

ダッ

竜巻に身任せてそのままの勢いで引き寄せられる形で

『!?!』

その場のもの達は驚かざる得なかった

ただ………

ニヤッ

《………アドリブ用意》

試験者支援仕様だけはその時の蛮族戦士の目と顔を見て何かを理
解したようだ

そして、そのまま炎の壁に入る………

ギューイイイイイイイイインンンンンンッ
!!!!!!

訳がなかった

入る前に空中で自身の身体を高速回転をしながら足の先の部分を
先端に突入したのだ

そしてその結果

フュリアタウルスは叫ぶことも何もみる事もできず、自分の頭に何が起きたか、どうなっているのかを慌てて自分の新しい頭という名の
大鎧に触りまくるといふ行動しかできなかつた

その光景に一部のはドン引きしていた

そんなことがありつつもやがて、その存在はその意思よりも身体が死を理解していくと共にその身に宿していた熱と炎は冷めていき、その活動を止めてただの巨大な像という名の置物となつたのだつた

《手ノ装甲ガ焼ケタノト腕部関節調整ニ若干ノ不具合アリ……サレド全テ修正可能ト判断》

「ヤル デハ ナイ カ ハガネ ノ ツワモノ ニ ツクラレシ
モノ ヨ」

《……質問スル蛮族戦士、オマエノ実力ナラアノ存在ヲスグニヤレタノデハナイカ?》

「ソノ コタエ ハ カンタン ダ アノ トキ ノ ツワモノ
ニバンゼン ノ カタチ デ イドミタイ カラ ダ ソノ
タメ コンカイ ハ オサエタ カタチ デ タタカワセテ モ
ラツタ ムロン コノ サキ ナニ ガ オコル カ ワカラナ
イト イウ リユウ モ アル チカラ ヲ ダサナケレ バ
ナラナイ トキ ハ ダサセテ モラウ」

《……了解、ソノ辺ヲ踏マエタ行動調整ヲ行ウ……各員、合流ノ為ノ行動ヲ》

一方、船の最下層にて

穴の底に落ちた先でギルヴァ達は悪魔「ジヨカトグウルム」と対峙していた

「タコなのか、ヘビなのか、訳わからない姿形をしてるわね……
(まあ過去に殺つたヤツとどっこいどっこいな感じだけど)

「
そういつつもアイソマーはその悪魔「ジヨカトグウルム」を冷静に見ていた

(どう見ても女性の身体ある本体っぽい場所が弱点みたいね……
なら私の役割はあの本体を守るかつ攻撃手段みたいな巨大な触手を
切り飛ばすことね……なら動き回って攻撃する形で補助腕と
かは使わない方がいいわね)

そうして判断をしたアイソマーは手に持っている白く長い金属製の
バックを何かしらの操作を行うと

パキッ ガゴオン!! ガゴオン!!

バックがけたましい音を響かせながら変形を始めたのだ

そしてその中から長柄のついた巨大な刃物……薙刀が現れそれ
をアイソマーが掴むと

パキッン! ガチャ ガゴゴゴ……

彼女の身体にバックのパーツが貼り付け始めその部分から装甲や
パーツなどが伸びるように構築されていったのだ

そして……

「……もう少し静音性考えないとね……(バギッ ガゴオン)……
両腕両腕換装完了つと……隙が多いし、事前にやつとけ
ばいいんだけど……あの時呆けちゃってやり損ねたからなあ……
(ガチャコンー!) よし準備完了つと」

その場にはバック以外のものを持っていない少女はなく

どこことなく日本の武士の鎧を思わせるような装甲が各所に守るか
つ動きの邪魔にならないように装備され、両腕両脚はいつの間にか他
関節だったり、獣脚だったりと普通の人の持っているような形からか
け離れた戦闘特化型の義手へと変わり、頭には保護と相手を威嚇する
役割が合わさったヘルメット、否、般若の顔をした戦士がそこにはい
た

「さて……むこうもこつちのことを気になってくれている
ようね」

その姿が変わったことなのか、その般若の顔が気になったのかは定
かではないがジョカトグウルムにとっては最初に攻撃する理由とし
ては十分だったようで
ブウンッ!!

自慢の巨大触手をアイソマー目がけて叩きつけようとした
だが

ドカアッ!!

その結果は叩きつけられて潰されるのではなく、巨大触手がアイソマーの強烈な蹴りによつて逆に弾かれたのだ

そしてアイソマーはその隙を見逃さず、すぐさま巨大触手の根本付近に薙刀を構えたまま素早く接近すると

ズバツ

巨大な触手を根本に近い部分から目にも止まらぬ速さで切り落としたのだつた

「まずは一本」

そこには哀れな運命に抗うことすら出来なかった少女はいなかった

ただ

「あ、再生能力もっているか分からないし、それで潰せるかは分からないけど傷口を念入りに焼き刺してつぶしておく」

ドスッ

グジュ グジュ

ボジュウ

強く生きる為に化物を殺し慣れて少しばかりワイルドな女戦士になつちやつたことを付け加えておく

本来温厚だったり、沸点が高い人、無口な人がキレる時って大体大概なときだよね（コラボ回）

作られた教会にて

そこでは試験者支援仕様が周りの者達に的確かつ迅速に物資の補給及び修復や治療などの作業を黙々と行っていた

《・・・・・・・・・・・・・・・・》

そんな作業をしながら試験者支援仕様は先程聞いた話を思い返していた

ゼーレの名を持つ彼女が辿ったあまりにも悲惨すぎる過程を・・・・・・・・

それに対して自身は

我々ハ恵マレ過ぎテイルナ

そう判断した

実のところ試験者自体、本来はデータ上の存在のみで現実では製作されないはずものが急遽生産される形となった存在であり、万能者が「もうなりふり構えない状況だったから仕方なかったけど演習でボコスカやっちゃったからなあ・・・・・・・・」というほどに周りのもの達から恐れられる存在になってしまっていたため、流星にまずいと思った万能者が試験者に調整を行ったり、コミュができる環境を整えて交流をさせたなどした結果、『演習の件で怖くて生真面目ながらも決して悪くなくてかなり頼りになる存在』となんとか評価を改めさせるに成功し、悪くない日々を送ることが出来ていた

故に、元々感情関係が希薄なことや性格関係が真面目であることなどが相まって試験者達では彼女にかける言葉が見つかることが出来なかったのだ

それでも彼女が言う彼女の母親は危険な存在であることは間違いない、彼女を保護し守ることを優先事項の一つとして決めたのだっ

た・・・・・・・・

そして、まもなくしてゼーレの過去や漂流船などの全ての元凶『母ヲ名乗ル者』が現れ、その存在の正体を現し、戦闘に突入する形となるが・・・・・・・・

突然ではあるが話を換えよう

試験者が元になった Pawn の設計は過去に凄まじく優秀と万能者がいうほどの代物であるが、それは試験者にもある程度適応される形で設計されることとなり、仕様や専用装備などがない場合でも高水準かつ統一された性能を持ち合わせており、他の仕様の武器や装備でも共有して使えるようになっていた

その中でも支援仕様は大量の武器や弾薬、装備、設備、医療や修理技術などを戦場に持ち運びながらも有効活用できるように本来の性能はそのままでも他の機能を付け加えるように調整された仕様であり、その気になれば前線でも普通(万能者基準)に戦えるようになっていた

無論、余程のことがない限りそんな判断はしないようになってあるが・・・・・・・・

そして、その内の一体であるこの存在のその直後の思考は…………

敵対対象遭遇マニュアル

対巨体 対人外(悪魔系) 対魔力 ナドヲ抜粋

同時ニ味方支援・連携ヲ適応

レベル3クラスマデノ武器使用制限全面解除

試作突撃銃剣槍を使用も想定

事項変更

支援ナドノ後方ノ味方ノ安全確保、先行スル味方ノ支援攻撃ヲ副次

事項ニ変更

ソシテ

コレヨリ攻撃対象ヘノ攻撃観測ヲ実行スル

・・・そして、話を戻し、母ヲ名乗ル者が様々な攻撃によるダメージによって怯んだ時だった

ガチャコン

「・・・・・・・・・・・・・・・・うん？」

ヴアオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

「ギャアアアアアアアアア!？」

母ヲ名乗ル者にまず襲いかかったのは横から来る鋼の大粒の雨による暴雨だった

その大粒の雨粒は母ヲ名乗ル者の身体を守るために咄嗟に防いだ前両脚に無慈悲に降り注ぎ、防いでいた部分を徐々に抉り削っていた
そんな雨を生み出したものは

「G、GAU—8 . . . ?!？」

「そんなデカモノをいつの間に・・・・・・・・」

背中の大型バックパックからベルト式給弾で繋がれ、本体を右肩に担ぐ形で使われているそれは、某国の航空機搭載機関砲のなかで最大・最重そして、攻撃力の点において最強クラスを誇るものであった
《撃滅対象ニ効果アリ、恐ラク通常火器デモ一定ノ火力ガアレバダメージヲ与エラレルト推測、別火器モ使用シ効果ヲ確カメラ》

間髪入れずに試験者支援仕様はバックパックの左サブアームについたコンテナから何やら砲身のようなものを伸ばして母ヲ名乗ル者に向けると

《『獄楽炎』発射》

ズドオン!!

ボオウツ!!

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!??」

容赦なくそれを発射し、対象の全身を容赦なく白い炎の火だるまにした

「アツイ!?アツイ!?アツイ!?アツイアツイ!!!??」

「アツジャアツ!? ここまで熱波が来てるんだけど!？」

「白い炎って確かナパームよりも温度高いんじゃないか?」

「よ、容赦がない……」

その慈悲も容赦もない攻撃に仲間の方では若干ドン引きもの達もいるほどだった

ガコンツ キュルキュルキュルキュル……

《『獄楽炎』効果アリ、GAU-8残弾0、別ノ対応武装二切り替エル》

無論、敵もやられっぱなしの訳もなく、その攻撃が止まった瞬間に「鉄人形があああああッ!!!」

頭の上に展開された転輪のようなものが光らせたと思えば、そこから大量の光弾を試験者支援仕様目掛けて乱射し始めたのだ

だが

《敵ノ攻撃、回避……否、》

試験者はその場から動かなかった

周りのもの達は何かのトラブルが起きたと思いきや動こうとするも間に合わず

ドガドガドガドガドガドガドガドガドガドガツ

光弾の雨の中に消えていき、その周辺には土煙が立ち込めて見えなくなっていた

「ようやく一つ……次は……」

そう言いつつ母ヲ名乗ル者は酷い火傷が全身のあちこちに目立ちながらもどうにか炎を消して次の攻撃対象へと視線を向けようとした

ドス

「……エツ?」

突然の腹の違和感に母ヲ名乗ル者は戸惑いつつも体の関係上見えてなかった腹の部分を覗いた

《カモフラージュニヨル接近攻撃成功、特衝撃弾『虚震破』装填》

そこには先程攻撃に晒されたはずの無傷の試験者が剣と槍、砲のような銃が合わさった形をしたどこかで見たような巨大な武器で母ヲ名乗ル者の腹を深く刺して、その武器に弾を装填している姿があった

《発射》

その瞬間

「ガッ……!?ゴッ……オオオツツ??」

母ヲ名乗ル者は己に起きたことを理解できなかった

メチャクチャに揺さぶられたように視界がぐらつき、思考も安定しない、身体も物凄くふらついて立てない、何より魔力が練れない、それどころか四散しているような感じがしているなど様々なことが同時に起きまくっているが故に理解することが出来なかったのだ

まるで突然感染して即発症する類の病気にかかる……否、まるで己の存在そのものが『揺さぶられた』ような現状によって……

《全体広効果仕様ノ効果確認中……魔力エネルギー関係ノ四散、対象ノ体調・思考不安定・存在振動ヲ確認……サレド効果確認用ノ弱調整ノ為効果時間ハ短イト判断シ、次弾ハ魔力エネルギー関係、中身・存在関係破壊用ノ調整仕様ニ変更スル》

発射と共に距離をとっていた試験者の言葉の通り

「き、きぎマア……ッ!!」

それほど時間が経たずに母ヲ名乗ル者は完全には立ち直ってないものの攻撃体勢を取り始めたのだ

だが、

《データ収集完了……弱点ト思ワレル箇所ノマーキング完了》

試験者支援仕様は先程の戦いで既に目の前の存在と戦うための情報揃い終えていた

《コレヨリ本機ハ……》

対象ノ撃滅ヲ最優先事項トスル

……ここまで来れば、この小説の読者の皆様方にはもう分かっ
てしまうだろう

性能差や武器の数などの制約、そして支援が本来の役割の存在であるものの条件付きで万能者のほぼ同じ戦術と戦い方ができる存在が

目の前の敵に対して完全に撃滅することを選んだのだ

この存在の所業、思考は生かしておいたら今後碌なことにならない
百害あって一利なし、故に撃滅すると

その場にいる全員が目の前の敵に対する感情を一旦置いておくほ
ど試験者の行動に完全に理解した

あ、そういえばコイツ万能者産だった

そして、コイツはこの中で一番冷静だけどそう判断するレベルにキ
レてる

そう理解しつつも戦いは続くのだった

『高度の柔軟性を維持しつつ臨機応変に』って普通戦場では出来ないものだが、出来たら相当ヤバイよね
(大規模コラボ)

被害状況：左前腕切断 切断された部分ノ処理確認

：大型銃大破

：内部にハ損傷無シ

『万能者に似た姿をした存在』は自分に起きたこと、自分が負ったダメージ、そして敵の戦力や状況などを再び冷静かつ迅速に分析していた

対象ノ周囲ヲ分析中・・・・・・・・分析結果・・・・・・・・極度に冷エタ温度の壁が存在すると判断

対象ノ正体・・・・・・・・分析完了

対象に生体反応確認、『生体人工知能』ノ搭載と判断、クラス4レベルの代物と推測・・・・・・・・されど想定される性能ヲ発揮されてナイと分析、恐らく本機二手の内を見せないメと判断する

敵位置及び戦力再確認完了・・・・・・・・最優先攻撃目標二体再指定
攻撃対象『α』ノ再無力化、『生体人工知能搭載機』排除を想定

その恐ろしい速さで自己判断が行われた上で現時点で判断している情報での確かつ非常に効果的な対処法を再び見つけ出したのだ
最適な武装へ変更開始、損失箇所修復ト共に両腕ヲ専用ニ換装
ガコンツ!!

・・・・・・・・構築完了

「・・・・・・・・」

「何か新しい腕と全身の装甲を変えたようですが・・・・・・・・何を
気なのやら・・・・・・・・」

新たに換装されたその両腕は人間で言う皮膚のない筋肉のような
繊維に覆われた腕といえるようなものに、そして腕以外の全身の貼り

付けられた装甲はなにやら少し分厚いものへと変わっていた
そして、その存在の変化直後にとった行動は……

ガゴオン ボツ

どこからともなく出した手榴弾のようなものをLAFIに目掛けて思い切りぶん投げる事だった

(……絶対零度の壁があるとはいえ、念のため後ろに下がった方が得策か……フラッシュバンなら対策されてる)

その行動にLAFIは慎重な判断をし、ほんの少し後ろに下がったその時だった

「……ッ!!!」

万能者が何かに気づきLAFIに向かって動こうとした……

その瞬間

ボウツ

目の前で太陽のような光球ができたと思ったその瞬間非常に強力な熱波を感じ取ったのは

「ッ!」

それは手榴弾としてもあり得ないほどの爆発だった

なにせ、それは破片などで周りに被害を与えるものではなく……爆発に近ければ近いほど『太陽』で灰にし、遠ければその熱波で被害を与えるものだったからだ

幸い爆発に近かったLAFIは自身の周りに絶対零度の壁があったため、その『太陽』の熱と熱波の被害を最小限にすることができ、万能者は割と遠かったことなどから熱波の被害だけで済んだのだ

最も……

「グウツ!」

その最小限の被害も熱波の影響で視界などのほぼ全てのセンサーが一時的に機能不全を引き起こしたことや武装に少なからず被害を及ぼしていたという致命的な隙になりかねないもの(万能者の場合応急処置又はできなかつた部分がもろに喰らってる)であったことや絶対零度の壁を過信し、回避を最低限にした判断が最悪手だったのだが

続けることができなかつた

熱波の中を無理矢理飛び込んできた万能者によつてその腕をチェンソーで切り落とされたのだから

それによつて最悪の事態は切り抜けることができたとはいえた……

最も……

「……………」

ドサツ

……対象ノ無力化ヲ確認、内部重要箇所ニダメージを確認、サレド回復可能レベルと推定

短時間でも中身を焼かれたのが不味かつたのか、LAFIは機能停止して倒れ伏すこととなつてしまったことと

ドガアツ

ギユイイン……ギユイイン……

元々のダメージと応急処置の装備では不味かつたのか片膝をついており、身体のうちが熱波で熱を帯びて溶けた部分もあれば、剥き出しだった部分から火花が出始めていたり、左腕と一体化された形で使われている巨大チェンソーは何処となく回転が悪いような様子を見せていたりと満身創痍の状態であつたが

そして、いつの間にあの『太陽』が消え去つており例の存在はガコンツ!!

……左腕構築完了

次攻撃準備

すぐさま切られた腕の換装を行いつつサブアームの大型キャノン二門を万能者とLAFIへと向けていた

戦闘継続どころか回避も困難、万事休すかと思われたその時

それは突然だつた

サー……

「…………ツ!!」

……鹵獲再構築武装崩壊確認……崩壊予測時間の三

「分かっているよ!!こりや逃げないとどうしようもないよ!!」

捜索隊もすぐにもこの場所から逃げなければヤバいという事を心から理解せざるえなかった

一部は大丈夫だろうし何とか出来そうな部分はあるが大半はただの戦術人形や規格外ではないもの達、大規模な自然災害に巻き込まれればどうしようもないのだ

無論万能者も捜索隊と共にこの場から撤退しなければならないのは理解しており、近くに倒れているLAFIを肩に担いですぐにも撤退行動にうつるつもりであった

……目の前の自分と似た姿を持つ例の存在がどう行動するかが分からないためにそうできないのだが

そして、その例の存在は……

撤退準備に右往左往している捜索隊と先程まで戦闘をしていた万能者達を見ながら立ったまま待機していた

「……今回は我々の敗北だな」

それは突然ながらもその場にいたもの達全てにハッキリと聞こえた、それが存在が捜索隊に初めて話した言葉だった……まるで耳で聞くというよりは脳で聞いているような不思議な感覚で……「可能性を持つもの達よ、また会おう」

それはまるでこの結果に納得しているようで……どこか希望と期待を抱いているかのような声でそれは発せられた

そして

バガツア!!

ひび割れが大きく開く事で足元に出来た穴に落ちる形でそのまま消えていった

こうして、人類に初めて姿を現した正体不明勢力のボスとおもわれる存在、仮称『悪夢』との最初の戦いは終わりを迎えることとなった

尚余談であるが

「あつちこつちから溶岩出てたり、地割れまくってるでどうなってるのよ!?!」

「天変地異にもほどがあるわあ!!!?」

ドゴオーオーツン!!!

「ぎゃあー!?!火山弾とか落石とかの落下物の雨があああ!!!?」

捜索隊と万能者の必死の行動によってなんとか死者0でその天変地異の災害の地から脱出することができたもののその道中が想像を絶する程のものであったことはいまでもなかったという

必殺技って行き過ぎたものになるともはや理解不能の域にいつちやうものって稀にあるよね（コラボ回

「あとは、おまかせします、皆さん!!」

限界時間到達と同時にそう叫び、グリフィーネは最初から使えていた機能であるECS（電磁迷彩システム）で姿を眩ませた

その瞬間

「ナラバ ツギ ハ ワレ ノ バン ダナ」

ドガアツ

ズザザザザザザツ

ガギインツ!!

「ヤハリ コノ テイド ノ モノ デハ フセガレル カ」

「・・・・・・・・・・随分と荒い交代なことで・・・・・・・・キックを入れての交代はマナー違反以前に失礼だと思うのですが?」

「スマナイ ナ ワレ ハ マナー ト イウ モノ ニ ウトイ

ノ デ ナ ソノ クセ ショウショウ ゴウヨク カツ ゴウ

イン ナモノ デ ナ ・・・・・・・・ トク ニ ミリヨク ノ ア

ル モノ ニハ ナ」(オリジナル笑顔

「・・・・・・・・やれやれ、更に厄介な方に目をつけられたようですね」

「デハ サイショ ノ モノ ハ ワレ ト イコウ カ」(オリジナル笑顔

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ええ・・・・・・・・」

「あの野郎ぶつ込みやがったよ・・・・・・・・」

蛮族戦士がキックでモデウスを蹴り飛ばしたと思いきや今度は自身が迫り合いをし出したという混沌とした状況に一部の者が困惑し、アイソマーはやりやがったと言わんばかりに頭を抱えた

「・・・・・・・・・・とりあえず私も混ぜさせてもらおうわ、というか

混ざらないと絶対こいつが混ぜらせないだろうから」

「……………」(物凄く嫌そうな顔をしてる)

「おう、過去にそれ何度やったかを言ってみな?」

「……………」わたしは構いません、ではお手並み拝見といきましようか」

「……………」スマナイ ナ デハ ハジメヨウ」

アイソマーがそれに混ざろうとすることがありつつも

ビュッ

ガアンツ ギインツ!!

ガギインツ!! ズガツン!!

ギインツ!!

その速さと技術などによって作り出された剣劇は素人でも見るだけで恐ろしく凄まじいものと理解できるほどでその剣劇によって作り出された音は更にそれを理解させるには十分すぎたものであった

もはや一つ一つのシーンが下手な芸術を超えている迫力が目の前で何度も起こっていたのだ

「あの人……………」いや人じゃないか、アレって悪魔じゃないの?」

「残念ながら悪魔じゃないんだよね……………」

「……………」どこをどうしたらあんな感じの生物として強くなるんだ?」

そんな観客の会話がありつつもしばらくの間その剣劇は続いていたが、ある時に一旦休憩に入るようにぴたりと止まりその役者三人は構えながら相對した

「ええいクソツ!!金魚のフンぐらいにしかなれなかった!!」

(アレで!?普通に回って戦えてるように見えたけど?)

「……………」もうひとりとはともかく、あなたホントに悪魔じゃないんですよね」

(あ、あっちからもツッコミ入った)

「アア ワレ ハ アクマ デハ ナイ ナ ソレ ヲ カテ ト

シタ コト ハ アル ガナ」

「……………」こまったことにガチなんだよなあ」

「なるほど……ですが二人の動きをようやく覚えることができ
ました」

「ナルホド ツギ カラ ハ ワレ カラ ノ コウゲキ ハ ツウ
ヨウ シナイ ト イウ コト ダナ」

「はい、端的に言えばそういうことです」

モデウスはそう言いながら宙に浮かせていた他の剣とは違う造形
をした剣を持ってない方の手にとって二刀流の形で構え始めた

「手数と対応する手を増やす……うわあ言ってることガチ
みたい」

「…… ナラバ ミヨウミマネ カラ ウマレタ モノ デハ
アル ガ オク ノ テ ヲ ツカワセテ モラウ カ」

そう笑顔でそう言うと言と蛮族戦士は

ドッ!

ズザザザザザザツ

後方に飛ぶように下がり、何やら爪を構え始めたのだ

バギ バギ バギ ゴギヤ バギ バギツ パキツ

その構えの特出すべき点としては爪と全身が白く光出しているこ
とと骨や肉から悲鳴と錯覚するほどに歪な音が聞こえてくるほどに
力を入れまくっているのが挙げられた

「こ、ここまで身体の悲鳴みたいな音が聞こえるんだが……ア
イツ何をする気だ!?」
「というか身体大丈夫か!」

「……」
「あー……あの初見殺しと初見じゃなくても殺すヤツを
連続でやるエッグいヤツをやる気だ」
「一度離れろってことですね、コ
ンチクシヨ」

アイソマーが一時的にその場から離れるのを尻目にその戦いの見
物人とかした味方と何をしてくるかと警戒しているモデウスが見て
いる中で

「……」
「ボッ」

それは消えた

「……………!!?」

ズバアツ ズバアツ ガギインツ ズバアツ

そして、蛮族戦士が消えた瞬間にモデウスの全身に切り傷が出来始めたのだ

まるで大量の見えない剣で全身のあちこちをめつた切りにされているようにだ

「ど、どうなっているんだありや!？」

その光景は理解できなかったもの

「……………え?」

「……………え?」

(……………いつ見てもアレって理屈とかの問題超えてるよね……………)
完全ではないもののある程度理解できたもの、事前に見たことがあったものなどで様々であった

蛮族戦士が初めにやったことを簡単にいえば蛮族戦士の移動速度と攻撃速度など速度に関するものを上げるといいうものであった

「アレは私が過去にやったのと同じ……………いや、それでいて何か違う……………?」

(……………まさか、速度をアホみたいに速くすることで一応まだ『過程』があるけど最早ないに等しいものになって『結果』だけを残すレベルになるって訳わからんよな)

ただそれがあまりにも速すぎて『過程』を吹っ飛ばして『結果』だけを作り上げられるという極限の域へと入りかけていることを除けば……………

しかし……………

「……………やはりなにかが違う」

(……………速いだけでは説明がつかないなにかがあるな……………)
(……………速さで認識できないだけでは説明がつかない……………)
(そしてそれに『アレ』の合わせたらね……………もうヤバイよね)
ギルヴァなどの一部とモデウスはそれだけではない何かがあることを気づいていた

されどその速度となにかが合わさることによって悪魔の視覚能力

ですらそれを認識できず、その正体を考えるしかなかった

ズバアツ ズバアツ ガギインツ ガギインツ

ガギインツ ガギインツ

そうこうしている内にその正体不明の攻撃を受けていたモデウスはその手品のタネは分からないもののその攻撃が当たる箇所にある一定の法則を見抜いたのか少しづつされど確実に防御をする回数が増えていたのだ

だが

(……これは探られましたか)

モデウスはこの攻撃自体が自身の防御の甘い部分を探るものであることと既にそれが探られてしまっていることを理解した、ゆえに

(だがそこを狙ってくることを理解できれば……)

それを利用したカウンターを仕掛けることを選んだのだ

そして、それは数秒程してやってきた

ガギインツ!!

突然の金属同士がぶつかるような甲高い音が広がると同時にその周囲に強力な風が吹き荒れたのだ

そして彼らの目に映った光景は

「ワレ カラ ノ サプライズ ハ ドウダ」(オリジナル笑顔

左肩の一部を切り飛ばされ、腹を若干切られつつもモデウスの剣を大剣の如き大爪とその腕の脇で受け止めて、もう片方を左手で真剣白刃取りをして動かしにくいように固定していた蛮族戦士と、

「……驚きました……まさかあなたも『六剣』だったのですね」

全身のあちこちを切り刻まれたうえで消えゆく蛮族戦士の姿をしたなにかが5体がそれぞれ、横腹と背中を左右、後ろから突き刺し、左肩を抉るように上から突き立てられたモデウスだった

「……え？」

「……そういうことか」

「……ホントいつ見ても意味も分からないよね……己を剣と考えて自分の形をした斬撃を飛ばして行動させるとか」(白

目

「………え？」

蛮族戦士がやってのけたことがあまりにも逸脱していたために一部のものは呆然させるほどだった

「………ナルホド ソウイウ コト カ」

そんな中で蛮族戦士はその剣を掴んでいて何かに気付いたのかギルヴァの方………正確には蒼をほんの少しながらも視線を向けた

(………アレで気づくのか)

その意味を知る蒼などの一部のもは蛮族戦士の理解力に若干呆れるしかなかった

「シカシ コノ イツテ デ オマエ ヲ ヤレ ナカツタ ノハ

ザンネン ダ」

ブシャツ!!! バギヤツ!!

「ヤハリ ハンドウ ガ キタ カ」

「なんか全身のあつちこつちがひび割れてそつから血が噴水みたいに噴き出してる!!!」

「………なるほど強力が故に代償もあると………ダメージが大きいですがここは無理してでも切らせてもらいます!!」

「ツ!!!ヤバイッ!!!」

誰がみても重症で動けないと分かるほどの反動が起きている蛮族戦士をみてチャンスと思つたのかモデウスは真剣白刃取りされていた方の剣を無理矢理引き離してそのまま斬りかかろうとした

その時だった

「私 を 忘 れ た な ?」

ドガアッ!!

「ゴツガッア!?!」

気配を隠していたアイソマーがモデウスの顎を横から思いつきり殴つたのだ、思わぬダメージでモデウスは斬る行動を取れず体勢を整えるしかなかった

「やっば、先のアレのダメージが強烈でこつちに気が回せなかつたみ

たいね……殺意を込めてない不意打ちでやったら見事にクリンヒットよ」

「……あなたも手癖が悪いですね」

「ある程度わきまえていている部分はあるけど、教えてもらってるのがコイツだからね……」(蛮族戦士を指差しながら

「……ああ」

その説得力のある言葉に敵味方問わずに全員が納得するという奇妙な光景が一時的に出来上がった

「……ヨシ ナオツタ」

「!!?!」

その合間の時間で全身がひび割れて血を噴水のように大量出血していた蛮族戦士がどういう方法でやったかは分からないものの傷口が塞がり出血が完全に止まった蛮族戦士がそこにいたのだ

「え?いや?さつきどう見ても重症に見えたんだけど……」

「チカラ ト コンジヨウ デ ナオシタ」

「それだけで治せる!」

「トハ イエ サツキ ノハ ツカエン ガ コレ デ コノ タ

タカイ ヲ オエル キ ハ ナイ ツヅケヨウ デハ ナイ

カ」(オリジナル笑顔

「……いつもながらだけど、ホントコイツなんなんだろうね?」

そんな奇妙と呆れの雰囲気は流れつつも状況は更に進んだことは変わりなくこの後は一対多数の形で戦いが進むことになったことを付け加えておく

尚、戦いの中で大半のものが気づいていないのだが砕かれて床に散らばっていた魔剣の破片がそれなりの数が消えているのだが、それは別の話……

名前つて思った以上に重要な要素だよね（大規模コラボ後日談

万能者緊急搜索作戦から十数日後……

当初の目的もなんとか達成されたことやそれ以外の方面からのトラブルの被害も最小限にとどめられた上でパラデウスなどの敵対組織に大打撃を与えられたこともあって事後処理や調査などはスムーズに進められていた

だが、そんな良い結果を吹き飛ばすが如く更なるとてもない問題が今回の作戦で判明してしまっていたのだ

IOP社 会議室

そこでは指揮官と研究員、正規軍軍人達、今回の作戦の参加者などがとある情報と今後の対策のために集まっていた

『おそくなつてすいません』

若干の機械音声感のある声と共にその部屋に入ってきた万能者に視線が向けられた

その身体は装甲がほぼ全て剥がされて中の骨格も新たなものになっているということと声が機械音声のようなものになっていることから、想像を絶するほどのダメージを受けた上で修復がまだ途中の段階であるということが見受けられた

その事実でとてつもなくヤバいことが起きていた気づいた者たちが戦慄する中で件の重症者は会議室の前の部分に立つと

『とりあえずぶつちやけて言います、この件『世界大戦勃発クラスにヤバい』』

「「「「「!?」」」」」

初っ端からストレートに爆弾発言をしたのだ

「世界大戦クラス!」

「何処とやる気なんだ!?!というかそこまでヤバいのか!」

「いや、まあ……敵が例のあれだつて聞いてたからそれぐらいになるとは思っていたが……」

様々な反応が出る中で万能者は続けて話した

『そっちの混乱と反応も理解はできる……ただ、コレマジです……俺もそうであつて欲しくなかったなあ』

どことなく遠い目をしていた万能者を見て「あつコレ想像以上にアカンやつだ」とその場にいる全員が現状を理解せざる得なかった

「……つまり、あなたの技術……あなたと同型を使っている勢力が判明したつてことね」

現状の情報と万能者の言ったことを照らし合わせて出てきた疑問を聞くべくペルシカは話を戻す形でその質問を出した

『ああ、例のあれと最初に戦った際に直接クラッキングしてすげえ痛い目にあつたが、それ相応の情報を得ることに成功した』

「そ、そうだ!それが分かつているならまだ対策ができるかもしれない!」

「条件次第では国連に支援を……」
『……遺跡』

「……え?」

万能者の言葉にその場にいるものたち全てが固まった

『遺跡だよ……正確には遺跡の一つで今も生きているシステム……』『独立自律式遺跡防衛システム機構』つてところだな』

その言葉は彼らに更なる衝撃を与えた

それは1つではあるものの『遺跡そのもの』がこちらに攻撃を仕掛けてきていると言っているようなものであつたからだ、それも万能者を作り上げた文明の技術の一部と万能者の同型機と思われるものを使ってくるという最悪過ぎる形で

『まあコレに攻撃される発端に関しては人類側の自業自得な部分が多いみたいだけどなあ……多分、第三次世界大戦時に核攻撃や崩壊液兵器を防衛システムがあつた場所にやっちゃつてその衝撃で

再起動しちゃった系だ』

「「oh」」

全員が思わぬ形で人類の過去の清算が来てしまったことに頭を抱えた

『.更に言えば、その時に即攻撃じゃなくて戦力増強や地盤固め、こつちの戦力調査及び鹵獲などの潜伏行動をやってるから滅茶苦茶頭が回るタイプだこりゃ』

「.そりゃ、世界大戦も領けるわな」（真顔

『その上、そのシステムの中枢に例のあの存在を組み込んでいるから倒しにくいし、逆にこつちがやられる可能性が高いからなあ』

「「oh」」

そんな絶望的なことが次々と判明していく中で

「そろそろ聞きたかったんだが.万能者、オマエの正体.設計思想を言つて欲しい.それで例のあの存在の対象法が少なくとも分かるはずなんだが」

その言葉で目の前の存在.『万能者』という言葉に隠れた存在の正体はなんなのかと心の奥にしまわれていた疑問が様々な者達から湧いてきたのだ

『あー.まあ誰もが思っていることだと思うし、俺も情報集めててようやくある程度確信を持てたし言つておこう.そもそも俺は遺跡文明で作られた存在じゃない』

「「.え?」」

あまりにも予想外すぎた答えに全員が固まった

『ただし完全に無関係ではない、というかめちやくちや大有りだ』
「「「「???」」」」
『これまたかなり複雑かつややこしい感じなんだよなあ』

参加者たちが頭で?マークの嵐が起きているのを尻目に万能者は話を続けた

『大体遺跡文明が健在だった時代、おそらく滅ぶそれなりに前あたりかな?ちよつと前に遺跡調査の際にとあるものを発見しててな、まあコレは一部の者には知っていると思うが』

そう言いながら映像としてそれが映し出された

「これは……長方形の輪つか？」

（これって過去の異世界での作戦の際に万能者が通ってきたってやつじゃ……）

「……ひよつとしてどこもドアみたいなやつ？」

『まあ一部が言っている通りコイツは世界と別世界を繋げるゲートだ……そんなんで今回の調査で見つけた遺跡からゲートはなかったが、そこにあつたと思われるゲートの使用記録とその結果を見つめることができたんだ……まああの遺跡はだつたものに成り果てちゃったけどな』

「「oh……」」

貴重なはずの遺跡がなくなったことに一部のものが頭を抱えた

『まああつたわ、そのデータに例のヤツらしきものがそのゲートから回収された記録が……』

「「oh……」」

『つと、まあそういうわけで遺跡文明と俺関係の技術との関係……『複雑な事情の末に漂流して遺跡文明の手に渡ったあの機体』が根源の正体だったわけだ……ちなみに俺の方は行き先不明のランダムワープ先の調査・探索が目的で今回のこれはマジで偶然なヤツだ』
更なる衝撃的な言葉に誰もが言葉を失うしかなかった

『まあそんなわけで……あ、そう言えば『万能者』という名前がぴったりすぎて、自分から言っただけ……正式名称は『機人』複合技術型万能式調査・探索仕様機』ε-017-0024』
だ……自分で言っただけなんだがやっぱ『万能者』って名前の方が簡単かつ俺の製造のコンセプトがほぼそれだからしつかりくるな……今後正式名称を無理して使わなくてそのままでもいいぞ』

「「身も蓋もない!？」」

『まあともかくこれからの行動は全勢力の敵になっているのが遺跡防衛システム……『独立自律式遺跡防衛システム機構』をどうにかこうにかとめることで、それには例のアレ……俺の同型と

というか、初期量産最終試験機にあたる、謂わば俺の祖に当たる機体だな……それと遺跡と俺らの技術を混ぜてたり、再現したりした技術にどう立ち向かうってことだな』

「……oh」

ここまでの数々の衝撃発言のラッシュパンチで精神がボロボロになっていてところでトドメのその言葉にはば全員が世界名作劇場の例のあのシーンが想像しながら頭を抱えるしかなかった

尚余談であるが

『そう言えば、お前自爆装置を起動してたけどアレって……』
『……例の機体の件の後で付けられた、技術が渡つてはアカンとこに渡るのを阻止する為に本体が特定の条件下で起動不能になったら自動的に作動するヤツ、更に効果が国どころか星壊滅レベルの』

「『オイ!?!』」

『……今回それが盾になってくれたみたいでヤツらも手出しが出来なくなつたのだが……マジでごめん、想定外なのもあつたけど完全にそう設定されてたのすっかり忘れてた』(滝汗

滝汗をかくのを幻視するレベルで焦った万能者を尻目に協力関係の存在がしれっとヤバいことをしてかしたこととやらかしかけたことに全員からツツコミがいられたのを付け加えておく

その日の夜

万能者の自室

カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ

『……』

万能者は無言でキーボードを叩きながら今まで調べていた情報などを整理していた

カタカタカタカタカタ……

『・・・・・・・・・・間違いなく完全に偶然だが、一応こっち側の責任もあるからって思って協力したが・・・・・・・・ここまでアカンとは思わなんだ・・・・・・・・色々ありまくる上にこっちはまだ出せないのや、そもそもまだ分かってないのが入り混ざってるから本情報共有が大変だよコンチクショー・・・・・・・・』

どうやら万能者も万能者でかなり苦労しているようであった

『・・・・・・・・・・それにしてもだ』

そう言いながら万能者はとある書類に目を通し始めた

『遺跡の文明がコイツを手に入れたつてことは間違いなく例の船があそここのどっかで生きているのは間違いなさそうだし、遺跡の方も間違いなく技術を多少なり手に入れてるはずだ・・・・・・・・下手をすればパラデウスとかにその技術が渡っている可能性があるな・・・・・・・・だが、一番な問題はそこじゃない』

そうして例の機体が映し出された写真の部分に目が止まった

『こいつがなんで、防衛システムの中枢にされているのか・・・・・・・・つまり、何から守る為に・・・・・・・・そして何を守る為に組み込まれたのか・・・・・・・・それ次第で色々話が変わってくるぞこりや』

万能者のその言葉はその部屋の中で寂しく響きわたった

間話つて雑に省略しようとする結構えらい目に合うから注意しよう（白目）

1. ハイ、いつも通りの頭抱え案件です

件の会議からそれなりに経過した頃

正規軍本部 会議室

「マジでどうするよコレ」

その場に集まっていた正規軍のお偉い様達は皆頭を抱えていた理由は言わずもがな、例の万能者案件である

「……国連の方にも連絡はいつたが……向こうもこつちと同じ感じだそうだ」

「……世界大戦案件って言われたらそらそうなるわな」

「更に敵は遺跡そのもので、それプラスで万能者の技術を使ってくるよ!!おまけに万能者と同型機も追加だよ!強くてカッコいいね!!……馬鹿じゃねーの?馬鹿じゃねーの?」

「……それらが過去の大战のドツカアンドツカで再起動という人類の過去の精算というね……過去のことを起こした関係者をぶん殴りたいね」

「モウドーニデモナーレ」

、、。

— *。

∩ *。

+ (、・、) *。

、 *。、、つ *。

、 +。 *；、∩ +。

☆ ∪ *。

、 +。 *。

「……誰かその莫迦を殴って正気に戻せ」

「それに合わせて可能な限り生還率をあげるようにしなければなら
ないなあ……」

「訓練やら新規開発を含めるとかなりの時間がかかるのは言うまでも
ない……が」

「……コレやらないと対応すら出来ないってことだろうな」

「……すぐに国連も巻き込むぞ、世界大戦案件だ……
時間もどれくらいあるか分からんしな」

そんなこんなで国連と正規軍などを巻き込んだ新戦略・戦術開発計
画が実行されることとなり、それが時間がかかりはしたものの一定以
上の戦果をあげることとなるのは別の話……

尚、余談であるが、その後のとある作戦で上層部の一部がパラデウ
スと結託してやらかしていたことが判明した際に会議に参加してい
た正規軍の上層部の者達の胃に穴が開くという悲しい惨事が起こる
ことになったことを付け加えておく

2. 真面目ロボの休暇後

IOP社 万能者の部屋

「そんで、色々あった末に『彼女』を手に入れたと……」

《ハイ》

万能者は試験者支援仕様がバカンスの際に起きた事件にて手に入
れることとなった『魔喰らいの一手』と名付けられたその大弓を試す
ように動かしていた

「……なるほどなあ……『彼女』がお前に安心して任せられ
ると思ってくれたからか……こりやお前が持つべきものだ
な……そんで少し提案がある」

《……?》

その万能者の言葉に試験者支援仕様は首を傾げた

「というのも、お前らも分かっているとは思いますがそもそもお前達自体

かが p a w n モドキ対策の緊急量産品だったからな……通常兵器とかなら全く問題ないが、向こうの p a w n モドキの特化仕様やその他種族系などの規格外の存在だとある程度対応はできるが、特効的なものが結構少ない感じだったからな……数が揃って来たのと今回お前が『彼女』を持って来たことでその辺の踏ん切りがついたってことだ」

《……ツマリ、ソレハ》

「ああ、経験を積んだヤツを元に対規格外特殊仕様強化計画を始めるぞ」

それは今後予想される規格外な存在との戦いに備えた新たな布石となる計画が始まることを意味していた

「あと、その『彼女』を強化できる方法があるが……なんだろう、武器を『彼女』っていうのなんかちよつと特殊な人の感がすげえ……いや、この武器の出来方にそういうのが正しく感じるんだが……」
《……》（言われてみて「あっその通りだ」と思い若干恥ずかしくなった

3. 一方、その頃の戦闘狂+ワイルドガールズ

山岳地帯

カアンツ……カアンツ……カアンツ……

「……アイツ帰ってから籠ったままだね」

「ほぼ毎日叩く音や削る音とか止まないからうるさくて仕方ないよ……」

バカンス+αの休暇から帰って来た蛮族戦士とアイソマー達だが、蛮族戦士はそのまま今回の戦いで手に入れた素材を使って己の大剣の如き爪を強化する作業に入り、今日に至るまで作業音を出しながら籠っていた

「他の素材は普通とは違うけど、確か剣の欠片だけ？材質的に普通のヤツのように見えたけど……」

「戦ったヤツが規格外だったのは知っているけど……どういつ

もりなんだろう」

アイソマー達がそんな会話をしていたその時だった

ズゴオンツ!!!

「!!!」

突然近くの山が縦から真つ二つに切り開かれたのだ

更には

「……あの、あの切れ口から遠くの山々も切り開かれたように見えるんだけど」

「……その方向のお空の雲も真つ二つだね」

「アイツ今度はどんな強化をしでかしたんだ!!?」

そのとんでもない惨状にアイソマー達は素晴らしいながら慌てて蛮族戦士の元へ駆け込んだ

そして、そこには……

「……」(オリジナル笑顔)

自身の爪を見ながら無言かつオリジナル笑顔で笑っている蛮族戦士がいた

そして、その見ている爪はかなり歪な造形をしておりどうにかこうにかして大剣のような形にできたような感じであった……

ただ、明らかにその爪が放たれている気ともいうべきものは尋常ではなく、その状態でも刃に触れたものを全てのものを切り裂けると言わんばかりのものであった

そんな光景がありつつも蛮族戦士は

「……」

ザツ シュウウ……ツ シュウウ……ツ

周りのことを一切気にしないと云わんばかりにその爪を研ぐ作業にはいったのだった

「……ちよつとバカンス気分がまだ完全に抜けてなかったみたい、鍛錬倍にしよう」

「「うん」」

一致するレベルで心のそこからそう思ったアイソマー達であった

4. ハイ、また新たな惨事です

万能者緊急捜索作戦からほぼ一年が経過した頃……

『……に新開発された都市ですが、この1年の間で人口増加や経済の活性化が著しく……』

「……へえー、頑張ってるところはホント頑張ってるもんだなあ……まあこつちも頑張らざる得ないのだが」

万能者はテレビのニュースを何気なく見てそんな感想を出しながら、何やら準備を進めていた

「しかし、新ソ連の上層部の一部はまだパラデウスと繋がっている奴らがいたとはなあ……さつさと縁を切れればいいものを……いや繋がっているから一連托生状態で切れないのか」

ことの発端は1日前にシャマル指揮官が出したとある少女の救出を主体としたパラデウスと極秘協力をしている新ソ連の戦力の殲滅と極秘研究施設等の拠点制圧の協力依頼が届いたことであつた

その要請に万能者は少し考え

「まあ俺としても自分のアレ関係もあるし、パラデウスが非常に危険で邪魔なものもあるからな……さつさと潰したいし、これは受けるべきだな」

あつさりと承諾した

そして、数日後……潜水艦内にて

「自分としては『機人』だからその辺は理解をしているんだけど……『人の可能性』も紛い物扱いされたような感じだったからカツチンつて来るよなあ……問題はその後意識の隙間を突かれて転ばされたことだ……あんだだけ格闘演習でいやというほど似たようなのを喰らったことがあつたはずなんだがなあ……その辺戦闘システムの復旧や経験戻しとかするべきか？」

先ほどあつたことに若干の憂鬱感を味わいつつ、もうすぐ始まる本作戦に備え自分の装備の装着を行っていた

「そういえばあの女性……」

そんな中でふと、今回の作戦で参加しているとある女性……アツシエ・ノーグレイヴの姿を思い出した

白色の髪に、虚ろな赤い瞳。そして冷たく生気を感じさせない白い肌、ホルスターに収めてある銃と鎖で繋いだ棺桶らしきものが、そして纏うコートに施された十字架の装飾、これらからのことから印象付けられたものは『灰被りの死神』、だが万能者はそれよりもある印象……というよりもその存在のあることに気づいていた

「……生きた屍かあ……」

そのことから万能者は過去に出会い、己とその故郷の全てを滅ぼしてほしいと終わりと救いを願ってきた少女のことを思い出していた
「……アレとは違う形のものではあるみたいだし、彼女のような「生きる」ことに絶望していた目」とは違うようではあるが……それでも結構色々大変なのは間違いなさそうだ……もし手伝うことがあつたら、多少なりと力を貸してみるか……っと作業が止まりかけた、切り替えよう」

そんなことを考えながら作戦開始まで時間が経過していったのだった……

「……変な状況が起きなきやいいのだが……」
どことなく嫌な予感がしながら……

緊急事態発生 緊急事態発生

特機技術ノ流出ガ確認サレタ

対象ハ最重要攻撃対象『バラデウス』

恐ラク我々が確保出来テナイ場所カラ技術ヲ手ニ入レタト思ワレル
下手ヲスレバソノ技術ヲ使ワレタ兵器ガ開発サレタ可能性アリ

緊急プラン3採用

目標：敵勢力排除

：技術ヲ手ニシヨウトシテイル勢力ノ排除

：技術回収又ハ完全破壊

出撃準備セヨ 出撃準備セヨ

了解	了解	了解	了解
了解	了解	了解	了解
了解	了解	了解	了解
了解	了解	了解	了解
了解	了解	了解	了解
了解	了解	了解	了解
了解	了解	了解	了解
了解	了解	了解	了解

人って何かを飛ばしたりすることが妙に好きだった
りするよね（コラボ回）

作戦会議から一日半後

ルースキー島 上空

「よし、ひと仕事始めっか……とりあえず色々作ったり、使えるようにして来たからなあ……試験運転としてはちようど良さげだし」

万能者はその上空を飛んでいた

その姿は以前に使っていた空戦用高機動兵装パックによって装備を充実させて、尚且つその両手にはライフルどころか長身砲並みにかい大砲が握られていた

「それじゃ『こちら万能者、これより防衛線の厚いところにドツカン
ドツカン撃ち込んでくる』『あと試験者部隊は味方を支援しながら一
緒に行動すること』」

そういつて万能者は敵が集まり、防御が硬いところに落ちるかのよ
うに突っ込んでいた……

それは防衛する側……パラデウスにとっては突然のことで
あった……

ズガアーン!!

ズガアーン!!

ズガアーン!!

「戦車3撃破!!その爆発で歩兵級戦術人形も多数!!（ドドドドドド
ドド）つと、例の人型鳥か!!前方範囲殲滅用鉄鋼球拡散弾装填!!」
ズドオン!!

ズガガガガガガガガガガツ!!

「4機同時撃破ツ!!次イ!!」

それはまさしく蹂躪であった、突如飛来して来た人型の存在はその

手に持った大砲で次々と防衛戦力を吹き飛ばすように大被害を与え、飛び回りながら続く二撃、三撃、四撃と次々に被害を増やしていった。無論彼らは反撃に出た、他の場所の戦況が逼迫している中で使用可能な戦力を出して

だが、それらも無慈悲にその犠牲の仲間入りをすることとなった。大砲はもちろんのこと、それ以外の装備と格闘によって……大砲でグラブナイターを頭から叩き割るように叩き潰したり……

アリオールの群れを散弾で蜂の巣のように穴だらけになるどころか機械製ミンチにしながら落したり……

バックパックに装着された大型の羽で通り魔のように対象を問わずに切り裂いたり……

プラズマフレアを防衛側の戦力が集まるところに的確にばら撒いて火の海にしたり……

など例を挙げたらキリがないほどに残酷かつ無慈悲に容赦なく様々な方法で撃滅されたのだ……

『なんだあの爆発……!?!』

『あつちで誰か戦っている?でも誰が……?』

『おい、待て。あのアツシエという女性はどこに行った!?!』

『見てない……?まさか単身で戦っているのか!?!』

『うん?』

そんな時、味方の通信で何かが起こったようだった

「通信から見るに……あの辺か」

ちやうどよく上空にいた万能者はその通信が言っていた場所と思われる方向を見た

そこには真っ黒になった地面と残り火のみで敵の亡骸も、その一部もなくなっており、激しい戦闘が先程まで行われていたとされる場所で静まり返ったその場でアツシエの姿が確認された

「……わああ、俺と同じ大量の武器を持って一人で戦うパターンのやつか」

ドガアーーーーーッッッッ!!!

とある星の並びの名がつけられた拳法にやられた者の如く破裂するよう大爆発を起こしてその身を散らしたのだった

「……まあ最初から注目はされているだろうけど、これやつたらそりや流石にアカンと思うわな」

それが引き金になったと言わんばかりに万能者はパラデウスの群れと言えるほどの大量の戦力の敵意に晒されることとなった

『こちら万能者!!さつきのは俺がやったが、あとの2体をやるにはちよつと色々群がられて手一杯な状況だ!!すまんがなんとか耐えるか、そつちでなんとかしてくれ!!一応試験者にもそれなりやつ用意させてるが準備が必要だ!!』

この戦いはどうやら初つ端の方から混沌という言葉がぴつたりなレベルで状況が変わって来ているようであった

緊急対応戦力整理完了

コレヨリ作戦行動ニ移ル

最重要攻撃対象ハ『バラデウス』

特機技術ガ使ワレテイルト思ワレル兵器ヲ確認サレタ場合ハ確実ニ排除セヨ

ソノ技術ヲ手ニ入レヨウトシテイル別勢力ガ確認サレタ場合モ同様尚、無関係カツ民間人ガ確認サレタ場合ハ保護シ、記憶処理ヲ行ウコト

緊急プラン3 初期段階 実行

コレヨリ『初期対応部隊』ヲ目標地点ニ飛バス

『初期対応部隊』ノ情報ニヨツテ次行動ヲ判断スル

カウント 5 4 3 2 1

出撃

了解 了解

了解 了解

了解 了解

了解 了解

了解 了解

了解 了解

了解 了解

了解 了解

『一方その頃で』色々と情報を出されると情報処理が大変だよね（コラボ回）

????

『初期対応部隊「薨」』目標地点到着

『下準備』モ完了

コレヨリ偵察ヲ開始スル

.....
現時点デノ情報収集完了

..... 目標ノ『特機技術』関係ハ『ポリシヨイカーメニ極秘研究施設』ニアルト判明、ヤハリ情報ニ畏ガアツタ模様

..... 尚、ソノ物ガアルトサレテイタ『ルースキー島』ニテ大規模戦闘ヲ確認

..... パラデウス、アブノーマル、G&K、α等ノ戦闘ト判明

..... 情報傍受ニヨリ、最終目的ハ『ポリシヨイカーメニ極秘研究施設』攻撃ニヨル重要人物救出ト判明

目的ハ一致シテイナイモノノ場所ガ一致カツ我々ノ目的デア尔特機技術ヲ狙ウ可能性アリ.....

『本隊』へ、作戦立案ヲ要請スル

我々ハ引キ続キ偵察ヲ続ケナガラ、『緊急対策プラン』ニ備工待機スル

ポリシヨイカーメニ極秘研究施設 その近辺の地下

「.....で、今外と研究施設の状況は？」

「こりゃ.....結構動いとりますなあ.....まるでこれからくるお客様を出迎えるみたいに」

「奴らの通信を傍受してみました、ルースキー島でなんかG&Kと

ドンパチやつてるみたいです」

「ありや……同じこと考えた上に時期がもろに被つちまったみたいだなこりや」

下水道の中で少しだけ広い場所のそこでは何やら様々な装備をした集団が話し合っていた

「パラデウスのヤツらがまたなんか新しい兵器を作りやがったことと、なんかコーラップス完全適応者っていう『川崎和紗』って行方不明になってた子をこっちで保護してからあつちの方に内密に身柄を送るなど色々やろうとしてたんだがなあ……」

「こりやドンパチに巻き込まれる前に撤退を視野に入れておくか？」

「とりあえず研究施設の地下の壁まで掘ってはいるが……どうする？」

そんなやり取りがされていき、その結論は

「とりあえず研究施設襲撃の用意だ、こういうのはサツと目的を達して撤退する方がいい……無論、時と場合によるがな」

そうだったのだった

それがどんな結果に繋がるかはまだ誰にも分からない

一方

ルースキー島 激戦区

ビルの瓦礫の山だった場所付近

「助けてもらってすまん、ホント」

万能者は瓦礫に埋まっていた状態から救い出したアツシエに感謝していた

「……」

「……うん、想像以上の無口っぷりだなこりや……」
けど、助けてもらったんだ、なら仕事に復帰しないと」

その何も答えない無口さに呆れつつも万能者はその恩に報いるために元々の役割に復帰を始めた

「えつと……フライトユニットは爆発の衝撃で若干の起動休止

が必要で、砲身は花が咲いてる……そんであのデカブツはあのビルの向こうがにいて射線が通ってないと……よし、決まった」

そういうと万能者は何やら砲身が花が咲いたように裂けて使い物にならないように見える手持ち大砲をへカトンケイルがいる方向……巨大なビルの方へと向けたのだ

「射線上に民間人と思わしき存在なし……長距離射程用延長砲身パージ」

ガチャコン　ガゴオン!!

機械音と共に花が咲いていた砲身は本体から外れて大きな音を鳴らしながら地面に落ちた

「アツシエ……呼び捨ては流石に失礼だよな、次からさんをつける、まあとりあえず周囲の警戒を頼みたい」

「……………」(コクン)

そんなやり取りがありつつも準備は早急に進められ

「初弾は噴進式徹甲弾、次弾に指向拡散式特殊衝撃波弾頭、最後に接着式電撃破壊弾にしろ……砲身短くなってるから、弾道予測とかをやって……向きよし、標準よし……オラッ!!」

ズドオン!!

ズドオン!!

ズドオン!!

できた途端にそれをぶつ放すように連射した

ズガゴオオオオンンツ!!

初弾は音速を超えた速度でビルの壁、内装、その反対側を紙のように大穴を開けながら貫き、そのままへカトンケイルの目の前まで飛んでいき、その障壁で消滅しながらもその役目を果たし

ポオンツ!!!

続く次弾は少し遅れてへカトンケイルの目の前まで飛んでいき、その障壁の手前で爆発を起こした

するとへカトンケイルはとてつもない突風に煽られたかのように

バランスを崩し、片膝をついて転倒を避けたのだ

「あの特製弾の喰らいっぷりから効果的なのは間違いないかったが、そもそも防御システムは空間消滅を引き起こす為に『特殊な粒子』を媒体にしているってことだったからなあ……それさえわかれば後は調整した『特殊な衝撃波』でそれを散らして機能出来なくする方法でやれば結構効果的だ……だからあの特製弾を使ったかったんだが、長距離用延長砲身がないとちよつと安定しづらいし、新しい砲身を用意するとなると割と時間かかるからなあ」

万能者がどこか説明口調で言いつつも最後の砲弾が2つの砲弾によって作り上げられた道を三分の狂いもなく通り、ヘカトンケイルの胸部に着弾した、それと同時に
バチイイイイイイツツツ!!!

その砲弾が破裂し、着弾した対象の内部に強烈な電撃を流して駆け巡らせた

「それにあれやると爆散して破片が飛び散るからなあ……海でならまだしも、民間人や味方がその周りにいる状況でやったら大被害が目に見えてるからなあ、だから手間はかかるが被害を抑えられる方でやらせてもらった」

そういうと共にヘカトンケイルは重要な部分を電撃でやられたのか、片膝をついたまま機体各所の光を消えて動かなくなった

『なんとか援護をしたぞ、あとはそっち方面でなんとかしてくれ』

色々あったものの万能者はその役目を果たしたことを通信で伝えた

「アツシエさんも周囲警戒ありがと、さて……こつからどう動くべきやら……多分パラデウス側はなんか時間稼ぎをしようって感じほいからなあ……アブノーマル関係による罠か？」

そうしばらく相手側の狙いを考えて対策を練ろうしたその時だった

ボツ

空に太陽が出来上がったのだ

その時、パラデウス側にはそれが何かは分からなかったものの何かは起きたそれだけは理解でき、アブノーマルは『定期連絡』とかけ離れた事態が引き起こったことに動揺し、G&K側はそれが万能者関係の兵器であることを理解しながら、なぜこのタイミングで使用したのかという疑問を考え始めた

そして、万能者は……

『全員すぐに防御体勢ツ!!アレは俺のじゃない!!』

すぐに危険を味方全員に知らせた

そこからG&Kは非常にまずいことが起きたと理解し、すぐさまできる限り防御体勢に移った

そして万能者はそこから

「アツシエさんすまん!!」

「……!?!」

アツシエが持っていたデスホーラーと自身のフライトユニットの羽、そして自分自身の身体を使い、アツシユに覆い被さるようにして彼女を守るために動いた

そうしてまもなくして

上空の小さい太陽から光の雨が降り注いだ

その光の雨のひとつひとは全て曲線を描くようにして動き回って対象に降り注がせた……

パラデウス、アブノーマル、G&Kなど……ルースキー島で『戦うもの全て』に無慈悲かつ平等に降り注いだ

尚、余談であるが後々の調査でこの攻撃で民間人には一切の被害がなかったことが判明し、目撃証言で光の雨が民間人を避けるようにして動いていたと語られるのだが、それは今は関係ないことだろう……

少し前

『初期対応部隊「薔」』カラ情報ヲ受信

情報照合中……………完了

作 戦 立 案 開

始……………

完了

『ハラデウス』ノ重要施設、『ポリシヨイカーメニ極秘研究施設』ヘノ

攻撃ヲ行ウ

ソコデ特機技術ガ使ワレテイルト思ワレル兵器ヲ破壊シ、特機技術ヲ
処理又ハ回収セヨ

特機技術ヲ手ニ入レヨウトシテイル別勢力ガ確認サレタ場合モ同様

ソノ為、同時進行ノ作戦トシテ『ルースキー島』ニ『試作兵器』ヲ使
用、可能ナ限リ戦力削ツテ足ヲ潰シ、海デ封鎖ヲ行ウ

タダシ、ソレラガ失敗シ、研究施設ニテ接敵スル可能性アルト判断シ、
苦肉ノ策デハアルガ『川崎和紗』ヲ確保シ条件交換策ヲ視野ニ入レル
タダシ『絶対ニ確保シ、何事ガアツテモ絶対ニ向コウニ引キ渡
ス』……………コレヲ最低条件トスル

コレヨリ作戦行動ニ移ル

『ポリシヨイカーメニ』ヲ中心ニ砲撃ヲ開始シ、同時並行デルースキー

島ニ『試作模造兵器』ヲ飛バス

ソシテ『攻撃部隊』『海空路封鎖部隊』ヲソレゾレニ飛バシ作戦行動ヲ
開始スル

カウント 5 4 3 2 1

攻撃開始

了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解
了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解

どうやら更なる混沌の風がその戦場に吹き荒れ始めたことは間違
い無いようだ……………

地獄って割と色んな意味で使われることが多いよね……尚、使われる時は大体共通してアカシン時な模様（コラボ回

光の雨が止み、風の音が目立つほどにあたりが静かになった島にて「アツシエさん突然どこに行っただか……」

万能者は己の体がレーザーの雨によって熱くなって冷えている途中にも関わらず先程まで一緒にいて突然静かになった戦場だった場所へと向かっていったアツシエを探しに走って追いかけていた

その身体は盾に使った装備も含め、熱によって少しながら焼けた後が残っている部分があった

それでもその程度のダメージで済んだ上で動きまくれるのはのはやはり万能者というべきなのか

「フライトユニットが若干やられて今の状態じゃホバーぐらいしかできないのが痛い……更にいえば味方と合流して次の作戦に備えなければならぬのに」

無論彼女が意味なく行動をするわけがない、そのことは今までの行動から理解していた

ただそれ故に誰にも言わずに突然行動してしまうということも……
ズドオンツ

「ツ!!、あつちか!……手持ち砲は短砲身のまんまだが、かえって都合が良さそうだなこりゃ」

過去の件もあってか、彼女をどうにもほっておけない感じがしてならない万能者は万全ではないにも関わらず動かざるえなかった

「行くならなにか一言言っただけで欲しいんだが……そうすれば手伝うかもしれないんだけどなあ……」

そう言いながら銃声などの戦いを彩る音が少しながら戻った戦場へと万能者は向かっていった

ルースキー・ボリシヨイカーメニ間海上

対象スキャン開始・・・魚雷ト判明 位置不明ニナツタ

地点、時間経過、魚雷ノ進行ルート逆算

・・・推測地点ニ『シーハンター部隊』ヲ空中投射スル
我々ハコノママ、騙サレタ形デ動く

投射開始

了解 了解 了解 了解 了解

数分後・・・

「・・・ツ!?、上の方で複数の落下音を探知!!」

それは上手く逃げたと思ひ始めた時だった

「ツ!、アスロックか」

「・・・?、それにしても探信音がない?」

「・・・敵はどの手段を使つてきたのやら」

それは潜水艦を巧みに使える艦長から見てもそれは奇妙なもの
だった

だが、敵は何かに気づき、何かを仕掛けてきてる

これは長年の経験で理解した

そうして、次の行動を指示しようとしたその時だった

「ツ!!複数の落下物が動・・・ツ!?、本艦に何かが真っ直ぐ向かっ
てきます!!回避が間に合わな」

その言葉と

ズガッ

船体に何か突き刺さる音が響き渡る振動で行動が遅かったことを
悟った

ズドオン!!

「ッ、被害状況」

「威力は船体を一撃で破壊するものではなかったようですが推進機の

一つとVLSの三基、魚雷魚雷発射口数箇所などの武装が大破しました！」

「落下物は……消えたり現れたりで完全には判別できませんですが……まるで生きているようにこつちに向かって動いてます……」

その報告を聞いたシナプス艦長は

「これは弱った……敵は我々を確実に狩る為に数と動きを巧みに使う上で我々を見ることが出来る『狩人』を放ったようだ」

かなりの危機的な状況になってしまったことを理解せざる得なかった

敵潜水艦推進器一ツト武装の一部ノ破壊ヲ確認

敵ハ硬イ上ニ賢イ、動キニ警戒シツツ確實ニ武装ト動キヲ削リ仕留メル、水中用ビームキャノン持チハ動キツツ隠レナガラ急所ヲ狙工

了解 了解 了解 了解 了解

一方その頃

ポリシヨイカーメニ極秘研究施設 入り口

研究所の周り……ポリシヨイカーメニの廃都市全体に突然の砲撃と爆撃の雨が容赦なく無慈悲に降り注ぎ、最早そこに都市があったという証明すら消え去らせると言わんばかりに破壊し尽くされていた

更にその後更に更にポットのようなもの（様々な形があったが詳細を省く）が大量に降ってきて、その中から

pawn replica（羽がついて飛んでいるのもいた）や、戦車などの車両、大型の人型兵器などが現れていき、既に壊滅状態であろうパラデウスをカケラも残さないと言わんばかりに迅速に殲滅させていた

そんな時だった、ある男が彼らの視界に入ったのは
対象ヲ過去ニ遭遇シタ規格外クラスニ近い存在ト断定……対策

警戒体制ニ移行セヨ

すぐさま彼らはその存在のヤバさを理解し、警戒体制に移した
だが

不明確デハアルモノノ対象ノ戦闘力ハ隔絶シテル可能性アリ、コチラ
ノ全滅ヲ想定セザルエナイト推測

規格外の質と量を持つ彼らでもその存在は敵わない可能性が高い
ことを見ただけで理解し、なによりその存在が何かをする気満々で
あった為、警戒体制が意味をなさず、全滅する可能性を推測せざるえ
なかつた

故に

・・・『蕾』、我々ハコレヨリ目ノ前ノ規格外ノ情報ヲ引き出す為
ノ全面攻撃ニ入ル、情報ヲ取レ
・・・了解

これから彼らの勢力が何度も戦う可能性がある規格外の敵を野放
しには出来ず、情報などを手にしたい為、に彼ら「攻撃部隊」は全戦力
を目の前の存在にぶつけることを選んだのだ

敵方攻撃シタ瞬間攻撃開始、全力ヲ持ツテカカレ

Berserkerハチャージ完了後、速ヤカニ攻撃開始

我々が時間ヲ稼グ

了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解
了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解
了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解

その後、その存在が引き起こしたと思われる太陽光による滅却、爆
撃によって逃げ道を潰され、数を相当数減らされ、指揮系統がやられ
ながらも、決して混乱せず、仲間の亡骸を盾にしながらもその存在に
攻撃を行ったのだ

(尚、近くにいたパラデウスは不憫なことに混乱したまま壊滅)

その十数分後・・・

「なかなか骨はあったんだがなあ・・・まああれだけやれば全滅す
るか」

男をそういういながら自らが作り上げた焼き払われた大地を見ていた

「まさかあれだけやられてもこっちを冷静に攻撃してくるとは思わなかったな……なあそうだろ？」

その最後の言葉と同時にその男の周りの瓦礫から pawn repli ca が一齐に近接武器を手に飛びかかってきたのだ

「ほう、仲間と兵器の亡骸を盾にして生き残っていたか……それでいて尚も立ち向かってくる……感動的だな、感心したよ……」

そう近接武器がその男に触れようとした時

「だが無意味だ」

ワイヤートラップのように調整された太陽光が飛びかかってきた pawn repli ca 達をバラバラに焼き切り裂いた

「遠距離攻撃しかしてないからその辺は無防備だと思ったか？残念だったな」

男が悪い笑顔で笑いながらバラバラにされた pawn repli ca 達の残骸が崩れ落ちるのを見届けていた

ジェネレーターチャージ完了、ルート確認完了……対規格外用超高機動格闘戦開始

ゴオツ!!

「……えか」

男の目の前に『両腕と両脚が通常とは異なるものになっている pawn repli ca』が瞬間移動したかの如く突然凄い勢いで現れたのだ

思わぬ出来事に男はその表情のまま固まざるえなかった

そして pawn はその勢いのまま、両腕を突き出すような形で目の前の対象を殴りかかった

「う、うおおおおッ!!」

これには流石の男も攻撃をする判断ができず、目の前にバリアを展開し防ぐしかなかった

（あ、あぶねえ……完全に油断してたわあ……だが、これ

そして
破点衝 実行

ドゴオツ!!

「オゴアツ!?!」

その連撃の最後に両腕をそれぞれ胴部、心臓がある位置ぴったりの胸部に殴るようにして突き立てるとインパクト

ボツ

その二点からとてつもない衝撃を男の身体に浸透させたのだ

「ボガアツ……」

その衝撃は空中にいる状態で逃げ場のなかった上に先ほどの攻撃によってボロボロになっていた男の身体の中を五臓六腑に行き渡らせまくり、目や鼻、耳などの穴という穴から血を出させ、内臓、骨、血管などの重要箇所を破壊していき、paw n replicaに持ち上げられている状態で身体を動かさずにだらりとさせた

ジェネレーター限界値手前マデ温度上昇……冷却開始

流石にpaw n replicaも限界だったのか、背中取付いているバッグパックのようなものの一部が開くとそこから凄まじい熱気が排出され始めたのだ

……ジェネレーター温度下ガラナイ、逆二上昇……?

!!

そこで気付いたのだ

すでに真上の男からの反撃を受けている最中だということ

「……散々やってくれたなあ?」

ボオウ!

その言葉と共にpaw n replicaの全身は炎を発し、その外と中身を焼き始めたのだ

知らずに
・
・
・
・
・

予想外の事態がおきたらどこもかしこも対応に追われるよね．．．．尚、それが余計に予想外なことを起こすこともある模様（白目）（コラボ回

ルースキー・ポリシヨイカーメニ間海上

潜水艦内にて

万能者は次の戦闘に備えて整備を行っていた

「あでで．．．．やつぱ、何ヶ所かガタが来てんな．．．．初めの時点でこれだから次がどうなることやら」

その様子からダメージがそれなりに大きかったようだもつとも

「ここは修理で万全にできるからこここここの焼けた装甲とフレームを念のため予備に変えとくか．．．．あ、そういえば部隊戦力に回した奴らの状況見てなかったなあ．．．．思ったより被害は少ないな．．．．」

持ち前の技術ですぐに万全に近い状態に持ち直した上で今回の戦闘での試験者の状況を確認に入るのは流石と言う他になかった

「状況を見るに．．．．試験者の数体の『それなり』に用意させたやつが防御において役に立ったみたいだな．．．．ああ、でも防御範囲外だったり、条件悪かったのが何体か戦闘不可になっちゃってるな．．．．即刻応急修理だなこりゃ」

そう言いつつ試験者の現状を確認し終わると「．．．．で、問題は奴らだ」

一番逃避したく、されど逃避できない『万能者関係の問題』に頭を抱えながら向き合い始めた

「あの『サンライト・パラノイア』モドキを使ってる時点でかなり本気の動きをしてきているのは間違いないんだが．．．．問題は目的は何かだな」

実のところ、万能者の視点からでは今回の遺跡防衛システム機構の

動きにはいつもとは違うような部分があったのだ

「なんであのタイミングで、なんであの兵器を使ったのか…….
そしてなんで島と研究所を孤立させる形で攻撃したのか…….
あ、これパラデウスやらかした臭いな」

「どうやら万能者は少しではあるものの遺跡防衛機構の動きを理解できたようだ」

「つてことは今までの動きを考えると…….多分、研究所の方に
奴らに総攻撃されるに十分すぎる何かがあつて、それを奴らに知られ
て攻撃するのが決まった後にこつちが来ちやつたから纏めて殲滅、悪
くて足止めという方向に入つちやつた系だなこりゃ」

その事実には万能者は若干頭を抱えた

間が悪いにも程があると…….

「でもなんで奴ら『サンライトパラノイア』モドキを使ったんだ？
…….殲滅目的ならもつと効果的なものが使つてくると思つ
たんだが…….今は何を言つても不完全な推測ぐらいにしか
らんしな…….それに向こうがどうなつてるか分からないのが
気になるからな…….」

万能者は推測を一旦そこまでにして次の作戦に備え始めた

尚、余談であるが『サンライトパラノイア』モドキの被害を確認し
た万能者が「うん？うん？んんん？」と首を傾げまくる様子が確認さ
れることになるのだが、それは別の話である

同時刻

コチラ『別働回収隊』、『攻撃部隊』『海上封鎖部隊』ノ生き残りノ回
収ヲ完了

尚、ソノ際ニ規格外敵対象ノ生存ヲ確認…….服ガボロボロ
ノママデ身体ガ元ニ戻ツテイルコトカラ身体ニ強力ナ再生力ガアル
ト推測、アル程度絞ル事ガ可能ナモノノドノタイプノ再生能力カハ不
明、ソノ能力ノ障害、又ハ打チ消ス事ガ可能ナ対策ガ必要…….
最悪ノ場合…….

コチラ『蕾』、ソチラノ情報ニ誤リアリ、『フィルター付キ』デ確認シ
タ際、『次元障壁』ノ類ノ反応ガ確認サレタ………恐ラク
再生能力ノ類モアルト思ワレルガ、ソノ強力ナ防衛ト合ワサルコトデ
アノ状況ヲ打開シタト思ワレル
………コチラ『本隊』情報ヲ確認シタ、『別働回収隊』ソノママ撤
退セヨ、ソチラノ装備ト数デハ倒セナイ
………了解、撤退開始スル

コレヨリ現状ヲ今後我々ニ多大ナ被害ヲ齎シカネナイ非常事態ト判
断シ………『プランC』実行

『新戦術試験部隊』ノ一部、『α』ノ投入ヲ行ウ
『蕾』ハソノ支援行動ニ移レ

目標達成セヨ

了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解
了解 了解 了解

森谷達が目標の少女の保護をしている頃

ポリシヨイカーメニ 近辺 上空

「………脳深部制御システム起動、『ラスピ』全機覚醒完了」

「『スプリガン』巡航機動解除準備」

「研究所に侵入及び攻撃した敵………それらをあらゆる手段を持つ
て排除………その後研究所を完全破棄………命令確認完了………」
「『スプリガン』部隊、多数を敵本隊上陸予測地点に展開、残りを研究
所方面へ」

「『ラスピ』部隊、4体研究所方面に展開、残りを上陸予測地点へ」
「これより行動を開始する」

森谷達が少女を保護して地上に上がっている頃

研究所最深部 隔離施設 入口

この研究所には嚴重かつ堅牢に作られた区画があり、そこには『E・L・I・D』などそうしななければならないほどの危険な存在が隔離されていた

『最終隔壁に甚大な被害、このフロアにいる職員は直ちに避難をしてください』

その隔離の役割をやっていたゲートが向こう側から強い力で叩かれてボコボコに歪んでいく音を響かせており、もなくして、嚴重かつ堅牢に作られていた隔離ゲートに裂けるような形で大きな穴が作り出された

そして、その中からE・L・I・Dなどの危険な存在の群れ……

ペタッ ペタッ ペタッ

バキッ ゴキヤッ

……ではなく、人型の存在一体が何気なしに歩いて出てきたのだ

その姿は外骨格に覆われた長い尻尾を持つ猿と言えるようなものであり、その化け物じみた外見とは裏腹に肩をぐるぐる回して凝りをほぐそうとしている行動にどこか奇妙な感じがあるのはいがめなかつた

だが

「……キキッ」

その表情はとてつもなく『喜』という言葉が合うほどに笑っていたまるで遊園地のアトラクションを心待ちにしてその時が来た子供のように

そして、隔離されていた状態からでも感じ取っていた『只者ではない気配達』へと向かっていった……

そして、痴話喧嘩ついでの際躰に等しき戦いが行われていた頃の地上にて

「……ッー」

森谷とシャマール、アツシエは何かを感じ取り咄嗟に防御を行った
その瞬間

ガアギインツ!

すごい勢いで迫ってきたネイトとはまた違う三人の白い少女が大
型の太刀で鏢迫り合いに近い状態にしてきたのだ

(……パラデウスの新型? ……しかし、この性能は……
?)

「……あ、さつきとった資料でほんのちよつとだけどなんか書い
てような……(ドガア!) グゲエツ!」

「……」

先程まで起きていた質の暴力による蹂躪は止まり、質と質のぶつか
り合いへと変わった

(……技量等がかなり高いのが厄介だ……だが、ひっくり
返せない訳ではないな)

シャマールはそう思考し、次の一手を繰り出そうとした

ズガドオンツ!!

「!!!」

が、突然の落下物によってその一手どころかその戦いが一時的に止
まることになったのだ

「なんだあ!?!こいつらの関係か?」

「……いや、様子を見るに違うな」

その疑問はあたりに舞い上がった土埃が晴れることによって解け
ることになった

…… G&Kの『規格外』、『特機技術』が組み込まれ
たパラデウスの新型を確認した……情報再更新完了、目的であ
る『特機技術』はパラデウスが劣化版ながらも既に制作可能レベルに
到達していると思われる……これより本機は情報拡散阻止及
び情報精査の為の鹵獲、『規格外』及びその他戦力の排除を行う、各機
はそれ以外の敵を対処せよ

了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解

「……oh、よりにもよってお前かよ」

それが絶望（ $\alpha-004$ ）であることを

そうしてその絶望は目的を果たすべく行動を

ドゴオンンツ!!

「……………ウキイ？」

……………E. L. I. Dの特変異種を確認……………恐らく
パラデウスが『例の区画』から確保して連れ出したものと推測……………
非常事態クラスの状態変化と判断
することができなかった

突然研究所の地下をぶち抜いて飛んできた猿？のような存在の出
現によつて……………

「……………もう何が何だか」

「うん、俺も同じ感想だ」

「ウキッキキキ!!」

「……………どうやらあの猿みたいなのは全方面にやる気満々らしい
な」

「……………なんでこうも厄介すぎること連発して起こるん
だか……………」

少なくとも言えることは……………

ただでさえ混沌としている戦いが更なる混沌へと進行してしまっ
たのは間違いなかった

尚余談であるが

「……………マジかよ」

後続部隊として上陸していた万能者が上空を例の同型が超音速で
投下されているところを偶然発見し、『これすぐに向かわないとヤバ
いやつだ』とすぐかつ単独でその落下地点へ向かうことになり、その
後にももの見事なレベルでの入れ違いで後続部隊にパラデウスの新
型部隊が強襲し猛威を払うことになるのだが、それは別の話……………

とりあえずどうにもならないことがあったら妥協はするが次はそうならないように対策するのがいい時がある※例外はある（コラボ回）

「俺の弟子の恋人ちゃんってばクソ有能でね。この程度なら朝飯作る間のスキマ時間でちよちよいのちよいつと簡単に調べてくれるのさ。I, I'll present it to you, you do what you want. 贈呈するから好きにしな」

突然の共闘交渉によって先程まで起きかけていた戦いの気配は消え失せ

「各機状況が変わった、G&K側との交渉によって共闘へと移行、各機はG&Kの支援及びそのままパラデウスの完全撃滅を行え

了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解 了解

「すぐさま味方へと通信を行うものと物凄く気まずそうにするものの二つが取り残された

万能者に関しては過去に殺されかけたり、先程まで殺し合おうとしていたのだからすぐに割り切れるものではないのは無理もないのだが、もう片方に至っては先程の敵対が嘘のように切り替えがスムーズに行っていたため、それが更に万能者の心中を複雑なものにしていた
「例の男を最警戒危険存在リストに指定、今後交渉に持ち込まれないような対策の構築が今後の課題と判断

「まあとりあえず、複雑だけど心強い味方ができたってことで切り替えるか」

「それもすぐに切り替えてパラデウス掃討に入った……尚、余談であるが

「……とここで一応今後共闘があること考えて聞きたいんだが……契約の様子から見てパラデウスがなんか持つてるのが

アンタラ的には共闘で妥協できるレベルってわかったけど、それ以上になるとどうなる？」

「……」

ズドオンツ!!

「……失礼、お前の後方に攻撃態勢の敵を確認した為、報告なしの攻撃をせざる得なかった」

「アツハイ、ソウイウコトネ、ワカリマシタ」

戦闘中にも関わらずそんなやりとりがありつつも共闘は無事に容赦のない蹂躪劇な形で行われ、潜水艦に帰還する際には共闘はここまですと言わんばかりに彼らの姿が消えていたのだった

(……とりあえずさっきので奴らのモノにも『ライン』があるってことが分かったなあ……問題は今後関わる可能性がある『何か』とモノとの『ライン』がわからんのと『何か』の重要さがどっちの方向性を向いているかだよなあ……まあこれ以上は色々危ないし、分かっただけでもよしとするか)

「ウキ」

それは人知れずみていた

その戦い……否、蹂躪劇を

規格外達が様々な方法で敵を処理していく光景を

その光景を見てそれは

笑っていた

『外』にこんな面白いものがあつた

『外』にこんな面白い人々がいた

先程の戦闘に参加しなかったのは非常に心残りだがやられたふりをしてまで見ていたのは間違いではなかった

今回はこれで終わりでもまだ次が起こり得る
様々な理由で笑っていた

「な、なんじやこりやああああ!？」

「ウキイ？」

「どうやら隠れるための分身がバレたようだ」

「もう少し見ていたい気持ちはあったが、今回はここまでだ」

次に備えておくとしよう

そう考えたそれは身を散らすようにしてただでさえ気配がない状態からまるで存在自体が消えたかのようにその場から離れるのだった

ちなみに分身に関してはとある変態が先走って採取しようとした瞬間に粒子状に分散して消え去り、その光景に変態は興奮をしつつものが手に入れられなかったという二つの感情を発露していた

??? 研究施設らしき場所

「お?・・・これはまた面白いデータが拾えたな」

その場では何者かが何かしらの端末を操作していた

「しかし急にこれの攻撃命令が出された時はオイマジか?と思ったなあ・・・まだコイツの中身はまだ戦うという行動を最適化どころか知識としか理解できてないどころか中途半端な感じに入っている状態だったからなあ・・・まあやられても経験蓄積できるようになっているからそれでやったんだろうが・・・それが功を奏して思わぬ経験まで取得に成功していたとは・・・やっぱこれが『器』として作られただけあるなあ・・・というか・・・ただもうちょい最適化してたらもっといい経験入ってたかもしれないが・・・まあこつちも結構ギリギリだし、仕方ないか」

その手に入れた成果から特出すべき点と反省点などを見出してい

た

「．．．．．さて、材料はなんとか揃えられたんだ．．．．．命令通りにアレ作らないとな．．．．．でないところちもどうなるかわからんからな．．．．．しかし、元は別の計画．．．．．それもこつちとは敵対方向で作られたのがこんな感じにされるとは．．．．．考えた側が若干不憫だな」

この場における戦いは終わりを迎えた

だが、それにもたらされる結果が何につながるのかは．．．．．

今は誰にもわからない